THE KAIZO

改造

九月増大号

1921

ベルナール著
有島生馬譯
回想のセザンヌ
四六倍版
挿畫卅三
定價四圓
送料十八錢

エリザベス ゴッホ著
高村光太郎譯
回想のゴッホ
四六倍版
挿畫卅六
定價四圓
送料十八錢

ウヰリアム・ブレーク著
柳宗悅譯
ブレークの書翰
四六倍版
挿畫卅余
（近刊）

有島生馬著
美術の秋
挿畫廿二
定價貳圓五十錢
送料十二錢

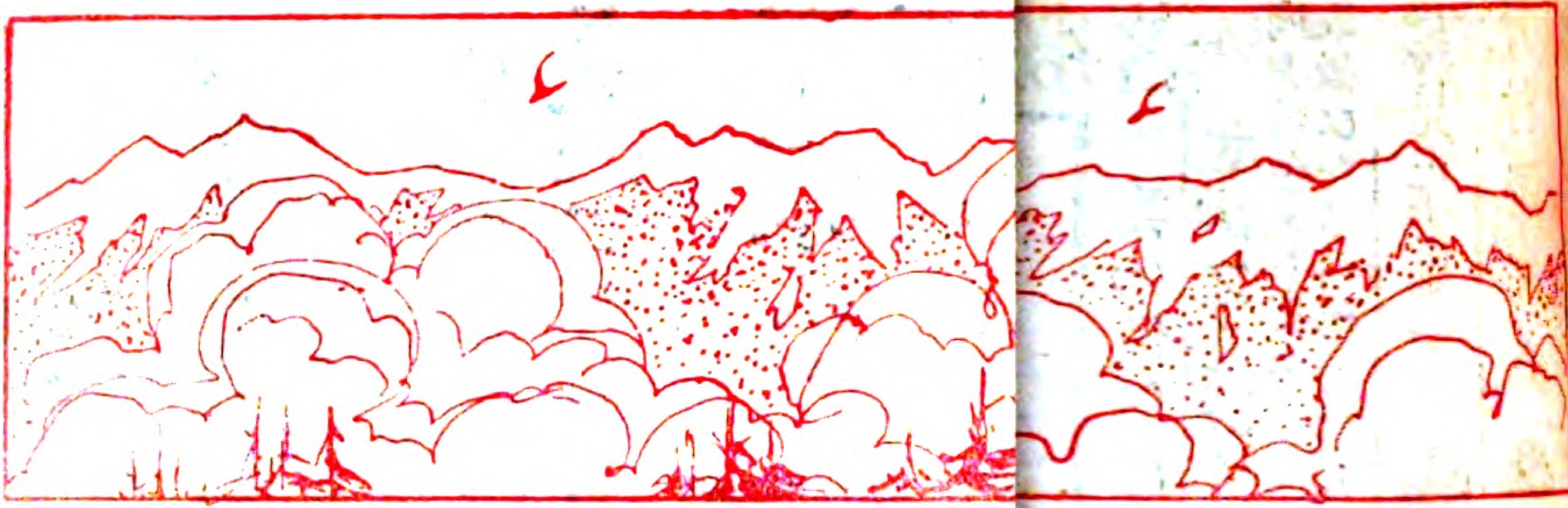
高村光太郎譯
續ロダンの言葉
挿畫廿四
定價貳圓七拾錢
送料十二錢

中川一政著
見なれざる人
挿畫六
定價壹圓五拾錢
送料六錢

東京牛込 神樂町二
叢文閣
振替東京四二八九



改造　九月増大號目次



作

文化的思潮の母胎

故箕作元八博士三十年の研鑽

フランス大革命史

全二卷

菊判天金總紙數千二百二十餘頁

挿畫地圖　三色版　寫眞版　凸版カット等悉く珍貴無上

定價各卷　五圓五十錢

郵內臺內地十八錢

大戰後に於ける世界の形勢はフランス大革命後の世界歷史を反復しつゝある。自由、平等、博愛!―大革命の三大標語は常に强くして新しき響を有す。今や世界に磅礴せる凡ての民衆的運動はフランス大革命を背景として興り、一切の文化的思潮は是を母胎として產る。フランス大革命史の研究は當面の政治經濟及び社會生活の諸問題に對し、最も的確なる判斷の基礎たるべし。

箕作博士、我國西洋史學の最高權威として大革命史を帝國大學に講ずること三十年、一代の心血凝つて此の一書を成せり。絢爛にして明快、情理併せ到る博士獨特の史筆の如何に此歷史なりて以來、最も光彩に富み、波瀾重疊せる一大戲曲的事件を描いて生彩煥發するかを見よ。蓋し學界文學界近時の一大偉觀として、時と共に愈々新なる光輝を增し來るべきものは本書也。

好評嘖々前編五版後編再版

早稻田大學教授　法學士　五來欣造先生新著

社會革命の將來

袖珍美本約五百五十頁　定價貳圓　郵稅十錢

露國の革命は世界の秩序を攪亂した。其とばしりを受けた我が思想界は全く混沌として四方暗黑の狀を呈し、何人も其適從する所を知らぬ。此暗黑を照し得る唯一のアーク燈は政治の社會革命に對する的確なる論斷であらねばならぬ。著者は早稻田大學の政治哲學擔任教授として、內外の思想問題に心を注げる人、曩に巴里の平和會議に赴き特別に世界思想變動の狀態を調查して歸つた新人である。此書は其報告的著述で觀察の嶄新にして特に憂國の人士に多大なる慰安を與ふべき好著である。

發行所　東京神田　富山房　振替五一〇　賣捌　全國書店

中戸川吉二氏著 ＝最新刊＝

創作集 青春

森田辰雄氏裝幀
頗優美上製箱入
四六判三二四頁
定價貳圓貳拾錢
送料書留廿錢

現文壇に於て最も美しい情熱と鋭敏な藝術的感覺を有する作者の傑作集である。此の集にある作品の多くは書名の示す如く若き作者の更に若き時代の生活氣分の現れに外ならない。殊に卷頭の「晩春」は二百枚に近き大作、材を多感な學生時代に採り、益々渾熟して行く作者の創作境と技巧とを示した名篇で當時最も世評の高かりしもの、此の種の作品中稀有の逸品である。此の外「義兄」「清子」等七篇悉く作者會心のものである。

里見弴氏著 ・好評四版

長篇小説 桐畑

■四六判上製箱入三四〇頁■定價二圓廿錢送料十二錢■

刎頸の友にして、少年時より不思議にも常に必ず同時に同一人を戀して炎の如き戀愛戰を繰返すこと四度、後二年を經て、一つは新妻を携え一つは藝妓等に擁せられて新京極の雜沓中に邂逅す、これ『桐畑』の發端なり。回を重ぬるに從ひ、新婚の夫婦と其の友と、僅に三人の人物を使驅して波瀾の重疊を極むること、全然所謂通俗小説の境に非ず。世相の深刻を極め、人心の眞奥に徹する靈筆、里見弴氏にして初めて描き得る所、敢て最近文壇の權威として江湖に薦む

好評再版 **永遠の生命** □メーテルリンク著 □高田文學士譯

本書は現代第一の思想家である原著者が神秘的瞑想と異常なる理智の明とを以て靈魂の不滅を立證したもので、彼の名著『死後如何』『靈智と運命』と共に併讀せられつゝあるものである■菊判箱入定價一圓五十錢送料六錢

東京市神田區南神保町九 **太陽堂** 振替東京三一七二五番 電話九段一四四番



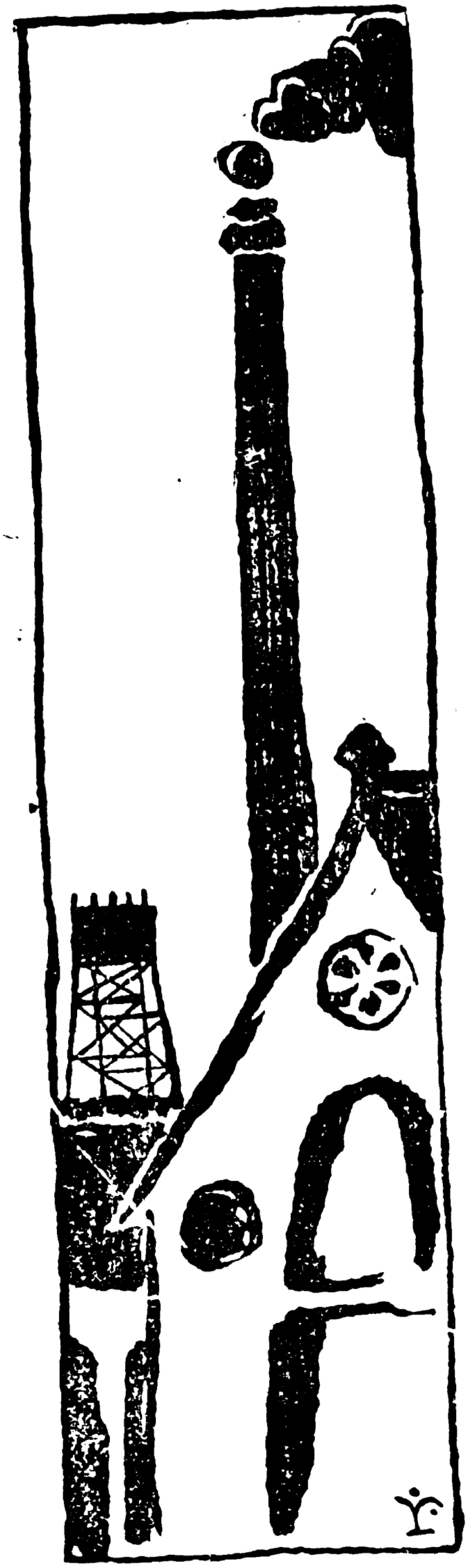
══《改造九月號》══

太平洋會議と日本

會議の結果にたいした期待をかけられないにしても、準備のない我國民と我政府は酷い目に逢はさるゝときまつている、今頃になつて軍備の制限とか、太平洋をどうするとか、そんな頭の悪い人々に藥のつけやうもない次第だが、モト〳〵米國などでは第二流の腕のない人物が大統領とか國務卿とかになる、その尻馬に乗つてハシヤギ廻らなくてならぬ我國情は氣の毒である、しかしこれでも五大國である、そしてその代表には何れも無學の雄、時代錯誤者の雄である珍田とか、林とかの老耄連を擬するに至つては迂も極まれり、太平洋問題はモト〳〵經濟問題がその本幹をなす、人道問題がその經緯をなす、それに人道的理想もなく、經濟的見識もない鼻つ垂れ外交事務官を特派するなぞ言語道斷だ。眞實に我國の前途を憂ひ、そして我々の世界的、人道的立場を思ふならば、それには我國一流の哲學者、經濟學者を正使としてそして眞向から軍備の不必要、太平洋會議の不必要を絶叫することにある、經濟的に、軍備的に英米に追ひ付くことの出來ぬ我日本で、同じ會議に列するならば、それは討議の範圍を打合すとか、日本の東洋に於ける特殊地位を豫め諒解して貰つたあとでノコ〳〵出かけて行くやうな不見識は學ばぬことだ。

米國は世界平和の被告である、小弱國を資本主義的帝國主義で散々イヂメぬいておいて大平洋會議もないものだ。

政府は一部政府者の意思をのみで、對會議策を決定せずに、輿論の歸趨と、高遠なる人道的理想を基本とした、そして近代的經濟策に根據をおいた積極的大策を樹てねば頓だ恥を播くことになる。そして途説の無學なる外交官及官僚を特派することも却つて日本の權威を傷け、そして我々七千萬の同胞を誤ることをも記臆しておいて貰ひたい。



ギルド社會主義と共産主義

ヂー・ディー・エッチ・コール

私はギルド社會主義者であつて、共産主義者ではない。けれども今日英國には、ギルド社會主義者に非ずして共産主義者たる者、共産主義者に非ず、又は共産主義に激しい反感を抱く者にしてギルド社會主義者たる者も多いと同様に、ギルド社會主義者にして同時に共産主義者と名乘る者も多いのである。一體かういふ奇妙な意見の混合はどうして起り、そして如何なる點まで矛盾せずに居るものであらうか。

ギルド社會主義は現に政黨となつて居らず、在來も未だ曾て、如何なる意味に於ても政黨として組織されたことは無いので、今日さういふ風な意見の混合の行はれることは、不可能なことではない。全國ギルド同盟は、勞働黨又は種々

の社會主義結社のような團體と同樣な、若しくはそれと競爭的な立場に在る團體を形成しようとしたことは決してなかつた。全國ギルド同盟は在來、ギルド社會主義の思想を抱く人々を殖すことに全力を擧げ、且つ此目的を以て、ギルド社會主義者となる素質ある會員を有する、總ての團體内に働きかける所の宣傳者の同盟であつたし、今後もそれ以外のものとはならないのである。同盟は勿論第一に勞働組合及び自由職業者團體の内部で働く。何故ならば、ギルドの思想が最も亟著に、最も直接に適合するのは其等の團體の會員に對してであり、特に、若しギルドの社會が實現せらるべきものとしたならば、その基礎はさういふ團體の上に置かれなければならないからである。けれども同盟は亦、勞働黨、社會主義諸團體及び勞働階級の團體の今一つの大なる翼、即ち協同組合運動の内部に於ても働くのである。

ギルド社會主義者は是等總ての團體の内部に於て、團結せる勞働者に對し、彼等が產業的團體に屬すると、政治的團體に屬すると、協同組合に屬するとを問はず、新しい基礎、即ち自由な自治的奉仕の上に、社會組織を根本的に組織し直すことの必要を覺らせるように、熱心に努めて居る。彼等は社會に奉仕することを仕事としてゐる人々に對して、現在の狀態の下に於ては、彼等の奉仕は、最も切迫した人間の必要を滿たすためではなく、私人の利潤を作るように、誤つて組織されて居るといふことを、覺らせようと努めてゐる。彼等は亦、生產と勞働とを管理するための勞働者の眞の協力を實現することが出來ないために、莫大な人力が空費せられて居ること、社會の一員として、共通の利益を心がけて働く義務の在ることを普通の人に了解させることは不可能であることを示さうとして居る。實際、普通の人は最も有用な目的のためでなく、人間的要求の代りに經濟的要求を滿たすために、彼の勞働を利用して利潤を擧げようとして居る人々に依て、自由な社會奉仕を阻まれて居るので、氣持だけは如何に善良であつても、現狀の下に於ては、社會のために働く機會が殆ど無いのである。のみならず彼は、彼が單に命令せられることに甘んじ、生產物に對しても、また

勞働組織の方法に就ても、何等の管理權なきことを前提としてゐる社會組織の下に働いて居ることを見出すのである。

ギルド社會主義は、現在の産業組織に對する挑戰として起り、特に、あらゆる等級、あらゆる部門の精神的及び肉體的勞働者が、共通利益のために、彼等の從事して居る仕事を協同的に組織する、自由な産業制度の必要を力說する。ギルド社會主義者は自治的社會の概念に重きを置いて、最初から、産業の一般的狀態が自治及び人間の自由を認めぬ限り、他に自治又は自由を求めることは無益であるといふことを指摘した。されば政治的民主々義の失敗は、産業的方面に於て、何等の民主的制度をも確立し得なかつたことの必然の結果と解釋せられた。ギルド主義者は、『經濟的勢力は、政治的勢力に先行する』と云つたが、是は、社會の經濟的組織は其政治的組織を決定すること、且つ産業上に隷屬の存する限り、その隷屬は必然に政治組織の上にそれ自らを再現するに相異ないといふことをも意味して居るのである。是と同樣に、産業上の自由の確立は、自由な政治組織を容易に勃興させる基礎を置くものである。斯樣に、ギルド社會主義は、徹頭徹尾理想の上に建てられて居る。その理想は、單に十九世紀の『政治的民主々義者』に依て主張されたような意味のものでなく、社會生活のあらゆる方面に行き渡つた自治の上に築かれた社會である。吾々は産業に於ても、總ての職業に於ても共通目的を遂行するための、あらゆる自然な、必要な人間の團體組織に於て自治が實現された後でなければ、社會全體の自治を實現することを望まれないと、ギルド主義者等は主張して居る。

此理想が、それを實現する方法に就て、種々なる意見の並存を許すことは明白である。そして最初から此問題に關しては、ギルド社會主義者の間に非常な意見の相異があつたのである。同盟成立後の最初の數年間に於ては、さういふ意見の相異が顯著でなく、又はそれがギルド社會主義の思想の諸分派の中に、明白な、又は一定の集團を作るまでには至らなかつた。

ギルド社會主義勃興の初期に於ては、ギルド社會主義者は一人殘らず結束して、政治的行動を以て社會主義實現の殆ど唯一の方法なるが如くに主張した人々の、政治的行動の過重視に反對して起つた。ギルド主義者らは、『經濟的勢力は政治的勢力に先行する』ものである以上、勞働階級の政治的行動の性質とその成功とは、勞働階級の産業的團體の力と其用意如何とに繫つて存するものであることは明白である。勞働組合と協同團體とを強からしめ、其等をして明白な、建設的な經濟的政策を採らしめよ、然らば政治的方面に於ける成功と勢力とは、殆ど自然に獲得せられるであらう、といふのが彼等の主張であつた。

ギルド社會主義者は斯樣な方針に隨つて進み、最初から彼等の運動に多く伴つた戰術、卽ち『管理蠶食』(勞働者が漸次に資本家の産業管理權を蠶食すること)として知られたる戰術を發達させた。彼等は、勞働組合の活動が、主として賃銀や時間や、其他賃銀契約の根本的性質に觸れない問題に終始する限り、勞働者は誤つた境地から脫する折のないことを指摘した。賃銀の增加は、生活費の騰貴に依て差引になり、時間の短縮は、勞働の緊張に依て差引かれる。條件改善に依つて一方で得られた利益は、他方に於て規律を嚴重にすることに依て失はれる。……………………

……………………………………

……………………………………。

されば『管理蠶食』論は、勞働組合の政策の變化に直接適合したものであつた。ギルド社會主義者は組合に向つてかう云つたのである、『諸君は、大小を問はず、諸君が從事して居らるゝ産業のどの部分でも、どの方面でも管理するに足るだけの力を、何等かの方面に於て蓄積されたならば、傭主及び其代表者の手からその管理を奪ひ去つて、それを自己の團體に移し、依てその管理の力を鞏固にすることを第一の政策としなければならぬ。すべて管理權の問題について得

られた成功は、更に其上の成功の基礎となり、徐々に、幾多の段階を通じて、…………
……………、……………、、……………。……………。
……………、……………、……………』と

云ふ時が來るであらう。

此政策は多年の間、勞働組合運動の内部に於て熱心に唱導せられ、有力な組合の中には確かに非常な影響を與へたのである、其等の組合は、單に産業の管理に關與することのみならず、機會ある毎に決然として少しづゝ管理の實を擧げ始めたのである。今後の論文に、私は此政策に含まれてゐる意味と、これを有効ならしめようとして勞働組合員が執つた實際の方法とを、一層詳細に述べたいと思ふ。けれども只今は、其一般的性質と目標とをざつと述べることに留めて置かなければならない。

勞働組合界の進歩分子の中にも、全國ギルド同盟其物の中にも『管理蠶食』政策についての、最初の眞面目な質問が聞こえ始めたのは、一九一九年のことであつた。何故ならば、大戰終了後最初の年である此年に於て、傭主はさういふ政策に含まれてゐる幾多の可能性に氣がつき、是に對抗するために、あらゆる努力を盡さうとしたのであつた。そこで、勞働組合が漸次に管理權を侵蝕する計畫を樹てゝ居る間に、彼等はさういふ政策を實施する第一歩の企てに對してさへも、資本制度の一切の力から反對される形勢となつたのである。ホイットレー報告のように、勞働者を管理に關與させることを目的とした『讓歩』を獲ることは極めて容易であつた。けれどもホイットレー案の背後の思想全體は、ギルド社會主義の主張とは、根本的に異つて居つた。

……………、……………、……………
……………、……………、……………。……………

……………………………………

……………………………………

……………………………………

……………………。けれ共彼等は如何なる階級に於ても、彼等は資本制度との如何なる種類の仲間入をすることも無いのである。

傭主が、極めて局部的なものにもせよ、獨占的な管理權を獲ようとする企てに對して、全力を擧げて反對するのを見出した時に、或ギルド社會主義者らは『管理蠶食』政策全體に對して、忽ちに絕望し始めた。『これでは仕方がない。是は、ギルド主義者が兼ねて自由を實現する第一手段としては無効だと認めて來た、立憲的政治的行動と同じく無効な立憲的行動に過ぎない。若し傭主が經濟力の移動を促すような、如何なる企てにも反抗するつもりであるならば、ギルド社會主義の政策を、其最も初期の段階で遂行しようとする場合ですら、資本主義の力と勞働者の力との間の、慘澹たる鬪爭を惹き起すに相異ないといふのが必然の結論である』。『吾々は、資本主義より社會主義への漸進的變化を企てる立憲主義をもう捨てようでは無いか。……………』と彼等は云ふ。

一九二〇年に至つて、共產黨の運動が漸次英國にも侵入するに及び、斯樣な意見を持つたギルド社會主義者は、ギルド社會主義に對する信念を、依然目標としてもつて居りながら、自然に共產黨の仲間入をしてしまつた。共產主義は、勞働者が社會の管理權を行使する社會組織を目的とするより以外の點に於ては、理想ではなくして、方法である。共產主義は、その目がけてゐる社會の性質又は作用を決定しやうとしない。それは資本主義的制度より社會主義的制度への過渡期の問題に、殆ど全力を集注してゐる。共產主義者は、漸進的な、又は平和な推移は行はれ得ず、……………

…………………………………………………、……………………、……………………、…………………………。

…。…………、……………………………………………………………………

斯様にして現在に於ては、全國ギルド同盟の會員が非常に多く——どの位多いかと明かにすることは出來ないが——共產黨に加入した。私は、現在は管理權簒食の政策が成功を收めるに不利な時機であることを認めはするが、猶ほ此政策に對する信念を失はず、又共產主義者の提示した政策に何等の希望をも認めることが出來ないので、共產黨に投じた連中の仲間にはならずに居る。恐らくはギルド社會主義者の主要部分と共に、私は資本主義より社會主義への推移の形式を、單に力と侵略との問題とは考へず、少くとも、管理に對する適否の問題も同樣に含まれてゐると考へて居る。勞働者が共組合を通じて、單に現に管理權を行使して居る人々から、產業の管理權を奪取するだけ強くなるに留まらず、その管理を自ら遂行し、生產の車輪を休みなく、滑かに運轉するに足るだけ、力強く、よく組織されるようになるまでは、ギルド社會主義若くは如何なる種類の民主的た社會組織を實現することも、畢竟望み難く思はれる。から云へばとて、私は精神的及び肉體的勞働者が、此仕事に對して個人的に不適任であると云ふ譯では決して無い。それは本來個人的の適不適の問題ではなくて、協同動作に對する能力と、大仕掛の企業の協同的基礎の上に於ける組織の經驗の問題である。現在に於ては、協同組合運動の示してゐる、或程度の例外を除くの外勞働者の團體は、此能力と經驗とを持つて居ない。そして彼等は、產業組織に對して、眞に管理の實を擧げ得るようになる前に、先づ是を學ばなければならぬのである。

此教訓を學ぶには、產業的機能の或部分の經營から得られた實際的經驗を基礎として、其以上の何物かを得んがために、如何に急速にもせよ、徐々に少しづゝ權力を把握するより外に方法は無いと考へられる。勞働組合は一面に於ては

共產團體として、一面に於ては團體交渉と、搾取に對する保護との機關として造られた。勞働者がその組合を通じて獲得し、表示した一致團結の資質は、生產管理の協同的努力に對する基礎として特に貴重なものである。けれどもそれは單なる基礎に過ぎないので、其れ自身として、此目的を達するに足りないのである。故に若しギルド社會主義が過去に於て唱道した管理蠶食の政策が、或點に於て不適切だとしたならば、それに對する療法は、此思想を擲つて、全然革命的な思想に奔るよりも、寧ろ現に現れて居る缺點を矯正する目的で、管理蠶食の政策を一層よく運用すべきであると私には思はれる。勞働者の侵略的勢力を增大するといふ曖昧な假定に依る純然たる革命的見解は、勞働者の建設的能力を僅かしか、又は全然增進することが出來ない。それは、あらゆる覺醒、あらゆる努力は、責任と權力とに堪ふる能力を發達させるといふ、極めて一般的な意味に於ての外、彼等を、適當な產業管理者とすることが無いのである。吾々は、來るべき變化に對する吾々の一般的觀念が革命的であると否とに拘らず、勞働者が現に當面してゐる產業管理の實務と直接に關係ある、彼等の建設的、協同的能力を發達させる上に、直接資するような政策を必要とする。

過去二年間に於ける建築ギルドの勃興と發達とは、管理蠶食といふ政策に豫想外の順應と普及の力のあることを示した。建築ギルドの創立以前には、建築業の傭主と勞働者との間に商議と契約とによつて、建築業全體を、社會的奉仕の基礎の上に組織する方向に、幾らか近づかせる試みの行はれたことがある。斯ような變化に對しては、賢明な傭主は同意をしたが、大多數の傭主の反對に逢つたので、試みは失敗した。勞働者は之に絕望して、最早や此上は革命の外に頼む可きものなしと言ふ代りに、彼等は自己の責任で、建築學に於ける一新制度の代用を試みる決心をした。彼等はその勞働組合を通じて、地方的建築ギルドとギルド委員會とを組織した。彼等は之に同情を有する專門技術家と管理者との助力を得た。そして政府と地方政廳とに對して、若し雇傭の確實と、仕事をする上に完全な產業上の自治とを與へ

られるなら、一般公衆の爲に、實費を以て住宅の建築に當らうと申し出た。政府と傭主との反對にも拘らず、住宅に對する社會の必要は、地方政廳をして、餘儀なく建築ギルドに若干の契約を與へしめ、保健省をして、いやいやながら此契約を許可せざるを得ざらしめたのである。そこでギルドは仕事に着手したが、其値段は、普通一私人の建築業者の値段よりも、また地方政廳が直接雇傭の方法――卽ち市の直接管理の下に、勞働者を雇傭して建築する――を取つた場合の費用よりも、遙かに安價であつた。その結果は驚くべきものがあつた。建築工は、自由と自治との基礎の上に、自ら其勤勞を組織する權能を與へられて見ると、曾て私人たる傭主や市に雇傭せられた場合よりも、遙かにすぐれた意志と能率とを以つて仕事をした。これは傭主と雖も承認した。けれども彼等は、この事實によつて、ギルドなる方法の正しいといふ結論はしないで、却つて彼等の雇傭してゐた勞働者が故意に仕事をのろくしてサボつてゐたと云ふ非難をしたのである。

今日(一九二一年五月)のところでは、建築業に於けるギルドの經驗が、永久的に成功するかどうかは決して確かでない。何故ならば今日までに得られた成功は、却つて大に之に對する反對を烈しくし、今や政府も傭主も共々に、組合勞働者の管理の下に行ふ產業自治の成功したこの最初の經驗を揉み潰ぶそうとして、ありたけの神經をなやましてゐるからである。然しながら、よし此の最初の實驗は揉み潰されるにしても――そしてこの破壞に對しては、組織せられた勞働階級運動から、斷乎たる抵抗が起るだらう――それは決して、この方法の失敗を意味するものではない。建築ギルドは吾々に、管理蠶食政策は、種々なる狀況に順應する力があるといふ敎訓を與へたものであつて、それは成功しやうと失敗しやうと、更に同一の方面に向つて實驗を行ふことは、卽ち吾々の仕事である。何故ならば是等の實驗は、結局成功しやうと失敗しやうと、勞働者に產業と勤勞との管理に於ける直接の經驗を與へ、斯くて勞働者に、更に進んで權

力を掌握するの準備と能力とを與へる無上の功績を有するからである。

共産主義者は、多くは建築ギルドの發達に對して反對の態度は取らなかつたが、さりとて之に重大な意義を認めやうとはしなかつた。…………、…………………、……………………。彼等は勞働階級を動員して反動を起そうとした。そして之によつて一擧に鐵鎖を斷ち切り、資本制度を顛覆しようとした。共産主義者ならざる吾々ギルド社會主義者の多くも、資本主義から社會主義への過渡期の或る段階には、必ずや急激な變化の來る可きことを信じてゐる。唯だ吾々の見解によれば、この急激な變化を成るべく早く來らせることが重要なのではなくて、この急變の來るまでの歳月を、勞働階級自身が、單に革命的精神の激勵ばかりでなく、資本制度に代はるべき、勞働階級の團體運動を基礎とした新組織の建設に費やすことが重要なのである。ギルド社會主義者は、舊るい社會を目の當に覆へすといふ事實よりも、寧ろ新社會の準備の事業に重きをおくものである。ギルド社會主義者は、經濟的の勢力は政治的の勢力に先だち、且つ之を支配することを信ずるのと同じように、革命そのものも、勞働階級の運動が革命の爲めにする建設的の準備によつて先だゝれ、之によつて支配されると信ずるのである。勞働者が團體としても個人としても、産業の管理に當るに充分な力と資格とをもつようにさへなれば、彼等は難なく反對に打克つて、産業の管理權を獲得するだらう。

最近二ケ年間、全國ギルド同盟の内部には、社會主義運動と勞働運動との方法に關する問題が大に論議されて來た。英國に於ける形勢の變化と、新しい感情の波（共産主義はその波頭である）が打ち寄せたゝめに、全國ギルド同盟は勢ひ運動方法の問題に當面せざるを得なかつた。ギルド社會主義者はまさに此問題に當面した。それは彼等が好んで當面したのではなくて、當面せざるを得なかつたからである。同盟の内部に於ける論爭の結果として、この變[illegible]の問題に

對するギルド社會主義者の態度を明確にした決議を多數で採用した。…………………………、…………………………………、…………………………。

この決議の結果、資本主義から社會主義への過渡期の形態如何といふ問題については、同盟は從來よりも左傾した。そこでこの決議は、往々共産主義的の決議と認められてゐるが、この決議に賛成した人々の多くは、決して共産主義者ではなかつたのである。なるほどこの決議は、共産主義と一致するものであつて、共産主義、ギルド社會主義、其他の部類の勞働階級運動に共通な思想の基礎を代表するものである。何故ならば第一には、この決議は共産主義の立場と兩立することの出來ぬ他の多くの見解を取ることにも差支へがないからである。第二にはギルド社會主義者を全體として見れば、彼等はこの決議に、共産主義者の眼に映じるような、特殊にして殆んど唯一の意義を結びつけてゐないからである。

ギルド社會主義者は、今日の如き形態の國家組織が消滅して、社會的行動の一切の方面に於ける、民主的自治といふ根本思想に一致した組織形態が之に代はることを信じてゐる。彼等は更に進んで、勞働者は自ら創造した組織の發達によつて、自らこの變更を實行しなければならぬことを信じてゐる。この範圍に於ては、彼等は大體、共産主義者と一致する。けれども彼等はこの點を、共産主義者ほどに中心的の要點とは認めない。且つ之が解釋も、共産主義者の解釋とは同じでない。

いふまでもなく私がギルド社會主義者を云々する場合には、ギルド社會主義者間の主なる思潮と信ずるところのものを代表することに努めてはゐるものの、畢竟は自分以外の何人をも代表して云ふことは出來ぬことを斷はつておかねばならぬ。之は私に限らず、いづれのギルドマンにしても同樣である。

吾々の見解は、次の如く云ひ換へることが出來ると思ふ。吾々が前途に望んでゐる新社會に達する爲めには、吾々は街道を進まなければならぬ、そして何處かで左に曲らねばならぬ、といふことを決定した。しかし吾々は第一番目の角をも左に曲がり、二番目の角をも左に曲がり、三番目の角も四番目の角をも左に曲らねばならぬだらうか。吾々は斯う思ふ。最初の角を左に曲つたなら、破滅に到るかも知れぬ。二番目の角を曲がつたら、袋町で行詰りの袋町へ飛込むかも知れぬ。三番目の角を曲つたら、たゞ名目上だけ勞働者によつて組織され、事實上何等の自由の保障もない、一階級の專制に到達するかも知れぬ。そこで第四の曲り角、第五の曲り角、乃至は最後の曲り角を左折するのが正しい道である。吾々ギルド社會主義者の多くは、共産主義者は最初の曲り角を左折することには反對するが、尙ほ餘りに左折を急いでゐると思ふのである。

次にギルド社會主義の見解のうちで、共産主義者の多數の反對するのは何だらうか。私の指摘したやうに、ギルド社會主義者は有ゆる機會を利用して、勞働組合運動のうちに、『管理議會』の傾向を促進することに努力した。過去十年間、この方向への進行は、歩む可き途の遠きに較らべて尙ほ云ふに足りないものではあるが、兎も角幾段階かを前進した。斯ような管理議會によつて、過去に於いて重要な讓歩を獲得したが、最近數年間、その進歩は一層困難になつて來た。初めのほどは、この方向に於ける讓歩の要求は偶發的であり、半意識的に過ぎなかつたが、資本家は漸やく其傳染的性質に氣がついて來た。そこで資本家がギルド社會主義者の小いさな獲物に氣が附いて、今や勞働者はこの獲物に目醒めつゝあることを看取すると、資本家の抵抗は頑强になり、益々全力を擧げて、新要求に反對するやうになつて來た。數年前には、多かれ少かれ容易に讓歩して現れた變革も、今は之を獲得することが六ケ敷くなり、從つて多くのギルドマンは、現在の制度が存續する限りは、勞働者をして、到底聽許せられぬ要求を提出せしめることは、無益であると思

ふようになつた。

然しながら是等の困難は、吾々の提案を差控える理由とはならぬ。要求の拒絕は、その要求が傭主の聽許し得るような性質のものであり、しかも傭主が聽許を拒んでゐるのだといふことが明白な場合には、恐らくは顯著な効果がある。斯ような要求の拒絕は、ギルド社會主義者の主張を破るものではない。否な反對に、この拒絕は勞働者をして、何故に斯ような妨害物の存續が許るされて居るかと云ふことを自問させる。若し資本家の勢力が、よく建築ギルドを破壞するやうなことがあつたなら、それは固より悲しむ可きことであり、勞働階級運動に取つての、眞實の蹉跌である。けれども共れはまた、勞働者に取つての價値ある敎育であり、彼等が、現在の經濟制度の眞實の基礎を明らかにする助けともなるだらう。

單に戰術上の問題としても、吾々が若し社會組織の根本的の變革を求めるなら、先づ第一に、團體に組織された勞働者の心の上に、根本的の變化を齎らさねばならぬことを記憶することが肝要である。新社會の實現は、是等の勞働者の意志と能力との上に懸つてゐるのである。それ故に吾々はこの制度の觀念を、容易に且つ即時に理解の出來るやうな形で提示しなければならぬ。そして吾々の提案は、勞働者が現制度の下に痛切に感じ且つ意識してゐる苦痛の救治方法といふ形を取らなければならぬ。若し彼等が此種の救治策を要求し、そして其要求がよし拒絕せられても、この事業は空しくなつた譯ではない。何故ならばこの要求は、少くとも、一層深く彼等の心裡に染みこむだらう、そして彼等は之が滿足の爲に、更に新しい方法の案出に着手するからである。

この種の主張に對ては　共產主義者は幾分侮蔑の態度を取る傾きがある。例へば失業問題に就いて見るならば、此問題に對するギルド社會主義者の政策は、產業に從事してゐる勞働者に對しては、充分の仕事が當てがはれ得ると否とに

拘らず、總て賃銀全額支拂ひの繼續を保障すべしといふ要求をすることである。言葉を換へて云へば、ギルド社會主義者は、收入の安全を要求したのである。この要求は、今まで拒絶せられて居る。けれども之が要求せられたといふこと、そして力強く要求せられたといふことは、有力な教育的の影響を與へた。そして私は、共爲めに之が實現が早やめられたと信ずるのである。

之に反して共産主義者が現在の經濟上の形勢に對するやり方は、資本制度の存續する限りは、必ずや失業を伴ふと勞働者に告げるのが常である。之は事實には相違あるまいが、よし共目的は革命的感情の鼓舞に過ぎぬとしても、尙ほ下手な宣傳である。斯ような宣傳は、或る程度まで革命的の氣質をもつてゐる人々を捉え得るに過ぎぬ。之に反して産業上の支持に對する要求は、收入の不定と失業の結果とを經驗し來つてゐる總ての勞働者に、直接の感動を與へるものである。實際の上の痛苦と、この痛苦に適用のできる救治方法とを論じたなら、最も容易に說得することが出來る。然るに私の見るところでは、共産主義者は正さにこの點を觀取し得ないのである。

斯ように共産主義者は、ギルド社會主義者であつてはならぬと云ふ理由も、ギルド社會主義者は、共産主義者であつてはならぬと云ふ理由も、絕對にない。けれども私は、ギルド社會主義と共産主義とは互ひに共通點があるにも拘らず、大體に於て違つた傾向を代表するものであり、また共産主義者は、共宣傳に際して、ギルド社會主義者の主張する二つの根本思想を危うく閑却せんとするものであると信ずる。勞働者を革命の爲に訓練するに當つて、共産主義者は、自由を基礎としないで服從を基礎とする社會を造るの恐れがある。然るにギルド社會主義者は、有ゆる社會奉仕の領域に於ける自治の理想を、飽くまで忘れない。第二には共産主義者は、資本主義から社會主義への推移の問題を、單に組織せられた强力の問題として考へる。權力を運用する爲めには、建設的能力の非常に重要なこと丶、破壞的の目的の爲に作

られた道具と、社會を維持する仕事の爲に作られた道具との間の相異を見ることを忘れてゐる。ギルド社會主義者は資本制度が他の制度に代はられると云ふことには、非常な破壞の含まれてゐることを承認する。けれども彼等は、この破壞は、勞働者に、社會的組織を作り出す建設的事實の用意が出來た時にのみ、初めて來たるものと信じてゐる。言葉を換へて云へば、彼等はこの問題を、共産主義者ほどに力の問題として考へないで、責任と權力とを運用する適不適の問題として考へるものである。



階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得（其三、完結）

福田徳三

（十三）

『共産宣言』第二節『プロレタリアと共産主義者』の一項に言ふ、『共産主義者の理論的主張は、決して、誰れと云ひ彼れと云ふが如き世界改良屋が發明し又は發見した理想や主義やに基くものではない。其の主張する所は、單に一の現成の階級鬪爭、吾人の目前に行はるゝ所の歴史運動の實際的事情を一般的に言ひ表はしたものに外ならない。從來の所有關係を廢止せよと云ふは決して共産主義にのみ特有な主張ではない。凡ての所有關係は、絶へざる歴史的變遷を經過し

た。例へば、佛蘭西革命は、封建的所有を廢してブルヂオア的所有を促進した。共産主義に特有なる主張は、所有其ものゝ廢止を主張することではなく、ブルヂオア的所有の廢止を主張すること是れである。併去、近世のブルヂオア的私有財産は、階級の對抗、一方が他方に對する奪ひ取りに立脚する生産物の生物及占有の最終にして最完全なる表現である』と（第七公認版二三一三頁）更らに語を續けて云ふよう、『雇傭勞働、即ちプロレタリアの勞働は、プロレタリアに、勞働者に、財産を收得せしむるか、答曰否、プロレタリアの勞働は資本を生ずる、換言すれば、新たに搾り取り得る爲めに絕へず新しい雇傭勞働を作り出すと云ふ條件の下に於てのみ增殖し得るものである。故に今日現在の形に於ける財産は、資本と雇傭勞働との對抗に於て活動して居る。今此の對抗の兩面を考へて見よう。（共一、資本）資本家たると云ふことは、一の純個人的地位たるに止まらず、生産上に於ける一の社會的地位を占めることの謂である。（中略）故に、資本は個人的權力でなく、一の社會的權力である。故に此の資本を社會の會員に屬する共有財産に變形すると云ふことは、個人的財産を社會的財産に變形することではない。單に財産の社會的性質が變化するのみである。即ち財産は、其の階級的性質を失ふのである。（共二、雇傭勞働）雇傭勞働の平均價格は、勞銀の最低額、換言すれば、勞働者をして勞働者として生活せしむるに必要な生計料の總量である。雇傭勞働者が其勞働によつて收得するものは、單に彼の生計を支ふに足るものたるに過ぎない。我等は此くの如き直接生活料に供せらるゝ勞働生産物の個人的占有を廢止せんと欲するものではない、此占有は他人の勞働に對する權力を與ふ可き純收益を剩することのないものであるから、之を廢するには及ばない。我々の廢止せんとするものは、此の占有の悲慘なる性質是れである。即ち、勞働者は唯だ單に資本を增殖するが爲めに生き、支配階級（資本）の利益が要する限りに於てのみ生きると云ふ狀態之れである。ブルヂオア社會に於ては、活きたる勞働は、死せる蓄積勞働（即ち資本）を增殖する手段たるのみ。之に反し、共産社會に於ては、蓄積勞働は、

勞働者の生活行程を擴げ、富まし、進める爲めの一手段たるに止るのである』第七公認版三二―四頁）と。此れが今日の階級闘爭の根本原因と其の闘爭の當事者としての富裕所得と資本所得の本質に關するマルクス及エンゲルスの根本見解であるのである。此見解は今日の階級闘爭の實狀を、マルクス及エンゲルスの價値及餘剩價値論の原理に照らして歸納するによりて立てられたものであつて、世界改良家の理想から演繹し來つたものでないことは、彼等自ら言ふ通り正さに相違ないものである。されば今日謂ふ所の『レコンストラクション』てふことは、之を詮じ詰めて行くときは、社會民主々義とは相容るゝ能はざるものとなる。唯物史觀は、社會を造られたるもの、コンストラクトせられたるものとは見ない、造られたるにあらざるものを改造し、コンストラクトせられたるにあらざるものをレコンストラクトすると云ふことは、實は全く無意味のことである。故にレニンが自由の平等のと云ふ理想で世界を改良しようとする人々を罵るのは全くマルクスの思想に合致するものと云はなければならぬ。而してマルクスもレニンも共に、無政府主義を極力否認することは、此點から論理上當然の歸結と認む可きである。此點に於て今日英國に流行する「ギルド・ソーシアリズム』は、全然非マルクス的のものである。否學問上の立場から云へば、ギルド・ソーシアリズムなるものは、其實無政府主義の極めて微溫的なるもの」、若くは假面を被れる穩和的無政府主義と云ふ可きものである。バートランド・ラッセルの如きも、自由を以て最終の極致とする點に於て、學問上から之を分類するときは、決してマルキシズムに屬せず寧ろ無政府主義——自由から演繹した哲學觀の當然到達す可き——に屬するものであつて、彼がギルド・ソーシアリズムに多くの共鳴を有する所以は、兩者共に非マルキシストたり、無政府主義たり、而して極めて穩和なる見解を取るの三點に於て粗ぼ一致して居るからである。マルキシズムの學理の根底に於ては、自由と云ひ平等と云ふ理想は、何の存在の理由を有せぬ、唯だ過去より現在を經て將來に涉る歷史の必然的經過の結果としての共產主義の實現、而して其實現の爲め」

の階級鬪爭の統一化」、國際化」、組織化」と云ふことが、現實の任務として與へられるのであつて、此點に於ては、實證主義に立つ社會政策の階級鬪爭の醇化、厚生化の主張と少くとも其學問上の態度を同ふするものである。唯マルキシズムの統一化、國際化、組織化と、社會政策の厚生化とは、全く其性質を異にする點に於て相分るゝものである。故にカウツキーはエルフルト綱領説明の『勞働運動と社會主義との結合としての社會民主々義』の項に於て云つて居る、『社會主義者は、一の新らしい社會を發明する任務を有しては居らぬ、彼等は現存の社會の中に新社會の要素を發見す可き任務を有するに止る。彼等はプロレタリア（雇傭勞働者）に、其窮境よりの救を上から天降らせるものでなく、プロレタリアの見解を增進し、其の經濟的及政治的組織を助成することによつて、プロレタリアの階級鬪爭を援助し、其れによつて、プロレタリアが自ら自己を救ひ得る地位に達する時期を、より速かにより苦痛なくして成熟せしむべきのみである。即ちプロレタリアの階級鬪爭を出來る丈け標的を自覺し、目的に合ふ樣に形らしめると云ふことが、社會民主々義の任務である』と、（第八版二三九、二四〇頁）茲に、標的自覺、合目的と云ふ其標的、其目的が、階級鬪爭を統一化し、國際化し、組織化す可きものとせられる、其標的、其目的は、一は唯物史觀、一はマルクスの價値及餘剩價値論と資本蓄積、集中論てふ經濟理論より導き來られるのである。故に厚生化の可能を主張する社會政策と社會民主々義との階級鬪爭觀の相分るゝ所は、繋げて此一點に存するのである。若しも社會政策にして、マルクスの唯物史觀と其經濟理論——就中餘剩價値論——とを認容するものならば、其階級鬪爭觀は、現在に就ても、將來に就ても全く相分つ所なきものとなるの外はないのである。然るに現經濟組織に於ける階級鬪爭の事實を事實として認めることは、社會民主々義と全く同一なる社會政策は、其階級鬪爭の解釋、就中階級鬪爭當事者としての雇傭所得と資本所得との根本性質の現在解釋に就て、マルクス説を認めず、更らに其將來に於ける發展傾向に就て全く異る見解を持するが故に、其主張する階級

闘爭の醇化、厚生化なるものは、社會民主々義の意味する統一化、國際化、組織化と異るに至るのである。之を要すれば、階級闘爭當事者としての雇傭所得と資本得得とに關する根本見解の差異は、多くの點に於て同一の立場に立つ社會民主々義と厚生社會政策との差異を生ずるのであつて、他方、現在の階級闘爭に關する實證的見解と、此階級闘爭の將來を進化的、發展史的に見る態度の上に於ては、社會政策と社會民主々義とは相共に、無政府主義、又は其の私生兒とも云ふ可きギルド・ソーシアリズムと全く異る立場に立つものである。社會民主々義の所謂階級闘爭の是認とは、不可疑現存の事實なる階級闘爭を何處までも階級闘爭として進行せしめんとするもので、其爲めに、之れにマルクスによる唯物史觀の標的自覺と目的合理とを附與して、階級闘爭を更らにより有力により有意義に、より有効に成さんとするのである。之に反し社會政策が階級闘爭を否認すると云ふのは、決して現存の事實を否認する譯ではない、其は爲す能はざる所、否、學問上爲す可からざる所である。其否認と云ふのは、階級闘爭を飽迄も階級闘爭として進行せしめ、此に標的と目的とを指示して、より有力に、より有意義的になすと云ふこと——此れを社會民主々義化と名けても差支ない——を否認するのである、其否認する所以、然することは、社會の發展上當然に與へられたことでなく、從つて然することがより善き事でないのみならず、より惡くする事であるを認識するからで、而して現存の大事實たる階級闘爭は、社會進化の發展傾向上厚生化の意味に於て醇化せられ行く外はないもので、然することが唯一の可能事であり、然るが故に其れがより善き事であるを認識するからである。決してマルクスの嘲つた樣に、世界改善屋の理想論に與するものではない、同じく社會進化の法則の認識の上に立つものである、而して最近に至つて、此認識即ち將來の任務としての階級闘爭の否認は、ボルシエヴヰキ就中レニンと社會民主々義者のカウツキーとの論戰に鑑みて、より確められたと筆者は確信するものである。——拙文『マルキシズムとしてのボルシエヴヰズム』參考——

(十四)

階級と云ふ語を支離滅裂に使用して憚らない人々は、又た多くは、同時に、階級鬪爭と云ふ事に、指定的にして紛更を許さない獨特の意義が存することを無視する人々である。殊に甚だ滑稽な事は、近頃の我邦の勞働爭議の有樣を見て、愈々階級化して來たと喜ぶ社會主義者あり、斯く階級化したことは即ち惡化を意味する、實に日本の將來の爲めに寒心に堪へないなど〻憂慮するもの〻あること是れである、我邦の勞働爭議が階級化したとは抑も如何なる事を指して云ふのか、勞働者の力が強くなり其團結力が大となつたことを指して云ふのか、爭議の性質が深刻になつて來たことを云ふのか、其何れにしても、其は寧ろ喜ぶ可き事であつて毫も憂慮す可き事ではない、乍去社會主義者等が此を階級化なりとして喜ぶと云ふ根據は果して那邊に存するか、社會主義の立場、殊にマルキシズムの立場から云へば、一切の歷史は階級鬪爭の歷史なりとするのではないか、大正十年の今日になつて始めて階級化が起つたなどと云ふのは、マルキシストとしては口にす可からざる囈語である。我々は一切の歷史を階級鬪爭の歷史なりなどとは決して認めざるものである、乍去雇傭勞働と資本との對立せる社會は、必ず其所得の性質の差異に基く階級の對立あり、其對立はやがて鬪爭を喚び起すてふ現成の事實を、一の事實として十分に認めざるを得ざるものである。即ち今日の意味にての勞働爭議は其始めより一の階級爭議であることは儼然たる一の事實であつて、今に至つて始めて階級化す可く始めたものでは決して無いのである。唯だ我邦に於ては、其鬪爭は微弱なものであつたのが、近頃漸次に有力なものとなつたに過ぎない其が階級戰たることは、微弱なりし時に於ても、稍有力となつた今日に於ても、性質上些の變化を被つたものではないのである。

社會民主々義者たる山川均氏は、賀川豐彦氏は主義として階級鬪爭否認論者であるのに、其指導する神戸の勞働爭議が階級鬪爭化するに任せて居るのは、主義の人としての賀川氏の矛盾ではあるが、勞働運動の發展上の事實としては、賀

川氏さへ階級鬪爭是認者となつたことを示して甚だ歡迎す可きことであると云ふ意味のことを本誌上に說いて居られるが、其は賀川氏の矛盾ではなく、却つて社會民主々義者としての山川均氏の自己撞着である。社會民主々義者たる山川氏は、階級鬪爭ならざる、生產要具の所有者たるブルヂオア階級と、雇傭賃銀のみを受くるプロレタリア階級との間の爭議なるものありとせらるゝのであらうか?。左樣でないならば、今更神戶の爭議が階級化したなどと珍重せらるゝは譯の分らぬ事であり、反對に、左樣であるならば、山川氏は、何時の間にか社會民主々義者でなくなつて仕舞つて居るのである。賀川氏から云へば、勞働爭議の指導者である限り、階級鬪爭の一當事者たることは、始めから明かたことであつて、同氏は決して之を否認するものではないと思ふ。否氏自らは之を否認するとしても、其は唯一の錯覺に止るのであつて、社會民主々義から見れば勿論のこと、我々社會政策の立場から見ても、氏が階級鬪爭の一當事者であると云ふことは、議論でも主張でもなく、現前端的の一事實である。賀川氏が階級鬪爭を否認すると云ふのは社會政策が之を否認すると云ふのと同じ意味で、飽迄も階級鬪爭として進行せしめ充實せしめ發展せしむることによつて、プロレタリアの解放を來すと云ふ將來任務を否認することであらねばならぬ。現在に於ける勞働爭議の關係者として、其が事實として階級鬪爭であると云ふ事を否認する權利は、賀川氏は決して之れを有して居らぬのである。否、恐らく、氏は我々と同樣に、現在の階級鬪爭よりの解放の可能と適性――階級鬪爭の醇化――とを將來に認むるが故に、階級鬪爭を否認すと主張するのであらうと思ふのである。

階級鬪爭でない所の勞働爭議なるものが起り得るとするなれば、其れこそ所謂勞働爭議の惡化である。階級鬪爭であるが故に、價格鬪爭たる勞働爭議に厚生鬪爭としてのより善き要素が含まれるのである――本誌五・六月號の拙文參照――今日の經濟生活には幾多の缺陷、千百の短所、惡所がある。然し現に、勞働者が階級鬪爭の一當事者となり得る

と云ふことは、之を昔に比すれば、形容し難い程の進化であり發展である。此一事を十分に諒解するのでなければ、社會の一部たるに過ぎない」——殊に我邦にかては——プロレタリアの運動が、今日斯く重大な意義を有する所以は、到底之を悟了する能はざる可きである。

(十五)

ベルンシュタインは、其『社會主義の前提と社會民主々義の任務』と云ふ有名な書に於て、階級闘爭と資本主義の發展傾向とに就て、マルクスの理論を要約して次の如く言つて居る。今日の社會に於ては、階級闘爭は、生産要具の資本的所有者と、無資本生産者即ち雇傭勞働者との間に於ける階級闘爭として、今日の社會に其特徴を附與して居るマルクスは前者の階級に『ブルヂオアジー』後者の階級に『プロレタリア』なる名稱を、佛國から輸入して附與した此兩名稱は、マルクスが其階級闘爭の理論を打建てたとき、既に佛國の社會主義者によつて、好んで用ゐられて居たのである。『ブルヂオアジー』と『プロレタリア』との間に於ける此の階級闘爭は今日の生産事情に於ける對抗を人の上に移したものに外ならぬ。即ち占用方法の私的性質と生産方法の社會的性質との間に於ける對抗是れである。蓋し、今日の社會に於ては、生産要具は、生産の結果を占有する個人資本家の所有物であるのに、生産其ものは、一の社會的行程であつて、勞働の計劃的分業と組織とに基いて、多數の人々によつて、執り行はるゝ使用財の作出である、分り易く云へば、生産要具の所有は、私的、個人的であり、生産の行程は社會的であると云ふ對抗の下に立つて居るのである。トコロが此對抗は、更らに、第二の對抗を包藏して居る、即ち、生産設備——仕事場、工場等——内に於ける分業及組織は計劃的、組織的であるのに其生産品を賣捌く市場なるものは無政府的状態に在りて、商品の賣捌には何の秩序も計劃もないと云ふ對抗是れである。ソコデ資本家と勞働者の間に於ける階級闘爭の出發點は、資本家の手に於て營まるゝ勞働の換

價。値。行程の本質から當然に起る勞資兩者利害の對抗——換價行程の本質上、資本家の利は勞働者の損、資本家の損は勞働者の利となると云ふ對抗——是れである。此資本的換價行程の研究は、マルクスの價値論、餘剩價値生産並占有論を產み出したのである。

資本的生産及之れに基く社會組織の特徴は、人と人とは、經濟上の關係に於ては、常に賣手對買手として、相對立すると云ふこと是れである。此對立は、形式上、法律上では飽迄對等關係——權利關係、契約關係——ではあるが、經濟生活の實際に於ては、所有の差異、雇傭關係てふ純經濟關係からのみ生ずる一種の從屬關係として現はれる。勞働者は、一定の時間、一定條件の下に、一定の價格——勞銀——に換へて、其勞働力を資本家に賣る。資本家は、勞働者の助によつて生産せられた生産品を、一定の價格に換へて市場に賣拂く、其價格は、原則として、又た資本制企業存續の當然の條件として、生産費額以外に餘剩を含むものでなければならぬ。此餘剩は、マルクスの理論に從へば、勞働者が給付した勞働の餘剩價値である。蓋し、商品は、市場に於ては、一定の價値に於て交換されるものである、其一定の價値とは、其商品に體化せられて居る勞働の量——時で量つた——によつて定められるものである。資本家が、原料、補助料、機械の消耗、賃借料、其の他の生産出費の形に於て、生産に投入する過去の——死せる——勞働は、其生産品の價値中に、不變的に回收せられるに過ぎない、之に反し、現に費消する活きた勞働は、勞銀の失費を償ふに止まらず、其以上の賣收、即ち勞働價値の對價を資本家に與ふるものである。勞働價値は、生産品中に含まるゝ勞働全量の價値であるが、勞銀として支拂はれるのは、勞働力の購入代價丈けである、其れは、歴史的に成立つて居る勞働者生計程度に應ずる生活費によつて定められるものである。ソコデ、勞働價値の對價と、支拂勞銀との間に差額が生ずる、此れが餘剩價値である。此餘剩價値は全部資本家の手に歸する、從つて資本家は、出來る丈け此餘剩價値の量を多くしようとする。併し

乍ら、商品市場には、絶へず競爭が行はれるから、資本家が其生産品を賣捌き得る價格は常に壓へ付けられるを免れない。此の競爭の下に在つて、賣捌き量を多くしようとするには、資本家は、其製品の生産費を低廉にするより外に方法はない、其方法に三ある（一）は勞銀の引下げ、（二）は勞働時間の延長、（三）は勞働能率の増進是れである。然るに（一）と（二）は其實行の範圍は限られたるものである、從つて資本家は其主力を（三）の能率增進に傾注せざるを得ない。其實現には、勞働組織の改良、勞働集中度の促進、機械の完備等が主要な手段である。此等の手段を實行する結果は、自ら資本の有機的組合せを變更することにならざるを得ない。卽ち原料や勞働要具の爲めに支出する資本分の割合が增し、勞銀として支出する資本分の割分が減ずるに至るのである。同一量の生産をあぐるに、從前より少數の勞働者によつて事足るか、又は同一數の勞働者――乃至はより少き勞働者――を使用して、從前よりより多き生産をあぐることになるのである。何れにしても勞働者に對する支拂勞銀額の割合――之を可變資本と云ふ――が減じ、原料や要具に對する支出の割合――之を不變資本と――いふが增するのである。

トコロで、マルクスは、勞銀として支出せられる資本分（v）に對する餘剩價値（m）の割合卽ち $\frac{m}{v}$ を、餘剩價値率又は絞り取り率と名け、生産投下資本全額（C）に對する餘剩價値（m）の割合卽ち $\frac{m}{C}$ を利潤率と名ける。利潤率 $\frac{m}{C}$ が低下するとき、餘剩價値率 $\frac{m}{v}$ の高まることのあり得るは、前述の説明によつて明かである。

生産業の種類によつて、之に要する、資本の有機的組合せは色々あり得る、勞働要具、原料等に對し比較的大なる資本分を要し、勞銀に對し比較的に小なる資本分を要する企業もあれば、其反對に、勞銀として支出する資本分が大々部分を占むる企業もある。前者の資本組合せを高度の有機的組合せと云ひ後者のを低度の有機的組合せと名くる。資本家の收得する餘剩價値と其の支出する勞銀との對比が不變的なるときは、低度組合せ生産業の利潤率は、高度組合せ生産

業の利潤率を超ゆること數倍に及ぶ場合が多く有り得る。乍併實際の事實としては、其の樣の場合はない。發達した資本的社會に於ては商品は決して勞働價値其儘に賣られるものでなく、其の生産價格に於て賣られるものである。生産價格とは、支出した生産諸費（勞銀プラス死せる勞働）に加ふるに、社會的全生産の平均利潤――又は資本の有機的組合せ即ち勞銀用資本の爾餘の資本に對する割合が、平均比率を有する生産業に於ける利潤率――に該當する追加額を以てしたものを云ふ。ダカラ、商品の價格は、異れる生産業に於ては、決して一樣に、其價値に應じて上下するものではない。甲の生産業に於ては、價格は常に遙かに價値以下に在り、乙の生産業に於ては其以上に在る。價格が價値に接近するのは、中位の資本組合せを有する生産業に限るのである。從つて、價値の法則は、生産者の意識から全然消滅し去つて、唯だ隱約の間に、長時期に亘つて、平均利潤率の高さを支配するに止まる。

競爭と資本增殖の强制的根本法則は、絕へず、利潤率を引下ぐる作用を持つて居る。此作用は或は之を緩和することは出來よう、然し永久的に之を阻止することは出來ないものである。資本の過超生産は、不用勞働者の發生と伴ふ。工、商、農業には、絕へず大集中の勢が强く、大資本家の小資本家に對する併合は、益々其力を加へる。生産の無政府的狀態は、多數民の消費不足と結合して、周期的恐慌は彌々猛烈となり、彌々其破壞力を增し、無數の小資本家の滅亡によつて、集中並に絞取りの行程は促進せられる。かくて其極、資本の獨占と、之に基く生産方法は、却つて生産の進步に對する妨害となり、生産要具の集中と勞働の社會化は、資本制の壓抑と共に堪へ難いものとなる。玆に資本制壓抑崩壞の傾向は起り、絞取り者と奪掠者とは、反對に民衆によつて奪掠せられ、資本的私有財産は廢止せられて、社會主義的社會は現出する。これが、マルクスの價値、餘剩價値、資本制發展理論の要旨であると。（一九二〇年刊改訂版四四――四八頁の大要）。

(十六)

マルクスの階級鬪爭論は、其唯物史観の産物なりと稱せられて居る。乍去、仔細に吟味して見ると、其現在より將來に亘る發展に就ては、兎に角として、過去より現在に至る經過に就ては、決して左樣ではない、極めて非歴史的な一の獨斷論である。マルクスが――エンゲルスに就ては少しく違ふ――階級鬪爭の歴史的叙述を試みたものは、唯一の『共産宣言』あるのみで其外には『資本論』『哲學の窮乏』の二書中に若干の斷片的發言を散見するのみである。彼が其階級鬪爭史を唯物史観の上に學理的に打建てたと云ふのは傍人の豫斷に過ぎないので、彼自らは其れに就て、何の貢獻もなしては居らぬのである。『共産宣言』に說く彼の階級鬪爭は、現社會に存する雇傭勞働(プロレタリア)對資本(ブルヂオアジー)の階級鬪爭のみである。過去の社會に就ては、唯だ羅馬では、パトリチア、騎士、プレベア、奴隷の社會分岐があつたこと、中世に於ては、封建領主、陪臣、ギルド市民、ゲゼレ、農僕に分かれて居たことを一言するに止ることと前段、(本誌前號三一頁)に引用した通りである。羅馬及中世以外には、如何なる階級が存して居たかすらも、窺ひ知ることは出來ず、其羅馬、其中世に就ても、其鬪爭の性質、其經過の如何なるものなりしやは、少しも之を知ることを得ぬのである。唯だ『資本論』第一卷(一九一四年刊第七版九九頁)には、『古代世界の階級鬪爭は、主として、債權者と債務者との間に於ける鬪爭の形に於て行はれ、羅馬に於ては、此鬪爭は、債務者たるプレベーア滅亡して、奴隷之れに代るに至つて終熄した』と云ひ、中世の封建時代に就ては、同所に於て、『中世に於ては、此鬪爭は、封建的債務者が、其政權と經濟的基礎とを失つて滅亡するに至つて終熄した』と云つて居るに過ぎない。『哲學の窮乏』中には(第二版一〇五頁)『封建的生産方法を正しく判斷せんと欲せば、其を一の對抗に立脚する生産方法として考察せねばならぬ。我々は此對抗の下に於て、如何に、富が生産せられ、如何に、生産力が階級鬪爭と終始して發達したか、如何に、此等階級

中の一たる惡しき側、即ち社會的害惡が絶へず增長して、其極、其解放の物質的條件が成熟したかを知らねばならぬ』と極めて漠然たることを言つて居るに過ぎない。之に反し、封建時代に代つて起つたブルヂオア社會に於けるブルヂオアジー對プロレタリアの階級鬪爭に於ては、可なり詳しい叙述を爲して居るのである。されば、從來の歷史は、何れも、階級鬪爭の歷史であつたとは、ein unbewiesener Satz 立證せられざる主張であつて、マルクスは唯初めから斯く豫斷してかゝつたものに外ならぬのである。エンゲルスに至つても亦粗ぼ同樣である。而して今日までに至る凡てのマルクス祖述者の階級鬪爭論は、何れも、其實、單に『ブルヂオアジー』對『プロレタリア』を其當事者とする階級鬪爭論であつて、一切の歷史を縱斷する底の階級鬪爭論ではないのである。之を唯物史觀の産物なりと云ふは、當らざるも亦甚だしいのである。殊に現代に於けるマルクス宗の大先達たるカウツキーの階級鬪爭觀——就中『エルフルト綱領基礎部分の說明』(第八版一九〇七年刊三一頁以下)に於ける——は、極めて非歷史的のものである。此等の事實は何を語るかと云ふに、『凡ての歷史は——エンゲルスの修正では、原始社會を除いて——階級鬪爭の歷史』てふ斷案の全く架空的、豫斷的、非事實的、非歷史的、のものであつて、階級鬪爭なるものを、强ひて唯物史觀當然の論結であるかのように粧ひ、之に基いて、階級鬪爭の『グロリフヰケーション』、光榮化、神聖化をジアスチフイし、勞働運動の根本信條たらしめようとする社會民主々義に强ゐて學術的根據を附與しようとする企てたるに過ぎないことを以てするのである。一步を讓つて云ふも、階級鬪爭觀に運用せられた唯物史觀なるものは、倒叙的、逆進的史觀である。今日の社會に儼然として存する雇傭勞働對資本の階級鬪爭の事實を拉し來つて、之を逆まに過去——マルクスによれば人類歷史の最初期まで、エンゲルス以下によれば、原始狀態の終る時代まで——に溯らしめたものであつて、順當に過去から現在に至る實際人類歷史を詳繹した結果では斷じて無いのである。然るに之を一の史的發展法則の地位に押上げて、將來に向つて其

妥當性を必然的進化史的に有するものとし、『ブルヂオア的生産關係は、社會的生産行程の對抗的形態の最終のものであつて、階級鬪爭は、此のブルヂオア社會に於て、最終まで戰はれ盡さる可きものである』（ゴタ綱領批評五七三頁）と、豫言し、之に基いて、勞働運動に其標的と其目的を與へ、其の性質を特色付けようとするのは、學問上何等の根據を有せざることであり。從つて、此意味に於ける階級鬪爭の統一化、國際化、組織化は、我々實證主義の學問の上に立つ者に對し、何等の權威を有せざる主張であり、推論であると云はねばならぬのである。エンゲルスがモルガンに學びて、人類社會發展の法則なりとした原始共産體なるものが架空的産物であつて、其意味の共産化に何の根據なきものなることと明かなるが如く、倒叙史觀に基いた階級鬪爭將來觀は、學問的實證の前には、煙の如く消へ去る可き運命を有する外ないものである現在の階級鬪爭の事實を事實として認めることマルキシストと全く同じき我々が、其發展傾向に就て、全く異る見解を取る理由は玆に存するのである。

（十七）

階級對抗の所得理論を學問的に打建てたものは、英國のデヴヰツト・リカルドである。彼れの説がアダム・スミスを殆んど掩ひ去つて、今日迄の經濟學の中心を爲した所以は、其一見極めて單純にして明快を極めた抽象的論理の爲めであるは勿論であるが、其の論理に重大なる缺陷の伏在することが看破せられた後猶ほ永く學問上に勢力を維持して居るのは、實に其れが階級所得理論として、人を魅する偉大なる力を有して居るが爲めである。マルクスの價値、餘剰價値學説が、今日の學問上に如何なる解釋の下にも認められざるにも拘らず、其理論が勞働者は勿論、其以外の人々をも引き付ける偉大なる力を有して居るのも、其が階級所得理論として有力なるものであるからである。而してマルクスは其階級所得理論の根本着想をリカルドから藉り來つて、之れに自家獨得の工夫を著けたものである。トコロが均しく階級所

得對抗の理論ではあるが、其對抗、其鬪爭の當事者は、リカルドに於けると、マルクスに於けるとは、全く異なつて居るのである。即ち、リカルドに在つては相對抗し、相鬪爭する當事者たる兩種の所得は、地代と利潤（土地所得と資本所得）とであるが、マルクスに於ては、其れは、利潤と勞銀（資本所得と雇傭所得）とであるのである。マルクスはリカルドの着想を拉し來るによつて、敵の刄を奪て、倒まに、之を敵の頭上に擬したのである。

リカルドの抽象的、數學的なる精確科學の觀を有する所得理論は、其本體を點檢し來れば、實は、土地所得に對する資本所得挑戰の凱歌であるのである。動產財產の唯一の利益を擁護する大宣言であるのである。而して彼は、此の挑戰に於て、絕へず勞働所得（勞銀）を、資本所得の味方に引き付けることを忘れなかつた。然るに、マルクスは、其戰法を裏切つて、勞銀をして資本所得に宣戰せしむ可く、其階級鬪爭論、其餘剩價値論を打建てたのである。リカルドはマルクスの爲めに、此挑戰の武器を其資本擁護論中に十分に鍛へ上げて置いたものと云はねばならぬのは、奇しき因緣である。

リカルドの地主階級に對する挑戰の中堅は、實に其地代理論である。彼曰く、農產物の價格は、食料供給に要する農作を實行する限りの最劣等の土地に於て、其生產に要する勞働の量によつて定められる。從つて其より優等の土地は必ず餘剩を生ずる。此餘剩は其土地の所有者即ち地主之を獨占すると、而して彼は土地のみが此獨占的性質を有するものとして、資本には、其性質ないものと斷ずる。其結果土地の所有は社會公共の利益と背馳するもので、資本の所有は然らざるものなりと云ふことになる。土地の獨占が社會の利益に相反することは、社會主義者もリカルドと共に之を認める。否、今日の社會政策も或る制限の下に於ては、無論之を認める。故に此點に於ては、リカルドの說は、學問上の共通物と見ても大過はない。其特有な點は、茲に存するのでなく、資本の所有には其樣な獨占的性質は無いとする點に存

するのである。社會主義は全然之を否認し、社會政策も、又た或る制限の下に、此を否認する——小泉信三教授論文『無勞所得と土地社會主義』（改造所揭）を見よ——リカルドは『地代とは土地の本來固有にして不可壞なる力の使用に對して地主に支拂はるゝ地產物の一部である』と定義した。此定義の中に既に地主社會公敵觀が含まれて居るのである」——拙者『國民經濟講話』參照——即ち、土地には、資本の支出によつて其地力を維持する必要のないものがある、此れに對して支拂はれるものが地代である、其は何の勞働をも資本をも支出せず、單に其土地を所有すると云ふ廉に對して支拂はるゝもので、全く不當不正のものであると云ふことが、暗示されて居るのである。即ち地主は、他人勞働の結果を搾取つて其懷を肥す外何の能のないものであると說くのである。ダカラ、彼は云ふ『地代なるものは、決して新たに生ずる所得ではない、既存所得の一部を移したものに過ぎない』と。——拙文『アングーソンの地代論とリカルドの地代論』並に『地代は餘剩なりや』（經濟學研究所收）參考。後者は、シーガーに據る山崎博士の地代論修正を根本的に否認する爲めに、十數年前に起稿したものである——即ちマルクスの云ふ搾掠者、絞取り者の役目は地代が之を勉めて居るとするものであつて、其反對に利潤は決して此役目を爲すものでないとするのである。リカルドは、利潤は勞銀の高如何に拘らず、人口の增殖に伴つて下落する傾向を有するものであると斷定して居るのである。人口が增殖すれば農產物の價格は騰貴する、農產物の價格の騰貴は、利潤を減じて、地代を增すと云ふ、即ち地代は利潤と勞銀との共同の敵であると云ふのである。反對に、農產物の價下れば、利潤は高り、從つて資本は增殖し、其結果勞働に對する需要を增し、勞働者の地位を高めると云ふ。かくて勞働は、資本の地主に對する鬪爭に於て、當然資本の自然的味方たる可きものだとする。彼又謂らく、貨幣價値の騰貴は、凡ての商品の價を安くするが、穀物の價の下落は資本家が買ふ商品即ち勞働の價を安くするのみで」——其は勞働者に取つては、何の損もなくして、資本家に取つては、利益を增す——資本家

の資る商品即ち生產品の價を引下ぐるものではないと云ふ。勞働の價に就ては云ふ、勞働は他の商品と全く同じく一の商品であつて、其等と一樣に、自然價格を有するものである、勞働の自然價格とは、勞働者が自ら生計を支へ、子孫を生み育つるに要する費用即ち是れである。而して市場に於ける勞働の價即ち勞銀は——進步的社會に於ては長期に就て之を見れば——決して、此の自然價格以上に出づることなきものである、但し其生計に要する費用なるものは決して一定不動のものでなく、時と所とに從つて異るもので、主として國民の生活習慣によつて定まるものであると云ふ。從つて此最低限の何程であるかは豫定する能はざるものであつて、自然價格とは何を指して云ふかは、實は少しも說明せられて居ないのである。彼の勞銀論の目指す所は、勞銀其ものでなく、矢張り地代である、即ち地主は資本家に取つてのみならず、勞働者に取つて公敵であると云ふことを證明せんとするものである。彼は、勞働者の生活程度の高いのを善しとする、何となれば、勞働者の生活程度の高いことは、人口の不要なる增殖を妨ぐる作用を爲すからである。社會の進步に伴ひ、資本の增加は絕へず小となる、從つて勞銀は下落する、其極、資本も、勞銀も停止的狀態に達する、然るに農產物の價騰貴すれば、貨幣額に言ひ表はした勞銀は騰貴する、併し此の勞銀の騰貴は、農產物の騰貴には及ばない、從つて勞銀の實際額は減じ、勞働者の購買力は減ずる、貨幣勞銀の騰貴は、資本利潤を減ずる外はない、利潤は減ずる他方に勞銀の實際額は減ずる、其減じた丈けは地主の所得の增加となる、地主が肥れば肥るほど勞働者は貧くなり、勞働者が貧くなればなるほど、地主は肥へる、ダカラ、地主は勞働者の敵であると說くのである。

リカルドは勞銀高まれば、利潤は減少すると云ふ、然れば此の兩所得は、其利害を對抗的に有するものと云はねばならぬ筈であるが、彼は左樣は說かないで、其責任を地代の方へ押付けるのである。勞銀には自然價格があつて、其以上に昇ること能はざるものであると彼の說くのは、即ち罪を利潤より取つて、地代に嫁する手段であるのである。勞銀はイ

クヲ利潤を割いて之を高めようと思つても、其自然價格に制せられて、永くは其以上に騰る能はざるものであるから、折角利潤を割いても自然價格が高まる丈けしかは、勞銀を增すことは出來ぬものである、從つて勞銀と利潤とは、對抗的利害關係を有して居らぬ。之に反し、自然價格が高まれば勞銀は增し、從つて利潤は減ずるが、資本家の此損は決して勞働者の利益とはならぬ、何となれば、自然價格の騰貴とは、勞働者生計費の騰貴のことで、其は、主として農產物の價の騰貴を意味する、農產物價格の騰貴は、同一面積に對する地代を增す、即ち地主の懷を肥すに止る。資本家の利潤を割いたものは、些も勞働者の利益とならないで、悉く地主の利益に歸して仕舞ふ。而も其勞銀の騰貴よりも農產物價格の騰貴の割合の方が多いのが通例であるから、結局地主は資本家の利潤の一部を絞取ると共に、事實に於ては、勞働者の實際勞銀の一部をも絞り取ることになるのである。勞働者と對抗の利益を持つものは、決して資本家でなくして、實は地主である。勞働者と資本家とは、地主に對して、共通の利害關係を有する戰友である。資本家は骨を折つて、其資本を增殖する、其結果勞働に對する需要は殖へ、より多くの勞働者は、其生計の料を與へられることになる、然るに資本は殖へるほど、其利潤は減じて彌々貧くなる、其れは、何事をもせぬ徒手遊食の地主が一切の餘剩を獨占するからである。かくて地主獨り肥へて、資本家と勞働者とは、彌々益々窮境に陷ると。是れがリカルドの所得對抗理論の要旨である。此れ位露骨な階級理論はない、而してリカルド祖述の正統經濟學こそ實に、階級——資本階級——偏倚論の本城であり、典型であり、藍本であるのである。レュンの『プロレタリアの獨裁政治論』は、階級偏倚論の甚しいものだと云ふけれども、少くとも正統派經濟學は、之を咎むる資格を有して居らぬものである。我邦に於ける純リカルヂアンたりし田口卯吉先生が、最も熱心なる地主退治論者であつたのは、誠に當然の事である。リカルヂアンならざる人々が、僅かに修正などによつて、リカルドの地代論を支持しようとするのは、笑止の極みである。正統派經濟學に養ひ育

てられたブルヂオア實業家、ブルヂオア政治家は、マルクスやレーニンの階級偏頗を責める權利は毫も之を有せぬ、否彼等が、勞働階級偏頗論の爲めに今强襲せられつゝあるのは、自ら播きたる種子を刈入れつゝあるものなのである。而も其攻擊せらるゝ武器も、亦正統學派經濟學に於て、チヤント鍛へ上げられて居たとは、一種の『アイオニー』と云ふ可きである。

（十八）

階級所得としての勞銀と資本所得との對抗に就て、根本的考察を試みた第一人者は、人口論の唱出者たるトーマス・ロバート・マルサスである。彼が無政府主義の創說者たるゴドウヰンの『政治的正義』の書に刺激されて、其人口論を打建てたのは、隱約の中に、階級所得としての勞銀の眞相に觸れたからである。一切の社會問題、勞働問題は、必ず此の人口論なるものと沒交涉なり能はざるは、其一原因を玆に有して居る——拙著續經濟學研究『マルクス及リカルド研究』並に經濟學考證『人口論出版當時のマルサス反對論者殊に生存權論者』、河上博士諸論文就中『貧乏物語』、小泉信三敎授論文『人口法則と社會問題』(大觀八月號)參照——新カント派の驍將アルベルト・ランゲは其『勞働問題』の解說をマルサス人口法則の考究から出發せしめて居ることは、筆者が久しい以前に紹介した通りである。墺太利學者ヘルツカの『社會問題』も、現獨逸社會主義的經濟學者の第一人たるフランツ・オツペンハイマーも亦た人口論考察に立脚して居る。マルサスの人口論は絕望的勞働所得論を産み出さゞるを得ぬ、其說にして全部の眞理たる限りは、勞働所得階級の鬪爭は、風車に對して戰を挑むものと云はねばならぬのである。マルサスは其『經濟原論』に於て、勞銀は、勞働に對する需要、供給の關係によりて定まると說き、其供給とは人口の數を意味し、其需要とは、勞働者の生計を支ふ可き資本の現存額、並に增加す可き額なりと云ふ、資本とはマルサスに從へば、最も廣い意味に於ける勞働者の生計料の謂である。

斯く定義することによつて、マルサスは、今日迄の勞働理論を支配した二大學說の一たる「勞銀基金說」の端緒を開いたもので、後ジエームス・ミル、マカロック、シーニオア及ジョン・スチュアート・ミル出でて勞銀基金說なるものを大成して、絕望的勞銀論の本城を築き上げたのである。即ちジエームス・ミルは、勞銀が需要供給によつて定まると云ふのは、人口の數と資本の額とによつて定まるの謂なりとし、當時英國勞働階級の窮狀は、實に此理法の作用に外ならないとした、何故となれば、英國に於ては、貯蓄による資本額の增殖よりも、人口の增加の方遙かに大であつて、供給が需要を超越したからだと云ふ。但しミルは、資本の全體を以て勞働に對する需要なりとし、其一部に限らなかつたから未だ狹い意味にこの勞銀基金說を唱へたものと云ふことは出來ない、之を狹く限つて、勞働に對する需要となるものは、一國資本の全部でなく其一部──之を勞銀基金と云ふのである──であると唱へ出したのは、ウヰリアム・ナツソウ、シーニオアである。其說を更らに完成したのはジョン・スチュアート・ミルである、其說によれば、勞働階級所得は、勞働者の全數を以て一國の有する勞銀基金總額を除した商であつて、之れが平均勞銀率となる、勞働者は、如何に運動するも、如何に鬪爭するも此率を變ずることは出來ぬ、何となれば、其れは誰人の力をも超越する既定不動の事實であるからである但し一部の勞働者は其運動により其對雇主抗爭によつて、此平均率以上の勞銀を得ることは出來る、併し其れは必ず他方に平均率以下の勞銀を受けて甘んぜなければならぬ勞働者を生ずる、故に一國勞働者の全體から見れば、其れは得失を加ふることなきものである、故に平均率以上に勞銀を引上げんとする一切の努力は凡て無效であると。但し茲に稍々廣く行はれて居る──專門の學者間にすら──誤解を防いで置かなければならぬ、其は別事ではない、勞働基金說を唱ふる學者は、平均率以上に勞銀を引上げんとする一切の努力、殊に其目的を以てすら勞働團結、トレード・ユニオンを以て無用無效なるものとはしたけれども、決して一切の勞働運動、勞働團結を無用なりとしたものでないこと是れであ

る。其は何故であるかと云ふと、勞働に對する供給、需要の自然法則から平均率が定まると云ふことを認めることは、必ずしも當然に此平均率なるものは自然的必然的に何等の人爲なくして實現するものであると認めることを含んで居らぬからである。尤も當時の英國の資本家、雇主中には此く主張した人は尠からずあつた、彼等は勞働者に對して云ふ、汝等何事を爲さずとも、需要供給てふ經濟界の大法則によつて定まつて居る平均勞銀率は必ず常に實現されるものである、故に汝等の喧騷するは悉く是れ無益ではないと。然し乍ら、學者中には斯く主張した人は殆んど一人もなかつた、否、或學者の如きは、明かに、勞働者が拱手傍觀するときは、此の當然なる平均勞銀率は實現されぬ、故に勞働者は絶へず市場の形勢に注意を怠らず、需要供給の關係の變動によりて平均率が高まる可きにも拘らず雇主が其私欲の爲め其率を支拂ふを肯ぜざるときは之を公々然要求す可し、聞かれざるときは、抗爭に訴へざる可からず、とさへ主張したものもあるのである。リカルド門下の高足の弟子にして穩健にして篤學なる學者として知られて居る――而して何の獨創の見なく、唯忠實に先人の蹤を追ふのみと一般に認められて居つた――マカロックさへ一八二四年及一八二六年エヂンバラ評論に書を寄せて、勞働に對する需要の增進するとき、勞働者自ら進んで勞銀の引上げを請求することなければ、雇主は決して其勞銀を引上ぐることなかる可し、否、勞銀引上げの要求又は其引下げの拒否が成効するか否かが、勞働市場の需給關係に變動が起つたか否かを確知す可き唯一の檢石であるとさへ主張した。又た同じく餘り獨得的ならざるを以て日本にまで知られて居る盲人經濟學者のフォーセットも一八五九年及六〇年に於て、勞銀の引上げに對する勞働者の力強き要求のみが、市場の好況を呈するに際し、需要の增進により雇主の懷に歸する增收に對する勞働者の均霑を確保す可き唯一の手段なりと云つて居るのである。されば、勞銀基金說を以て一切の賃銀爭議を否認するものなりとする見解は甚しい誤謬たることは明かである。茲に特に此事を指摘したのは、勞銀基金說は、一の悲觀的階級所得論である

には相違ないけれども、ラサルレによりて大成せられた第二の悲觀的階級所得論とは、大いに其趣きを異にする所以を明かにする必要があるからである。リカルドは明かに資本階級の大使徒であつたし、自らも之を以て任じて居たのである。然るにマルサスもミル以下の勞銀基金論者の大多數も、少くとも自らは決して一階級の辯護者を以て任じて居たものでなく、唯だ唯物的、機械的自然法則崇拜の餘り、此くの如き悲觀的勞銀論者となつたのである。リカルドに於ては、其自然法則は階級使徒の最大の武器として使用せられた、マルサス以下に至つては、却つて自然法則てふ武器の忠實なる從僕であつたに過ぎない、之を使役し、利用するが如きことは、些も考へ及ばなかつた所である。然るにラサルレに至つては、更らにリカルドとは反對の意味に於て、リカルドの鍛へ上げた自然法則てふ武器を利用し、使役したのである。而してマルクスは此事業を他の側面より出立して大成したものである。

勞銀基金說は、マルサスの人口論と併立して初めて意味を成すのである。其が一の自然法則の確認であると云ふのは、自然法則たる人口法則の應用の一であるからである。勞働に對する需要は、一國の資本中勞銀の支拂に充てらる可き基金の額によつて定めらるゝもので、決して其以上にも、其以下にも在ることなきものである。之に對する供給は、一國の人口の數によつて定められるものである。而して勞銀の平均額は、此の需要と供給との對比によつて定められるもので、何物を以てしても此理法は之を左右すること能はざるものである。然るに一國の人口は、マルサスの人口法則によれば、絕へず、食料よりも（即ち人口に對する需要よりも）より速かに、より大なる力を以て增加せんとする傾向のあるものである。資本の增加從つて勞銀基金の增加が、此の人口の增加と步調を保つて進んで行くときは、平均勞銀率は引下げられることはない、若し又た資本の增殖の方が人口の增殖よりも速かなるときは、平均率は高まる、但し此場合資本家は其利己心の爲め要求を受けない限りは、勞銀を引上げることを自ら進んで爲すものではない、故にかゝる場合には、

勞働運動、勞働團結は有用有力で、其れによつて勞働者が當然受く可きより大なる勞銀を得せしむる作用を爲すものである、併し勞働團結の用は此場合のみに限る、卽ち勞働に對する需要が其の供給よりも增進する場合のみに勞働運動は成効するものである、故に勞働者は其他位を高め、其團結をして意義あらしめる爲めには、先以つて資本額の增殖の爲めに資本家と協力せねばならぬと。此れは一の勞資協調論たること、リカルドの其れの如くである。乍併マルサスの人口論は、文明先進國に於ては、食料の增加の容易ならず、人口增加の傾向——豫防的制限が甚だ有力有効ならざる限りは——遙かに之に勝ることを力說するものである。從つて勞働運動を可能ならしめ、トレード・ユニオンをして存在の意義あらしめ、勞働者の生活程度の向上を持來し得可き、勞働需要の增加は、他方其の供給のより迅なる增加によりて逆へず相殺せらるゝ强き傾向の存することを高調するのである、從つて勞働運動は唯消極的の意義を有するに止り、之れに大なる厚生的積極的意義を認めないのである、反對に消極的に人口に對する豫防制限の重要は、常に强く勞働者に向つて說かれねばならぬことゝなる、否今日に於ても、新マルサス主義、產兒制限論等は、社會政策的意義を有し勞働者生活向上の爲めに甚だ重要なるものとせらるゝのは、此種の思想が、勞銀基金說癈れて久しき後の今日に至るまで未だ深く社會問題に心を潜むる人々を暗々裡に支配して居ることを示めすものと云はざるを得ぬのである。要言すれば、マルサスの人口論と結付いて現はるゝ勞働所得論は、必ずしも傾向的ならず、必ずしも爲めにする所あるものではないけれども、自然法則の大威力を以て我々を壓迫する所の一の大悲觀論であつて、之れが社會主義の勞銀說の爲めに有力なる地盤を築きあげたものであること、此れが階級鬪爭永續觀に有力なる支柱を與ふるものなることは、些の疑を容るゝ能はざる所である。

リカルドは決して勞銀基金論者ではなかつた、併し彼の說の中には、多少之れに接觸する點もある。卽ち彼は、勞銀は勞銀支拂用として一國に存在する資本の一部によつて左右せらるゝものであるとは屢々言つて居る。併し勞銀基金論では此の基金は一定の時期に於ては、其額は確定不動のものと見たに反し、リカルドは、其額を流動的のものと認めて居る、從つて彼は、此の一定の額を以て勞銀決定の理法を說く可しとせなかつた。此れ兩者間の重大なる差異である。リカルドは、前にも示めした通り、勞銀は勞働の價であると云ふ、而して彼によれば、勞銀に實際の市場勞銀と、自然勞銀とを區別せねばならぬ。彼は主として後者に就て論じたのである、曰く、自然勞銀は、勞働者の生計及生殖を支持す可き費用によつて定ると。而して其れは、勞銀基金說に於ける如く、マルサスの人口法則と密接の關係を有するものであつて、勞銀騰貴すれば、結婚の數增加し、出生兒の數は增す、又勞銀の騰貴は勞働者の生活程度を引上ぐるに依つて、其死亡率は減ずる、其結果、勞働者の數が殖へる、數の殖へるのは卽ち供給の增すことであつて、若し需要が之に應じて增すれば宜しいが、左樣でない場合には、勞銀は低落せざるを得ない。トコロが、勞銀余り低落すると、勞働者の結婚數は減じ、出生率は降り、反對に死亡率は昇つて、勞働者の數は減ずる、卽ち勞働の供給が減る、從つて再び勞銀は騰貴せざるを得ぬ。かくて實際勞銀は、常に自然勞銀を中心として其上下に動くもので、決して遠く又た永く此中心を離れるものではない。但しリカルドの謂ふ自然勞銀は決して後にラサルレ等の云ふ如き生理的の最低限の謂ではないことは、前に言つた通りで、彼が特に、歷史的に成立つて居る生活程度云々と云ふに徵して明かである。

勞銀基金說は、コンチ及ソーントンのジョン・スチュアート・ミル及フーセットに對する攻擊によつて崩壞した。英國經濟學中興の父にして勞銀基金說の殿將たるジョン・スチュアート・ミルは、フートナイトレーリヴーに左の乞降狀を公けにして、其說を一擲した。

The doctrine hitherto taught by all or most economists (including myself), which denied it to be possible that trade combinations can raise wages, or which limited their operation in that respect to the somewhat earlier attainment of a rise which the competition of the market would have produced without them,——this doctrine is deprived of its scientific foundation, and must be thrown aside.

『今日まで凡ての若くは大多數の經濟學者（余も其中に在り）が教へたる學說、即ち勞働者の團結が勞銀を引上ぐる可能を拒否し、乃至は其作用は高々市場の競爭が團結なくとも持來たしたる可き騰貴（需要關係の變動による平均率の騰貴を指して云ふ）を稍早く將來せしむるに止ると爲す所の學說は、今や其學問上の根據を失ひ、之を放擲せざる可からざるものである』

勞銀基金說の崩壞は、中立的悲觀の勞働所得觀を葬り去つた、而して此れに代つて起つて來たものは、二個の明かに意識せられた階級本位の悲觀的否鬪爭的勞銀論である。其第一はラサルレの勞働鐵則で、第二は即ちマルクスの勞働價値論である。ラサルレは、其根本着想をリカルドと同じふするが、更らに之を極度まで押詰めて勞銀鐵則を主張したのである。曰く、平均勞銀は常に必ず一國に於て勞働者の生活及生殖に習慣上必要なる費用の最低限度に在ると。而して獨逸社會民主黨は一八九一年エルフルト綱領の採用に至るまでは、ラサルレの勞銀鐵則論を遵奉し、之を以て其階級鬪爭運動の旗印とした。エルフルト會議に於て急轉直下、社會民主黨はラサルレ說を捨てゝ、前に略示したマルクス說を全部受け入るゝに至つたのである。——小泉信三教授著『經濟學說と社會問題』を見よ——此れは獨り學說としてマルクス說がラサルレ說に勝ると認められた爲めのみではない。學說として、此說の淺薄なるものなることは、マルクスの手痛き批評を待つまでもなく、社會民主々義者中の心あるものは、既に前から知つて居た所である。英國に於ては勿論のこと、

獨逸に於ても、勞働階級の地位が著しく向上して、決して勞銀の鐵則などの支配を受けるものでないこと、諸人も之を否定することが出來なくなり、左樣に實際の事實によつて裏切られた陳套淺薄なる學說を旗印とすることは、勞働運動に祟をこそ爲せ、何の益なきことを、獨逸の勞働者殊に其先達が悟了するに至つたからである。實際の事實は勞銀は生活最低限よりも遙かに上に在り、又上に昇せ得ることを疑もなく示した。而してマルクスの勞銀說は此變化によつて打破られることなき金城鐵壁として社會民主黨の綱領とせられたのである。而して彼等は今日に至るも猶依然として此金城鐵壁によつて、其階級鬪爭運動を續行しつゝあるのである。

（二十）

勞銀基金說に於ては、勞働者は其敵として到底抗爭を企て及び難き一大威力を指示された。即ち自然法則が、殊に人口法則が、其抗爭の對手たることを敎へられた。彼等は其の運命を開拓するには、資本家と協働して、資本の增殖の爲めに貢獻するによりてのみ、僅かに此自然法則の作用を免れ得るに過ぎざることを敎へられた。唯資本家の利己心は、自然法則の免れ得るに至る場合に於ても、明示せられた要求なくしては、資本增殖より來る利益を壟斷するものであり、從つて其壟斷を妨ぐる爲めには、對抗若くは抗爭が有効なることを示されて僅かに慰めとするに過ぎなかつた。但し此く敎へられた事は、やがて、當然の對敵として資本所得を考察するに至る可き素地を與へられたものたることは言ふまでもない。勞銀の鐵則に於ては其の企て及び難き大威力たる自然法則なるものは、勞銀基金說の敎ゆる所よりも更らに慘酷なるものなることを敎へられて、悲觀は極まつて絕望の淵に沈まさるを得さるに至つた。社會民主運動が其當初に於て、幾多の壓迫に堪へ忍び、幾多の辛酸を甞め盡くして生みの苦しみを經驗せねばならなかつた時期に於ては、此の絕望的勞銀論は僅かに有力の役目を演じたものであつて、エルフルト會議後の社會民主黨と雖も決して其効を忘る

ゝものではあるまい。而して此く絕望の極に彼等を追ひ込んだ自然法則論は、窮まつて而して通じ、茲に新らしき敵の存することを見出さしめた。其は即ち資本階級である。自然法則が斯くも慘酷な壓力を加ふるのは、資本制生産組織が支配するからである、其支配する限りは、勞働者の抗爭は徹頭徹尾絕望的であつて、勞銀基金論の敎ゆる抗爭の唯一可能性――資本の增殖、市場の好況に際して起る平均率の引上げを强要し得るてふ――すらも與へられない、故に勞働抗爭は全く之を斷念せねばならぬのみならず、其自助による生活の向上改善の可能すらも存せぬ。即ち勞銀鐵則を認むる者は、消費組合運動――ラサルレの生産組合論は、眞面目に受取る價値のない一の方便論であつた――をさへも否認するのである。何となれば、消費組合によつて、勞働者の生計費を節約し得れば、勞銀は自然法則によつて又た其れ丈け減少する、ダカラ、其れは結局虻蜂取らず、骨折損の草臥れ儲けに過ぎない、左樣な無駄な事を爲す可きではないと主張するのは、蓋し當然である。故に勞働者が此の慘酷なる運命に屈服し、手を拱いて無爲に任せれば即ち已む、然らずして一歩を向上の路に着けようと思ふならば、其大前提として、先づ資本制度の廢滅を圖る外はないと悟るに至るのである。社會民主運動は斯くして起つたのである。然るが故に社會民主運動は、嘗てリカルドが土地所得征伐を其根本義とした意識せる階級所得論を以て起つた如く、資本所得征伐を其旗印、意識した階級闘爭運動として起つたのである。リカルドが一度始めた事業は、其局面は異るが、茲に至つて、其當然の歸趨を見出したと云ふ可きである。

社會民主黨は階級闘爭黨である。而して此れが其最根本の特色であつて、他の一切の事は、其の手段たるのである。唯物史觀も餘剩價値論も皆手段たるに過ぎない。階級闘爭運動としての社會民主々義をして有効、有力ならしむと云ふことが、手段採用の最高――若くは無二の――標準である、手段に囚れて、階級闘爭黨たる本領を傷くることは、彼等の斷じて爲さゞる所である。エルフルト會議に於て、其の初着たる勞銀鐵則を捨てゝ、大人衣たるマルクス說を採つたの

も學說——初から問題とはならない位の淺薄なものであつた所の——檢討から起つたとでなく、階級鬪爭過程としての其本領をより善く維持する手段としての彼此交換が行はれたのである。されば、唯物史觀破るゝも、餘剩價値論破るゝも社會民主々義は崩壞するものではない。之に反し階級對抗所得說に基く階級鬪爭觀破るゝときは、社會民主々義は其存在の理由を失ふものである。ベルンシュタインの修正說が理論上遙かに勝れるものなりと認めらるゝにも拘らず、異端視せらるゝは、其說を取る結果は、少くとも從來の階級鬪爭觀は、著しく弱められ、著しく緩和せらるゝからである。

共產社會の實現、階級の眞の廢止、人類の解放と云ふが如き事は、社會民主々義獨得のものでも何でもない、階級鬪爭てふ手段によること、之れによりて勞働運動と社會主義とを迎合するてふことと其ことが、社會民主々義、即ち今日一般に云ふ社會主義の本體なのである。故に筆者は、久しい以前から、社會主義は手段であつて目的ではない、其目的なるものは、社會主義特有の目的でも何んでもない、他の種々の學說、主義、政策、運動と共通に持つものに外ならない、故に之を說くことは少しも社會主義ではない、唯其れに到達す可き手段として、階級鬪爭——資本所得と雇傭所得との永久的不協調を前提とする——を是認し、主張すること、是れが社會主義なりと主張して居るのである。

エルフルト綱領を採用した社會民主黨の所得論は全くマルクスの其れである。マルクスの所得對立論は、勞銀基金說や勞銀鐵則論やとは、甚だ趣きを異にする深刻な理論である。乍然其要旨を論じ詰むれば、生產要具の私有と其換價行程の社會的性質との矛盾を力說するものである。簡單に云へば、勞働者は其勞働力を商品として賣らざれば勞働する能はず、從つて其受くる所得は、換價行程に關係なく、其生產費を中心として定まる勞働力の代價であるのに、資本所得は勞働これを生じて而も之を受くる能はざる餘剩價値であると云ふこと是れである。而して此くの如き矛盾狀態が持續せらるゝのは、一に資本增殖の必要と云ふ事に在つて、勞働者は資本增殖の爲めにのみ。又た其れが必要とする限り

に於てのみ、勞働し、生活することを許さるゝに過ぎないと爲すのである。說いて茲に至つて、マルクスの對抗所得論は其至妙の點に達したものである。アダム・スミス以來の一切の所得理論を、一條の赤糸の如く貫通するものは、資本增殖の理法是れである。勞働者生活程度の向上、改善、其の人格的發展の要求と、資本增殖の要求との間に存する、踰越し難き大溝渠たる本質上の根本的對抗性是れである――拙著『國民經濟講話』參考――。生產要具私有の廢止、共產主義の實現、降つては、前段に紹介した獨逸現在の社會化なるものも、其實行の前には、資本增殖の保障、其最有力なる一手段としての生產能率の維持乃至增進てふ、一大暗礁が儼然として横はつて居るのである。勞農露國の前面にアルプとして立塞がつて居るものも、亦實に此巨人である。空想的ならざる社會改造論者の心膽を寒からしめつゝあるも、亦た此れである。

階級としての資本階級の廢止は決して問題の中核を爲すものでない。元より感情上資本家階級に對する憎惡心は強く働くことは之を認めざるを得ない。乍去ニコルソンが其近業『マルキシズムの再生』に於て說くように、此れのみが、若くは此れが最大の問題ではないのである。對抗するものが、資本家と勞働者であると見るのは、淺薄皮相なる見解である。問題はモット深刻なのである。マルクスは十分に之を認めたからこそ『資本蓄積及集中の學說』を建てたのである。資本增殖の要求は、決して自然法則ではない、一の社會法則、文化法則である。乍併今日現代の人類に取りては、其れが殆んど最大の案件として與へられて居るのである。故にマルクスは之を十分に認承し、唯之を發展史的に見て、其蓄積及集中化の極は、終に其れ自らの崩壞――其れは遙か將來の事であつても、又は極近き將來の事であつても、道理に二はない――を招くと主張して居るのである、レニンの所謂『プロレタリアの獨裁』とは、其崩壞を目前に點出せんとするものに外ならない。而して又た、今日の階級鬪爭が雇傭所得と資本所得とを當事者とする所以は、勞働が雇傭

勞働であつて、其れは、資本增殖の要求が命ずる儘に支配せらるゝが爲めであることは、學問的認識の上に立つ一切の社會政策も亦た均しく之を認承する所であり、否、學問上認承せねばならぬ所であるのである。此認承の上に立たざる社會政策は空である、虚である、而して僞である。（紋）

附記、本年七月號の法學協會雜誌に近く歐羅巴を實地見分して歸朝された上杉愼吉博士の『新獨逸共和國憲法に就て』なる甚だ有益なる講演が載せてあるが、其の獨逸の社會化に關する部分に於ては、博士は甚だ誤つた事を言つて居られるように思ふ。即ち右誌一七三頁に『ゾチアリジールング即ち一切の經濟事業を出來る丈け社會化すると云ふ法律を頻に發布したのであります』と云ひ、又た二〇七頁に『三月二十三日にゾチアリジールングスゲゼッツと云ふものが出て居りますが、是は極めて廣い意味に於て種々の事業を國有とする社會主義的にすると云ふ規定であります』と云ひ又た同頁に『最後には經濟會議の規定でありますが、勞働者が勞働會議と云ふものを作り、夫れから企業者と合同して經濟會議と云ふものを組織するのです』とあるのは、本拙文の（七）及（八）の二項と比較して、讀者は、博士の紹介の甚だ事實に相違するものなることを容易に發見せらるるであらう。但し筆者は日本にありて唯だ書物、雜誌、新聞等のみを材料とするものであり、上杉博士は身親しく其地に臨んで仔細に見聞視察せられたのであるから、或は誤は筆者の方にあるかも知れない。果して然らば博士を誤なりとする拙言は之を取消す可し、謹で博士の叱正を待つ。

無産階級運動の旗手

＝ユージン・ヴィクトル・デブス＝

山川均

『私は勞働者の指導者ではない。私は諸君が、私にもせよ其他の何人にもせよ、ついて行くことを欲しない。若し諸君にして、この資本制度の荒野から導き出して呉れるモーゼを待ち望むなら、諸君は何時までも、一つ所に止どまるであらう。私はよし出來るにしても、諸君をこの約束の國に導びくことはせぬ。何故ならば、若し私に、諸君を導びき入れることが出來る位ひなら、誰れか他の人は、又た諸君を導びき出す筈だからである。今まで資本家が諸君の頭と手とを利用してゐるように、現在の境遇から脱する爲に、諸君は自分の手と頭とを使はなければならぬ。』

（ユージン・デブス）

一、無産階級運動の旗手

『私は昨年、（一八九四）ユージン・デブスがシカゴから紐育に來て、クーパー・ユニオンで演說したのを聽いた。私は三十四年前に、同じ所で開かれた、今一つの集會の時に腰を掛けた席の間近かに腰を掛けたが、此前の時にも、矢張りシカゴから紐育に來た一辯士が演說した。一八九四年の八月にこの演壇に立つた西國の辯士は、私に、一八六〇年の二月に此處に立つた今一人の西國の辯士を想ひ浮ばせた。二人とも脊が高く痩せ型で、顏色はどちらも黑い方だつた。……二人とも立派なそして强い容貌で、どちらの顏の表情にも、引締つた力强い或ものがあつた。そして二人とも其態度に威儼があり、深い印象を與へる人物であつた。

『私は一八六〇年の辯士の、稍々特異の銳い聲を思ひ出した。そして私は一八九四年に、この聲に似た聲を聞いた。……私が一八六〇年二月にクーパア・ユニオンで聽いた演說者は、アブラハム・リンコルンであつて、昨年その同じ演壇から演說したの

は、ユーヂン・デブスであつた。……リンコルンは人類の爲に語つた。デブスもそうだつた。リンコルンは權利と進歩の爲に語つた。デブスもそうだつた。リンコルンは勞働者の自由の爲に語つた。デブスもそうだつた。リンコルンは奴隷制度の敵だつた。そしてデブスも奴隷制度の敵である。……』（ジョン・スヰントン）

『アメリカの如何なる人も、ユーヂン・デブス以上に憎惡された者もなく、ユーヂン・デブスほどに愛せられた者も多くない。……彼れの思想は、上流階級の人々からは、流血と無政府と暴動の合言葉と見做され、幾百萬の民衆によつては、人類をより善き生活とより高き文化に導く、松明の光と思はれて居る。彼れの哲學は暫らく措いても、彼が米國の歴史の上に、最大の雄辯家の一人たる地位を贏ち得たといふ一事は確かである。私の見るところでは、今日アメリカの演壇に、彼に匹敵する者は一人も無い。そして彼れは全く新しい、異つた種類の雄辯家である……。』（マクス・イーストマン）

『アメリカの如何なる人もユーヂン・デブス以上に、社會主義運動に貴い奉仕をしたものもなく、ユーヂン・デブスほどに、革命の燈明を輝やかす爲に、惜みなく力を獻げたものもない。そして如何なる人も、デブス以上に豐かに且つ暖かく愛せられたものはない。僚友の愛こそ、彼に與へられた不斷の報酬にして感激であつた。……彼は運命によつて此使命に定められた者のように、民衆の旗手となつた。そして到る所戰ひの白熱した場所には、彼は昂然としてまた堂々と此旗を把持してゐた。そして彼が社會主義の鬨聲を擧げると、それは海から海まで、雪を頂いた山嶺から深谷に至るまで、全地に反響した……』（ジョン・スパルゴ）

『私にはユーヂン・デブスの名は勞働階級に對する、否な人類に對する、毅然として搖がぬ絶對の忠信を意味して居る。苟も勞働階級の利害が危險に瀕したところには、デブスは一切を擲つてその一身を沈める。彼は何物をも恐れない。彼は其輝いた理想を擁護する爲には、何物をも恐れない。如何なる威嚇も彼れを沮止することは出來ぬ。財閥の膨くれた財布の底をはたいても、勞働階級に對する忠信から、一寸たりとも彼れを引離すに足るだけの金は無い。彼に優さる大なる愛をもつてゐた人間はない。チーン・デブスに一切の榮光あれ……。』（ヂョージ・アラン）

二、聯邦囚人第九六五三號

米國勞働階級運動の旗手、ユーヂン・ヴイクトル・デブスは、今は聯邦囚第九六五三號となつて、ヂョルヂヤ州アトランタの

監獄に繋がれてゐる。デブスは一九一八年六月十六日、カントン市に開かれたオハイヨ州社會黨大會に於ける演説の爲めに、戰時間諜法の違犯として十年の懲役に處せられた。

『六呎ゆたかなすらりとして少し前屈みなデブスは、青い獄衣を着、滑らかな無髯の顔一杯に笑みを湛へ、眼鏡ごしの灰色がかつた藍色の兩眼には、濕ひと輝きを滿たして、今ま兩手でしつかりと私の肩をつかまへて立つてゐる……』

デブスをアトランタ監獄に訪ふたカルスナアは斯う書いて居る——

『典獄のズェルブストは驚きと悲みと同情とのごつちやになつたような顔つきをして、數呎離れてデスクの傍に立つてゐた。デブスは面會室を出て、大理石の階段を降りかけると、振り向いて叮嚀に典獄にお辭儀をした。……陰氣な回廊に、鐵の扉の響が殘つてゐる間、典獄ズェルブストと私とは、氣拔けがしたように顔を見合せてゐた。』

カルスナアは出しぬけに斯う聞いた——『政府は斯んな人達を入れる爲めに、この監獄を建てたのですか？』。ズェルブストは此問には答へなかつたが、何人もズェルブストに代つて、カルスナアに答へることができる——『亞米利加帝國』の監獄はまさにデブスの如き人を入れる爲めに建てられた。少くとも戰時間諜法はユーヂン・デブスの如き人を、處刑する爲めに作られたものだつた。

一九一七年四月六日、米國は獨逸に對して宣戰を布告したが、六月十五日には有名な間諜法を制定した。この法律は戰爭の遂行を妨げる、直接間接の一切の言論と行動を罰する法律であつて、翌年五月十六日の修正によつて、一層適用の範圍は擴められ、一層峻嚴なものとなつたので、苟も戰爭に反對する勞働階級と社會主義者の一言一行は、事實上悉く、二十年以下の懲役によつて威嚇されて居ることゝなつた。

資本主義的帝國主義の擴ろげたこの網には、幾多の獲物が掛つたが、彼のI・W・W・の幹部百餘名が一網に打上げられたのもこれだつた。デブスがカントンの社會黨大會の演壇に立つ少し前、ローズ・パストア・ストークス女史は、現在の政府は、利潤收得者の政府であると云つたゝめに、間諜法によつて十年の懲役に處せられた。デブスは大會の演説の一節に、女史の處刑に言及して斯う云つて居る。

『……彼女は何を云つたのか？。彼女は、政府は利潤收得者とその使用人との、二人の主人に事へることは出來ぬと云つたのである。……ローズ・パストア・ストークスは一語と雖も、云ふ可き權利のないことを云ひはしなかつた。たゞ彼女の言

葉は民衆の眼を開いた。斯かる言葉は抑壓しなければならぬ。斯かる叫びは沈默させねばならぬ。……私は云はうとする。若しローズ・パストア・ストークスに罪があるならば、私にも罪がある。若し彼女が十年間集治監に送らる可きものならば私も亦た送らるべきである……』

デブスは其言葉の通りに、十年の懲役に處せられた。『亞米利加帝國』の法律はデブスの如き人間を罰する爲めに、その監獄はデブスの如き人間を入れる爲に、作られたものだつた。

けれども『彼等がデブスを投獄した時に、彼等はデブスの精神を釋放した。彼等がユーヂン・デブスの肉體を幽閉するウツドストックの獄門を鎖ざした時、彼等はデブスを自由の人とした。靜かな監房のうちで、彼の眼は同志の世界と、之に達すべき途とを見た』(『スパルゴ』)。

アトランタの聯邦監獄も、デブスの革命的精神を繋ぐことは出來なかつた。

『私に取つては、この石の扉と鐵の門とは存在せぬ。私の心はこの制度を超越して、全國全世界の忠信な同志の心と合して居る。私は從容として恐れるものがない。そして同志の運動が、間もなく勝利を得ることを確信する……』

『私は火の如き革命主義者として、昂然と頭を揚げ、征服すべからざる精神をもつて、監獄の門を入いるのだ』。

『監獄は私に相應しい場所である。監獄は人々が、殘忍な制度の爲めに蒙らされた惡事の爲に苦しめられる場所である。私は生涯を通じてこの事と、この社會狀態とについて語つて來た。そして今ま運命は私に、曾て私の語つたことを實驗する機會を與へたのである……』。

デブスの處刑以來、米國の勞働者と社會主義者とは、デブス釋放の運動を續けて居るが、デブスは戰時中の全ての政治犯人に對して大赦の行はれぬ限りは、自分一人に對する釋放は斷じて受けぬと云つて居る。曾て檢事總長パルマーは、若しデブスが悔悟の意を表して釋放を求めるなら、政府は特赦の意あることを仄めかしたことがある。デブスはこの新聞記事の話を聞いて斯う云つた。

『悔悟!人間らしく行動したことの悔悟!檢事總長にせよ地上の何者の前にもせよ、一つの主義を抱いたことを悔悟する爲に、麻布を着て灰の中に坐はる前に、私は喜んで絞首臺に上ぼるだらう。……私は永久に、私の抱懐した唯だ一つの主義をも悔悟せぬ。これ等の主義は、私の爲には自由よりも尊く、生命よりも尊い。……私は花崗岩の如く堅固である!』。

三、組合運動のオーガナイザア

ユージン・ヴィクトル・デブスは一八五五年、インディアナ州のテル・ホートに生まれた。父はジャン・ダニエル・デブス、母はマアゲリット・ベトリッチ・デブス、二人とも佛蘭西アルサス州の生まれで、一八四八年の頃に相次いで米國に移住した。父は佛蘭西の歷史や文學に關する藏書を一わたり持つてゐたので、ユージンは幼少の頃から、ユーゴーの作物を愛讀し、『レ・ミゼラブル』のジャン・ヴル・ジャンから深い印象を受けたと云はれて居る。

母は一九〇六年に死んだ。翌年、父も共跡を追ふた。

『父と私とは氣の合つた友達であつた。日曜の晩を、父と話して過ごすことができぬと、折角の日曜も日曜のようでない。旅行中でも、他かの日は何ともないが、日曜日の晩になると、屹度私の心の糸を、何かしら強く引くような氣がするのが常である・・・・

『私の生涯に於ける最も有力な影響は、私の母であつた。私に何か善いところがあれば、それは皆な彼女の賜ものである。私の妻と母さへ、私の正しいことを信じて呉れる限りは、全世界の賞讃も非難も、私は全然氣にとめぬ・・・・』。

デブスは十人兄弟で、そのうち四人は夭折した。六人のうち、男兄弟はユージンとセオドルの二人きりだつた。セオドルは殆んどその生涯をデブスの爲に捧げ、デブスの有ゆる活動の蔭には、必ずセオドルが働いてゐる。デブスは一八八五年の六月にカザリン・メッツェルと結婚した。『デブス夫人の如く、夫の理想と事業の犧牲となつた婦人は稀れである。勞働運動と社會主義運動が、全國的遊說その他の爲にデブスを必要とする時には、彼女は何時でも、デブスに對しては自分よりも全世界の方が多くの要求權をもつといふ感情から、喜んで一家の不便を忍んだ。多年の間、彼女はデブスに代つて澤山な通信を書き、デブスの新聞切拔を整理し、書物や新聞や雜誌の記事を整頓して、何時でも演說や著述の間に合ふようにした』。

デブスの家は貧しかつたので、十四の歲(一八七〇)に學校を廢めて工場に入つたが、間もなく機關車の火夫になつた。しかし母親がひどくこの職業の危險を心配するので、十八歲(一八七四)の暮れに火夫をよして、テル・ホートの雜貨商、ハルマン・コックス商會の書記に傭はれ、四年間の勤續したが一八七九年の九月、市の書記に選擧された。

デブスが勞働運動に踏みこんだ第一步は、一八七五年二月二十七日の夜、テル・ホートに機關車火夫同胞會の支部が組織された時だつた。その後かれはブレーキメン同胞會を組織し、轉轍夫相互扶助會、鐵道カアメン同胞會、鐵道電信從業者組合、そ

の他の組合の組織を助けたが、デブスが勞働運動の有力な指導者として初めてその才幹を認められたのは、一八七八年バファローに開かれた機關車火夫同胞會の大會であつた。この大會の任命による。彼れは其機關紙の編輯を助けることゝなり、更に一八八〇年の大會は彼を組合の幹事長に擧げ、機關紙の經營及び編輯を兼ねしめた。

デブスは一八九三年二月まで、機關車火夫同胞會の幹事長を勤めてゐた。

『私はいつも旅仕度をして居つた。そして四方八方に飛び廻つた。雨や雪や霙の降る眞夜中、時としては夜明けまで鐵道構內を歩るいたり、時には「煽動者」といふので船室から投り出されたり、又或時は管轄區を乘り拔けようとして、列車――それも客車のこともあるが、大抵は貨車――から引卸ろされた。至てこんな事は、偶々の出來事ではなくて、ちやんとプログラムに這入つてゐた。そして益々征服慾を盛んにした。

『或る冬の夜、ニユー・ヨーク州のエルミラで、車掌は親切にも私を雪の中に突き墜した。堤の上によぢ登ると巡査に捉まつた。しかし巡査は私の物語りを聞いて、其場で友人になつた。

『私は機關車で山や平原を乘り通し、車掌室や……品物の上で眠つた。そして眞黒になつた火夫が、彼等の手桶から食べさせて吳れた。彼等は今も、私の心にくつゝいて居る。そして一生涯私の心から離れぬのであらう。

『……私は火夫ばかりでなく、ブレーキメン、轉轍夫、電信技手、貨車人夫、すべてを團結させる仕事に熱中した。今や私は組織者（オーガナイザア）として知られて來たので、到る所から招かれた。私が組織の手傳ひをしなかつた職業は稀れである。殊にストライキに一度も携はらなかつた職業は稀れである』。

斯くてデブスが幹事長になつた當時は、組合は僅かに六十支部を有し、六千弗の負債を負ふてゐたが、間もなく二百二十六支部を加へ、一切の負債を償却した。一八九二年のシンシナチの大會で彼は辭職を申出たが、大會は滿場一致を以て彼れを幹事長に再選した。けれども此時、組合運動に對するデブスの思想は、もはや機關車火夫同胞會の如き、狹隘な職別組合主義に滿足しなかつた。彼は同一産業に屬する全ての勞働者を包容する、産業的組合の必要を力說し、之が組織に全力を盡すべき希望を述べて就任を固辭したので、大會はデブスの功勞を謝し、二千弗の慰勞金の贈與を決議したが、彼は之をも辭退した。

一八九三年のデブスは、生涯の一轉機に立つてゐた。二年後

に現はれた彼の思想上の革命は、この時既かに準備せられてゐた。當年のデブスは、舊式の職業的組合主義から、革命的勞働組合主義への過渡期に立つてゐた。

四、最初の産業的勞働組合

一八九三年六月、デブスは少數の同志に助けられて、シカゴに米國鐵道組合を組織したが、これぞ米國に於ける、最初の産業的勞働組合であつた。

デブスは機關車火夫同胞會の幹事長として、就任當時は年額四千弗の俸給を貰つてゐたが、米國鐵道組合では、月給七十五弗を取つた。それも最後の二年間は、組合が悲境に陷入つたので、全然無給で働いた上、組合の解散後は、法律上の責任がないにも拘らず、デブスは著作や講演の收入から組合の負債を償却して居つた。

當時米國の財界は、過度の公債發行の結果、恐慌の渦中にあつたもので、多くの勞働者は失業し、辛じて職業を保つて居るのも、遙かに標準生活費以下の賃銀を受けてゐた。是より以前には、經濟界が不況に襲はれるごとに組合は崩解し、勞働運動は一時閉息するのが常であつたが、一八九三年の恐慌に至つて、組合は初めて驚く可き抵抗力を現はした。翌九四年には勞働爭議は從前の増加を示し、之に關與した勞働者は七十五萬人に達したが、いづれも防禦的の性質を帶びてゐた。當時大北鐵道の賃銀率は、遙かに一般鐵道從業者の賃銀よりも低くかつたので、米國鐵道組合は四月十六日、全組合員に回章を發してこの事實を知らしめた。之に對して鐵道側では、『不穩分子』の馘首を企てゝ居ることが分つたので、幹部は機先を制する爲め、急遽罷工命令を下だすと同時に、全國の勞働者の援助に訴へた。

『吾等は到る所、諸君の財政上精神上の援助を必要とする。この罷工は、世界未曾有の大罷工である。……吾々は果して、吾々を奴隷に、否々飢餓に繋ぐ爲に作られた鎖を、よく斷ち切り得ざるかを見よ』

飛檄はこの一句で結ばれてゐた。罷工は十八日間繼續したのち、組合側は完全な勝利を得た。デブスは五月三日、四千の知己と隣人の歡呼に迎へられてテル・ホートに歸つて來た。

『……大北鐵道の爭議は、鐵道爭議の史上に比類なきものである。罷工の瞬間から、勞働者は團結して居つた。機關手も、火夫も、ブレーキメンも、車掌も、轉轍手も、トラックメンと貨物人夫に至るまで、彼等は足並みを揃へて、一人の如くに蹶起した……』

デブスはテル・ホートの公園に於ける、當夜の演説のうちに斯う云つた。

「……この爭議に於ける著るしい特徴の一つ、その最も著るしい特徴は、十八日間の罷工を通じて持續した好感情である。私はこの十八日間を通じて、大北鐵道の一端から他の一端に至るまで、たゞの一滴の血をも流さなかつたことを。今夕諸君に語り得ることを喜ぶものである。アメリカ人の公平の精神は、この爭議に關與した勇敢な勞働者の心を支配して居つた。そして賃銀に對する彼等の戰ひ、は少しの騷擾も亂暴もなしに行はれたのである。大北鐵道の賃銀低減には原因がある。之に抵抗する爲には。從業者は眞正面から、鞏固に組織された資本に當面した。しかも十八日間、郵便列車以外には、たゞの一磅の貨物も動かされず、たゞの一つの車輪も廻はらなかつた。この團結と男らしい勇氣とを示したゝめに、彼等はよく其要求の、九割七分五厘までを貫徹したのである……。」

デブスは同じ演說のうちに、斯う云つた。しかし大北鐵道の罷工から、今や一世紀の四分の一を經過した。アメリカの資本主義は成熟した。そして勞働者は惜みなく血を流してすらも、其要求の二分五厘をすらも貫徹し得られぬ時が來た！資本の王國の主人は、其支配を擁護する爲には、勞働階級の血を惜まぬ時が來た！

五、プルマン大罷工

大北鐵道從業者が示した團結の力と勝利とは、電流の如く勞働階級に傳はつた。七年前のヘイマアケットの流血と虐刑の慘事以來、なだれてゐた勞働者は、俄かに新しい希望に振るひ起つた。そして二ケ月の後一八九四年六月には、彼のカロール・ライトが當代に於ける最大にして最も高價な罷工と云つた、有名なプルマンの大罷工が勃發した。

是より先き、シカゴを中心とする二十四鐵道會社の間には、一八八六年以來、一般傭主協會が組織せられて居り、一八九三年の不景氣この方、是等の鐵道は聯合して賃銀の値下げを行つた。この團結した資本に對しては、部分的の抵抗は最早や無益であつた。この形勢は鐵道從業者が、產業的に團結するの機運を促進した。そこでプルマン會社の勞働者も、一八九四年三月、米國鐵道組合に加入したが、五月一日には、前年來低減せられた賃銀復舊の要求を提出し、六月には罷工を決行した。

米國鐵道組合は六月の九日から二十六日まで、シカゴで屋外大會を開いたが、大會には十五萬の組合員を包容する四百六十五組合の代表者が參列した。この大會に於いて、プルマン事件は公開の討議に附せられた。そして二十一日の會合は滿場一致の投票により、會社が此爭議を仲裁に附しない場合は、米國鐵道組合員は二十六日以後、プルマン會社の車輛の取扱ひを中止

すべき決議をした。

六月二十六日には、プルマン會社に對するボイコットが事實の上に初まつた。當時デブスはこの同情罷工に反對した。といふのは、當時の形勢では、到底成功が覺束ないと信じたからであつた。大會は彼れの意見に反した決議をした。デブスは自分の意志よりも團體の意志を重んじた。彼れは大會の決議を率じて戰線に邁進した。

米國鐵道組合の決議は、プルマン會社の車輛を取扱はぬといふことに止まつたが、其結果は、多くの鐵道では完全な罷工狀態となり、其他の鐵道でも、多かれ少かれ麻痺の狀態に陷つた。この罷工から受けた損害は、約八千萬弗と推算せられてゐる。

何人も好んで暴力を用ひるものは無い。暴力を好まぬといふ意味では、全ての人は悉く皆な非暴力主義者である。殊更らに非暴力主義を標榜することは、一種の滑稽である。けれども勞働者に非暴力主義を守ることが許されるのは、何時でも、彼等の行動が大して支配階級の利益を危うくせぬ間に限られて居る。プルマン罷工の及ぼす結果は、まさにこの範圍を超えてゐた。そこで資本家階級は、一擧に米國鐵道組合を揉み潰そうとした。そして彼等がこの決意をした瞬間に、政府の眼には『職工團は暴徒』と見えだした。そこで大統領クリーヴランドは『安寧秩序』を維持し、財産を保護する爲めに、合衆國軍隊に出動を命令した。當時イリノイス州の知事ジョン・アルトゲルドはワシントン政府に對して、州内に合衆國軍隊を送るの不法を難詰し、如何なる事態が生じても、正規の警察力で充分であると保證したが、『公安』の維持に熱心な資本家政府は、郵便列車の保護を名として軍隊を急派した。

デブスは三人の組合役員と共に、陰謀罪として起訴されたが、何等の證據もなかつた。そこで七月十七日には法廷侮辱の罪名の下に再び逮捕され、六ケ月の刑に處せられてウツドストツクの監獄に送られた。デブスは翌年一月九日、獄中から米國の民衆に與へる宣言を公けにしたが、其中には次の一節がある。

『最近の罷工に關連して入獄したことに對して、吾々は何等の辯解をも悔悟をもなすべき必要を見ぬ。私は判官ウツズと地位を取替へることを欲しない。そして六ケ月の投獄、否な六ケ年の投獄にもせよ、私の罪を淨めるつもりなら、刑罰の目的は達せられぬだらう。

『公平は私をして、この裁判事件は全て醜惡であると斷言することを餘儀なくする。それは合衆國の司法機關に對する、急速に失はれつゝある民衆の信任を恢復する所以のものではない。吾々のうちの一人と雖も、苟も法律を犯したといふ一

片の證據もない。若し吾々が陰謀罪を犯したなら、何故に侮辱罪を以て吾々を罰するのであらうか。

『私は法廷の判決に對して責任を感ずるよりも、寧ろ千倍もストライキに對して責任を感ずるものである。

『吾々は唯だ、產業上の奴隷制度が廢止され、經濟上の自由の確立せられる、現に進行してゐる進化過程の、たま〳〵道具に過ぎないものである……』

六、一轉機

ウッドストックの六ケ月は、デブスの生涯の轉機であつた。彼れは一勞働運動者としてウッドストックの監獄に這入つた。そして一革命主義者としてウッドストックの監獄を出た。

『資本主義は、ユーヂン・デブスを投獄した時に、最初の大失錯をした。そしてヰリアム・ヘイウッドを投獄した時に、二度目の大失錯をした。資本主義は勞働階級の何者をも、不當に投獄する度びごとに、必ずこの失錯の上塗りをしてゐるのである。

『ウッドストックは金權政治のヲータアローであり、ボイズはそのブル・ランであつた。

『デブスは一勞働運動者として入獄し、一社會主義革命家として出獄した。

『ヘイウッドは勞働運動の敗者として入獄し、勝利者として出獄した。

『いづれの場合も、それは變化であり勝利であつた。

『敗北といふ言葉は、こゝでは單に便宜上の用語だといふことを知らなければならぬ。如何なる人も、征服したのでなければ、眞に打敗つたのではない。そしてデブスもヘイウッドも、征服すべからざる人である。

『監獄が其目的に反して進歩の道具であつたことは、歷史が之を証してゐる。進歩の道は眞直ぐにウッドストックからボイズを指して居る。デブスの經驗は、ヘイウッドの展開に必要であつた。

『資本家階級は、デブスを滅ぼさうとするはずみで、自分自身を傷つけた。彼等は米國鐵道組合を揉み潰した――然り彼等は米國鐵道組合を揉み潰して、社會民主黨に揉み固めた。

『この過程を觀察し、デブスの變化と、彼れの入獄當時からの產業運動の進化とに注意すると興味がある。この過程のうちに、吾々は進歩の哲學と社會的意圖の發展を見出すのである。

『デブスもその迫害者も、知らず識らず、有力な經濟的勢力の道具となつて働いてゐた。後者は盲目的に保守的衝動に從つて、無意識的の要素として働らき、前者は論理的に、一定のそして實現し得られる目的を指さす智的な感覺に從つて働いた。監獄

の經驗の努力のために、デブスの動力は發展し、その膨大力は社會主義的思想となつて現はれた……。

『斯くて米國鐵道組合の殘骸から、社會民主黨が組織されたのである……。

『プルマン。ストライキは敗北はしなかつた。それは明白に完全に勝利を得た。……歴史上に初めて、資本階級は勞働者の爲に麻痺された……。けれども此の勝利は、合衆國政府の强大た權力によつて、罷工者の手からもぎ取られた。

『斯ような結果は、デブスを迷はせた。斯くの如き大勝利が何故に一轉して敗北となつたか、彼は理解し得なかつた。この問題を解決する爲には、彼は監獄に往かなければならなかつた。

『彼は獄中で社會主義を研究した。そして大なる光明は、忽ち彼れの智力に輝やいた。

『彼は職業的の自覺から、階級的の自覺に一轉した……。

『狹い監房から、肉體的の自由に踏み出したのと同時に、彼は狹い職業上の利害から、社會革命の全世界的の限界に踏み出した。

『デブスは、支配階級が監獄に送らなければならぬと思つたほど、危險であつた。そして這入つた時よりも、一千倍も危險になつて監獄を出た。

『資本主義は、デブスを滅ぼしたと思つた。それはデブスを仕上げたに過ぎなかつた。

……『資本主義がデブスに宣告を下した時、それは自己の死刑執行書に署名したのである……。』(ヲルタア・ハナト)

『予は如何にして社會主義者となりしか』と題する文章のうちに、デブスは自ら斯う語つて居る。

『今日から振り返つて見ると、當時私の考へは唯だ一點にのみ集注され、今では白日の如く明らかに見えることを、全然見落してゐたことは、如何にも不思議に思はれる。

『が、しかし、其方が良かつたのだ。私は鬪爭の咆哮裡に、社會主義の洗禮を受くべきであつたのだ。「その所に光あれ!」(社會主義共和國に導く大道を照らす光)といふ命令を、神がこの適當の機會まで保留してゐてくれたことを、私は感謝する。

『米國鐵道組合は……幾多の小戰鬪をした。そして一人の損傷を見ずして勝利を得た。そして會社は幾多の讓歩をした……次に大北鐵道の、短胃にして鋭利な、そして決定的の戰ひが來た。勝利は完全であつた……。

『其次に最後の衝突――プルマン・ストライキが起つた。米國鐵道組合はここでも明白に完全に勝利を得た。聯合した諸會社

は禁抑されて窮地に陥入つた。この瞬間に、全く豫期せぬ方角からの、急激な亂打が飛んで來た。私は一時は目が眩んだ。しかし、はつきりと目を見開いた。そして銃剣の閃めきとライフル銃の響きとの間に、階級闘爭を見た。これぞ私が、初めて實際に社會主義を學んだ時であつて、私はまだ其時は、之が社會主義だと云ふことを全然知らなかつたのである……』。

一八九六年十一月二十二日、デブスは六ケ月の刑期を了へてウッドストクの監獄を出た。そして十萬の民衆に迎へられてウエルス街の停車場についた。

七、『赤色特別列車』

デブスが初めて政治運動に關係したのは、一八七八年で、彼は初めて民主黨の主張に贊成の演説をした。この演説後、民主黨はデブスを國會議員の候補者に推薦したが、彼は辭退した。後年デブスが法廷の辯論のうちに、『私は久しい以前に國會に這入ることも出來た。けれども私は故らに監獄を選んだのだ、私はよく／＼考へた上でこの選擇をした、私は他の途を擇ぶことは出來なかつたのである、私には少しの悔恨もない』と云つたのは、恐らく之を指したものである。一八八五年には、インデイアナ州の民主黨はデブスを州會議員の候補者に擧げたが、難なく當選した。デブスの考では、一般勞働者、殊に鐵道勞働者に有利な立法を獲得しようとしたのである。

出獄後の一八九六年には、デブスは既に社會主義の思想に進んでゐたにも拘らず、民主黨の大統領候補者ブライアンを援助した。しかし翌九七年には、彼は政治上でも一切の妥協的な曖昧な態度を棄て、公然社會主義の名乘りを揚げた。同年一月一日、デブスは米國鐵道組合の全員に回章を送つて自己の立場を明らかにしたが、この回章は次の一句を以て結ばれてゐた。

『爭點は社會主義對資本主義の爭點である。私は人類の味方に立つ。故に私は社會主義の側に立つ。黄金の支配に呪咀せらるるのは最早や澤山である。金錢は文化の適當な基礎でない。今や社會改造の時が來た。世界的變革の機は迫つてゐる』。

六月二十一日、社會民主黨はデブス等によつて組織された。米國に於ける社會主義運動の第一頁は開かれた。

一九〇〇年、一九〇四年、一九〇八年、一九一二年には、デブスは社會黨の大統領候補者として選擧を爭つた。一九〇〇年には共和黨のマッキンレー、民主黨のブライアンを敵として闘つたが、其得票は僅かに九萬六千百十六票に過ぎなかつた。

一九〇四年の社會黨大會も、デブスを再び大統領候補者に擧げた。デブスは大會の意志を重んじてこの指名を受けた。今度

は共和黨のルーズヴエルト、民主黨のパアカーと選擧を爭つたが、得票は一躍して四十萬二千に增加した。

一九〇七年の社會黨大會は三度びデブスを大統領候補者に指名した。ジョン・スパルゴは當時デブス推薦の演說のうちに、『吾々の旗手は、何事にもまして、吾々の戰旗を少しも汚辱しないで、吾々に返還する人でなければならぬ、吾々はこの戰旗を、東より西に北より南に、單にその尊嚴を傷つけぬばかりでなく、この戰旗と共に、勞働階級の感激と革命的精神とを共に運ぶの人を必要とする。ユーヂン・デブスは、單にこの戰旗と共に勞働階級の革命的精神を運ぶばかりでなく、彼れは米國に於ける勞働階級の反逆心の化身である……』と云つて居る。

一九〇七年は財界恐慌の年で、全米國には不景氣の暗雲がとざしてゐた。そこで社會黨では、一九〇八年の大統領選擧には、特に有力な宣傳をする計畫を立てたが、最も世間の視聽を引いたのは、『赤色特別列車（レッド・スペシャル）』であつた。社會黨は二萬弗を費やして『赤色特別列車』を仕立てたが。列車は機關車、寢臺車、展望車、食堂車、貨車とから成り、貨車には社會主義の宣傳文書が滿載されてゐた。デブスはこの『赤色特別列車』で全米の到る所に遊說した。特別列車は八月三十一日、シカゴを發車して西方に向つたが、九月二十九日にはオハイヨ州のトレド市に達し、十月二日には紐育市に入つた。デブスは鐵道沿線の全ての町で演說した。そしてその集會は共和民主兩黨の集合よりも、遙かに多くの聽衆を惹いた。この遊說の終りに、デブスは一日ウツドストツクの町に往つた。彼れは十三年前に六ケ月間繫がれた監獄の階段に立つて、五百の聽衆に演說した。

デブスの最後の選擧演說は、シカゴに於ける選擧前日の演說であつた。會場の第七レヂメント・アーモリーには一萬六千の勞働者が、彼れの演說を聞く爲めに殺到した。集會に先つて、シカゴの一萬四千の勞働者は、デブスを先登に、二哩に亘る示威行列を行つた。

一九〇八年の大統領選擧には、共和黨はタフトを擧げ、民主黨から三度びブライアンが打つて出た。デブスの運動は非常な人氣を呼んだにも拘らず、得票は四十二萬九百であつて、四年前と大差がなかつた。

一九一二年の社會黨大會では、左右兩翼の間に、猛烈な論戰が行はれた。この時I・W・Wはアメリカの勞働階級の間に一大勢力を占めて來た。そしてデブスは一九〇五年に於けるI・W・W・の組織に、最も重要な働きをした一人であつた。一九〇八年には、I・W・Wは、共綱領から選擧運動の一項を削除したが、デブスはこの非政治運動的態度には反對した。けれどもそれにも

拘らず、デブスは依然としてI・W・Wに多大の同情と期待をもつてゐた。一九一二年の大會がインデイアナポリスに開かれると、何人も大會の紛擾を豫想した。社會黨の最右翼は、直接行動を主張し、サボタージュを採用し、政治運動を非認するI・W・Wを以つて、破壊的團體と認めてゐた。之に對して社會黨の中央執行委員にして同時にこの中央委員會の一人たるヰリアム・ヘイウッドは、大會の最左翼を率ゐて立つてゐた。

それにも拘らず、大統領候補者の指名には、兩派は均しくデブスを推薦した。一九〇一二年には、デブスはタフト、ルーズヴエルト・ヰルソンの三敵と戰つたが、其得票は八十九萬七千に増加した。

八、非戰運動

一九一七年、米國が歐洲戰爭に參加すると、ラッセル、スパルゴの如き最右翼を除いては、社會黨の大多數は戰爭反對の態度を固執した。社會黨の戰爭反對には幾多の犧牲が拂はれたが、デブスの處刑は、その最大の犧牲であつた。

一九一八年九月九日、デブスは戰時間諜法の違犯としてクリーヴランドの法廷に立つた。『彼は泰然自若として居つた。裁判の成行をひどく心配してゐるらしい一人の友人に、彼は斯う云つた——『之も進歩の一里程標に過ぎぬ。吾々は何時までも、こゝでぐずぐずはして居らぬ』。

九月十一日、彼は法廷で自ら辯論した。辯護人の一人、セイモア・ステッドマンが、『是よりデブス氏が辯論されます』と報告すると、彼は被告席から立つて、靜かに陪審席の前に進んだ。左の手は固く腰の上におき、いつもの如く右の手を差し延べて、二時間に亘る大演説を初めた。

九月十四日、結審に先つて、デブスは再度の辯論をした。裁判の結果は十年の懲役であつた。

事件は直ちに、被告側から合衆國最高法院に上告され、同時に社會黨は同一法律の犧牲となつた同志の爲に、デブスをして全米國に亘る一大宣傳旅行をやらせる計畫をしたが、裁判所はデブスの旅行の地域を制限した。そこで彼は此地域内の多くの都市で、有ゆる集會の機會に演説したが、いづれもカントン大會の演説と同一の主張を繰返したものであつた。

一九一九年三月十日、最高法院は上告を棄却した。テル・ホートの家で此通知を受けたデブスは、直ちに新聞通信社に次の如き聲明をした。

『この決定は、最高法院が支配階級の裁判所たる性質と完全に一致する。それはこの決定以外の途に出でることは出來ない筈である。たゞ私一人に取つては、この決定は大して重要

でない。けれども之は全米國民の重大な利害に關して居る。それは言論に對する根本的の自由を危くするのである。言論の自由なくしては、米國の誇りとされた自由も、虚僞と茶番である。

『最高法院は眞の爭點を回避した。卽ち間諜法が憲法上合法であることは論定しないで、獨斷的に間諜法を有効とした。法廷に於ける眞の爭點は、この法律が憲法に反せざるか否かにある。最高法院は、之を決定するの勇氣が無かつた。最高法院の決定したことは、憲法も「一片の反古」であると云ふことである。

『大なる爭點は、法廷によつて決定せられるものでなく、人民によつて決定せられる。私の事件に對して、ワシントンのお傭ひ法律家連中がどう判決しようと、私の關する所でない。最終の法廷は人民である。そしてこの法廷は、久しからずして此事件に判決を下すに相違ない。

『最高法院の判決は、合衆國をツアーの治下に於ける露西亞とした。それは少くとも、一百萬人のルボセヰキを造る爲めには結構である。

『……………………………………………………………………………………』

『英國と全世界の勞働階級を糾結す。解放の朝は近づいた。』

デブスはエスト・ヴアジニア州マウンズヴイル集治監に送られたが、二ケ月後に、急にジヨルジア州のアトランタ監獄に移された。この押送の理由は明かでないが、マウンズヴイル監獄が、デブスを寛大に取扱つた爲めだと言はれて居り、政府は極めて秘密裡にこの押送を行つた。

九、監獄から白堊館へ

一九二〇年五月の社會黨大會は、左右兩翼の間の、嵐の如き論戰のうちに終始した。そして論爭の中心が、莫斯科インタナショナル加入問題であつたことは云ふまでもない。十三日の會議には左翼の闘士タツカアは右翼の少數派の綱領を、寧ろ『社會黨の埋葬式の演説』であると罵倒し、右翼は之に應戰して、兩派の分裂は最早や避けがたしとまで激論した。會場は幾度となく總立ちとなり、議場整理のために力任せに卓子を叩いた議長パンケンのガヴルの頭が記者席に飛んで、不仕合せなブルジョア新聞記者の頭に命中した。

社會黨の大會を見慣れぬ人は、黨は必然に分裂するものと思つてゐた。午後二時、議長はインデイアナ州の代議員エドワプ

ド・ヘンリーを登壇させた。この暖而に議場はぴたりと靜まつた。ヘンリーが簡單に、しかも極めて感動的な演説を以てユーヂン・デブスを一九二〇年の大統領候補者に推薦すると、歡呼と喝采と、『デブス』『デブス』『吾等はデブスを要す』の叫びは場を揺がせた。この熱狂の光景は二十五分間繼續した。そして歡呼の嵐の斷え間には『インタナショナル』『マルセイエイズ』『自由ロシヤ』、『赤旗の歌』が歌はれた。

『十三ケ月前、デブスが投獄された當時は、キルソンは最高の人物であつた。虐げられ蹂み躪られた人類の希望は、彼の上に集つてゐた。彼等は呼んだ――このキルソンこそ世界の救主である！しかし間もなく、この人こそヂーン・デブスを監獄に送つた人だといふことに氣がついた。歴史の上に、この十三ケ月間に於けるキルソンの下落の如き、悲しい下落のあつたことはない人民は今尚ほキルソンの言葉を聞く。けれども彼等は、監獄の墻壁を見る――彼は權力の爲に魂を賣つたのだ！人々の眼は白堊館からアトランタ監獄に轉じてゐる：：。』

左翼のタッカアは午後の演説のうちに斯う云つた。モリス・ヒルキットは右翼を代表して最後に演説した。

『吾々は全くの壓制と投獄――肉體の投獄と精神の投獄――の味方に對し、一切の搾取の味方に對する挑戰としてユーヂン・デブスを指名する。この指名は、吾々が革命的立場から斷じて一歩も退ぞかぬ決意を示すのである……』。

この日、米國合同被服工組合が大會に寄せた祝電の一句は、一九二〇年に於ける社會黨大統領選擧運動の合言葉となつた。

『監獄から白堊館へ！』

新刊紹介

□**滅び行く家**（若月紫蘭著）外に『大名の戀』『勝利者』を含む。戯曲（定價一圓、東京神田錦町三丁目五番地映光社發行）

□**放浪者の詩**　高群逸枝著）長詩二十余篇、並に短歌數篇を集む（定價一圓七十錢、新潮社發行）

□**カレーの市民**（ゲオルク・カイゼル原作、新關三良譯）三篇の戯曲、附錄として『表現派解説』を含む（定價一圓、新潮社發行）

□**近代劇大觀**（宮森麻太郎、歐米二十四大家の代表的傑作を選び其梗概的物語、評論及各作家の略傳を述べたるものにして近代劇研究者にとり好個の手引書である（定價六圓五十錢玄文社發行）

勞働黨の會議に出席して

英國にて
本社特派員　室伏高信

(一)

六月二十一日から三日間、私は英國勞働黨の會議に出席しました。この政黨の首領の一人、アーサー・ヘンダアスンの紹介によつて。

英國勞働黨の會議は年中行事の一つであつた。去年はスキアボロウで、今年はブライトンで、來年はまたエヂンバラアで開かれるといふ。だが年とともに異常な發達をとげてきて、就中この數年來、英國における社會革命の氣運が爛熟の域にまで達して、この國の權力が、ホワイトホールの料斗からエクレストン・スクエアの背廣服へと移らうとしつゝある時に、勞働黨の總會は、最早や單なる年中行事ではなかつた。

勞働黨は、ウエストミンスタアに、今まで七十人の議員しかもつてゐない。この議員の數からいふと、それは三番目の、そして小さい政黨の一つであるに過ぎないであらう。だが一九一八年の總選擧——『詭計の選擧』の後に、六十何回かに亘つて行はれた補缺選擧の結果は、この政黨が、明らかに現在の英國において、既に最大政黨となつてゐることを證據立てゝゐるのであつた。ロイド・ヂョーヂがその有名な社會主義征伐の演説のうちで、この勞働黨を指して、『恐るべき』『惡魔』だといつたのは、私がこの國へきてから間もなくのことであつた。私はその『恐るべき……惡魔』を見るべく、ブライトンの地に三日間を送つた。ブライトンの海岸は、倫敦から五十哩ばかり離れた、左まで美しいとは思へないが、この國の『紳士淑女』の遊樂の地として、既に久しく知られてきた。私は初めてこの地にきて、こゝに多くの『紳士淑女』の群れを見た。山も海も、こゝでは『紳士淑女』のために失つてゐるかのように見える。この地に『恐るべき……惡魔』の集まつてくることは、誰れの目にも場所柄でないかのように思はれる。だがこの海岸こそ嘗つて詩人シエレイを生むだところであつた。ピイタア・クロポトキンが、彼れの亡命者の十二年間を送つたのは、この波靜かなブライトンの

海岸であつた、と司會者の一人がいふた。

（二）

この海岸にきたものは誰れも知らずにはゐられない大きな建物の一つにドームといふ會館がある。勞働黨の會議はこのドームで開かれた。英國勞働黨の黨勢は、昨年は三百七十萬と報告されたが今年は四百二十五萬人と報告された。その四百二十五萬人の代表者として、千何百人かの人たちが、この國の各方面から集まつてきた。若いのもある、老人もある、鳥打帽子もあり、中折帽子もある、中には髪を綺麗に分けて、小さつぱりとした背廣服をきてゐるのもある、中には勞働者に似合はないほどに立派な金鎖を胸にしてゐるのもある。また中には樞密顧問の地位にあるものも何人かあり、下院議員も七十人からあり、美しい女、醜い女、總じて女代表が百人ばかり其處此所に散亂して席を占めてゐる。この勞働黨の代表者こそ、最左翼派言葉でいふと『勞働貴族階級』の諸君であるといへるにしても、目のあたりこの背廣服の千何人かの一團を見ると、流石に勞働者の會議だといふ感じを隱くすことはできない。會集の少くとも半ばは、純然たる勞働者――體力勞働者である。ことは彼等の太い指、彼等の荒廢した皮膚によつても知ることができるであらう。一段と高いところ、プラットフォームの眞中には會長のカメロン君が席を占めてゐる。その左側にヘンダアスン、右側にマクドウナルドが控え、それからウエッブ、タアナア、ホッヂエス、クラインス、クラムプ、スノウデン夫人、ウヰリアムス、マックリーンといふような幹部の諸君が首を並べて坐してゐる。一般代表者の席のうちにも、ランズベリイがあり、ノルマン・エンゼルがあり、ハーバート・スミスがあり、ボンドフヰールド孃があり、有名無名の士が、この宏大な建物の中に、狹まきまでに滿ちてゐる。黃色人は、無論、私一人であつた。

（三）

この會議の第一日に、この會場を壓して立つたものは今年三十四歲の青年フランク・ホッヂエスであつた。第三日目に、會場の空氣を感激にまで導いたものもこの青年フランク・ホッヂエスであつた。この青年の名は、坑夫組合の最高指導者として、歷史的な大ストッペーヂの最高指導者として、既に世界に驚異をもつて見られてゐるが、勞働黨の會議における二回の演說は、この青年を、優に英國勞働運動の第一人者の地位に確定したように思はれる、背の小さい、顏も小さいが、全體のよく整頓して、智力的な、そして寡默な彼れは、最初から會衆注目の一中心であつた。

坑夫組合のストッペーヂが既に三ケ月近く續いて、百二十萬

の坑夫が、政府と戰ひ、資本家と戰ひ、最後には政府からの『賄賂』の一千萬磅をも拒絕して、その最初からの彼等の主張、マクドウナルドの言葉でいふと『經濟的正義』のための戰ひに、一その妻と兒とともに、殆んど飢餓に瀕しながら、そしてこの戰ひが何時終るべきかの望みさへなくして、種々なる誘惑を排して、尙ほ殆んど一人の裏切者さへなく、同僚ソリダリテの高き道德のうへに、百二十萬の坑夫が、過去三ケ月に亘つて、一人のごとくに立つてゐる、この坑夫組合の戰は、近代の歷史上における、最も感激的な戰ひの一つであることは勿論である。

この戰ひの、最高指導者としてのホッヂエスが、勞働者の會議の間で、自然と注目の中心となつたこともまた勿論である。

第一日に、彼れが演壇に立つた時に、この一青年は凱旋將軍のごとくに、盛んなる喝采と歡呼とをもつて迎えられた。歡呼喝采といふよりは、それは感激であつた。この感激の漾ふ中にあつて、彼れは冷靜と、沈痛と、威嚴と、そして智力とをもつて語つた。彼れはこの戰ひを『史詩的戰鬪』だといふた。そしてこの戰ひが終つた後に、『錢が、百萬の坑夫の心中に入るであらう。』といふ一言をもつて、坑夫の堅い決心を、雄辯にいひ現はした。第三日目には、最初に老將クラインスが、坑夫組合に對する全勞働者の感謝と援助との決議案を手にして現はれた時に、場內は期せずして緊張した。三番目にこの決議案の支持者としてこれも老將のラムセイ・マクドウナルドが雄辯を振つた決議案が滿場一致で通過した後に、坑夫組合の一人が立つて感謝の辭を述べようとしたが、どこからとなく『ホッヂエス！』を呼ぶ聲が起つてきた。そして凡ての人たちがこれに和した。ホッヂエスがその小さい體軀を提げて立つた時に、私は再び感激の波が、場內に滿つるのを見た。彼れはこの感激の前に、眞にその感激の前に應はしい人として立ち、そして語つた。彼れの言葉は短くはあつたが、智力と、信念と、威嚴との結晶であつた。坑夫の精神は、彼等の傳統、父祖から承けた遺產である、と彼れはいふた。人々の心は興奮に燃えた。私は今日までまだ嘗つてかくのごとき嚴肅な空氣、そして人々の心が、かくのごとき高き道德と、美しい感激とによつて結合されたのを、見たことがない。

(四)

英國勞働黨の、久しく誇りとしてきた人は、私にはシドニイ・ウエッヴであると思はれる。今日まで、坑夫組合の智的指導者がホッヂエスであつたごとくに、英國勞働黨の智的指導者はシドニイ・ウエッヴであつた。この點は彼れの主義に組するものも、組せないものも、みな一致するところであらうが、この會

議においてのシドニイ・ウエッヴ、或は群衆の前においてのシドニイ・ウエッヴ、或は演説家としてのシドニイ・ウエッヴは、この會議に集まつてきた一千何百人のうちの、恐らく最下位にあるように思はれる。彼れが幹部席にあるや、彼れは純然たる一個の老村夫子である。彼れが演壇に立つや、村夫子以下である。この幹部席にあつて、よく幹部としての威嚴をもつて語るものは、靑年ホツヂエスを除くと、アーサー・ヘンダアスン、ラムセイ・マクドウナルド及びジエ・アール・クラインスの三人であらう。

このうちクラインスとヘンダアスンとは、黨内の地位においても、マクドウナルドよりも一段高いかのように見えてゐるが、演説家としても、一般の人氣としても、マクドウナルドが第一位にあるように、私の目に映じた。マクドウナルドは、英國人とは思はれないほどに、黒色の顔をして、威かめしい眼に眼鏡をかけて、髪は既に半ば白くなつて、長い間の社會主義の戰士としての面影を、畫のように見せてゐる。彼れの書物を讀むものは、既にマクドウナルドの時代が去つた、といふ感じを免れないであらう。だが目のあたり見た彼れは、尚ほ社會主義の戰士としての勇氣と精力との持主であることを思はしめるに充分であつた。マクドウナルドは妙に人を魅する力がある、とは私の背ろで聞いてゐたところであつたが、慥に演説家としての彼れは、人を魅するの力をもつてゐるに相違ない。彼れが壇上に立つと、不思議にも歡呼喝采が起る。この點において、彼れはこの勞働黨の全體を通じてたゞ二人の競爭者をもつてゐる。一人はホツヂエスであり、他の一人はボンドフヰード孃である。彼れは尙ほ僅に英國勞働運動の大立物の一人として何年かの前途を續けてゆくことができるであらう。彼れの語るや、狂ひ獅子のように、すさまじいばかりに荒れ狂ふ。その太い聲、その熱烈な態度、卓を叩き、胸を搖るところ、彼れは慥にこの會議になくてはならぬ闘士であるが私には、この人の演説は二度と聽きたくはないといふ感じが殘されてゐる。ヘンダアスンは、幅廣の顔をして、どことなく緊張味の足りなく見えるのは、マクドウナルドの、荒々しいのに比べて、好個の對照をなしてゐる。が演説家としてのヘンダアスンは全く別人のように、聲も大きく、熱度も充分で、縱令何の新味もないにしても、また何んの華やかな色合ひもないとしても、この政黨の空氣を、全體として、巾廣に代表することのできる人としては、先づこの人を推すべきであらう。クラインスは相當頭腦の明晰な人らしいが、どことなく學問の薫りが乏しいように思はれる。この人たちのほかに、幹部席の演説家としてはスノウデン夫人がある。スノウデ

ン夫人は、昨年ロシアから歸つて以來、この國の青年、または左翼派の諸君から著しく信用を失つた。この女は、大形の絞りを着て、流行の帽子を被つて、長い首飾りをかけて、どう見てもブルヂョアである。靴の先から頭の頂上に至るまで、この人は虚榮の色に染められてゐるように見える。私には、この女はやがてこの國の勞働者に背かれる時がくるだらう、といふ感じを隱すことはできない。がこの女の、人を魅する力は、マクドウナルドよりも遙により以上であらう。彼女は、私の想像してゐたよりも若く、また美しい。彼女の演説は、天高くして鳥の聲を聽くように聞えてくる。一寸の無理もなく、少しの激越もなく、思ふことを思ふまゝ表現しつゝ人の心を躍らせてゆく。

（五）

ヘンダアスンも、マクドウナルドも、クラインスも、スノウデン夫人も、シドニイ・ウエッヴも、みな温和派社會主義の名士として知られてきた。彼等は、幾度か自由黨の『犬の尾』だとして罵られてきた。英國勞働黨の過去を見ると、實に自由黨の『犬の尾』のように働いてきた。彼等は自由黨から小さい大臣の椅子を分けられて、或はロイド・チョーヂから『失業保險』の賄賂をもらつて、從順なる勞働貴族階級としての記錄を造つてきた。が時代は既に一變した。嘗つて勞働黨を『犬の尾』としてあしらつてきたアスキスは、今やこの『犬の尾』に憐れの秋波を送るのほかに、その政治的生命を見出すべき餘地がなくなつてきた。アスキスの友ホルデーンは既に勞働黨内の一人として計へられてゐる。ロイド・チョーヂは今やこの『惡魔』との戰ひにおいてのみ、彼れの政治的存在の意義が存在すると思はれるようになつた。然り、自由黨が勞働黨の『犬の尾』となるべきの時が既にきてゐるのである。否な既に自由黨の幾人かは勞働黨の『犬の尾』となつてゐるのである。この傾向の記錄として、人々は舊自由黨の名士トレヴエリアンの『自由主義から勞働へ』を見ることができるであらう。

（六）

英國が『自由主義から勞働へ』と移つてゐる時に、この國のヒロイズムが、『勞働』へと移つてゆくこともまた自然の勢ひであらう。私は自由主義からの多くの著名なる變節政論者をいふのではない。また私はこの勞働黨の幹部席の『樞密顧問』の諸君をいふのでもない。勞働黨はこの國を支配する『能力』がないとは、チャーチルの罵倒でつた。私は勞働黨の幹部席を一瞥して、この勞働黨が、自由黨や統一黨に比べて、チャーチルの考へてゐたように、人材に乏しいとは思はないにしても、この國の群勃たる新興階級を率ゐて立つには、またはこの國の新興文明の

建設者として立つには、尙ほ多くの有能な人材を、この政黨の幹部席に見なくてはならないであらう。或はこの政黨の幹部席に居並んでゐる二十人ばかりの人たちの、少くとも過半數は、新人材をもつて置き代へなくてはならないであらう。私はこの點において、勞働黨に人材なしといふことができるように思ふ。この會議の終つた後に、ランズベリイは、スマイリイを想ふの聲を、到るところに聞くといふた。スマイリイのような『力』の人を、この産業的危機に、この革命爛熟の時に、人々は心から想ふたであらう。

私が、ヒロイズムが、この政黨のうちに集まりつゝあるといふたのはランク・エンド・フアイルの席を見てからのことであつた。

(七)

私は既にこの勞働黨の『兵卒席』に、ヂョーヂ・ランズベリイや、ミス・ボンドフキールドや、ノルマン・エンゼルや、ハーバート・スミスなぞが、地方出の勞働者の間に伍してゐたといふた。このうちスミスやランズベリイなぞは、この政黨においても、この國の勞働運動にとつても、無論古顔の方であり、ボンドフキールド孃も、この政黨の花形として既に一般に知られてきた。ノルマン・エンゼルも、また既に勞働黨の代議士公認候補者の一人に擧げられてゐるのであつて、彼れの姿をウエストミンスタアの演壇に見るの時も遠い將來のことではないであらう。彼れはこの會議の三日目に『兵卒席』の後方に當る椅子のうへに立ち上がつて、一場の短い演說を試みた。彼れはヴエルサイユ條約を攻擊した。そして外交政策を變更することの必要を說いた。彼れのこの日の演說は、この政界新入者の、來るべき日の活動の下稽古のようにも見えた。

だが私に深く印象したのは、こうした人々、著名な人々の演說ではなかつた。私の出席した三日間を通じて、毎朝の九時半から夕方の五時までの間に、多分五、六十人の有名無名の人々が、入り代り、立ち代り、演壇を占めた。禿げ頭の老勞働者、書記らしい若い男、スポーツ・コートの女、縮れ毛の猶太人、何れも堂々たる演說振りを示した。ウエッヴの名をもつてしても、地方からの一靑年の雄辯のために、その農業政策の決議案を一蹴された。クラインス老練をもつてしても、尙ほ屢々受打刀に見えた。最後の一日には、スノウデン夫人の雄辯も、遂に無名の勇者のために、散々の目にあつた。

政黨の强みは、その幹部席においてよりも、その『兵卒席』においてある。少くとも政黨の未來は、この『兵卒席』においてある。

英國が『自由主義から勞働へ』と移る時に、勞働黨は社會主義へと移つた。

英國の勞働黨は、一九一八年、その有名な『勞働と新社會秩序』を發表した時に、社會主義の原則のうへに、彼れの綱領を置いてゐることを、決定的に明らかにしたといふことができるであらう。が、この『勞働貴族黨』といはれてきた一團が、果して眞に社會主義の精神とともにあるか否かとは、人々の尙ほ多く疑の眼をもつてみてきたところであつた。彼れの幹部席には尙ほ多くの『樞密顧問』を見る。その『樞密顧問』のうちには、チエ・エッチ・トーマス、然り、『黑い金曜日』の立役者としての、チエ・エッチ・トーマスの名を見る。私は勞働黨の會議に出席する時に、こゝに尙ほ多くのトーリーズム、勞働トーリーズムを期待した。

ブライトンの會議は、私のこの期待、勞働トーリーズムの代りに、社會主義の印象を刻みつけた。英國の勞働黨は、少くともそのブライトンの會議の關する限りでは、浸透せる社會主義の一團、純然たる社會黨であつた。社會主義は最早やこの政黨の單なる綱領ではなしに、彼れの精神であり、精神といふよりは常識であつた。またそは既にこの政黨の、所謂知識階級の獨占ではなくして、凡ての人々、凡ての『平民階級』の間に、[illegible]に分配されてゐるのを、私は見た。

（九）

ブライトンの會議は、異常なる狂熱のうちに終始した。その狂熱を支配したのは、勞働ソリダリテの精神であつた。勞働ソリダリテの精神のみ、この勞働黨の會議に集まつてきた人々の、唯一つの靈感であつたように見えた。或はこの一千有餘の人たちが、勞働ソリダリテの一大示威運動のために、このブライトンの海岸に集まつてきたように見えた。チエ・エッチ・トーマスは、この階級ソリダリテの、憎むべき裏切者として、非難の中心であつた。そしてそはたゞ左翼派の諸君からの非難であつたばかりではなしに、トーマスの名は、最早やこの勞働黨、少くともブライトン會議の心に、背いてゐたやうに見えた。

この會議を劇的の空氣にと導いたのは、その二日目に失業者の一團が、倫敦から到着した時の瞬間であつた。多分二百人近くもあつたであらう。飢えに疲れた足を、遠く倫敦から運んできたこの一團が、會場の中に流れこむできた時の瞬間に、彼等はその同僚――勞働黨の會議から、破るゝばかりの喝采で迎えられた。そして彼等のうちの、四、五人の代表者らしい若者、若者といつても髑髏のような若者がプラットフォームへ步るい

て行つた時に、幹部席の諸君はみなその席をこの若者等に譲つた。『樞密顧問』の席に『髑髏』が代つて坐した。彼等は代る〲立つて演說した。彼等の一人は、彼れが既に失業者となつてから十三週間になる、そして倫敦に妻と兒とを殘してあるといつた。他の一人は、失業は、資本主義の產物であると說いた。また他の一人はプロレタリアンの獨裁政治！と叫んだ。私はその瞬間ほど眞實で、そして悲壯な光景はなかつたやうに思ふた。最後に彼等は立つて『インタナショナル』を歌つた。勞働黨の諸君もこれに和した。

　階級ソリダリテのこの精神は、この勞働黨の會議で、『國民的合同會議』の決議のうちに、建設的に表現された。『國民的合同會議』とは勞働黨と、勞働組合會議と、院內勞働黨との、常設的共同委員會の意味であつて、昨年の Council of Action の常設的のものと見ることができるであらう。この計劃が勞働組合會議を通過した時に、それより大なる三角同盟として、この國の、勞働ソリダリテの代辯者として立つに到るであらう。

　勞働黨は、今年の會議でも、共產主義を、全會一致に近いほどの多數で拒絕した。だがそは決して勞働ソリダリテの否認でもなく、勞働黨の反動的傾向を語るものでもなく、たゞ『投票函』を通じての、この國の勞働者の、階級ソリダリテの確信を語つてゐるものである。（六月廿四日英國ブライトンにて）

新刊紹介

□**帝王者**（島田清次郎著）五幕よりなれる著者の新作劇附錄として閃光雜記を添ふ（定價一圓六十錢新潮社發行）

□**日月の上に**（高群逸枝著）長詩日月の上以下五篇の詩集である（定價一圓五十錢叢文閣發行）

□**ギルド組織の研究**　非箆節三譯）ギルド社會義の創唱になるオレーヂ及ホブソンの共著になれるもの蓋し原著は斯學研究の權威書として知られたるもの（定價一圓八十錢文化學會發行）

□**未能力者の仲間**（武者小路實篤著）未能力者の仲間、桃色の女、或日の事、AとB、母親の心配の五編を蒐め現代脚本叢書の第一篇として發行せる者也（定價一圓新潮社發行）

□**國境の夜**（秋田雨雀著）（國境の夜、育兒の幼想、水車小屋、爵濟王と火事の四篇よりなる氏の戯曲集也（定價九十五錢叢文閣發行）

□**論理學の原理**（佐竹哲雄譯）大村論文叢書としてヴヰンデルバントの原著を譯せるもの（定價九十錢大村書店發行）



工業主義と私有財産

バートランド・ラッセル

従來私は工業主義を單なる生産上の技術的方法の問題としてのみ取扱ひ、大仕掛の工業の單なる可能性に影響を與へる場合の外、分配の制度や政治的狀態を考慮に入れずに說いて來た。今や此人爲的な單純化を廢することが必要となつた。二つの制度、卽ち私有財産と國民主義とが、特に工業主義に對して深刻な影響を與へた。又此二つの制度は共に、工業主義に依て非常に變化させられ、此二つのものが相結んで、吾々の文明の綜合的存在に對する脅威となつたのである。私は先づ最初に工業主義と私有財産との交互作用を、次に工業主義と國民主義との交互作用を考察しようと思ふ。

私有財產は宗教と同じく、人間が始めて農業に着手した時代から吾々に傳はつて來たものである。それより以前の時代に、遊牧民族は家畜の群を持つて居た。けれどもその所有は腕力の專ら優劣に依つて生じたもので、何等の合法的使用權にも依つたものではなかつた。合法的使用權は、農業と共に始まり、本來土地と農產物とに適用されたものである。土地の私有財產は、恰度現在吾々の間に存在すると實際上同じ形式で、ハムラビ時代のバビロニアにも存在した。私有財產の特質は、國家の內部に於ける或人、又は或群團に對して合法的な所有權を認めることである。所有者が個人であるかないかは重要な問題でない。大學や修道院の所有する土地も、個人に依て所有せられる土地と等しく、私有財產である。中世の歐洲の大部分に存在して、露西亞には現在まで存續して居る村落共產制は、村落を以て獨立の國家とせざる限り、私有財產の中に入れられなければならぬ。國家が法律に依て個人又は團體に取つて貴重な何物かを、獨占的に使用し享樂する權利を保障する所には、私有財產が存在する。斯樣に私有財產は國家に依て作られ、國家が法律を尊敬させるに足るだけ、强い處にのみ存在するのである。

國家の權力は、常にそして何處に於ても、武裝せる暴力の上に立つて居る。國家は侵略者を擊退し得る場合、又は侵略者を擊退する同盟者を有する場合にのみ、存在する。私有財產に關する一切の權利は、國家の內部に於てのみ存在する、隨つて外國の征服と共に總ては廢棄される。此意味に於て、私有財產は、劍の權利から出たものである。けれども實際劍の權利に依つて立つて居るのは國家だけであつて、國家の內部に於ける個人的な財產所有者は、國家の認めた合法的權利に依つて立つて居るのである。

歷史上及び現存の國家の大多數は、十數の好戰的な人々の集團が、遙かに多數の平和的な土民を征服することに、其起原を發して居る。歐羅巴、南北亞米利加の總ての國家、古代及び中世に於けるセム族の諸國家、及び印度の諸王國の

起原はこれであつた。けれども侵略者と土民との間の相對的な力と文明と次第で非常な相異が起つて來る。北亞米利加及び濠洲に於ては、侵入者は土民を全滅させるほどに强かつた。これと同樣な事は、歷史以前の時代には絕えず起つたに相異ない。けれども歷史以後の時代に至つては、歐羅巴と亞細亞とを通じて、斯樣な場合は極めて稀であつた。通則として、侵略者は、自己の征服した人民よりも文化程度が低く、征服の結果を榮しむためには、被征服者の勞働を必要とした。そこで彼等は自分等の間に土地を分配し、土着の人民を奴隸や農奴とした、北亞米利加及び濠洲に於ては、土民の全滅以後、恰度これと正反對の過程が行はれた。白人仲間の先着者は、土地を我ものとしたので、外國から勞働者を引き寄せねばならなくなり、白人を高い給料で誘きよせ、黑人を暴力で連れて來た。けれども吾々の立場から見れば、是は大して問題に關係は無い。古い帝國に於けると等しく、新興國に於ても、私有財產の泉源は、好戰的少數者による土地の所有であり、其等の人々が、他人にそれを耕作させる條件を決定するのである。

　此制度から自由競爭の放任的時代に至るまでの間、大抵の國々に於ける進化は緩漫であつた。やがて土地の所有者は、耕作者に對して鞭を以て臨むよりも、土地を貸付けて、生產物の所有を耕作者に許した方が、餘計富を作ることが出來るといふことが徐々に發見された。そして貴族的な地主がその武力的優越を失ふに至るや、農民は彼等に反抗して起ち、同じ方法、即ち最初貴族に土地を所有させた原因である武裝せる暴力に依て土地の所有權をかち得たのである。のみならず、商業と製造業との勃興と共に、土地を基礎とせぬ新しい財產の形式が起つた。人は自己の勤勉によつてかち得たものを所有する權利があると考へられるようになつて來た。斯樣にして私有財產は、（最初のように、一團の强盜の配前としてではなく、勞働の報酬として考へられるようになつた。最も富裕なる人々の多くは、地代を受取る外に何もせぬ、最も怠け者の仲間であつたにせよ、とにかく此の新しい見方が次第に廣く行はれるようになつた。

斯様にして自由主義的な財産觀と、貴族主義的な財産觀との間に葛藤が生ずるに至つた。自由主義的財産觀は、自己の勞働の産物に對する人間の權利を基礎とし、貴族主義的財産觀は、征服者及び其子孫の土地所有の權利を基礎として居る。自由主義的見地は、若し徹底したならば、土地に於ける一切の私有財産の全廢を目ざした筈である。ヘンリ・ジョージ及び單稅論者は、自由主義の徹底的な發達を代表して居る。けれども種々の困難が此說の成功を妨げた。第一に、自由主義は本來個人主義的である。それは人間を以て、富の一定量を造出し、それに對して權利をもつ所の、個人的生産者と考へる。此觀方は國家と兩立せぬものであり、隨つて私有に取つて代る唯一の制度である土地の國有を悅ばない。第二に、自由主義的な觀方は、財産を神聖視する信念を保留し、隨つて土地の沒收に容易に賛同することが出來ない。第三に、現代の大抵の大資本家は、その富を原料の所有權、又は或合法的獨占權によつて得て居るので、資本主義の發展に伴ふて、地主と資本家との區別が曖昧になつた。其結果、彼等は總ての人々が平等に土地や原料を使用し得るようになることを望まず、彼等の利害は地主の利害と一致して居ることを見出すのである。

けれども自由主義が近代の社會に全然受入れられなくなつたのは、さういふ事のためではなかつた。それは、これから吾々が考へなければならぬ、工業主義の一層根本的な特質の結果である。

非工業的社會に於ては、自由主義的理想が若し實行せられたならば、國家の富を農民地主、工匠、及び商人の間に分配するような結果を伴ふのである。さういふ社會は今日でも、外國資本家及び國內の將軍の干渉を受けぬ支那の或地方には殘つて居る。此後者の場合は、古代の劍に依て權利を獲得する習慣の復興であり、前者の場合は近代工業主義の斷片を示してゐるのである。けれども若し外國の勢力を驅逐して鞏固な政府を確立することが出來たならば、支那は、佛國革命が自由主義の理想を實現した後の佛蘭西に酷似するであらう。さういふ社會に於ては、私有財産の廢止は、餘り人の

反對を惹かない、何故ならば私有財產制度は不平等であるにもせよ、それに優る制度が明白に分つて居らず、且つ勤勉と才能とのお蔭で、何人も立身出世が出來ると考へられて居るからである。そしてたとへ金錢はその所有者に利益と悅樂とを齎らすにもせよ、近代的資本家が他人に對して振ふような權力を與へることは到底出來ない。農民地主又は工匠となるには極めて僅少の富があれば足り、一旦此地位を獲得したならば、特に不運でない限り、主人といふものに賴らずに生活費を稼ぐことが出來るのである。

けれども一旦私有財產の權利を認める社會の中に工業主義が行はるゝに至るや否や、形勢は一變する。これは消費物の代りに資本を生產する勞働者——例へば鐵道を作る人——は、緩漫な生產の過程を辿る間中、活き、且つ多勢で協同して働かなければならぬ。斯くて彼等の勞働を指導する權力が必要であり、此權力者は勞働者が其仕事に從事して居る期間中、彼等に衣食を支給し得るだけの餘剩の者を有しなければならぬのである。企業を指導し、且つ勞働に對して支拂をする人々は、其報酬として生產物の所有權を要求する。斯様にして是等の人々は資本家、卽ち生產手段の所有者となるのである。隨つて工業の在る所へ何人も資本家の許諾を得ずしては生產することが出來ないといふことになる。賃銀勞働者はどの資本家かに傭つて貰はなければ生活することが出來ないので、資本家は勞働者の死命を制してゐる。斯樣にして工業も亦、土地が大地主の手中に在る場合の農業と同じような境地に陷つて居るのである。

けれども工業上の事業には協同作業が必要なので、農民の土地所有に似た方法で、賃銀勞働者を資本家に對する依屬的地位から放つことは不可能である。一切の勞働者が同じ經營の下に在り、生產物が同一所有權に歸屬するといふことは、あらゆる工業上の大事業に必須の要件である。例へば鐵道は、權力の出處が一でなければ作ることが出來ず、農民の土地所有の場合のように、各々の被傭者が線路の一少部分々々に對して、絕對の所有權をもつて居たならば、働か

すことが出來ない。個々の職工は、いかなる方法に依つても、工匠の如き獨立を保つことは出來ない。そこで個々の勞働者をして、特權を有する一團の人間、卽ち資本家の獨斷的意思に頼らずに、同じ勞働者の社會にのみ頼らせる方法として、社會主義が起つたのである。

他の總ての理由よりも、主として此理由のために、個人主義を强調する自由主義は、資本主義の害惡を救治することが出來ないのである。

此根本的な困難と關聯した種々の發達があるが、其等は總て、資本の私有が行はれる限り、工業主義の滿足な發達は不可能であるといふ說を裏書きして居る。資本主義と帝國主義的戰爭との關係に就ては、資本主義と國民主義との交互作用を論ずる際に述べようと思ふので、今は此問題には觸れずに置く。けれども現在の時代特有の、密接に關連した問題がある、それは卽ち重要な資本主義的企業と國家との關係が愈々緊密になつて行く事である。

競爭は價格を引下げるので、工業的事業は益々大仕掛となり、且つ合同に依て利益を得る。二つの理由のために、總ての事業は獨占を目掛けて進んで居る。トラストは、自由主義の理想であり、且つ米國がトラスト禁止令に依て徒らに抑制しようともがいた自由競爭をズン／＼驅逐して行く。斯樣にして社會は、或必要な貨物の供給に對しては、一つの會社に頼ることゝなる。そして其貨物が、鋼鐵や石油のように戰時の國家の必要とするものならば、國家はトラストのお蔭で存在することゝなる。斯樣にして、國家がトラストを所有しなければ、トラストが國家を所有するといふことになる。亞米利加は工業的に最も進歩した國であるから、此狀態は亞米利加に於て最も顯著である。けれども大戰以來、何處でもさういふ傾向になつて居る。そこで吾々は、進歩した工業國に於ては、總ての大工業が既に國家に依て運用されてゐるといつてもよい。けれども國家は人民を欺き誤魔化すために存在を許されてゐる名のみの政府では無く、トラ

スト貴族であることを陳言しなければならぬ。

近代の工業的國家は、名目上民主的であつても、事實上資本家の機關であるとは、社會主義者やサンデイカリストの常套語である。是は勞働爭議中の國家の行動——特に合衆國に於ける——に徵すれば、明らかに疑ふ可からざる事實である。合衆國の如きに於ては、罷工者を鎭壓するために軍隊を出動し、資本家が不合法的に暴力を用ゐた場合には、裁判所まで無理に抑へつけてしまふのである。佛蘭西の如く、徵兵制度の存在する國に於ては、罷工者を召集して、陸軍刑法の取締の下に置かれる。英國はまだ罷工者を取扱ふ技術を十分に備へてゐないが、早晩完備するに相異なく、最近その目的のために、特別の法律を通過した程である。何處に於ても、國家は勞資間に中立の立場を採ることは無い。法律と秩序の維持といふのが其口實である。けれども法律は其本來の性質に依て、常に既成の不公正の味方をするものである。奴隷制度が平和的手段で廢止せられるものでないといふことを北亞米利加人に知らせたのは、大審院に於けるドレッド・スコット事件の判決であつた。

……………………

上に述べた理由以外にも、國家が資本家の味方をするには、種々樣々な理由がある。先づ第一には、直接間接の、單なる腐敗である。勞働者の利益を主張することに依て權力を得た人は、自分の選擧人に對して忠實であるよりも、勞働者の利益を賣れば、收入は十倍し廿倍するといふことを發見する。此說明は多くの人々を首肯させることが出來よう。次には、暮し向の樂な人々と愉快な生活を送る惡い感化がある。其ために其人の經濟的不公正に對する抗議は段々骨拔

きにされ、改良は徐々に行はれねばならぬといふことを示す理屈は何でも受入れるやうにさせる。更に次には、人を同情的、理想家的にするよりも、獨裁的執行的にする、權力の心理的影響がある。是等の事柄を離れても、資本家には、物價を自由に左右して、市場を混亂せしめ得ること、新聞を操縱して何人の人格をも毀損し得ること、必要なる供給を斷ち得ること、戰時には、莫大の賄賂に依て機嫌を取られぬ限り、敗北をも招き得るなどの恐ろしい力がある。そして總ての淺慮な人々は、社會の現狀がいかに不公正であり、それを擁護する方法がいかに殘虐であらうとも現狀擁護論者よりも、社會組織の變化を望む者が、變化の過程に含まれて居る不秩序に對して責を負はねばならぬと考へて居るのである。

自由主義の理想は、人は各々自己の經濟的利益を追求する自由があると假定した。貴族的な地主の支配する舊式國家に對する商人と製造家との反逆として、自由主義は十八世紀及び十九世紀を通じて貴重な事業を行つた、けれどもその理想は、工業主義の齎した組織の增加の結果として、時代遲れのものとなつた。自由競爭論者は、相共に有力となり、今猶ほ發達の道程にあるトラストや勞働組合に對して、空しく戰つた。個人主義者は、國家の支配から事業を解放した後に、國家を事業の支配下に委ねたことを發見した。主として軍國主義と戰爭との仲介に依つて、國家が大企業の利益の奴隸となりつゝある際に、勞働者は層一層國家に隸屬するやうになつた。此過程がどれほど進んで居るかといふことを、スタンダード石油會社專務エー・シー・ベッドフォード氏は、（一九二〇年十一月廿日）紐育の諸新聞に寄せた手紙の中に無邪氣に說明してゐる。彼は伊太利のことをかう云つて居る。

『伊太利の主要輸出品即ち勞働者は、將來に於ては政府の管理の下に置かれ、諸外國に對する伊太利移民の利益は、一層十分に保護せらるゝに至るであらう。それのみならず、伊太利が勞働者と引換へた石炭其他の工業の原料品を輸入して最大の利益を得んがためには、伊太利の勞働者を科學的に分配することが望まれて居る。社會主義者は、此計

釜を以て、伊太利勞働者に自己の鄕土を選ぶ權利を與へぬものとし、且つ彼等は合衆國が、本國の國籍を保留したまゝで移住しようとする者を入國させぬと信じてゐるので、結局伊太利の移民を拒絕することになるといつて反對しよう。

勞働者が石炭と交換せらるべき輸出品として取扱はるゝに至つて、實に自由主義の思想を距ること遠しといふべきである。

何等かの形式に於ける階級戰爭は、斯の如き狀態の避け難き結果である。そこで吾々は今、階級戰爭を生ずる要素を算へて見よう。

一、工業主義は社會をより有機的にし、隨つて國家の權力を增大する。

二、工業主義は、資本の使用を管理する人々に、他人の生活を支配する全然新しき權力を賦與する。

三、工業主義以前の時代より傳はつて來た私有財產制度は、或私人、即ち資本家の手に資本の管理を委ねた。

四、斯の如くして資本家は、工業主義が國家に與へた强大なる權力と共に、國家を支配する力を收め得たのである。

五、共間に、工業主義に依て生じた新しい生活の習慣は、賃銀勞働者の傳統的信念を亡し、一方敎育は彼等に社會組織を批判する。新しい智能を與へたのである。

六、敎育は勞働者に政治的デモクラシーを得しめた、然るに戰鬪による國家の支配は、政治的デモクラシーをして殆ど無意味ならしめた。

七、經濟的大團體組織の必然性と、資本の使用を管理する人々の權力のお蔭で、自由主義の考へたやうな個人的自由はもはや不可能となつた。

八、故に社會が資本家の奴隷たることを逝れる唯一の道は、社會主義の主張の如く、社會が資本を共有することである。

九、資本家は現在の制度に依て利益を得て居る以上、彼等に對する反對の勢力が非常なものとなつて、彼等が進んで現地位を抛つに至る場合の外――左樣いふことはとてもあり得ない――階級戰爭に依らずには、彼等を驅逐することは出來ない。

私有財産の久しい傳統の結果として、それに對する反對論の發展は遲々たるものがある。マルクスの法則によれば勞働階級は總て社會主義でなければならぬ筈であるが、實は左樣でない。然しこれが傳統の影響のせいである限り、工業主義は傳統の有力なる溶解劑であるから、マルクスの法則は漸次に實現さるゝに相異ない。隨つて吾々は無産者の間に於ける社會主義者の數は絕えず增加して居ること、また資本が個人の手に留まる限り、勞働界に平和の望み少きことを認めてゐる。勞資の衝突は、國民主義によつて複雜に譯が分らなくされて居る。（國民主義のことは次節に述べることにする。）けれども資本主義の存續は益々民衆の反抗を喚起すべく、且つ早晩資本主義的工業を不可能にする階級戰爭を招くに相異ないといふ、吾々の主たる結論は、國民主義に依て動かされるものでない。此階級戰爭から生れる結果は、結局二つあるのみである、……………………………………………………………………………

……………………………………………………………………

工業主義の結果として益々組織と管理とが必要となり、隨つて個人的資本家は、社會の他の人々が必然に失つてしまひ、且つ工業がよく發達した時に、少數階級に與へられる異常の權力のために、社會全體にとつて有害となる所の自由を獨り保留する。不都合な秩序を紊亂する生殘者となるのである。資本主義は本來過渡的なもので、工業時代まで生殘した私有財産の形式であり、生産が協同的になつたので、もはや生存の餘地が無くなつたのである。資本主義は工業主義に適しないので、結局自己の滅亡を促すような反對を惹起する。たゞ問題は、勞働者が資本主義の廢趾のあとに共産主義を確立するだけに強いか、又は資本主義が、鬪爭の過程の中に、吾々の全工業的文明を破壞し去ることが、出來るかどうかといふ一事に係つて存する。

ラッセル教授の印象

學者としてのラッスル

文學博士　西田幾多郎

ラッスル氏が先日入浴の際、山本氏の招待によつて、京大の人々の中に混つて、私も同氏に逢ふことを得た。今度改造社から私に氏の印象記を書けと云ふのであるが、私は不十分の英語で多少の話をした位のことで、印象記を書く樣な鋭さと器用さとを有たないのを遺憾とする。唯ラッスルといふ人は社會改造を唱へる人であるから、街頭に立つ志士風な所もある人かと思つてゐたが、おちついた學者風の人で何だか「プリンチピヤ・マテマチカ」が氏の本質らしくも思はれた。無論子房は容貌婦人の如しといふから何とも分らないが。

私はラッスル氏の著述をさう讀んで居るわけでもないが、二三の書を讀んだ所から、學者としての同氏について一言して見たいと思ふ。

ラッスルがこれまで世に出して居る著述によつて哲學者として如何程の人であるか。氏は認識論に於て新實在論を主張する人である。此點に於て實用主義を主張するデュエー氏とは正反對の立場に立つて居る。新實在論と云へば、實用論者か知識を生活の手段と見做し、眞理はすべて主觀的、相對的であり、唯生活に有用なものが眞理であると主張するに反し、眞理は知るといふ心理作用を超越し、我々が知ると否とに關せず、眞理は眞理であり、從つて眞理は客觀的で不變的であると主張するのである。此の如き新實在論は實用主義や人本主義に反對して起つたものと思はれ、英米に於て可なり行はれて居ると思ふ。ラッスル氏は英國に於ける新實在論者の中で有力な人であると思ふ。それでは新實在論といふものは認識論として如何程の價値

を有するものか。これは無論人々の考にて異なるであらうが、私は實用主義論にも一種の意義を認めると共に、認識論として新實在論の方が正しく眞理其者の性質を明にして居ると思ふ。併し私をして有體に云ふことを許さるるならば、私はラッスル氏などの新實在論には左程の期待を有するものではない。新實在論の如き考は十九世期の前半に於て既にボルツァーノがその大著「知識學」に於て明に論じて居り、近くはマイノングの對象論やフッサールの現象學の中にも含まれて居る。又現今我國に於て多少知られて來た西南派の哲學の如き目的論的批評主義として、實用論を深くした樣な所があると共に、一方に新實在論の如き考をも含んで居る。近來、獨逸哲學と云へば、惡くいふのが流行の樣であるが、私は此等の哲學はその基礎に於て、又その範圍に於て一層深く大きなものがあるではないかと思ふ。

ラッスル氏はライプニッツの哲學について書いたものがある。ライプニッツについては無論多くの著述があり、且つカッシーラの書いた「ライプニッツの體系」といふ如きものもあるが、ラッスルのものは氏自身の見方があり、明晰に論ぜられた良書であると思ふ。此書によつても氏の理解力の鋭利なることが分ると思ふ。私の考では、ラッスル氏の學者として動かすことのできない地位は氏の數學の哲學に求めねばならぬと思ふ。氏は「數學の原理」といふ書をかき、後にホワイト・ヘッド氏と共に"Principia Mathematica"といふ大著述を出して居る。此方面に於ても、必ずしも氏が唯一の人とも云はれまじく、又氏の思想の基たる論理學や哲學について不十分に思はれる所もないではないが、兎に角かかる研究は從來あまり沒頭した人がなく、今の所氏の著述は此方面に於ける大著たることは何人も認めねばなるまいと思ふ。

ラッスル氏の數學の哲學についてその基礎となる哲學的思想が尙一層深く大きくあつて欲しいとは、私共にすら思はれないでもないが、數學者の中にはラッスルの數學の知識を危む人もある樣である。私は此點については何ともいふ資格はないが、デカートやライプニッツの如き偉人ならばいざ知らず、此種の仕事は双方の專門家からよく云はれないのが通常である。併し私は寧ろ此種の仕事を企てる人には、双方から同情を以て見なければならぬと思ふ。數學者がラッスルの數學の哲學の中に何か數學專門的の貢獻を求めるならば、それは求める人の誤であらう。ラッスルは數學の專門家として見る人ではなからう、又其書も數學其者を書いたものではない。唯數學と論理との關係といふ如きものを論じたとしてはラッスルには兎に角獨立の考があり、一角の學者であるといふことを許さねばなるまい。例へ

ばポアンカレの如き人でも、その「科學と方法」といふ書の中に收めた「新しい論理學」といふ篇の中に特にラッスルを目當として論じて居る、ポアンカレはラッスルに賛成して居るのではないが、その外の論文にもラッスルが引合に出されて居る。此種の問題を論ずる人は、氏の說を可とする人でも、否とする人でも、ラッスルなどを全然顧みない譯に行かないのである。又純粹な數學の專門書の中でも氏の書が引用せられることがあるではないかと思ふ。

私は玆に數學と哲學との關係について一言したいと思ふ。數學と哲學との關係については色々の見方があるであらうが、私は昔プラトーが數學を理性の直觀の一種と考へた如く、微妙なる數の關係に於て實在の純なる形相が示されたるものとして、深い興味を有ちたいと思ふ。此點に於てマールブルク學派の哲學に同情を有するのである。ラッスル氏の方向は之と異なり單に數學と論理との關係を論じ、數の根本概念を說明したものである。多少餘談にわたる樣であるが、ライプニッツの哲學が氏の發見せる微分學と深い內面的關係があると思はれる如く、ドュニン・ボルコウスキーの「若きスピノザ」といふ書に於て云つて居る樣に、デカートの分析幾何學は之によつて精神と物體との結合を計つたといふ考を面白く思ふ。デカートの哲學に於ては延長が物體の本質であつたのである。

ラッスル氏が我國一般に有名となつた社會改造についての著述によつてであらうが、私は氏の Principles of Social Reconstruction や Roads to Freedom などは學問上の著述として價値を論ずべきものではない樣に思はれる。私は唯、純學究としてのラッスルについて一言したまでである。

ラッスル氏の認識論上の考を知るに便なるものは Philosophical Essays 1910, The Problem of Philosophy などあるが、前者は絕版にて、得難い樣であるから、後者を見るの外ない。後者は Home University Library の中のもので、極めて得易いものである。氏の數學の哲學については氏の前に書いた The Principles of Mathematics 1903 はこれも絕版となつて居り、Principia Mathematica の方は符號のみ多く、讀み難いものであるから、氏が獄中で書いたといふ Introduction to Mathematical Philosophy がよからうと思ふ。

ラッセル氏と露國及日本を語る

土田杏村

1

九時頃になつてもラッセル氏は容易に食堂へ出て來さうになかつた。病後に加ふるに連日の疲勞で無理も無い。もう間も無く食堂がしまふからといふのでラッセル氏に其の旨を通ずると、「今直ぐに行く」といふ返事があつて、暫くすると、應接室の前の廊下にシガアをくゆらしながらびつこを牽いて歩いて來るラッセル氏の白服姿が見られた。側にはジャパンクロニクルの主筆ヤング氏と及びブラック女史が立つて居た。

一見して私は此の丈の高い、身體の細い、眼の鋭い人をラッセル氏であると見た。私は『改造』の社員の人達と一緒に靜かに氏の後へついて食堂へ這入て行つた。朝の時刻がもう大分に遲いので、都ホテルの廣い食堂には、殘つて食事をして居る客が少なく、「しんみりする會合をするには却て都合がよいな」と思つた。食卓に就いた處で私は山本氏から一同の人達に紹介せられた。

ラッセル氏は見るからに哲人らしい、瀟洒な姿をして居る。社會評論家として見ても、情熱の力を以て民衆を煽動するといふ側の人では無い。たゞすべての慣習や權威に誤魔化されないで、自己の學的良心の命ずる儘に正義と自由との聲を擧るといふ人だ。氏を危險人物だと言ふものは、自分等の不公平な慣習や權威に執着し過ぎて居る人だ。私は氏の著書で讀んだと全く同じい感じを其の風采の中に見た。哲人といふよりは科學者といふ方が寧ろ適當して居るかも知れぬ。氏と會見した二日間を通じて、氏はどんな處でも他人に無意義なお上手を言はなかつた。換言すれば、氏は少しも外交家としての交際振りを見せなかつた。其の論ずる問題が日本のものであれ、英國のものであれ、すべてに通じて至極公平冷靜な、インタアナショナルの態度を取つて居たのである。

其の態度は私をして直ぐに氏に傚れ近づかした。そしてゆつくり氏と英國や日本の問題を話し合ふ悦びを、私に持たせてく

れた。

ラッセル氏の來朝がもつと早くから分つて居つたならば、私はうんと整頓せられた質問を持つて行つて、正當に自分の疑問を明かにし、又同時に氏の學說に對する私の不滿を或る程度まで言ひ現はす事が出來たかも知れぬ。けれども私は過日來の自分の專門的研究に時間を取られて了つて居て、其れだけの整頓をする餘裕も無く、たゞ不斷に考へて居る樣な疑問を勝手に一端から述べて見るより外は無かつた。加之自分の英會話は甚だ不完全であるから、話すといふ事に多くの努力が注がれて了つて、自分の思索を妨げてはいけないと思ひ、始終橋口氏の通譯を待つて完全な理解を得る事にした。

2

どういふ著書が日本で飜譯せられて居るか、どんな譯し振りかといふ樣な話が可成りに長く續き、「直接行動」といふ語の解釋が日本では正當に出來てゐないといふ樣な話から、食事の終つた處でそろそろ哲學上の議論が出始めた。

『あなたは哲學の上では新實在論の立場を取つて居られる。然るに社會哲學の上では本能論を非常に重要なものとして取つて議論して居られる。私は未だ此の兩者の間の中繼ぎをする貴方の議論を拜見しない。兩者の間に何等かの矛盾を來す事は無いであらうか。』

『私は兩者が矛盾を來すとは考へない。あれで何の差支へも無いと思つて居る。君はどういふ點を問題にしようといふのであるか。』

『貴方は理論哲學の上では甚だ論理的なる新實在論の立場を取つて居られる。倫理學としては、ムーア氏の態度などゝ共通するものゝ如くである。然るに社會哲學は心理學的なる本能論の上に立つて居る。貴方は嘗て熱心にプラグマチズムの立場を攻擊せられたが、今若し此の本能論を徹底せんとするならば、或は正にプラグマチズムに墮するの危險は無いであらうか。』

此の私の質問は、餘り巧みな表現では無かつた。實はラッセル氏の意見には論理的妥當性と現實的經驗とをごつちやにして居る議論が非常に多いのである。メリイ・フイツトン・カルキンスの『フイロソフイカレヴユウに於ける』論文、『新實在論に於けるバアトランド・ラッセル氏』などでも其の事を注意して居る。（全體として立派な議論でも無いが）私はなほ後でラッセル氏の所說に就ての疑點を長い書信で書き送つた時には、其の中に次の一項を書きつける事を忘れはしなかつた。

『貴方の所說に隨へば、外的世界の存在は我々の本能的信念の上に基礎を置いて居るといふ。併し一方には、本能は單に心理

學的事實であり、我々のアプリオリ的知識の基礎であるに堪へない。又他方には外的世界の存在は單に論理的に妥當である可きである。然らば、論理的妥當性は心理學的知識の上に基礎づけられ得るや。』

ラッセル氏は私の質問に對して熱心に次の様に答辯した。

『自分が哲學の方で論じて居る事は、凡そ何が眞理であるかといふ問題である。此の點に立つて自分はプラグマチズムに反對した。然るに社會哲學の上で問題にしたのは、凡そ人間は何を爲すやの問題である。何が眞なりやと、何を爲すやとは全く異つた範圍に屬する問題である。其れ故に自分は從來の論じ方をあれで正當のものだと思つて居る。此の事を君は理解してくれるか。』

私は靜かに氏の議論の趣旨と、其の著書の上での論旨とを對照して見た。そして私が從來疑問にして居た、氏の倫理學と社會哲學との關係に就き幾分の解明を與へられた事を悅んだ。勿論其れには大いに不服の點もあるが。

『貴方の議論の趣旨はよく了解する事が出來た。』と私は答へた。

見ればブラック女史はもう自室へ引き擧げて了つた。ヤング氏も應接室の方へ去つた。食堂にはたゞ我々だけが殘つて居た。會話は應接室の方で續ける事にして、一先づ話を打ち切り、一同は食卓から離れた。食堂の狹い出口の處で私は氏に後れて出ようとすると、氏は私の後ろへ手を廻して、勞はる樣な親切な態度で私を先きに出してくれた。

3

廣い應接室の中は、可成りに風通ほしがよいけれども、其れでも溫度は十分に昇つて居た。其處には五六脚の椅子が並べられ、ラッセル氏は「脚が痛いから御免を被る」といふので、樂々と脚を前へ伸べ出し、ヤング氏、「改造」社員、僕と其の周圍を取り圍んだ。非常に安易な氣分に充ち々た會合であつた。

『日本で私の勞農露國觀の評判が惡いといふのは、如何なる點に就てゞあるか』

ラッセル氏は先づ私に質問を發した。此れは先きに食堂でさうした事を私が話して居たからである。私は其の準備として、別の方面から話を出し始めた。

『貴方の勞農露國觀には事實上の間違ひを持つて居るといふ批評が先づ聞かれて居る。例へば貴方の事實の記述とランスベリイ君の事實の記述とを比するに、互ひに相當に違つた點があるでは無いか。其の一例を擧げれば選擧の場合の干渉である。貴方の記述では共産黨員の數は、露國に於て實際は甚だ少なく』

選擧は政府の爲めに甚だしく干渉せられ、强制せられ、サヴエート内部の議事も亦其の如しと書いてある。然るにランスベリイ君の記述によれば、事實は必ずしもさうで無いものゝ様に見えて居る。選擧等も可成りにデモクラテイツクに行はれて居ると書いてある。現實の露國の狀勢に就て、私は自分で直接に觀察する機會を得たく思つて居るのであるが、今は記述によつて知るの外は無い。我々は抑も何れの記述を眞實であると信ずべきであるか。

ラッセル氏は此れに對して次の様に答へた。

『自分の觀察は決して誤つて居るとは思はない。自分は確實なる露國の實情を正直に叙述したと信じて居る。其の事はランスベリイ君自身よく知つて居る筈である。自分等兩人の間には其の點では可成り諒解が出來て居る。たゞランスベリイ君の立場としてはあゝした誤謬の記述を書くより外は無かつたのだ。其れは我々兩人はよく分つて居る事である。ランスベリイ君は余の叙述に對して懇切な批評を書いて居るが、君は其れを讀まなかつたか。

『私は未だ其れを讀んで居ない。其の記述は何の上に於てゞあるか。

此の時ヤング氏が代つて口を入れた。

『其れはデーリイ・ヘラルドの上に於てである。自分も亦ランスベリイ君の場合としては、あゝした誤謬を書くより外には術が無かつたものと信ずる。

此れは私に取つて意外な知識であつた。今にも此處へ直ぐにランスベリイ君を引つ張り出して來て兩方の對決をしたい様な感情になつた。私は容易にラッセル氏の言葉を信ずる事が出來なかつた。

『君はランサム君の記述を讀んだか。

『ローソン』とや。

私はラッセル氏の言葉を聞き漏らした。

『ランサム君である。

『あゝ。『露西亞に於ける六週間』……

言はせも果てずラッセル氏は言葉をついだ。

然り『露西亞に於ける六週間』の著者ランサム君の事である。ランサム君も亦よく此の事は諒解して居るのである。自分の記述が眞であるか、僞であるか。自分と行動を共にした英國勞働派遣委員の報告書を見ても分ると思ふ。此の報告は自分の叙述を裏書きして居るが、君は其れを讀まなかつたか。

4

私は何にせよ、此等訪露見聞者の一々の記述がお互ひに違つ

て居るのは、隨分怪しい事だと思つた。

ラッセル氏は引き續いて勞農露國の狀態を次の如くに語つた。

『何にせよ、現在のボリシエーヴイキの幹部の人達の現在やつて居る事は、往年の露帝のやつて居た事と何の相違も無い專制なのである。彼等に逢つて其の事を言ふと、彼等は全く無邪氣に「其の通りだ」と答へて平氣である。

『露國至る處不平の聲の聞かれぬ處は無い。何處へ言つても我々は訪露見聞中に彼等人民から其の不平を訴へられて居た。

『ボリシエーヴイキの幹部は其の爲めに極度に暗殺を恐れて居る。自働車に乘つて通り過ぎる時などでも、非常に其の速力を速めて、一擧に通り越して了はうと努力して居る。勞農露國現在はたゞ此の少數のボリシエーヴイキの爲めに支配せられて居るのである。(併しラッセル氏は、現在の反ボリシエーヴイキ軍に應援する聯合軍の態度をも攻擊して居る。デニキン軍やコルチヤツク軍に對しては何等の好意をも持つては居ない。此の點をヤング氏には詳細に談話せられたといふ事であつた。ラツセル氏の趣旨では、大體現在の聯合諸國の露國封鎖を解き、缺乏せる物資の輸入を計つたりしてやれば、其れで現在の專制狀態も自ら緩和せられるに至ると考へるものゝ如くである。併し其の點に就ては詳細の意見を聞く時間が無かつた。」

ラッセル氏は尚ほ言ふ。

『併し其等事實の如何は今詳しく論ずる必要はあるまい。ボリシエーヴイキが其の過去に如何なる罪惡を犯したかは、今改めて問題にしても仕方の無い事である。其れは全く無意義の問題だ。たゞ我々が今問題にしなければならないのは、ボリシエーヴイキが其の理論に隨つて今後如何に爲すかといふ事である。』

即ち彼等の理論其のものが問題になると思ふ。

『ボリシエーヴイズムは民衆の爲めに立つと言ひながら、其の實今や民衆を裏切つて居るのである。而して其の裏切りは今後如何になつても止みさうに無い。彼等は次第に其の當初の目的から離れて了つて、自らを往年の露帝の地位にのぼせて了ふであらうと思ふ。

私は其れに應じて言つた。

『私自身亦其の如く考へて居る。私は選擧の問題の如き、餘り問題にして居なかつたのである。選擧が極度に干涉されて居ようと、其れはレエニン氏自身の「無產者獨裁」の趣旨から見て、少しも不都合で無い事では無いか。其の點でレエニン氏自身の實行と理論とは全く一致して居ると思ふのである。併しレエニン氏が此の獨裁は單に理想への過渡期のものであると言つて居るのは肯定出來ない。過渡期々々々と言ひつゝ其の實獨裁

は永久に續けられねばならない性質のものであると思考する。

『だがレエニン氏は此の獨裁時代は五十年だけのものだと言つて居る。

とラッセル氏は微笑した。ヤング氏は其の五十年の年數を我が日本の憲法政治の上に對照して興味深く物語つた。

5

私は更らにボリシエーヴイズムに對して、我が國内では、どれだけの無理解が行はれて居るかをラッセル氏に語ることゝした。

『貴方はボリシエーヴイキが過去に何を爲したかは今問題にならぬ、我々が現に問題にす可きは、其の理論に隨つてボリシエーヴイキが今後如何に爲すかといふ事である、と言はれた。私も亦全く其の通りに考へて居るものである。又若き思想家は皆な然か考へて居るのである。獨り國民の大多數は未だにボリシエーヴイキを「過激派」と呼ぶ事を廢して居ない。彼等は爲めにする處ある記述などに誤まられて、ボリシエーヴイキが過去に爲した惡虐無道を攻撃して居る。西比利亞邊から齎らされた曖昧な報道などを眞らしく吹聽して居るものもある。甚だしきはボリシエーヴイキは猶太人の世界顚覆の大計畫、秘密結社の一大表現だなどゝいふ、まるで出鱈目の誤報を、パンフレットにして國内へ撒布したものさへある。尤も此の考へは露國内でも行はれて居た樣であるが、現に此の誤報に可成りに強い程度で田舍の紳士達の頭に染み込んで居る。たゞ國民の新らしい階級はまるで其等の事に頭を向けて居ない。過去の無道はあつたにせよ、無かつたにせよ、其れは全く問題にならないのだ。

私は此の時計らずもウエルズ氏とゾーリン氏と會見した時のウエルズ氏の記述を思ひ出して可笑しくなつた。氏は其の記述の中で『我々お互ひに、我々の社會組織が、上品な氣の好い人間を、如何に磨消し、破壞し、又狂氣にさせるかの仕方に就ての話をした。我々の間には共通憤慨のフリイ、メーソンリイがあつた。』と皮肉を言つて居る。今正にラッセル氏と私との間にも「共通憤慨のフリイ、メーソンリイ」が成立して居たのである。

『全く其の通りだ。何れの國の資本家の遣り方、官僚の遣り方も同じ樣なものである。

と言つてラッセル氏は笑つた。

『今單にレエニン氏の主張する理論だけを聞くとするならば、彼は自らの所說を最も正しいマルキシズムの發展だと言つて居るが、貴方は此れに就て如何に考へられるか。

『余はレエニズムを正當のマルキシズムの發展だとは考へた

「レエニン氏自身は如何にも「自分はマルキシズムを正當に發展したのだ」と正直に考へて居る樣である。併しあれは寧ろレエニズムであつて、レエニン氏自身の考へである。

此處で私はレエニン氏自身の著書を直ぐにも此處へ持つて來て、一々の言句に就き意見を交換したい樣な氣になつた。が今は其れだけの時間もないのと大體の結論に於て私は全くラッセル氏の其れと一致したので、大要だけの意見を聞くに止めることゝした。

『私も其の樣に考へて居る。レエニン氏は正直にマルキシズムを發展したと考へて居るが、あの考へはレエニン自身の腦中から出て來たものであると思ふ。現にボリシエーヴイズムはマルキシズムを或る點で變化したものだと論じて居る學者もあるが、私は其れに同意して居る。

其れに關聯して問題は又別の方向に轉換した。

『レエニン氏とカウツキイ氏との論爭に就て貴方はどういふ批評をお持ちであるか。

『何れにも贊成し得ない。何れも其れ〃〃に都合のよい樣にマルクスを理解して居ると思ふ。元來彼等はマルクスの言葉を、「天よりの聲」の樣に大事がつて、絶對の權威あるものとして取扱つて居るが……

と言つてラッセル氏は笑つた。一同も笑つた。

『マルクス主義者にさうした態度のある事を私も同樣に感じて居る。レエニン氏の言を見れば、其の引用は如何にもマルクスであらう。カウツキイ氏の言を見れば、此れ亦同樣である。マルクスにしても、其れ〃〃の時と場所とに隨つて、いろいろの言葉を發して居たであらう。其等の中から自己に都合のよいものを拾ひ出して來れば、レエニズムも出來ればカウツキイズムも出來よう。兩者とも其の點では何等の誤謬をも犯しては居ないと思ふ。併し貴方は此の兩者を共に排斥するとして、なほレエニン氏とカウツキイ氏と何れの方がより正當にマルクスを祖述して居ると思はれるか。

此の質問は、ラッセル氏の社會改造に於ける態度を定める上から私には必要であつた。

『カウツキイ氏の方がより正當だと思ふ。

此れも一々の著書に就て意見を聞きたい處であつたが、兎に角今は其れだけで質問を打ち切る事にした。

6

其後一同の間には種々の問題で議論の花が咲いた。各國の思想自由の問題や、其れに關聯して英國の政策、日本の某々政策等が議論の焦點となつた。ラッセル氏は「日本はまだ思想が

大いに自由である。余の如きものが何の拘束をも受けないで自由に日本の土地を訪ふといふ事だけでも、日本の思想干渉は其の程度が低い」と揶揄したり、

『獨裁主義は現在の露國としては寧ろ適當した政體であるかも知れない。東洋諸國も亦デモックラシイの榮え得ない國である。此處にも亦×××が適當して居ると思ふ、

といふ議論があつたりした。此れは支那での演説にも主張せられて居たが、東洋にデモックラシイが實行し難いといふ意見には私は寧ろ反對意見を持つて居た。

其の時突如としてヤング氏は我々に向ひ、

『一體諸君は現在の日本を如何なる方法を以て改造しようと欲するのであるか。

といふ重大問題を提起した。一座は急に嚴肅になつた。此れはラッセル氏自身も聞きたい問題であらうと思ひ、私は靜かに次の如き答辯をした（併し此處には概略だけを書く）『私は次の如き改造意見を持つて居るものである。ヤング氏、貴方も現に日本に住まはれて知悉せられる如く、現在の官僚的頭腦の持ち主によつては、日本の狀態は今後益々惡しくはなつて行くが、よくなつて行きさうにも無い。議會の如きは極度の腐敗を爲して居る。何等眞實の民意を代表するものではない。心ある國民は今や全く其等の官僚者から其の心を離して了つた。現在の如き政策ならば、達する處まで達して大失敗を演ずるがよいと考へる樣になつて居る。改造の方策は全く其の點に係つて居ると私は思ふ。國民の若き階級の心は現在の議會からすつかり離れて了つた。此處に我々は此の國民の若き階級を糾合して國民の舊き階級に當る。其の第一歩は議員選擧に當つて、其等の若き階級により、古き階級を支配するといふ事だ。選擧權を有するものは戶主たる古き階級であるけれども、家庭にあつて實際の仕事を爲し、村の實力を占めて居るものは其等の青年階級だ。此等が其の勢力を糾合し、（以下二行削除）……。斯樣にして現在の議會の議員の總交迭を爲すに至るのである。新らしい政治は其の時から始まるだらう。

私は現在の議會に普選案を持ち出し、其の結果新らしい代議士を選出するなどいふ生ぬるい遣り方は駄目だと考へて居る。現在の制度のまゝで實力を支配する方法は幾らでもある。（議會主義を理想として取るといふ意では無い。）ラッセル氏は始終默々と傾聽して居た。ヤング氏は更に質問した。

『さうした方案が果して成功するだらうか。

『無論成功する。現在の地方の青年階級さへ自己の地位を意識したら直ぐに出來る事である。

と言つて某々選擧區に於ける過去の實例を私は話した。ヤング氏は言ふ。

『現在、地方には青年團なるものがある。此れは非常の勢力を持つて居る。此の青年團の青年は、君の所謂青年階級に屬するか、或は其れの敵であるか。

『青年團は全く●●●の出店である。某々團體が●●●の出店なると全く同一の事だ。其れは無論古き階級に所屬して居る。各地方に於ては此の青年團の青年と私の所謂若き青年階級と兩々對峙して支配を爭うて居る。現在は勿論若き青年階級の方が其の數遙かに少ない。

『日本に於ける青年團の組織なり歴史なりを話して戴いたらラッセル君も大いに悦ばれることゝ思ふ。

此れには山本氏が詳細なる説明を與へられた。私はなほ其れに一二の實例を附け加へた。

『現に●●●は地方の視學などを集めて新思想の批判の講習を開き、其の視學は地方へ歸つて其れ〻〻の青年團に講習での知識の受け賣りをやつた。處が其の批判は全く滅茶〻〻のひどいものである。ボリシエーヴイズムもクロポトキンも勝手に作りかへられ、勝手に虐殺せられて居る。しかも其の受け賣りをやるに、一々ノートをひろげて、滑稽至極の講義をやつて居る。聞いて居る青年の方が笑ひ出した位だ。クロポトキンの名前をさへもノートを見なければ言へない講義である。

此れにはラッセル氏もヤング氏も笑つた。私は自分の見聞した幾つかの滑稽談を青年團に就て知つて居た。

『何にせよ青年の新社會思想に關する知識といふのが此の程度のものである。青年は誤つた知識、フリイ、メーソンリイ風の知識を傳達せられて居るのであるから、新社會思想は悉く害惡を持つたものだと思つて居る。此れには現在の新聞も亦大いに罪がある。新聞は大膽に其等の新思想を取扱ひ得ない。地方青年の知識はたゞ此の視學風の悪説教師と、資本家の手先きになつて居る大新聞とからだけ得られて居るのであるから、たまつたもので無い。

『然らば君の所謂青年階級は何より眞の知識を得て居るか。

『其れは新聞では無くて雜誌である。雜誌だけが新思想家の意見を掲出し、可成りの犧牲を拂つて新思想の普及に努めて居る。此れが爲めに青年階級に於ける雜誌の勢力は今や新聞と其の地位を顚倒した。見よ現在の新聞に見る可き評論は一つとして無いではないか。青年階級は新聞の社説などを讀んでは居ない。(新聞の讀者は武勇講談と貴族階級夫人の寫眞と、貴族階級家庭の破壊に伴ふ婦人の自殺事件との讀者である。)此れを以て日

本の輿論だなど、傳へられては大變の迷惑である。

7

『兎に角現在の官僚者の失敗が其の度を强めれば强める程、青年階級の心は其等官僚者から離れる、隨つて其の運動の勢力を强めて來るのであるから、官僚者が政策の上でしくじつてぼろを出せば出すほど、日本の改造は其の時期が早められて來る譯である。殊に其れが外交政策の場合であると一層力强い影響を與へる。

今まで默々として聞き入つて居たラッセル氏は、此の時突然私に一つの重大な質問をあびせ掛けた。(傳習的のパトリオリストは恐らくは腰を拔かして了ひさうな)

『其の場合君はどういふ態度を取るか。

私は直ちに其れに答辯した。

『さうであらうと思ふ。自分は日露戰役當時の露國の內情を知つて居るが、其の場合(二行削除)……。

此れは私の答辯を少し誤解したラッセル氏の言葉であつた。ラッセル氏の意見としては、日本に新思想が起る爲めには、日本が從來の樣に、(二行削除)……といふのである。或は其れが公平な批判であるかも知れない。私は直ぐに誤解を訂正し、更に戰爭に就ては次の如き意見を述べた。

『私は戰爭を欲しない。あらゆる手段を取つて日本が或る外國と戰爭する事を防止しようと思ふ。戰爭は人類の大罪惡である。併し若し不幸にして日本が或る一國と砲火を交へるに至つたとすれば、私は單に感情的な、又個人主義を單に團體に擴大した樣なパトリオティズムによつて此れを言ふのでは無くして眞に人間を、又文化を愛するが故に此れを言はふと思ふのであるが、私は日本が其の戰爭に於て慘敗する事を欲しない。戰爭は常に大資本家同志の利益鬪爭の戰爭である。日本が若し戰敗したとあれば、必らずや外國の資本家は寄つて集まつて我々に不當の經濟的重荷を負はせるに相違無い。加之日本は人種的に既に或る偏見を持たされる事になつて居る。戰爭が起れば、其の對手國の人種的偏見は頗る野蠻に發揮せられ、我が國民は過當の損害を被る事は、必らず有り得ると想像される。斯樣にして我國が戰敗すれば、國內の人民と文化とは革命時の露國が被つたと全く同樣の不幸に際會しよう。私は日本に生活して其の重大なる不幸を經驗したくは無い。戰爭にはやはり勝たなければならぬと主張する。併し其の種の戰爭は先づ經驗しないでも、累次の外交の失敗は、現在の官僚者とを交替せしめるに十分な刺激である。たゞ其れだけでよろしい。我々の目的は其れだけで達せられる。

8

ラッセル氏はやはり默々として傾聽して居られた。ヤング氏が前の如く質問の眞正面に立つた。

『外交が始終失敗を續け、現在の官僚者が次第に其の地位を失脚するならば、さうした青年者の勝利が現出するかも知れぬ。併し事實は寧ろ其れの反對であり、依然として日本の外交は成功し、官僚の鼻つ柱は強くなるといつた場合はどうであるか。』

『私は事實的にさうした場合があるとは想像しない。日本の外交は日に々々不利益な地位に立ち、官僚者は今後盛んに失敗を演ずるに相違無いと思ふ。だが一體貴方は、日本外交の成功とは事實的に何を意味しようとするか。』

『例へば今回の太平洋會議を持ち出す事にする。此の會議に於て海軍制限案が決議せられず日本は依然として軍備の擴張を爲す事が出來たとすれば、此れは日本の軍閥者に取つて非常の成功では無いか。』

『如何にもさうした場合はありさうに思へる。併し日本人は元來單なる虛榮心を持つた國民である。如何なる事實的の損害よりも、自己の名聲體面が損ぜられゝば、其れを何よりもの苦痛と感じて居る。日露戰後の結果にせよ、今回の講和會議の結果にせよ、冷靜公平に考へれば、何れも日本外交の大勝利であつたと私は考へて居る。併し一般の國民は皆な此の結果に不滿を持つて居る。（そして五大國への仲間入りといふ樣な事だけを悅んで居る。政友會などは極力さうした國民の單なる虛榮心を煽り立てる無邪氣さを見せて居る）何故なれば自己の體面心、虛榮心が餘りに强よ過ぎるからだ。其れ故に今後の外交に於ても亦同樣で、何でも既得權だと勝手に自分の思ひ定めて居たものが侵害せられゝば、其れで外交は非常の失敗を演じたと思つて居るのである。（米國移民排斥問題の如き、國民の感情は實際に經濟的に不利益を持つたといふ爲では無くて、たゞ日本人が亞米利加人などに排斥されて居るといふ事に憤激したのである。）例へば現在ランシング石井條約が問題になつたやうだ。今若し太平洋會議に於て此の條約が反古同樣のものとなり、支那に於ける所謂特殊利益が侵害せられたとあれば、國民の大多數は其れを非常の侮辱に感ずるのである。何にせよ現在の官僚者の外交政策は、今後に至り益々國民の同情を失墜する事は分り切つて居る。新舊交替の爲には已むを得ない。事實的にも或る程度まで日本外交が失敗するとも、私は其れを痛痒だとは感じない。さうした失敗は新舊交替と同時に私達の直ちに輓回し得る失敗である。

此處で問題は日米問題に移つた。一體日米は開戰に至るであ

らうか、又開戦すれば其の結果はどうであらう、といふ様な事を論じ合つた。ラッセル氏は此れに關して或る確固たる意見を持つて居られたけれども、今此處には紹介を遠慮するが當然の禮儀だと思ふ。

『併し人種的僻見といふ事に就き貴方は如何なる御意見を持たれるか。日本人はあらゆる場合に外國より人種的僻見の眼を以て見られて居ると思つて居る、だが、此れは或は日本人自身の僻み根性からかも知れない。我々自身は此の問題に就て是非の判斷が出來ないのである。此の點に就き外國人たる貴方より何等の隔意無き公平の觀察をお聞きしたい。

ラッセル氏は直ぐに答へて言つた。

『人種的僻見は其れほど問題にしなければならぬ事では無いと思ふ。寧ろ日本人自身が少し長い目に見過ぎて居るのである。又現在日本人に此れと言つて人種的僻見に依つての取扱ひを受けて居はしないでは無いか。假りに多少なりとも其れがあるとすれば其れは容易に釋け去る機會があると思ふ。朝から隨分長い會話であつた。ラッセル氏が時計を出して時間を見られた時には、もう午後の一時を過ぎて居て、一同は輕い空腹を意識した時であつた。前後四時間に亘る長い會話で、しかも始終精神の緊張を要する問題の論議に病後の氏を疲勞させたのは大變に濟まない事であつたと私は思つた。

一同は頗る愉快に傍に近い食堂の方へ席を立つて行く事にした。」

文明は寧ろ一様性

理學博士　桑木彧雄

この二十年の間に科學の哲學を論じた代表的の人々としてはマッハとボアンカレとラッセルとを擧げるに誰も躊躇しないであらう。マッハは物理學者であるが心理的方面に重きを置き、ポアンカレとラッセルとは共に數學者で、心理的よりは論理的

である、ラッセルは又特に記號的論理學を開拓したのである。マッハとポアンカレとは今は既に故人となつたが兩氏には嘗て私は逢つたことがあり尙鮮やかな印象が殘つてゐる。ラッセル氏には嘗てさういふ機會を得なかつたが今度初めて山本氏の好意でかなり長い時間氏と談話する機會を得たのである。私は先づ十四五年前に絶對運動といふことに就て一論文を書いたときラッセル氏の著書、ライプニッツの哲學、數學の原理、幾何學の基礎、及マインド誌上のラブの力學やポアンカレの著の批評などに大に益を得たことを述べたところ、氏は先づ、絶對運動論もアインスタインに依て大に變化したと云はれた。ラッセル氏は數學的點の自存、從て絶對空間の必須を說いてゐたので、主體論的ではあるが當時既にマッハ等の相對論とは大に異なつてゐたのである。氏は又絶對論を今でも主張してゐるオリバー・ロッヂを He is a fool と事もなげに云つて微笑された。又ホワイトヘッド（ラッセル氏と共にプリンシピヤ、マテマティカの大著をなしたる）の近時の相對性に關する議論を自分は理解することができないが君は如何など云ひ、ロッブの時間空間論を賞贊されたが、然しロッブの議論はアインスタインの特殊相對性の理論に當嵌まるものであるが一般相對性に一致しないものであることをロッブ自身明言してゐるに拘らず、氏は其新著を見ない爲に其點は熟知されなかつたやうであつた。ジョサイヤ、ロイスの絶對的プラグマティズムは、プラグマティズムと云ふのであるから相對論的であるが、然しながら絶對の字を冠するはラッセル氏等の數學的論理學の精細なのに影響されて思考の絶對性を基としてかく名けたのである。之に就て質問したところ、氏は答へて、ロイスは數學を知らないために數學的論理學を正解してゐない。例へば幾何學の三項關係『AはBとCとの間に在りの如き）と二項關係（AはBに關係すと云ふ如き）とを混同してゐる、ロイスのは絶對論と相對論との調和でもないと云ひ、近頃の物理學者特にアインスタインの傾向などでは物質を單に時間空間の四次元から論理的に組立てるので、極めて非物質的である。舊式の唯物論とは全く趣を異にしてゐる、之に反し心理學は生理學に影響を受けて物質的になつてゐる、この邊の調和がジェムスやマッハに依てなされてゐるなどと話された。氏のこの議論は新著の The Analysis of Mind 其他の中にも出てゐるので、丸善で恰もこの書が二三十部積み重ねてあつて能く賣れると說明されたので愉快さうであつた。又私が嘗てアインスタインに遇つたときの話をして同氏が文明に東西の系統があるのが面白いなどと私に話したことを語つたところ、興がりてそれらを他の同行の婦人に傳へながら、更に文明は寧ろ一樣性のものだと附加へてゐた。丸善でゞも普通の外人のやうにハーンの書物などを珍重がりもせずそれらは餘りに日本の過去に關係してゐると云捨てゝゐた。かやうにして私は上野から丸善へと半日を氏と共にして雜談の間に科學の哲學に關して氏が常に新しき道を開拓しつゝあることに深い印象を受け、氏の夫等の著書に一層の親しみを感ずるに至つた。

ラッセル及其の一行

早大教授　北澤新次郎

一

自分はラッセルの著書を大概讀んで居つた事とて同氏の來朝を希望して居つたもの丶一人である。そして氏が改造社の招待に依つて來朝し、同社の斡旋で我國に於ける社會問題研究者並びに社會主義者の或る人々はラッセル及び其の一行と會談する機會を得た。能くある事であるが或人に會見する以前の想像と會見した時の心持が甚しく違ふ場合がある。ラッセルに會見しない内は自分はあゝした社會問題の意見を有する人であるから極めて碎けたサツパリした人だと思つた。しかるに此の想像は全く裏切られて彼れは甚しく我儘な頑固な性質の所有者である事を知つた。其の性格の放射的實例は澤山あるが、彼れが横濱の埠頭に上つた時に新聞記者の連中が一齊にレンズを向けてマグネシユームを燃いた。由來マグネシユームが大嫌いな彼れは之れを止め樣と試みた。然し職掌柄記者の連中は、一切關係なしにドシドシ燃いた。ためにラツセル及其の一行であるブラック孃並にパワー孃は白煙の爲めに苦しい樣に見えた。玆に於て彼れは性來の短氣が爆發して彼の所持してゐるステッキで寫眞班を撒倒せしめんとし、其れでも聞かざる時に彼れは憤怒の餘り "You Beast!" と叫んだそうである。尤も我國の慣習に慣れない外客に取りて、我が國の寫眞班の人々のやり方に對して多少不滿の點があるであらう。人の嫌がるものを無理やりにレンズに入れる事は禮儀上餘り善い事ではない。しかし寫眞班の人々は決してラッセル及び其の一行に對して悪意を持てやつたわけはない。咄嗟の場合又やむを得なかつた事であらう。其れに「此の畜生!」は少しくひどい申分である。こゝに彼れの短癖性が能く出て居る。これが爲めにラッセルは横濱のホテルに入り、かくの如き無禮の新聞記者の存在するからには東京へは行かない。横濱からすぐ歸國すると頑張つたと云ふ事である。流石は英國の由緒正しい貴族の仲間に教育して今迄我儘勝手に振舞つただけに隨分思切りのよい事ではあるが、我々から見ると

如何にも御坊ちやん氣分に思はれる。更に東京に來た時某社の新聞記者が刺を通じてブラック孃に會見せん事を頼つた。しかるに同孃は同新聞社が資本主義の新聞なるが故に其の新聞記者に會見する必要がないと云つて斷つたと云ふ。これは一面から考へるとブラック孃が資本主義を否定嫌厭する處から云へば徹底してゐる様だが、他面から考へると現下の所謂文明國の狀態はラッセルの蘇西亞を除いては四面資本主義的雰圍氣の裡にある。自分たち即ち資本主義を否定し、之れに反感を有するものは、出來得るだけ早く此の不愉快なる資本主義的經濟組織を改造して、もつと人間的な合理的な經濟組織にしなければならない。其れがためには資本主義の最も濃厚な内に突進して、之れを改變する事が必要である。一歩讓つて資本主義の新聞社だからとて、之れが配下に居る新聞記者を排斥する事はない。總べての新聞記者が必ずしも資本家の走狗ではない。否彼等の大部分のものは、プロレタリヤであつて、プロレタリヤの心理狀態であり、合理的社會組織の建設のために出來得る限りの努力をしてゐるものも尠くない。故に此等の人々と會談し、其の行くべき道を話す事は社會改造の指導者を以て任ずるラッセル及其の周圍の人々の職掌ではあるまいか。もし資本主義の者がある者であるから回避すると云ふなら、ラッセル及其の一行が宿つた帝國ホテルは之れこそ資本主義のかたまりだから之れに滯在安處しては居られない勘定である。其れを延長して考へれば彼等は英國にも歸る事を欲しないわけで、彼等の嫌いな蘇西亞へでも行くべきであるまいか。

然しラッセルは我儘ではあるが頭腦の働きは鋭敏である。又其の考へ方も安價な人道主義者の其れと異つて、隨分觀點は透徹した見識を持つて居る。社會組織の改造に就ては英國に可なりの勢力を占めて居るギルド・ソシヤリズムに共鳴して居るらしい。しかし之れが終局であるとは思つては居らない。只階段的效果の多分にある事を認容し　居る。彼れ自身の思想は一言にして云へば國際共產主義とも云ふもので、他の眞正の社會主義者の主張と同樣にナショナリズムと私有財產とに對しては忌憚なき批判を與へて居る。

彼れが慶應大學の講堂に於てなしたる講演は彼れの公衆の前になしたるものとしては甚だ成蹟の好良のものであつた。これは彼れの保護役であるブラック孃が斷言して居つた。講演は午後六時から開始せらるる事になつて居つたが午後四時半頃にはあの廣大な講堂が滿員となつた。自分たちがラッセルを乘せた自働車について三田通りを行つた時には三田の往來は人の波の樣に群集が同大學の講堂へと急いで居つた。聽集者は主として

知識階級者で約三千六百人もあつたであらう。演後の事であるからと云つて椅子に座し乍ら講演する事の挨拶を司會者はやつたが、講堂に文字通りに立錐の餘地もない程集合した熱心な聽集の雰圍氣に感激したのか、ラッセルは起立したまゝ、しかも演後とも思はれない程の熱烈さを以て文明の再建に就て一時間餘談じた。講演が終つて彼れが控室へ入つた時は彼れの白地の洋服は汗でじみじみして居り、カラは柔くなつてクシヤクシヤになつて居る事に氣がついた。ホテルについた時自分は豫て支那に於て講演後三四日病床についたと聞いて居つたから、定めし疲勞したであらうと尋ねたら彼れは聽集者の熱心につれられて自分も感激し、さのみ疲勞しないと答へて居つた。

ラッセルの愛人として知られて居るブラック孃は單にラッセルの精神的其他の慰安者であるばかりでなく、思想上の相談相手であるらしい。ラッセルは一寸したものをかいても常に彼女に見せて、其の批判を待つ様にしてゐる。彼女は目下著述中であると云ふから何れは其の思想の如何なるものであるかゞ解るであらう。更にラッスル一行のパワー女史は經濟史の專攻者であつて、ロンドン・スクール・オブ・エコノミックスの經濟史の講座を擔任すると云つて居つた。そして同女史は自分の見る處では可なりの篤學者で、歴史に對する新見解も相當に理解がある。一日女史の依頼に應じて本所方面のモスリム及び紡績の一二の工場の見物に行つた。寄宿舍の設備の不完全なる事や、勞働時間の永い事並びに男女賃銀の差異の懸隔の甚大たる事には呆れて居つた様である。そして資本主義の禍患で害毒の流るゝ處は何處も同じであるとの自分の意見には全く共鳴して居つた。

轉々として流動する我國思想界の主潮の進行する際ラッセルはよい時機に來合せた。これが一兩年後であつたなら忘れられた如く顧みるものはあるまい。オイケン、ベルグリン、タゴール、マルクス、クロポトキン、ラッセルと走馬燈の如く移り行く先は何處へ、創造性の缺如せる我國思想界の次ぎの流行兒は誰れぞ。思へば貧弱なる思想的根據の國民よと歎ぜざるを得ない。

苦笑のラッセル

大杉榮

さあ、別に印象と云ふ程の事もありませんな。向ひ合つて話した時間もせいぜい五分間位なものでせうからね。

それに僕は、實ははじめてあの帝國ホテルと云ふ建物にはいつたので、ちよつと面喰つてもゐましたよ。こわごわ玄關にはいつて行くと、とつつきの廣いホオルのあちこちに、日本人だか西洋人だかがごちや〳〵ゐるんでせう。おや、こゝなのかな、と思つて暫く大きな眼をうろつかしてゐたんですが、誰も知つたやうな顔は見えませんしね。仕方なしに、ずつとはいつて行つて見たら、改造社の誰れだかにつかまつたのですよ。

そして其のすぐ隣りの室に案内されて行くと、もう十人餘りの、しかも殆んど知らん顔ばかりが集まつてゐて、ラッセルは誰れだかに紹介されてゐる際中でした。寫眞で見たあの通りの顔ですね。顔と云ふよりは寧ろ、口の兩角のすぐ上のあたりが、神經質らしく妙に痩せこけてゐるのが、病後のせいか猶目立つては見えましたがね。あれは、あの人の顔の中で一番いやなところですね。

と思つてゐるうちに、僕がもう紹介される番になつてゐました。そして『ミスタア大杉、エ、ジヤパニイス、バクウニン、、、』なんて、妙な紹介をされたので、ラッセルが何を云つてゐるのかちつとも分らなかつたほどに、又面喰つて了ひました。そしてぼんやりしてゐる間に、『どうぞあちらへ』と一つの椅子のところへ導かれて、そこでラッセルと向ひ合ひになつて、あちこちの新聞の寫眞をとられたのです。前に云つた五分間と云ふのは此の時の事です。

座ると直ぐ、十幾人かの寫眞屋が代る代るポンポンやるので、ラッセルは例の口の兩角の上に濃いくまを見せて、『堪りませんな』と云ふやうな意味の事を、其のポンポンのたびに目をつぶつては云つてゐました。そして、『いくら吾々がアナアキストだつて、こんなに爆彈のお見舞を受けちやね……』なぞとふざけながら苦笑ひしてゐました。あの人は、笑ふときつとそれが苦

笑ひになつて了ふんですね。

「エマ・ゴオルドマンを知つてゐますか。」

「えゝ、其の著書で。」

「ベルクマンは？」

「え、やはり其の著書で。と云つても「一無政府主義者の獄中生活」しかないやうですがね。」

「さうです。しかし大變面白い本ですね。」

「二人は今ロシアでどうしてゐます？」

「二人とも昨年モスクワで會ひましたがね、別にする事がないんで、革命博物館の爲めの何にかのコレクシヨンをしてゐましたよ。ボルシエヰキ政府からの待遇に就いては、十分滿足してゐるやうですが、政府のいろんな施設に對しては勿論大いに議論があるやうでした。」

こんなほんのちよつとした問答をしてゐるうちに、ラッセルは又新しく來たほかの人達への紹介でいそがしくなりました。そして僕は暑いんでヴエランダの方へ行つて了ひました。

要するにたゞこれだけの事ですね。印象と云ふ程の事のあらう筈がないぢやありませんか。

あの人の社會改造論に就いてゞすか。さうですね、一言で云へば、一種のアナアキスト・コンミユニストでせうな。が、あまりにどうもインテレクチユアル過ぎるやうですね。

新刊紹介

■最近教育學（入澤宗壽著）最近思潮叢書の五篇トシテ書かれたる好著である（定價二圓七十錢日過安）

■日本歐洲比較文化史（下澤瑞世著）東西文化の比較研究書として推す（定價二圓八十錢日本評論社）

■思想問題の一面觀（湯原元一著）女高師校長たる著者の思想觀、教育觀を收む（金一圓九十錢東京文化社）

■ヴント倫理學綱要（中島[illegible]解說）彼の立場と其說とを叮寧に解說す（定價金二圓丙午出版社）

■近代文藝史論（高須梅溪著）第一期として舊套擬守時代、第二期新文學發生時代、第三期ローマンチズム時代に分ち極めて詳細なる眞摯なる研究になれり。（定價金三圓五十錢日本評論社）

■ジヤンクリストフ（豐島與志雄譯）ロマンローラの名著、其第二卷として譯されたるもの。（定價二圓五十錢新潮社發行）

■藝術家の欠伸（山本鼎作）鼎畫筆をもつてかゝれた著者の折りに觸れてたれるを集む、定價金二圓アルス發行

■妹の戀「細田民樹著」妹の戀及ある心中の二編を收む新進作家叢書の二十九編出定價金五十錢新潮社發行）

■菊池寛傑作集（菊池寛著）恩讐の彼方、忠直卿行狀記、蘭學事始入れ札以下氏の近業傑作十六編を蒐む（價金二圓二十錢新潮社）

鋭角的人物

文學博士　桑木嚴翼

一

「何となく尖つた人だ」。是が帝國ホテルの客室に於て初めて面接した時の印象である。豫て前日來の新聞で飽きる程寫眞の紹介を得て居たが、黑白の陰影のみでは其の紅みを帶びた顏容も分らず、又其の學者藝術家に共通な包ましやかな態度も想像せられない。頭も鼻も尖つた三角形で如何にも神經質らしいが太い直線の眉は英國紳士の毅然たる風格を偲ばせるものがある。日本の國土に入つて新聞記者の包圍に對し、先づ「ラッセル氏は日本では三ケ月前に死んで居る」と皮肉を浴せかけた所ろは、英國流のユーモアが顯れて居るが、聞く人々には反て貴族的であると解せられて居た。思ふに英國紳士の未知の人に對する打解けない性質は、會々訪問者をして不機嫌だと思はせたのであらう。然も此の鋭角的な英國紳士は今や此の一室に於ては親密な知己に對する軟かみを示して居たのである。

私は勸められるまゝに傍の椅子に坐して一通りの挨拶をした。私が哲學を講義して居る者であることは豫ねて通じてあつたので、ラッセル氏は多分其の京都で得た知識により、日本ではカント哲學が流行するさうである、と口を開いた。後から思へば此時私は、其が必しも一般ではなく、又元來日本の哲學界は英國の功利主義進化論等に影響せられて居たのを、其後獨逸哲學が講ぜられ、更に最近には哲學を專門的に攻究する者の間に於てカント哲學が眞の意味を認められて來たのである、と答ふべき筈であつた。然し此時は咄嗟の間でたゞ、私も其流行に關係ある一人だ、といふことを告げるに止まつた。其れに續いて私は、私の今まで比較的に多く講說したヰンデルバント等の事を語つたら、氏はナトルプやフッサール等の名を擧げて其の影響の如何を質して居た。其中に私は、嘗て屢ラッセル氏に就て說いたことを語り、又或る時に、氏は正にニュートンが社會問題を論ずるやうな趣きがある、と書いたと述べた。其の意味は氏の數學的科學の方法が哲學から政治論社會論等に及んで居

ることを言つたのである。氏は之に對して微笑しながら、然し自分は寧ろライプニッツに私淑して居る、と答へた。私は其を首肯しつゝ、氏の夙にライプニッツに關して試みた研究の特色あることを指摘したら、氏は我意を得たりとして、なほ佛國のクーチュラの研究が更に部分的に精細である、と言つた。それで私は進んで、私の研究室の一學士が嘗てクーチュラとラッセルとを基礎として更に他の問題に論及したライプニッツ研究を試みたことを話しかけたが丁度新に面會すべき人があつたので、こゝに短かい對話を畢ることにした。

其後氏は主として、社會問題に關して論議し實行する著名の人との間に取卷かれて、新聞雜誌の襲撃を受けて居たので、會話に慣れない私は寧ろ遠くに退いて他の知人と語つて居た。折から其の話を傍聽したり、或は又一二語を挾んだりしたが、私の個人として話したことはたゞ其れだけであつた。然し自から話して居るよりは、寧ろ他と語る氏を遥かに見る方が全體の印象を受け易いやうである。私は斯くして氏が多少物珍らしい心持で諸傾向の人々に接する心安さと、會卓に於て諸家の意見を熱心に聽取しながら、然も自己は其の信ずる所を斷然言明する不撓不屈の精神とを認知し得たのであつた。私は、氏が新聞や世人によつて、專ら政治論者とのみせられることを聊か物足りなく感ずる者であるが、然し又氏の態度に於ては自らの所信に邁進する志士の風采の存することを認めざるを得なかつた。たゞ之が爲に氏の本領がやはり理論的攻究にある、といふことを忘れてはならぬと思ふ。而してラッセル氏は學者としても又尖つた所のある人であるのである。

私の直接に受けた印象、若しくは其の材料を卒直に叙述すればたゞ是だけである。然し是が果して私の嘗て其著書から想像して居たことを裏切られなかつたであらうか。

二

ラッセルは其の訃音の誤傳に就て多少不快の念を懷いて居るといふ。私は之に就て日本の俗傳では反て長壽を得るとせられる、といふことを告げたが、然し既に之を嫌ふといふ上は之を避けなければならぬではあるまいか。然し之に拘はらず、少しく之に言及したい。

嘗て其の訃音の傳はつた時、改造社は逸早く其の追悼文を徵して來た。私は其際倉卒に一文を草したが、其には先づ其の生涯を、甚だ月並ではあるが、流星の如く倏忽に光輝を發して倏忽に消失したものとした。其の光輝は、事實に於ては決して短日月に生じたものではなかつた、が然し其が世間に喧傳せられるに至つたのは、最近の戰爭に際して侃々諤々の論議を公けに

したからであるとすれば若し羨に不歸の客となつたとしたならば、之を流星に比することは必しも不當ではないと思はれる。而して其の流星的生涯に對して、私は直ちに前代に於てはオスカー・ワイルド、然して前に遡つてはバイロン卿を想出さずには居られなかつた。蓋し是等は共に英國が産んだ英國以上の人物であるからである。

固よりワイルドもバイロンも、其の活動した舞臺はラツセルのそれとは著しく異なつて居る。ラツセルは學界の人から社會評論家となつたが、ワイルドもバイロンも其の本領は言ふまでもなく詩歌文藝にあつた。ラツセルは哲學中に於ても殊に理論に重きを置いて、多くの哲學者が情意の要求より出發して終に神秘直覺に流れることに反對して居るから、其點に於ても、感情空想に重きを置く文藝家の立場とは全然背反して居るやうに見える。バイロンの事は暫く措き、ワイルドに就てのみ言ふも、其が論理を輕視して美を終極とすることは其の言說にも行爲にも著しく認められる。然も是等の人が共に生活を說くに當つて一般英國人の理會する所の生活其ものを本位としない所に共の沒却することの出來ない一致點がある。蓋し英國人のみならず、多くの哲學者などの解釋する所によれば、生活の中心は道德に存するといはれるやうである。道德の意味も詮じ詰めれば極めて曖昧になるが、此には漠然人々の通常理會するまゝの意味に解釋して置くと、此點に於てワイルドもバイロンも明に非道德的生活論を主張して居る。所謂非道德は反道德か超道德か、今敢て之を決しようとしないが、とにかく文藝若しくは感情を中心として、寧ろ實行や其の結晶たる風俗習慣制度法律を第二義とする所が、彼の歸着點であつたと見ねばならない。隨て是等の人々の行爲は常識的なる英人にはたゞ背德亂倫としか理會せられないので、決して承認せられて居なかつた。バイロンは一時交際社會の花形であつたが、其のドン・ファン的生活が訓良健全を貴ぶ人々の間に許容せられず、後には不平滿々たるに至つたことは、其の「チャイルド・ハロルド」が能く之を語つて居る。ワイルドの唯美的運動が當時の問題となり、軈て攻擊嘲弄の標的となつたことも周知の事實である。ワイルドの如きは殊に藝術を以て生活の中心とするものであつたが、其の點が道德主義の英人に容れられなかつたのである。ラツセルの場合は種々の點に於て是等詩人と趣を異にする所があるが、然し其論理の嚴正を尊重して一步をも枉げず、風習も制度も敢て之を制肘するを得なかつた所は、藝術に代ふるに理智を以てしたものであつて、道德生活本位の英國思想に對する一の叛逆と言はねばならぬ。ラツセルの私行上の事に就ては詳しく知らない

が、固よりワイルド等とは雲泥の差があるであらうとは思はれるけれど、社會の風習等を無視することはあつたのであるから、其點に於ても英國に產れた英國以上の人たることを免れないと思はれたのである。

然し私が最も多く比較上の興味を覺えた點は、當時の訛傳に基いて、是等三人者が共に其の終りを其母國以外に於て告げたといふことであつた。殊に其は皆、或る意味に於て是等の人々の憧憬し若しくは共鳴を感じた邦土に於てである、と見たのである。蓋しバイロンは筆を投じて戎軒を事として終に文藝の祖國たる希臘に斃れたし、ワイルドは其の鄉土に容れられずして唯美的精神の本土たる巴里に窮死した。ラッセル氏は、現に健康を恢復して其本國に趣きつゝあるのであるから、他二人者と比較することは體を失することとではあるが、當時私の念頭には、若し萬一支那を以て其の終焉の地とすることがあれば、其が多くの點に於て決して其の理想境でなかつたに拘らず、然し其の思想の中に若干の親近する點を發見し得ると思つたのである。即ちラッセルの數學的論理的哲學は固より支那の道德本位の思想と隔絶する所が多いし、其の改造論は東洋風の崇古的精神とは全く睽離して居ると云へるが、然し又一方から見れば、支那思想にも神秘を遠ざけて理義を重ずる儒教があり、更に又近代の支那は一面には他の東洋諸國よりも一層急激の進步變革を喜ぶ徒に乏しくないやうである。之に加ふるに特に奇とすべきは、ラッセルの社會理想が絕對の自由を說く所は老莊の道に合ふ點もあり、實際其の改造論中に莊子等を引用してあつて、其が支那に招聘せられたこととの偶然ならざることを感ぜしめることである。現に氏はホテルの席上で、ボルシエーヴイキの理論は歐米等には行れ難く又行ふべからざるものであるが、露國に於ては實行し得るものであると同じく、支那に於ても或は實行し得べしと說いて居るが、是等は益々支那との關係の親密なることを想はしめるものである。私は敢て自分の文章の爲に不吉の言をなすものではないが、ラッセル氏が果して其の本國に於て今後また十分なる認識を得るか如何に就ては多少の疑問を呈し得る。既に昨年オックスフォードに開かれた國際哲學會に於て、其の哲學說が恰かも欠席裁判を受けた觀があつたことは、或は英國に於ける一部の反對が多い事實を語つて居るものではあるまいか。私は氏の未來に於て幸福多き生活を望むものであるから、此の如き言說はたゞ一場の想像に過ぎないが、たゞ前に文章を草した時感じた事を想起したのである。然しながら此比較感想は、ラッセル氏が一面に於て英國貴族らしい印象を與へた點で多少訂正せられねばならぬ、とも思はれて來た。

三

私は以上の印象記や人物評に加へて、更に又其の學說を論述する要があるであらうか。蓋しラッセルの學說や思想に就ては、既に屢々紹介論議せられて居る。私自身も其の哲學的立場に就てや丶詳細に說述したこともあるから、今又之を繰返すことを避けたいが然し私の印象記は結局其の學說に關する談話に他ならないから、之に照應する爲に多少其學說に觸れねばならない。

ラッセルの思想は之を一言にすれば、數學を論理的に說くことの試みから哲學を又論理學となし、社會問題を數學論理學の方法で明快に論究しようとしたものである。哲學を全然科學から構成しようとして居るが然し其科學から借り來る所のものは方法にのみ存して內容には及ばない。其故に自から科學的方法の哲學と名づけて、ヘッケル、オスレヴルト等の如く科學の結果を敷衍概括して哲學とすることには反對して居る。斯く科學を方法にのみ限るが、併し又一面には此方法の萬能を信じて、社會を論ずるに當つても純ら之によつて居る。是に於て又一種の科學主義的社會論を生じて來たが、斯く科學のみを以て一切を說明し主として形式的方面ではあるが——せんとする所は明白に十六七世紀に於ける科學精神を繼承するものであつて、殊に英國科學の祖とも稱すべきニュートンの數學物理學の方法を社會問題にまで推し擴めたものと言つて宜い。然し實は是は必ずしもニュートンのみに限らず、此時代に共通な精神と稱すべきものであつて、ニュートンの論敵となつたライプニッツも亦同樣の影響を與へてゐるし、スピノザの哲學も亦其を構成する一要素となつて居ると見てもよい。而して就中直接にラッセルを動かしたものはライプニッツであつたと思はれることは、其が早くライプニッツの哲學に關する研究を試みたことによつて推測せられる。而して是は現に自ら私に語つたことである。然しラッセルの學說を一貫する精神が反て寧ろスピノザ若しくはニュートンの方に存じたことは、其の學說が全然數學物理學的機械觀を中心とする點によつて證せられる。ライプニッツは又一面に機械觀を奉じ、其初年即ちラッセルが興味を有つた論理的數學を考按して居た頃は、殊に其傾向が顯著であつたが、既に早く他面には目的觀を持して其間の矛盾衝突に苦しみ、其終りの學說には有機體の觀念を以て世界を考察せんとして居るので此に十七八世紀の思想より一轉して十九世紀に於て盛となつた生物學的目的觀を容れるやうになつて來た。此生物學的目的觀は廣く百般の事物に應用せられて、彼の有名なる社會有機體說を生じ、凡て有機的といふことを以て機械的說明より一步を進め

たものと認めるやうになつた。此說明には固より其の特色もあるが、然し之が爲に種々不當なる類推や比較を生じて社會の說明を誤まる所もないとは言へない。我々は屢有機的といふことを以て精神生活の特色を盡したやうに說かれることを聞くが翻て有機的の特色如何、果して機械的と根本の差別があるか否、の問題に對すれば頗る惑ふ所がないとは言へぬ。十八世紀の機械觀に對して十九世紀の有機體觀は思想回轉の一要素となつたかも知れないが、然し十九世紀思想を更に廻轉せしめる爲には、再び機械觀の主張に耳を貸す要はないであらうか。此點に於てラッセルがライブニッツ初期の思想を基とし、ニュートンの科學とスピノザの論理とを以て近代の主意論に對する一敵國を造らんとしたことは、其說の內容の完否如何を離れて單に其計畫のみに就て考へれば、確かに學界革新の一法を試みたものと言はねばならない。是に於てラッセルは又十九世紀が産んだ非十九世紀的思想家の一に算へ得るであらう。

四

ラッセルの學說を一の哲學說として見れば決して完全なものとは言い難い。哲學はショーペンハワーの言つたやうに、哲學々究の專有物ではないが、然し哲學に就て一家言を立てようとするものは、勢、古今の學者を批評することを要し而して其が爲には先づ正當なる理會を有つことを要する。此點から見ればラッセルの議論は決して專門家の非難を免かれ得ぬ所があるであらう。尤も其が又其の大膽に新說を唱へ得る所以である。其の社會論に就ても同樣の觀察を施し得ると思はれるが、是は確かに長所にして又短所であるといはねばならぬ。是故に既に述べた通り、哲學者の會合に於て其說に對する非難の多く出たことは、强ち其の社會論國家論に對する反對の先入主となつたのみとも言はれないと思ふ。

ラッセルの哲學は實在論と稱せられて居る。而て其書中にも明かに觀念論を攻擊して居る。然し其の所謂實在論觀念論の解釋は、必しも哲學史によつて證明せられ得るやうに明白にはなつて居ない。而して是が又一面には其說の長所ともなつて居る。といふものはラッセルの實在論は結局直覺的信によつて外界の實在を立するもので、其が觀念論を駁する所以は決して觀念論者を首背せしむるに足るものではないが、然し其の實在論を追究する上に於て次第に世俗の意義から脫却して來て、プラトーの所謂「イデア」の如きもの即ち一般概念の如きものまでをも實在の中に算するやうになつて來て居る。此點は飽くまで常識を離れない米國現代の實在論とは趣を異にすると思はれる。米國の新實在論者も、關係をも亦實在すと見る所に於て、や

はり素朴的實在論と異なるやうであるが、然し關係を概念として說いて居るのではないから、プラトーのイデア說を加味したラッセルの論とは根本的に異なる所がある。是は畢竟ラッセルが、數學的論理學的立脚地から出發することによるもので、十七八世紀の精神を守るのみならず、古代にあつて數學と論理とに立脚したプラトーにも接するを得る所以であらう。此の如く見ればラッセルの哲學はやゝ素人らしい所もあるが、然し其が爲に又案外に深遠な眞理を卑近の形式中に包括する所があるやうにも思はれる。

此の如く哲學に於て遠くプラトーに結合するラッセルは、其の社會論に於ては希臘思想と全然一致するとは言へない。蓋し其の個人の絕對自由を重ずる點は希臘哲人の國家觀とは趣を異にする所があるからである。然し希臘の自然主義はラッセルの科學主義と同一精神に基づくものであるから、其處に共通點がないではない。而して此自然主義に於て遂に老莊虛無の道に合する點を求め得たのであるから、ラッセル自身の思想中には希臘思想と合致したり又合致しなかつたりするものが全く分離衝突して居る譯ではない。即ち其の終始一貫する精神は結局數學論理學の研究から導かれたもので、之より生ずる機械觀的說明が其根幹を作して居るものである。其故に之を其點のみ抽象して考へれば、許多の欠點を指摘し得るであらうが、然し其反對の有機體的目的觀に陷り多く囚はれた現代の思想界に對しては一廻轉の機會たることを失はなかつたのである。斯くしてラッセルは終に現代の思想界の產んだ非現代の思想家とならんとしたのである。

ラッセルは何れの點に於ても其の產れた所から脫脚せんとするものであつた。是れ其の銳角を有する人なるが爲であるか。而して又脫脚して常に新たなるものを創作せんとすることは、其の重する創作衝動の說に一致するものでなければならない。不幸にして我邦に滯在する日子は非常に制限せられて居たが、其の與へた印象は決して尠少ではなかつた。こゝにも一の創作を見られぬではなからうか。氏が其の尖端を以て障壁を突破し、今後如何なる方面に新なる途を開くべきか。是れ私の竊に刮目して後日に期する所である。

. . . .

With the greater need of organization and control resulting from industrialism, the private capitalist becomes an unduly anarchic survival, preserving for himself alone a form of liberty which the rest of the community has unavoidably lost, and which, when industry is well developed, becomes infinitely harmful to the community as a whole, through to excessive power which it confers upon a small class. Capitalism is essentially transitional, the survival of private property into the industrial era, which has no place for it owing to the fact that production has become cooperative. Capitalism, by being ill adapted to industrialism, rouses an opposition which must in the end destroy it. The only question is whether labour will be strong enough to establish communism upon the ruins of capitalism, or whether capitalism will be able to destroy our whole industrial civilization in the course of the struggle.

---

have destroyed the traditional beliefs of wage-earners, while education has given them a new intelligence in criticizing the social system.

6. Education has enabled the workers to acquire political democracy, while the plutocratic control of the State has rendered political democracy almost worthless.

7. Owing to the inevitability of large economic organizations, and to the power of those who control the use of capital, individual freedom as conceived by liberalism is no longer possible.

8. Therefore the only way by which the community can avoid being enslaved to the capitalists is the collective ownership of capital by the community, as advocated by socialism.

9. Since capitalists profit by the present system, they cannot be dispossessed except by the class-war, unless the preponderance of force against them becomes so overwhelming that they will abdicate voluntarily, which seems scarcely probable.

Owing to the long tradition of private property, the opposition to it develops very gradually. By Marxian rules, the working classes ought to be all Socialists, but they are not. In so far as this is due to the influence of tradition, it is to be expected that the Marxian formula will gradually become true, because industrialism is a powerful solvent of tradition. We find, accordingly, that the number of socialists among the proletariat continually increases, and that there is little likelihood of peace in the world of labour so long as capital remains in private hands. The issue between labour and capital is obscured and complicated by nationalism, which we shall consider in the next chapter. But nationalism does not alter our main conclusion, which is that the survival of capitalism must rouse increasing popular opposition, and generate a class-war which will, sooner or later, make capitalistic industry impossible. ....

....

business interests. How far this process has gone is naively evidenced in a letter to various New York newspapers from Mr. A. C. Bedford, Chairman of the Standard Oil Company (Nov. 25, 1920). Speaking of Italy, he says:

> "Italy's principal commodity of export, labor, will in future be under Government control, and the interests of Italian emigrants to foreign countries will be more fully protected. Not only that, but it is hoped to distribute Italian labor scientifically in order that the country may receive the greatest benefits by receiving in exchange coal and other raw products of her industry. This plan will be opposed by the Socialists who say that the Italian laborers will have no right to choose their homes, and that it may close the United States to them, as they believe this country will not permit emigrants to enter with the intention of remaining virtual nationals of the country from which they came."

We have travelled far from liberal ideas when labour can be treated as a commodity of export to be exchanged against coal.

The class-war, in one form or another, is an inevitable outcome of these conditions. We can now enumerate the factors by which it is produced:

1. Industrialism makes society more organic, and therefore increases the power of the State.

2. Industrialism gives a wholly new power over men's lives to those who control the use of capital.

3. The institution of private property, inherited from the pre-industrial era, has allowed the control of capital to be in the hands of certain private persons, the capitalists.

4. The capitalists have thus acquired control of the State, with the vastly increased powers that industrialism has given to it.

5. Meanwhile the new habits of life produced by industrialism

that his income will be ten or twenty times as great if he sells those interests than if he remains faithful to his constituents; this argument will prove convincing to many men. Then there is the more insidious influence of living a comfortable life among well-to-do people. This takes the edge off a man's protests against economic injustice, and makes him receptive of any reasoning tending to show that improvement must be slow and gradual. Then there is the psychological effect of power, tending to make a man dictatorial and executive rather than sympathetic and idealistic. Apart from these things, there is the sheer strength of the capitalists, the fact that they can produce chaos by manipulating prices, that they can blacken any man's character through their control of the Press, that they can withhold necessary supplies, and that in time of war they can cause defeat unless they are placated by enormous bribes. And those who desire a change in the social system will be regarded by all thoughtless people as more responsible for the disorder involved in the process than those who defend the status quo, however unjust the status quo may be, and however ruthless the methods by which it is defended.

Liberal ideals assumed that every man was free to pursue his own economic interest. As a revolt of merchants and manufacturers against the old-fashioned State controlled by aristocratic landowners, liberalism did valuable work in the 18th and 19th centuries, but its ideals have been rendered obsolete by the increase of organization which industrialism has brought about. Upholders of free competition struggled vainly against both Trusts and trade unions, which grew jointly in strength and are still growing. Individualists, having freed business from the control of the State, discovered that they had subjected the State to the control of business. Largely through the instrumentality of militarism and war, labour became more and more subject to the State, at the vary moment when the State was becoming enslaved to big

the most advanced nation industrially. But it has come to be the case everywhere since the war. Thus we may say that, in advanced industrial countries, all big industries are already run by the State ; but we must add that the State is the Trust magnates, not the nominal government which is allowed to subsist in order to bemuse and deceive the people.

It is a commonplace among socialists and syndicalists that the modern industrial State, even when it is nominally democratic, is really an organ of the capitalists. This is certainly true in fact, as is evident from the action of the State during labour disputes, particularly in the United States, where the army is employed against strikers and for the coercion of the Law Courts in cases of illegal violence on the part of capitalists. Where compulsory military service exists, as in France, strikers are mobilized and thus become subject to military law. England has not yet perfected its technique for dealing with strikers, but is likely to do so before long, & has recently passed special legislation for that purpose. Nowhere is the State neutral as between capital and labour. The excuse is the preservation of law and order. But the law is always, by its very nature, on the side of established injustice. It was the Supreme Court decision in the Dred Scott case which showed northern Americans that slavery could not be abolished by peaceful methods. ....

....

....

....

....

....

The reasons which lead the State to be on the side of the capitalists are many and various, in addition to those already mentioned. There are first of all reasons of mere corruption, direct or indirect. A man who has climbed into power by advocating the interests of labour finds

example, could not be constructed except by a single authority, or worked if each employee were given the absolute ownership of a small portion of the line, after the analogy of peasant proprietorship. The individual workman cannot, by any possible method, retain the independence of the handicraftsman. Hence arises socialism, as a means of making the individual worker dependent only upon the community of his fellow-workers, not upon the arbitrary will of a special set of privileged beings, the capitalists.

For this reason above all others, liberalism, with its insistance upon the individual, is unable to find any cure for the evils of capitalism.

There are various developments connected with this fundamental difficulty, all of which reinforce the argument against any possibility of a satisfactory development of industrialism while private ownership of capital is retained. I leave out of account for the present all arguments as to the connection of capitalism with imperialist wars, because I propose to discuss this question when I come to the interaction of capitalism and nationalism. There is, however, a closely allied question which belongs to our present topic, and that is, the growing connection of important capitalistic enterprises with the State.

Industrial undertakings tend to increase in size, and also derive advantage from combination, since competition cuts prices. For both reasons, the goal of all large businesses is monopoly. Trusts more and more replace that free competition which is the liberal ideal, and which America vainly strove to keep alive by anti-trust legislation. The community thus becomes dependent upon a single company for the supply of some necessary commodity. And if the commodity is one which, like steel or oil, is needed by the State in time of war, the State becomes dependent upon the Trust for its very existence. Thus unless the State owns the Trust, the Trust inevitably comes to own the State. This condition is most obvious in America, because America is

pleasures to its possessor, it does not give him anything like the same power over the lives of others as is possessed by the modern capitalist. Very little wealth is required in order to become a peasant proprietor or handicraftsman and when once this position has been achieved a man can, with reasonable good fortune, earn his living without being dependent upon any master.

But when industrialism is introduced into a community which recognizes the right of private property, a quite new situation is produced. This is due to the fact that the workers who produce capital instead of consumable commodities—for example, the man who make a railway—have to be kept alive through the slow process of production, and have to work cooperatively in large numbers. There is thus need of some authority to direct their labour, and this authority must be possessed of sufficient surplus wealth to be able to feed and clothe them throughout the time occupied by the work. Those who direct the enterprise and pay for the labour demand as their reward the ownership of the product. In this way these men become *capitalists*, i. e. owners of means of production. It follows that, wherever industrial methods prevail, no man can produce except by permission of the capitalists. They therefore acquire the power of life or death over the wage-earner, since he cannot make a living unless some capitalist chooses to employ him. We thus have the same situation in industry as exists in agriculture when the land is in the hands of great landowners.

But there is no possibility of avoiding the dependence of the wage-earner upon the capitalist by any method analogous to peasant proprietorship, because of the collective labour required for industrial undertakings. It is essential to any large industrial undertaking that all the labour should be under one management, and that the product should be under one ownership.* A railway, for

*I mean of course the ownership of one corporation, not of one man.

as an individual producer, who has created a certain amount of wealth, to which he has a right. This outlook is antagonistic to the State, and therefore displays a reluctance to State ownership of land, which is the only alternative to private ownership. In the second place, the liberal outlook retains a belief in the sacredness of property, and therefore cannot easily advocate confiscation of property in land. In the third place, the distinction between the landowner and the capitalist has become blurred as capitalism has developed, because most great modern capitalists derive their wealth from ownership of raw materials or of some legal monopoly. The result is that they do not desire equal access for all to the soil and the raw materials, but find their interests bound up with those of the landowners.

But none of these things would have made liberalism so utterly inapplicable to the modern world as it has become. This result has come from a more fundamental characteristic of industrialism, to which we must now turn our attention.

In a non-industrial community, liberal ideals, if they could be carried out, would lead to a division of the national wealth between peasants proprietors, handicraftsmen, and merchants. Such a society exists at this day in China, except in so far as it is interfered with by foreign capitalists and native military commanders. The latter revert to the right of the sword, which belongs to an earlier stage; the former introduce fragments of modern industrialism. But if foreign influences could be excluded and a stable government established, China would have an economic system very similar to that of France after the French Revolution had realized liberal ideals. In such a society, no one has any strong interest in abolishing private property, for, in spite of its inequalities, it is not clear that any other system would be better, and it is thought that energy and enterprise will enable any man to rise in the social scale. And although money brings advantages and

brought coloured men by brute force. From our point of view, however, this does not greatly affect the question. In the newer countries, as in the older empires, the source of private property is possession of the land by a warlike minority, who can determine the conditions on which they will allow others to cultivate it.

From this system to the liberal regime of free competition, the evolution was in most countries very slow. Gradually it was discovered that the owners of the land could acquire more wealth by letting it and allowing the cultivators to own the produce, than they could by standing over the cultivators with a lash. And when the aristocratic landowners lost their military supremacy, the peasants rose against them and acquired ownership of the land, by the same method, namely armed force, which had originally given possession to the nobles. Moreover, with the growth of commerce and manufacture new forms of property, not based on land, came into existence. It began to be thought that a man had a right to possess what he had acquired by his own industry. Thus private property began to be viewed as the reward of labour, not (as at first) as the division of the plunder by a gang of brigands. The new view increasingly prevailed, although it remained the case that many of the richest men were among the idlest, confining their exertions to the receipt of rent.

There came thus to be a conflict between the liberal and the aristocratic view of property, the liberal view being based upon the right of a man to the produce of his own labour, the aristocratic upon the right of conquerors and their descendants to ownership of the land. The liberal point of view, if it had been consistent, ought to have aimed at abolition of all private property in land: Henry George and the Single Taxers represent the thorough-going development of liberalism. But various difficulties prevented the success of this suggestion. In the first place, liberalism is essentially individualistic; it considers a man

wherever the State, by law, secures the exclusive enjoyment and use of anything valuable to an individual or to a group. Thus private property is something created by the State, and existing only where the State is strong enough to exact respect for the laws.

The power of the State rests, always and everywhere, upon armed force. A State exists only so long as it is able to repel invaders, or to find allies who will repel them. All rights of private property exist only within the State, and therefore all are abrogated by foreign conquest. In this sense, private property is derived from the right of the sword. But it is only the State that depends upon the right of the sword; the individual property-owner within the State depends upon the legal rights granted to him by the State.

The immense majority of historical and existing States owe their origin to a small group of warlike men conquering a large number of more peaceable aborigines. This has been the origin of all the States of Europe and North and South America, of the Semitic States of ancient and mediaeval times, and of the various monarchies of India. But great differences arise according to the relative strength and civilization of the invaders and the aborigines. In North America and Australia, the invaders were strong enough to exterminate the aborigines, and the same thing must have occurred constantly in pre-historic times, but in historical times this case was rare in Europe and Asia. As a rule, the invaders were less civilized than the people whom they conquered, and they needed these people's labour in order to be able to enjoy the fruits of conquest. They therefore divided up the land among themselves, and made the native population into slaves or serfs. In North America and Australia, an exactly converse process has taken place after the extermination of the natives. The first comers among the white men, having seized the land, have had to attract labour from abroad, and have therefore tempted white men by high wages and

III. INDUSTRIALISM & PRIVATE PROPERTY

By Prof. Bertrand Russell

We have considered industrialism hitherto simply as a technical method of production, without regard to the system of distribution, or to political conditions except in so far as they affect the mere possibility of large-scale industry. It is necessary now to undo this artificial simplification. Two institutions, especially, have affected industrialism profoundly, namely private property and nationalism. Each of these two institutions has, in its turn, been greatly changed by industrialism, and the two together have become a menace to the combined existence of our civilization. I propose to consider the interactions of industrialism first with private property, and then with nationalism.

Private property, like religion, is an institution which has come down to us from the time when men first took to agriculture. Before that time, nomadic pastoral tribes possessed flocks and herds, but possession depended solely upon warlike efficiency, not upon any legal tenure. Legal tenure begins with agriculture, and applies primarily to land and agricultural produce. Private property in land existed in Babylonia in the time of Hammurabi in practically the same form in which it exists among ourselves at the present day. The essence of private property is legal possession secured to some person or group within the State. It is not essential that the possessor should be an individual. Land owned by a college or monastery is private property, just as much as land owned by an individual. Village communism, which existed throughout most of Europe in the middle ages and in Russia down to our own days, is to be included under private property, unless the village is an independent State. Private property exists

The Communists, on the other hand, have usually met the present economic situation by telling the workers that there will always be unemployment as long as capital exists. This may be a fact; but it is bad propaganda, even if the object is merely to stimulate revolutionary feeling. Such propaganda will only catch those who are to some extent revolutionary by temperament. Whereas the demand for industrial maintenance makes a direct appeal to every worker who has experienced the results of insecurity of income and unemployment under the existing system. It is easiest to make converts by dwelling on positive grievances and on remedies which can be applied to them; but this is precisely what it seems to me most Communists fail to realise.

Thus, there is absolutely no reason why a Communist should not be a Guild Socialist or a Guild Socialist a Communist. But I believe that Guild Socialism and Communism, although they may overlap, represent in the main divergent tendencies, and that the Communists are in danger of ignoring in their propaganda the two fundamental ideas for which the Guild Socialists stand. In disciplining the workers for revolution, they are in danger of constructing a Society based, not on freedom but on subordination, whereas the Guild Socialists, throughout, keeps firmly in their minds the ideal of self-government in every sphere of social service. In the second place, it seems to me that the Communists in conceiving of the problem of the transition from capitalism to Socialism purely in terms of organised force, miss the enormous importance of the constructive capacity for power, and the difference between an instrument created for destructive ends and one created for the work of carrying on Society. Guild Socialists recognise the immense destruction which is involved in the replacement of capitalism by a different system; but they believe that this destruction will come only when the workers have prepared themselves for the constructive task of social organisation. In other words, they conceive the problem less in terms of force than of fitness for the exercise of responsibility and power.

is likely to have a marked effect, whereever it is clear that the demands are such as the employers could grant but are refusing to grant. The Guild Socialist case is not destroyed by the refusal. On the contrary, the refusal makes the workers ask themselves why this obstruction is allowed to continue. If the capitalist forces were to succeed in destroying the Building Guilds, this would be deplorable, and would mean a real set back for the working-class movement. But it would also be a valuable education to the workers and would help to make them realise the true foundations of the present economic system.

On the mere question of tactics it is important to remember that, if we are seeking a fundamental change in the organisation of society, we have first to bring about a fundamental change in the minds of the organised workers, upon whose will and capacity the realisation of the new society depends. We have therefore to present the idea of this system in a shape in which it will be readily and immediately understood. Our proposals must take the form of devising remedies for grievances which the workers acutely feel and are conscious of suffering under the present system. If they demand such remedies, and their demands are rejected, the work will not be lost; for the demand at least will have sunk more firmly into their minds, and they will set about the devising of fresh methods for its satisfaction.

Communists are apt to be somewhat scornful of appeals of this kind. Let us take, for instance, the question of unemployment. The Guild Socialist policy on this question has been to demand the guarantee of continuous payment for all workers engaged in industry, whether it is possible to find full work for them or not. In other words, Guild Socialists have demanded security of income. This demand has so far been rejected; but the fact that it has been made, and the intensity with which it has been made have exercised a powerful educational influence, and have, I believe, brought its realisation nearer.

somewhere to the left. But should we take the first, or the second, or the third, or perhaps the fourth, turning to the left? The first turning, we think, may lead to destruction; the second may be a *cul-de-sac*; the third may lead to a class tyrany nominally organised by the workers, but really containing no assurances of freedom. The fourth or the fifth or even the very last turning to the left may be the right one. Many of us think that the Communists, even if they too reject the first turning, want to turn too early.

What, then, for the views within the field of Guild Socialism which the majority of Communists would reject? I have pointed out that Guild Socialists have endeavoured to use every opportunity to stimulate within the Trade Union movement the tendency towards "encroaching control." During the past ten years, this process has been carried several stages further, although the progress which has been made is still insignificant in comparison with the length of the road which has still to be travelled. I have pointed out that this development of encroaching control, whereby in the past important concessions have been gained, has become more difficult during the past few years. In the earlier, stages, the demand for concessions along these lines was sporadic and only half conscious, and the capitalists had handly begun to realise its contagious character. As he woke up to the Guild Socialists' little game, and saw that the workers were waking up to *his* little game, his resistance stiffened and he became more inclined to oppose with all his strength each new demand that was brought forward. Changes which might have been conceded more or less readily a few years ago are difficult to secure now, and consequently many Guildsmen feel that it is useless to urge the workers to make demands which will not be granted as long as the present system exists.

These difficulties, however, furnish no reason for not putting our proposals forward. The very refusal of the demands which are urged

.. ..

.. ..

This resolution carried the League, on the question of the form of transition, to the left of the position in which it had previously stood. It has sometimes been interpreted as a Communist resolution; but many of those who voted for it were in no sense Communists. It is consistent with Communism, and represents the common basis of the ideas of Communism and Guild Socialism, and of other sections of the working-class movement. But it is not a Communist resolution; first because it is also consistent with the holding of many other views which are irreconcilable with the Communist standpoint, and in the second place because Guild Socialists as a body do not attach to it the peculiar and almost exclusive importance which it holds in the minds of the Communists.

The Guild Socialists believe in the sweeping away of the present forms of State organisation and their replacement by forms of organisation consistent with the fundamental idea of democratic self-government in every sphere of social action. They believe, further, that the workers themselves must carry out this supersession by the development of organisations which they themselves have created. So far they agree largely with the Communists; but they do not assign the same central position as the Communists to this view, nor is their interpretation of it the same as a Communist's interpretation would be.

Of course, when I speak of Guild Socialists, I must explain that I, like any other Guildsman, cannot speak absolutely for anybody but myself, although I am also endeavouring to interpret what I believe to be the main current of Guild Socialist opinion.

Perhaps I can put our point of view in another way. We have decided that, in order to reach the new Society to which we look forward, it is necessary for us, in marching along the road, to turn

They are seeking to mobilise the working-class world for a rebellion in which it will suddenly cast off its chains and overthrow the capitalist system. Many of us who are not Communists believe that at some stage in the transition from capitalism to Socialism there must, indeed, come a catastrophic break; but we take the view that it is important, not that this break should come as early as possible in the transition, but that, before it comes, every year and every month should be used by the working classes themselves, not simply for the stimulation of revolutionary enthusiasm, but for the building up of a constructive alternative to capitalism based on the organised working-class movement. Guild Socialists lay stress rather on this work of preparation for the new Society than on the actual overthrow of the old. Just as they believe that economic power precedes and dominates political power, they hold that "revolution" itself is preceded and dominated by the constructive preparations which the working-class movement makes for it. As soon as the workers are fit and strong enough collectively as well as individually for the control of industry, they will experience little difficulty in overcoming the opposition and in winning control.

During the past two years, there has been a very great deal of discussion within the ranks of the National Guilds League on the question of methods in the Socialist and Labour movement. The change in the situation in Great Britain and the rise of a new wave of feeling, of which Communism is the crest, have made it inevitable that the National Guilds Leauge shoud face up to this question of method. Very likely Guild Socialists have done this, not because they like it, but because they have been compelled to do it. The result of the controversy within the League has been the adoption by a majority of a resolution defining the Guild Socialist attitude towards this question of change. .. ..

.. ..

control. The results were startling. Given the power to organise their own service on a free and self-governing basis, the building operatives worked with a far better will and far more efficiency than they had ever done for private employers or for municipalities. This was admitted even by the employers, who, however, drew from it the deduction not that the Guild method in industry was the right one, but that the workers who were working for them were guilty of deliberate slacking and ca'canny.

It is by no means certain as I write (May 1921), that the Guild experiment in the building industry will be permanently successful; for the very successes which it has achieved so far have served to arouse a greatly intensified hostility to it, and there is every sign that both the Government and the employers mean to strain every nerve for the extinction of this first successful experiment in the self-government of industry under the control of the organised workers. But, even if this first experiment is stamped out—and there will be determined resistance from the organised working class movement to its destruction—the failure of a first experiment will by no means imply the failure of the method. The Building Guilds have taught us a lesson in the adaptibility of the policy of encroaching control to different conditions; and it will be our business, whether they succeed or fail, to make further experiments along the same lines. For these experiments, whether in the long run they succeed or fail, have the supreme merit of affording to the workers a direct experience in the conduct of industries and services, and thereby of manifestly fitting them for further assumptions of power.

The Communists, for the most part, have not shown themselves hostile to the developments of the Building Guilds; but they have been indisposed to attach to them any considerable importance. .. .. ..

.. ..

ary or not, also a policy which will directly help to develop the constructive and co-operative abilities of the workers in direct relation to the actual task of industrial control with which they are confronted.

During the past two years, the rise and development of the Building Guilds have shown that the policy of encroaching control is capable of unforeseen adaptations and expansions. Before the Building Guilds were founded, attempts had been made by agreement and negotiation between the employers and the workers in the building industry to make some approach to organising the industry as a whole on a basis of a public service. These attempts broke down in face of the resistance of the main body of employers to changes to which the more enlightened employers were prepared to agree. Then the workers, instead of despairing or saying that nothing but a social revolution could help them, determined to make an attempt at the substitution of a new system in the industry on their own account. They came together through their Trade Unions into Local Building Guilds and Guild Committees; they enlisted the assistance of technicians and administrators who were sympathetic to their cause; and then they made the offer to the Government and the Local Authorities that they would build houses on behalf of the public, at cost price, provided that they were given security of employment and full industrial self-government in the carrying out of their work. In face of the hostility of the Government and the employers, the immense public need for houses compelled the Local Authorities to give the Building Guilds a certain number of contracts, and compelled the Ministry of Health, much more grudgingly, to sanction some of these contracts. The Guilds then got to work and began to build houses at prices which were far beyond the prices charged by the ordinary private builder or the costs of the Local Authorities when they attempted to adopt the method of "direct employment," that is, to engage workers to work under direct municipal

this task. It is not a question of personal fitness or unfitness primarily, but of the capacity for co-operation and of experience in the organisation on a co-operative basis of large-scale enterprise. This, at present, the workers' organisations, with the exception to some extent of the Co-operate movement, do not possess; and it is this that they must learn before they can hope successfully to exercise real control over the industrial system.

In the learning of this lesson, I can see no alternative to a piecemeal, however rapid, assumption of power, in order that actual experience of control gained in the administration of some part of the industrial machine may be used as a basis for further accessions of authority. The Trade Unions have been built up partly as friendly societies, partly as instruments of collective bargaining and protection against exploitation. The qualities of solidarity which the workers have demonstrated and acquired through their Unions are of extraordinary value as a basis for co-operative effort in the control of production; but they are only a basis, and cannot, in themselves, suffice for this purpose. If, therefore, the policy of encroaching control, which Guild Socialists have advocated in the past, has been demonstrated to be in some respects inadequate, the remedy seems to me to lie not in an abandonment of the idea in favour of a wholly revolutionary outlook, but of a better working out of the policy of encroaching control, with a view to correcting the defects which are at present apparent in it.

For the purely revolutionary outlook, even on the doubtful assumption that it may increase the aggressive strength of the workers, certainly does little or nothing to improve their constructive capacity. It does not fit them for the assumption of control over industry, except in the very general sense in which all awakening and all effort help towards the development of capacity for responsibility and power. We need, whether our general conception of the coming change is revolution-

Communist ranks. For Communism, beyond aiming at a social system under which the workers will exercise control over society, is not an ideal, but a method. It does not attempt to define the nature or working of the society to which it looks forward. It makes its appeal and argues its case almost entirely on the question of the transition from capitalism to a Socialist system. The Communists urge that there can be no gradual or peaceful transition, ...
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..

Thus, at the present moment, a considerable section of the membership of the National Guilds Leauge—how large a section it is impossible to determine—has joined the Communist ranks. I am not one of these because, although I recognise that the circumstances and the time are adverse to the successful working of the policy of encroaching control, I have not lost faith in that policy, nor do I see any hope in the alternative which is put forward by the Communists. In common, I think, with the main body of Guild Socialists, I envisage the form of transition from capitalism to Socialism as one not merely of strength inaggression, but also at least as much of fitness for administration. Until the workers through their organisations are not merely strong enough to wrest the control of industry from those who at present exercise it, but also strong enough and well enough organised to carry on the administration of it themselves, and to secure uninterrupted smooth running of the wheels of production, it seems to me futile to expect the realisation of Guild Socialism or of any kind of democratic social system. I am not suggesting, in saying this, that there is any personal unfitness on the part of the workers by hand and brain for

the whole conception behind the Whitley Report was essentially different from that which Guild Socialists had been advocating. .. ..

.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..

But at no stage were they to enter into any sort of partnership with capitalism.

When it was found that the employers would resist with all their strength any attempt to secure exclusive control even within a very restricted sphere, some Guild Socialists began at once to despair of the whole "encroaching control" policy. "Here," they said, "is no salvation; this is merely constitutional action, as barren of results as the constitutional political action of which Guildsmen have always recognised the futility as a primary instrument for the realisation of freedom." 'If the employers," they said, "mean to resist any attempt to bring about a transference of economic power, the inevitable conclusion is that there must come, as soon as any attempt is made to carry out the Guild Socialist policy even in its early stages, a catastrophic conflict between the forces of capitalism and Labour." "Let us drop," they said, "our constitutionalism, which attempts a gradual change from capitalism to Socialism, ..."

As the Communist movement gradually took share in Great Britain in 1920, the Guild Socialists who held this view, while retaining their faith in Guild Socialism as an objective, naturally passed over into the

further successes, until gradually, by a series of stages, ...
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..
.. ..

This policy was preached with intensity in the Trade Union movement for a number of years, and it undoubtedly produced a very considerable effect upon the attitude of the more powerful Unions, which began, not merely to claim a share in the control of industry, but to seek definitely to assume control piece-meal whereever they saw an opportunity of doing so. In a later article, I hope to develop in further detail the implications of this policy and some of the practical steps which Trade Unionists have taken in their endeavours to give effect to it. But for the moment I must content myself with this broad indication of its general character and objective.

It was in 1919 that the first serious questionings of the policy of "encroaching control" began to be heard both in the more advanced sections of the Trade Union world and in the National Guilds League itself. For, in this year, the first after the conclusion of the Great War, it became manifest that the employers were fully alive to the possibilities latent in such a policy and determined to use every effort to resist it. It was found, therefore, that, while the Trade Unions might prepare schemes for the gradual assumption of control, they would meet with resistance from the whole force of capitalism to any attempt to take even the primary steps in putting such a policy into effect. It was, indeed, easy enough to win such "concessions" as those of the Whitley Report, which purported to give to the workers a share in control. But

is clear that the character and success of working-class political action will depend upon the strength and preparedness of working-class industrial organisation. Get the Trade Unions and Co-operative Societies strong, they have urged, and secure the adoption by them of a difinite and constructive economic policy, and success and strength in the political field will follow almost as a matter of course.

Working along these lines, the Guild Socialists developed the strategy which has been largely associated with their movement from the first—the strategy which is often known under the name of "encroaching control." They pointed out that, as long as the activities of Trade Unionism are confined mainly to disputes about wages and hours and similar questions which left the fundamental character of the wage contract unchanged, the workers would find themselves involved in a vicious circle. Increases in wages would be offset by a rise in the cost of living, and reductions in hours, by intensification of the strenuousness of Labour. What was gained by the improvement of conditions in one direction would be lost by a tightening of discipline in another.

.. ..

.. ..

.. ..

.. ..

.. ..

The theory of "encroaching control" was thus a direct appeal for a change in Trade Union policy. In effect, the Guild Socialists said to the Unions "As fast as you find yourselves strong enough in any sphere or direction to assume control over any part or sphere of the industry on which you work, be it great or small, make the primary object of your policy the securing of that control .. ..

and their representatives and transfering it to your own organisations. Every success gained along these lines will lay the foundation for

power," the Guildsmen have said, and by this they mean among other things that the economic organisation of society determines its political organisation, and that, while there is servility in industry, that servility will inevitably reproduce itself in the political system. In the same way, the establishment of free conditions in industry will lay the foundation on which a free political system can easily be raised. Guild Socialism is thus throughout built on an ideal. Its ideal is a Society based upon self-government, not merely in the sense in which self-government was advocated by the "political democrats" of the 19th century, but self-government extending to every sphere of the life of the body social. We must have self-government, they contend, in industry, in every service, in every natural and necessary grouping of human beings for the carrying out of a common purpose, before we can hope to have self-government in the community as a whole.

Clearly, this ideal is compatible with many different views as to the methods to be adopted in approaching it, and there have from the first, been considerable differences among Guild Socialists on this question. During the earlier years of the League's work, these differences did not emerge clearly, or lead to any definite or fixed groupings among the different schools of Guild Socialist thought. But the rise of Communism, and still more the causes which lie behind the rise of Communism in Westen Europe, have led to a great sharpening of the differences in the working-class movement on the question of method; and these differences have naturally found a keener expression within the ranks of the National Guilds League.

In the earlier years of Guild Socialism, the Guild Socialists were united to a man in protesting against the exaggerated importance attached to political action by those who represented it as almost the exclusive method to be used in the attainment of Socialism. They pointed out that since "economic power precedes political power" it

new basis, that of free and self-governing service. They are seeking to persuade all those whose business it is to serve the community, that under the present conditions their service is being wrongly organised in the interest, not of the satisfying of the most pressing human needs, but of the realisation of private profit. And they are seeking to show also that, because of the failure to enlist the real co-operation of the workers in the control of production and of the rendering of service, an immense amount of human effort is going to waste, and it is impossible to induce the ordinary man to realise that it is his duty as a member of society to work with a will for the common benefit. He has, indeed, under existing conditions, little chance of doing so, however good his will may be; for everywhere he finds himself barred off from the free service of the community by those who seek to make a profit out of his labour by directing it not to the most useful end, but to the satisfaction of economic instead of human demands. He finds in addition that the system under which he is working rests on the assumption that he will allow himself to be ordered about and excluded from any control either over the product or over the manner in which his service is organised.

Guild Socialism arose as a challenge to the present industrial order, emphasising above all the necessity for a free industrial system in which the workers by hand and brain of all grades and sections will organise co-operatively, for the common benefit, the service in which they work. Emphasis was laid upon the conception of a self governing community; and the Guild Socialists have, from the first, pointed out that, as long as the prevailing conditions in industry deny the idea of self-government and human freedom, it is useless to look for self-government or freedom elsewhere. Thus the failure of political democracy has been represented by them as the inevitable result of the failure to establish any democratic system in the industrial sphere. "Economic power precedes political

GUILD SOCIALISM & COMMUNISM.

By G. D. H. Cole.

I am a Guild Socialist; and I am not a Communist. But there are many in Great Britain to-day who claim to be at the same time Guild Socialists and Communists, just as there are many Communists who are not Guild Socialists, and many Guild Socialists who are not Communists and some who are strongly hostile to Communism. How does this, on the face of it, somewhat curious mingling of opinions arise, and how far can it be stable?

It is possible to-day because Guild Socialism is not, and never has been, organised as in any sense a political party. The National Guilds League has never aimed at forming itself into an organisation similar to, or in competition with, such bodies as the Labour Party or the various Socialist Societies. It has been and remains a propagandist League, concentrating on the attempt to win converts to the Guild Socialist idea, and working with this object inside all the organisations whose member are susceptible to conversion. It works primarily, of course, within the Trade Unions and professional organisations; for it is to their members that the Guild idea makes the most obvious and direct appeal, and it is upon these organisations, above all, that the Guild society must be founded if it is ever to come into existence; but it works also within the Labour Party, within the Socialist Societies, and within the other great wing of working-class organisation, the Co-operative Movement.

Within all these bodies Guild Socialists are actively endeavouring to bring home to the organised workers, whatever may be the policy of the industrial, political or co-operative section to which they belong, the need for a fundamental re-organisation of the social system on a

「あの世」の物語

門馬直衛

緒言

あの世からの官報は未だ見たことがないから――とハイネは言つた。あの世と云ふものが眞に客觀的に實在してゐるものか如何かは暫く措くとしても、少くとも私共は『沈思の神聖時に於ては現實の世界を忘れて私共自身の中に時間のない永遠性が廣がつて行く』(Windelband, Präludien, 5 Aufl. II Bd. S. 343)ことは事實であると思ふ。『宗教の本質は、超世界と云ふことにある』(Op. cit. S. 305)。卽ち現實生活を離れたあの世と云ふ超越的世界にあるとは事實でなければならないのである。哲學も宗教も其の目的の爲めには私共の體驗を超越しなければならない。兩者はこの超人間的の精神に於て擴張せられ、擴大せられた世界卽ちあの世に私共を導くのである。(Münsterberg, Philosophie der Werte. 1908. S 81)

人類があつて以來死なない人はない。科學的な若返り法が發見された現代では或は死なない人が出來るかも知れないが、若返り法の眞價も實驗的には其の眞價が未定であると云ふことが出來る。よしや今後死なない人が出來るにしても、少くとも現在までは死は人類に回避出來ない必然的のものであつたのである。死は科學的に説明すれば生活機能が永久に休止することに過ぎない。けれども科學的には如何に巧妙に簡單に説明されても、死の説明が巧妙に簡單になればなる程、人間はその説明のみを以て滿足することが出來なかつた。そして人は死と共にあの世に行くとせられてゐたのである。現代の科學者には或はあの世の觀念がないかも知れないが、少くとも從來は人は死ぬと同時にあの世に行くものとしてゐた。そして彼等には明かにあの世の觀念があつたのである。

昔から今日に至るまで人間が常に考へてゐたことは自分の幸福と云ふことであつた。この幸福は獨り地上に於て外界の刺戟を利用してのみ實現され得るものであるが、外來の刺戟たる自然力は人間が直に勝手に利用することは出來なかつたので、人

間は想像に依つて幸福を實現しやうとしたのであつた。單に幸福を想像に依つて實現しやうとしたばかりではなく、その幸福を永遠のものたらしめて、生きてゐる間ばかりではなく死後もその幸福に生きやうとしたのであつた。この考と死の恐怖と神秘とが合致して宗教が生じ、又あの世の觀念が成立したのである。かくてあの世の觀念と宗教とは密接不離の關係があつたのである。

人類のある所には必らず宗教があつた。宗教は民心の要求する所である。民心の要求は時代と處とによつて異る。宗教の發生するには必らず一定の場所に於けるその時代相當の要求を充たして來た。かくてあの世の觀念は古今その發達を異してゐて之を研究する時は人心の發達、理想の進化を知ることが出來るのである。

實は永遠なる超世界たるあの世の淨福にあるのであるから。あの世の觀念の發達を研究すれば民族意識の發達も知ることが出來るのである。

あの世からは官報はおろか報告一つ達してゐないのであるから、あの世の事情や發達を知るのは一通りの困難ではない。偶々報告があるかと思ふとそれは全くの想像か、でなければ希望に過ぎないものである。この拙い小篇を稿するに如何に苦心したかは祭して頂きたい。私はその時代〳〵の民族の要求を基として理論を基き、其の理論を據つてあの世の觀念を推理したのである。三年越しの研究であつたから參考にした書籍は多くて一々記憶し難い程ある。其の中の主なるものは

桑田學士——民族心理學講義
矢吹學士——阿彌陀佛の研究
南條博士——阿彌陀經
本居宣長——古事記傳
新舊譯聖書
莊子、列子等
井箆氏　ユートピア物語(中央公論所載の部)
M. Wundt, Mythus in Religion I. II. 1917.
M. Wundt, Elemented, Völkerpsychol gie 1912.
Fournoy, Beiträge zur Religions-psychologie 1911.
Pratt, Psychology of Religion 1907.
Ir. King, The Developement of Religion 1910.
Ames, The Psychology of Religious Experience 1910.
Stratton, Psychology of Religious life 1911.
P. Deassen, Outline of Indian Philosophy.
Münsterberg, Gründzüge der Psychologie 1900.
Münsterberg, Philosophie der Werte 1908.

——, Eternal Value, The; 1909. 2d. 1911.
Windelbund, Einleitung in die Philosophie 5 Aufl. 1914.
——, Präludien 5 Aufl. 1915.
Cole, Social Theory.
H. G. Wells, New Worlds for Old.
A. J. Penty, Old Worlds for New.
Kirkup, A History of Socialism.

其他である。煩を避けて本文中にはなるべく頁數を引かないことにした。若し疑問を發せらるる讀者があつたら何時でも答辯の責に任じます。

あの世の觀念は時代と共に隨分變つて來てゐる。私はその進化の順序に從つて死後の世界も同じく此の地球上に限られてゐたものを假に靈府と云ひ、更に地下の世界に及んだものを黄泉と云ひ、天下界のものを天國及極樂淨土と云ふことにした。それから同じこの地上にあつても文明人が主として個人的に希望し想像したものを理想境と云ふことにした。記述の順序も大體右の順を追ふことにした。その最後に私自身の拙いあの世觀論と、そして理想境論とを加へることにした。實は私自身の抱いてゐる理想境を述べる豫定でゐたのであつたが、それは次回に延ばすことにしたのである。

地上の靈府

我國の伊邪那美尊が火神を生れた爲めに黄泉國に去られ其の後を追ふて伊邪諸岐尊があの世に赴かれたと云ふのは記紀共に出てゐる傳説であつて我國に於けるあの世の初めである。人間の最初の靈魂觀念は渾一なものであつたら當然あの世の觀念も見受けられなかつたが靈魂が分れて形魄或は體魄と遊魂との二つになり、前者は身體的靈魂であつて常に身體に附隨するものであり、後者は遊離靈魂であつて身體を離れて處々を遍歴するものとなつてからは靈魂觀念はあの世の觀念と相關係することになつたのである。(7)

靈魂觀念の淵源は今の所私には明かではない。宗教歴史を見れば何處の歴史でも既に相當に發達した靈魂表象を物語るので其淵源に就ては何等の手がかりともならない。先史人類を研究するには從來は專ら人骨又は遺物に依つて先史人類を地下にのみ探つてゐたのであつたが、近頃ドイツの或る山間に發掘された人頭骸骨があつた。それは現今の野蠻人の頭骸骨と酷似してゐるので、その兩者の精神作用も略類似せるものであらうと云ふ假說を立て、それからは先史人類を未開民族に求めるやうになつた。それで地上の先史原始的人類が出來たのであるが、その

中で極めて幼稚な原始民族、例へばアフリカの倭人種セイロン島の自然吠陀族等には靈魂觀念がなかつたが、南洋の土人及び南北アメリカの諸民族は明かに靈魂殊に遊魂の觀念の域に達してゐた。即ちアウストラリア洲の土人中には、死者のあつた際にはその死者の靈魂が早く屍體から逸出するやうに、之を空中に追つてやる慣習が見受けられる。ニウギニア島の民族は葬埋の時には屍體を十重二十重に縛りまわして、肉體を地下に埋めてからも靈魂が遊出するのを防いでゐる。マルケサス島の土民は屍體を葬るに先立つて其口腔と鼻孔とを密封して靈魂逸出の途を斷つ慣習がある。これは思ふに口と鼻とは絕えず私共の氣息の出入する門であるから靈魂の出入にもこの道を辿ると考へた故である。(Wundt, Mythus und Religion I. S. 48 ff. oder Waitz, Taylor, Schelling etc.) 靈魂或は遊魂が落ち着く先はあの世である。あの世は他界或は彼岸とも云はれる。とにかくあの世は靈魂の最後の住所となつてゐる。そして靈魂の世界は最初の人類意識では吾々生者と同樣に地球上に置いたのである。アメリカ印度人の意識する所に依れば靈魂の住するあの世は吾々生者の肉眼にこそ見えないが、地球上の或る地域に厳として存在してゐる。これを靈府と云つて置く。(2)死者は此の靈府に集合して吾々生者と同樣の生活を營んで居る。靈府の所在地は山間溪谷の間、或は岩石の間、或は又溪谷瀑布の下であると北米ケエロケゼン種族は物語つてゐる。生者とても此の府に入ることがある。伊弉諾尊が生き乍らあの世に赴いたのはこの靈府であらうと思はれる。よく田舍などの物語に其誰は此の頃村から雲隱れした、全く居なくなつたなどと云はれてゐるが、この神隱しと云ふのは思ふに靈府人士の誘拐に原因するのである。靈府に入るの門は岩窟又は洞穴である。チエロケエゼン族の物語には靈府そのもの丶情況は明瞭ではあるけれども之に入るの門は未だ明確と云ふことは出來ない。ところが靈府への道即ちこの世とあの世との境を巧に物語つてゐるのは北米のポオネエ種族である。この世とあの世とは炭よりも黑い水をたたへた一の水流を以つて境界せられてゐる。そしてこの江河の附近は四方悉く暗黑である。其の上に黑い橋が架せられてある。死者はこの世を去る時にはこの黑い橋を渡る、渡つて了へばあの世に達するのであるが、あの世はさほど暗くはない。そこでは吾々生者と同じ樣に暮してゐるのである。けれども靈府の所在地は明了ではないのである。南洋ポリネシア島の民族はこれ等アメリカ土着民族よりも文化が進んでゐるとされてゐる。ポリネシア島の民族の表象してゐる所に依れば死者はその墓まで運ばれたら、そこから靈魂は間もなく屍體をあとにして果てしもなく

遠い萬里の洋上に横はる島に逝ふのである。即ち靈府は大洋中の島嶼となつてゐるのであるが、かくの如く靈府を大洋中の島嶼としてゐるのは他にも二三の沿海民族がある。

斯くの如くあの世の觀念は種族に依つて異つてゐる。そして又この世からあの世に達する道も同一ではない。けれども死後の世界たるあの世が吾々の住する地球世界の上にあつた點は何れの民族も同一であると云ふことが出來る。そして又あの世の住民は善惡雜居であつて黃泉と異つてゐる。換言すればあの世の觀念の第一期は地球上の靈府であつたのである。思ふに幼稚な自然民族はあの世をさほど遠隔の地に置いたり、更に地下とか天上とかに置く丈けの想像力を有しなかつたのである。そして各民族が夫々共の環境を基として生存中の種々な直接經驗によつてあの世を想像し表象したのであつたから、各民族の環境の異ると共に又あの世の觀念も異つてゐたのである。

1. 禮記、郊特牲曰、魂氣歸ニ于天一、形魄歸ニ于地一。亦同書、禮運曰。體魄降而。和氣在レ上。易繋辭上曰。遊魂爲レ變。
2. 靈府とは Geisterdorf のことである。莊子の德充符曰、不レ足ニ以滑一レ和。不レ可レ入ニ於靈府一。注曰、靈府精神之宅也。

地下の黃泉

一、黃泉の成立と發達

地球上に設けられたあの世の觀念の中ではポリネシアの靈府が最も遠く隔つた場所に表象せられたのであつた。地球上のあの世は行く所まで遠く行つて、既にそれ以上の發達の余地がなくなつた。且つ又死者の世界を生者の世界と同じく地上に置いたのでは余りに兩者の緣が近過ぎる。そこで二つの世界の間には黑水を置いて見た。けれども一葦帶水丈けでは眸をあげれば眺め見ることが出來るので困る。第二のあの世はもつと大なる境界の彼方であつて、この世と異る場所に設けられなければならなかつた。かくてあの世の觀念の發達は第二の階段に進捗して、地上のこの世とは別に、地下にあの世を見出すことになつたのである。古代の稍開明した民族の表象したあの世はこれであつた。このあの世を黃泉と云つて置く。(1)

けれども古代民族の意識はさほど巧な論理をたどつて急激に地上のあの世から地下のあの世に躍進したものではなかつた。地上のあの世から地下のあの世に進むまでには幾多の中間階段を通つて遲々として移つたのである。出雲の風土記に依れば或る海岸に洞穴がある。其高さと幅は各六尺、深さは知るべからず。人が若しその洞穴を覗ひ見れば忽ちにして死するのであつて、此の洞穴は夜見の穴と名づけられ、そこに行く道は夜見

の坂を云はれる。思ふにこの穴はあの世に通ずる道であつてその附近まで行くとあの世から招かれて行くのである。(2)これで見ると我國古代のあの世の觀念は地下の世界であつた、黄泉であつたのである。けれども記紀には同じ黄泉と云ふ文字を用ひてはゐるけれども、その云ふ所の黄泉は地下ではなくて地上にあつたものと思はれる。伊邪那美神がかみさりました時、之を出雲伯伎の境にある比婆之山におかくし申した。その際伊邪那岐神は迦具土神の頸を斬られる。次で男神は女神をお訪ねになる。二神はこれまで力を協せて諸々の國々を造られたが、『そなたと國作りの功がまだ終らない。今一度うつし世に還つて頂きたい。」「黄泉の國の食を取つたのであるからもはや歸還はおぼつかないけれども、折角のお勸めであるから一應、夜見津神々と相談しますから暫く此家でお待ち下されたい。固く申し置きますが決してわらはを見ては下さるな」と、そこで最初の會見が終つた。男神は女神の言葉に從はず、火を燭してその身體を御覽になつた。それで女神はその侮辱を憤り、豫母都志許賣共を遣して男神の後を追はしめた。八の雷神に千五百の黄泉軍をつけて男神を追跡せしめられる。男神は十拳劍を拔いて後手の者共を拂はれる。黄泉の比良坂の坂本に至りて男神は桃の果を三個取つて投げつける。ために追跡の軍兵は悉く逃げ歸つた。これではいけないとあつて最後に女神は自ら出馬せられる。ここに男女二神は千引石を比良坂に引塞いで、石を中にし對坐し、御會見をなさる。どうしても女神はうつし世には還られない。「吾は一日に千人のうつし世の人を殺す。」「そなたが千人を殺すなら、我は一日に千五百人を産んでゆく」と云ふ話が記紀にある。

(3)これで見ればこの世とあの世との間には岩石がある。けれどもあの世が地球上であるか或は地下にあるのか明かではない。神武東征の時、戰利あらず、熊野の高倉下の夢に天照大神高木神が建御雷神を召して援助を命ぜられ、建御雷神は自ら援助に赴く代に平國(クニムケ)之劍を降されたと見て自分の倉から其劍を發見して、神武天皇に獻じたと云ふ傳說も記紀共に出てゐるが、其の神詔に葦原中國者。伊多玖佐夜藝帝阿理邦理。我之御子等。不平坐良志とあるのは(古事記)死んだ祖先の靈があの世にあることを云つてゐる。更に神武軍嚮導の爲めに天上より八咫烏を遣はされたともある。我國の古代のあの世の觀念は一層多くの材料に依らなければ未だ何れとも速斷することは出來ない。或る人は地上と云ひ、或る人は地下と云ふ。又或る者は天神地祇でどこにもあると云つてゐる。私は古事記に依れば地上にあるらしく、他の所傳に隨へば明かに地下であると思はれる。或は地上のある世から地下のあの世へと移る中間の階級にあつたの

かも知れない。

とにかく地上のあの世は、ある種の橋梁を渡つて地下のあの世の觀念に進むのである。古代イスラエルの民族セオオル、羅馬民族のオルクス。古代ゲルマン民族のニフルハイム等皆地下の黄泉であつた。この黄泉國へは生者が往復出來るのもある。古代ギリシアのはその一例である。ヘラクリトスの英雄事業は黄泉國に於ても成功してゐる。彼はこの世の戰功を以て足れりとはせずに、黄泉(Hades)にまで這入つた。そこには怪犬ケルベロスが城門に構へてヘラクリトスの入國を拒んだのであつたが、剛毅なる彼は無雜作に怪犬を平げた。ヘラクリトスはかくて黄泉に這入つたのであつたが、黄泉にはヘスペリテンと云ふ婦人があつた。そして果園多く茂つてゐる神園に遊んでゐる勇敢な英雄は婦人の手から、黄泉の林檎を奪ひ取つたのである。(4) このヘスペリデンと云ふのは西方の處女の意味だそうである。して見ると古代ギリシアの黄泉國は西方にあつたこととなる。

斯くの如く古代民族があの世の地下とか西方とかに置くやうになつたのは日沒の印象に動かされたものであつた。太陽は時と處とを問はず共通に照して民族に重大な必要品であつた。人生五十年、二萬日近くも繰り返し繰り返して人を照しては西方に沒する。日月は民族の心理を支配することは甚だ大であつたとは云ふまでもない。彼等はこの偉大な物體が千秋變ることなく沒する西方の地下には何物かの世界があるのではなからうかと考へた。然し直接に之を踏査することが出來なかつたので、想像は益々强くなつて行つた。尤も太陽神が所々を遊歷する神話もあるから日沒の印象のみが地下界の觀念を構成する動機であるとは限らない。地下界の觀念を構成するには此の外種々な動機があつたのは事實である。ゲルマン族北歐の神話に依れば黄泉國は雲霧朦々として晝夜の別はなく四時薄明であつて氣候は寒冷である。此の地下の寒冷なのは一つは屍體そのものが冷いのと、墓の穴が冷いとの印象から來てゐるものである。けれども又寒冷であつたり薄明であつたりするのは、冷い屍體と墓の穴、薄暗洞穴などの印象の外に日沒後冷氣を感じ、薄明となる印象からも來てゐることであると思はれる。とにかく是等の種々の印象は相集まつて黄泉の所在及び氣候等を構成したのである。

黄泉の生物は變怪なものが多い。ギリシア神話のエリニズは黑い身體で、片手に松火片手に鞭を持つてゐて、其の軀幹は大蛇に卷かれてゐる。ハルニスは馬の體に羽毛があり、暴風雨の際に人を奪ひ去る。そして後代のハルニスは頭部と胸部とが女形

になつてゐる。ケレスは黑い女で血の衣を纏ひ。戰場を往來して生者を誘拐し去る戰死者のあるのは全くケレスの所爲に基くものであるとせられてゐた。又既に述べた通りヘラクリトスの征服したケルベロスは三頭の犬の形を爲してゐる怪犬であつたのである。怪犬は其他古代インド民族の黃泉にもゐた一種の地獄の犬である。かくの如く黃泉の生物が變怪を極めてゐるのは、生者が死と云ふ事實に遭遇した時に驚愕、悲哀、恐怖、戰慄、等種々と深く感動するが爲めに、地下のあの世の住人を普通人でないものにして了つたものであるらしい。(5)

註(1) 黃泉とは Hades のこと莊子。外物篇曰。然則廁レ足。而墊レ之。致二黃泉一。人尚有レ用乎。

(2) 出雲風土記宇賀郷の段參照、

(3) 日本書紀神代卷四、古事記上卷參照、

(4) ヘラクリトスには所謂十二の英雄事蹟がある。その中の第十一及第十二の事蹟は黃泉國に於てなされたとされてゐる。

(5) Wundt, Elemente der Völkerpsychologie 參照、

二、黃泉の區分。

斯くてあの世の觀念は生者の直接經驗と想像とで構成せられたのであつた。換言すればあの世はこの世の成素を生者が投寫したものである。あの世の觀念が蒙昧の時代にあつては、それは渾然たる一つの領土であつて、住民は善惡の區別なく悉く雜居してゐたのであつた。ところが此世に因果應報の思想が發生し、善因善果惡因惡果と云ふことが一般に考へられるやうになつてからは、あの世は別れて二種となつて、善人は樂土に、惡人は地獄に死後の世界を定めることになつた。そして善惡を判斷する標準は全く神意にあるとせられてゐた。換言すれば道德上の判斷は倫理的ではなくて專ら宗教的であつて、敬虔な人や、祭祀拜禮等を謹んで爲す者等は善人となり、神を汚辱したり、神意を無視する者は惡人とされたのであつた。この思想は至るところにあつた。日本でもそうであつた、五瀨命負のとき、吾者爲日神之御子。向日而戰不良。故負賤奴之痛手と詔のあつたことは古事記に明かである。支那でもそうであつた。古代ローマでもそうであつた。古代ローマ人がレムリア即ち五月九日、十一日、十三日の夜に黑豆を以つて厲鬼(Lemures)を撲つたのも同樣の思想から出たものである。我國の節分に行ふ豆まきも同じ思想に依るものらしい。かくてギリシア民族の黃泉國も余程後代になると明かに苦樂の二域が區別されたのである。ヴアモジルのエナイデ詩篇には所謂惡人が死んでから地獄に導かれる有樣を叙してゐる。ゲルマン民族の黃泉は最初は斃れた戰士の行く樂土であつたものが、後には惡人の行く地獄も出來た

のであつた。古代インド民族及びイスラエル民族のあの世には明かに苦樂の二つの區別があつたのである。

黄泉國土が苦樂の兩域に區別された時代はこの生者の浮世では種族團體が發達して一種の國家が發生し、從つて又君主の成立があつた時代であつた。此時に黄泉國土にも神が成立したのである。そして地上では君主權が力を振ふ時地下のあの世では黄泉の神が道德の判斷を下したのであつた。黄泉の神にも主神と從神とがあつたのである。そしてこの神々にあつては女性が大なる役割を受持つてゐて、主神は普通の場合女性に限られてゐた。我國では前に述べた比良坂で男神と女神とが會見してから女神は再び黄泉國に還る。この場合千引岩はギリシアのアベロスの役目を演ずるのである。女黄泉國に還つた女神は黄泉津大神と申す主神となつたのである。黄泉に主神があつて、女性が優勢な地位を占めてゐたことは古代開明民族何れも同じである。バビロニアでは男の主神ネルガル神よりも其の妻のエレスキガル神の方が有力であつた。ギリシアの黄泉に於ては女神ペルセホオネはその夫なるプルウトー神よりも心身共に卓越してゐた。更に又古代ゲルマン種族のヘル神は女性であつて地下界唯一の神であつた。最高地位にある神が女性であるばかりではなく、猶又黄泉に現はれる種々の神々、或は邪魔的物體もその多くは女性になつてゐる。我國の夜見津志許賣も女性である。或人は志許賣を鬼としてゐる。本居宣長に依ればおにとは總べて異常な、形恐ろしく見にくきを云ふのである。(1) して見ると鬼の中に女性があつても差支はない。プルウトー神の膝下に居る黒い衣を着た運命の神パルチエンも女性である。頭には蛇鱗を有し歯は長くて眞鍮手をして金翼を有するゴルゴオネン神も女性である。若し誰れでもこのゴルゲーネンを見れば忽ち化して石となる。そこでこの泥魔的物體を征服したペルセウスは先づゴルゴオネンを鏡面にうつして化石の災を免れたのであつた。一眼一歯を共用する三體のグライエンも女性である。又ゲルマン民族の神話の中で、パルチエンのやうな役割を演ずるノルネンも女性である。(2)

以上の主神並びに諸神等は黄泉觀念の發生の初期から秩序整然としてあつたのではなくて、これ等は實際に於ては余程後代になつて樂土たる天國に主神の出來たのと相俟つて成立したのであつたが、便宜上この節に述べたのである。とにかく黄泉は最後に分裂した苦樂の二界となつた。そして兩界共に地上の文化の進歩と共に次第に發達して行くのである。そして地獄と云ふ苦のあの世は永久に人間自身の脚下の地下に置かれたのであるけれども、安樂のあの世が人間自身の脚下に置かれることは

善惡の感情が承認しない。ここに於て天上の樂園が現はれるのである。かくて今日の文明民族にあつても地獄は下方に想定し極樂たる樂園は天上に表象するに至つたのである。

註(1) 本居の古事記傳參照

(2) Wundt, Mythus in Religion. II. 參照

天界の樂土

天國及び極樂淨土

列子の理想境たる華胥國は西方遼遠の地上にあつたが、莊子の無何有の境の所在地は六極の外とあるから、(1)文字通りに解すれば既にこの地球上にあつたものではないらしい。何れ天上界に近いものと云はなければならない。ところが基督教及び佛教に傳はつてゐる安樂のあの世になると共に明かに天上界にあつたのである。佛教の安樂淨土は西方十萬億土を過ぎて此の世界にありと云はれてゐるから、一見地上にあるやうではあるけれども、一般佛教信徒の表象する所に依れば、人は往生を遂げたら佛菩薩が使者として、雲に乘つてあの世から迎ひに來るのであるから、あの世は明かに天上界にある。又基督教徒が死ぬことを昇天すると云ふ程であるから基督教の天國も天上界にあることは明かである。

これ等樂園としての天上界の觀念は、未開民族が考へてゐた天界とは違ふものである。未開民族の說話或は傳說に依ると、話中の主人公が天上に昇ることもあり、若者とか酋長とか云ふ民族中の異常な人が死後に昇天して星となり、或は又化して日月星辰の中に住したりする。即ち彼等未開民族にも天上界はあつた。然しながらこの天上界は佛基二教に謂ふ所の天上界とは異るものである。未開民族の天界は通常私共の耳目に慣れたものから表象した物理的の天界であるが、樂園としての天上界は之と異り、前に述べた理想境的天國である。前者は物理的天界であるのに對し後者は理想的樂園である。

佛教の極樂國土の觀念は釋尊が說いたものであつた。起原は一個人の說法に基く單なる釋迦其人の理想に過ぎなかつたのであるが、遂に民族的の觀念とまでなつたのであつた。古代インド民族の諸神は民族そのものの成立と共の起原を共にし、又民族の進化と共に發達したものであつて、遂に國民的の神とまで向上したのであつた。そしてそれ等の神は時代〳〵の民衆の要求を滿足せしめてゐたのであつた。けれども神は時代の產物であつた。一時代の產物たる神が何時までも永く他の時代の要求に適合することは出來なかつた。かくて既存の神に對する信仰は日に日に薄らいで行つたのである。ドイセンも云つてゐるや

うに既成の諸神中には良民を苦しめたり、或は良家の子女を犠牲として要求したりするやうな不道徳は者も多かつたのである。神佛がかく如く墮落しては、最早や從前の信仰は亡びないわけには行かなかつた。かくて紀元前五世紀頃は古代インド民族の國民的信仰の對象としての諸神は漸く其の權威を失墜して舊來の信仰は亡び、新なる信仰は未だ起らず、民衆は何に依りて何を爲すべきかの標的は失はれ、一代の民心は歸趨するところを知らなかつたのである。そして何に向つて何に進むべきかの目標を失つた民衆は人間行爲の源泉にして標準となるべき新しい信仰を要求してやまなかつたのであつた。この時に當つて釋尊が出たのである。ヴントも云つたやうに『認識に依つて或る物を體得した』所の釋尊が說く所は時代の要求によく適合したのであつた。信仰の對象を失つて動搖してゐた民衆は彼を救世主と賴むやうになつたかくて釋尊の悟道は民衆に受け取られ、既存の國民的諸神を失つた民族はここに釋尊と云ふ神人(Gottmensch)を新に得たのである。個人的意識は民族的意識となり、一人の極樂國土がインド民族の極樂國土となつて了つたのである。

　極樂國土はインド民族の樂園であるが次第に支那から日本にも傳へられることになり、遂に世界各國にまで移入されたのであつた。この極樂世界と云ふのは如何なるものであるかは阿彌陀經に詳述してある。その大體を茲に書いて見れば次の如くである。(2)この世から十萬億の國々を過ぎて極樂國と云ふあの世がある。この國には七つの建築物がある。あたりには多羅樹の並木を繞らし、金銀、靑玉、水晶など美しい寶で飾つてある。又金、銀、靑玉、水晶、眞珠、珊瑚、金剛石の七寶の池がある。八功德水の碧の中から五色の蓮華が色とりどりの美しい色を放つてゐる。白色の蓮華は白光を、黃色のは黃光を、黑色は黑光靑色は靑光、赤色のは赤光を放つて、色光燦として眼を娛しませるそこにゐる民衆は朝な朝な百千の蓮花を他方十萬億の佛菩薩に供養をし、晝夜六時には曼陀羅華を散らし、時が到れば各家路を指して歸つてゆく、そして百種の珍味に心身を養ふのである。此の樂園では樹の葉、草花が人目を喜ばせるばかりでない。また金銀の鑛物が土沙寶玉が人目を娛しませるばかりではない。百千の鳥獸は人々の好伴侶となつてゐる。奇妙雜色の衆鳥は人と遊び、白鵠、孔雀、鸚鵡、舍利鳥、迦陵頻伽、共命鳥等種々の好鳥は相集まつて和雅な音樂を奏してゐる。その妙なる聲は自ら自然と人生の奧妙を物語つてゐるのである。之に聞きとれる人々は皆一樣に悉く佛を念じ、法を念じ、僧迦を念ずるのである。極樂國土の鳥獸は人に危害を加へるものではな

くて、人と仲善い友なのである。

この極樂國土のものは、悉く皆そこの主神なる阿彌陀佛の神格の表現であつて、阿彌陀佛の神格は散じては山川草木鳥獸民衆等となり凝つては一つの人格となつてゐる。それでそこの鳥獸も靈的であり、民衆も靈的なのである。かくの如く自然界、動物界、植物界、人類一として靈的存在に他ならない。そして主神も又靈的なのである。(3)主神阿彌陀佛の下には多くの從神があることは勿論である。『彼の佛は無量無邊の弟子を持つてゐる。聲聞、大阿羅漢、諸菩薩から無量無邊の民衆がゐる。』(4)ことは阿彌陀經第九章に明かである。

この極樂國土は民族の死後の世界たるあの世であることは釋尊の說法に明かに見える。善男善女が自ら堅固に戒しめて努めて止まなければ皆極樂に往生することが出來るのである。そして釋尊自ら處々に『應さに發願して彼の國土に生ずべし。』と云つてゐる。(5)

釋迦のあの世の觀念が民族のそれになる頃には、この世に於ける釋尊はあの世に運ばれたのであつた。そこでこの無量無邊の大悲覺者は一般人の眼には神として迎へられたのであつた。所謂神人はかうして遂にあの世に反映して現はれた。そこで民族意識に於ける無量壽佛は釋尊その人に外ならないことになつたのである。これ等の事情から見れば所謂極樂世界は民族がこの世に反映したものであつて、樂土のあの世も亦要するに生者の直接經驗が其の一部を爲し、且つ之に彼等の頭にある想像、希望、理想等で補つたものに他ならないのである。(6)

基督敎に謂ふ所の天國の觀念も亦佛敎に所謂る極樂國土の觀念と同樣にして出來たものであつて、この世が反映したものである。古代イスラエル民族が代々信仰を厚くし、人間の大小の行爲の源泉としてゐた諸々の國民的神格も、古代インド民族のそれの如く時代の推移と共に其の力が微弱になり、遂に在來の權威を全く失墜した。舊宗敎は其の力を失つた時、民衆は只管に力强い新宗敎の勃興を待ち望んでゐたのであつた。この時基督が現れて民衆に說法したのであつた。基督は國民的の神を退けて、天國の福音を宣傳した。その宣傳に依れば天國と云ふのは基督その人の理想境であつたのである。それと同時に又天國はヴントが云つたやうにイスラエル民族が多年考へて來た宗敎的觀念を以つて織り出されてあるからその點に於て民族的であつたのである。更に此の時に民衆の父とまで仰がれたこの神人の理想境となつて了つたのである。何れにしても佛敎の極樂と同じく天國も又民族的價値が充分にあつたのである。只兩者の異る所は其の基礎にあつた。即ち極樂國土は釋迦の悟道によつ

て得られたものであつたのに反し、天國樂園は感情に基いたものであつた。換言すれば一は認識的觀念の反映であるが、他は感情的のものである。この對稱は東西二大聖人の人格に原因するのであつて、ひいては東西二民族の心理にも關係してゐるのである。とにかく天國は恰も極樂の如く一種の理想的樂園であつたことは事實である。この天國には種類が多くて各國必らずしも同一ではなく、又天國に住む天人も相異つてゐる。先づ總體の上から天界を分けて二つとすることが出來る。天人が主より來る神格をその內分に受けるに當つて、一が他よりも受け方が多いことがある。その多い方を天的天人と云ひ、少き方を靈的天人と云ふ。それで天界は天國と靈國とに分れるのである。主に對する愛は天愛であるが、隣人に對する愛は靈愛である。天愛を有する者は天國に行き、靈愛を有する者は靈國に行くのである。次に又別な見方から天界は三つに分けられる。そして下より順次に第一天より第三天に至るのであるが、この三層の天界の相互關係は例へば丁度人身のやうなものであつて、最も奥深くにある第三天は頭の如く、中部にある第二天は胸腹部の如く、第一天は兩脚の如きものであつて、その中の一つを欠けば他は存在しないのである。第一天は自然的物理的天界であり、第二天は靈國、第三は天國に相當する。天界の住民は愛と信との德の異同に従つて澤山の團體に分れるのである。その幾千萬の群居の中で、最も有德な天人が團體の中央にゐて、次第に德の薄い者程順次に外方に其の位地を占める。そして全社會の爲めに用を爲さない者は天界から放逐されるのが常である。天界は主を以て唯一となし、萬物の大根源とするのであるから、總局の福祉を省みずに只自己の爲めにのみするものは天人ではないのである。それで主の國土を保全することは總局の福祉となるのであつて、『爾曹まづ神の國と其の正義とを求めよ、さすれば總ての物汝に加へらるべし』（馬太傳、第六章、三三）と云ふことになるのである。

要するにスエデンボルクが云つたやうに、天國はその民衆たると自然界の事物事象たるとを問はず、總べて主の所謂內流に依つて成立してゐるものである。

註

(1) 莊子席王編曰。予方將下與二造物一者爲上人。厭則又乘二夫莽眇之鳥一。以出二六極外一。而遊二無何有之鄕一以處二壙埌之野一。

(2) 梵文阿彌陀經諸譯互證の正宗分に依る。同書參照。

(3) 同上第七章一節―三節、參照、

(4) 同上第九章參照。

(5) 同上第九章六節參照、そこには次の句がある。若有二善男子善女人一。聞二說阿彌陀佛一。執二持名號一。若一日乃至若七日。一心不レ亂

其人臨二命終時一。阿彌陀佛。與二諸聖衆一。現在二其前一。是人終時。心不二顚倒一。

(6) 南條博士梵文阿彌陀經、矢吹氏阿彌陀佛の研究、Wundt, Elemente der Völkerpsychologie; Deussen, Outline of Indian Philosophy 參照、

地上の理想境

三、理想境とは何か。

私は私の自身のあの世の觀念に付て述べる前に所謂理想境の事を少しく説明しなければならない。基督や佛敎に傳へられてゐる天國とか極樂淨土とか云ふものは皆天上界にあつたのである。けれども地下の黃泉國から急激に天上界に豹變することは進化の法則が許さなかつた。地上のあの世から地下のあの世に變るのも遲々たる進化の歩みであつて其の間には中間のあの世が出來たことは前既に述べた通りである。地下のあの世から天上のあの世に變るにも忽焉として激變したのではなかつた。そしてその中間のものとして理想境とも云ふべきあの世が生じたのである。この理想境は順序から云へば黃泉の次、天國の前に述べなければならないのであるが、暫く便宜の上からここに述べることにした。

黃泉が苦樂の兩界に區別せられたのは全く宗敎的の標準であるに過ぎなかつた。然し乍ら文化の發達と共に道德的批判も嚴密となり、漸く倫理的見解も下すことが出來るやうになつて來た。この世は浮世と云はれてゐる程である、又進化の途中にあるのだからそれ丈、又完全無缺と云ふとは出來ない。ところが人類の理想と希望とは高上して止まない。氣の短い人間は自分の幸福の爲めに地球上に安樂な仙境を求めて止まず、遂に理想境を觀念するに到るのである。ここに云ふ理想境は天國とは異る。天國も同じく理想境であるけれどもそれは天上界のものである。理想境にもウエルズの『新理想國』の如く天上界にありとされたものもないのではないけれども、その本質から見て理想境は地球上のものと云ふことが出來る。又理想境は靈府とも區別されなければならない。靈府も理想境も同じ地上のものであるけれども、靈府は單に幼稚な原始民族が產み出した渾然一體の善惡雜居のあの世であるに對し、理想境は文明民族が產み出した善人のみの理想的社會である。換言すれば靈府には宗敎的の善惡の別さへなく、況んや理性に依る倫理的道德の批判などは全くその有無さへも知らなかつたのであるが、理想境は或は宗敎的に、若しくはより以上に倫理的に判斷した善が民族一般の希望として投出したものである。たゞ然しこの理想境は生者が

死後に行くべきあの世と云ふよりも、寧ろ生者が抱く希望――或は空想――其ものの投出した社會であると云ふ點に於ても嚴密な意味のあの世の觀念には屬さないかも知れないが、それが廣い意味に於てのあの世の觀念の中に入れることが出來ると思ふし、社會の改造は常に一種の理想境實現の一階段と見られ、殊に社會に於ても人間と同樣に精神的宇宙と物質的宇宙とは相平行してゐるものであつた、(G. D. H. Cole, Social Theory, p. 178) 將來の新社會にも又理想境は必要だと思ふのでここに略述するにしたのである。

二、民族的理想境

地上の樂園たる理想境も亦早くから民族意識に現はれてゐた。バビロニア民族の意識してゐる所に依れば。ある河――チグリスユーフラトかも知れない――の海に注ぐ所に沃野がある。そこは果樹は繁茂し、五穀は豐饒であつて實にも好ましい仙境である。ギリシア民族のエリシウムも亦樂土であつて、吾々の地球世界の遠いく果ての又その果てに存在する一帶の原野である。そこの住民は死ぬことがなく、髮は白く、鬚は長いこの長壽の人々は日出でては野に出て働き、日入つては家に歸つて休む、誠に黃金の世界である、其他支那の蓬萊山、我が國の常世の國等も地上の樂園である。舟を東海に浮べて生きながら蓬萊山に向つた人もあつた。我が常世の國には死者の遊魂が遊ぶばかりではなくて、生者も亦、行つて遊ぶことが出來たのである。

三、個人的理想境――所謂ユートピア

東西の古代開明民族は共に理想境を想定した。けれども理想境は民族意識に出現するばかりでなしに、個人が之を表象することも決して少くはなかつた。支那では既に老子が理想境を意識に浮かべてゐた。列子も亦理想境を持つてゐた。そしてそれを華胥國と云つて西方遼遠の境にあるとしてゐた。莊子に至つては最も明かに理想境を表象してゐた。彼の考に依れば人間はこの世――人間世界と云ふ小器の中に蠢動してゐては人世は未だ以て諦らめることが出來ない。山の形を知らんと欲せばその山を出て外から眺めなければならない。人の世を見るには現代を超越しなければ駄目だ。人間萬事自然の成りゆきに任せる。若し夫れ人世に慊焉たらずんば我は莽眇の鳥に乘じて、上下四方六極の外に出でて將に造物者と遊ばうと思ふ。かくて落ち着く先は無何有之鄕なのである。(1) 孔夫子は未だ生を知らず、爭ぞ死を知らんと云つて極めて實際的であつたから宗教的のことは述べてゐなかつたのであるが、古今の大思想家とか聖哲とか云はれる人は皆一種の理想境を畫いてゐた。プラトーにも自己の

理想境があつた、フイヒテにも「鎖國的商業國」と云ふ程の理想國があつたのである。そして英國にサー、トーマス・ムーアが出でて其の理想境を述べるに當りその理想境をユートピアと云つてから以來理想境はすべてユートピアと云つから以來、理境はすべてユートピアと云はれるやうになつだのである。今日ではユートピアと云ふ言葉は廣く空想的と云ふ程の意味に解されてゐるけれども、嚴密な意味に於ては單に社會制度社會組織又は社會生活の樣式には如何にあるべきか、即ち如何なる社會の實現せらるることが望ましいかを論ずるばかりではなく、更にそう云ふ望ましい狀態が既に實現せられたものとして、それを目擊した者の態度で之を記述描寫するのが本來のユートピアであるらしい。それでユートピアには作者の理想と希望とが遺憾なく反映してゐることは云ふまでもない。然しながらかうした理想境は現在目前に實現されてはゐない。そこでこれを既に實現されたものとして書くには場所を移すか、時代を移すかの何れかにしなければならない。場所を移す方法を取ればユートピアは當然旅行記の形式を取ることになる。トーマス・ムーアの『ユートピア』はそうであつた。カベエの『イカリイ旅行記』。テヲドル・ヘルツカの『自由國旅行記』なども旅行記の形式であつた。次に時代を移す方法には、時代を過古に移すこともなし得る筈ではあるが、理想的な狀態が過古に存在したものとして書くことは讀者を退嬰的復古的にする傾向があつて、社會改造の主張者たる著者には不得策であるばかりでなく、又歴史的事實の拘束があつて自由に筆を揮へない困難がある。そこで時を移すには未來に移す必要が生ずる。けれども未來に於ける事實を一々目擊することは夢の中でより外は不可能である。そこで已むを得ずユートピアは夢物語の形式を取ることになる。理想社會の狀態を夢物語として描くのは慥かにその効果を薄弱にする不利益があるが、トーマスムーアがその『ユートピア』を書いた十六世紀の頃ならいざ知らず、地理上の知識の普及してゐる今日では、何處の世界の隅にもそう云ふ理想的な國が實在してゐないことは余りに明白であるから、旅行記の形式を取るには更に大なる困難がある。かくて比較的新しいユートピアの中で最も有名なベラミーの『回顧』にしても、ウイリアム・モリスの『無何有郷消息』にしても共に夢物語の形式を撰んだのは蓋し已むを得なかつたものであらうと思ふ。

ユートピアは一の理想境であつたから其の時代と作者との思想に甚だしく影響されることは勿論である。モアの『ユートピア』は當時英國に勃興して來たギリシア語及びギリシヤ古典文學研究に負ふ所は大であつた。篇中の話者たる老船員ハイスロ

ーデーは羅馬の詩人ヴアジリウスの『エンシッド』に現はれたるエニアスの按針手パリヌラスとして、航海した者でなくてギリシアの詩聖ホメロスの『オデワシウス』の主人公たるウリゼスとして、否な寧ろギリシアの古哲プラトーンとして航海したものであると稱し、ムアは自己の『ユートピア』とプラトンの『ポリタイヤ』及びその斷篇『クリチアス』中に於けるアトランチスの説片との間に類似を見出そうとしてゐるのである。ユートピユアはその時代と作者との理想の反映であつたから時代の文化の進展と共にユートピアそのものの内容も又進化するものは當然である。それでユートピアには個人主義的のものもあり、社會主義的のものもあり、無政府主義的のものもあり、共産主義的のものもある。私は今それ等の内容に亘つて一々例證はしない。それは別に人があるからである。(2)又從來のユートピアはプラトーンの『ポリタイア』も、モアの『ユートピア』も、カベエの『イカリア』旅行記も、さてはモリスの『無何有郷消息』も、變化發展のない靜的な完全世界であつた。幸福ばかりで苦痛のない、善ばかりで苦痛のない理想世界であつた。然しかくの如き理想國では神樣達でさへ飽き果てゝ了ふに相違ない。ところがウエルスやベンテイなどの理想國(H. G. Wells, New Worlds for Old; A. J. Penty, Old Worlds for New.) 等は進化論上に基礎を置き、無限の變異發達に富み、『新奇な個性の限りなき連續が一つの抱擁的な向上發展に向つて共働する』やうな社會である。更にまた最近のユートピアは次第に其の範圍が擴大されて來た。これも亦現代の世界同胞主義が生み出した理想でなければならない。プラトーンは人口一萬人を以て其の理想とした。其他モアも、カベエも、ベラミイも其の理想とするところは皆地方的民族的のものであつて、極めて排他的であつた。殊にプラトーンの『共和國』には對外的な軍備があり、ステツトの『女王國』では外來人民を殺してもいゝことになつてゐた。けれども最近のユートピアは世界全般的のものであり、世界同胞主義的な共和國となつてゐる。ウェルスのユートピアの如きはそれである。

四、理想境と社會改造

以上の如き各種の理想境は個人的のものであるから民族的價値は乏しいけれども、當時希望若しくは理想化の現象に興味のある事例である。然し乍ら單に一個人の空想的理想境であつても、時を得れば一代の民衆一般の理想境となり得ることも多い。敢て基督教の天國の成立當初の時代に遡るの要はない。敢て佛教の極樂淨土發生の事情を省みるの要はない。佛蘭西大革命はブルジョアジイの革命であつたけれども當時の民衆はルソーの

『民約論』や『エミール』、モンテスキユウの『法の精神』等に描かれた理想境を胸に抱かなつたと云ふことが出來るであらうか。ソビエットロシアの指導原理はレニンのユートピアの實現でないと誰が斷定し得やうぞ。個人の抱いた理想境も時代の要求と事情の必然に合致しては一般民衆的のものとなる。ことに理想境の民族的價値を見るのである。理想境を目して空想的のあの世だとのみすることは出來ないと思ふのである。

註(1) 天界の樂土の章の註(1)參照
(2) 井箆節三氏 ユートピア物語は「東西古今に亘るユートピアンのいた空想の種々相」を一卷に集めた好個の參考書である。參照されたし。尚雜誌『大觀』大正十年一月號所載『古今の理想境』及び解放大正八年九月號所載小泉信三氏筆「二種のユートピア」等參照

あの世の觀念

—あの世の存否—

あの世の觀念の發達變遷は極めて簡單ではある。が以上に述べた如くである。あの世の觀念は民族意識に遊魂觀念が發生すると共に成立した。そしてこの所謂鰥府からある種の中間觀念を經て黃泉に及んだ。善惡雜居から進んで黃泉界は分裂して二となり、文化と共に種々の思想感情が發生して、この世に倫理的意識が發達し、社會的政治的の理想の進化と共に所謂理想境が地上に現はれた。かくて黃泉觀念は地下の樂土か或は地上の理想境かの何れかを中間觀念として天上の樂園に進化したのであつた。ここに所在地を中心として見たあの世の觀念は既に行く所まで行つてゐるかのやうに見えるのである。私はあの世は果して存在するものか如何か、を極めなければならない。

あの世があるかどうかは古來疑問とされてゐた。單にあの世とは云はず一般に宗教的現象の存在に就ては今尚少からず爭はれてゐる。シユライエルマッヘルに依れば吾々は常に神には絕對の服從をする。吾々が神に絕對に服從すると云ふ意識及び感情々態にある以上は、之を宣傳した神人なるイエス、クリストの御言葉は一々眞の實在でなくてはならない。あの世が存在してゐることはこの絕對服從の感に依つて保證せられるのである。この種の說を感情的のあの世の觀念說と云つて置く。この感情に正反對なる說はヘーゲルの知的宗教說である。その說に依ると吾々は認識に依つて神を認容する。天國の存在は吾人が之を認識する。吾人の知識は天國の存在せざるべからざることを判斷するのである。この知的宗教說と云ひ、感情說と云ひ共にあの世の存在を肯定するものである。其他最近のところでは肯定者にはオイケンがあり、ミユンステルベルヒがあり、リッケ

ルトあり、ウインデルバントがある。けれども其等の人々の宗教論を述べるのは本文の目的外になるから總て省略する。ところが又ある種の人々に從へば極樂も地獄もその昔の惡僧が、假りの方便として說いた丈けであつて、實際に於ては天國などは有り得べきものではないと云はれてゐる。果して天國なるものは存在するものか如何か。

あの世の有無に就ては先づ外界實在と意識的實在との區別を立てなければならない。卽ち客觀的に外界に存在することと主觀的に頭の內部に存在することとの區別を立てなければならないのである。私自身は未だ確固たる自信があつて云ふのではないけれども、あの世たる天國は意識的には實在する、若しくは少くとも實在し得るものであらうと思はれる。ところが意識的實在としての天國は存在するとしても單にそれ丈けでは人類に對して何等の役にも立たない。今死に行く人があつてあの世は外界實在でないと自認したとする。そうすれば其の人は天國にも極樂にも行きたくなるし、又行かれなくなる。そこであの世は少くとも其の當人には客觀的の實在であることを要求する。頭の中のものが外界に儼存することを要求するのである。古來の聖賢とか學者とかは之を說明した信念であつて、他人はとにかく當人はそう確信するのであると言つた。そして信念の基礎をシユライエルマツヘルは感情であるとし、ヘエゲルは認識であるとした。とにかく單に感情や認識で意識的實在が外界實在となるのは余りに簡單過ぎる。私は思ふにこれは意識的實在としてのあの世を信ずる者が集まつて爰に客觀的の妥當性が生ずると云ふロッツエやウインデルバントの考の方が正しくて且つ人類の要求に適合してゐるではなからうかと考へる。この點に就て詳しい事を論ずるのは今の私の目的ではないからそれは他日を期するとして、私は死後の靈界としてのあの世ではなしに、私共の希望や理想の實現せらるべき理想國としてのあの世に就て述べて見たいと思ふ。卽ち私自身のユートピアとしてのあの世を述べやうとするのであるけれども玆にはそれを詳述すべき暇がないから、それの序說として單に私の希望丈けを述べて置くことにしやうと思ふ。

現實に基したあの世の理想

私は或る意味に於て基督教を信ずる。けれども基督教のみを信ずるのではない、基督教を信ずる意味と程度とに於て私は又佛教をも信ずる。そして又あらゆる宗教をも信ずるものである。ウエルズに聞くまでもなく『社會主義も一つの宗教である』(H. G. Wells, New Worlds for Old, p. 138) といふことが出

來る。私はこの社會主義をも信ずる者であることを告白する光榮を有する。この世は浮世と云はれる丈けであつて完全無缺でない。寧ろ不合理不善のことが多いのである。宗教界に於てもそうである。家族制度もそうである。男女關係もそうである。就中經濟上の事情は殊に不善不義そのものではないかと思はれる程である。それ等の實例は今まで社會改良家とか社會主義者無政府主義者その他の社會革命者等に依つて一々指摘し盡されてゐる。私は限りある誌面で解りきつた事を今更のやうに繰り返へしたくはない。然し何時の時代、何れの處にも社會改造者の不平の聲は絕えた事がなかつた。社會改造の急務は聲を限りに呼ばれたけれども理想の社會は今まで實現されたことはなかつたのである。獨逸には革命があつた、然しそれは中途半端な不徹底の妥協に終止した。ロシアに革命は起きた。然しそれは果して理想的のものであると云ひ得るか如何かは疑問でなければならない。理想境は一朝にして實現されるものではない。私は理想境實現が困難なる大事業であることを思ふのみである。けれどもそれが如何に困難な大事業であるからと云つても私共は徒に拱手して傍觀することは出來ない。獨逸の革命は不徹底ではあつたが、それでも何等の革命もないのには…………である。ロシアは革命の爲めに多くの犧牲を出し、着々理想に猛進してはゐるけれども未だその理想とは甚だ遠いのである。けれども革命がなかつたらその理想に進むことさへも出來なかつたではないか。私は茲に於て社會改造或は革命の行動の……と價値とを認める者である。

社會主義は一つの宗教である以上は、社會主義的改造には信念がなければならない。社會主義の實現せられた社會──卽ちユートピアに對して信仰を有しなければならないのである。マルクスは社會主義者にはユートピアがないと云つた。けれども現在の社會が如何に不合理であり不善であつても、現在の社會を破壞した後の社會も亦同樣に不合理であり不善であつたとしたら私共が行ふ破壞の價値は失はれるではないか。未來に於て社會主義が實現されたとしたら、その社會は果して完全無缺ではなくとも、少くとも理想境に進する第一段たるを信ずるが故に社會革命を行ふのではなかつたか。私は社會主義に對する信念が一般民衆に強く把握せられ、ユートピアが普遍的の妥當性を有するやうになることを望む者である。

佛蘭西革命前には當時の社會の不合理と不善とに憤つた民衆は、ルソーやモンテスキウのユートピアを信じてゐた。ロシア革命前には地主と貴族との頑迷なる橫暴に不滿を抱いてゐたプロレタリアは、トルストイやツルゲネーフの文學的ユートピ

ア及びヘルツエンやクロポトキン等の社會學的ユートピアを胸中に信じてゐた。そして今尙レニンやトロツキーのユートピアを信用してそれに依て行動してゐるではないか。ユートピアを以て單なる空想的のあの世となすなかれ。トーマス・ムーアの『ユートピア』が初めて世に出た時、世人は之を評して何と云つたか。『ユートピア』は痴人の空想に過ぎずと嘲笑されたのではないか。ムーア自身もその『ユートピア』を典型として社會を改革し、改造することの可能を信じてはゐなかつた。彼は自らその理想境的改造の到底實行することが出來ないことを暗示してゐる。即ち彼は特に『ユートピア』の筆を擱かんとするに當り、『私はユートピア國に於ては、我等が都市に於ては之を期待するよりも、寧ろ羨望すべき幾多の事物が存するのを自認しなければならない』と云つてゐるのである。ところがこの『ユートピア』が出版されてから僅々三百二拾有年を經た今日、『ユートピア』の思想と施設とは到る所實現されんとする氣勢を示してゐるのである。私は今それ等の事實を一々例證しやうとはしない、それは眼前あるものには余りに明白な事實だからである。ユートピアは閑人の單に空想したあの世ではなかつた。現實を離れたあの世ではなかつたのである。然りユートピアは一種のあの世であつた。而も現實を前提として推理せられた理想的結論に他ならなかつた。現實世界の不善と不正とに憤つた純なる人間の實現すべき理想的のあの世であつたのである。私はユートピアを信ずる者である。そして又ユートピアの實現の爲めに現社會の改造を要求する者である。然らば私のユートピアは如何なるものか、私の改造の理想の內容は何か。私はこれ等に就て述べなければならないのであるが、それは他日を期する。今は單にこの不當にして不正な社會組織が、一刻も早く合理的な、正當なあの世に至ることを待つのみである。(了)　—一〇、七、二〇—



惠まれたる性の爲に（一）

醫學博士　永井潜

はなのみめつる人こゝろかな

私は心より此の惠まれたるが故を以て虐げられねばならぬ性の爲に同情する。

一

獨逸の文豪シラー歌ふて曰く

　婦人を尊敬せよ。

　彼等は土の生活に天上の薔薇を織り込む。

　惠みゆたかなる愛の紐を編む。

　そして又つゝましやかな「ベール」の内に、

　神聖なる手によりて美はしき情の永遠の焔を培ふ。

美はしき性よ。惠まれたる性よ。春さり來りて爛漫たる花を開く時。天下擧て卿を圍み、卿を稱へ、歡喜の熱き涙を以て卿に接吻する。さりながら、夏過ぎ秋來りて、其の美はしき花が、軈て甘き果に變はる時、人は其の果をちぎり、其の枝を折つて、冷然として一瞥をも卿に與へないのである。愚庵嘆じて曰く、

　秋風に訪ふ人もなし芳野山

二

借問す、宏遠神秘の人生の圀を兩分して其の一を保てる男女の花は、何時如何にして咲き初めたのであるか。抑生物の特色は、絶えず舊くなりつゝ而かも絶えず新らしくあることである。而して此の男女兩性の泉の底から、潑溂たる新しき生命が湧き出づるのである。最も原始的の單細胞生物に於てすら、早く已に其の面影を認めることが出來る。單細胞生物の増殖する有様を見るに、頗る單簡である。即ち一個の細胞が、分れて二個の細胞になるのであつて、一の舊個體が消滅すると共に、二の新

個體が生れ出る。次で其の二個は各分れて四の新個體をなし、次で八となり、十六となり、三十二となり、斯くて十代分裂を重ねると、2^{10} 即ち一〇二四個となり、更に百代分裂を繰り返せば、一個の細胞より出立して 2^{100} と云ふ鉅數に達するのである。然らば單細胞生物は、斯く分裂に分裂を重ねて、無限に增殖を續けて行くかどうか、換言すれば、單細胞生物は不死であるかどうか。佛人モーパーは、實驗に徵して之れが解決を試みんとした第一の人であつた。

モーパーは、單細胞生物たる「ゾーリムシ」を取り、分裂によりて生じたる各個體をして、其の所を別にし、相互に接觸することの機會なからしめて、果して無限に分裂增殖を繼續し得るや否やを檢らべた。然る所約二百世代を重ぬると、元氣を銷磨し盡くして、其の儘では最早夫れ以上分裂する能はざることを見た。然るに今、斯る場合、其の老衰せる個體をして、同一場所に置き、互に觸接することの機會を與へると、二の個體は、忽ち口と口とで互に接吻して、體內にある小核なる物の一部を互に交換し、其の後ち兩個體互に離れる。生物學者は此の現象を接合と呼んで居る。一旦接合を了はつたものは、再び勢力を挽回して、新たに二百世代も分裂增殖することを始める。一旦老衰したものも、即ち接合によつて自己を若返へらすことが出來るのである。

其の後獨乙のヘルトウイヒ、亞米利加のカルキンス等も、同一の試驗を行ひ、同一の成績を擧げたが、近時米のウードラフは、之に關して頗る注目すべき實驗的事實を認めた。即ち試驗の際、「ゾウリムシ」をして、常に陳腐なる培養液內に在らしめると、モーパー等と同一の成績を見るが、若し注意して、絕えず新鮮なる培養液を以てすると、幾代分裂を重ねても、增殖を停止せぬことを確めた。ウ氏は「ゾウリムシ」をして五年間に約三〇〇〇世代を重ねしめることが出來た、即ち其の數は無慮 2^{3000} と云ふ鉅數に上るもので、若し之をして悉く生存せしめたならば、地球容積の一萬倍に達することを報告して居る。由是觀之、單細胞生物なるものは、モーパー等の考へた如く、終に死すべく運命附けられて居るものではなくして、恐らく永遠に不死のものである。但しモーパー等の實驗に際して、約二百世

代を重ねた後には、老衰して、之を其儘に放置すれば死滅すべき様な狀態に陷つたのは、如何なる原因に基づくのであるかと云ふと、是れ全く陳舊なる培養液內には、「ゾウリムシ」の新陳代謝の結果として生じた有害なる老廢物が蓄積して、夫れが爲に害を受けたのである。而して此の老衰せる細胞は、接合作用によつて再び若返へるのであつて、即ち單細胞生物に於ても、早く已に、生殖作用の萠の後に、新らたなる生命の歡呼を聽き取ることが出來るのである。

三

然らば即ち多細胞生物に於て、此の關係は如何に成り行くであらうか。抑生物の二大使命は、自己の生存と種族の保續とである。換言すれば、前者は即ち飢餓の問題であり、後者は即ち戀愛の問題である。而して一個の細胞即一個の個體である單細胞生物では、此の二の仕事は、單一なる細胞によつて兼ね行はれる。併しながら無數の細胞が相集つて、一團となつて一個體を形成せる多細胞生物では、各細胞は、分業の法則によつて分化發達する。そうして多數の細胞は、消化・吸收・循環・呼吸・排泄・運動・感覺の如く、直接生存に必要なる種々なる機能を擔任する。夫れに反して少數の細胞は、專ら種族の保續を司り、第二の我を後代に遺すことを力める。斯くて始めて體細胞と生殖細胞なる二の區別が起つて來る。

無數の細胞(人間では四百兆と概算されて居る)が相寄つて、一團塊をなして居る場合、顯微的微細なる一細胞の遊離せるものに比して、外界に接する表面積は當に比較しては遙に小さくなる。隨つて表面から外界に有害なる老廢物を捨てることも亦遙かに困難となつて、漸次其の中毒に罹り、機能が衰退する。是れ蓋し老衰の主なる原因を爲すもので、自然死の黑幕によつて包まれたる體細胞は、終に屍となつて土に歸すべき運命を有たねばならぬことになる。而して之によつて天壽が決定せられる。

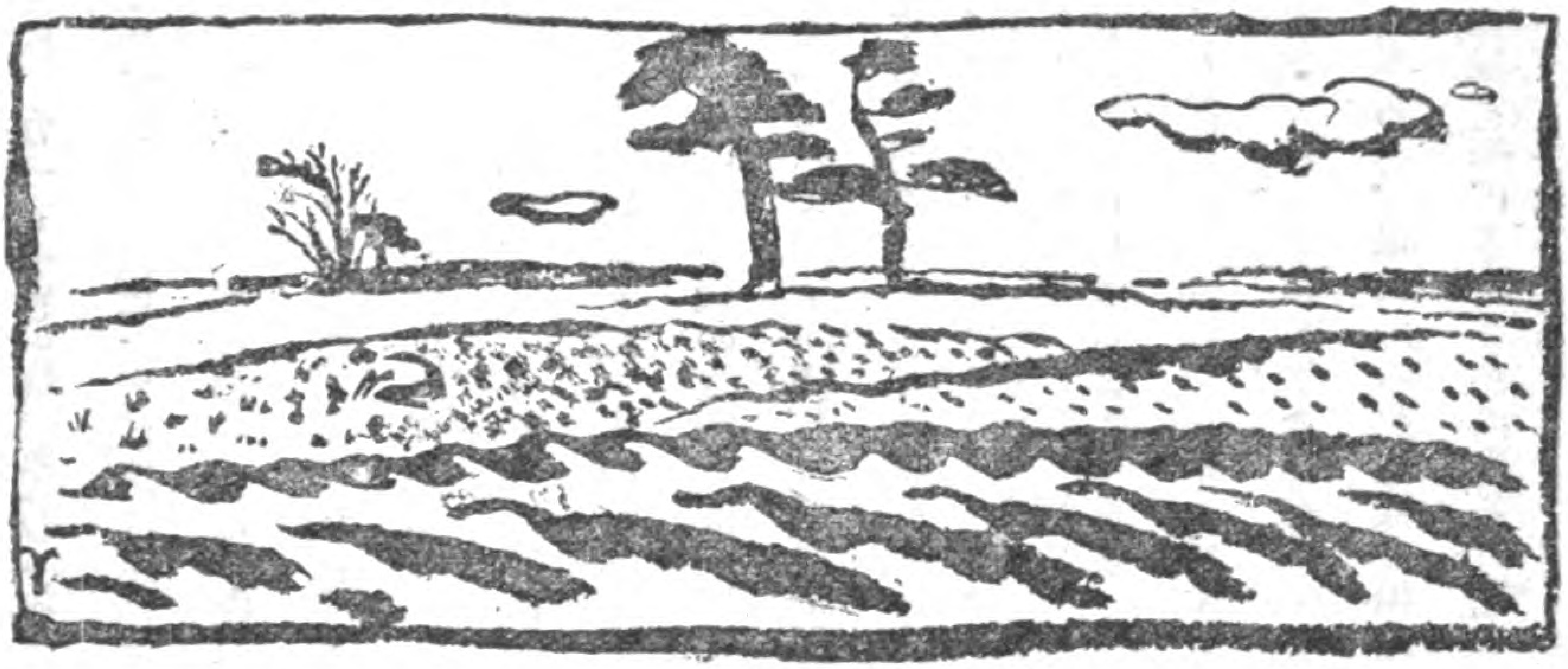
斯る狀態の下に、生物が絕へず新らしくあり得ることの爲に、生殖細胞が活動する。そうして其の二つが互に合體すること、即ち所謂受精の現象によつて其の目的を達する。高等動物に在

つては、合一すべき生殖細胞の一つは、他働的であつて、其の細胞體は細小輕快にして活潑に運動する。是れを精蟲と云ふのである。之に反して他の一つは、軈がて發育すべき新個體を榮養すべく養分を貯へて、細胞體は大きく、運動は不活潑で、全く受働的である。卵が夫れである。

精蟲及び卵は、夫々一定の器官に於て形ち造られる。之を生殖腺と云ひ、精蟲を造るものが睾丸で、卵を生ずるものが卵巣である。比較的下級の生物では、睾丸と卵巣が同一個體に宿る場合もあるが（雌雄同體）、高等動物では、多くは別々の個體に發生する。斯くて始めて雌雄男女の別が起つて來る。之を要するに青い男の花も、紅い女の花も、新らしき生の歡を獨らさんが爲に此の世に咲き匂ふのである。

斯く生殖腺は、性別の根本を爲すものであるから、之に第一次性徴若くは主要的性別なる名稱を與へる。而かも雌雄男女の差別を見ると、單に此の生殖腺の相違のみに止らないで、他に幾多の點を舉げることが出來る。凡て之を附帶的性別と云ふのである。其の中或るものは直接生殖腺と聯關して生殖作用の働に與かる副睾丸とか、精嚢とか、輸精管とか、喇叭管・子宮・膣其他外陰部等は之に屬するものである。他のものは直接には生殖作用に關係することなき差別で、例へば人間では筋肉・骨格・毛髮等の差別・筋肉・骨格・皮膚及び其の附屬物たる羽毛や、角等に於て見らるゝ區別であつて、之を第二次性徴と唱へる。其の他新陳代謝に關係ある血液成分の差別や、呼吸運動型式の相違等を、第三次性徴と云ひ、更に又習慣等より惹き起さるゝ男女の性狀の差別、例へば、男の飲酒・喫煙、女の手仕事等に對して、第四次性徴と云ふ名稱を附ける人もある。

（以下次號）



ホワイト・ファング(白牙)

Jack London 著
堺利彦 譯

第三篇

一　火の製作者

子狼は突然それに出くわした。それは彼自身の過ちであつた。彼は不注意であつたのだ。彼は洞穴を出て、川に水を飲みに駈けだしたのだつた。彼は寢ぼけてゐた爲に氣がつかなかつたのかも知れない。(彼は夜どほし肉の跡を追うて戻つて來て、其ときヤツト目がさめたのであつた。)又彼れの不注意は、川べりまでの道に慣れすぎてゐた爲かも知れない。彼は幾度となく其の道を通つて、曾て何事も起らなかつたのであつた。

彼は風折松のそばを降つて、廣場を横ぎり、そして立木の間を駈けてゐた。その時、彼は見ると同時に嗅ぎつけた。丁度彼れの向ふに、五つの生きた物が、腰をおろして靜かに坐つてゐた。そういふ生きた物を彼はまだ見た事がなかつた。それが

彼れの、人間の見はじめであつた。然るに其の五人は、彼れの姿を見て直ぐに立ちあがりもせず、歯を見せもせず、唸りもしなかつた。彼等は動きもしないで、只ジツト氣味わるく坐つてゐた。

子狼も動かなかつた。彼れの元來の本能からすれば　彼は覺えず知らず一目散に逃げだすべき筈であつたが、其とき不意に、そして初めて、他の反對の本能が彼れの體内に現はれた。大なる恐怖が彼れの上に降つて來た。彼は自分の弱い、小さいといふ感じに壓迫されて、身動きも出來なくなつてしまつた。今こゝに支配力があり權力があつた——遙かに高く彼れの上に位する何者かゞあつた。

子狼はまだ人間を見た事がなかつた。けれども人間に關する本能を持つてゐた。彼はおぼろげながら、人間が此の蠻地の諸動物と戰つてそれを征服した一動物である事を認識した。彼は今、自分の目ばかりでなく、先祖全體の目で人間を眺めてゐた。即ち、無數の冬の夜のキヤンプの焚火のまわりに、闇の中に圓陣を作つてゐた其の目、或は總ての生き物を支配する此の不思議な二本足の動物を、遠い安全な距離から及深い茂りの奥から覗いて見た其の目で、今ま人間を眺めてゐた。彼は自分の遺傳性の魔力に壓迫されてゐた。即ち、幾百千年の鬪爭と、幾千年代に蓄積した經驗とから生じた、恐怖心と尊敬心とに壓迫されてゐた。其の遺傳性は、まだ子供に過ぎない、狼に取つて、除りある強制力であつた。若し彼が成長した狼であつたなら、直ぐに駈けだして逃げたゞらう。然るに彼は今、恐怖にすくんで縮みあがり、既に半ば服從の意を表示してゐた。其の服從の意は　彼れの先祖の狼族が、初めて人間に降伏して其の火のそばに坐り、其の火に暖ためられた時から表示した所のものであつた。

一人のインド人が立ちあがつた。そして彼れのそばに歩み寄つて、彼れの上に俯向いた。子狼は一層低く地の上に身をかゞめた。不可思議物がとうとう血と肉とに具體化して、今ま彼れの上に蔽ひかゝり、將に手を下して彼を捕へようとしてゐるのであつた。彼れの毛は覺えず逆立つた。彼の唇はうしろに引きつツた。そして彼れの小さい牙が露出した。彼れの上に案側の如く下つてゐた手が躊躇した。そして其の人が笑ひながら斯う云つた。「見ろよ、此の白い牙を!」

外のインド人達も聲高く笑つた。そして其の子狼を摘みあげて見ろと、頻りに其の人に勸めた。手が段々近く下つて來た時に、子狼の心中に本能の戰ひが起つた。彼は二つの大きな衝動を感じた。負けようか、戰はうか。其結果は妥協の行動であつた。即ち兩方をやつた。彼は其の手が殆んど自分に觸れるまで負けて居た。それから彼は戰つた。彼れの齒は急に閃めいて、

パクリと一つ其の手に喰ひついた。次の瞬間には、彼は頭を片方からナグリつけられて、横さまに打倒された。するとモウ戰ふ氣は全く無くなつてしまつた。子供心と、服從の本能とが、彼を捕へてしまつた。彼は尾を据ゑてキヤン、キヤンと啼きだした。けれども手を嚙まれた人は怒つてゐた。子狼は更に頭を他の一方からナグリつけられた。そして一層大きな聲でキヤン、キヤンと啼きだした。

四人のインド人は一層聲高く笑つた。手を嚙まれた人までも笑ひだした。彼等は子狼を取り卷いて散々笑ひはやした。そして子狼は恐れと痛みとに泣き耽つてゐたが其あいだに彼は或者を聞きつけた。インド人等もそれを聞いた。然し子狼は、それが何であるかを善く知つてゐた。そして最後の長い泣聲、而も悲しみよりは寧ろ勝利の響きを持つた泣聲を一つ發してそれきり泣きやんで母の來るのを待つてゐた。あの强い、恐ろしい、何者にも負けない母、有らゆる者を殺して倂て怯ぢけた事のない母を待つてゐた。彼女は唸りながら走つて來た。彼女は子狼の泣聲を聞きつけて、それを救ふべく馳けつけたのであつた。彼女は人々の間に跳りこんだ。子を氣遣つてタケリ狂ふ其の母性の發揮は、決して見よい姿ではなかつた。けれども子狼に取つては、自分を庇つてくれる爲の、其の荒れ狂ひの樣が如何にも嬉しかつた。彼は喜びの小さい叫びを發して、母の方に馳けだした。人間動物等は急に五六歩あとしざりなした。雌の狼は子を庇ひながら人間に向つて立ちはだかり、脊筋には毛を逆立て、喉の奧からは强い唸り聲を響かせてゐた。彼女の顏は引き釣つて獰猛の殺氣を現はし、其の度外れの唸り聲の爲に、鼻柱が目元まで皺だらけになつてゐた。

すると人間の中の一人から突然『キチ！』といふ叫びが起つた。それは驚きの叫びであつた。子狼は、母が其の聲でひるんだ事を感じた。

『キチ！』其人は再び叫んだ今度は威嚴のある鋭どい聲で。すると、（子狼は驚いた）、自分の母が其の勇猛な雌す狼が、忽ち腹の地につくほど這ひつくばつて、尾を振り振り、鼻聲で泣きながら、和睦の態度を示した。子狼には譯がわからなかつた。彼はアツケに取られてゐた。人間に對する恐怖の念が再び彼れの全身を襲うた。彼れの本能は正しかつたのである。彼れの母がそれを證明した。彼女も此の人間動物に對して服從の意を呈したのである。

彼女を呼んだ人間が彼女のそばにやつて來た。彼が其の手を彼女の頭の上に置くと、彼女は只だ益々這ひつくばつた。彼女は嚙みつきもせず又嚙みつからうとする氣色も見せなかつた。外

の人々もやつて來て、彼女を取り圍き、彼女にさわり、彼女をいぢくりまわしたが、彼女はそれを拒らうともしなかつた。彼等は大變に昂奮して、其の口々から多くの物音を立てゝゐた。けれども其の物音は危險の徴候でないと、子狼は斷定した。そして母のそばに這ひつくばつて、まだ折々毛は逆立てながらも、自分の最善を盡しておとなしくしてゐた。

『不思議もないよ。』一人のインド人は斯う話してゐた。『此奴の父親は狼だつたんだ。尤も、母親は犬だつたがね。だけど、俺の兄貴が其奴を、サカリのついた時に、三晩も森の中に繋ぎツぱなしにして置いたんだもの。だからキチの父親は確かに狼だつたんだ。』

『此奴が逃げてからモウ一年になるよなア灰色狸』と、第二のインド人が云つた。

『それも不思議はないよなア鮭の舌。』灰色狸は答へた。『ありや饑饉の時で、犬の餌が丸で無かつたんだもの。』

『此奴は狼と一緒に住んでゐたんだぜ』と、第三のインド人が云つた。

『どうもソウらしいなア』と默つ』灰色狸が子狼の上に手を置きながら答へた。『これが其の證據だ。』

子狼は手をさへとられて少し唸つた。すると、其の手は直ぐに引込んで彼をナグりつけそうにした。そこで子狼は牙を收めて、すなほと凹んでしまつた手は再び戻つて來て、彼れの耳のうしろをコスつたり、背中を上下に撫でたりした。

『これが其の證據だ。』灰色狸は話しつゞけた。『此奴の母親はキチに相違ないが、父親は狼だぜ。だからよ、此奴の血に犬が少なくて狼が多い。此奴の牙の白い事を見ろ。此奴の名は『白牙(ホワイトファング)』にしてやらう。オイ皆に云つて置くぜ。此奴は俺の犬だ。キチは俺の兄貴の犬だつたんだもの。そして兄貴は死んでるんだもの。』

斯様にして初めて名といふ者を付けられた子狼は、ジツト腹這になつて見守つてゐた。暫くの間、人間達は其の口の物音を續けてゐた。それから灰色狸は自分の首のまわりに掛けてある鞘からナイフを拔き取つて、藪の中に行つて棒を一本切つて來た。ホワイト・ファングは彼を見守つてゐた。彼は其の棒の兩端に切形をつけ、其の切形に生皮の紐を結わえつけた。片方の紐を彼はキチの喉のまわりに縛りつけた。それから彼はキチを小さい松の木の處に連れて行つて、其の木に片方の紐を縛りつけた。

ホワイト・ファングは其あとについて行つて、母のそばに横たはつた。鮭の舌は手を差しのべて彼を仰向に轉がした。キチは

心配さうに眺めてゐた。ホワイト・フアングは再び恐怖がこみあげて來るのを感じた。彼は叱り聲を全く抑へる事は出來なかつたけれども、くいつかうとはしなかつた。人間の手は其の曲つた、そして廣く開いた指で、冗談らしく彼れの腹を撫で、又彼を右ひだりに轉がした。そんな風に仰向に轉がつて、四つ足を空中にモガモガさせてゐるのは、彼として馬鹿々々しくもあり見苦しくもあつた、そういふ位置に自分の身を置く事は、如何にも頼りない心持がして、彼れの全精神がそれに反抗した。彼は（其の位置は）自分を防衞する何等の方法も持たなかつた。若し此の人間動物が害を加へる意志を持つて居たとするなら、ホワイト・フアングにはそれを免かれる道が無かつたのである。四つ足を空中に差しあげてゐるのでは、驅けだして逃げる事も出來はしないのであつた。それでも彼れの服從心が彼れの恐怖心を抑へつけた。彼は只だ輕く唸つてゐた。此の唸りだけは、さすがに彼も止める事が出來なかつた。そして人間動物も、それに對して頭をナグリつけるほど怒りもしなかつた。所が又、不思議な事には、其の手が彼を撫であげ撫でおろす時に、彼は譯の分らない快感を經驗した。彼は横さまに轉がされた時は、其の唸りをやめた。指で耳の根元を抑へられたり突ツつかれたりした時、其の快感が增大した。そして最後の撫でまわしの後、其の人が彼を殘してあちらに行つた時、一切の恐怖はホワイト・フアングから去つてゐた。彼はまだまだ人間との交渉に於いて、幾度も恐怖を知らねばならぬのであつたが、然し結局、人間に對して少しの恐怖もない交りを爲すべき前兆が、既にこのとき現はれてゐたのである。

暫くしてからホワイト・フアングは變な物音が近づいて來るのを聞いた。彼は速かに鑑別作用を働かして、直ちにそれが人間動物の物音である事を知つた。數分間の後、インド人の一族の殘りの者が、行列を作つて續々と乘りこんで來た。男もまだ澤山ゐた。女や子供も澤山ゐた。總てが四十人ばかり、そしてそれが皆なキヤンプの道具や荷物をドツサリ脊負つてゐた。外に犬も澤山ゐた。そしてまだ十分成長してゐない子犬の外は、皆な一様にキヤンプ道具を脊負つてゐた。彼等は袋を脊中に縛りつけられて、二十ポンド乃至三十ポンドの重荷を運んでゐた。

ホワイト・フアングはまだ犬を見た事がなかつた。けれども今それを一目見ると、それが自分同族で、只どこか少し違つてゐる事を覺つた。然るに其の犬共が子狼と其の母とを見つけた時、其の遣口は殆んど狼と違はなかつた。忽ちにして突進が起つた。ホワイト・フアングは、其の口をあけて押し寄せて來る

犬の潤の面前に立向つて、毛を逆立つて、唸りを發して嚙みついた。それから彼は押し倒され、踏みつけられ、鋭どい齒で自分の體を突き通されるのを感じながら、自分も下から彼等の足や腹に嚙みついた。何しろ大騒動になつた。キチが彼れの爲に戰つてゐる唸り聲も聞えた。人間の叫ぶ聲、梶棒でナグリつける音、ナグられた犬共のキヤンキヤンと啼く聲も聞えた。

僅か數分間の後、彼は再び立ちあがつてゐた。見ると人間動物等は梶棒や石で以て犬共を追ひ散らし、其の同族（ではあるが、どこか又同族でない奴等）の殘忍な齒から彼を防衞してゐた。彼れの腦髓には、正義といふような、そんな抽象的の明瞭な觀念を持つだけの理性は無かつたけれども、それでも彼一流の考へ方で、人間動物の正義を感じた。即ち彼は、法の製作者及び法の執行者として、人間の人間たる所以を知つた。猶又彼は、人間が法を實施する其の力に感服した。彼が今までに出會つた、どの動物とも違つて、人間は嚙みつきもせず、引掻きもしなかつた。彼等は死物の力を用ゐて、自分の生きた力を働かせた。死物は彼等の命令に從つた。即ち此の不思議な動物から放たれた棒や石は、生きた物のように空中を飛びはねて、そして犬共に恐ろしい害を與へるのであつた。

彼れの心中に於いては、これは實に非常な力、不可思議な力、超自然の力であつた。即ち神の如き力であつた。ホワイト・フアングは其の本性上、神といふ者について何等の知る所がなかつた。精々彼れの知り得る所は、迚も自分に分らない物といふのであつた。然し彼が此の人間動物に對して持つた其の驚きと恐れとは、恰かも人間が、山の頂上から下界に向つて兩手で雷光を投げつけてゐる、或る天界の生き物を見た時の、其の驚きと恐れとに似てゐた。

最後の犬が遂に追ひのけられて、騒動はヤット靜まつた。そしてホワイト・フアングは其の傷を嘗めながら、初めて味はつた犬の群の殘忍と、又自分が其の群には入つた事とを思ひめぐらした。彼は自分の同族が、「片目」と母と自分との外にあらうとは、夢にも知らなかつた。即ち其の三個が一種族を成してゐるものと思つてゐた。然るに今、突然、自分の同族と見える他の多くの動物を發見したのである。そして、其の同族が彼を見ると直ぐ、彼れの上に襲ひかゝつて彼を殺さうとした事に對して潜在意識的の憤りを感じてゐた。又それと同じく、彼れの母が棒で縛りつけられた事、（如何にそれが優秀な人間動物のした事とは云へ）、彼はそれを憤つてゐた。それにはツナの氣味があり、囚はれの氣味があつた。尤も、彼はツナといふ物も、囚はれといふ事も、少しも知つてはゐなかつた。只、思ふまゝ

にウロつき、走り、寐る事の自由が彼れの遺傳性であつた。然るにこゝではそれが侵害されてゐた。彼れの母の運動は棒の長さだけに制限されてゐた。そして其の同じ棒の長さに依つて彼も亦た制限されてゐた。彼はまだ母のそばを放れる事が出來なかつたのである。

彼はそれを好まなかつた。彼は又、人間動物等が立ちあがつて、其の行列の進行を始めた時、同じくそれを好まなかつた。ナゼといふに、一人の小さな人間動物が棒の片端を持つて、キチを脇にして其のうしろに引き連れ、其キチのうしろにホワイト・フアングが又、先程からの新らしい冒險の爲にひどく惱まされ且つ疲れてゐながら厭々それについて行くのであつた。

一行は流れに沿うて谷を下り、ホワイト・フアングが一番遠く行つた處よりも遙かに遠く進んで行き、遂に其の谷の果、即ち其の流れがマツケンジー川に注ぐ處に達した。そこには丸木舟が空中高く柱の上に吊るされ、又魚を乾す爲の魚棚が作られてゐたが、一行はそこにキヤンプを拵へた。そしてホワイト・フアングは呆れた目をして眺めてゐた。人間動物の優秀は一刻々々に増大した。あの牙の鋭どい犬共が皆な悉く人間の支配を受けてゐた。優秀は即ち權力であつた。然し子狼に取つて、一層重大に思はれたのは、人間が生きてゐない物を支配する事、即ち動かない物に運動を附與する其の能力、世界の表面を直ちに變化させる其の能力であつた。

中にも殊に深く彼を感動させたのは、此の最後の者であつた。柱の高い組合せが先づ彼れの目を引いた。然しそれだけは必ずしも驚くに足りなかつた。棒や石を遠方に投げたりする、其の同じ動物のする事だもの。所が其の柱の組合せが、布片や獸皮で蔽はれて、幾つもの天幕に拵へあげられた時、ホワイト・フアングはびくりしてしまつた。彼れの特に驚いたのは、其の天幕の素晴らしい大きさであつた。其の天幕は彼れのまわりに、そこにも、ここにも作りあげられて、丸で何か急に成長する奇怪な生き物のようであつた。彼はそれを恐れてゐた。それは薄氣味わるく彼れの上に聳え立つてゐた。そしてそれが風にゆらめいて巨大な運動を起した時、彼は恐れて地にひれ伏し、用心ぶかくそれに目を注いで、若しそれが自ら彼れの上に仆れかゝらうとするなら、直ぐに逃げ出さうと用意してゐた。

然し間もなく、天幕に對する彼れの恐れは消え去つた。彼は女や子供達が何等の害も受けずに、其の天幕を出たりハイつたりするのを見た。又犬共が幾度もそれにハイらうとして、怒鳴られたり石を投げられたりして、追ひ返されるのを見た。暫くして、彼はキチのそばを離れ、ビクビクしながら一番近い天幕

の唯に近ひ寄つた。彼は今、成長の好奇心に驅られてゐた。即ち自分の經驗となるべき事を、學習し、生活し、行爲する必要に驅られてゐた。天幕の壁に達する最後の數インチは、苦心慘憺たる緩かさと用心とを以て這ひ寄つた。其の日の幾多の出來事に依つて、彼は其の不可思議物が、トテツもない、思ひも寄らぬ方法で、其の力を發現する事を豫期してゐた。とうとう彼れの鼻が其の荒布に觸れた。彼はジット待つてゐた。何事もなかつた。次に彼は其の不思議な、人間臭い匂ひのする、織物を嗅いで見た。彼は其の荒布を歯でくわえて、ソットそれを引張つて見た。何事もなかつた。只だ天幕の其の邊の部分が少し動いた。彼は稍や強く引張つた。天幕は稍や大きく動いた。それは面白かつた。彼は又一層強く、而も幾度も幾度も引張つた。遂に天幕の全部が動きだした。すると中から女の聲で、カン高く怒鳴りつけられたので。彼は早々キチの處に走り戻つた。然しこれから以後、彼はモウ天幕の嵩だかに對して少しも恐れてゐなかつた。

暫くすると、彼は又母の處からサマよい出てゐた。彼女の棒は地上の杭に縛りつけられてゐたので、彼女は彼に伴ふ事が出來なかつた。半分成長した小犬、彼よりは稍や大きく稍や日數を經た奴が、傲然とした交戰的態度で、そろりそろり彼れの方にやつて來た。其の小犬の名は、後にそれが呼ばれるのを聞くと、リプ・リプであつた。リプ・リプは小犬の喧嘩に經驗を積んでゐて、もう幾らか餓鬼大將であつた。

リプ・リプはホワイト・ファングと同族であり、又ほんの小犬であるので、別段危險にも見えなかつた。それでホワイト・ファングは友達氣分で彼に出會はうとした。所が、其奴の足どりに力が這入り、其の脣が引上つて齒をムキだして來たので、ホワイト・ファングも。同じく力足を踏みしめ、脣を引上げてそれに對抗した。彼等は敵をためすように、唸りつゝ逆毛を立てつゝ互ひに半分ほど廻りあつた。それが幾分か續いて、ホワイト・ファングは寧ろこれを一種の戯れとして樂しみはじめてゐた。所が不意に、非常な敏捷さを以てリプ・リプが飛込んで來て、鋭どい一噛みを與へておいて再び飛びのいた。其の噛みつきは丁度肩の處で、そこは曾てアノ山猫にやられて、まだ骨つきの邊が痛んでゐるのであつた。其の驚きと痛みとの爲に、ホワイト・ファングは堪えずキャンキャンと啼いた。然し次の間には、瞬く彼れの怒りが高潮して、直ぐにリプ・リプに躍びかゝつて滅茶々々に噛みづいた。

然しリプ・リプはキャンプ生活をして、幾度か小犬の戰鬪を經來つたものであつた。三度、四度、五六度、彼れの鋭どい小

さい歯が獅々者をキリつけた、ホワイト・ファングは遂に見苦しく啼きながら、母の保護を求めに逃げて行つた。これがホワイト・ファングの、將來リプ・リプとやらねばならぬ、幾多の戰鬪の第一回であつた。彼等は最初から敵同志であつた兩方の性質上、永久にブッつかるべき運命を持つて生れてゐたのであつた。

キチは慰めがほに舌でホワイト・ファングを舐めてやつて、そして自分のそばに居らせるように勉めてゐた。けれどもホワイト・ファングの好奇心は放縱であつた。數分間の後には、彼は又新らしい探求に出かけてゐた。彼は人間動物の一人なる灰色狸の居る處に來あはせた。灰色狸の地にしやがんで自分の前に散らされた棒きれと乾いた苔とで、何事かをやつてゐた。ホワイト・ファングは彼れのそばに來て、それを眺めてゐた。灰色狸は例の口の物音をさせてゐたが、ホワイト・ファングはそれに敵意がないと解したので、いよいよそばに寄つて行つた。

女や子供達が棒きれや小枝を更に多く灰色狸の處に運んでゐた。確かに何か重大な事らしく見えたホワイト・ファングは段々そばに寄つて、とうとう灰色狸の膝に觸れる處までやつて來た。其の時にはモウ好奇心の强さの爲に、これが恐ろしい人間動物だといふ事を忘れてゐた。

不意に彼は、霧のような不思議な物が、灰色狸の手の下の棒きれと苔とから登りだすのを見た。次いで其の棒きれの間に、空の太陽のような色をした生き物が、ユラユラクネクネとして現はれた。ホワイト・ファングは少しも火の事を知らなかつた。それは丁度、幼ない頃、洞穴の口の光が彼を引きつけたように、今ま彼を引きつけた。彼は其の焰に向つて二あし三あし這ひだした。灰色狸が何か自分の上でクツクツいふのは聞えたけれども、その音に敵意のない事は彼に分つてゐた。そこで次に彼れの鼻が其の焰に觸れ、同時に彼れの小さい舌がそれに向けて差し出された。

暫くのあいだ彼はアッケに取られてゐた。棒きれと苔との間に隱れてゐる不可思議物が、無殘にも彼れの鼻を引つ摑んだのであつた。彼はキヤンキヤンキヤンキヤンキヤンといふ驚きの叫びを破裂させて、うしろに飛びしさつた。其の物音にキチが唸りながら繩り棒の端まで跳り出した。そしてそれ以上、子の助けに行く事が出來ないので、そこで散々荒れ狂つてゐた。けれども灰色狸は大きな聲で笑ひ出だして、自分の膝を叩きながらキヤンプの人々に事の次第を話した。すると皆の者もドット吹きだして一緒に笑つた。ホワイト・ファングは矢張り尻を据えてキヤンキヤンキヤンキヤンキヤンと泣つゞけてゐたが、其サマは如何にも人間の仲間を外れた、哀れな小さい動物であつた。

其の傷は彼がこれまでに受けた中で一番ひどい者であつた。鼻も舌もアノ灰色狸の手の下から生れた、アノ太陽色の生き物の爲に燒け焦がされてゐた。彼は猶ほ止めどもなく泣きつゞけてゐると、其の一と泣ごとに、人間の方では益々さかんに笑ひはやした。彼は鼻の痛みを舌で和らげようとしたが、其の舌も燒け焦がれてゐた。そして二つの痛みが一緒になつて、更に一段の痛みを增した。彼はいよいよますます悲しそうに、なさけなそうに泣きだした。

すると今度は又、彼は恥かしくなつて來た。彼は人間の笑ひと其の意味とを知つてゐた。或種の動物がどうして笑ひを知るか、又どうして自分が笑はれてゐる事を知るかは我々人間は分らよへ。けれども兎にかく、ホワイト・フアングはそんなフウで笑ひを知つてゐた。そして人間が自分を笑つてゐるのを恥かしく思つた。彼はうしろを向いて逃げだした。それは火から受けた傷の爲ではなく、それよりもモツトつらい笑ひの爲、即ち自分の精神に受けた傷の爲であつた。彼はキチの處に逃げて行つた。縛り棒の先で、氣の違つた大動物のように荒れ狂つてゐるキチの處に、そして又、世界中で彼を笑つてゐない只ひとりの動物なるキチの處に。

夕闇が下つて來て、そして夜になつた。ホワイト・フアングは母のそばに寐てゐた。彼れの鼻と舌とはまだ痛かつたが、彼はそれよりも一層大なる惱みに苦しんでゐた。彼はホーム・シツクを起した。心の中に空虛を感じた。あの小さい川の靜かさと、崖の上の洞穴とが戀しくなつた。生活が今は餘りに賑やか過ぎてゐた。こゝには人間動物が餘りに澤山ゐた。男や女や、子供や、そしてそれが皆がやがやザワザワと騷ぎ立つてゝゐた。それに又犬共がゐて、のべつに嚙みあつたり吠えあつたりして、喧々囂々の大混雜を呈してゐた。彼が今まで慣れてゐた、其の物靜かな生活は消え失せてゐた。こゝでは空氣その者が生命で波立つてゐた。それはいつでもブンブンガンガンと鳴り響いてゐた。其の强度は絕えず變化し、又その調子は頓に高低の差を生ずるが何しろ彼れの神經と感覺とはそれに刺激されて、イライラソワソワした氣持になり、ショッチユウ、今にも何事が起るかといふ氣遣ひに惱まされてゐた。

彼は人間動物が往つたり來たり、或はキャンプのそばで何かしたりするのをジツト見守つてゐた。人間が自分の作りだした神樣に對するのと、ほのかに似通つた心持で、ホワイト・フアングは自分の前の人間動物を眺めてゐた。彼等は優秀な生物であつた。現實の神であつた。彼等はホワイト・フアングのおぼろげな理解力に對して、恰かも神が人間に對すると同じほどの、奇蹟の行爲者と思はれた。彼等は支配する動物であつた。彼等は有らゆる不可思議な行ひ、有らゆる不可能を可能にする力を備へてゐた。彼等は生物及び無生物の主宰者であつた。動く者を服從させ、動かざる者に運動を附與し、更に太陽色をした嚙みつく物の如き生命を、死んだ苔と木との中から作り出だす者であつた。彼等は火の製作者であつた!。彼等は神であつた!。

北郊雜記

阿部次郎



20

去年の秋植ゑたばかりでまだ疎らな芝草の間に、猛烈な勢で雜草が蔓り出した。まだたけの低いうちは、同じ綠の色にまじつてそんなには眼に立たなかつたが、たけの延びるに從つてそれが眼ざはりになり出して來た。それで私は毎朝まだ凉しいうちに、朝飯前の運動として草取をすることを思ひついた。此頃になれば宵の口からしつとりとおりる露が朝になつて益々繁く置いてゐるのを、跣足の足うらで踏む冷さがいゝ心持である。三四十坪ある芝地の片端からそろ／＼と草をとつて行きながら、考へかけてゐることを考へ進めて行くとき、其處には、机の前に坐つてゐるときとは又別樣のリズムが生れる。固より私の草取は遊戯の一種に過ぎないが、この遊戯は私に、筋肉勞働は――特に土を對手にする筋肉勞働は、一種特別の勞働であることを感じさせる。筋肉勞働だけが勞働でないことは云ふまでもない。併しそれは頭の勞働とは違つた一種特別の勞働である、さうしてトルストイなどが考へたやうに、それはあらゆる人にとつて必要な勞働であつて、或程度までこの勞働と接觸することを怠るとき、恐らくその人の生活全體に或種類の報いを齎さずにはゐないやうな性質のものである。土を對手にする筋肉勞働には、これを無視する者の觸れ得ないやうな、健全な喜びと苦みとがあるであらう。單にこの一點から考へても、土地と農業とを忘れた文化が本質的に人間を幸福にする力があるかどうかは疑はしい。――私はかういふやうな身の程を忘れたことを考へながら、芝草の間にまじる雜草をぬき捨てゝ行く。

芝草の間にまじつて最も勢力を逞しくしてゐるのは、葉が芝に似てもつとたけ高く延び、根の方に少し赤味を帶びた何とかいふ草である。私は一種の憎しみを以て遠慮なしにこの似せ者を拔き捨てゝしまふ。異臭を持つてゐるどくだみも亦私の愛惜を受けることが出來ない。併し鐵火箸のやうに潤ひ氣のない莖に折から淡褐色の花ともいへないやうな花をつけてゐるかやつり

草になると、私の手は前ほど勇敢にこれをむしり取ることが出來ない。さうして愛惜のこゝろを持つて芝の間にまじる雜草を眺めはじめると、其處には何といふ多樣な可哀らしい植物の種類が、この狹い空間にその生を營んでゐることであらう。丸い葉の柔かなものや、葵の葉のやうな形をして三四葉集つて一つの圓居（まどゐ）をしてゐるものや、赤味を帶びた小さい莖を横に這はせながら、芝草のすき間に謙遜な自分の領分を占めてゐるものや、見るに從つて新しい種類が目について來る間に、淡紫や黃色の小さい小さい花さへ咲いてゐるではないか。私は此等の小さい可哀いものを拔き捨てるに忍びなくなつて、彼の憎むべき似せ者だけをあさつてこれを退治して行く。

併しこの似せ者を根絕することだけでも容易ではない。大抵とり盡したつもりで一兩日たつと、いつの間にか彼等は又芝より高くそのたけを挺でてその存在を其處にも此處にも告知してゐる。眞晝の光がギラ〳〵と照つてゐるうちは、凡ての葉が一樣にその光を照りかへしてゐるので、それがそんなにも眼立たないが、朝の柔かな光が草葉に置く露を目立たせてくれるときには、露を宿して白がね色を帶びたその葉は、とても自分をかくすことが出來ない。かくて又私にはその朝の仕事が與へられるのである。

21

動物や植物が皆、カントの所謂 Sache（物）であつて Person（人格）ではなかつたら、吾々の世界はどんなにか寂しいであらうが、それは又吾々に一種の心安さをも與へてくれるであらう。動植物を殺さなければ生きてゐられない吾々には、彼等をペルゾーンに似たものと考へなければならないのがつらい。

郊外は八月に入つて又金ぶん〳〵のうるさい頃となつた。昨夜俄かに募つて來た暑さの堪へ難さに、四方の窓をあけ放して本を讀んでゐたら、大きな金ぶん〳〵が飛び込んで來て、執念深く私のまはりを飛び廻つた。私はあまりのうるささに本でこれを打おとして、首をひねつてこれを殺してしまつた。つひさつきまで、あんなに大きな音をさして飛び廻つた逞しいものが、一ひねりで首と翅とが處を異にするを見て、私はいやな氣がした。さうして眉をひそめて "Sache!" と呟きながら力一杯窓の外に投げ出した。

22

世間の噂はあてにならない。新聞の記事には隨分嘘が多い。特に近來は、單に誤聞から來る嘘だけではなくて、たちの惡い新聞になると故意に揑造する記事さへあると見えて、私の友達

の某の如きは、記者を避けて何も話をしなかつたのを、麗々しく彼の談話を捏造して記載されたこともある位だから――今朝の東京朝日を見ると原首相も同樣の目に逢つてゐるらしい――新聞の記事をうつかり信用して世間の事を是非すると、心にもなく他人にどんな寃罪を着せないものでもないと思ふ。

そんなわけで、近來私は、縱令いくら云いたいことがあつても、普通の新聞記事以上に信憑すべき報道を得て事件の大綱だけでも確かめ得たと信じない限り、公けには何も言はないことを心掛けてゐるのであるが、それでも猶過に陷ることがないとはいはれない。前に大本敎について言つたことにこの過ちがあつたことが「大正日々」に出た井上某氏の文章によつて明かにされた。固より二三の點に對する事實の誤解を訂正しても、私の大本敎觀は、やはり前に書いたところと大して變らない。併し兎に角誤解があつたことを悟つた以上、その點を訂正して謝意を致すことは私の義務でなければならない。

私はあの感想の根據として、京都府警察部で六月五日に發表したといふ豫審調書の一部（大阪毎日による）なるものを用ゐた。さうして井上氏も云はれたやうに、特に

「信者の基本觀念をなす世の立替期到來說の如き和三郎が其時期を本年にありと斷言してゐる根拠は何處にありや」と訊ねて見ると「三十年を以て世の切替を致すぞよ」とある筆先に根拠を置いて敎祖に因當立替の遺依した明治二十五年一月より計算すれば大正十年が三十年目に相當するから間違ないと云つてゐるが實は其原本に「明治三十年を以て云々とあつたのを「明治」の二字を取り捨てゝ了つて單に「三十年を以て」と發表したからであると知つた和三郎が狼狽の色を作したのも無理からぬ事であらう」云々

といふ一節に重きを置いてゐた。警察部で發表した豫審調書といふやうなものは、充分に信用してもよからうと思つたからである。併し井上氏の說をきけば、この調書は、假令「誰某屬僚」の故意から出て居ないにしても、事の全眞相を離してゐる粗雜なものだといふことは爭へないやうに思ふ。從つてこれに全幅の信用を置いた私の考も亦事實を離さぬことになつたのである。

それならば京都府警察部の發表は何故に全眞相を離してゐないと見られなければならないか。それは（一）明治二十五年舊七月十六日の日附になつてゐる御筆先には明かに「明治三十年には立替を致すと申して筆先に出してあるが云々」と書いてあつて、而もかう書いてある御筆先を大本敎自身が大正七年九月十五日發行神靈界第七十七號に發表してゐるさうであるが、この調書には大本敎自身が「明治三十年」といふことを發表し

てゐる事實を省略して、全然「詐欺虛構の意志」から出てゐると見せるやうに書いてあるからである。從つて（二）大正十年（若くは十一年若くは十六年）立替說の根據は、大本敎にとつては他の御筆先にあるので、「明治三十年の云々」の文句もその根據によつて都合のいゝやうに解釋されてゐるに過ぎないことを看過してゐるからである。王仁三郞の解釋によれば「明治三十年に世の切替を致すぞよ」とは、神の世の立替が行はれ、敎祖が此年から「法身彌勒の御働きを遊ばす」こと、從つて此年から彌勒の世になるといふことである、さうして世の立替は「明治廿五年に御筆先が出ましてから卅年後と云ふことになる」のださうである（大正九年九月十五日王仁三郞がさういつて講演したといふ。）この解釋は甚だ危いものであるが、兎に角大本敎自身が御筆先に「明治三十年」とあることを隱蔽してゐなかつたことは、以上の證據によつて認めなければならない。從つて世間に發表されてゐる大本神諭に「明治」の二字を削つてあることを（この神諭は私の持つてゐる「天の卷」には見當らない）直ちに此敎が、「詐欺虛構」の意志に基いてゐると見たのは私の誤解であつた。私は第一に此點を訂正して置きたい。

さうしてこの訂正は又第二の訂正を作つて來る。問題の御筆先に「明治卅年」とあるのが、大本敎內部にあつてはこれほど公然の事であるならば、淺野氏が始めからこれを知らない譯がない。從つて氏が「驚愕の色をなした」理由を、私が前に見たやうに見るのは、全然見當外に違ひない。私は、今になれば、あんなに甘い、見當外れの同情を同氏に寄せたることを恥かしく思ふ。前の訂正をしたあとでも猶可能な解釋は、恐らく次の三つの外を出でないであらう——（一）和三郞が驚愕の色をなしたと見たのは警官の主觀的幻影であつて、當人には全然そんな心持がなかつたのか。（二）自分達の拵へ上げて來たからくりが見拔かれたと思つて驚愕の色をなしたのか。（三）警官の言ふ言葉がはつきりわからないうちに、實際自分の信仰を覆すやうな理由が見付かつたのかと思つて、一時驚愕の表情をしたのだが、意味が明かになるに從つて靜かになつたのか。而も「明治」の二字を削つたことが前に述べたやうに不用意であつたとすれば、この不手際な改刪を唯一の根據として大正十年立替へのからくりを繰らうとしたといふことは殆んど考へられない。從つて彼が「驚愕の色をなした」理由は、第一か第三かの孰れかであらう。さうしてこの二つのうちの孰れにしても、それは固より信仰の動搖を來すべき根據となることが出來ない。從つて私は第二にこの點をも訂正して置かなければならぬ。井上氏の文章によれば、實際淺野氏の信仰は「益々熾烈の度を加へつゝある」

といふことである。

以上私は私の前言の過を訂正した。併し大本教は何故にお筆先を世に公するに當つて、「明治三十年」とあるのをたゞ「三十年」と訂正しなければならなかつたか。その理由を考へるとき、私は未だ容易に從來の疑を撤回することが出來ないことを覺える。既に神靈界に發表し、教内に於いては隱れのない御筆先を世間に發表するとき、彼等は何故にこれを改刪する氣になつたのであるか。私の考へ得る限りでは、それは（一）世間の誤解を恐れ、世間を承服させる便宜を慮つたのであるか、（二）囚へられざる理性にはどうしても神諭中の矛盾と見られることを恐れ、自教の弱點を取繕つたのであるか、孰れか一つでなければならないやうに見える。さうしてこの二つの孰れによるにせよ、神諭に對する敬虔の感情の缺乏や「詐欺虚構」とまでは行かないにしても兎に角便宜に任せて取繕つて行かうとする不誠實な態度などが、少くとも幹部と云はれる人達の間に存在することを疑はしむべき、十分の理由となると思ふ。

私は前に京都府警察部の發表が必ずしも事の全眞相を明かにするものではないことを承認した。併しその中、問答の形で王仁三郎自身の言葉を記錄したと見らるべき部分に、この疑問に裏書する甚だ不都合な言葉が行列してゐる――

〔問〕何時何處で何程位燃したか

〔答〕大正六年五月頃から大正七年十一月頃迄の間に五六回風呂敷に包んで持ち出し本宮山の麓へ持つて行き燒きました其數は約千部位と思ひますが、其内で明治三十二年の分は私の惡口が一番澤山書いてありましたから燒きました

〔問〕燒いた譯は

〔答〕明治三十二年頃から三十七年頃の間は私の惡い事ばかり書いてあり其外私の氣に喰はぬ分もあり又やけくそに中を見ずに燒いたのもあります尚筆先は殘して置くと重複の事があり且つ詰らぬ事があるので後に直の神德を損ふと思うて燒いた事もありました

〔問〕燒棄になつて燒いたとはどうか

〔答〕私が直や家内役員等と衝突し立腹して燒いた事もあり明治三十五年頃直初め役員十二人寄て私の書いた物を一間程積んで燒きこれで惡を平げ立替の御用は出來たと云うて居た事がありまして私は其事を思出すとむかついて來たから筆先を箱に取り出し燒いた事もありました。云々

若しこれも亦嘘で、京都府警察部がこれほど委曲に渡つて詐欺虚構を逞しくしたのだとすれば、吾々は無警察の下にゐるよりも猶恐るべき害惡を見て戰慄するより外にないが、若し王仁

三郎が此處に書いてあることの四分の一でも云つたとすれば、此の如き破廉恥漢が猾ほ筆先を柄にとつて一教の主となつてゐることは、容易ならぬことと言はなければならぬ。前に引用したところによれば、教祖は明治卅年から法身彌勒の働きをしてゐるので、「法身彌勒は至善至美晉一筋の遣り方をなされる處の神様」である筈なのに、その後卅二年から卅七年の間の御筆先に「詰らぬ事が」あつたり、「神德を損ふやうたものがあると云つて燒かれるやうではたまつたものではない。あの調書中少くとも前掲の問答だけでも事實であるならば、私には教祖の神諭を信ずると共に、その神諭の「敵」王仁三郎をも亦信ずる人の心理を解することが出來ない。（八月六日記）

新刊紹介

□法律及法律學の本質　中島愼一譯）同上、シユタムラー著を譯せるもの（定價一圓大村書店發行）

□赤心錄（山田潤二著　滿鐵問題により世間の注目を惹起せる氏の誠心の披瀝である（定價一圓民友社發行）

□民衆藝術論（大杉榮譯）ロマン、ロオランの原著を譯せるものにして蓋し好著と云ふべきである（定價金一圓三十錢アルス發行）

靈魂の爲めの戰士

大杉榮

一

『個人の生涯に於けると同じく、民族や人類の生涯に於ても亦、其の生涯の回轉期とも云ふべき出來事がある。そして此の出來事は、エリアが其の中に神の出現を見たと云ふ暴風のやうなものではなく、寧ろ漸く知覺されるかされないか位の朝の微風に似たものである。騒がしい音も立てない。無暗と何にかに打ちつけもしない。目にも立たない。』

これは僕が今こゝに紹介しようとする靈魂の爲めの戰士即ちドウハボルの爲めに、トルストイが其の心血を注いで書いた小冊子『助けよ』の結論の中の一節である。

トルストイは猶續けて云ふ。『ロオマ人は勝利者の入城を歡び迎へた。しかし彼の新しい教を説いたガリラヤの大工の子には見むきもしなかつた。それと同じやうに、今日でも、全世界の人々は殖民地戰爭や金銀貨本位説の問題には熱中してゐる。しかしドウハボル教徒が其の信仰の爲めに闘つてゐる偉いしかし隠れた努力に就いては全くかへり見もしない。』

斯くトルストイがキリストの再現とも見た、そして其の活動の中に人類の歴史の回轉期を見た、此のドウハボル教徒とは何者であるか。

ドウハボル教は、キリスト教の一宗派である。ロシアには此の宗派の數が非常に多い。其の多くは、十七世紀にニコン總教主がロシアの正教派を建てた時に起つた、分裂から生じたものである。ニコンはギリシア語の原文書に據つて從來の聖書に修正を加へた。そして此の修正が國民的反抗の猛烈な運動を惹起したのであつた。しかし此等の謂はゆる舊修者以外にも、正統派に反對する他のいろいろな宗派が絶えず起つてゐる。

正統派は極力此等の異宗の壓迫に努めた。正統派の仕事と云へば、殊にそれがニコンの改革によつて確立されて以來は、只だ其の地位の維持に努めるだけの事であつた。正統派には、其

の創り上げた教義と云ふ程のものは、殆んど何にもない。正統派の神學には、異宗に對する論難攻撃の外には、殆んど何んにもない。斯くして正統派は、此の點に於て、自然にロシア政府の方針を助ける事となつた。

當時漸く其の基礎を固めて强大な近世的國家を建設したロシア政府は、其の國内に於ける有ゆる意味での自由な獨立的分子の排斥に努めてゐた。遂にピョトル大帝は、正統派を國教とする事によつて、其の中央集權的政策の完成を謀つた。餘りに自主的な總教主の職を廢して、教主會議の制度を設け、其の會議員は總て皇帝の任命による事にした。教會が國家行政の一部門となつたのだ。

ドウハボルは、其の信仰箇條の性質上、此の教會と國家との二種の權力と衝突しなければならなかつた。

しかし此の宗派の最初の思想は全く宗教的のものであつた。キリスト教に就ての其の特殊な解釋の仕方であつた。そして漸次に、周圍の諸事情に應じて、種々なる方面に其の思想が適用され擴大されて行つたのであつた。そして遂に、最初は全く神學的の、やがては更に政治的及び社會的の、其の教義が形づくられ確かめられたのであつた。

ドウハボル教徒の特徴は、何によりも先づ、正統派の儀式づくめに對する反對であつた。彼等は宗教を儀式の中におしこめる事を斥けて、神は靈魂（たましひ）の中でのみ崇むべきものであると主張した。ドウハボル教の最初の教義は其の信徒等が一七九一年にカホフスキイ知事に呈出した報告書によりて、其の大體を明かにする事が出來る。

靈魂は肉體よりも先きに創られたものである。三位一體は知慧と意志と記憶との三要素より成る。然るに或る靈魂等が罪に陷つて、此の世界の創造される以前に神から離れて了つた。神は、其等靈魂の前身の記憶を取りあげて、此の地上に追放したそして神は、其等の靈魂を各々自分の知慧と意志との欲するまゝに、惡魔の誘惑のまゝに、此の世界に打棄てゝ置いた。……されば人間の肉體は、靈魂に取つては、一時の牢獄に過ぎないそして靈魂は、此の肉體の中に止まつてゐる間は、其の前身の記憶を呼び起す事、即ち神の姿を取り返す事を、其の唯一の目的としなければならない。其の爲めには先づ物質から解脫しなければならない。最初の人間には宗教上の儀式も制度も何にもなかつた。彼等は只だ聖靈によつて照らされてゐた。然るに、其後、惡の進むに從つて、罪を壓へる爲めのいろいろな戒律をつくり、信仰をすらも一つの法典に築き上げて了つた。斯くして

靈的存在でなければならぬ筈のものが、たとへば聖書とか儀式とか云ふ外的の形を具へるようになつた。遂に最初は『世界の天然自然の中に』擴がつてゐた神の知慧が、エス・キリストの中に顯現された。尤も此のエス・キリストは、マリアの體内で物質的に發育された如く、各人の中にも神から『天降り』して來る。吾々ドウハボルが自らさうでありたいと望んでゐる神の子等は、決して法律や教理問答をつくらない。『恰も日出てゝ月や星の消え失せる如く、神の子等は、自らの中にキリストを持てばもう…………も何んにも要らなくなる。』神の人々は、使徒ポオロの云つた如く、生ける殿堂である。

彼等は宗教の眞實と其の眞實の蔽はれてゐる表象とを混同する事がない。そして彼等はそれに極めて巧妙な比喩的説明を下してゐる。彼等の讃歎の一つに云ふ。

——汝は如何なる十字を信ずるか。

——任意の貧困の十字を。

——汝の教會とは何んぞ。

——信仰の一致。僞らざる愛。眞の功德の教訓。神秘なる聖徒の尊嚴。

——汝に殿堂ありや。

——我が肉體は神の殿堂である。我が靈魂は神の姿である。

——汝に祭壇ありや。

——我が祈禱は自ら神の御許にまで進んで行く祭壇である。

二

ドウハボル教の起原は明瞭とは分らない。とにかく十八世紀の中頃に正統派や舊信徒等の喧ましい形式主義に對する反動から起つたものには相違ないが、其の歴史的諸事情は頗る曖昧朦朧としてゐる。

ドルハボル教徒自身は、アナニアスとアザリアスとミサエルとの三人を、其の教祖だと云つてゐる。此の三人は、バビロン王ナブショドノゾルの肖像を拜む事を拒んで、王の爲めに大爐の中で燒き殺されたと云ふ、舊約聖書の中の人物である。ロシアにも、一七三三年に、「自らキリストだと名乘つて火炙りの刑に處せられた、フオマ、ルプキン、及びスウスラフと云ふ三宗派の教祖がある。そこで、ドウハボル教は實は此の三宗派から出たもので其の宗派の記憶と舊約聖書の中の傳説とが結びついたのではあるまいか、と云ふ人もある。しかしこれも信ぜられない。

尤も、ドウハボル教の教義の組織若しくは其の發達の上で實際に或る影響を及ぼした、他の三人がある。

トヴエリテナフと云ふ醫者は其の一人であつた。此の醫者は

ドウハボルと云ふよりも寧ろモラカン宗の人であるが、一七一四年にカルヴイン教を説いたと云ふ事で處刑された。次ぎには一七四〇年か五十年頃かに、多分クエカア教徒だらうと思はれるプロシアの或る下士官が、小ロシアに傳道してゐた。そして最初の疑ひもないドウハボル、シルウアン・コレスニコフは、此の下士官の弟子だと云はれてゐる。コレスニコフはイエカテリノスラフ洲の無學な一小商人であつた。自分の周圍に幾人かの信者を集めて、其の隨分老年までの生涯の間を、熱心な傳道に暮らした。其の中心思想は、クエカア教の萬人平等説にあつたらしい。それと丁度同時頃に、スカフオラダと云ふ小ロシア人が、村から村に渡つて、小作小屋の中にはいり込んで、農民達の間に其の新宗教を説いてゐた。彼れはカザツク兵の息子であつたが、當時のロシアの學問を修め盡くして更にヨオロツパの彼地此地に旅行して、多くの哲學者や宗教家とも知合になつてゐた。其の説に云ふ。『キリストは長い祈禱の中にも、斷食の中にも、又いろいろな儀式の中にもゐるのではない。…キリストは死人の國にゐるのではない。キリストは生きてゐるのだ。だから生きてゐる人の中にキリストを求めなくちやならぬ。…若しキリストが吾々自身の中に見つからなかつたら、ほかの何處を探しても無駄な事だ。』

此處に注意して置かなければならぬのは、此の三人若しくは四人が、何れも其思想の起原を西ヨオロツパに發してゐる事である。トヴエリテナフはカルギン派である。プロシアの士官及びコレスニコフはクエカア派である。そして最後のスカフオラダは自らチエク派に屬するアブラハムの子孫だと云つてゐる。

元來ロシアの本當に國民的な宗派は、十字の切りかたとか讃歌の歌ひかたとか云ふ、禮拜や儀式に就いての意見の相違から生じたものである。從つて其の宗派は、各々其の特殊な仕方に從つて、此の外的な禮拜や儀式をいろいろに變へたり複雑にしたりこそすれ、それを更に單純にするとか、或は全くそれを無視するとか云ふ事はない。さればドウハボル教を生んだ最初の思想は、西ヨオロツパの新教(プロテスタント)の合理的思想から出たものと思はれる。しかし此のドウハボル教も、其後の發達の間に全くロシア的のものとなつた。一體ロシアの諸宗派は、其の教義を極端まで進めて行つて、そして其の主張を實際生活の有らゆる方面に適用すると云ふ、飽くまでも徹底した態度に出る。どんな障礙の前にも退かない。はかばかしい程に、しかし又神々しい程に、其の信仰の結果の奴隷となる。

ドウハボル教の思想は、シルウアレ・コレスニコフが其の教を説いたイエカテリノスラフ州から、更にタンボフ州にはいつて行つた。そして此の宗派は其處で忽ちの間に擴がつた。其の最初の首領はポビロヒンと云ふ名の金持の商人であつた。彼れは云ふ。眞理は聖書の文學の中にあるのではない。『生命の書物』即ち良心の中にあるのだと。此の頃からドウハボルは其の教義を文書によつて説く事を拒んだ。『生命の書物』には其の時々の事情に應じて出來た、いろいろな物語や讃歌などがある。彼等はそれを其の子供等に幼時から教へこむ。

彼等は神に選ばれた民だと云ふ無邪氣な誇りから、世間的知識を侮蔑して、決して學校を設けない。『生命の書物』の外には彼等は全くの無知である。

ポビロヒンの讃歌の一つに云ふ。『水による洗禮は吾々の靈魂に必要なものではない。吾々の靈魂の洗禮は吾々自身の中の神の言葉を受け入れる事である。……パンは麥粉を以て、葡萄酒は葡萄の實を以て造られる。そんな物は吾々の靈魂に要はない吾々は、吾々の罪の許されんが爲めに、エスの恐ろしい、しかし元氣づける、不死の、神聖な苦難を嘗める事によつて聖餐を受ける。』

ポビロヒンは、其の熱烈な信仰の爲めに、遂に一家を擧げてシベリアへ追放された。そして其の後繼者となつたカプウスキンは、非常な雄辯と聰明と美貌とを具へた、ドウハボル教の豫言者とも云ふべき人であつた。ポビロヒンはキリストが化身して再び此の世界に現はれると云ふ事を考へてゐた。カプウスキンは更に此の説を敷衍して、それを自分の一身一家の爲めに利用した。即ち自分をキリストの化身だと稱へて、此の特權が自分の子々孫々に世襲されるものと主張した。そして其の子孫は代々キリストの化身としてドウハボル教徒の牛耳を握る事となつた。

三

斯くして十八世紀の終り頃には、イエカテリノスラフ州及びタンボフ州は勿論、ドン河の流域地方や、南ロシア地方や、モスクワ市にまでも、其の教徒が散らばつた。そして其教義は、商取引や追放人などによつて、更に遠くまで擴がつて行つた。ドウハボル教徒の追放人等は、リガや、フインランドや、エゼル島や、アゾフや、アルハンジエルや、イルクウルラや、又はコオカサスなどに流されて、其處で其の思想を傳道した。

そして其の頃に、即ち一七八五年に、始めて、彼等はドウバボルと云ふ名を得たのであつだ。イエカテリノスラフ州の大教正アンブロアズが、彼等を嘲笑的にドウハボルと名づけた。大

敎正は、此の言葉が戰士と云ふことと靈魂と云ふのとの二語から出來てゐるので、それを靈魂に逆らふ戰士と云ふ意味に使つたのだ。然るに敎徒等の方では、それを靈魂のための戰士と云ふ意味に解釋して、喜んで其の名を受けたのであつた。

カテリン第二世の政府が此のドウハボル敎徒に對する迫害を始めた。一七九〇年に、ペレコプの裁判所が、三十四名の靈魂の爲めの戰士に、次ぎの如き宣告を下した。『被告等は敎會の命令を奉じない。で、他の人々を彼等から保護する爲めに、又彼等が敎令や聖餐や諸聖徒を否定するのを罰する爲めに、先づ公衆の前で彼等の中の男には强鞭三十打を、女には弱鞭四十打を與へる。そして被告等をシベリアに追放して、其の財産を沒收する。』

次ぎのポオル第一世は更に嚴重な迫害を加へた。此のポオル第一世とドウハボルとの最初の衝突に就いて、ベルツエンの語つた面白い挿話(エピソオド)がある。皇帝が卽位式の爲めにモスクワへ行つた時であつた。ドウハボルの長老の一人を宮中に呼んで、此の凝り固まりの宗旨氣違ひが何にを云ふか聞いて見ようと思つた。老人は、其の宗派がクエカアから傳へられた慣例に從つて、帽子を被つたまゝ皇帝の前へ出た。皇帝は此の侮辱に辛棒が出來ないで、いきなり怒鳴りつけた。『貴樣は今誰れの前にゐるか知つてゐるか。』老人は平氣な顏で答へた。『よく存じてゐます。お前さんはポオル・ペトロウヰッチです。』皇帝は卽座に此の男をシベリアに追放して、其の村の四方から火をつける事を命じた。しかし誰れも此の命令の實行を敢てするものがなかつた。翌日、皇帝は仕方なしに思ひ直して、村を燒き拂ふ事だけは止して、老人を或る僧院に幽閉した。尤も皇帝は其の僧院の正統派の僧侶等が此の邪敎徒を虐待するものと期待してゐたのだ。然るに此の期待もまんまと外づれた。老人は僧院の中で聖者だと云ふ評判になつた。遂には其の友人等が監房の中にはいり込んで、老人に白衣を着せて、其の監房の周圍(まはり)にも白い布を張つた。そして此の老人が死んだ時には、其の死骸が本當に聖者の死骸のやうに鄭重に持ち出された。

猶此のポオル第一世の治世の間には、多くのドウハボルが、『官憲を……して、此の地上には善人を保護し惡人を處罰する爲めに神から命ぜられた別の權威があると信じてゐる』爲めに終身懲役に處せられた。

其の次のアレキサンドル第一世が卽位してから、漸くドウハボルの地位が平安になつた。一八〇一年、皇帝は追放者等の罪を赦して歸國を許した。そして其の前に先づ二人の牧師と一人

の裁判官とを派遣して、其の信仰の眞面目な調査を命じた。其の第一の問題は彼等が皇帝に忠誠を盡すと云ふ宣誓をするか否かと云ふ事であつた。彼等は答へた。『善良な皇帝は神の惠みであり、殘虐な皇帝は人間の罪惡に對する神の罰である。』次ぎにはキリストの聖像を持つて來て、此のキリストを信ずるか否かと云ふ事であつた。彼等は答へた。『それはキリストではありませぬ。たゞ板に繪の具を塗つただけのものです。』最後の問題は税金を納めるか、又兵役に就くか否かと云ふ事であつた。彼等は答へた。『私共は乞食です。何んで税金なぞが拂へませう。又私共が何んで兵役なぞに出られませう。私共の間にはもう老人と子供と不具者(かたわ)しか殘つてゐませぬ。尤も昔しは、私共も外の人達と一緒に皇帝の爲めに盡しました。しかし今はもう皇帝の思ふまゝになさるがいゝのです。私共にはもう何んにも出來ませぬ。』役人等は此の調査の結果を皇帝の許に齎した。そして彼等は相變らず謀反人であると云つた。しかしこれは元老議官ルプウヒンの反對によつて斥けられて了つた。

猶此のルプウヒンは、ドウハボル教徒に勸めて、皆んなが一團となつて何處かに植民したいと云ふ事を請願させた。アレキサンドル第一世はそれを許して、トオリダ洲のモロチユナイ河に沿ふたメリトボル郡を其の植民地に指定した。其處にはまだ人の住んでゐない肥沃な土地があつた。シベリアから歸つて來た教徒等は、眞先きに、其處にヷオフダーフカ(『授かつた神』の意)村を建設した。一八〇五年には、カプウステインと其の息子とが、タンボフ洲やヴオロネエジ洲の教徒等を率ゐて來て、テルペニエ(『忍耐』の意)村を建設し、ドウハボル教の豫言者はキリストとして全植民地を支配した。そして彼等は其の植民地をシロチニア・ヴオデイと名づけた。

一八一八年、アレキサンドル第一世は自ら此の植民地を見舞つた。さすがのドウハボル教徒等も、長い間の追放から許されて、肥沃な土地まで貰つて、其の上に皇帝の見舞までも受けたのだから、餘程ありがたかつたものと見える。今でも彼等は其の祈禱の中に『長老アレキサンドル』などゝ云つてゐる。そして、彼等は、皇帝は表向き死んだと云ふ事にして、實は彼等の間に引つこんで、其の宗派に歸依したのだとまで云つてゐる。

やがて此の植民地に九つの村が出來た。肥沃な土地は彼等の勞働と改善とで、益々豐饒になつた。彼等は安樂に暮した。饑饉の時の貯蓄までも出來た。皆んなは共同して土地を耕し、其の收穫は平等に分配した。皆んなの儲けた金はカプウステインの許に納めた。

男は青い色の長い着物(カフタン)を着てゐる。女は指輪も耳輪も一切の飾りをつけない。そしてボンネツト樣の帽子を頭のところで絹ハンケチで結はへてゐる。娘は、其の髮を束ねないで、襟のあたりまで、リボンで結はへてゐる。

皆んなは互ひに兄弟姉妹と呼んで、何事にも助け合つて、親密に暮してゐる。老人や不具者はテルペニエ村の養老院に送る皆んな働き好きで、正直で、寡慾で、そして又此の規則正しい生活のお蔭で、身體も丈夫で且つ綺麗だ。

時々集まつて祈禱をしたり讃歌を歌つたりする。男は右側に、女は左側に坐る。皆んなが集まると、一番上席の老人が或る讃歌を歌ふ。次ぎに其の次席のものが外の讃歌を歌ふ。斯くして順々に六七歳の子供にまで及ぶ。女の方でも、同樣に、一番年上のものが始めて、順々に小娘に及ぶ、皆んなが自分の好きな讃歌を選ぶ。しかし誰れかゞ歌つたものは二度と歌ふ事が出來ない。最後に皆んなが立ち上つて、男は男同士で、女は女同士で、互に相抱き、相握手する。斯くして皆んなの中に生きてゐる神を崇める。そして先きの第一の長老が再び讃歌を歌つて、其の會を閉ぢる。

彼等は政府とも和解した。税金も收めた、兵役には。外的にだけ應じた。又、自分が兵役に就く代りに、代人を買ふ事も出來た。そして遂には、政府の方で更に讓歩して、入隊の際の宣誓式を只だ忠誠を盟すと云ふ約束だけで濟ませた。

四

然るにアレキサンドル第一世も、其の晩年に及んで、即ち一八二〇年頃から、ドウハボルに對する其の態度を一變した。そして次ぎのニコラス一世に至つて、彼等に對する迫害が復活された。ニコラス第一世は其の專制帝國の中にドウハボルと云ふ自由自主團體の存在を許す事が出來なかつた。それに兵役の問題に就いて絕えず何にかの紛擾が起る事から、猶更此の宗派に敵意を持つようになつた。

一方ドウハボルの方でも、一切の暴力を否定すると云ふ思想と意志とが、益々明かにされ且つ固められて來た。たとへば、一八二九年のトルコとの最初の戰爭の際に、ヴオラゴドスクの聯隊が一大決戰を試みようとした事があつた。然るに此の聯隊内の數十名のドウハボル教徒が斷乎としてそれに與かる事を拒んだ。そして此の教徒等は、兩軍の戰線の間に突つ立たせられてロシア軍とトルコ軍との十字砲火をあびせかけられて讃歌を歌ひながら虐殺されて了つた。

ニコラス一世は、曾つてドウハボル教徒等に與へられた土地を削つて、彼等に對する極めて嚴重な處刑令をつくつた。そし

て多數の教徒をシベリアの極寒地方へ追放した。しかしそれでも猶不充分だと云ふので、遂に一八四一年に、モロチニアヴオデイのドウハボル等を總てコオカサス地方へ逐ひ拂ふ事にした。コオカサス地方は、新開地になつたばかりで、まだ徴兵令が布かれてなかつた。

當時ロシアには、モロチニア・ウオデイの五千の教徒の外に猶彼地此地に散らばつてゐる三千ばかりのドウハボルがあつた。彼等は皆な、一八四一年から一八四五年の間に、一團づゝコオカサスのモクリア・ゴオリ高原地方に送られた。

此の高原地方は、海拔五千尺の、酷烈な氣候の不毛の土地であつた。

老人の多くは、嘗つて未耕の地方に移住して、直ぐに自分等の勞働で富饒な田畑をつくり上げた記憶を持つてゐる。それに彼等は、神に選ばれた人々として、常に神の保護を受けるものと信じてゐた。よし石の上に種を播かなければならぬ事があつても、必ず立派な收穫があるものと信じてゐた。しかしこんどの新追放地は到底耕作の出來る土地ではなかつた。彼等は其のお得意の農業を斷念しなければならなかつた。

幸ひに此の高原地方は牧草に富んでゐた。彼等は直ぐに家畜の飼養を始めた。そして其の團結と、其の精力と、其の忍耐とのお蔭で、忽ちの間に幾つかの繁昌な新牧畜村をつくり上げた皆んなは、其の財産を共同にして、共同して働き、共同して富を集めた。

近隣のマホメツト教徒等も、彼等を敵視する代りに、却つて敬意を寄せた。彼等の柔和と勤勉とは此等の土人を心服させるに十分であつたのだ。彼等は、正統派の人々を其の近村に持つたモロチニア・ヴオデイの植民地に於けるよりも、却つて此の新追放地の方が氣樂に感ぜられた。此處では、彼等を見張つてゐる下廻りの役人の外には、別に恐ろしいものもなかつた。しかし此の役人等とも、其の富を利用して出來るだけ衝突を避けた。

そして此の安樂な生活と共に、政府との交渉も餘程穩やかになつた。一八七七年のトルコとの戰爭の時には、道路をつくつて軍隊輸送の便を謀つたり、傷病者の看護をしたり、パンを燒いたりなどして、男も女も隨分政府の爲めに盡した。

カプウスティン家は依然として彼等の間の權威であつた。カプウスティンの曾孫ピヨトルが死んだ。子がなかつた。遺言によつて、其の妻のルケリア・ワシリエフナが其の後繼者になつ

た。策略もあり又熱誠もある女丈夫であつた。信徒から其の手に集まつて來る多額の金をふり播いた。役人とも極細心に又巧妙に掛引した。信徒等は喜んだ。そして『どんな病氣にかゝつても、又どんな災難が來ても、きつと彼女は其の子供等を救つてくれるに違ひない』と云つて、其の惠みを讃めたゝへた。

ドウハボル教徒等は、コオカサスに移住して以來の其の生活の安樂から、本來の嚴重な道德を餘程緩めて來た。享樂の味を覺へて來た。煙草や酒を絕對に禁ずる事を其の道德の一つと認めないものまでが出て來た。婚姻と云へば、只だ相愛する二人のものゝ結合に過ぎなかつたのが、酒宴や奢侈の口實になつた。ルケリア・ワシリエフナは此の墮落を慨いて、熱心に其の教義の尊嚴を說いた。信徒等もそれに服した。そして益々彼女を尊敬した。『ルケリアは讀む事も書く事も出來ないが、吾々の宗派を其の本當の道に導いてくれた。ルケリアの支配以來、ドウハボルの中から事を裁判所に訴へ出るものが一人もなくなつた。人の物を盜んだり人を殺したりして監獄に入れられるものが一人もなくなつた。人の門口に立つて物乞ひをするものが一人もなくなつた。』

斯くして彼等が『其の本當の道に歸る』と共に、更に熱烈に彼等の宗教心を煽つた一事件が起つた。そして再び受難の時代が始まつた。

一八八六年十二月二十六日、ルケリア・ワシエフナが死んだ。彼女は其の晚年にピヨトル・ヴエリギンと云ふ賢明なそして敬虔な一青年がドウハボルに、其の宗派の支配を助けさせてゐた。彼女は此の青年に首領としての勤めを稽古させてゐた。そして彼女は幾度か彼れを其の後繼者とする意志を公然發表した。從つて彼女の死と共に、教徒の大多數は此のピヨトル・ヴエリギンを其の首領として仰ぐ事にきめた。然るに其處に一と騷動が持ち上つた。

當時彼等の植民地は隨分富裕なものであつた。養老院の共同資本だけでも五十萬ルウブルに達してゐた。そこでルケリアの兄弟のグバノフと云ふのが、普通の民法に從つて、自分が其の相續者であると云ふ事を主張し出した。そして裁判所に訴へ出た。教徒は二派に分れた。幾年かの爭論の後に遂に裁判官は少數のグバノフ派の勝利に歸した。

多數派のドウハボルは、事の曲直を裁判所に爭つて、其の教義に背いた事を後悔した。此の事件を神から下された試みとして受けなかつた事を悲しんだ。そして、新たに十萬ルウブルの新資本を集めてそれをピヨトル・ヴエリギンに委托し、お互ひの私有財產を平等にして、更に嚴格な教義通りの生活に歸つ

た。

ピヨトル・ヴエリギンは煽動者としてアルハンジエル洲のカラへ追放された。教徒の崇拜は益々高まつた。そして彼れは、其の追放地から、彼等の新運動を指揮してゐた。彼れは更にシベリアのオブドルスクに移された。そして途中のモスクワで二人のドウハボルの見舞を受けて、其の傳言を授けた。財産の共有、宣誓の拒絕、殺生禁斷、從つて肉食と兵役との忌避、これが。ピヨトル・ヴエリギンの其の信徒等へ云ひ送つた、勸告であり、又命令であつた。

一八八六年以來、コオカサスに徵兵令が布かれた。ドウハボル教徒等は、心ならずも、形式だけは此の法令に從つてゐた。ヴエリギンは、其の信徒等に、彼等の所有する一切の武器の破壞を勸告した。

五

一八九五年六月二十八日から二十九日の夜にかけて、即ちピヨトル・ボオルの聖日の前夜、世界の歷史に唯一な一事件が、コオカサスのドウハボル村の間に起つた。

彼等は自分等の持つてゐる武器と云ふ武器を總て燒却して、如何なる迫害に遭つても、無防禦であり無抵抗である事を表白しようとした。彼等は先づ此の聖日を選んでピヨトル・ヴエリギンの祭をした。そして、同時に其の計畫の實行に取りかゝつた。

カルスでは、老人等の計略で、警察の眼を眩ます爲めに四ケ所に燒場を設けて、其の中どれが本當の燒き場かと云ふ事は、仲間のものにも秘密にされてゐた。で、其の計畫も無事に行はれた。

イエリザフエトポル州では、警察の干涉はなかつたが、事が大ぶ悲劇的に行はれた。皆んなが、人類の爲めに有益な一大事を決行するのだと云ふ自覺を持つてゐた。其の事件が『全ロシアに、全ヨオロツパに知れ渡る』事を望んでゐた。

アテイフリス州のアハルカラキのドウハボル等は、矢張りそれと同じ考へで、彼等が平素聖場のやうにしてゐる洞窟の前に集まつた。グパノフ派の村民等は何にか自分等に復讐の企てでもあるのかと思つて、驚いて官憲に密告した。ヴエリギン派のドウハボル等は、小刀の外の一切の武器を集めて、それに二十車の石炭と焚木とを積みあげて、石油を注ぎかけて火を放つた。

『まるで晝のやうに明るかつた。やがて恐ろしい爆發の聲が始まつた。火の中の多くの鐵砲には彈丸がこめてあつたのだ。其の鐵砲の持主等は皆んなに遠う退いてくれと賴んだ。しかし誰

れも承知しなかつた。不思議な事には、一人も其の彈丸で傷ついたものはなかつた。皆んなは祈禱をあげて讃歌を歌つてゐた。そして朝になつて分れ分れに村に歸つて、何事かを待つてゐた。』

此の洞窟から一里ばかりのグバノフ派の住んでゐるオルロフカ村では軍隊に動員令が下つてゐた。

七月三十日、ドウハボル等は再び燒場に集まつた。州知事は彼等をボフダノフカの自分の前に來るようにと命じた。彼は答へた。『私共は今祈禱をしてゐるのです。どんな命令があつても、此の祈禱をやめて、それに從ふ事は出來ませぬ。』最初の使に續いて第二の使が來た。ドウハボル教徒等も、祈禱が濟んだら、知事のところへ行く事にきめた。突然其處へカザツク兵が飛び込んで來た。鞭や棒杭でめつた打ちに毆りつけた。群集の中程にゐたものは自ら進んで前列に出た。遂に彼等はボフダノフカへ引きづられて行つた。女等もそれに隨いて行つた。カザツクはそれを男等を引き離さうとした。女等は何處までも其の兄弟等と一緒に行くと云つて聽かない。毆りつけられる。益々叫んで止まない。遂にカザツク等も放任つて置くより仕方がなかつた。

ドウハボルは途々讃歌を歌つて行つた。ホフダノフカの近くに來ると、知事がやつて來た。カザツクはドウハボル等に脫帽を命じた。彼等は應じない。再び慘劇が始まつた。『草が血で赤くなつた。』

知事は『若し皆んなが、グバノフ派のドウハボルのやとにお上の云ふ事を聽けば許してやる』と云つた。再び彼等は應じない。知事は卽座に銃殺すると云つて脅かしつけた。カザツクは構へ銃をした。ドウハボルは動かない。遂に彼等は其の村に送り返された。

二百の兵士がドウハボルの村々に派遣された。彼等は凌辱と掠奪を恣にした。教徒等は少しも抵抗しない。其の一人のもと兵士であつたワシア・ポスニアコフは、士官に敬禮をしなかつたと云ふので、二週間身動きも出來ない程にひどく毆られた。女共は逃げ隱れに。或る村では、夜になると皆んな穀物倉の奥に身を潛ませた。

しかし、さうまでしても少しもドウハボルの決心が鈍る樣子も見えないので、政府は一策を案じ出した。卽ち最も頑固らしく思はれる四百六十四家族を、アハルカラキ村からゲオルギ地方に追放して、一村に二三家族づゝ置いて其の間の交通を禁じた。

一坪の田地もあてがはれてゐない彼等は、日傭取りの仕事でもする外に仕方がなかつた。それでも彼等は、金持の爲めには極く安い賃銀で、貧乏人の爲めには無報酬で、よく働いた。或日、一人の村民が麥を打つてゐる間に病氣になつて倒れた。雨が降りかゝつてゐた。それを見たドウハボル等は、代りに其の麥を打つてやつて、倉の中に藏いこんで、其の男のお禮を云はうとするのを見向きもしないで行つて了つた。又或時、村民の一人がドウハボルの馬を盗まうとした。ドウハボルはそれを見つけて聲をあげた。村民はうろたへて立ちどまつた。『待てと云つたのは、お前さんが此の馬を盗んだのだと思つちやいけないといふ事を、一と言お前さんに言ひたかつたからだ。』此の馬がお入用なら持つて行くがいゝ。』村民は默つて其の馬をもとの厩へ連れて行つた。

彼等は又、お互の事にも、極く深切で思ひやり深かつた。彼等の中の誰れかゞ……に應じたと云ふ話を聞けば、嘆きはするが、しかし其の若者の事は憐んだ。『可哀相な男だ。今までも隨分苦しんだのだ、が今からはもう一層苦しまなくちやなるまい。』

貧窮の上に病氣が來た。恐しい壞血病と眼病とが襲ふて來た。肺がぼんやりと霞んで、白い……で掩はれる。斯くして三年の間に、四千人ばかりの間から一千人の生命を奪はれて了つた。

其の村に殘つてゐたドウハボルも隨分と苦しめられた。其の村々は忽ちの間に疲弊した。しかし彼等は、自分等の義務だと思ふ事には、相變らずの不屈不撓の精神を保つてゐた。誰れかをピヨトル・ヴエリギンの許に見舞にやらうと云ふ相談が起つた。そしてイワン・オブロシモフと云ふ男が其の任に當つた。彼れは一八九六年五月廿四日に其の村を出た。兄弟等は、旅費の殘りをヴエリギンに送るようにと云つて、二百五十ルウブルを與へた。彼れはオブドルスクから三百里ばかり行つて捕まつた。旅行劵を持つてゐないと云ふので監獄におし籠められた。持つてゐた金も、出來るだけ多くヴエリギンに渡さうと思つて儉約に儉約を重ねて來た甲斐もなく、沒收されて了つた。そして一年の後に漸くコオカサスに歸つて來た。『私はピヨトル・ヴエリギンに會ふ事が出來なかつた事を仲間に報告した。するとこんどはアンドロソフが送られた。これも途中で捕まつてカルスに送り歸された。更に三人目の使が出た……誰れかゞ終ひには行き着くに違ひない。吾々には、十一年以來牢にはいつてゐる罪もない一人の人間の事を、忘れたり放棄つたりする權利が

ない。』

……の爲めに懲治隊に送られるものも續々として出た。そして其の中での最も頑固なものは更にヤクトスク地方へ追放された。

六

遂にドウハボル等は、ロシア國内に生活する事が出來なくなつて、國外に移住する外に仕方がなくなつた。ピヨトル、ヴエリギンもそれに同意した。そしてイギリスやアメリカのクエカア教徒や、トルストイなどの同情者が現はれて來た。

ピヨトル・ヴエリギンは其の追放先きで始めてトルストイの存在を知つた。其の作物を讀んで感激させられた。トルストイの方では其の以前から彼等の運動及び殊に最近の受難の有様はよく知つてゐた。一八九五年に、自ら其の實状を視察するために、コオカサスへ出掛けて行つた。そしてそれ以來、其の文章や金錢によつて彼等を助け、又友人としての忠告もするようになつた。ピヨトル・ヴエリキンも、トルストイの作物を讀んで以來、絶えず彼れと音信を交はすようになつた。

ヴエリギンは皇后アレキサンドラ・フエドロフナに一書を送つて、皇帝がドウハルボの外國移住を許可するように骨折を願つた。此の請願書と云ふのが頗る奇妙なものであつた。クエカア流に、皇后の事を『お前さん』と云ふ風に呼んでゐる。皇后の尊貴と云ふやうな事は少しも念頭に置かれてゐない。しかし極く丁寧には書いてある。卽ち其の教義に從つて、彼女の人間としての品位は十分に尊んでゐる。自分等の地位に就いての悲嘆もなければ、又迫害者に對する批難もない。總てが只だ人間としての慈愛に訴へたものであつた。

しかし此の請願書には何んの結果もなかつた。長い間其の事は皇后にも秘密にされてゐたのだ。然るに一八九七年に、皇后が其の子の病氣見舞にコオカサスへ來た。ドウハボルは此の機會を利用して、同じ意味の請願書を皇后に呈出した。そして遂に。翌十二月、再びロシアの國境内に歸らないと云ふ條件の下に、國外への移住を許される事となつた。

ドウハボルは非常に喜んだ。そして以來からいろいろと同情してくれたクエカアに助けを乞ふた。クエカアは直ぐにロンドンに『フレンド協會』を設けて寄附金を集めた。トルストイも『ドウハボルの爲めに訴ふ』と云ふ檄を飛ばした。斯くして忽ちの間に三萬ルウブルばかり出來た。ドウハボルの方でも四萬七千ルウブルをつくつた。

しかしまだヴエリギン派の信徒を皆んな移住さすには金が足

りなかつた。そこで先づ其の中での一番困つてゐるものだけをイギリスの何處かに送る事にきめた、サイプラス島がよからうとなつた。これより先き、フレンド協會への代表者としてロンドンに派遣されたピヨトル・アホトとイワン・イキンとは、此の島を訪ふて見て、其處はとても駄目だと云つて來た。しかし皆んなはもう此の上待つ事が出來なかつた。一千百二十六人のドウハボルは、最後の家財家具を賣り拂つて、ベトウムに集まつた。ロシヤ政府は此の移民等を捕へて滿洲へ追放する、と云ふ風評まで立つた。皆んなは大急ぎでイギリスへ發つた。

果してサイプラス島は駄目だつた。着くと直ぐに彼等の多くは熱病に惱まされた暑い熱不健康な土地だつたのだ。彼等は更にクエカアに手紙を送つた。『吾々が此處に落ちつく爲めにもう此の上澤山な費用をかけて下さるな。そして若し其の費用が出來るなら、もつと吾々の生活に適した何處かへもう一度移して貰ひたい。うはさに據ればカナダがいゝと云ふ事だ。――尤も吾々の仲間はまだ多勢コオカサスに殘つてゐて、其處で苦しみぬき困り切つてゐる。で、先づ其の人達の方の御心配を願ふ。』

コオカサスに殘つてゐるドウハボルの中には、ゲオルギ地方の村々に散らばつてゐる、本當に苦しみぬき困り切つてゐる二千あまりのものがあつた。先づそれを救はなければならない。そして其の費用はトルストイのお蔭で出來た。

當時トルストイは、『アンナ・カレニナ』樣の全くの想像で捏ね上げる作風を放棄して、其の新藝術觀に據る長篇『復活』を書きかけてゐた。彼れは其の草稿を未完のまゝで賣つた。トルストイがチエルトコフに送つた手紙の一節に云ふ。『曾つて私の「カザック」と云ふ小説の時にも矢張りさうだつた。私は其の完結を待つ事が出來なかつた。當時私はカルタで大損をして、其の負債を拂ふ爲めに、此の小説を或る新聞社へ賣つた。しかしこんどは其の理由はもつと遙かに高貴なものだ。』猶トルストイは幾多の短篇小説を外國の諸新聞に發表した。そしてその收入の全部をドウハボルに献げた。其の外にも多額の金を友人の間から集めた。

カナダは移住には最上の土地であつた。土地は肥えてゐる。地價は安い。それにカナダ政府は、ドウハボルの信仰の自由を尊重して、兵役も免除すると約束した。

一八九八年十二月、フエカア等は一汽船を傭入れて、二千六百人のドウハボルをカナダに送つた。更に翌年一月、第二の汽船によつて、先づロシアからの一千七百人を、次ぎにサイプラス島から一千人餘りを送つた。此の費用はクエカアとロシアの

或る二人の貴婦人とが受け持つた。そして最後にカルス州からの二千八百十八人が、自分達の費用でカナダに渡つた。

斯くして一八九九年の夏には、カナダに七千人餘りのドウハボルが集まつた。そして其の中の一千四百人はサスカチエワン河附近のアルベルタに、他はヨオタウンとスワン河との間のアシニボイアの南北の二箇處に、各々の植民地を構へた。

カナダには擴大な未墾の土地があつた。政府はドウハボルの寡婦と十七歳以上の男子とに各々百六十エクルの土地を與へた。それに四方からの援助もあつた。汽船會社はカナダ政府から受取つた移民一人に五ドル宛の金を移民委員に返して寄越した。斯くしてドウハボルの共同金庫の中に三分五千ドルの金がはいつた。フイラデルフイアのクエカア等は牛馬だの鋤だの種子だのを送つて來た。トルストイも五千ドル送つて來た。其の他、スキツルやイギリスやロシアから、個人としての寄附が大分あつた。

しかしドウハボル等は、此の寄附金でいつまでも生活して行く事も出來る、又それを望みもしなかつた。彼等は直ぐに勇敢に仕事を始めた。畑をつくつたり家を建てたりするだけでは足りない。毎日の生活の金もとらなければならない。男はそとへ鐵道や坑山や小作の仕事を求めに出た。女はうちで、家を建てたり、鷄の世話をしたり、自ら鋤を引いて耕したりした。食物は不十分だ。或る村では三週間鹽がなかつた。馱獸のやうな仕事の後に、其の精力を恢復する爲めの食物と云つては、往々パンと水としかなかつた。一八九九年から一九〇〇年にかけての冬は隨分嚴しかつた。それに病魔が襲ふて來た。樂はなかつた。

七

が、其の翌年の冬からは、其の生活も大ぶ樂になつた。家の數も增えて。借金も減つた。と同時に、其の生活方法を變へる必要が生じた。皆んなが一二塊になつて大きな村に集まつてゐる事が不便になつた。あちこちに少さな村が出來た。或る處では一と家族づゝ別に分れた。と同時に又、其の道德にも多少の變化が起つた。

アシニボイアの一ドウハボル・ニコラス、ツイバロフが一九〇〇年十一月に次ぎの如く云つてゐる。『吾々の生活は神のお蔭でだんだん善くなつて行く。物質上の缺乏もあまり感じない。要るものは得られる。……然るに靈魂の生活に於ては、吾々の間にはもう昔しの結合がない。或者は神の教を棄てゝ、自分自身の思ふまゝに振舞つてゐる。……確かにやがて吾々の間に分裂が來るだらう。』

實際、此のドウハボルの中でも、自費で渡航して來たアルベルタの植民等の間には、餘程其の宗教的感情が薄らいでゐた。しかし、先方にコオカサスで最も苦しんで、やがてサイプラス島へ絕望的移住を企てたもの等の間には、まだ其の宗教的感情が盛んに燃え　ゐた。ニコラス・ツイバイフは重ねて云ふ。『吾々の間には、全くキリスト敎的に生活して、キリストの敎へを外面だけではなく內心から守つてゐる人々がある。しかし吾々の間の多くは、此のカナダムに移住して來て以來、確かに全く變つて了つた。永遠の生命などゝ云ふ事を考へなくなつた。長老の一人の極く富裕なワシリ・ポボパは、皆んなが怠惰や睡眠に耽らないように、傲慢や憎惡に陷らないようにと、泣きながら說敎してゐる。』

トルストイも、彼等が平穩無事な生活の誘惑に負けないやうにと、切りに勸告した。そして彼等が、一緒に勞働して一緒に同じ生活を送る事をしないで、別々に離れて生活してゐる危險を說いた。

やがて其の反動がヨオクタウン附近のドウハブルの間に起つた。一九〇〇年六月、『ユニヴアサル、ブラザアフウド會』の委員から、植民地の制度に關する次ぎの意味の三條の改正をカナダ政府に請願した。

一、私有財産は『明かに神意を侵害する』ものである。故に吾々ドウハボルは、カナダ政府がインディアン族に施行してゐるが如く、土地を個人的に分配せずして一とまとめに讓與せられん事を請願する。

二、婚姻は『男と女との精神的索引の純粹な感情によつてのみ』正當のものである。これを民事の記錄の上の登記に變へて了ふのは、同じく又神意の侵害である。故に吾々ドウハボルは、『神と良心との領域內のものである此の夫婦的結合に關して、何等人爲的制度の下に』置かれざらん事を請願する。

三、民事の記錄に出產や死亡を登記するのも、同じく又神意の侵害である。『天に在す父は、何者を此の世界に送て、何者を此の世界から退けたかを、よく知つてゐる。此の神意のみが人間にとつての必要に且つ肝心なものである。

トルストイの忠實な弟子であり、且つドウハボルの移住委員の一人として熱心に彼等の世話をしたアイルマア・モオド氏は、彼等に忠告して、カナダ政府の要求する其等の小形式が決して彼等の信仰の自由を碍げるものでない事を說いて聞かせた。しかし彼等は一歩も讓らない。彼等は答へた。『嘗つて吾々は、ルケリヤの相續に就いて、法廷に爭つて、神の掟を人爲の制度の

犧牲にした。そして其の結果、容易に恢復する事の出來なかつた良心の攪亂を來たした。』

翌年一月、カナダ政府はドウハボルの此の請願を拒絕した。『法律はカナダの一切の住民に同一のものである。萬民が等しく負はなければならぬものである。ドウハボルの爲めにのみそれを變更する事は出來ない。』

ドウハボルは再び請願書を呈出した。『諸君と吾々との間には、生活の意義及び目的に就いての意見の相違がある。從つて政府が吾々の希望を滿足すべし、其の法律が吾々の生活の中に侵入するのを制限する事は、吾々が………を吾々の生活の指導者として仰ぐのと同樣の困難であらう。…そこで吾々は、吾々の定住すべき他の土地が見出されるまで。若しくはキリスト敎に基づく生活を送らうとする者には此の地上に棲息する餘地がないと云ふ事が吾々に分るまで、暫く此のカナダにとゞまつてゐる事を許していたゞきたい。』

政府は此の無益なうるさい問答に終りを告げようと思つた。そして七月に、ドウハボルがモオド氏やクエカア等の滿腔な忠告に反對する事の遺憾な旨を述べて、直ちに其の與へられた土地を受取るべき事を促した。『若しさうしなければ、此の土地をあけて置く譯に行かない。ほかのものをやつて住まはせる。』

それでもドウハボルは頑として聞かない。『どうしても一人一人の名で土地を登記しようと云ふのなら、さうするがいゝ。…しかし吾々には土地は分割する事の出來ないものなのだ。…吾々は皆んなが一軒の家のものゝやうに生活する。』

斯くして遂にドウハボルは、此のカナダで其の希望する絕對的獨立を得る事が出來ないで、『人類に訴ふ』と云ふ一文をあちこちの同情者に送つた。彼等が其の良心の掟のまゝに生活し得る所があつたら何處でもいゝから知らしてくれ、と云ふ事を依賴したものであつた。が、何處からも何んの反響もなかつた。

八

其後此のドウハボル等は何處へ行つてどうなつたか。それは正確には分らない。カナダからの報道も、甚だ不完全なもので、往々矛盾もあり、又其の多くは或る小團體に就いての消息で、それによつてドウハボル全體の其後の生活を知る事は出來ない。

尤も多くのものは比較的に自由なカナダ政府の制度に妥協したらしい。勿論ほかの何處へ行つても、これ以上の善い國はあるまいと考へて、其のとても實現されさうにない夢想の幾つかを棄てゝ、其處に定住したらしい。

しかし他の多くのものは、個人の資格で土地を貰ふ事に飽く

までも反對して、遂に南アメリカや其他の諸國に移つて行つたらしい。此のドウハボル等の其後の消息は殆んど全く分らない。

たゞ一九〇三年一月に、ドウハボルの或る一團體から出た、トルコ皇帝への次ぎの如き手紙が發表された。

『陛下よ。吾々は陛下の好意に訴へる前に、先づ吾々自身に就いて語る。吾々は、一八九八――一八九九年に、七千人の同胞と共に、ロシアからカナダに來たものである。吾々は此のカナダが宗教的自由の國であると聞いてゐた。しかしそれは間違ひであつた。成程カナダは或る程度の自由はある。しかしそれは吾々の求めてゐた自由ではなかつた。

『吾々は神が此の世界を支配するものと信ずる。神の命令…………………………………………………………………………吾々は神の臣民である。『カナダで吾々の信仰のまゝに生活すると云ふ希望は外づれた。尤も兵役には免れた。武器を携へる事と、同類の生命を侵す事とは、吾々の禁斷である。しかし其の他の一切に於ては、吾々は神の臣民ではなくイギリスの臣民たらしめられようとした。カナダの法律と規則とに從はなければ土地も與へられない。

『吾々は神の前で誓つた。それは吾々には不可能の事である。吾々は寧ろ、吾々の……………………………いと。

『そこで、今吾々は陛下の好意に訴へて、吾々の家族及び吾々の子供に憐憫を垂れ給はん事を、皇帝としてのみではなく殊に人間としての陛下にお願ひする。吾々は、此の地上に於ける神の漂浪者として、陛下に乞ふて陛下の大帝國の中に一避難所を求めたい。

『吾々は只だ、陛下に一隅の土地を求めて、…………………………………………………られる事もなくして、其處で吾々の手で勞働して行きたい。

『猶附加へて云ふ。吾々は肉も乳も卵も食はない。吾々の食物は只だ野菜と果物とのみである。生けるものゝ總てに自由を與へんとする吾々には、人間にのみならず、動物にすらも害を加へる事は出來ない。吾々は何等の家畜をも使用しない。吾々の一切の勞働は吾々自身の手から出る。

『されば吾々は、家畜を使用せずして耕作し得る土地を陛下が吾々に下し給はんことを願ふ。吾々は其の土地を吾々の生存の爲めに田畑と菜園とに開拓する。

『吾々の爲めの好意を陛下の御心の中に注ぎ込まん事を吾々は神に訴へる。そして吾々は、吾々の此の願ひが利害によつてゞ

はなく、たゞ神に忠實ならんとする渴望から出たものである事を神に誓ふ。』

ピョトル・ヴェリギンは、一九〇二年にシベリアでの其の刑期を終へて放免され、翌年一月ロンドンで講演會を開いた。

ヴェリギンが再びドウハボルの運動の牛耳を握るようになるか。それもまだ分らなかつた。彼れ自身も嘗つて彼等の間に持つてゐた其の勢力が今どうなつてゐるか知らなかつた。『私はもう十五年間も兄弟等を見ない。彼等が今猶私の言葉を聞きたがつてゐるかどうか分らない。』

しかしヴェリギンの主張と其の行動とは、ドウハボルの運動の上に更に新しい活氣を齎らした。彼れは其の兄弟等はカナダ政府の處置に飽くまでも反對しなければならぬと說いてゐる。私有財産や、民事的婚姻や、出産死亡の登記に就いても、一切の讓歩を斥けてゐる。そして絕對的貧窮が精神的自由の必須條件であると認めてゐる。

尤も彼れ自身は云ふ。『私はドウハボル村の只だの一員に過ぎない。』彼れは其の兄弟等の上に自己の何等の權威をも認めてゐない。其の教義の神髓は、人間が人間の上に持つ一切の權力の否定にある。

※先年、ザアの政府が倒れてケレンスキイ内閣が立つた時、オッタワ來電として、西部カナダにある約一萬のドウハボルが、革命の成功を機會として本國に歸化したいと願ひ出た、と云ふうはさがあつたが。そしてロシアの新政府はそれを許したと云ふ事であつたが。果して其後はどうしてゐるか。

星より星への通路

賀川豊彦

七月の暑い日の夕刻私は遂に捕はれて縲絏の身となつた。

五人の刑事が私一人を自動車に乗せて警察署に運んだ。七人の監禁者を追ひ出して私一人を留置場に入れた。南京虫の多く出る古い、古い留置場の建物の中に、私は蓆を敷いてそのまゝ疲れた身體を横たへた。

然し私は遂に空想の子であつた。

私は凡ての現實を忘れた。私は捕へられたことに就て何等悲しまなかつた。たゞ捕へるものの正義の觀念の乏しいのに就いて泣いた。然しそれも束の間であつた。

私は矢張り空想の子であつた。私の牢獄は直に王宮に變り私の空想は、私を星の世界の子にして了つた。何と云ふ無策なことであらう空想の子を縛ると云ふことは。天の使は私を守らずとも、私を守る空想の翼は、私の爲めに牢獄の鐵扉を打破り、看守の見て居る前で、天空に押し上げてくれる。

私は光明の子となつた。獄は水晶宮に變つた。凡てが光源である。木から、鐵棒から、蓆から、隅の便器

から光がさしてくる。凡てが發光體である。私は全く光に溺れて了ふ。牢獄は光明に包まれて、看守等は私の姿を見失つた、エリシヤの火の車がイスラエルの兵團を取り卷いて、敵には見えなくなつたように、今も、エリシヤの火車が私を取り圍む。

光明に惑溺した子は、天軍の火車に守られてゐる。私に涙のある可き筈なく、私に憂のある可き筈が無い。使徒パウロは牢獄の眞夜中に讃美歌を高唱したと云はれてゐるが、七十餘回の演説會に、全く聲を嗄らして了つた私には、讃美歌を唱ひたくとも、聲が無かつた、然し私は耳底に殘る幾萬の勞働者が踏み鳴らした大示威行列の日の歩調の音と、囚れた日の朝、神戸市街の凡ての交通を止め激動した壹萬數千人が突喊した時の鬨の聲を聞く。私はあんな嚴粛な讃美歌を聞いたことは無い。それは喉から出た聲ではなくて、骨の節々が絶叫した交響樂であつた。あの交響樂に比較するならば、世界の凡ての交響樂は無きに等しいものである。私は善き日に生れた。私は肉聲と骨の節々の交響樂を聞いた。

それにあれ、猶、私の眼の前にちらつくのは、生田の森から驅け出した菜葉服とカーキー色の勞働者が一目散に下へ下へと走るあの莊嚴な光景である。恰度旭日が勞働者の肩を照らしてゐた。その數一萬三千人と云はれた勞働者の密集部隊がたゞ一筋に驅けてゐるのである。走る爲めに肩が搖れる。それで肩に反射した太陽の光も搖れて、高くから見てゐた、私には潮の小波に光が反射してゐるようにみえた。私はあんな莊嚴な光景を未だ嘗て見たことが無かつた。それは日本アルプスの高峰より嚴粛に見えた。一人の人間が偉大であるのに、萬人の生産者が、解放の日の爲に驅け出した。その光景は何とも云へぬ嚴粛な偉大なものであつた。

之が紀元前二十世紀であつたなら、必ずや奇蹟の一つや二つは起つた筈だ。

あの驅け出したは、出埃及の日のイスラエル人の驅け出した模樣と全く同じであつた。雜馬から驅け出し

たスパルタカスの奴隷の一團と同じ模樣であつた。

それは、清らかな朝であつた。光明の日であつた。驅け出し(エキソダス)の日であつた。そうだ、奴隷の國より自由の國へ、壓制の國より、解放の國へ、暗黑の國より、光明の國へ――驅け出す日であつた。太陽は彼等に笑顏を作つた。天使ミカエルは戶每を見て廻つた。奴隷イスラエルの解放を肯ぜざるものゝ凡ては長子を失つた。奴隷の解放を肯ぜざるものは次の時代を見る必要が無いからである。

火の柱は立つた!イスラエルは荒野に出た!

雲の柱は立つた!イスラエルは紅海を越えた!

凡てが驅け出しの日の爲めに備へられた。ヨシュアの上に太陽が一日止つて動かなかつた。それは奇蹟の日であつた。

凡てが奇蹟でないか!凡てが解放の爲めではないか!パロと、資本家と、魔術師と後から追つかけてくる騎兵を向ふに廻はして無手で戰ふ戰ひでは無いか!

私は神戶の街にイスラエルを見た。彼等は荒野に彷徨してゐた。四十日四十夜、彼等は荒野に彷徨した。彼等にはマナも鶉も降らなかつた。倫敦からは一通の電報も來なかつた。解放より肉鍋の味の善かつたことを思ふ連中は、エヂプトの主人の家に歸る歸ると云ひ出した。そして四千人は歸つて行つた。エヂオン・ギベルから迂廻して蜜と乳の流るゝ國に近き、カデシから約束の土地をのぞいた人々はまた追ひ返された。そしてイスラエルの士師達はみなアラメク人に蹴散らされた。スパルタカスは再び囚れた。雜馬からカピアアに到る途に六千人の首がさらされた。

同じ日が我等の上に昇つた。

監獄行の自動車が走る。窓に鐵棒を入れて鎧戶で圍はれた貨物自動車が私を乘せて走る。狂ひのように走

る。疲れ切つた、私は自動車の震動に吐きそうになつた。それでも牢屋からついて來た「光明」は此處にもついて來てゐた。

裁判所で調べられ夜の十二時過ぎに未決監の獨房に入れられたが「光明」はそこにもついて來た。夜は月と星とが祝福してくれ、晝は太陽と監房の前の鷄頭の青葉が祝福してくれた。面壁して靜座すると壁が私を祝福してくれた。壁は幕のように、私の前に卷き上り、私はお伽噺の國に住んでゐるような氣がした。一冊の新約聖書の差入があるまで四日半日、私は冥想した。何と云ふ甘い冥想であらう。

私は自由に星から星の世界に濶歩した。私は不思議國のアリスのように、海鱸と蝙との會話するのを聞いた。海鱸は空腹だと蝙に云ふた。蝙は親切に、海の中に餌を取りに行つた。海鱸はそれをみな食つた。それでもまだ足らぬと云ふた。そして『お前が食ひたい』と云ひ出した。蝙は生田神社前から海の方へ逃げ出した。後から海鱸はそれを追つかけて行つて、それをみな食つてしまつた。

壁は幕のように私の前に卷き上つた。そして私は凡てがお伽噺の世界であることに氣がついた。私は不思議國のアリスのように、トヰドルデーと、トヰドルダムの雙子が喧嘩してゐるのを見た。烏が鳴いたと云つて喧嘩し鼠が走つたと云つて喧嘩してゐた。査公は用事が無くて困つてゐたので兄キのトヰドルデーから一食七十錢の辨當を食はして乞つて兄キに加勢をしてゐた。馬子が暴れ馬を取り逃がしたので喧嘩は中止になつたが、次の烏が啼く時にはまた喧嘩するのだと云ふてゐた。

壁は幕のように私の前に卷き上つた。そして私はアリスのように不思議なことを見た。トランプカルタのスペードとクヰンが威張つて裁判廷を開いてゐた。よく見たら矢張り紙で作つたカルタであつた。

壁は私の前に卷き上つたり、卷き下つたりした。牢獄は私には全く無意味であつた。私は星から星に、不思議國から不思議國に自由に飛び舞ひ彷徨ふた。

私を守護する天使ファンタジーは、私を温い抱擁をもて、地球の成育からロシア革命に到るまでの遊星としての地球の歴史を實際に見せてくれた。

私は木星と火星の間を三度往復した。ヘラクルス星座からセンタウリ星座までは十三遍往復した。オライオンには一日寝むり、ドラゴン星座には十三日檢束せられてゐた。それは私が何故に神の如く全能で、下に流れる大川の水を逆に流し得なかつたかと云ふ理由によつてであつた。

然し星より星の通路は凡て安全であつた。私は地球表面に於ける如く三人の尾行を連れる必要が無かつた。それは飛行器の用も無く、一直線に飛ぶ必要も無かつた。私はたゞ空想の翼に乘つて、或る時は楕圓線上に、或は拋物線上に、いや私は線と曲率と角の凡てを無視して、第五元の世界に突入した。私は第四元の世界の『時間』にも制肘されなかつた。私は『成長』の世界——即ち第五元の軸を探りあてた。そして成長元の、不可思議な奇蹟のやうな擴がりも幅も無く、たゞ大きくなる力の世界の軸が全く線と角に關係の無いことを發見して線と角と定規と尺度とを蹂躙して靈域を驅け廻つて來た。

そして八月十一日の午後九時半頃、天の使はまた、私を第五元の世界から、私を第三元の世界に引ずり落し、星の世界から追放して、楠公社の西門に立たせた。空想はまた暫時、私を離れることとなつた。地球に最も近いセンタウリ星座から、歸つてくると、地球は相も變らず、夏の暑い所で、日本は矢張り狹い所であつた。

然し、私はよく知つて居る、私の道は矢張り星より星への通路にある。私は飽迄地球と日本より脊延びする——

（一九二一・八・一五）

大水は聲を擧ぐ

――八月五日橘分監にて――

賀川豐彦

大水は聲を擧げた！
大水は聲を擧げた！
山に里に海に大水は聲を擧げた！
空は四十日四十夜閉されて夫の水口が切れたかの樣に大水は注がれた！
滴、一滴、雨は降る。
雨垂れは美しくやさしい！
虹もその間に交つて居た。
然し一滴、一滴降る雨は野山を蔽ひ大海にまで冥をのべた。
降るよ、降るよ！　雨は降るよ！

やさしき雨が堤を破つた！

靜かに落ちる滴が聲を出し初めた！

百萬滴の水は大水となつた！

大水は聲をあげた！

大水は聲を擧げた！

柔和にして愛らしく透明にして美しき凡てを養ひ凡てを包み凡てを惠み凡てを祝する雨滴は今大聲をあげて地平線の上に吠え猛る。

大水は聲をあげた！

十萬方哩は水に浸つた！

地上は凡て水の征する所となつた。

何者も水に勝つことは出來ない！

無力なりし水は今、鬨の聲をあぐ！

上に水あり下に水あり、水は川を逆に上り川床を動かし小山も岡もみな崩してしまつた……

アララットの山頂も今や水底に沈むだ!!

靜かに澄める生産者の心には常に柔和にして常に透明なる人類の祝福が秘められてゐる。

彼は水の如く親切であつて、水の如く愛らしい。

彼は春日雨であり彼は暑氣を消す時雨である。

彼は虹もて人類を導き蜃氣樓もて砂漠に等しき人の世を色づける。

彼は永遠に生命の水であり永遠に凡てを包含する海洋である。

世界の一隅になさるゝ最少の勞働も時によると地軸を傾けるアトラスの挺にも劣らざることがある。

生産者は實に地球の廻轉そのものをも司どつてゐるのである。

然しいと少さき生産者は嘗て訴へることを仕なかつた。

彼はピラミツトを作り萬里の長城を築いたがそれでもまだ不平を云ふことを知らなかつた。

彼はパナマの運河を堀り、沈沒することを知らぬと云はれたルスタニヤ號を建造した。

それでも生産者は聲を擧げなかつた。

然し一滴一滴垂れ重なつた勞働者の汗は天地を蔽ふ水氣と相通じた！

悪虐に泣く無産者の涙も資本主義の搾取に枯れた裏長屋の幼年工の血も世界脈々の水氣と相通じた！

水準は高まつた！

水は堤を切つて流れた！
大水は聲を上げた！
大水は聲なくして聲を放つた！
解放せられたるものには常に聲がある！
大水の聲は大きかつた。
地軸も震ひ上るほどその聲は大きかつた。
地球が水の上に浮び上つたのではないかと思はれたほどその聲は大きかつた！
海潚も、海潮も、洪水も、瀑布も、凡て聲をもつ！
然し靜かに注がれる無産者の血と涙も海潚と洪水に劣らざる大聲をもつ！
大水は聲をあげた！
實に大水は聲をあげた！

文明の再建

バートランド・ラッセル

本篇は一九二一年七月廿九日、本社主催に係る慶應義塾大學講堂に於けるバートランド・ラッセル教授の講演である。

淑女及び紳士諸君、

日本の聽衆諸君に向つて語る此機會を得たことは、私の甚だ欣快とする所である。私は最近の病氣のために、此悦びに浴せずに終るのではないかといふ恐れを抱いて居つたのである。けれども若し病氣のために、私の演說に多少なりとも不備な點があつたとしたならば、宜しく御宥恕を願はなければならない。病氣が全快して居つたならば、今晩はもつと十分にお話が出來たに相異ないと思ふが、とにかく私は諸君の御厚情に依て此立派な集會に參會したことを甚だ喜ぶ者である。

今晩私が諸君にお話しようと思ふのは、文明の再建といふ問題である。就ては先づ私の謂ふ『文明』とは一體何を意味するかといふことを、簡單に說明しなければならない。私は文明といふ言葉によつて、他の多くの人々のように、機械や、人生の機械的な便宜の單なる增加を意味しない。又單に一つの場所から、他の場所へ迅速に到達する力や、非常に多量の見掛倒しの物を生産して、それを不誠實な廣告で賣る力を意味するのでもない。多くの人々は此種の事物を指して文明と云ふらしい。が、私の意味する文明とは是ではない、卽ち近代的進步の物質的方面の事ではない。私が意味するのは、それ以上の或物、卽ち人生の外面的設備よりも、人の思想や感情の中に存在する、精神的、知識的な或物のことである。

私は藝術、科學、個人同士、團體同士の間の圓滿な關係、及び一切の人々にとつての、能ふ限り十分な、幸福な生活といふようなものが、文明を構成する事柄だと考へるのである。是等の事物こそは、人間の生活をして價値あらしめるのであり、吾々が尊重せねばならず、且つ吾々が物質的、機械的進步よりも重きを置かねばならないものであると私には思はれる。現代に於ては、物質的機械的進步の方が、眞の文明を構成する進步を、

凌いで居る。

吾々の中の大抵の人々は、一も二もなく、進歩といふものは何百年來存在したもので、今後も繼續するに相異ないと考へ慣れて來た。そして吾々は、人生の機械の進歩は、同時に他の方面に於ける進歩をも伴ふものと最初から決めて居る。けれども一九一四年の衝突は、此吾々の假定を全然崩壞してしまつた。其時以來——所謂文明國民が相互的自殺の狂態に耽つて以來——近代國家の基礎である所の原則——その人生觀の中に、將來の幸福の種子を包含し得るものとは、信ずることが出來なくなつた。戰爭の進行中に、戰後は戰前よりも物資が遙かに缺乏するであらうといふことを信じた人々——眞面目にさう信じた人々——が非常に多かつた。吾々は、戰爭に依て放たれた兇惡な感情が、新しい出口を求めて居るのを見る、吾々は諸國民が將來の戰爭のために、猶ほ軍備を整へて居るのを見る、吾々は、新聞が毎日、國民間の衝突と戰爭の鼓吹とを報じてゐるのを見る、吾々は强者に依る弱者の暴壓が、愈々度を激しくして行くのを見て居る。聯合國の勝利に依て消滅される筈であつた是等一切の害惡は益々甚しくなり、現在の經濟組織、現在の政治組織、及び現在の國際組織の下に於ては、もはや是等の方面に於ける、何等の改善も望み難いことを吾々は目擊して居るのである。

若し吾々が此問題を解決し得ぬとなれば、吾々は人類が未だ曾て遭遇しなかつた所の最も恐ろしい光景——即ち益々激しくなる殘虐、益々加はる國民間の憎惡、虐殺の機械的裝置の進步等——に當面して居るのである。そして若し吾々が吾々の組織を變更しなかつたならば、人類中のあらゆる文明種族の即時の破滅以外、か丶る狀態を脫する方法はあるまいと思はれる。吾々にしてさういふ恐ろしい結末を望まぬ限り、新しい生き方、新しい經濟組織、及び今日では一般に閑却されて居る古い主義を人心の上に强ゐるような新しい力を見出すことが絕對に必要である。

苟も解決の道を見出さうとする以上、吾々は先づ其第一歩として、吾々がどうしてかういふ境地に陷つたかといふ、其原因を理解しなければならぬ。私は現代と、在來の時代との一切の相異は、工業主義の發達の結果であると信ずる。工業主義は實に世界を一變させた新しい力である。工業主義は善に對する無限の可能性を含蓄してゐる力ではあるが、それが昔からの二つの古い事柄と結合してゐるために、事實上無限の害惡を可能ならしめてゐるのである。その二つとは即ち私有財產と國民主義とである。そして私は、若し工業主義が吾々の召使となるべきであるならば、若し工業主義が人類の中のあらゆる良いものを

掃滅する代りに、人間の生活に奉仕すべきであるならば、吾々は全世界の大國民の間に於ける、私有財産と國民主義とを廢止することが絶對に必要であるといふことを、諸君に說得したいと思ふ。

諸君は此問題を、經濟的見地からと、倫理的見地からとの、二つの立場から觀ることが出來る。私は決して倫理的見地を輕視するものではないが、先づ第一に來なければならぬのは、經濟的見地からの觀察であると私は考へる。けれども私は、人間の道德的性質は、その人の生活してゐる社會の經濟組織に依て形成せられたるものであるから、經濟的見解を第一に考察しなければならぬといふのではない。が然し經濟組織が、吾々の聞く說法より遙かに多く、吾々の道德的性質を形成するに關かつて力あることは確かである。

若し人間の經濟狀態を變へるならば、其道德思想にも非常な變化が起るに相異ないが、單に彼等に說法したのみならば、それだけの效果が擧がらない。故に私は、經濟的方面を第一に考慮しなければならないと考へるのである。

目下の形勢は斯うである、即ち世界には昔から常に鬪爭や戰爭とが絕えなかつたのであるが、人間の能率が非常に増大した結果、大仕掛の鬪爭や戰爭が前例のないほど破壞的になり、益々破壞的になつて行きつゝあるのである。吾々は苟も文明の名に價する何物かを作らんとする以上、人間の大團體の間の、大仕掛の鬪爭や戰爭を廢止する方法を講じなければならぬ。近代社會の鬪爭の大なる原因を探つて見れば、一方には國民間の鬪爭あり、一方には勞資間の競爭のあることが見られる。若し吾々が文明の繼續し得る世界を作らうといふならば吾々は主として此二つを除去しなければならぬのである。

是等の問題が單純な方法で解決されると信じてはならない、其等が傳統的自由主義の常套手段で解決されると考へてはならない、それはウイルソン大統領の試みた處で、此提案がどういふ運命に逢着したかは、吾々の知悉する所である。ハーデイング大統領が太平洋會議で再び試みようとしてゐるのも、明白に同一手段である。此場合の豫言は決して輕率だとは思はないが、私は輕率な豫言はしたくないと思ふ。然し太平洋會議、又は今日存在してゐる掠奪的國民の間の聯盟や協定の結果として、吾々が希望するように、世界の危險を一掃することが出來ようとは信じられない。

『君は何故私有財産といふような、古くからの制度に反對しなければならぬのか？』といふ人があらう。是に對して私は、私有財産制度の狀態は、近代の工業方法の勃興に依て全然一變

されたのだと答へよう。私有財産制度は工業的方法のお蔭で、在來の形式から、現に吾々が資本主義と呼ぶ所の形式に變つたのである。卽ち人類の大衆の生計、寧ろ生命そのものが、資本と名づくるものを所有する少數者――近代の生産を構成する緩漫な過程に從事する他の人々を、その間中生活させて置く手段を所有して居る人々――の意思次第で左右される制度に變つたのである。例へば鐵道を例に就いて見るならば、諸君は鐵道を食ふことも出來ず、其他類似の方法で、直接自身のために使ふことも出來ない、隨つて鐵道を作る人は、それを造る間他の人に依て扶養されねばならず、そして彼を扶養する他の何人かが利益を得ることゝなるのである。私有財産制度が繼續する限り、人は私人又は私人の集團に依て養はれる外なく、その私人又は私人の集團は、他の人々を扶養することに依て、國家の內部に於て空前の權力を振ひ、その外形上の政體の何たるかを問はず、事實上國家の支配者その者になり終せるのである。

資本主義は既に相當の年月を經て居るので、その發達の一般的徑路を辿ることが出來る。資本主義の初期に於ては、一國內に於ける小資本家同士の競爭が見られる。そして弱小資本家は競爭に依て併吞又は破滅せしめられ、或國の內部に於ける各種の事業は、或會社、又は最も緊密に協力してゐる數個の會社の一集團に依て經營される全國的獨占の時代に達する、さうなると恐ろしいのは外國の競爭だけとなる。此競爭は二つの異る形式を執る、其一つは生産物を賣る市場を得ようとする競爭であり、他の一つは、原料品を得んがための競爭である。此二つのうちで、過去に於ては市場の競爭の方が重要であつたが、現在に於ては、原料品のための競爭の方が、諸國の資本家の間の競爭のうちで、最も激烈にならうとしてゐる。

互に競爭し合つて居る國民同士の中の、資本家の團體組織の結果として、國民主義の精神を鼓舞することが、總ての異る國々の、總ての資本家團にとつて必要となる。私の謂ふ國民主義とは、自國を以て世界一の國と信ずること、あらゆる紛爭に際して常に一も二もなく自國を是とすること、及び何事によらず、自國の名譽となることは總て事實と信じ、且つ何事に依らず、敵國の不名譽となることをも總て事實として信ずる習慣を意味するのである。此種の精神的習慣は、總ての文明國の學校で敎へ込まれる。吾々は、英國の學校では、英國は世界一のよい國であり、いかなる紛爭に際しても常に正しい立場に居ると敎へられる。佛蘭西では又、佛蘭西が世界中で一番よい國だと敎へられ、日本の學校では、日本が世界で一番よい國だと敎へられる。かういふことは世界中のあらゆる學校で敎へられる。そし

てそれは今私が話したような資本家團の利益になるから、教へられるのである。

………………………………………………
………………………………………………
………………………………………………
………………………………………………

資本主義の性質として、此民族同志の鬪爭を減少する理由がない。否それ所か、資本主義の中には、此鬪爭が層一層激烈を極めるに相異ない理由が十分含まれて居ると私は信ずるのである。

工業の原料品を得ることは、益々困難になつて行く。原料品は舊い工業國に於ては消耗し盡され、今後は所謂未發達の國に、益々多く求めねばならぬ。

そこで諸國の商業團體の間に、原料の出處を所有しようとする爭ひが愈々激しくなる、そして若し此競爭制度が繼續するならば、戰爭は一層激烈に、一層恐ろしいものになると期待してよい理由が十分ある。過般の戰爭の勝利者が得意になつてゐるのを見て、私は不思議にも思ひ、耻ぢ入りもして居る。彼等は戰爭が獨逸墺太利匈牙利そして露西亞即ち諸戰敗國、に齎した恐怖すべき事柄を知つてゐる、否知つて居らねばならぬ筈である。彼等は亦今日の勝利者は明日の勝敗者たるべきことを是等の戰敗國を見舞ふた災厄は、次の戰爭には彼等を見舞ふかも知れぬことを知つて居る、又は知つて居らねばならぬ筈である。それにも拘らず、國際的平和の促進に、眞に一歩でも進みかけてゐる國は一つとして無い。そして私自身としては、現在の競爭的資本制度にして繼續する限り、到底國際的平和を實現する有效な方法はあるまいと信じて居る者である。

此境地を脫すべき方法は唯一つある、それは世界が其自分の兇惡な感情のために死滅することを避けるためには、早晩是非とも執らねばならぬ方法である。即ちそれは國際的共產主義である。その共產主義の社會に於ては、總ての人々が平等であり、世界の勞働の生產物が等しく分けられるために、もはや競爭は存在しない。又其社會に於ては世界の原料は國際的に管理せられ、各國民の間に必要に應じて割宛てられる、現在の害惡を生んだ競爭の精神は、正義の精神に依て消されてしまふのである。過去から繼承した文明の中で、吾々の總てが尊重してゐる所のものを保存することが出來るように、現在の制度を變更する道は、唯だこれ一つあるのみである。

此問題を倫理的見地から見ても、これと同じ結論に到達するのである。此近代社會に於ては、或者は頂點に居り、或者はど

ん底に居るといふ次第なので、吾々は競爭的精神に滿たされて居る、そして吾々は總て勿論頂點に居らんことを望むので、自然競爭の本能が充滿してゐる。諸君は單に德を說き、犧牲を說くことに依て、此競爭本能を驅逐することは出來ない。かういふ說法は數千年來世界に存在したのであるが、これといふ結果を得ることは出來なかつた。競爭の精神を驅逐する唯一の道は、人各々を平等ならしめること、主人と召使金持と貧乏人との間の不平等な關係を除くことにある。そして特に此國に於て力說する必要があると特に考へられるのは、男女間の不平等であるが、此不平等も亦、共產主義が一掃せねばならぬもので、いかなる正義の原則も承認することの出來ぬ種類のものである。私は今一つ、特に日本に取て興味のある例があると考へる。私は其點に就て滿腔の同情を有する者であるが、日本は白人種の橫暴に對する反抗のチャムピオンとなつた。其點に於て、私は諸君に全然同意するものである。けれども自分一個の權利を確保したのでは十分でないこと、現在に於ては當然の權利を持つて居ない人々にも亦、諸君は自分同樣、自己の生活にする權利の頒布にあづからせることに努めねばならぬことを認められなければならぬ、苟も正義を信ずる人は、總てこれを認めるであらうと私は考へるのである。正義は、單に自分自身に適用せらるゝのみならず、自分以下の地位に留めて置きたいと思ふ人々に對してさへも適用せられねばならぬ所の原則である。

さて諸君は、若し實現せられ得るものだとしたならば、國際的共產主義が理想的な制度だといふことを認めた上で、それを實現する最良の方法は何であるかと問はれるかも知れない。その道は長く、且つ困難なものであることを私は自認しなければならぬ。私はそれが明日乃至明後日實現されるものだとは考へない。私は今日此席に列してゐる何人も、終に一生涯それを見ずに終るかもしれぬと考へる。私は、それには長い敎育の時期が必要だと考へる。私は、それを實現するには、殆ど總ての國を通じて、或時期に暴力が必要であると考へる。私はあらゆる時、あらゆる場所を通じて革命を是認する者ではない、けれども私は、…………………………………………………………………………………………私は世界の資本家をして、自發的に其權力を擲たせることが出來ようとは信じない。現に權力を持つて居る者が自發的にそれを擲つことは無い、……………………………………………………………………………………

…………………………………………

…………………………………………

…………………………………………

…………………………………………

……斯かる形勢に對應するためには、諸君は全世界の勞働階級の一致團結を必要とする。世界の民衆の間に協力の行はれることが必要であり、國民的偏見を打破して、國際的調和を作る新精神が必要なのである。

　互に相手を滅さうとして競爭してゐるものとしてでなく、一大目的のために協力し合つてゐる、一つのものとして世界を見る、新しい感情を諸君は持たなければならない。救ひの道は唯だ全世界の協力あるのみである。唯だ此協力を通じてのみ、工業主義は吾々の主人でなく、吾々の婢僕となり得るのである。工業主義は吾々を新しい天國に導くことが出來る。然るにそれは吾々を導いて新しい地獄に達せしめた、そして若し現在の儘で繼續するとすれば、それは吾々を愈々凄慘たる地獄へ導くであらう。吾々は單に經濟組織を變更するのみならず、倫理的觀念をも變更しなければならぬ。吾々は單に言葉の上のみならず、事實上、萬人は兄弟であり、同一大家族の一員であるといふことを實現しなければならぬ。たゞ偉大なる信仰と、偉大なる希望と、偉大なる眞理の知覺を通じてのみ、吾々は——恐らく吾々自身のためでなく、吾々の子供、又は子供の子供のために、よりよき世界を作ることが出來るのである。

時評

神戸勞働爭議局外觀

稲田徳三

（一）

吾輩は、新聞記事以外、直接にも間接にも一の材料をも有せぬものであるから、到底眞相は分り兼ぬる。極めて皮相の見解しか下し得ぬが、此度の爭議は種々の意味に於て、甚だ教訓に富むものであつて、社會問題研究者に好資料を與ふるものと思ふ。仍て新聞記事を誤なしと前提して、以下單簡に卑見の要旨を述べて見よう

（二）

第一に感ずることは、此度の爭議に於て、殆んど始めてと云つて宜い位、日本の勞働爭議は要領を得るものとなつたことと是れである。これは、『指導者』とか云ふものが其人を得た爲めであるかも知れないが、若し其爲めのみであるとすれば、吾輩は失望せざるを得ぬ、一體勞働爭議に指導者などのあると云ふのは、甚だ馬鹿らしいことである。勞働運動業とか勞働ブローカーとか云ふものがあるとしたらば、其は醜業婦賣買のぜげんにも當るものと云はねばならぬ。ぜげんは一個々々の女子を虐げて其懐を肥すに過ぎないが、勞働ブローカーなるものは、多數の人を同時に虐げるものであり、勞働者其人々のみならず、其家族等にまで糊口の心配をさせ、而して國の產業を攪亂するもので、其流す害毒はぜげん等の比ではない、最も唾棄す可き種類の人間と云はねばならぬ、神戸の賀川氏とは、如何なる人なるか、一向詳しいことは知らないが、仄聞する所にては、甚だ人格の高い人であつて、勞働者の信頼極めて厚いそうである、若し此の仄聞にして誤なしとすれば、賀川氏は決して勞働運動業者で

はあるまい、官憲は氏を目して煽動したと爲して居るとか云ふことであるが、煽動と云ふことは、賀川氏の右の人格から考へてあり得ないことであり、而して、日本の勞働者が、左樣に容易に煽動せられ得るものだと考へるのは、國民を侮辱するも亦甚しい、殊に神戸の勞働者の行動を見るに、相應に節制あり訓練あり思慮あるらしい、其人々が賀川氏等に煽動せられて、而も彼れ丈け、堂々と行動したとは、常識を以てしては、到底考へ得られざることである。煽動と云ふことは煽動せられ得る人に對してのみ有り得ることであり、又煽動に乘つたと云ふ事實に照して始めて云ひ得ることである。絕對的に、抽象的に煽動と云ふことはあり得ない、相對的にのみ而して主として主觀的に見て、始めて煽動と云ふことが成り立つのである。英國などにては、インスチゲーションと云ふことは、勞働爭議に就ては、久しい以前から云はなくなつた。インチミデーション、及びモレステーション（脅迫及妨害）と云ふは、絕へず云はれて居た、獨逸でさへも、煽動を罰すると云ふことは、流石に余程以前からなくなつて居る。英獨にては、勞働爭議が煽動によつて起るなどと勞働者を侮辱する考は、可なり前から消滅して仕舞つて居るからである。日本の今日の勞働者も、最早煽動に輕々しく乘るものではなくなつて居ると確信する。其れも一寸一時の出來心で騷ぐなどと云ふことなら、煽動も可能有力であらうが、神戸の爭議の樣に、可なり長く續き、余程の犧牲を要する係爭が、煽動などで可能であるかないかは、少し考へて見れば、直ぐ分ることである。ダカラ、賀川氏等が何を爲したかは分らない、或は煽動以上に惡い事をしたかも知れないが、煽動すると云ふのは斷じて當らないと思ふ。

神戸の爭議勞働者の要領を得た爭ひ方は、賀川氏等の力のみでは、決してないと思ふ。殊に川崎あたりの職工の中には、其教養に於ても、可なり優秀なものがあることと思ふ。これは然る可き筈である、精練勞働者、高給勞働者の多い所には、教養の進むのは當然である、故に川崎では、此度の爭議を起したことを耻づ可きではない、否、兎に角アレ丈けの秩序ある係爭を爲し得る職工を有して居たことを川崎の當事者は世に誇る可きである。少くとも、足尾の古河などに對して、大きな顏をしていゝ

譯である。此點を篤と雇主側が悟る事が必要である、其悟りがつけば、此度の事件の解決などは、殆んど朝飯前の事であらうと思ふ。然るに、海軍の御用を缺いで、國家に對して誠に濟まぬことである、だから、巡査の劍を藉りても、一日も早く紛議を片付けて仕舞はねばならぬなどと言つてるとか云ふ事だが、馬鹿も休み休み言つて貰ひたい。軍艦の何隻と人間の何千人と何れが國家に取つて重いか、人一人を助ける爲めに軍艦一隻を沈めて構はない位に覺悟するのでなければ、本當の文明國家ではない、然るに何千人の職工を無理に押へ付けて置いて、軍艦の出來が一月か二月か早くなり得ることを圖るなどとは、冠履顚倒の甚しきものである。殊に川崎では、夙に勞働者待遇に模範を示す覺悟があるとかの評判で、又事實他に比べては、多少其用意の實現を示して居ると云ふ事で、其所長は屢々抱負を公言して居る、素質の秀いでた職工を前にして其樣な公言を時々爲したればこそ、此度の要領ある爭議を産み出すに至つたものとすれば、川崎は此爭議の起つたことを少くとも恥づる可き理由を持たぬ、進んで其解決を模範的に實行して、更らに其誇を本當のものたらしむ可きである。巡査の袖にかくれて無理押し付けをしようなどとは、折角少しは讃む可き所ある川崎の面目に泥をぬる所以であることを篤と考へて呉れなくては困る。

（三）

問題の解決は簡單である、先づ賀川以下首腦者の檢束を解く可きである、急に跡から飛込んだ鈴木君などは、出る可き幕ではない、東京友愛會の始末を反省したなら、鈴木君は其樣な厚顏を敢てす可きではない、又鈴木君等に十分其資格ありとしても、此度の爭議に兎に角鮮明なる方針を指示したと想像せらるゝ賀川氏なしで、果して本當の解決が出來るか如何か、甚だ危まれることである、賀川氏の取調は問題解決後に讓つたとて少しも差支はない、選擧法違犯の疑ある有權者も、成る可く其選擧權を行使せしめ、其終了後に於て檢擧することの甚だ當を得て居る如く、勞働爭議に於ける犯罪嫌疑者は、兎に角其の爭議の終決する迄は、成る可く、其行動を自由ならしめて置くと云ふことは、勞働爭議を認容する文明國としては、當然爲さゞる可からざる所と思ふ、然らざれば、人權蹂躪の謗を免れまい、

京都の豚箱事件とか云つて、人權蹂躙を八釜しく言つたが、アレハ多くは有產者が財利に目がくらんで而も公職を利用してした犯罪で少しも同情の値なき罪人である。其れでも人權尊重を請求する權利がある、況んや其生活の爲め、其妻子の爲め、其同胞の爲め、犧牲となつて働いた人々は、罪ありとしても、同情を以て之に臨まなければならぬ、賀川氏等の如き殊に然りと思ふ。其人々を事件進行中に檢束して、其同志の力を殺ぐと云ふのは、是れ甚しき人權蹂躙である、其れよりも背後から勞働者を刺し殺した巡査の方が、遙かに即時の取調を要するもので、其張本人ありとしたら、其人こそ、最先に檢束せらる可きものである、其人が分らないならば、當時出動した巡査の全部を檢束する位にしてこそ、文明國の人權尊重は有效となるのである。パンの爲めに、妻子の爲めに戰ふ者は、最大の寬容を以て臨む可しとは、社會政策の根本要求である、其人々を背後から刺して死を招いたとは、實に文明國の大耻辱である。

反對に、ストライキ破りをするもの、ストライキ破りをなさしむ可く、金を與へ又は脅かすものは、嚴に取締る可きである。

一體同志を裏切るなどゝ云ふようなものは、國民として最も好ましからざる分子である、其樣な卑劣漢こそ、其地位が異れば、又容易に賣國奴となる人々である、同志を賣るものは、やがて國を賣るものである、西伯利亞軍用地圖を某外國へ賣込まうとした軍人が憎む可きである如く、飢餓を忍んで戰つて居る同志を裏切る勞働者は憎む可きもので、國家の立場から云へば、其樣な人間こそ最も危險性を帶んで居るものと見なければならぬ、之に對しては峻嚴でなければならぬ、殊に其樣な賣友行爲に誘惑する者、脅迫するものは、最も惡質の誘惑、脅迫者と云はなければならぬ、贈收賄を罰する以上、其樣な金錢の受授者は、嚴に罰せられなければならぬ。砂利を喰ひ、瓦斯を喰ふ奴よりも、友を喰ひ同志を喰ふ食人鬼の方が、國家に取つて遙かに有害である。同じく喰ふ者でも物を食つて居る間は危險は寧ろ小であるが、其れが人間を食ふようになれば（ぜげん、詐僞孤兒院、而して勞働ブローカー等）危險はより大となる、人間の中でも平生同一仕事に從事して居た同志を食ふ者は、其危險極りないのである。

(四)

問題の解決の爲めには、先づ今檢束してある首腦者の檢束を釋け、之れが第一策である、而して其上にて爲す可き事は、知事などに一切手を引かしむることである、川崎三菱對其雇傭者間の係爭に官憲――其れも頭のしつかりした中央官憲なら兎に角、低能な田舍役人――が下手に飛出すは害がある、殊に無條件で仲裁を依賴せるなどとは、恐も亦極れる言分である、無條件で宜い位なら、今日迄幾多の犧牲を勞資兩者の拂つたは、全く無駄な事となる。勞働爭議は、勞資兩者の教育のため訓練の爲め、事業經營刷新の爲め、延いては生産能率增進の爲めに、何物をか貢献してここに意義があるので、唯賃銀を若干引上げたとか何とか云ふやうな、些々たる事の爲にのみするものならば、其利は到底其損を償ふに足らぬのである――これは本誌掲載拙文『賃銀闘爭より厚生闘爭へ』に於て稍々詳しく説明して置いた、其文を参考せられたい――無條件で第三者、而も事業の經營に無知識な官憲などに仲裁を頼んだのでは、解決はしても、其は損の甚しいものである、況んや其様な解決は必ず一時を糊塗するに過ぎずして、將來否近來に又々同様な騒擾を起す種子を播く虞が大である　其んな膏藥療法は斷乎として斥けなければならぬ。

此度の爭議をして意義あらしめ―流行語で云へば、有終の美を濟さしめ――るには、何處迄も勞資兩者完全に對立して、事務的に、ビジネス・ライキに、委曲を盡した解決案を立てなければならぬ。勞働爭議は解決丈けが能事ではない、否、爭議によつて得る結果の如きは、爭議の副産物と見るやうでなければならぬ、爭議其ものが、大なる文化的意義があるのである、唯解決……と騒ぐのは、試験さへ及第すれば宜いと云ふ怠け書生にさへ笑はる可きである。爭議の進行中に養はるゝ、公共心、犧牲奉仕の美德、同志結束の精神、節制ある行動の業が、やがては國の文化を一段より一段へと高い處へ導く可き大動力となるのでなければならぬ。此意味に於てこそ勞働爭議は尊重す可きものである。之れを必然の惡と見て居る内は駄目である。理窟から云つても、財産に關する係爭には、立派なる司法機關が出來て居て、其係爭は國の手厚き保護、保障を享受して居るでは

ないか、少くとも財産と對等の重要を國の經濟的發達に對して有する勞働に就ての係爭は。少くとも財産係爭が享受する丈けの尊重と保護とを受く可きである。然るに頭から之を厄介視し、罪惡視するのは、誤れるも亦甚しいものである。若しも、財産係爭の場合に、一當事者の多人數が其權利の伸張を明治神宮に祈願す可く來詣したときに、其多人數なるの故を以て、之を神宮橋上に配置した巡査隊を以て喰止めたとしたなら、否其或ものは劍を拔いて祈願者を傷けたとしたら、如何である、必ず人權蹂躪の叫は囂々と起るであらう、勞働係爭を財産係爭と──其以上とするは他日の事としても──少くとも同等に取扱ふことは、社會政策當面の要求でなければならぬ。但し暴行の取締る可く鎭壓す可きは、何れの場合に於ても同じであるは言ふ迄もない。

（五）

解決は飽迄勞資對等の前提の下に行はれなければならぬ。其れには双方の代表者相會し、詳細に討論を重ねる外はない、仲裁は其より後の事である、即ち双方の討論によりても、猶一致點の見出されざるときは、右の討論に立合つた人々が、第三者として解決案を作成して之を勞資双者に提示し、其受否は任意とす可し、但し拒む側は其拒否より來る一切の責任を負ふことを豫め承認す可きは勿論である。右の立會ふ人としては、勞資兩方より同數づゝ自己の信頼する第三者を指名す可きである。

さて、此度係爭の對象は、新聞紙の記事によれば、八時間勞働、團體交渉權、工場委員會等の要求であると云ふ。これは、大體に於て極めて妥當なる要求である、此度の勞働爭議が兎に角今日迄の處にては、寧ろ大勝利、資本側の大敗北であると云ふのは、勞働者の規律、結束、節制の爲めたると共に、其要求が時代的に其妥當なりしことが預つて力あり。資本側の大敗北は、其處置の愚なりし爲めも關係があるが、主としては、妥當なる要求に對し殆んど一顧をも與へざる底の無誠意不親切が最大の原因であると思ふ。然れば、解決には、敗者は深く其敗を認むること革命後の獨逸の如くなる可きこと、反對に勝者は英佛の如き態度を取つてはならぬこと、即ち岡に乘つて橫車を押

してはならぬことと之れが、第一前提である。換言すれば、雇主側は、大體に於て悉く勞働者の要求を容れ、其實行の細目に於て誠意を盡して勞働者と協働し、勞働者は大體の要求が入れらるれば、細目に就ては極めてビシネス・ライキに雇主と協定する事の外、永久眞正の解決法はない。

團體交渉の事は雇傭契約の本質上必ず之を認めなければならぬことは、あらゆる機會に於て我等は去明治三十二三年の頃から之を主張して居た、殊に勞働協約の事は、甚だ古くから紹介もし主張もした。其後關一博士岡村司博士等も勞働協約の事を屢々論じて、世人に示された、然し當時は、勞働者も資本側も少も我々の言に耳を藉さなかつた、我々の論は、唯熱心な青年學生の間にのみ知られて居るに過ぎなかつた、然るに今神戸の勞働者が之を係爭の一大眼目として有力なる主張を爲すに至つたは、我々に取つては、實に隔世の感があると同時に、實に愉快に堪へない事である。瑞西の新民法では協約の民法上有効なることと丈け始めて認めた、外の國は除外的に公法約に之を認めるに過ぎなかつたが、今度の革命後の獨逸では一九一八年十二月二十三日の法令を以つて更らに大に進んで私法的にも公法的にも明かに之を認め、而も之に大なる効力を附與した。即ち『勞働協約、勞働委員會及勞働爭議解決令』 Keror Anung über Tarifverträge, Arbeiter = u. Augestelltenamseliusse u. Schlichtung von Arbeitsstreitigtseiten. 第一條に於ては、『勞働者團體と個々又は團體雇主との間の雇傭契約の締結に關する條件を文書を以て規定するときは『勞働協約』、兩當事者間に於ける個別契約にして此の協約の規定に異るものは、凡て無効とす。但し協約の規定により原則的に差別を認めたる條項、又は其條件の變更が勞働者側に有利なるものにして、協約に於て明示的に禁ぜられざるものなるときは、之を有効とす。無効なる條項は協約中の當該條項を以て之に代ふ可きものとす。』と云ふ大原則を定めた。

我邦では、法律を玆迄進め得るには、未だ何年かゝるか逆賭し得ぬことである、從つて勞働者は其の許されたる爭議權の行使によつて之を個別的に其雇主から、承認せしむる外に道がない、神戸の勞働者は、正さに此の唯一の合法的、合理的方法を

執つたもので、若し賀川氏の「指導」なるものが、此くせしむるに力あつたとしたならば、同氏は日本の社會政策上に不朽の名を留むること、英國のマンデラ及ケットル兩氏の如く、又はフランシス・プレースの如くである可きである。

工場委員の事は、鐵道省では、形丈けを旣に角備へて居る位であるから、今更其妥當に就て彼是云ふものはあるまいし、八時間勞働は、國際會議の決議によつて、他日日本も必ず實行す可きこととて、唯時期を早めよとの要求であるから、何れも、解決案作成に於て、勞資兩者誠意誠心に、且つビシネス・ライキに、取扱へば容易に解決案が見出され得るに相違ない。

兎に角右の次第で、此度の爭議は、要領を得て居る、願くば其解決も亦た同樣に要領を得たものたらしめよ、効を急いで膏藥療法を施すことと足尾爭議の如くなる勿れ、永く日本の勞働運動に好資料を與ふる覺悟を以つて、立派な解決を告げよ、其解決は向後如何樣ならうとも今日迄の記錄丈けでも、他に對する好個の教材であり、社會問題の研究者に取りては、殊に有益なる資料であることは、論らぬが、其解決を模範的ならしめるによつて、更らに其善き作用を大ならしめんことは、我々の切望して已まざる所である。(十・八・六・認)

(八月十三日函根に於て追記)

前稿を改造社へ送附してから後數日、當地にて新聞を見ると、神戸の爭議は、勞働者が市長の不徹底な調停(?)を拒けて、自ら進んで、無條件降服を爲すことによつて一切終局を告げ、而して此れに鑑みてか否か、官憲は、賀川氏等の檢束を解いたと云ふことである。これは、實に近來にない痛快なことであつて、此度の爭議を成効の記錄と呼んだ我輩も、實は其終局が、又々足尾事件の樣な誤魔化的勝利の名の下に、無意味なものになりはせぬかを大に案じて居たのである。故に前文において解決々々と解決にのみ重きを置くの非なるを力説して置いたのであるが、自ら慘敗と公言して、不徹底な瞞着的な勝利を一蹴して、却つて無條件降伏をしたとは、實に何處迄も見上げ切つた行動で、其記錄を更らにより出し榮あるものたらしめたものとして、實に日本勞働運動史に、燦然ある光輝を放つものである。學校騷動などの經驗でも『ブラックレッグ』の要は、首腦

者を最も著しく苦めしめるものである。若しも神戸の爭議が市長とかに引ばられて猶數日グズ〳〵して居たなら、ブラック・レッグの續出の爲めに、光榮ある記錄に滅茶苦茶になるか、若しは、名斗りの勝利を以て世間體を繕つて、其實質の更らにより惡しき惡鬼を伴ひ歸ることとなつたかも知れぬ、市長の曖昧案を峻拒すると共に、即時無條件降伏をしたことは、機宜を得たる點のみでも、實に模範的と云ふ可きである。我輩が前文に於て希望した事は、悉く實現せられたのは、決して吾輩自らの爲めに喜ぶものではない、凡ての合理的勞働運動の行く可き道は、其外にないのであつて、神戸の爭議者は、此の正道を堂々と歩んで行つたものである。ヤレ英國の勞働運動に比しては、日本の其れは劣るの何と云ふが、日本でも進んだ勞働者は既に此れ丈けの事をやるのである、之に比すると資本側、官憲側の幼稚さこそ實に天下の奇觀と云はねばならぬのである。否、無條件降伏をせられた幻影的勝利者たる川崎、三菱の今後の出方こそ、我々研究者の張目して見ざる可からざる所である。

賀川氏等の檢束を解いたは、誰人の英斷かは知らぬが、誠に機宜に適した處置で、官憲と雖も、全く無理解な事斗りするものでないと云ふことを天下に示めすものとして歡迎す可きである。勞働ブローカーの侵入を防止する爲めにも、是非斯くせねばならぬことは、前文に於て言つて置いた處である。ブローカー無しの此度の爭議が、此く美事に終始した事は、更らに又た好箇の例を形づくつたものと云ふ可きであらう。

「國難」の進化

＝無產階級から見た太平洋會議＝

山川　均

今から五百年ほど前には、蒙古の軍艦〇〇艘ばかりで攻め寄せて來た。之が五百年前の『國難』であつた。大正十年にはお隣りの米國から軍艦を減らしたいといふ相談を持ち掛けられた。之が五百年後の『國難』である。萬物は進化する。『國難』も亦進化せざるを得ぬ。そして正しく進化した。

口

『資本主義的社會の全歴史は、三つの時代に區別することが出來る。そして其うちの二つは好戰的であつて、一つは平和的である。青年期には、資本主義は鬪爭的だつた。即ち資本主義が幼年時代から丁年に達する迄では、幾多の戰爭を伴つた。そしてこの戰爭の間に、資本主義的特質が確立したのである。

『愈々丁年に達すると、資本主義は平和的にあつた。そして活力の横溢した資本主義は、主として其注意を國內の經濟に集注した。しかし資本主義——自由競爭主義の上に立つ社會といふ意味で——が絕頂に達して下り阪に差し掛ると、それは恐らく氣分がいら〳〵して、昔の好戰的な氣持に返つて來る』。そして資本主義の第二期——平和的な資本主義——を代表するものは纖維工業であつて、第三期——好戰的な資本主義——を代表するものは鐵工業である。

英國の資本主義は十九世紀の終りに、第二期から第三期に移つた。

『產業的には、マンチエスターは英國の首府だつた。そして纖維工業は資本家世界の主要工業であつた。資本主義は纖維工業を意味してゐた。從つてマンチエスターは世界の產業上の首府だつた。マンチエスユーの政治的代表者は、資本主義の標本的の政治家であつた。そして其哲學は、資本主義の哲學であつた。

『バアミンガムは鐵の町であり、英國鐵工業の總本部である。バアミンガムが英國の政治に勢力を及ぼしたのは、ほんの近頃のことである。一八九五年にジヨセフ・チエムバレーン——即ち鐵と鋼鐵——が內閣の重要な椅子を占めた。これは工業世界の中心點が纖維工業から鐵工業に移つたゝめに、鐵と鋼鐵とが政治上の重要勢力となつたことを象徵する。

『今日は、鐵と鋼鐵とは資本主義の主要工業である。資本主

義は鐵時代に入つた』。

□

しかし資本主義が鐵時代に入つたのは、英國だけではない。一八五〇年に二、三〇〇、〇〇〇(噸)だつた英國の鐵産額は、一九〇〇年には八、九五九、六九一になつたが、獨逸では三五〇、〇〇〇から、八、三八一、三七三に佛蘭西では四〇五、〇五三から二、六六九、九六六になつた。

歐羅巴の資本主義が第三期に入り、若くは第三期に近づいて、漸やく好戰的の特質を現はすに從つて、列國の軍備競爭は激しくなつて來た。この資本主義の成熟は、一方には軍國主義的思想となり、一方には其不安を反映したものが、國際の協定によつて軍備を制限しようとする最初の試みヘーグ平和會議であつた。一八九九年のヘーグ平和會議の資本家主義的性質は、『泥棒の晩餐會』かといふ嘲罵を如何ともすることが出來ぬ。

□

ヘーグ平和會議となつて現はれた資本主義世界の不安は、決して杞憂ではなかつた。一九一四年には、英獨資本主義の衝突を中心とする、全歐羅巴――乃至は全世界の戰爭が勃發した。この戰爭の裡から逃がれ出た資本主義國は、いづれも甚だしい創痍を蒙つてゐた。或る同僚は重傷の爲めに命をおとした。(露國の如く)他の同僚は、辛うじて、命を取り留めた(獨逸の如く)。

一八九九年の平和會議が、第三期に入つた資本主義の征戰の道途に經驗する不安を反映してゐたように、一九二〇年の太平洋會議は、戰爭に破れた資本主義の悲哀を代表する。資本主義的軍國主義は、いつでも一方には平和主義的理想となつて反映する。一九二〇年の資本主義も、反動的な國家主義と國際平和の努力とに、其國有の矛盾を現はしてゐる。

そこで其の資本主義的精神の表はれたる限りに於ては、一九二〇年の太平洋會議は、一八九九年のヘーグ平和會議の復習である。一九二一年の『ヘーグ平和會議』が露帝によつて召集されないで、ハーデイングてよつて召集せられるのは、『アメリカ帝國』の完成を物語つて居る。そして一九二一年の『ヘーグ平和會議』が、ヘーグ平和會議と呼ばれずに『太平洋會議』と呼ば

れるのは、資本主義的搾取の舞臺の中心が、太平洋海岸に移動したこと丶、日本の資本主義の成熟が正さに第三期に達したことを物語るものである。

□

纖維工業の日本、紡績と生糸の日本は、今や鐵工業の日本に突入した。近年の勞働爭議が、鐵工業を中心として居るのは之が爲である。日本の資本主義の全身には、第三期的精神が跳つて居る。そして世界戰爭の爲に、最も傷痍を蒙らなかつたのもこの日本である。日本の資本主義は、既に老衰期に入つた歐羅巴の軍國主義的資本主義に代つていさ之から第三期的精神を大に發揮しようとして片唾を呑んでゐた。この時隣國から「第二のペルリ」が來た。退つ引きならぬ軍艦減らしの相談！之が『國難』でなくて何だらう！

戰爭主義と狼猿說

長谷川如是閑

一

人は生れながらにして社會的動物であるといふ思想に對して人は生れながらにして戰鬪的動物であるといふ思想がある。人間の原始的生活に對する知識の不十分であつた時代から、人間の生活は本來社會的であつたらうか、戰鬪的であつたらうかといふことに對して、相反する二樣の見地があつたが、更らに原始社會に關する知識の進步した今日に於ても、依然として、二樣の正反對の思想は、種々なる形で爭つてゐる。

然も今日に於ても、一般人の間には、人間は、その本來の狀態に於ては戰鬪的であるといふ俗見が、深く喰ひ込んでゐると見て差支ひない。それは獸類の動作や野蠻人の話やを見聞して、動物的の生活は一般に敵對的であるやうに觀察される所から、常識的に、さういふ見解を持たせられてゐる上に、進化論者の生存競爭說を、右の俗見に基いて解釋したことが一層それを助けてゐるらしく思はれる。

すべての人間が、武器を携帶して、それを使用する術——即ち隣人を殺す法——を研究してゐないものゝなかつたのは、日本では——恐らく西洋でも——つひ四五十年前のことである。『家を出れば七人の仇がある』とか『人を見たら泥棒と思へ』とかいふ類の諺は、各國ともに、今でも人の口に殘つてゐる。『或る普遍の力が、すべての人間を恐怖によつて抑へつけてゐなかつた時代に生活してゐた人間は、常に戰爭と稱せられる狀態にあつた。各人と各人との間も戰爭であつた如く。』と、今を去る三百七十年前にホッブスの云つたことは、その前の千餘年間の信仰であつたと同じく、その後の數百年間の信仰であつた。此の信仰を疑つて、人間が平和的であることを主張する人々は、常に世間から、丁度ホッブスがさういつたやうにかういつて攻撃されるであらう。『そんな人は、自分のことを考へて見るが好い。彼は、旅をする時には護身の爲めに武裝したり、連れのあることを望んだりしてゐるのではないか。寢る時には戸

を鎖したりするではないか。家にゐてさへ、箪笥に錠を下ろしたりするではないか。法律があつて、武裝した官吏がゐて、彼の受けた總ての損害に復讐してくれることを知つてゐてさへかうである。彼が武裝して旅をする時には、彼れは同國民を何と見てゐるのだらう。彼れが夜戸を閉す時には、彼れは仲間の市民を何と見てゐるのだらう。彼れが箪笥に錠を下ろす時に、彼れは、自分の子供や召使を何と見てゐるのだらう。彼れが、自分の行爲を、人間を非難してゐるのではないといふなら、私が言葉の上で、人間は本來戰鬪的だといつたつて、人間を非難したことにはなるまい。』(Liviathan)

で各人は、隣人を警戒し、各國は隣國を警戒することを、何時までたつても已めないのである。さうして矢張りホッブスと同じくそれは決して隣人や隣國を非難してゐる譯ではないと斷つてゐることも已めない。

が人間の本來の性質——常に流動して、常に進化してゐる人間といふ生物に、本來の性質なんてものはあり得る筈はないのであるが——に對する空想的な思想が、いろ〳〵と爭つてゐるのと沒交渉に、實際の人間について研究してゐる人々は、結局何んな風に見てゐるかといふに、それも亦その人々の觀方と考方とによつていろ〳〵である。それは同じ生物學者のうちでも生存競爭を高調する人もあり、相互扶助を高調する人もあるやうに、自分の氣分と考へ方とから、自からその手に取り上げる事實も相違して來るといふ次第である。然し、比較的『考へ方』を容れる餘地のない研究の仕方をした人のうちで、而かも比較的信用の出來る方法即ち現存の原始的人類について調査した倫敦大學のホブハウス教授外二名の報告には次のやうなことを云つてゐる。

『原始社會は絶えざる戰爭狀態に在つたといふ因襲的の見解は、果して事實に符合してゐるか何うかといふ問題がある。概していへば、かゝる社會では戰爭狀態が普通であつたといふのは恐しい誇張であること疑ひない。原始社會に於ける、隣合の部落同士の關係は一般に友誼的である。たゞ時々魔法使ひの信仰のあつた爲め、殺人の訴へによつて不和が起ることは脫れない。がその不和は多少組織的の形を取る結果となる。低級の社會では、身内や朋友が集つて行ふ復仇と、首領が出來てそれに義勇兵が附隨して行ふ戰爭との間の區別を、事實の上で判然とつけることは困難である。嚴格にいへば、外部への復仇とは、部落の一部が他の部落の一人か數人かに對する爭ひを意味し、戰爭とは全體としての部落の名によつて行はれるものを意味する。氏族同士や、種族内の小團體同士の復仇のやうな爭ひは不和（F

ead）と呼ぶのが適當であらう。此不和でない戰爭（War）は社會組織が或る度合まで發達したことを示してゐるので、低度の社會では、高度のそれに於けるほど戰爭は普通でない。」

然しからいふ確實の事實の擧がるずつと前にもルソーのやうに、人類の自然狀態を平和的と考へた人もあつたのである。それに引代へ事實が擧つた後でも、依然として戰爭說を捨てない人もある。性善說と性惡說とは、事實の如何に拘らず、人間自身、自分も何う信用したら好いかといふ問題として、永久に爭はれてゐるのであらう。

二

人間が自分を何う考へたら好いかといふやうなことが、哲學者や詩人の頭腦の奥や筆の先やに引懸つてゐることは、私達の生活にとつて別段何の足しにもならないが、さりとて迷惑にもならないから、結局何うでも好いことのやうではあるが、それが活きた世界の私達の生活を、現實に左右するに及んでは、その考へ方によつて、私達は一方ならない迷惑をしないとも限らない。

現に一般に信じられてるところの、戰爭が國と國との間、人と人との間に起らずにゐるのは、即ち此世界が平和なのは、國の場合は、或る國が他の國を打ち敗かす見込がないからであり、人の場合にはそれを抑へつける强い力が各人の頭の上に臨んでゐるからであるといふ思想は、三百七十年前のホッブスの思想と少しの變りもないものである。三百七十年前の世界に如何なる思想が支配してゐやうが、私達がその當時に生きてゐなかつたので、一向痛痒を感じないのであるが、その思想が連綿として私達の生きてゐる現代にまで及んでゐて、さうしてその思想に根抵して私達の生活を支配されるといふことになると、私達は現代人の意識を持つて、三百七十年前の世界に生きてゐるといふことになるのである。それは非常な幸福でないとすると、非常な不幸でなければならない。

無論私達は、今日では、寢るに戶を閉し、窓前に鍵を下ろすことはしても、流石に市中を步くに護身と攻擊の目的で武器を携帶する必要なく、外國に旅をするに敵陣に乘り込む覺悟を必要としなくなつたのであるが、然し私達の日常の生活——即ち平和な生活——は、私達の非常な生活——即ち戰鬪的生活——ほど尊重されてゐるであらうか。如何にも、私達は今日ではまさかに、私達の生きてゐるのは、イザといふ場合に英雄なり非英雄なりの馬前に討死する爲めであるといふ風に云はれてゐないが、つい最近まで、そんな風に云はれてゐたのであつて、今日でも、そんな風の言ひ方では云はれてゐないにしても、結局

それと同じことになるやうなことは云はれてはゐないだらうか。

生活の理想乃至其生活を構成せしめて行く知識なり、意志なり、勇氣なり、體力なりを『一旦緩急あれば』といふ非常時の豫備的生活と見てゐることはないであらうか。一般人民に對する國家の命令や教育は、果してさういふ立場を取つてゐないだらうか。而も一般人民は、さういふ國家の命令や教育以外の命令や教育を受けることを禁止され――少くとも防止され――てゐることはないであらうか。

兒童は學校で、隊伍を組ませられて、教師の號令で進退することを教へられてゐる。何の意味ともわからずさうしてゐる間に――實はその意味は、別に教科書で教へられてゐるのであるが、子供は、教科書の文句と、運動場の隊伍とを連結させるだけの智惠がないので、何の意味ともわからずに、たゞ隊伍を組んで足並を揃えてゐるのである――やがて鐵砲を渡される。さうしてそれを擔いで歩きながら、それでも亦譯が解らず無意識に嬉しがつてゐるうちに、演習と稱して、野外に出で空彈を發射することを教えられる。かうなれば、誰れでも大抵その目的を理解するであらう。それでもまだ理解しないものは、次ぎの機會に實際の戰爭に出されて、始めて今までのことはすべてがそれの準備であつたことを悟らせられるであらう

これは兒童の話である。然し私達國民の全體は、此等の兒童と全く同じ取扱を受けてゐることはないであらうか。兒童は、自分の本能的の肉體運動やそれに伴ふ精神的享樂やの爲めに運動場の兒童らしい生活そのものを享受してゐるつもりであつた。然も後になるとそれは人を鐵砲で打つか、然らざれば自身が鐵砲で打たれるか、何れかを選み取る爲めの準備行爲であることを知らしめられた。而かも多くの兒童は、長い年月の間の身體的及び精神的誘導の下に、そこまで導かれて來たので、その時はもう何等の不思儀も不滿足も不安心も不愉快もなく、その撃ち合ひに從事することが出來るのである。

それは比喩であるが、私達國民全體は、同じくそんな風に誘導されてゐることはないであらうか。若しあつたとすれば、それは私達人間の生活にとつて自然のことだらうか。自然でないにしても、道德的なことであらうか。自然でも道德的でもないにしても愉快なことであらうか。自然でも道德的でも愉快でもないにしても、それで滿足してゐられることであらうか。それらのすべてゞないにしても、人間の生活にとつて已むを得ないことなのであらうか。

私はさう質問したくなるのであるが、續くべき事には、多く

の人々は、右のやうな生活の誘導が、自然で、道德的で、愉快で、滿足で、その上――その辯といつた方が適當の筈だが――已なを得ないことであると堅く信じて疑はないかの如く、その生活の中に安定してゐるらしいのである。それほど右の誘導は完全にその役目を果してゐるのである。

三

それを軍國主義と呼んでは名稱が狹ま過ぎる。それを國家主義と呼んでは、名稱が廣過ぎる。それを戰爭主義と呼ぶのが、不滿足ながら實に近いであらう。それは必ずしも、軍事的訓練を教育の中心とするといふ意義ではない。軍國的生活そのものを生活の中心とすると云ふ意義でもない。云はゞ鬪爭の生活を、生活の最も純粹にして高度のものと解し、あらゆる生活はその生活の手前の方にある生活であると解する主義である。敢て武器を持つて隣國と鬪ふことを高調するのではなく、生活そのものゝ形式と實質とは、戰爭に於て充實し、向上せしめられるといふ哲學であり、信仰であり、政策であり、實行である。

かういふ思想なり政策なりは、要するに實社會における戰爭狀態の必要が産んだものであることは歷史の示す所である。ホツブスもマキアベリーも孫子吳子も、要するに時代の要求に應ぜんとした態度に外ならない。現代の社會に同じやうな思想傾向が存することも、矢張り現代がそれを必要とする事相を持つてゐるからである。ばかりでなく、ホツブハウス教授等が野蠻人の社會について調査した所によると、全く戰爭のない平和狀態の部落は、最も低級な野蠻狀態に在る部落に限つてゐて、それより發達の高まるに伴つて戰爭が殖えて行くのである。即ち『組織立つた戰爭は一般に産業狀態と社會組織の進むに從つて發展してゐる』のである。

このことは、人々の豫想とは全く反對の現象であるが、原始社會に於てさうであつたとは、後代の文明社會に於ても亦さうであつて、社會の進歩に伴れて、戰爭の規模の擴大することや、機械技術等の無限に進歩するとやは、如何に度數の減少を計算に入れても、戰爭の退歩と見ることは出來ないのである。

戰爭といふ形式の鬪爭がさうであるのみならず、生活の一切の方面に於て、鬪爭的樣式を持つたものが、殊に緊張した、さうして最も充實した生活であるらしいことは、現代の特徴の一つを形作つてゐるとしか思はれない。現代以前の社會では、一國内の生活に於ては、ホツブスの所謂 Common power が非常に力强かつた爲め、生活の鬪爭的狀態が此力に不便である場合には平和を强行することが容易であつた。然るに現代の國家は、個人的欲望の自由に立脚して生長したものである爲めに、

社會内の個人的鬪爭（經濟的）は、それを抑壓しないのみか、その鬪爭の上に全體の進歩を求めて來たのである。さうしてその鬪爭は所謂經濟的無政府の狀態を發生せしめて、經濟的强者の弱者に對する征服は、ホッブスの自然狀態の標準に達しつゝあるのである。その結果發生した階級戰爭の如きは、その形式に於て戰爭の壘を摩せんとしつゝある。

がかういふ狀態は、人類の生活に於て必然なことであらうか。從つてさういふ生活の方に人間の生活を誘導する現在の支配者の生活指導は、果して私達の生活にとつて自然で、道德的で、愉快で、且つ已むを得ないことなのであらうか。

人類の生活の必然若くは偶然を發見するのに、私達は、やゝもすれば、現在をその準據とする過誤に陷り易い。最も此の誤に陷らないものが、矢張り人類の歷史の或る短い部分を準據に取つてゐるのである。人類の歷史は、實は私達の知識の及ぶ範圍はその一部分とさへいふに足らない程全體に於いて長いものであつたのである。最初の類人猿から人類の部類に進化した年代を、地質學上の根據によつて、今から溯つて數えた學者の計算によると二百五十萬年乃至三百五十萬年にも及ぶといふのである。『乃至』といふのが百萬年の伸縮であることを考へても、僅か一萬年に達しない間の人類の歷史を以て、人類生活の全體と見ることとの出來ないのはいふ迄もない。で百萬年、何十萬年といふ昔の人類を知ることの不可能なる爲め、最近に及んで、他の動物の生活を研究して、有史以前の人類の生活を推定する材料とする方法が心理學や、社會學やに盛に應用されることになつた次第である。やゝ文明の芽が吹出して、如何なる高等の猿も決して試みなかつた石器の使用が人間に始まつた時が三四十萬年の昔といふのであるから、今の言葉でいふ Idea なる精神作用は、五十萬年近くの歷史を持つてゐるのである。その Idea の僅か數千年間の所産によつて人類の Idea の構成を決定的のものと思ふのは、五歲の時の帽子の大さで、一生涯の頭の形を決定しようとするよりも無謀なことである。

四

鬪爭を過重視する思想は、古代及中世の社會的必要から發生したばかりでなく、近代の科學を、その氣分で解釋することによつて、その思想が實證された如くに考へてゐるものもある。殊に生物學者や人類學者にそれが多い。

文明の始原に關する人類學的假定のうちで Lycopithecus 說といふのがある。狼猿說とでも稱すべきものである。人類をして今日のやうな文明を建設するを得しめた一切の力は、人間の祖先たる一種の類人猿が狼のやうな群生的戰鬪狀態に在つた爲

めである。言ひ換へると、或る類人猿のうちで特に肉喰の習慣を持つたものが、その獲物を漁する爲めに狼と同じ群居的生活を營んだものが、今日の人間に發達する運命を擔はせられたのである。

その說によると、人間の生活は狩獵に始まつてゐる。立つて歩くことも、獲物——多くは地を歩く獸類——を追ふことに原因する。二足で歩く爲めに手が發達する。立ち歩きと手の發達の爲めに、獲物に口で嚙みつく必要が減じると、一方で頭部が安全になつて發達が好くなると同時に、口の大きいこと、顎の强いことゝが要らなくなるので、首の下部が縮少して頭部が代つて發達する。このことは人間の進歩に最も根本的な腦髓の發達に便利である。而して狩獵の必要は、常に弱小者に向ふのみならず强大な敵に向ふので、人間は狼のやうに群を爲して敵を襲擊する必要がある。肉を食はれる動物は、大抵人間よりも大きくて强いので、それを殺すには狼群式生活が必要であつたが、その群生が、人間の社會生活の第一着であつた。此の群生團が言語を生じたのも、狩獵に於ける協力の必要上からである。言語は人間が協力に於ける意志の傳達を必要とする要求から發生したので、他の方の言語的の發音をする類人猿の言語が發達しないのはさういふ動機を缺く爲めである。即ち群生的狩獵生活のない爲めである。既にこれだけの能力を得た人間は、同時に狩獵に必要な武器の使用を覺える。武器として石器を使用するところから發火の作用を發見して、火を作るに至る。そこで殆んど、今日の人間の赤兒が產れた譯である。

即ち狼猿說は、人間の發達は、全く肉食の爲に狩獵生活に基いたもので、外の類人猿に狩獵生活のなかつたことは、彼等を永久に猿に運命づけた所以であるといふのである。知識の發達道德の發達等は、一切狩獵生活に於ける敏活、熟練、道具の工夫、節度、紀律等の必要から出立してゐるのであるといふのである。此の假定の下に於ては、人間の生活は、「戰鬪に於て最も緊張し、最も充實され、最も高度に達する譯である。

これと同じ理論上の根據に立つたのだが今日の鬪爭本位の生活觀である、殊に軍國主義の生活觀である。これらの見地によれば、社會的生活の結晶ともいふべき、最も尊むべき精神が鬪爭殊に戰爭に現はれる。のみならず、生活の節制、紀律、訓練、技術等は戰爭的行動に於てのみその極度を實現し得る。それは平和の生活が想像し得ない能率を示し、成績を擧げる。それは殆んど奇蹟を現はすと。如何にも、火事に逢つた時には、平生二人がゝりでも動かせなかつた簞笥を我れ知らず一人で舁ぎ上げることがある。それは奇蹟といふ信仰を持てば確かに奇蹟に

相違ない。從つて生活は、此の戰鬪的精神と努力とをその最上の表現と解すべきであるといふのである。

此の精神は當然に、さういふ生活の形式を實現する社會組織を謳歌する理想となる譯である。卽ちそれは軍國的國家組織である。軍國は、征服的野心とか掠奪的氣分とかを中心とする生活の如く云はれてゐるが、實は、此の生活の最高理想を實現せしめる生活の形式である。軍國的生活がなかつたならば、人類の生活が退歩し墮落することは、狩獵生活がなかつたならば類人猿は人間にまで進化出來なかつたのと同じである。社會生活は、畢竟軍國的生活完全の爲めの後方勤務に外ならない。

この理想に基けば、私の始めに擧げた生活の軍國的指導は、自然で愉快で、已むを得ないことである。米を作るのも、金を儲けるのも、斧や鋌を振ふのも、考へるのも、皆『一旦緩急』の際までの豫備行爲であるといふことは、一向人生に差支ない、立派な道理である。

五

狼獵說にも幾多の眞理はある。然しそれは軍國主義にも多くの眞理を含んでゐるのと同じである。彼等が、その緊張した瞬間に於ける生活の努力を高調するのは間違つてゐない。又その生活の努力から肉體や精神が極度の刺戟を感じてその發達の因を爲すことも事實である。然し所謂生活なるものが、たゞさういふ緊張した生活の瞬間の努力のみを意味するものでないことを想へば、その緊張狀態は、發達の因であるよりは寧ろ果であることに思ひ至るであらう。

狩獵の生活に於て、敵を殺す爲めに要する協力の動作、それに要する思考、その肉體的運動等は、人間的エネルギーの發散としては、能力限りのものであるであらう。然し生活が、その力を發揮せしめることは、さういふ演劇的の刹那に於てばかりではなく、それよりももつと恒久的な、而しもつと日常的の動作に於て、より見事な發揚があるのである。例へば手の發達に於ても敵を斃すとか武器を振ふとかいふ働をすると共に、平和の自分の子供を救ふにも、家屋を作るにも、ジエスチユアーにも使用する譯である。さうしてそれがそのうちの如何なる使用によつて發達したと決定することは六かしく、又その必要もないのである。言語でも、戰爭のやうな感情の高調する時に發するのがあり得べきことであるが、平和の生活に於て、それよりも言語を必要とする機會は決して乏しくはない。

火を作るといふやうなことは、人間的進化過程の中で最も重大なものに數へられてゐるが、それは狩獵の目的よりは寧ろ他のもつと偶然な動機によつてゐることは疑ひない。而かも、直接

狩獵に必要のないその火を得る爲めに、蠻人は一日でも二日でも火が出るまで、ゴリ／＼と石と木又は木と木とを摩り合してゐることを厭はなかつたのである。生活の必要は蠻人を狩獵に驅け廻はらせた如く、又生活の必要の爲めの他の動作にも驅け廻らせる。而してそれが、彼等の肉體と精神との發達の因を爲すことも異りはないのである。

狩獵から牧畜に、牧畜から耕作に移つたことは原始社會進化の順序であるが、地を耕して、それに種を蒔くことは、因果關係に關する思惟即ち先見の能力の遙か進んだことを示してゐるものであつて、その先見から文化は産れて來たのであるが、この先見は、狩獵や戰鬪に於てよりは、日常の生活の餘裕の間に發達すべきものである。それは後代に於て知識が多く閑散から生れたのと共通の現象である。さうして、耕作に入つた種族が、その後の人類の進化の最も有力な分子を構成してゐるのである。それに反して狩獵を離れない種族は、生活内容の進化に於ては永久に貧弱な種族として殘つてゐる。

狩獵種族の生活内容が貧弱であることは、その種族の發達の歴史がこれを示してゐる。狩獵種族は、その後の生活の運命に於いてたゞ二途あるのみであつた。その一はその狩獵生活から得た武力によつて農耕種族を掠奪征服して、その支配者となつて生活の向上を計るか、又は永久に野蠻人として殘ることであつた。

農耕種族を征服して支配者となつた狩獵種族は、生活の意義に於ては、たゞ支配と掠奪とあるのみであつた。彼等は生産の能力のない武士と發達した。さうして被征服者から生活資料の供給を得てその專門の支配を研究し發達せしめた。それが今日の多くの國家の起元なのである。而して此の支配者は眞の生活の意義を有つた生活――それは勞働による生産であること太古から今日まで變りはない――を營まずに、さういふ生活の餘澤に寄生し、その代りに、生活者の安全の保障とその指導とに任ずるといふことになつたのである。而してその種族は今日まで依然として狩獵種族即ち軍國種族なのである。軍國主義者が狼猿說と肝膽相照してゐるものは、もと／＼同族出身だからである。

六

軍國的生活に於て、生活の意義が最も充實され最も高調されるといふのは、右の私の見地からは全く顚倒的である。生活の意義は生活の勞作によつて充たされる。狩獵時代に於ても、恐らく、狩獵の過程を戰鬪として享樂するよりはその勞作に伴ふ愉樂に於て享樂したのであらう。勞作といふ點よりいへば、先見的思惟に乏しい狩獵よりも、耕作に於て勝り、耕作よりは工

業に於て勝つてゐる道理である。感情の一時の高調は、前者ほど强いが、常に生活に伴ふ恒久の喜びは後者ほど優つてゐる。狼猿說は、同情とか、友誼とか、その他の人道的感情まで狩獵の際に於ける負傷や協同やに原因せしめてゐるが、產れた子供に對する感情のやうな、道の喜びによる感情の發達は、生活の平和の間に常に發生することを考へなければならない。

狼猿說の見地の最も有力な點は、狩獵生活の効果を注目せしめた點に在る。然しそれは同說が豫期するやうに生活の進化のあらゆる契機を說明する事が出來ないのみならず、其最も肝要な契機をさへ明かにするものではない。殊に種族進化の跡を見ると、狩獵が生活の必要から離れて、遊戲化した時に顯著な人類生活の進步が持ち來たされた。それは一方では狩獵が如何に深く原始人の生活に根ざして、終ひに人間の本能中の最も强烈なものとなつたかを示してゐると同時に、狩獵を生活の必要とする狀態に在る種族が、永久に人間的進步の領域に入り込むことの出來ないことを示してゐるのである。で狩獵の本能の非常に强い種族で、それを生活の必要とすることから最も遠く離れてしまつても尙その本能の强い餘り盛んに遊戲化された狩獵を行ふ種族があるとすれば、それは可なり生活の本能的の力に富んでゐることを示してゐるといへる。英國人は卽ちそれに適當する民族である。

それと同じ意味で、戰爭の本能が非常に强く、然かもその生活に於て戰爭の必要から最も遠く離れてしまつて盛に戰爭を遊戲化してしまつてゐる民族があれば、それは中々生活力の强い國民でなければならない。この點でも今の世界のうちでは先づ英國人が、一番それに近いであらう。英國の陸軍が遊戲化してゐたことは、大戰に當つて佛國のそれや、場合によつては米國のそれに比べて遜色あつたといはれてゐる所以であらう。尤もそのことは英國民の恥ではなく、寧ろその誇りなのであるが、然し實際まだ眞正の戰爭の必要がやゝもすれば眼前にブラ下る生活をしてゐては、遊戲化する餘地はない筈である。生きる必要上狩獵に驅け廻る種族にとつては狩獵は中々遊びごとではない。さうしてその種族に容易に生活の進化を許されない。

然し今日の國家は、丁度農耕種族を狩獵種族が征服してそれを支配してゐるのと同じ形式にあるので、一方で支配者は、生活と沒交涉な又は生活に有害な行動に專らなる間に、他方では民族は、生活の意義のある生活を、困難な狀況の下で續けてゐ、發展せしめてゐる。所謂文化はその生活者の間から發生して、決して支配者の間から發生してはゐない。狩獵や戰爭は生活の刺戟劑であつて、生活の力そのものではない。生活の力は、日

常の生活の間に涵養され、日常の生活そのものに發揮される。この日常の生活の力のないものは生活の非常の機會に於て、何の力をも發揮せしめ得るものではない。

生活の理想は、戰爭に究局すべきものではなく、日常の生活そのものを目ざすべき筈である。生活の訓練も、何時か知らぬ間に戰爭に向けられてゐるといふやうなことは、戰前の獨逸で公園のベンチさへ軍隊輸送の列車中に据へるに適するやうに作つてあつたといふのと同じである。ベンチならば、それでも好いが、人間は、その人間その人の生活を産み出すべく訓練すべき筈である。猿猴說は學問上成り立たうが成り立つまいが、それは私達の生活より五十萬年も前の話であつて、何うでも好いと云へば云へる。今日の戰爭主義は、私達の時代に對し又もつと適切に私達の次の時代に對し、もし利益をしないとすると、非常の殃をするものである。

太平洋會議

ジョン・デュウイ

『改造』主幹よりの切なる依頼にて、それも私としては大に躊躇する處があつたが、然しながら私は此度の太平洋會議に關する私見を匆卒の間に認めて寄稿することにした。本問題は勿論、非常に復雜で、しかも强烈なる國家的利害問題が包括されて居る、そして理智的判斷に必要なる報道を得ることが困難であり、且つ他方には事實を有りの儘に釋明することは一層の困難を來すのである。だが善意を以て述べた意見がそのために禍害を惹起し問題をより紛糾せしめ、より敵愾心を挑發し、其の結果はいい正當に解決さるべきものが却つて解決を一層の困難に陷らしめる恐れがある。斯かる障礙あるに拘はらず、私が玆に私見を述べるのは、支那の知識階級の人々がの太平洋會議に關する意見を屢々私は聞いたことがあり、且つそれ等の支那人の意見に、私が滿腔の贊意を表するからでもある。其意見といふのは卽ち將來の世界の平和は政府者間の外交に替ゆるに、國民相互の外交を以てしてのみ保障され得るといふことである。ヴェルサイユに於ては、一般人民の希望と信念とは全然踏み躪ぢられた。そして政府者間の舊式外交が、事實上平和會議を左右して居た。此度の華府會議の結果も、それ以上に出ないかも知れない。然し國民外交の根據を、强固にする唯一の方法は、輿論を創造することであり、そして人民一般の隔意のない表明が、十分に行はれなくてはならねことだ。自由なそして隔意のない評論さへ、十分あつたら、總ての重要なる事實は、早晩明るみへ持ち出され、各方面に於ける確執の內容は暴露され、そしてそれが相互に相殺されて玆に確執が全然霧消するだらうと思はれる。

私の考察によれば、太平洋問題には、四人の主要なる立役者がある。それは卽ち支那人、日本人、米國人並に露西亞人（若

くは西伯利亞人)である。四人のうちから英國人を省いたのは、彼等が決して、重要な人物でないと云ふ意味ではない。英國人の立場は四國の立場と異る所がある、それは即ち日米兩國人に對する共利益關係を、夫々、整理することであるとは、萬人の承認する處であるからである。私は是等四人の立役者のうち、專ら支那人に關することを、論究しようと思ふ。

私は、千九百十八年の秋即ち歐洲大戰の終熄になつた日からといふものは、母國を離れて居るから、母國に於ける本問題に對する輿論並に意向に就いては、何等知る處がない。併し私は玆二箇年間、支那に在住し、其十一省を跋渉してゐるから、支那人の輿論並に意向に就いて、研究する機會は十分あつたことを、斷言して憚らないのである。だから若し、私が其輿論なり、意向なりを、紹介するに當つて、間違があるとすれば、其責は全然私にある。

最近私は或る日本の思想家が、私が米國の公衆に發表した支那問題に關する意見に對し反駁を加へて居るのを讀んだ。其或る點は本文と密接なる關係がある。同思想家の意見に從へば、私の間違の根本は、私が『東洋の平和は米國の干渉を加へざる日支提携によつてのみ保障される』ことを、承認しない點にある。勿論私は、太平洋に於ける將來の平和と繁榮との鍵鑰は米國と云はず、將た日英同盟と云はず、總て他の干渉を加へざる日支提携にあることを衷心より信ずる。併し其提携なるものは、正直で且つ、誠意あるものでなければならぬ。即ち兩國の利益の爲めには、眞實に共同的の步調を、取るのでなければならない。支那人の現時の意向は、支那人の側から見ての日支提携の障碍物たる二三の原因を、列擧することに依つて、說明することが出來ると思ふ。此原因を列擧するに當り、支那人側の意見が、何處まで正確であるかは、斷定しない積りである。けれど有らゆる階級に、共通して居る意見であるといふことは確かである。それは事實だ、そして事實である點は、間違つた處を矯正するといふ意味からでも、記述しなくてはならない。漠然とした概念を避ける爲めに、支那人の意見で、重要なる諸點を逐一に述べてみたい。

第一。一般に信ぜられつゝある處に依れば、日本人は特に滿洲

及び山東方面に於て、積極的に支那の馬賊を奬勵し、且つ援助して居るといふことである。それは日本の役人が、武器や彈藥の支那への輸入を管理して居るのだから、左うしたことは不可能ではないかと說明すれば、役人が管理するといふ其自體が、正しく贓物であるのだと支那人は答へるのである。彼等支那人の云ふ處を要約すれば、日本政府、少くとも、陸軍側に於て直接、其事件に關係があると云ふのである。そして其目的とする處は、一般より觀察して支那を疲弊若くは分離せしめて、特に警察權を擴張し駐屯軍を增派する口實を、求めるのにあるのだと云ふ。

第二。支那人の主張に依れば、日本は組織的にモルヒネ其他の有害藥品を支那に輸入し、且つ、其取引を援助して居る。そして日本政府少くも、陸軍側は其責があるが、その利益金を以つて支那の領土占領の費用に充當する爲めと、支那人の一生をしてかかる生活に耽溺せしめ、その體力を衰弱せしめ、併せて其國力を疲弊させる政策であると云はれて居る。

第三。極く最近まで、日本の當局者は、支那の內訌を積極的に煽動し、或時は孫逸仙の如き過激なる革命家を援助し、又或時は他の地方で、復辟を望んで居る連中を援助した。金錢武器又は直接軍事行動で南北兩派を援助して、內亂を繼續させたこともあり、北方の或一派を支持することに依り、他を制し、若くは兩派を共に支持したこともある。而して是等の行動は、支那を南北に相對峙せしめて、安定のない國家として、劣弱なる地位に置いておく爲めに、企てられるのだと一般に信ぜられてゐる。

第四。日本は支那に、經濟的立脚地を得て、經濟的に支那を征服せんが爲めに、壓迫と墮落との兩手段を、採用せりと一般に、信ぜられる。卽ち日本は、其進步せる工業と、支那に近接せる地理上の自然的優越を利用して、福利と勢力とを、正當の方法で增進して行く財政的乃至工業的見地では滿足が出來ず、權力と詭計とを濫用したといふのである。支那の當局者が、無能で腐敗してゐることは、有名なる事實である。之に就ては、支那人少くとも、知識階級の人々は其責任が支那人自身にあることを承認してゐる。併し彼等の苦情は、日本が其聲明しつゝある

親善と、隣邦としての援助を以て、此狀態より支那を救濟せんと實行する代りに、組織的に、支那の弱點に附込んで、支那の經濟的資源の完全なる專有權を、獲得する目的で、居留地、鐵道、鑛山其の他原料品の管理權を得やうと努力したと云ふのである。支那人の言に從へば、日本に二樣の經濟的對支政策の中其一を選定する機會を持つて居た。其一は、工業並に商業上の利益は、究極に於ては、日支共通的で、そして日本の分別ある利益は、支那に平和的且つ、能力ある政府の發達を促し、其資源の開發に必要なる資本と、專門的技術とで支那人を援助する方針である。他の方針は、眼前の利益を目標として、支那の資源と其工業的勞働力とを出來得る限り、日本が利用することである。日本は後者を採用し、其目的を達する爲めには、壓迫、陰謀、役人への賄賂等の有らゆる手段に訴へたさうである。

最後に、支那に於て一般に信ぜられてゐるが、日本の目的とするは、支那の政治的並に軍事的征服であつた。此信念を生むだ、主なる理由が三つある。一は、二十一箇條の要求、二は昨年の夏沒落するまでの安福俱樂部一派に對する後援並に之に伴ふ不生産的目的の爲め起されたる多大の借款、而して其借款の唯一の目的は支那の有名無實の支配者たる北京に於ける官吏に對し日本の支配權を確立し依つて以て支那をして全然日本に依賴せしむるにあつた。政府の後援を有する銀行家等が大部分は腐敗せる官吏の懷中に入るものなるを知りつゝも、投資者の爲めには充分なる經濟的保障を欠ける借款を締結した事に對し如何なる推測を爲すべきであらうか。支那人側の推測は關係ある日本人は支那の官吏を其愛犬となし、以て日本の意志を遂行するにある。併し彼等日本人の興したる借款に對する基礎的保障は財政的のもので無く寧ろ政治的のものである、即ち日本人は是等借款に依つて支那を政治的保護國の狀態に陷入れ、そして彼等が無謀なる保障無き借款に依つて受けたる直接の損害を結局回復せようとするのであると云ふにある。第二は彼の秘密軍事協約であるが之は支那が戰爭に參加したる後日本と當時北京を支配たる安福俱樂部の代表者との間に締結せられたものである。日本贔負として知られたる著者チエー・オー・ピー・ブランド氏の如き人さへも、其の最近の著書に於て此秘密協約の支那人

の對日態度に及ぼす破滅的結果に就て述ぶる所があつた。然るに日本に於ける思慮ある輿論は此協約の性質並に其影響に關し如何程まで考究する所ろがあつたらふか。

かくした三の事實の綜合的結果は澤山の小事實と相俟つて日本の目的は支那を保護國の地位に陷入れ而して間接か、さもなければ直接に日本の意志が支那の政事並に軍事を支配するとゝならしむるにありとの一般的信念を生ぜしめたのである。

さて私は讀者の多數が上述の諸節を讀み了つた頃には非常に激昂せらるゝ事であらふ。と思ふ、彼等の觀測では上述の諸點は皆日本に對する憎惡嫉妬から案出された舊聞に屬する凡ての宣傳を集めたものに過ぎないと云ふであらう。併し私は玆で繰返して云つておくが私は上述諸節中に含まれた事實又は虛構的諸點、又は明白なる事實よりの推測が果して正當であるか否やに關して今更彼此云ふのでは無い。私の斷言する所は以上の文章に依つて對外關係に就て多少なりとも意見を有する支那人間の現在の一般的態度が正確に表示されて居るとである。

支那の共通的態度―それは日本に對する恐怖である。即ち其恐怖は非常に強烈で、深刻であつて凡ての意見、信念若は推測は皆此恐怖を以て着色されて居る。恐怖は疑惑と誇大妄想とを創造する原因となる。併し如斯恐怖の存在して居るとは疑ふべからざる事實である。日本の雰圍氣で支那の日本に對する恐怖と不信任との程度と深さとを諒解するとの困難否不可能なるは丁度中夏の炎天に冬の寒冷を實感するとの困難なるが如きものである。けれども此恐怖心の存在を疑ふ人は支那に行つて相當期間滯在し支那國民の各階級の人々と接觸し、彼等が自由に談話する程度に彼等の信用を得る必要がある。

支那の現今の態度の背後に伏在する主張に如何ほどの眞理があるかは爰に問題とはしないが、此點を處理する方法のあることに關し一言する必要がある。

日本に於て、屢々此支那人側の現在の態度は多少外國、殊に米國の感化の結果であると思はれて居る。此信念は有害である、米國に對するよりも寧ろ日本に對して有害である事實に關し、瞞着に基いて判斷を下すとは勿論何時でも有害であるが、殊に此特別なる信念は大なる迷妄の結果である。それは支那と日本間

に眞の諒解を得るに就ての困難を増加するのみである。支那人は現今弱點多きにも拘はらず、自尊心がある、滿足せる且つ自給自足の國民である。外國人が支那の國民思想の重要なる部分に感化を與へようといふのは全然不可能の事である。支那に於ける排日思想と運動とを外國人の感化に歸せようとするは支那人の心理に對する深刻なる誤解を示すものである。此心理を今一層良く理解することは日支親善の前提であつて東洋將來の平和を確保する所以であるのである。

恐らく讀者は上述の諸節は本文の表題即ち太平洋會議に對し如何に適用すべきかとの質問を發せらるゝならん、私の考察では日支兩者の關係は至極密接なるものであると思ふ。目下の處、日本と米國との間にも直接には格別、重大なる問題は無い、兩國の間に海軍の軍備擴張の競爭を刺戟するが如き重大なるそして必迫せる問題はないのである。隔意無き告白の爲めには將來の難問題の主要原因は亞細亞大陸に伏在して居ることを承認する必要がある。支那は脆弱である。目下の處自己を保護するには餘りに虚弱である。故に支那は益々米國に向つて救濟を求めつつある。それは決して米國の宣傳の結果でもなければ、又合衆國が採つたる行動の結果でも無い。原因は支那が日本から支配され、而して實質日本に侵略さるることを恐れてゐることにある。之に反し合衆國は現今の日本を恐れては居らぬ、又將來恐れもしまい。併し、若し日本の大陸方針が侵略的であると信ずる場合は米國は、其海軍力を増加し、そして軍國主義的發展を見ることになるであろう。問題の根本に觸れず政治の方針と主義との確立に基かざる軍備撤廢の論議は單に姑息的で而して其効果は一時的である。軍備撤廢並に平和の鍵は日支兩國間に眞個の友情的協力關係を確立するにある。如斯關係は唯日本の力に依つてのみ之を確立することが出來る。日本は眞に其準備があり、而して必要なる手段を採るの決心があるのであろうか。太平洋會議の眞の効果―それは一に懸つて此質問に對する答にあるのみである。（一九二一・八・一六執筆）

嵐の前

◇重版復

◇四六版最上用紙天金函入美本◇

吉江孤雁氏評して曰く……故人の遺稿を校正してゐる間、ところ〴〵で、深く感じたことは、次のやうなことであつた。「人が四十の坂を越す頃から、當然踏まねばならない一つの運命がある。それは一生のうちに二度とない大きな危機である。その時我等の肉體にも精神にも、徐々たる然かも深甚な、犯すことのできない組織の變化が起る。我等の肉と心とは一度壊はされて更に新らしく築かれねばならぬ。」そのほかに或は「死」か「再生」かを說き、中年期の心理狀態の變化とに對する叡智の目醒めを說き、時には、冷たい夕の霧の中に浮ぶバザロフの墓をやがて大地の愛を、そして、はつきりとつかみ得た一層確かなる自己の理想の徐々に、極めて徐々に實現せられるかすかなる

◇東京芝區櫻田備前町

生田長江氏　昇曙夢氏
野上臼川氏　森田草平氏　著

近代文藝十二講

■四六版總洋布製
紙數四百七十頁

■價貳圓參拾錢
郵送料拾貳錢

最新刊

文學者たる根本修養

本書は近代文學に就きて、其の思想の方面より其の作品の方面より系統的に精到明快の講述をなせるもの也。近代思想の推移と發展と說いて、藝術上のあらゆるイズムと傾向とを詳述し、西洋諸國の近代文壇の大勢を說いて、人と作との總てを網羅し、その抽象的總論をその具體的各論と相俟たしめて、近代文學の全景を鳥瞰的に展開す。この一卷を讀破すれば、近代文學の情勢を立地に會得す可し。從來文藝に關する幾多の論述講話等の書あるも、斯くの如き大規模の下に編まれ、斯くの如く一切を說き盡せるものは、眞に空前といふ可し。說述は極めて平易、いかなる人にも難解の憂あるなし。

東京牛込矢來三番地
振替東京一七四二番
新潮社
電話番町八〇九番
九三六番
八九九番

九月増大號創作

◇切支丹ころび　高倉輝
◇或る男　武者小路實篤
◇章美雪女士之墓　佐藤春夫
◇顏（譯詩）　有島武郎
◇初秋雜筆　室生犀星
◇病床　久米正雄
◇朱き机によりて　里見淳
◇生れた家　谷崎潤一郎
◇心中　宇野浩二



切支丹ころび（五齣）

——「女人焚殺」三部曲ノ一——

高倉輝

人物

有馬右衛門ノ佐直純
お假名の方
千々岩清左衛門
乳母
堀越後ノ守忠俊
蛇皮線ひきの法師
侍臣腰元大勢

時。

慶長十七年九月十三日より十四日へ
（西暦千六百十三年十月）

所。

肥前ノ國有馬城内

一　齣

城内の一間。

向う一杯に障子締め切りあり。

暮れ方近く。

秋の夕日一面にあかあかと障子に差し居る。

千々岩清左衛門（城主有馬ノ佐直純の大伯父、大村家の老臣、四十二歳）以前直純の乳人なりし老女に導かれて出づ。旅の裝束。今到着したる所。

千々岩、今は容色衰へたれども尙ほその昔涙男の譽れ高かりし俤殘れり。

乳母は五十餘りの木訥なる老婆。

兩人とも極度なる心の激動を辛うじて抑へ居る樣子。端坐して相對したるまま暫く無言にて只だ顔を見合ひ居る。

稍や長き間。

乳母。（おろおろと泣く、）千々岩さま。

千々岩。乳母。これは一體どうした事なのだ。あの群衆はあれは何だ。あの怖ろしい群衆はあれは何だ。

乳母。（倒れて）あれ、まあ、千々岩さま。それではお前さまは御存じではございませぬのかいな。その爲に有馬へお越しなされたのではございませぬのかいな。

千々岩。いや、拙者は何にも知らぬ。知らねばこそあの夥しい群衆を見て只だ愕いて居るのだ。

乳母。あれ、まあ。私はまた丁度の折にお前さまがお出でなされて、てつきり其の爲だとばかり存じましたが。

千々岩。いや。拙者が參つたのはちと人を尋ねる爲にだ。ふむ。ことに依るとその者もあの群衆に交つて來たのかも知れぬ

のだな。實はの、乳母。俺はこの中から五島の方へ行つて居た。やつと昨日大村へ歸り着いた所なのだ。所が、その拙者の尋ねる者と言ふのを此の有馬で見た者があると言ふ噂をちらと耳にした。それで直ぐその足で復た大村を立つて馬を驅けたのだ。

乳母。はれなあ。それではなあ、御存じの無いのも御道理でございまするわい。(泣く) 千々岩さま。此の度はなあ、復たなあ、お前さま。

千々岩。乳母。一體有馬には今何が起こつて居るのだ。拙者は全く愕いた。口の津からこつちの街道と言ふものは丸で行列の切れ目が無い。それが狂人の行列かなんぞの様に只だ一心に前を視つめて有馬の方を差して來るのだ。口一つ利く者も有りはしない。俺は何とも言へぬ怖ろしい氣持がした。また有馬の町に這入つてからの人と言ふものは無い。丸で此の城下中が群衆で埋まつて居るのだな。それが殘らず大地の上に坐つて皆一心に禱つて居るのだ。乳母。一體これはどうした事なのだ。

乳母。千々岩さま。それはもう申し上げるのも怖ろしい事でございまするわい。昔から驗めしの無い怖ろしい事でござりまするわい。

千々岩。さては何だな。右衛門ノ佐どのが復た切支丹の成敗だな。

乳母。はい。それでござりまするわい。それがな。お前さま。この度は復たな。(泣く)

千々岩。(眉を顰めて) ふむ。何かまた特に慘たらしい爲置きの途でも新たに考へ出されたのか。

乳母。いえ。いえ。さうではござりませぬ。それならばまだしもな。千々岩さま。此の度はな、御家老を三人までもな。

千々岩。(愕然として) え。家老を三人も。家老三人を爲置きにすると言ふのか。

乳母。はい。高橋さまに藤田さま、それから武富さま。何れも譜代のお家柄ばかりでござりませうがな。その御家族合はせて十二人を御爲置きになるのでござりまする。

千々岩。え。家族までも合はせて。

乳母。はい。それがもう明日の夜でござりまする。あすの晩の五つを打つが合圖でござりまする。

千々岩。(悄然として居る。)

乳母。千々岩さま。何とかあなたのお力でお留め申す事はなりませぬか。私は、私はな、私のお乳を上げた殿さまが地獄へお落ちなされるのを見るのが辛うござりまするわい。(聲を擧げて泣く。)

千々岩。さうか。その爲のあの怖ろしい群衆か。敎へに殉ずる人達の最後を見よう爲めのあの群衆だな。

乳母。はい。左様でござりまするわい。はるばる長崎や平戸あたりから來る人も多いと申す事でござりまする。もうな。お城の中も丸で火の消えた樣に誰一人大きな聲一つ出す者も有りは致しませぬ。

千々岩。併し、乳母。右衛門ノ佐どのは一體どうしたと言ふのだ。どうして又急にその様な怖ろしい事を思ひ立たれたのだ。何か。お假名の方が勸められでもしたのか。

乳母。いえ。いえ。さうではござりませぬ。奥方さまのお所爲ではござりませぬ。世上では、殿さまがあの樣にでいゆすの敎へを御糺命遊ばされるのを何か奥方さまのお所爲の様に申して居りますけれどもな、その様な事は露ほどもござりませぬわい。奥方さまはな。でいゆすの敎への事などはお口に出されは致しませぬ。

千々岩。はてな。それは何とも不思議だな。拙者もこれまでさうとばかり思つて居たが。さうか。それでは右衛門ノ佐どのが自身で思ひ立たれた事だな。

乳母。はい。全く左様でござりまするわい。それがな。千々岩さま。何とも怪體な事がござりましてな。

千々岩。怪體なこと。

乳母。千々岩さま。殿さまは犬にお噛まれなされましてな。

千々岩。はあ。犬にな。

乳母。あの奥方さまのお犬でござりまするわい。あの御寵愛の獅子丸でござりまするわい。あれがこの中から氣が立つて居りましてな。殿さまのお手に噛みついたのでござりまする。

千々岩。はて、それは又ひよんな事だな。

乳母。あのお犬はな、千々岩さま、奥方さまが前に春日山の越後ノ守さまのお所へ參られた頃からお連れなされたお犬おやげにござりまするわい。

千々岩。併し、その犬に噛まれたのがどうかしたのだ。

乳母。いえな。それから殿さまが俄かにお惡くおなりでござりましてな。夜に入るとお熱が燒けろ様にお高うござりましてな。ほんに一頃はどうなる事かと存じました。

千々岩。さうか。それは拙者はちつとも知らなかつた。で、今はどうだ、もう餘ほど快いか、

乳母。はい。今ではもう快くなられて起きてお出ででござりまする。（聲を秘めて）その殿さまが一番お惡い絶頂でござりましたよ。俄かに五人の御家老衆をお呼び出しになりましてな、そち達が今御禁制の邪宗門たるでいゆすの教へを内密に奉じて來た事はこれまで存じながら許して置いたが、今即刻捨てれば良しさも無ければ直ちに法に照らして一家殘らず焚き殺すとの御諚でござりました。

千々岩。そして、あの三人が承知しなかつたと言ふたな。で、他の二人はどうした。

乳母。はい、野々宮さまと山添さまのお二方だけは澁しぶ御承諾なされましてな。それでも、それから御病氣と仰しやつてお二方とも御出仕はござりませぬ。

千々岩。いや。右衛門ノ佐どののされる事は拙者などには迚も分からぬ。一體此の中からのあの嚴しい切支丹の糺彈と言ふものは迚も正氣の人の爲る事で無い。逆磔、鋸びきはまだしも、火炙り、逆さ吊り、鍵踊り、それからあの怖ろしい溫泉の地獄落とし。聞いてさへも全く身の毛がよだつ。いや。とに角、右衛門ノ佐どのに會はなくては分からぬ。乳母、右衛門ノ佐どのはどこぢや。

乳母。千々岩さま。殿さまはまだ御寐なされてでござりまする。

千々岩。なに。休んで居る。（不快の色を現はして）今ごろどうして休んで居るのだ。しかも此の騷ぎの際中に。

乳母。それがな。此の間の御病氣から殿さまは夜はとんとお休みになれませいでな。やつと今ごろに少しうとうととなされるだけでござりまするわい。
千々岩。（色を直して）さうか。それではまだ直り切つて居るわけでは無いのだな。
乳母。はい。お熱だけはもうすつかり取れましてござりまするけれどもな。（急に不安な表情をして聲を秘める。）千々岩さま。私はもう心がかりでなりませぬわい。殿さまはな。ひよつとすると本當にお心が狂はれるのかも知れませぬわい。
千々岩。（どきりとして、凝つと乳母の顏を覗返しながら）乳母。何かその樣な事でも有るか。
乳母。それがなあ。殿さまは毎夜夜半すぎになりますと、凝つと耳をお澄ましになりましてな。何か一心に聞いてお出でなさるのでござります。その癖何にも聞こえは致しません。その時のまあ殿さまのお顏の氣味の惡いことと申しましたらな。
千々岩。ふん。しかもそれが毎夜か。
乳母。はい。毎夜極まつて同じ時刻でござりまする。それにな。昨夜は復た怪しい事がござりましてな。突然殿さまは眞つ蒼なお顏をなされましてな。おからだがぶるぶる震へてお出でになるのでござります。そして、早く燭臺を持て、有りだけの燭臺を持つて來て部屋一杯にしろと仰しやりましてな。
千々岩。（甚しく不安な顏をして）何でまた其の樣な事を言ひ出したのかな。
乳母。どこにも俺の影のつかぬ樣にせい、俺は自分の影を見るのが厭ぢやと仰しやりましてな、せいせい息を切らしてお出でになるのでございます。
千々岩。（凝つと前を覗つめて考へて居る。）
（稍や長き間。）
（稍や離れて犬の啼き聲聞こゆ。續いて口笛の音それに混つて聞こゆ。やがて止む。）
乳母。（ふとそれに耳を傾けて）そして、何かと言つては殿さまは奥方さまに辛くお當りになるのでございます。

千々岩。奥方に。（意外なる面持にて）右衛門ノ佐どのがお假名の方に。

乳母。はい。殊にあの鞭でお撲ちなされましてな。

千々岩。（愕いて）撲つ。鞭で。

乳母。はい。あの革の太い鞭でな。（おろおろと涙ぐんで）私はもう何よりそれが心がかりでござりまする。萬一その様な事が駿府の方のお耳にでも入りましたら、ひよつと又お家のお大事になりは致しませぬかと存じましてな。

千々岩。まさかにそれ程の事も有るまいがの。

乳母。いえ、いえ。何とも申されは致しませぬ。何を申すにも奥方さまは大御所さまのお孫で入らせられまする。早い例へが先との修理太夫さまのあの非業の御最期が何よりも好い験めしでござりまするわい。

千々岩。それはさうだ。世上でも専らさう噂を致して居る。修理太夫さまが密かに破天連に通じて怖ろしい陰謀の企てがあるとお假名の方から大御所へ讒訴せられたのが先殿のあの無残の御最期を遂げられる元になつたのだとな。

乳母。（はらはらと泣く。）千々岩さま。これはどうなる事でござりませう。有馬のお家は斯うして末にどうなるのでござりませう。

千々岩。乳母。拙者は寧ろ怖ろしうなつた。ああ。これと言ふのが元は只だ右衛門ノ佐どのがあのお假名の方を貰ふ心になられただけが始まりなのだ。右衛門ノ佐どのが元のなるたどのを棄てて今のお假名の方を娶る心になられたのが斯うして此の様に怖ろしう變る元なのだ。

乳母。その通りでござりまするわい。その通りでござりまするわい。それから殿さまは俄かにでいゆすの教へから轉宗なされて領内の切支丹を御糺命なされる様になられたのでござりまする。先殿さまが甲斐の國で御自害なされてからは尚ほお心が怖ろしうなられてとうとう了ひに此の様な事になりましたのでござりまする。

千々岩。いや、のう、乳母。右衛門ノ佐どのも初めは其の積りでも無かつたので有らうがの。やはり不思議な力に押し流されていつの間にか斯ふ言ふ事になつたのだと俺は思ふ。あの時は修理太夫さまが邪宗門信奉のお咎めで改易の上に甲

娶の國へ御閉門仰せつけられた時なのだ。あゝしてお假名の方を娶らなければ此の有馬の本領安堵が出來なかつたのだ。俺はやつぱり誰よりも氣の毒なのは右衛門ノ佐どのだと言ふ氣持がするのだ。

乳母。ほんにさうでございまするわい。殿さまは元もと好いお方でござりました。元はなあ、あんなに好いお方でお有り爲された殿さまが今はあの樣におなりなされて。（さめざめと泣く。）千々岩さま。私は昔が戀しうござりまするわい。只だ昔が戀しうござりまするわい。

千々岩。乳母。まるたどのは、やはりあの禮拜堂に居られるのだな。

乳母。はい。千々岩さま。誰よりもお氣の毒なのは先の奥方さまでござりまするわい。あのお心の美しい、け高いお方があゝしてたつたお一人淋しい禮拜堂の中に押し籠められてお出でなさるのでござります。（聲を擧げて泣く。）殿さまもな。あの元の奥方さまといつまでも御一緒にお出でなされましたら、此の樣な事になりは致しませなんだのにな。そしたらいつまでも御夫婦のお仲も睦まじうにな。

千々岩。いや。乳母。これは世の中が變つたのだ。是非が無い。誰の力にも及ばぬ事だ。結局は只だ大御所の心にある事だ。（凝つと前を視て）俺がろおまの使ひから歸つた頃から世の中が變つた。いや。俺がろおまへ立つた留守の間にもう變つて了つて居たのだ。

乳母。（千々岩の顔を見上げて）ほんになあ。お前さままでがその樣にお變りなされて。切支丹のお使ひでわざわざろおまの法王さまのお所までお出でなされたお前さままでがなあ。でいゆすの教へから轉ばれて。

千々岩。（凝つと乳母の顔を正視して）乳母、今は何にも申すな。そちはまだ知らぬのだ。（短き間。）

乳母。千々岩さま。まだ覺えてお出でなされまするか。あのお前さまが御出發の折に今の殿さまに教へ名をお上げなされて。

千々岩。覺えて居る。拙者の教へ名をそのまま右衛門ノ佐どのにみけえるとつけた。

乳母。あの時には殿さまはまだたつたお二つでござりました。

千々岩。さうだ。あれが天正十年の正月の末であつた。拙者の船のいにやあす・りまが長崎を立つたのが丁度正月の卅日であつた。

乳母。ほんになあ。お前さまもお船に寄られましたなあ。あの時あの晴染めのお袴をお召しになつたお姿と言ふものは誰も見返らぬ人の無い程にお美しいお若衆でございましたがなあ。それな。あの時先の大殿さまが寒い風の吹く中をあの御門の所まで送つてお出でなされましたな。

千々岩。さう。さうで有つたな。自分で今の右衛門ノ佐どのを胸に抱いて送つて來られたな。

乳母。そして其殿さまが今の殿さまのあどけ無いお顔を御覧になりながら仰せられました。此の伯父さまは世界中の誰よりも尊い方のお手を頂きに行かれるのだ。お前も伯父さまに肖かつての、みけえると。そして涙をほろほろお流しになりました。私は今でもあのお言葉をよう忘れませぬ。その殿さまがな。今はああ言ふ事におなりなされて。（涙に咽んで泣く。）

千々岩。拙者が日本へ歸り着いた時には、右衛門ノ佐どのはもう適れの若衆であつた。それから間も無く切支丹御封度のお觸れが出た。

乳母。（そつと涙を拭く。）

（長き間。）

（障子に女の影映る。）

（澄んだ口笛の音高く響く。）

乳母。（振り返つて）お。奥方さま。

お假名の方。（障子の外から）乳母。そこに居たのかえ。まあ、あれを御覧。あの夕日の美しいことを。

（乳母、障子を明く。）

（直ちに遠く筑紫灘を望む。海上に孤島湯の島の影小さく見ゆ。晴れたる秋の夕日一面に海の上に差せり。）

（お假名の方（奥方、家康の孫女、卅二歳）縁に立ちて、半身斜めに入日をうけながら海を眺め居る。）

乳母。もし。奥方さま。千々岩さまがお見えになりました。

お假名の方。（振り返つて）え。どなたが。どなたが見えたと言ふのだえ。（明るき所より部屋の内見えざる樣子。まぶしげに目を細めながら部屋の内に入る。）

千々岩。お假名の方。拙者でござります。大村の清左にござります。

お假名の方。（惘然として）え。千々岩さまが。（つと寄つて千々岩の前に端坐す。）

千々岩。（少しく座を下つて丁寧に會釋す。）

お假名の方。（形ばかり會釋を返して、凝つと千々岩の顏を視つめて居る。）

千々岩。（度を失ひて少しく惘れたる樣子。）

（短い間。）

乳母。（立ち上る。）それでもなあ。千々岩さま。ほんに好くお出でなされましたなあ。殿さまがまあどの樣にお喜びでござりませう。この中から殿さまはお前さまの事ばかり申されましてな。

（乳母、廊より出て行く。）

（稍や長き間。）

お假名の方。（やはり凝つと千々岩を視つめ居る。）

千々岩。（その眼を避ける樣にして）右衛門ノ佐どのは、少しく御不快の趣で有つたげにござりますな。

お假名の方。はい。私の獅子丸が右衛門ノ佐の手を嚙みましてな。

（間。）

千々岩。（つぎ穗無げに）もうすつかり秋でござりまするな。此の前拙者が有馬へ參りましたのがあれが五月でござりましたが。

お假名の方。はい。五月の十八日でござりました。先との修理太夫さまが甲斐で御生害遊ばされた夜でござりました。右衛門ノ佐と三人でお通夜を致しましたな。やはり此の部屋だ。

千々岩。（ふと顏を擧げてお假名の方を視る。直ぐ眼をそらす。）さ樣でござりました。あの時にはまだあの湯の島が若葉で埋れて居りましたがな。早いものでござります。

お假名の方。（眼を伏せて）あの時初めて私はあなたにお目にかかつたのでございました。あれから又今日までお目にかかりませなんだ。（ふと顏を擧げて）千々岩さま。あなたはいつまで有馬にお出でござります。

千々岩。さ樣。いつまでと言ふ事もござりませぬがな。實はちと尋ねたい者がござりまして。

お假名の方。お尋ねになりますのは。何か罪人でも。

千々岩。いや。罪人などではござりませぬ。拙者が前に召し使つた者でござりまするがな。（凝つと考へて居る。）

お假名の方。（首を傾けて、子供の樣に無邪氣なる調子にて）千々岩さま。どうぞいつまでも有馬に居て下され。

千々岩。（はつと顏を擧げて訝しげにお假名の方を見る。）

お假名の方。（急に沈みたる調子にて）千々岩さま。この間うちから私はそれは何とも言はれぬ不思議な淋しい心持がしてならぬのでござります。それは迚も口にも言葉にも出して言はれぬ、私自身にさへこれ迄に覺えの無い樣な心持でございます。

千々岩。（只だ訝しげにお假名の方の顏を見て居る。）

お假名の方。（凝つと目を伏せたまま）それはたつた一人で冢穴の中へでも落ち込んで行く樣な淋しい心持でございます。たつた一度、それもたつた一度だけ私は斯う言ふ心持になつたことがございます。それは私が春日山から歸る少し前でございました。

千々岩。春日山と仰せられますか。

お假名の方。はい。すると間も無く越後ノ守が亂行の罪で能登へ流されました。（やはり面を擧げず靜かなる調子にて）私は

私の此の様な心持になるのは何か怖ろしい事の起きる前兆の様な氣持が致します。
千々岩。（ぞつとしたる樣子にてお假名の方の顔を眺め居る。）
お假名の方。（やはり同じ調子にて）此の間うちからふとさう言ふ心持が胸に湧いて私はもう押へ切れぬ切ない氣持が致します。それに私には話しを致します相手さへございません。只だあの獅子丸だけを友達にして。
（獅子丸と言ふ聲がすると同時に廊の向うで犬の低く唸る聲聞こゆ。）
お假名の方。（振り返つて）獅子丸や。そこに凝つとして居るのだよ。
（犬の聲直ぐ止む。そして阿ねる樣な低い聲に變る。）
お假名の方。前に丹下が生きて居る頃には、丹下が私の友達でございましたが、それも死んで了つて。
千々岩。丹下と申しますると。
お假名の方。私が駿府から連れて參りました爺やでございます。私のまだ赤子の頃から私の傍近く仕へて居りまして、春日山へ參りました頃にも一緒に連れて參りました。それを右衛門ノ佐が斬つて棄てたのでございます。
千々岩。斬つて棄てた。右衛門ノ佐どのが、
お假名の方。はい。それからはもう私の友達と言ふのはあの獅子丸だけでございました。その獅子丸までがとうとう氣が狂つて。（ふと顔を擧げる。千々岩と顔を合はせる。凝つと覗て居る。忽ち顔色生き生きと輝く。首を傾げて）ほんに好い時にお出で下されました。千々岩さま。どうぞいつまでも居て下され。
千々岩。（愕然と身を引く。）
（乳母、入り來る。）
乳母。奥方さま。殿さまがお眼覺めになりました。
お假名の方。（無言のまま靜かに立つて入る。）
千々岩。（その迹を見送つて居る。）

（稍や長き間。）

（外の夕日次第に薄らぐ。）

千々岩。（低く）乳母。お假名の方は一體どう言ふ方なのだ。

乳母。どう言ふ方と申されますると。

千々岩。（考へる。）ふむ。拙者には丸で分からぬが。

乳母。（聲を秘めて）千々岩さま。御存じでござりまするか。奥方さまのお父上の御最期の様子を。

千々岩。いや。詳しくは知らぬ。只だ岡崎の三郎どのは心が狂つて狂ひ死に死なれたとだけ聞いて居る。

乳母。それがな。只の御狂氣では無いと申しまするわい。

千々岩。はてな。只の狂氣で無いと言ふと。

乳母。犬の祟りぢやと申すことでござりまするわい。

千々岩。え。犬の祟り。

乳母。はい。私はな。千々岩様。それは怖ろしい氣持が致しまするわい。殿様がやはりあの様にお手をお噛まれなされて。

千々岩。何を莫迦な。愚かな事を申すもので無い。

乳母。いえゝいえ。さうでござりませぬわい。そのお娘子の奥方さまにやはり犬の祟りが添つて居ると言ふ事でござりまするわい。その證據にはな。越後ノ守さまがあの通り亂行の爲にお家をもお身をも滅ぼしてお了ひなされました。そしてとうとう能登からお行方が知れなくなりました。それもな、みんな。

（邸より右衛門ノ佐直純（城主、卅四歳）急ぎ足に出づ。甚しく憔悴して而も異常に緊張したる面持。左の手首を白き布にて卷き居る。腰に長き紐をつけて革の太き鞭を下げ居る。）

直純。（づかづかと千々岩の傍に寄る。）清左の伯父御。

千々岩。（振り返つて）おお。右衛門ノ佐どの。

直純。(涙ぐんで)好く來て呉れたのう。伯父御。俺はどれだけお身に逢ひ度かつたか。

千々岩。(やはり思はず涙ぐんで)ほんにお身はひどく窶れられたの。不快で有つたと聞いたが。

直純。伯父御。俺は犬に嚙まれてな。(卷いた手を示して)この樣な莫迦げた話しが有るもので無い。あの假名の犬が嚙みついたのだ。いや。本當はあいつが嚙みつかせたのだ。假名が嚙みつかせたのだ。

千々岩。そんな事は無い。

直純。いや。さうだ。いや。寧ろ假名が自分で嚙みついたのだ。伯父御。あいつのからだの中には呪はれた、けだ物の血が流れて居る。あいつの父の岡崎の三郎はな。大御所の嫡男とも有らう者が、死ぬ時には犬の樣に四つ這ひになつて吠えて吠えて吠え死んだのださうだ。

千々岩。いや。それは嘘だ。それは只だ噂だけだ。そんな事が有るもので無い。

直純。所がそれが本當なのだ。お身は假名があの獅子丸を可愛がる樣子を見たか。あれは只だ犬の好きなだけのやつのする事で無い。あいつは自分の寢床にまで犬を入れて一緒に連れて寢るのだ。(振り返つて乳)母。假名は。

乳母。はい。只今あちらへお越しになりましたが。直ぐにお呼び申します。

(乳母行く。)

直純。あいつは妙な女でな。どうかすると俺は人間の樣な氣持のしない時がある。何か鉛かなんぞの溶けた樣な只だどろどろしたものの樣に思ふ時がある。あいつが連れて來た家來のうちに松崎丹下と言ふ爺が居た。そいつが言つたが、假名は子供の頃はそれは不思議なほど賢い女だつたさうだ。それが今頃から急にあんなになつて。今でもどうかすると俺はあいつを十七八の娘の樣に思ふ時がある。あいつは斯う首を傾げて物を言ふ癖がある。その時は丸で子供だ。その丹下と言ふ爺がまた妙なやつでな。假名の事だと不思議と差し出た眞似をする。その癖假名の言ふ事だと丸で犬ころの樣におとなしく聞いて居るのだな。それがひどく假名の氣に入りでな。所がどう言ふものだかそいつが不思議と俺を嫌ふのだ。

千々岩。それだの。お身が斬つて棄てたと言ふのは。

直純。うん。それだよ。いつか寢所へ案内も無くづかづかと這入つて來たのだ。そこで俺が斬つて棄てた。所が、不思議とそれから俺と假名との仲がこぢれ始めた。それから假名が俺を憎み始めた。

(遠くで再び犬の吠ゆる聲聞こゆ。)

直純。(顔を顰めて)畜生。復た吠え居るな。あの聲が妙にまだづきづきこの疵口へ響くのだ。どうもな、伯父御。今度はあいつが其の丹下と言ふやつの代りになつた様だ。あいつが復た不思議と俺を嫌ふのだ。俺が假名の傍へ寄ると直ぐに怖ろしく牙を剝いて吠えかかるのだ。とうとう了ひに俺に噛みついた。その時俺があいつを斬つて棄てようとしても、どうしても假名が止めて斬らせぬのだな。どれだけその時俺があいつを憎んだか。

(短い間。)

直純。(急に聲を秘めて早口に)伯父御。お身はもう聞いたか。

千々岩。聞いたとは何を。

直純。伯父御。あすだよ。爲置きはもうあすの晩だよ。

千々岩。(漸つと直純の顔を覗て)右衛門ノ佐どの。拙者にはまだ好くお身の心が分からぬがの。

直純。(眉を顰めて)分からぬ。(直ぐに調子を變へて)うん。伯父御。珍らしいものを見せよう。

千々岩。珍らしいもの。

直純。うん。珍らしいものだ。(次の間へ向つて)これよ。

(侍臣一人、出づ。)

侍臣。はつ。お召しになりましたか。

直純。あの法師を連れて來い。

侍臣。はつ。

（侍臣、退く。）

千々岩。（不審らしく）法師。

直純。なに。蛇皮線を彈く法師だ。所がの。それが又只の法師で無いのだ。

（蛇皮線彈きの法師、侍臣に手を牽かれて出づ。盲目。黑き衣を纒ふ。胸に蛇皮線を抱く。）

直純。檢校。客人が有るのだ。唄を歌つて聞かせい。

法師。（蛇皮線を彈きながら歌ふ。）

しんきなしめそ
木綿ぐるま
かけて廻り逢ふよるよるは
そりや逢ふ
よるよるは
袖に湊のよるばかり
そりやあふ

（間奏。）

こがれこがれて
もろこし船の
袖に湊のよるよるは
そりや逢ふ
よるよるは
袖に湊のよるばかり

そりやあふ
(間奏。)
桐の一葉の
なほそれよりも
脆き涙の露つゆよ
そりや逢ふ
露つゆよ
もろき涙のつゆばかり
そりや逢ふ
(間奏。)
直紀。檢校。もつと歌へ。もーつ。あの黑船の唄を歌へ。
法師。(稍やためらふ。併し直ぐに落ち着いたる態度にて歌ふ。)
昔より
今に渡り來る黑船
緣がつくれば
鱶の餌となる
さんたまりや
(間奏。)
鱶の餌となる
さんたまりや

(間寞。)

直純。(嘲ける様に法師の顔を見て)ふん。鱶の餌となる、さんたまりやか。好い。行け。行け。

(法師、侍臣に導かれて退く。)

千々岩。(訝しげに直純の顔を見て)右衛門ノ佐どの。あれがどうしたと言ふのだ。

直純。(得意らしき微笑を浮べて)伯父御。お身はあれを何だと思ふ。

千々岩。何だと思ふとは。

直純。あれはな。破天連の廻はし者だよ。

千々岩。え。破天連の廻はし者だと。

直純。さうだよ。あいつがな。町の中を不思議な唄を歌つて歩いて居ると聞いた時に、俺はちやんと睨んだのだ。そこで俺は直ぐに家來をやつて連れて來させた。そしてああやつて家來をつけて動けぬ様にして有るのだ。あれはな。今度の爲置きの爲に入り込んで來た破天連の手先だよ。

千々岩。(疑はしげに直純の顔を見返しながら)うむ、しかし、しかしどうしてそれがお身に分かつたのだ。

直純。俺にか。俺は今そんな事だと直き分かるのだな。何と言ふのかな。今はからだ中の何もかもが凡て聰くなつて居るのだな。どうかすると迚も人間の力では分からぬ事まで分かる様に思ふ事が有る。中でも殊に耳が聰くなつて居るのだな。(聲を低くして)伯父御。まだそれは不思議な事がある。俺にはそれは奇妙な音が聞えるのだな。

千々岩。奇妙な音と言ふと。

直純。鞭の音だ。皮の鞭の鳴る音だ。

千々岩。(愕いて)鞭の音が。

直純。さうだよ。それが殆ど毎夜の様にだな。ゆうべは聞こえなかつた。その更り。足音が聞こえた。足音も聞こえぬ晩なんぞは滅多に無い。どこか俺の寢所の下のあたりから聞こえて來るのだな。空で鞭を振る音が聞こえるのだな。

千々岩。お身のその鞭では無いのか。

直純。これは俺のだ。これでは無い。誰か他のやつが鞭を振る音だ。なに。俺には分かつて居るのだ。あれもやはり切支丹のやつ等の惡あがきだよ。何かと言つてはあいつ達は俺の廻りをつけ狙つて居るのだな。

千々岩。一體お身のその鞭は何の爲の鞭なのだ。

直純。これか。（千々岩の顔を見る）これはな。拷つ爲の鞭だ。ふむ。さうだな。中でも特に假名を拷つ爲の鞭なのだ。それでいつでも斯うして持つて居る。

千々岩。併し、どうして其の樣にお假名の方に辛く當られるのだ。

直純。なに。假名に限りはしないのだ。俺に向つて背を返へす者が有れば、誰でも構はない。これで思ふさま拷ち据えてやるのだ。拷つて拷つて拷ち拔いてやるのだ。（次第に眼を輝かせて）手近い例へが切支丹のやつ等だ。俺はどこまでもいぢめ拔いてやるのだ。人間の力で考へ得られる限りの怖ろしい思ひをさせてやるのだ。俺はその血みどろの死骸を足の下に踏みにじつてどしどし歩いて行くのだ。

千々岩。（つと寄つて）右衛門ノ佐どの。

直純。（ふと其の顔を見て、極度に不安なる表情をなす。）所がの、伯父御。今度病氣をしてからと言ふものは、俺はそれは不思議な氣持が起きるのだ。俺は自分の命が怖ろしくて堪まらぬ。斯うして今生きて居るのが怖ろしくて堪まらぬ氣持がするのだな。殊に夜だ。どうかすると、俺は突然心の底から震へ上がる時がある。俺は今何よりも夜が來るのが怖ろしいのだ。

千々岩。（低い聲で、併し非常にしつかりした調子にて）右衛門ノ佐どの。これは病氣の所爲では無い。

直純。（千々岩の態度に愕いて見返しながら）いや。病氣の所爲だよ。あれから斯うなつたのだ。（更に聲を低くして）所がの伯父御。俺は誰にも此の氣持を話す者が無い。俺の廻りは敵ばかりだ。あの下の有馬の町一杯になつて居る群衆、あれは一人殘らず俺の敵なのだ。俺の身方と言つたら、俺の廻りに居る腰元か。家來か。そんな者は何にもなりはしない。伯父

御。俺は誰よりもお身に逢ひ度かつた。
千々岩。(確と直純の手を取つて) 右衛門ノ佐どの。
直純。俺は誰かに此の氣持が話し度かつた。誰かに此の氣持が分かつて貰ひ度い。伯父御。それはお身より他には誰も無いのだ。お身だけが此の直純のたつた一人の身方なのだ。
千々岩。(はらはらと泣いて) 右衛門ノ佐どの。お身はそれ程までに此の清左を力にして居たのか。今でも清左がお身の身方だと思つて居たのか。
直純。(訝しげに且つ極度に不安の面持にて千々岩の顏を眺め居る。)
(長き間。)
(夕映え、突然にぱつと照り返す。海上一面宛かも染められたる如く紅ゐを映ず。)
直純。(振り返つて思はず。) おお。伯父御。あれを見い。あの夕焼けを。丸で血の様に眞つ赤だ。(椽側に出る。凝つと海の面を見つめて居る。) やつぱり秋の海だ。底まで冷たく澄み切つて居る。これから鯖の時節になるのだが。
(お假名の方、廊より出づ。)
直純。(振り返つて) おお。假名。(つかつかとその傍に寄る。) 假名。伯父御が來た。清左の伯父御が來た。(襖にて誠多挨ちに
お假名の方を挨つ。)
お假名の方。(その襖の下をくぐつて直純の手に確とすがる。)
(兩人、燃ゆる様な眼を見交はして居る。)
千々岩。(思はず傍に寄つて) 右衛門ノ佐どの。お身は一體何をせられるのだ。(悄然と立つて居る。)

二　齣

直純の寢所。
直純、半ば夜具に身を凭せる樣にして臥し居る。
お假名の方、その枕近く坐し居る。
直純の傍近き壁に鐵砲一挺立てかけあり。
深夜。
燈火一盞。細く搖れながら燃ゆ。
稍や長き間。

直純。（目を瞑つたまま）假名。もう何どきぢや。
お假名の方。左樣でござりまする。やがてもう九つ時にもござりませうか。
直純。（目を明けて）まだそんなものか。ではまだ眞夜半だな。伯父御はまだか。
お假名の方。はい。先ほど庭の方へお出でになりましたままでござります。
（間。）
お假名の方。との樣。御氣分はいかがでござります。
直純。うん。もう好い。
お假名の方。疵口は痛みは致しませぬか。
直純。いや。もう痛みなんぞは無い。
（間。）
お假名の方。（ふと首を傾げて）との樣。早く癒つて下され。
直純。（顏を擧げてお假名の方の顏を視る。誘はれる樣に柔しく）なに、もう間も無く癒る。
お假名の方。ほんにそれでも能く快くなつて下さいました。一頃は私はどうなる事かと存じました。

直純。うん。俺ももう覺悟を決めて居た。危くそちは復た駿府へ歸る所で有つた。

お假名の方。(凝つと直純を視て)との樣。

直純。何ぢや。

お假名の方。萬一との樣にもしもの事がございましたらな。

直純。うん。

お假名の方。私は死ぬ覺悟で居りました。

直純。(輕く)何を莫迦な。

(稍や長き間。)

お假名の方。(凝つと俯向いて居る。その白き横顔に燈火の光り當る。)

直純。(それを眺め居る。やがて柔しく)假名。そちはもう下つて休むが好い。

お假名の方。はい。

直純。俺は一人で結構だ。今夜は俺は不思議に氣持が快い。

お假名の方。(顏を擧げて)との樣。あれわやつぱり私が悪るいのでございました。どうぞ許して下され。

直純。假名。何を言ふのだ。

お假名の方。あの時との樣が獅子丸を斬つて棄てようとなされましたのをお留め申しましたのは私の誤りでございました。との樣。どうぞ許して下され。

(間。)

直純、(凝つと外を視つめて居る。やがて)假名。早いものだ。そちが有馬へ來てからもう一年と半ばになる。

お假名の方。ほんにもうさうでございます。あれが、駿府を立ちました時が、丁度櫻の盛りでございましたが、有馬へ着いて見ましたらもう櫻が散つて青葉の時候になつて居りました。(次第に浮き浮きした調子になりて)春日山ではあの頃にな

つてやつと雪が溶けるのでございます。するとその雪の下に唐松の若葉が芽を出して居ります。そして直ぐその迹に花が咲きます。それが梅も櫻も桃もみな一緒なのでございます。

直純。（不快なる表情をなしてお假名の方の顔を見る。）

お假名の方。その時になつてやつと夜が明けた樣に明るくなるのでございます。まあ。それまでの暗いことと申しましたら。來る日も來る日も雪の中に閉ぢ込められて。

直純。（いらいらして堪へ得ざる如く）假名。あすだ。いよいよあすだ。

お假名の方。（愕然として我に歸る。）

直純。（鋭く）今俺が何をしやうとして居るかそちは知つて居るか。あすの日が西に沈む時が來れば、俺の爲には命さへも惜しまなかつた者が此の大地の上から消えて了ふのだ。

（稍や長き間。）

お假名の方。との樣。私は有馬が厭やになりました。

直純。有馬が厭やになつた。（甚しく不快の面持にて）有馬が厭やになつたら。どこなりと勝手に好いた所へ行け。

お假名の方。いえ。いえ。さうではございませぬ。（凝つと直純を視つめて）との樣。よその國へ參りませう。

直純。そちは何を申すのだ。

お假名の方。全く知らぬよその土地へ參りませう。切支丹なんぞは一人も居らぬよその國へいつて、本當に二人だけで暮しませう。本當にたつた二人だけで。

直純。何を莫迦な。

お假名の方。（甚しく不快なる表情をなして）それでは、との樣。

直純。（急に耳を澄まして）しつ。（低く）默つて居ろ。

お假名の方。（寧ろ憎惡に近き色を浮べて鋭く直純を見つめ居る。）

（稍々長き間。）

（千々岩、入り來る。）

直純。おゝ。伯父御。お身か。それでは今のはお身の足音か。

お假名の方。（千々岩を見て樣子變はる。）

直純。（ちらとそれを見て不快げなる樣子をしながら直ぐに顔を反ける。）此の夜更けにどこまで行つて來たのだ。

千々岩。いや。只だ庭の中を歩いて居たのだがな。ついあの禮拜堂の所まで行つて見た。

直純。（どきりとして）え。禮拜堂へ。

千々岩。いや。只だ傍まで行つただけだ。入口の扉に錠がかゝつて居て中へは這入れなかつた。併し今ではもうあのなかも朽て了つて居るのだらうな。

直純。それはさうだ。もう誰もあんな所へ行く者は有りはしない。

千々岩。まるたどのはあの中に居られるのでは無いのか。

直純。（狼狽して）いや。居るよ。まるたはあの中に居るよ。

千々岩。それにしては不思議だな。燈なんぞもともつては居ないし。第一しんとして人の氣はひなどはしないのだ。（調子を變へて）右衞門ノ佐どの。お身はもう覺えて居られぬか。拙者がろおまで法王から頂いた法衣が有る。

直純。うん。あの緋の天鵞絨に黒のへりを取つた上衣だらう。あれなら俺も知つて居る。

千々岩。あれだ。あれがな。あの禮拜堂の中に今でも有るだらうと思ふのだ。

直純。うん。有るだらう。有る筈だよ。あれは確かお身から父御に呉れたのだつたな。

千々岩。さうだ。ろおまの土產に修理太夫さまに差し上げたのだ。拙者は今度あの上衣を持つて歸らうと思ふ。

直純。今頃になつてあんなものを何にするのだ。

千々岩。（凝つと直純を見て）右衞門ノ佐どの。今の拙者にはあれが入るのだ。

直純。(甚しく不快げた見返しながら) ふむ。それではあす家來をやつて持つて來させるが好い。

千々岩。それでも好い。いや。やつぱり拙者が自分で行かう。拙者はやはり自分であすこへ這入つて見たい。

直純。わざわざお身が行かずともよいでは無いか。併し、ことに依つたら俺も一緒に行つても好いが。ふむ。いや。併し。

お假名の方。(ふと顔を上げて直純を見る。)

直純。(いらいらして) 伯父御。本當は俺はあすこへ人が行くのを好まぬのだ。

(急に向うの直ぐ下より犬の激しく吠ゆる聲聞こゆ。)

お假名の方。おお。獅子丸が。

直純。(激しく身を起こして) 假名。あれを啼き止ませい。ええ。早くあの聲を留めい。あれが俺の此の疵口へ響くのだ。

お假名の方。(立つて窓を明ける。)

(外は月明の夜。向うに温泉の裾野長くたな引いて松原より海に連なる所、月の光の中に宛かも墨絵の如くに浮かび出でて見ゆ。)

お假名の方。(下に向いて口笛を吹く。)

(犬の啼き聲、直ぐに止む。)

直純。(憎々しげにお假名の方を見つめながら強く) そちは早くあいつを連れてそちの寝所へ行け。俺はあいつがこのあたりに居ると思ふのさへ氣持が惡くて爲方が無いのだ。

お假名の方。(窓を閉めようとする。)

直純。(額の汗を拭いて) 窓はそのままに明けて措け。

(お假名の方、無言のまま二人に會釋して入る。)

(下より再び低い犬の唸る聲。)

直純。(不快げに眉を顰めて舌打をする。)

(口笛の音。高く澄み渡りて響く。)

（犬の啼き聲やむ。）

千々岩。（外を眺めて）美しい月夜ぢや。今宵は十三夜か。

直純。（凝つと千々岩の横顔を視つめて居る。やがて）伯父御。

千々岩。（振り返る。）

直純。お身は氣づいて居るかの。あいつはの。假名はの。お身のことを思つて居るのだ。

千々岩。（愕然として）右衛門ノ佐どの。お身は何を言ふのだ。

直純。伯父御。あいつは初めてお身に逢つた時からお身の事を思つて居るのだ。俺にはよう分かるのだ。あいつはな。お身がこれまで聖公會の聖教徒の清い生活をして女なんぞを近づけた事の無いそれから不思議とお身に心を牽かれる様になつたのだ。

千々岩。（忽ち顔色を變へる。）

直純。尤も。前に俺や乳母が好くお身の噂をした。假名もそれを聞いてお身の事は好く知つて居たのだ。そして、初めてお身を見た時からもうお身の事を思つて居るのだ。

千々岩。いや。その様な事は無い。その様な事は。

直純。あいつはの。伯父御。（急に耳を澄まして）しつ。

（間。）

直純。（低く）伯父御。それ。聞こえるだらう。それ。あの足音が。

千々岩。え。足音が。

直純。な。聞こえるだらう。それ。だんだん向うへ行く。不思議とあいつは假名の方へ行くのだ。

千々岩。拙者には何も聞こえぬが。

直純。聞こえぬ。あれが。

（稍や離れて犬の吠ゆる聲。續いて口笛の音それに混つて聞こゆ。）

直純。それ。見ろ。獅子丸が吠えて居るのだ。所がな。あいつはそれは不思議なほど素早いやつなのだ。俺はどうかして捕へてやらうと思つて何度も追つかけたが分からぬ。隙を見て居てはつと飛び出すのだ。所が。どうしても駄目なのだ。姿さへ目に留らぬ。たつた一度ちらとうしろ姿を見ただけだ。それも角を廻る飛鳥の様に速いうしろ影がほんのちらと見えただけだ。どうもあれは破天連だな。迚も並の者にはあの眞似は出來ない。（振り返つて）ああして鐵砲に玉をこめてちやんと用意がして有るのだけれども、迚も駄目だ。忍びの番なんぞをそつと置いとくと決して出て來ない。一體ひるの間なんぞどこに隱れて居るのだか。どうしても分からぬのだ。どうも全く不思議だよ。

（遠くで口笛の音尙ほ響き亘る。）

直純。（耳を傾けて聞き惚れて居る。）

（間。）

直純。（振り返つて）伯父御。笑つてはいけぬよ。俺はそれは不思議な氣持になつたのだな。この間うちの一番悪い時の事だよ。ふと今に俺も岡崎の三郞と同じ様に吠え出すのでは無いかと思つたのだな。そしたらな。どうも今にも吠え度い氣が自分でも押へ切れぬ様になりさうで爲方が無いのだ。俺は何よりそれが怖ろしかつた。

（間。）

千々岩。（凝つと直純を視て）右衛門ノ佐どの。お身は前の事を思ひ出されることは無いか。

直純。前のこと。

千々岩。昔がなつかしいと思ふことは無いか。前にまだまるたどのと稱して居た頃の事だな。あの頃が戀しいと思はれる事は無いか。

直純。（不快な顏をして）伯父御。何を言ふのだ。何であの頃なんぞが戀しいのだ。

千々岩。いや。そんな筈は無い。

直純。（更に不快らしく強く）伯父御。お身もやはり俺が假名を娶つたのは本領安堵の爲だとばかり思つて居るのか。

千々岩。右衛門ノ佐どの。さうでは無いか。

直純。（いらいらして）それはさう言ふ氣持も添つたには相違ない。併し、俺はその爲めにあいつを娶りはしないのだ。只だあいつが氣に入つたから貰つたのだ。大御所の孫だと思つて假名を娶りはしない。有馬の家の爲だと思つてあいつを貰ひはしない。今でもさうだ。俺は家のことなんぞ考へはしないのだ。俺が大御所の傍に居た時に丁度あいつが越後から歸つて來た。一目あいつを見た時に俺は貰ふ氣になつたのだ。まるたの事なんぞどうなつても好いとその時に思つたのだ。

千々岩。併しの。右衛門ノ佐どの。

直純。（耳に入れず）俺があの時からでいゆすの教へを棄てた。それが假名の爲だと言ふのか。本領安堵の爲に家康に阿ねる心からあんな事をしたのだと言ふのか。莫迦を言へ。俺は只だでいゆすの教へが厭やになつたから棄てたのだ。なるほど家康は假名を俺の妻にして置けば有馬の切支丹を押へるのに都合が好いと思つたのだらう。そして又それが思ふ壺に這入つたと思つて一人で笑壺に入つて居るだらう。喜ぶやつは喜べ。俺は俺の思つた通りにするのだ。

千々岩。（俯いて）右衛門ノ佐どの。それではお身は今でも少しも後悔はして居ないのか。

直純。俺が何を後悔するのだ。なるほどまるたと暮らした頃は無事で有つた。夫婦の間も睦しかつた。けれどもあれはまま事だつたのだ。二人で夫婦のまま事をして居たのだ。でいゆすの教へだつてその通りだよ。それは二人とも熱心な信者らしく見えたらう。けれどもそれは只だ上べだけだ。本當は二人とも何にも分かつて居はしなかつたのだ。只だぼんやりさう言ふ氣持になつて居ただけなので。あの頃は二人が只だ丸で夢の樣に睦しく暮らして居ただけだ。

千々岩。どうもお身の言はれる事は拙者には受け取れぬがな。

直純。伯父御。お身は俺が嘘を吐いて居ると思ふのか。なるほど今の假名は妙な女だらう。けれどもあいつは本當の女な

のだ。あいつに較べれば、まるたなんぞは丸で泥でこさへた人形の樣なものだ。俺はどうかすると限り無くあいつを憎む事がある。あいつも俺を憎むだらう。或は俺はあいつの爲に身を亡ぼすかも知れぬ。けれども、あいつだけが今の俺に値打のあるたつた一人の女なのだ。今のあいつとの仲こそが本當の夫婦の間なのだ。俺は昔の方が戀しいなんぞ夢にも思ひはしない。

千々岩。ああ。お身の氣持は迚も分からぬ。お身達二人の間などは拙者には到底分からぬ。拙者は寧ろ怖ろしい氣持がする。何か血腥い不思議なものがお身達二人の仲に結んで居る樣な氣持がするのだ。

直純。(突然甚しく不安な表情に變つて眼を輝かせながら低く)只だな。俺はあいつと一緒になつた頃から怖ろしく癇癖になつた。ひどく癇が強くなつて。少の事でもどうして中途半端にして置く事が出來ない。氣持が惡くて爲方が無いのだな。

千々岩。さうだ。それは側から第一に好く分かる。昔のあの素直で柔しかつたお身の事を思ふと。今は丸で別人の樣に見えるのだな。

直純。俺があんなに嚴しく切支丹を糺彈するのも結局それだよ。あんなやつが一人でも居ると思ふと。どうも氣持が惡くて爲方が無いのだな。

千々岩。(ふと直純の顏を見てためらひながら)右衛門ノ佐どの。何では無いか。今お身は越後ノ守が亂行に及んだ氣持が分かる樣に思ひはしないか。

直純。(愕然として)莫迦を言へ。俺はあんなになりはしない。(極端に不安なる顏をなす。)

千々岩。いや。お身はあんなになりはしない。なりはしないが、只だ。

(怖ろしき間。)

直純。(調子を變へて急に低く)伯父御。俺はな。敵が出て來るのは少しも怖れはしない。敵が强ければ强いほど俺も强くなる。多ければ多い程强くなる。切支丹のやつ等がいくら手向つても手向かへば手向かふほど俺はその上は手に出てやるのだ。只だ俺が困るのは、どんな目に合はしてやつても手向かひをせぬやつだ。どうにも手の出し樣の無い齒痒くて爲

方の無い氣持がするのだな。

千々岩。それはどう言ふ意味なのだ。

直純。例へばあのまるたがさうだよ。どうも俺は今でもあいつの事が氣にかかつて爲方が無いのだな。あれ程の目に合はしてやつても、あいつは少しも俺を怨みはしないのだ。假名を娶つた時に、俺はあいつを追ひ出さうとした。それでもあいつは限り無く自分の不運を悲しんで只だ泣いて禱るだけなのだ。どうにも爲樣が無い。あいつは小西行長の姪だ。津ノ守が天草の領主になつた時に俺はあいつを娶つたのだ。所が津ノ守は關ケ原の戰ひであゝなつて了つた。返すにも返す所が無いのだ。それでとうとう爲方が無くなつてあゝしてあの昔の禮拜堂の中へ入れて置いたのだが、どうもあれが何より大きな俺の肩の重荷なのだな。少しでもあいつに俺を怨む心が有つて呉れれば好い。少しでも俺を憎んで呉れれば好い。そしたら、俺は思ひ切つて俺の足で踏みにぢつてやる。所が、あいつにはさう言ふ心が露ばかりも無いのだな。

千々岩。さうだ。まるたどのは元からさう言ふ人で有つた。嘗て修理太夫さまが言はれた事がある。まるたは丸で月に磨した水晶の玉の樣に清い氣持のする女だ、あの女の前に居ると、神の御國が直ぐ傍に有る程に思はれると。

直純。伯父御。お身も知つて居るだらう。あの禮拜堂におろがんがある。

千々岩。知つて居るとも。あれはお身の爺さま晴純どのがしやびええる師から頂いたものだ。修理太夫さまも朝夕のおみさを拜まれる時には必ずあれを鳴らされた。

直純。うん。あれだよ。まるたがあすこへ行つてから毎日あれを鳴らすのだ。それがな、伯父御。鳴らす曲はいつも決まつて居るのだ。前に俺が一番好きで有つたあれだけを鳴らすのだ。

千々岩。(心から感動して思はず涙ぐむ。)あゝ。全くまるたどのが氣の毒だ。右衛門ノ佐どの。お身の爲方は餘りにひどい。

直純。それが、少しでも面あての氣でも有つて呉れれば好い。所が。まるたにはさう言ふ氣は塵ほどもないのだ。あれ程

の目に合つてもまだ一心に俺のことを思つて居るのだな。それが又俺には實に好く分かるのだ。とうとう俺は堪まらなくなつて、あのおるがんを鳴らなくした。

千々岩。（目を瞑つて）鳴らなくした。

直純。うん。中の管を塞いで了つたのだ。所が、それでも駄目だ。あいつはやはり一心に俺の爲に禱つて居る。俺の罪が許される様に一心にでいゆすの前に禱つて居るのだ。その姿がありあり俺には見える。俺の目の先にちらついて離れないのだ。了ひに俺はとうとう何か怖ろしい生き靈に憑かれて居る様な思ひがし始めたのだ。

千々岩。右衛門ノ佐どの。お身は一體まるたどのをどうせられる積りなのだ。ああして置いて了ひにはどうせられる積りなのだ。

直純。そこだよ。伯父御。こないだ俺がひどく惡かつた時に、何より俺の氣にかかつたのはあのまるたの事だ。俺が死んだ所で、假名なんぞは復た駿府へ歸るだけだ。只だあのまるただけは一生俺の墓の傍を離れはしないのだ。一生俺の爲に涙を流して禱るのだな。その哀れな姿が俺には丸で見る様なのだ。俺はも苦しくてとうとう堪へ切れなくなつた。俺はいつその事あいつを殺して了はうと思つた。

千々岩。（愕然として）お身は何を言ふのだ。

直純。本當だよ。伯父御。俺はあの時本當にさう心を決めた。

千々岩。右衛門ノ佐どの。それは怖ろしい罪だ。思ふだけでもそれは怖ろしい罪だ。

直純。罪だ。罪なんと言ふものは有りはしない。あれは切支丹の言ふ事だ。有馬の事は俺の思つた通りにする。よしんばそれがどの様な怖ろしい事で有つても、俺の此の手でするのにそれが何の罪だ。

千々岩。いや。それはお身の考へ違ひだ。やはり此の地上には大きな罪と言ふものが有る。それはお身が城主で有ると無いとに關はらぬ。人としての大きな罪と言ふものがある。惡人とさうで無い人との區別が有る。

直純。（愕然として）伯父御。お身は丸で切支丹の様なことを言ふでは無いか。（凝つと千々岩の顔を覗て）お身は俺がその

惡人だと言ふのか。莫迦を言へ俺はそんな事を信じはしない。罪なんと言ふものを信じはしない。もし惡人なんと言ふものが有るなら、それを俺に見せろ。直ぐに俺が自分で惡人になつてやる。(鋭く目を輝かせて)をとし俺が有馬へ歸つた時に、俺は途に立つてる十字架を殘らず倒して了つた。そして現在俺の此の足の下に踏みにぢつた。

千々岩。(飛び上る程に愕ろいて)おお。右衞門ノ佐どの。

直純。(ますます皮肉な意地惡き目を輝かせて)その時の俺の氣持はどんなだつたと思ふ。言ふに言はれぬ鋭い悦びが俺の全身に漲つたのだ。父祖三代信奉したでいゆすの教を俺が此の足で踏みにぢつたのだ。

千々岩。(つと直純の手を取つて)右衞門ノ佐どののお身は、お身は、何と言ふ。

直純。(鋭く見返して)へ。罪だ。罪とは何だ。罪な人と言ふものが有るなら、今直ぐそれを俺に見せい。直ぐに俺が此の手で行つて見せてやる。それが怖ろしい罪で有るならば怖ろしい罪であるほど好いのだ。よしんばそれが人が口にしただけで心の底から顫へ上がる程の怖ろしい罪で有つても好い。俺は直ぐ此の手で行つて見せてやるのだ。(寧ろ狂ほしく)いや。それが俺の望みなのだ。俺は極惡人になる。凡そ此の世で人の力に能ふ限りの最も怖ろしい惡を俺の此の手で犯して見たい。それが俺の今の何よりの望みなのだ。

千々岩。(身を顫はして)右衞門ノ佐どの。お身は氣が狂つたのか。

直純。伯父御。お身はまだ知らぬのだ。俺はな。お身などは聞いただけでも色を失ふほどに怖ろしい事を現在此の手で犯して居るのだ。

千々岩。(顏色を變へてわなわなと身を顫はす。)

直純。(低い嗄れた聲にて)伯父御。お身は父御は何で死んだと思ふのだ。父御があの樣な非業の最期を遂げたのは何の爲だと思ふのだ。

千々岩。(辛うじて聲を出す)右衞門ノ佐どの。

直純。伯父御。あれは俺が殺したのだ。あれは此の俺が殺さしたのだ。

千々岩。（自失した樣に茫然として居る。）

直純。俺が家康に讒訴したのだ。破天連と結んで怖ろしい謀反の異圖が有ると此の俺から家康に讒訴したのだ。それで父御は甲州都留の郡で腹を切らされた。

（緊張したる調。）

千々岩。（漸く我に歸って）それでも、それでも、あれはお假名の方の所爲だと言はれて居た。大御所に讒訴したのはお假名の方だと專ら世上の噂で有つた。

直純。それは俺がその罪を假名になすりつけたのだ。（凝っと顔を見つめて）俺がまだあの頃は卑怯だつたのだ。ついああ言ふ卑屈な心になつたのだ。何の。俺のした事は俺のした事にして置けば好かつたのだ。あんなさもしい小刀細工なんぞはしなければ好かつたのだ。それに又あの假名と言ふやつが妙なやつだ。それをちやんと知つて居ながら平氣で罪を自分が引き受けて居るのだ。

千々岩。ああ。これは本當では無い。その樣な怖ろしい事が有るわけが無い。嘘だ。これはお身のこさへ事だ。

直純。（凝っと顔を視つめたまま耳にも入れず）あれから俺はあいつを憎み始めた。心の底からあいつを憎む氣になつた。

千々岩。（つと直純の傍へ寄って）右衛門ノ佐どの。本當の事を言つてくれ。本當のお身の心を打明かして呉れ。お身は今でもそれを悔いる心は無いか。

直純。（鋭く千々岩の顔を見る。）

千々岩。心の底から後悔の念に驅られる事は無いか。

直純。（激しく）無い。無い。俺は後悔なんぞはしないのだ。

千々岩。おお。

直純。よしんば萬一その樣な心が起こつても俺は直ぐに踏みにぢつて了ふ。自分で押しつけて了ふのだ。

千々岩。（影像の如くに竦んで居る。）

（長き間。）

（外の月影ますます冴え亘る）

直純。（そつと額の汗をふいて）只な、伯父御。俺が殊に近頃不思議でならぬのは切支丹のやつ等、命を惜しがらぬ事だ。俺は今では毎日何か慘たらしい事は無いかと搜して居る。一時でも此の手が血に塗れて居ないと生きて居る樣な氣がしないのだ。所が、さう言ふ氣持になればなる程なほ餘計に俺は人の命と言ふものの怖ろしさが分かつて來た。それだのにあいつ達は不思議と命を惜しがらぬ。いや惜しがらぬ所で無い。寧ろ進んで自分から命を捨てたがるのだな。

千々岩。それはさうだ。殉教の死は何よりも尊いものと敎へられて居るのだ。

直純。いや。俺はあいつ達は命と言ふものを知らぬのだと思ふ。斯うして生きて居る事がどんなに怖ろしい事だか、あいつ達は考へて見た事も無いのだな。今度あの三人の家老の家族を死罪にすると決めてから、一緒に殉教の死を遂げ度いと願ひ出たものがどれだけ有つたと思ふ。萬一その一人でも許して見るが好い。恐らく有馬の町には一人の人間も殘らなくなるに相違ない。

千々岩。（獨り言の如くに）さうだ。命などを惜しがる筈が無い。命よりも更に大切なものをも敎への爲には決然と投げ棄てる。

直純。伯父御。斯う言ふことが有つたのだ。あれが今から五日も前になるのかな。やはりさうして申し出た者の中に一人まだ若い女が居た。

千々岩。（愕然として）若い女が。

直純。うん。それが妙だ。それがお身の領の者なのだ大村の者だと言つた。

千々岩。（飛び上がつて）え。大村の。（忽ち顔色蒼白に變る。）

直純。うん。さう言つた。その時は先づ家來のやつが宥めて返したのだがな。それがどうも不思議だよ。

千々岩。（只だわなわなと身を震はして）それが。

直純。そしたらな。その明けの日の朝、その直ぐ下の濱邊へ死骸になつて打ち上げられて居たのだ。

千々岩。(只だ凝然前を覗つめて居る。)

直純。それがな。下にちやんと白無垢を着て居るのだな。そして、胸にかけた十字架(くるす)の下に横文字で。さう。何とか言つた。

千々岩。(嗄れた聲で辛うじて、しかし早口に)もにくと記して有つたらう。もにくと。青字でもにくと。

直純。(愕いて千々岩の顔を凝視す。)伯父御。お身は知つて居るか。お身の見しりの者か。

千々岩。右衛門ノ佐どの。拙者が大村から尋ねて來たのはその者だ。

直純。(只だ茫然として居る。)

千々岩。右衛門ノ佐どの。その死骸はどうした。その死骸は。

直純。さあ。どこへ葬つたか。家來に問けば直ぐ分かるが

千々岩。(堪へかねて)おお。(兩手を胸に重ねて祈る。)

直純。(飛び上つて)伯父御。お身は、お身は、お身は復だ。

千々岩。(一心に祈る。)

直純。おお。

(怖ろしき間。)

千々岩。(漸く目を明く。顔を擧げて直純を見る。態度全く變り居る。)右衛門ノ佐どの。拙者は復たでいゆすの教へに歸つた。復た元のでいゆすの教へに歸つたのだ。

直純。(只だ凝然と身を慄はして居る。)

三　齣

同じ直純の寝所。

直純、眠り居る。

千々岩、少し離れて坐し居る。胸に両手を重ね首を垂れて一心に祈り居る。顔色蒼白に、殆ど別人の如く窶れ居る。

夜の引き明け方。

燈火將に消えんとして細く揺れ、部屋の中甚だ暗く見ゆ。

窓閉しあり。

黎明の冷たき空氣部屋の中に滿ち、白き光すでに一筋窓に差せり。

良き間。

お假名の方、入り來る。

お假名の方。(愕いて)お、千々岩さま。あなたはまだ起きてお出でなされましたか。

千々岩。(振り返る。僅かに頷く。)

お假名の方。まあ。どうなされたのでございます。

千々岩。(嗄れた聲で)お假名の方。拙者は昨夜は床に入る氣持になりませなんだ。

お假名の方。一體どうなされたのでございます。右衛門ノ佐が何かまた。

千々岩。いや、右衛門ノ佐どのは。

お假名の方。(つと立つて直純の枕の所まで行く。凝つと覗て居る。やがてそつと立つて復た千々岩の所へ歸る。)千々岩さま。右衛門ノ佐は眠つて居ります。

千々岩。あれが八つ時過ぎでもございましたか。それからうとうと眠られて。

お假名の方。まあ。珍しい右衛門ノ佐が本當に眠つて。

千々岩。(お假名の方の顔を見る。)本當に眠つてとは。

お假名の方。私が傍に居りますと、右衛門ノ佐は好く眠つた振りを致します。どうかすると眠つた息まで眞似て見せる事がございます。けれども私にはそれがよく分かります。

千々岩。(訝しげに見る。)

お假名の方。なぜ右衛門ノ佐がその樣な事をするかと言ふのでございますか。右衛門ノ佐は夜よく眠らぬ所を私に見せるのが厭やなのでございます。近頃夜は殆ど寢は致しません。本當に休みますのは大抵晝間でございます。それを私に知られるのが右衛門ノ佐は何より厭やなのでございます。

千々岩。(只だお假名の方の顏を見て居る。)

(稍や長き間。)

(燈火、遂に消ゆ部屋の内暗くなると同時に外の光り急に明るく窓に差す。)

千々岩。(低く)お假名の方。漸く少し拙者にお身達夫婦の間が分かつた樣な氣持が致します。ああ。迚もお身達の間は外から見て分かるもので無い。拙者はまだ斯ふ言ふ夫婦の間柄を見た事がござりませぬ。いや。聞いた事さへもござりませぬ。

お假名の方。(凝つと面を伏せて)千々岩さま。仰しやる通りでございます。右衛門ノ佐と私とはまあどうした仲なのでございませう。敵同志の間でもこれ程までに憎み合つては居りますまい、束の間も互の心に疑刃を研がぬ時とてはございません。

千々岩。所詮因緣と言ふより外には申し樣がござりませぬ。不思議な因緣と言ふより外に申し樣が無い。お身達二人は離れる事の出來ぬ力で結ばれて居られる。結局それがさうなる元かも知れませぬ。

お假名の方。(顏を舉げて)離れる事の出來ぬ力と申しますると。

千々岩。右衛門ノ佐どのにはお身を捨てる力が無い。お身も亦右衛門ノ佐どのを棄てる事がお出來にならぬ。棄てれば互の身の破滅になります。お身達はさう言ふ力で結ばれて居られる。

お假名の方。いえ。いえ。それはあなたのお考へ違ひでございます。千々岩さま。右衛門ノ佐はやがて私を棄てますもしかすると私を殺します。

千々岩。その様な事はございませぬ。

お假名の方。千々岩さま。右衛門ノ佐は私が家康の孫で有る爲にでも私を殺します。

千々岩。それは又どう言ふわけでございます。

お假名の方。私を殺せば有馬の家が亡びる。右衛門佐の身の破滅になる。それで私を捨てる事が出來ぬと私に思はれまい爲にでも右衛門ノ佐は私を殺します。

千々岩。（只だお假名の方の顔を見て居る。）

お假名の方。千々岩さま。右衛門ノ佐は結局私を棄ててあすこへ參ります。あすこへ。あすこへ。あの禮拜堂へ。

千々岩。え。あの禮拜堂へ。

お假名の方。右衛門ノ佐は結局あのまるたさまの所へ參りなす。

千々岩。いやその様な事はございませぬ。

お假名の方。いえ。いえ。それは誰よりも私が好く知つて居ります。まるたさまは今でもまだ一心に右衛門ノ佐の事を思つて居られます。それを又右衛門ノ佐は好く知つて居るのでございます。千々岩さま、此の間うち熱に浮かされて右衛門ノ佐は幾度もまるたさまの名を呼び申した。

千々岩。いや。それは。

お假名の方。しつ。右衛門ノ佐が眼を覺ました様でございます。

（間。）

（外の光りますます明るくなる。）

（遠くで犬の吠ゆる聲。）

お假名い方。私の友達は只だあの獅子丸だけでございます。あの心の狂つた獅子丸だけでございます。あれもやがてもう死ぬのでございませう。

（間。）

直純。（眼を覺ます。顏を擧げて二人を見る。）

（短き緊張したる間。）

直純。（窓の方を振り返つて）おお。もう朝だな。假名。戸を明けさせい。

（お假名の方、入る。次の間で侍女を呼ぶ聲。）

直純。（床の上に起き直つて）伯父御。お身は寢はしなかつたのか。

千々岩。（默つて頷く。）

直純。さうか。俺はまた珍らしく好く寢た。

（外の戸を明ける。）

（朝の光り一杯に障子に差す。）

直純。（歡喜に滿ちて）おお。朝だ。（障子を明けて廊に出る。）

（外は尙ほ一面の霧立てこめ居る。その間を朝日雨の如くに降り注げり。）

直純。（生き生きと一心に外を眺む。のびのびと朝の大氣を吸ひ込んで心から嬉しげに）伯父御。俺は朝が來ると嬉しくて爲方が無いのだ。また今日も朝日の光りを見る事が出來た。さう思つて何か思ひもかけぬ程な悦びに出逢つた樣に限り無く嬉しい心がからだの底から湧いて來るのだ。俺は夜が嫌ひだ。殊に此の間うちは、夜が來るともうこれ切り朝日の光りは見る事が出來ぬかも知れぬと言ふ氣持がきつとするのだ。さう思ふと俺は心の底から怖ろしかつた。（深く息を吸つて）ああ。丸で水の底からでも浮き上つた樣な心持だ。

千々岩。（朝の光りを見るさへ堪へ難き如くに只だ凝つと坐し居る。）

(長き間。)

(お假名の方、入り來る。)

直純。(それに氣づかず、外を見ながら)さあ。いよいよ今日だ。いよいよ其の日になつたのだな。今日で總ての事が片づいて了ふのだ。(生き生きと)ああ。どれだけ俺は今日の來るのを待ち兼ねたか。

(間)

千々岩。右衛門ノ佐どの。拙者は大村へ歸らうと思ふ。今日有馬を立たうと思ふ。

直純。(振り反つて)え。今日立つ。

お假名の方。(愕いて思はず)え。今日お立になる。なぜ。なぜでございます。

(緊張したる間。)

千々岩。お假名の方。拙者はもう有馬に用事がござりませぬ。

お假名の方。え。有馬が用事が無いとは。

千々岩。いや。有馬だけで無い。拙者はもうどこにも用事が無くなつた。(突然はらはらと落涙す。)

直純。(千々岩の傍に寄つて)伯父御。あれは一體何なのだ。あの女は一體お身の何なのだ

千々岩。ああ。拙者の此の胸が誰に分からう。拙者の此の切ない胸の中が誰に分からう。右衛門ノ佐どの。あれは拙者の戀人なのだ。

直純。(愕然として)え。お身の戀人だ。

千々岩。あれがこれまでに拙者の胸の中に這入つて來たたつた一人の女なのだ。それが死骸になつてあの下へ打ち上げられた。

直純。(茫然として居る。)

お假名の方。(忽ち顔色變はる。)

千々岩。お身達もさぞ意外に思つたに相違ない。拙者は女なんぞには指一つ觸れた事が無い男だと思つて居られた事で有らう。をとゝしまでは眞實拙者はさうで有つたのだ。ああ。あれがをとゝしの春で有つた。その時に拙者の今の此の怖ろしい苦しみの種が蒔かれたのだ。その頃から拙者は自分の信仰を疑ひ始めた。拙者の心を脅かすものが現れたのだ。右衛門ノ佐どの。それを何だと思ふ。現世の快樂を惜む心なのだ。今から思へば、それはその時初めて現れたものでは無かつた。長い年月の間絶えず心の底に根を張つて居たのだ。只だそれに氣がつかなかつた。或は氣がついても自ら僞つて居た。それがその時初めて怖ろしい力で浮き上つて來るのだ。拙者は物心がつく頃にはもう聖公會の聖教徒になつて居た。寧ろ側からさうせられて居た。それから切支丹の使ひとなつてろおまへ行つた。歸つて來たのは十四年の後であつた。それからも只だ一筋に教への爲の月を送つた。その四十年に近い長い間を有らゆる現世の快樂と斷ち放たれて世を送つて來た。現世の快樂などは顧みる暇が無かつたのだ。それが其の時初めて目を覺ました。拙者のそれまでの清い生涯は、誠に強い信仰の炎が胸に燃えて居た爲では無くて、實はふとした動機から只だ不思議な成り行きに押し流されていつの間にかさう成つたのだと云ふ氣がし始めたのだ。その時拙者は心から拙者の過去を嘲ける氣になつた。そしてでいゆすの教を棄てて聖公會を去つた。それは只だ拙者の信仰が薄かつた爲なのだ。心の底からでいゆすの教へが分かつて居なかつた爲なのだ、拙者は口惜しい。あれ程長い間をあれ程に深くでいゆすの教へに浸つて來ながら、誠は教への端さへも分かつて居なかつたのだ。今から思へば我ながら餘りの愚かさが情無いけれども、それは後になつてで無ければ分からなかつた。その時拙者の前に現れたのがあのもにくだ。もにくは拙者を慕つて拙者の家へ來た。今から思へば、それは拙者を慕つたのでは無かつたのだ。拙者の中に有ると思つたでいゆすの教へを慕つたのだ。(緊張したる間。)

千々岩。ああ。それが拙者に分からなかつた。拙者の心はますますでいゆすの教へを離れて行く。寧ろ長の年月でいゆすの教へに欺かれて居たと思ふ樣な氣持が一日一日募つて行く。それに、もにくの心は不思議にますますでいゆすの教へに深く這入つて行くのだ。それが只だ自分一人で教へを奉じて居るだけで無い。も一度拙者をでいゆすの教へに

歸さうとして有らゆる力を盡すのだ。もにくがさう努めれば努めるほど不思議にまた拙者の心はますますでいゆすの教へから離れて行く。さうして二人の間にはそれは不思議な爭ひが續いた。もにくは目も當てられぬほどに苦しみ拔いた。拙者の心が教へを離れれば離れるほど、もにくの拙者を慕ふ心は尙ほ強くなつて行くのだ。さうして此の容まで、さうだ、あれが二月の末で有つた。それまで二人は不思議な爭ひを續ければ續けるほど尙ほ深く二人の心が抱き合つて行くのを覺えながら暮して來た。とうとうその最後の時が來たのだ。その夜、さうした激しい爭ひの のちに拙者はもにくの胸にかけた十字架を引つちぎつて床にたたきつけた。もにくは眞つ蒼になつた。彫像の樣に立ち竦んで、怒りでわなわな震へて居た。その明けの朝もうもにくは居なかつた。それから二度と拙者に姿を見せなかつた。もにくが持つて出たものは一枚の白無垢だけであつた。

(間)

千々岩。拙者はその時眼の前に大地が開いた樣な思ひがした。拙者は狂氣の樣になつてもにくの迹を搜し步いた。もにくが居なくなつて、初めてもにくを慕ふ心が拙者のからだ中に蘇つたのだ。けれどもどうしてももにくの行方は知れなかつた。右衛門ノ佐どの。その時初めて教への誠の力が拙者の胸を貫いたのだ。もにくはあれほど慕つて居た拙者を捨てたのだ。よしんば命を失ふ時が來ても拙者を捨てる事だけは出來まいと思つたあのもにくが見事に拙者を振り切つて行つて了つたのだ。拙者は怖ろしい力で大地へ たたきつけられた。その時初めて見苦しい拙者の心がまざまざ目の前に浮かみ上つた。拙者はそれから命がけで聖者を讀んだ。古の聖者の傳記を讀んだ。それは石にしがみ付く程の思ひで有つた。その時初めて不思議な世界が拙者の前に開けたのだ。でいゆすの教へがその時初めて拙者の胸に分かつた。ぜすす・きりしとの說かれた教への辱けなさが拙者の前ににじみ出た。

直純。(わなわなと身を顫はして)伯父御。

千々岩。右衛門ノ佐どの。(直純の手を取つてはらはらと泣く。)

直純。(その手を引く。憎惡に滿ちたる目を千々岩の上に投ぐ。)

千々岩。それから拙者は復たもにくの跡を尋ね知めた。一言この拙者の心持をもにくに傳へ度いと思つたのだ。もにくはさうとは知らずに今でも拙者を怨んで居るだらう。蔑んで居るだらう。さう思ふと拙者は立つても居ても居られぬ氣持がしたのだ。それから拙者は捜し廻つた。長崎に居ると聞いて長崎へも行つた。平戸へも行つた。はるばる海を渡つて五島までも行つて。見たけれどもどこにももにくは目當らぬ。そしたらをととひだ。もにくに有馬で逢つたと言ふ噂を聞いた。拙者は直ぐに馬を飛ばして有馬へ來た。その時には、ああ、もにくはもう死んで居たのだ。(身をもだへて)もにくはとうとう拙者の心を知らずに死んだのだ。死ぬまで拙者を怨んで、總ての望みを失つて、もにくはとうとう死んだのだ。右衛門ノ佐どの。お身は拙者の此の氣持が分かるか。

(直純とお假名の方と、只だ凝然と有らぬ方を瞰つめて居る。)

直純。(冷然と併し強く)伯父御。それでお身は復た元の聖教徒に歸ると言ふものだな。

千々岩。さうだ。あすから直ぐにでいゆすに捧げた拙者の生涯が初まるのだ。

直純。(鋭く)伯父御。因よりお身は承知の上で有らうの。でいゆすの教へは今御禁制の邪宗門だ。聖教徒に歸るには覺悟が要る。

千々岩。おお。その覺悟が無くてならうか。今宵お身が焚き殺す人人の上が直ちに拙者の身の上なのだ。

直純。(激しき憎惡の目差を千々岩に投げる。)

(長き間。)

お假名の方。(冷然と次の間に向つて)乳母や。乳母や。」

(乳母、出づ。)

乳母。お召しになりましてございまするか。

お假名の方。(同じ様に冷然と)千々岩さまにお手水を差し上げてお與れ。」

乳母。はい。

千々岩。(頷づいて立つ。)

(千々岩、乳母、入る。)

(長き間。)

直純。(お假名の方と目差合ふ。兩人凝つと目を見合ひ居る。)假名。

お假名の方。(突然激しく)との樣。

直純。(忽ち凝然と立ち竦んで只だお假名の方の顏を覗つめて居る。)

お假名の方。(自ら嘲る如き調子にて、低く鋭く)との樣は好い氣味だと思召しますか。さうとも知らずに淸左どのを慕つた假名を好い氣味だと思召しますか。

直純。(やはり只だお假名の方を覗つめ居る。)

お假名の方。(冷たく笑つて立ち上がる。)右衞門ノ佐さま。あれを。(鐵砲に指をさす。)

直純。(只だ茫然として居る。)

お假名の方。(稍や強く)右衞門ノ佐さま。

直純。(自失したる人の如くに立ち上がる。そして壁に立てかけ有る鐵砲を取り上ぐ。)

お假名の方。(縁側に直立して。低く併し凛然たる命令の語調にて)假名のここを狙つて。此の胸の眞中を狙つて。

直純。(やはり茫然として只だお假名の方の顏を覗つめ居る。)

お假名の方。(再び稍や強く)右衞門ノ佐さま。

直純。(無意識の人の如き態度にて鐵砲を捧げてお假名の方の胸を狙ふ。)

お假名の方。(胸を押し出す樣にしながら。同じ調子にて冷たく)此の眞中を。此の胸の眞中を。

直純。(お假名の方の胸の眞中に狙ひを定む。)

お假名の方。(凝つとそれを視てやがて目をつむる。稍や高く鋭く、併し飽くまでも冷たく)火蓋をお切りなされ。

直純。（火蓋を切らうとする。）

（乳母、縁側に現る。）

乳母。（仰天して）殿さま。（つと寄つて鐵砲の筒を押へる。）

（轟然發射す。玉それて襖を擊ち抜く。襖一枚ばたりと倒る。）

直純。（何ほ茫然と鐵砲を提げたまま前を視つめ居る。）

お假名の方。（目を明く。冷かに直純を見る。やがて身を翻して外に向く。）

乳母。（只だ惘れて）との樣。それはまあどうした事でございます。

直純。（やはり同じ樣に立ち續けて居る。）

（外の霧漸く晴れて、朝日燦然と輝く。）

お假名の方。（外に向いて高く口笛を吹く。）

（遠くで犬の吠ゆる聲。）

四　齣

禮拜堂の內部。

不思議なる歐洲風の建て物。今は甚しく荒廢に歸して、樣樣の切支丹に關する調度の物置の如くになり居る。

眞晝。

四方の扉閉し有る爲に內部稍や暗く、何處よりとも無く差す日光に只だ朦朧と見ゆ。

初め人の姿見えず。

やがて入口の扉の所にて、錠の音がちやがちやと鳴る。

扉明く。强き眞晝の日光一筋內に差し入る。直純と千々岩、入り來る。

千々岩。（入口の所に立ちて）これは眞つ暗だな。

直純。なに。外の明るい所から這入つて來たからだ。今戸を開ける。

（直純、正面の扉を明け放つ。）

（正面に、近く溫泉（うんぜん）ケ嶽高く澄みたる秋の中空に聳ゆるが見ゆ。）

（部屋の内部、一度に明るくなる。片方に寄せて御厨子しつらへ有り。基督を抱けるまりやの畫像かかれり。周圍の壁になほ種々の畫像かかれり。中にてしやびえる及びろよらを描けるもの最も大きく目立てり。さまざまの切支丹に關する器具雜然と取り散らしあり。片隅に一基の黒き大いなるおろがん据えあり。天井より高く帳を垂れあり。）

千々岩。（厨子の聖像の前に立ちて恭恭しく禮拜す。）

直純。（冷たく其の姿を眺め居る。）

千々岩。（片隅にかかれる天鵞絨の上衣を取り上げて）おお。これだ。これだ。これが辱け無くも法王ぐれげりさまから手づから拙者に下された法服だ。（思はず涙ぐんで）拙者はろおまでこれを着た姿を寫し取つて貰つた。ちちあんどのと言ふえうろつぱ第一の名譽の繪かきの高弟でちんとれつとおどのと言ふのが拙者の姿を描き取られた。それは今でもろをまの宮殿の壁にかかつて居るのだ。（凝つと視て）これを差し上げた時に、お身の父御は此の中に額を埋めて涙に咽ばれた。

直純。（扉の所へ行つて外を眺め居る。）

（稍や長き間。）

千々岩。（部屋の中を見廻してなつかしげに）ああ。何もかも拙者は見覺えがある。初めて此の禮拜堂が出來上つた時のお身の父御の限り無く悦ばれた俤が拙者には今見える樣だ。（ふとおろがんを見て）お。右衛門ノ佐どの。まるたどのは。

直純。（無言のまま向うを向いて外を見て居る。）

千々岩。（非常に不安なる顏をして）右衛門ノ佐どの。

直純。（やはり振り返らず）伯父御。この日和は長く續かぬ。あれを見ろ。小地獄の煙りがあの通り眞つ直ぐに立ち上つて居る。あれがああ見える時にはきつと間も無く雨になるのだ。併し今夜はまだ大丈夫だらう。

千々岩。（直純の傍へ寄つて）右衛門ノ佐どの。まるたどのはどうせられたのだ。

直純。（振り返つて千々岩の顔を見る。）伯父御。まるたはもう此處には居ぬよ。

千々岩。それではどこに居られるのだ。どこに。

直純。（凝つと千々岩の顔を見る。やがて無言のまま復た向うを向いて）伯父御。お身はもう有馬へ來る事は無いか。今日大村へ歸つたらもう復た有馬へ來る事は無いか。

千々岩。（凝つと見て）右衛門ノ佐どの。お身と逢ふのもこれが最後になるかも知れぬ。

直純。それでお身はあの墓はどうする積りだ。あの大村の女の墓は。

千々岩。あれは今朝方詣でて來た。あれが永劫の別れの積りで思ふままにあの前で涙を流して來た。

直純。伯父御。せめてもの俺の志だ。直純があすこへ墓を建てよう。

千々岩。（直純の顔を見る。やがて）右衛門ノ佐どの。お身の厚志は千萬辱ない。だが、寧ろあのままの方が拙者の本懷だ。

直純。（只だ默つて居る。）

千々岩。あれは砂山の陰に佗く埋められて居た。冬の初めに嵐が吹くか又は海の荒れた波の日に砂山の位置が動けば、あの塚はやがて迹形も無く消えて了ふ。それで好い。それで好い。それで拙者は本望だ。あれの迹は只だ拙者の胸にだけ殘るのだ。

直純。思へば不思議な因緣だ。お身に緣故の有る者とは誰も知る由が無い。家來が誰にも知らさずそつとあすこへ埋めたのだ。

千々岩。（ふと顔を擧げて）右衛門ノ佐どの。それにしては不思議な事がある。

直純。不思議な事とは。

千々岩。あの墓の上には花が一杯蒔いて有つた。

直純。（慄いて）え。花が。

千々岩。あれの墓は秋草の花で埋まつて居た。それもあれは一人の上げたもので無い。色色の花が重なつて居た。墓も見えなくなる位に積み上つて居た。上から上から何人もが投げた花が集つてあれは了ひにあゝなつたのだ。

直純。伯父御。あれは家來の外には誰も知らぬ。知つた者が有つても城内の者だけだ。（不安なる且つ不快なる表情をなして）まさか城内の者がその様な事もしはしまい。

（長き間。）

千々岩。（直純の傍に寄つて緊張したる態度にて低く）右衛門ノ佐どの。まるたどのはもう此の世に生きて居はせぬのか。

直純。（凝つと千々岩の顔を見て）いや。まだ生きては居る。

千々岩。（ほつとして）さうか。まだ生きて居られるのか。拙者はまた。

直純。だがまるたが生きて居るのは今日一日だ。

千々岩。（愕然として）え。何と言はれる。

直純。（鋭く）伯父御。俺は今夜まるたを焚くのだ。

千々岩。（驚愕して）お身は何を言はれるのだ。

直純。（確乎たる調子にて）伯父御。俺はいよいよ今夜まるたの始末をつける。あの俺の家老どもと一緒に焚いて了ふのだ。それで、此の間ここから出して牢へ下した。

千々岩。（只だ茫然と直純の顔を見つめて居る。）

（垂れたる幔ゆらゆらと揺れる。兩人とも氣づかず。）

（長き間。）

千々岩。（漸く我に返つて）右衛門ノ佐どの。お身は知つて居るのか。これがどれ程に怖ろしい事なのだが、お身は知つて居

るのか。
直純。知つて居る俺が今しようとして居る事がどの様な事なのだか。それは誰よりも好く此の直純が知つて居るのだ。
千々岩。おお。それになぜお身はその様な怖ろしい事をするに氣になつたのだ。
直純。（凝つと見返して）お身は聖教徒に歸る身だ。今の直純の心はお身には分からぬ。俺は今お身などには迚も及ばぬ所まで行つて居るのだ。
千々岩。おお。それでもこれは餘りに無殘な爲方だ。右衛門ノ佐どの。お身も好く知つて居るでは無いか。まるたどのはあれ程までに心の美しい人だ、しかも今でも一心にお身の事を思つて居るのだ。
直純。（強く）だからこそ俺はまるたを殺すのだ。それだからこそ今日俺はまるたを焚く。伯父御。お身にはまだ分からぬのか。俺が今日家老の一家を焚くのはあれは口實なのだ。まるたを焚く爲の口實なのだ。
千々岩。（茫然として）おお。右衛門ノ佐どの。
直純。俺はこれまでに何百人の切支丹を殺したか。けれども此の様に鋭い張りつめた氣持になれたのは今日が初めてだ。俺は此の前有馬の長老親子を焚いた。その時にも丁度今度の様な騒ぎを起こした。有馬のやつ等はそいつを丸で神さまか何ぞの様に有り難がつて居たのだ。その夫婦と幼い子供と三人を焚き殺した。その時俺は嘗てまだ覺の無い鋭い悦びが胸に湧いた。けれどもその時たつた一つ俺のその完全な悦びを傷けるものが有つた。俺はその三人を別別の柱にしばり付けて焚き殺した。所が、火がだんだんに燃えて行つて初めて着物に火がついて次に其のしばつて有る繩を燒き切つたのだ。そしたら、その幼い子供が直ぐに母親の胸の所へかけて行つて、そして抱き合つて焚け死んだ。俺はその時なぜあの繩を鎖にして置かなかつたかと思つていつまでも殘念で爲方が無かつたのだ。
千々岩。（次第に力強き態度になつて凝つと直純を正視して居る。）
直純。その時のその不滿な氣持がやつと今日になつて滿たされた様な氣持がするのだ。いや。それよりももつと鋭い心持だ。もつと遥かに張り詰めた心持だ。それはまだこれまでに覺えの無い張り切つた心持だ。伯父御。この氣持がお身

に分かるか。おお。早く夜が來ぬか。早く晩の五つが打たぬか。俺は言ひ知れぬ悦びが胸の底からこみ上げて來るのだ。

(長き間。)

千々岩。右衛門ノ佐どの。拙者はたつた一言お身に言つて置きたい。お身の今歩いて居る道はそれは怖ろしい道だ。それは地獄へ落ちる道だ。その先には只だ地獄の苦患が口を明いてお身を待つて居る。

直純。(凝つと見返しながら)伯父御。お身は俺がそれを知らぬと思つて居るのか。地獄と言ふものが有るから、今それを俺に見せろ。俺は直ぐに自分でその中へ飛込んでやるのだ。

千々岩。まあ拙者の言ふ事を聞くが好い。お身は今只だ前へ前へと進まうとせられる。故らに自分を振り返つて見ようとせられぬ。拙者はそれは卑怯な心だと思ふのだ。

直純。なに。卑怯だ。(怒りにぶるぶると身を震はす。)伯父御お身は大村へ往んで聖教徒になれ。俺は俺の思つた通りにする。

(長き間。)

直純。伯父御。お身は知つて居るか。これまでどれだけ俺がお身を力にして居たか。どれだけ俺が内心でお身をたよりにして居たか。けれどもあれこそは卑怯な心だつたのだ。まだああ言ふ卑屈な心が俺のからだに根を張つて居たのだ。俺はお身こそは俺の身方だと思つて居た。でいゆすの教へから轉宗した直純の心持はお身ならでは知る者が無い。お身一人が俺の身方で有る間は、よしや有らゆる人間が俺の敵となつてもそれは磐石の様な強みだと思つたのだ。けれどもそれは卑屈な心だつたのだ。いや。それほど卑屈な心は無かつたのだ。それは昨夜初めて俺に分かつた。お身がもう俺の身方で無いと知れた時に初めて俺の心に分かつたのだ。その時初めて俺の道がはつきり俺に分かつたのだ。それはたつた一人で歩く道だ。その先には地獄の門が待つて居ても好い。俺の道は只一筋だ。俺は眞つ直ぐに地獄の扉を睨んでまつしぐらに此の一筋の道をかけ下るのだ。

千々岩。(つと直純の手を取つて)右衛門ノ佐どの。

(兩人凝つと怖ろしき眼を見合ひ居る。)

（長き間。）
（帳の中にて嚔の音がする。）
直純。（愕然と振り返る。）
（帳ゆらゆらと揺れる。）
直純。（づかづかと寄つて、つと帳をあける。）
（堀越後ノ守忠俊（元の越後春日山の城主、お假名の方の先夫、四十九歳）帳の中に立ち居る。ぼろぼろの衣を纏ひ、頭髪も髯も長くのびて麻の如くに亂れ、顔も手足も汚れ切つて、殆ど誰とも見分け難くなり居る。手に、直純が持てると酷似したる革の鞭を持つ。非常に狡猾にして且つ敏捷らしき態度。）
直純。（愕いて思はず身をひく）何者だ。そちは何者なのだ。
忠俊。（非常に人なつこき態度にて）右衛門ノ佐どの。とうとう見出だされましたな。（帳から出る。）今まで巧く逃げおほせて居ましたがな。とうとう掴まつて了ひました。はつは。拙者は堀忠俊でござるよ。春日山の越後ノ守忠俊でござるよ。
直純。（驚愕して）え。越後ノ守。
忠俊。右衛門ノ佐どの、さぞかし意外でござらう。まこととはなさらぬかも知れぬ。併しこれが眞正眞銘の忠俊でござるよ。お假名の方の先の連れ合ひ、元の春日山の城主越後ノ守忠俊がなれの果てでござる。流された能登の國からはるばると此の西國の果ての有馬まで參りましたのぢや。はるばるお假名の方の迹を慕つて參りましたのぢや。
（直純と千々岩、只茫然と眺め居る。）
忠俊。（敏捷なる眼を怠り無く動かせながら）その途中では乞食も致しました。盗みも致しました。弱い相手と見たら強盗にもなりました。身についたものと言つては何一つ殘さず離して了つて、御覧なされ、此の有様ぢや。能登からここまでは遠うござるよ。はつは。これが假りにもその昔十二萬八千石の一城の主の果と見えますかな。只だ、それでもな、右衛門ノ佐どの。只だこれだけは離しませなんだのぢや。この鞭だけは放さず持つて參りましたのぢや。

直純。(悸然として眺つめ居る。)

千々岩。(不審げに眺め居る。)

忠俊。(狡猾な眼つきをして直純の樣子を伺ひながら)右衞門ノ佐どの。お身も持つて居られるな。お身もやはり肌身離さず持つて居られるな。それぢや。それぢや。その鞭一筋で忠俊は此の淺ましい姿になりましたのぢや。

直純。(顔色眞つ蒼になる。)

忠俊。(直ぐに直純に阿ねる樣に)いや。併しお身は別でござるよ。お身は別ぢや。お身は此の忠俊などとは比べものにならぬ。いや。僞りではござらぬ。諂つて申すのではござらぬ。全くの所拙者は心からお身に感服致して居りますのぢやお身はあの松崎丹下、あいつを斬つて來てられた。あれでござるよ。あれから拙者はお身を偉い方ぢやとつくづく感じ入りましたのぢや。あれが拙者などには眞似の出來ぬ業でござりまするわい。あの爺め。拙者も隨分と惱まされましたわい。それでも拙者にはどうする事も出來ませなんだ。つまりお假名の方にしばり拔かれて居りましたのぢや。ああした思ひ切つた業は拙者には迚も出來ぬ。考へて見るのさへ怖ろしうござつた。それでとうとう家をも身をも亡ぼして今の此の有樣ぢや。それから見れば、右衞門　佐どの。お身などはお羨しい。(怪しく眼を輝かせて)お假名の方もお身には好々致して居りますな。拙者との仲なんぞは、どうしてあんなではござりませなんだ。拙者なんぞはいぢめ拔かれたものぢや。それでもまだ忘れる事が出來ないで、千辛萬苦の末にやつとここまで跡を追つて參りましたのぢや。愚かでござるな、右衞門ノ佐どの。日本一のたわけぢやと我ながら思はぬ折とてはござらぬ。と言つて、扨てそれがどうにも他に爲樣がござらぬのぢや。(ますます怪しき眼を輝かせて)それを思へば、お身などは羨しい限りぢや。第一に、お假名の方はお身の事を思つて居る。いや。全くぢや。それは拙者には好く分かる。

直純。(身を震はして。つと寄らうとする。)

忠俊。(それを素早く飛び退いて)右衞門ノ佐どの。御寛なさらぬか。拙者は、これ、丸腰ぢや。身に一物もつけては居らぬ。(嘲く)此の丸腰の拙者を切つて何となされる。

直純。（怒りに身を震はし居る。）
忠俊。（狡猾なる眼を走らせながら、）家重代の郷の義弘、相州國光。能登を出る時にはその二腰を手挾んで居りましたのぢや。それも途中で路用に代へて了ひました。それでも此の鞭だけはかりそめにも肌身を離す心になりませなんだ。家重寶の二腰を手離しても。これだけは離すことが出來ませなんだのぢや。（直純の顔色を伺つて直ぐに調子を變へる。）併しな。右衛門ノ佐どの。拙者は夢にもお身に無禮を致す心はござらぬ。お假名の方にもどう致し度いと言ふてはござらぬ。實は誰にも見られず忍びおほせる積りで居りましたのぢや、ここに忍んでさへ居れば誰にも知られる氣使ひは無いと思ひ切つて居りましたのぢや•　まさかにお身がここへ見えやうとは思ひませなんだ。夢にも思ひかけなんだ。そこをぽかりとやられましたのぢや。いや。あの間際までも忍びおほせる積りで居りましたのぢや。所が、俄かに嚏を催してな。どうにも押へる事が出來ぬ樣になりましたのぢや•（笑ふ•）いや。これだけはどうをもな。あの時の苦しさと言ふものはでござりませんなんだ。（直純の顔を見て直ぐに復た元の樣子に歸つて）が、併し、困りましたな•　斯うして見出だされて了つては。これから拙者はどう致したら好うござるかな。これまでの樣にもうお身の寢所の下へ忍ぶわけにも參りませずな。と言つて、おれが拙者の命でござるのぢや。その爲に拙者ははるばると能登の國からやつて參りましたのぢや。只だこの鞭一つが拙者の命でござりましたのぢや。お身がそのお身の鞭でお假名の方を撲ち擲かれる。その時にその下へ忍んで行つて此の鞭を振りますのぢや•　お身の鞭に合はして力一杯此の鞭を振りますのぢや。するとな。その昔拙者がお假名の方を撲ち拔いた、その時の心持がそつくり拙者のからだの中に蘇つて來ますのぢや。其時拙者の氣持はそれは誰にも分からぬ。ぴしりぴしりと撲つお身の鞭と空でひゆうひゆう鳴る拙者の鞭とがぴつたり合つて。其二つの音がごつたになつて拙者のからだを突き拔きますのぢや。それはな。もう息がつまる様な氣持でござるよ。（突然聲を低くして）拙者はな。お身が拙者に眼をつけて居られるのも好く知つて居りましたのぢや•　お身が拙者の鞭の音に氣がついて居られるのも、寢所に玉をこめた鐵砲の用意がしてあるのも好く存じて居りましたのぢや。それでもあれだけは已めるわけに行きませぬのぢや。命がけでお身の寢所の下へ忍んで行きました。所がな。不思議なもので。さうなつて見るとまたそれ

までよりも一層の悦びが増した様な氣がしますのぢや。命がけになればなる程尙ほの事よせなくなりますのぢやな。それであゝして鼬の樣にお身の眼から逃げ廻つて居りましたよ。お身だけで無い。誰の眼にでも一眼這入るが最後、拙者の此の首は胴に附いて居りませぬのぢや。若い頃に慰み半分に習つた伊賀流の忍術が、いや、飛んだ所で役に立つたものでござるよ。

（極く短い間。）

忠俊。（少しく話し已めても不安に堪へざる如く直ぐ話し續ける。）それでもな。ここへ隱れて居る樣になつてからは、拙者も餘程助かりましたわい。拙者はな。毎日まるたどのの食べ物を分けて貰つて居りましたのぢや。まるたどのはそれは全く好い方でござつた。斯う申すも異なものぢやが。全くあの樣な方は有るもので無い。今お身が焚き殺されるのだと聞いて、拙者は心から仰天致した。（ずるき眼付にて直純の顏を見て）いや。併し、拙者などは何も申す事は出來ませぬわい。他人のする事にかれこれ申す力などはございませぬわい。只だな。拙者はまるたどののお蔭でひもじい眼を見ませなんだ。それが何より辱ないと思ひましたのぢや。それまでに食はぬ時の方が多うござりましたよ。寢所の下で鞭を振つたあとなどはどうかするとぐたぐたに疲れてどうにもからだが動かせぬ事もござつた。それでも逃げ出さねばなりませぬのぢや。逃げ出さねば命が亡くなる。いや。その苦しい事と言つたら全くござりませなんだな。（突然甚しく不安な眼付になつて）それでもこれまでは好うござつた。扨て、これから拙者はどう致しますかな。これからどうして好いか分からない。これから拙者は一體何をして。

（稍や近く犬の吠ゆる聲。續いて口笛の音。）

忠俊。（耳を傾けて）は。吠え居るな。あれぢや右衞門ノ佐どの。あれでござるよ。拙者が弱つたのは。あの獅子丸と言ふやつな。あいつめ今でもまだ拙者を覺えて居りますのぢや。此の樣な姿になつても、まだ拙者の顏を覺えて居りますのぢや。いや。全くあいつには弱り切りました。拙者が身の寢所の下へ忍んで行きますとな。あいつめ不思議にどこからか嗅ぎつけて來居つて。直ぐ牙をむいて吠えつきますのぢや。伊賀流の奥儀もあいつだけには稽にもならぬ。何よりも

拙者の怖れたのはあいつでござりましたわい。春日山の頃から、あいつは不思議と拙者を嫌ひましてな。

（口笛の音、高く冴えて空に響く。）

忠俊。（聞き惚れて）。あれだけは全く素的でござる。な。それ。あの澄み透つた音な。あれはあいつで無うては他に誰も眞似てが無い。（全く肉魂を奪はれたる如く）は。全く何とも申されぬな。何か寧ろ不思議な氣持になる。それはな。あの。

直純。（つと寄つて）越後ノ守。

忠俊。（はつと我に返つて振り向く。）

直純。（抜き打ちにずばりと斬る。）

忠俊。（素早く身を交さんとして間に合はず。右の肩から乳の下まで袈裟かけに斬り下げられる。）う。（一聲呻いて、身を反してばたりと倒れる。血が花火の樣に吹き出す。一二度兩手で虚空を掴んで身をうねらせる。やがてばたりと手足を投げて息絶ゆ。）

直純。（血刀を提げたまま凝つと死骸を見て居る。）

千々岩。（直純の顔を見て居る。）

（長き間。）

（外に口笛の音のみ高く澄みて聞こゆ。）

直純。（振り仰いて）伯父御。これが俺の姿かも知れぬよ。此の直純の姿かも知れぬよ。

（兩人、怖ろしき眼を見合はせて居る）

五　齣

城内の一間。

障子明け放ちあり。

向うに大いなる廊兩方より續く。

暮れて間の無き頃。

雨の前の曇りたる夜。月夜なれども朧ろにして、正面に只だ温泉ケ嶽の大いなる姿怪しげに見ゆるのみ。

侍臣及び腰元大勢、廊に坐して一心に前を覗つめ居る。皆怖ろしき表情をなし居る。

乳母、一人少しく離れて坐し、兩手を胸に重ねて祈り居る。總て無言。

長き間。

突然犬の激しく吠ゆる聲。

續いて口笛の音、直ぐ近くに聞こゆ。

乳母。（振り返つて）おお。奥方さま。

（お假名の方、廊より入り來る。）

お假名の方。乳母。獅子丸は本當に氣が狂つて了つた。あれ。あんなに吠え續けて、もう私が呼んでさへも傍へ來ぬ。

（廊より下の庭をすかして眺め居る。）

（直純、別の廊の方より出づ。手に二本の鞭を持つ。）

直純。（凝つとお假名の方のうしろ姿を見つめて居る。）

（犬更に激しく吠ゆ。）

直純。（極端に不快なる表情をなす。）

お假名の方。（外に向いて熱心に口笛を吹く。）

（犬の聲。更に近く高く聞こゆ。）

直純。（振り返つて）これよ。

（侍臣の一人、前へ出る。）

侍臣。は。

直純。（低く）鐵砲を持て。
侍臣。は。
直純。玉のこまつた鐵砲を持て。
侍臣。心得ました。
（侍臣、入る。）
お假名の方。（心づかず、なほ口笛を吹き居る。）
（犬の聲、少しく靜かになる。）
直純。（つと前へ出る。）
お假名の方。（振り返つて）お。殿さま。
直純。（二本の鞭を投げ出す。强く。）假名。それに覺えがあるかその鞭に覺えが有るか。
お假名の方。（鞭を取り上げて見る。愕然として）おお。
直純。（つと寄つて、お假名の方の肩を捕へる。）假名。
お假名の方。おお。どうしてこれを殿さまが。
直純。假名。その鞭の持ち主はあの禮拜堂に倒れて居るのだ。死骸になつて倒れて居るのだ。
お假名の方。（驚愕して）え。死骸になつて。
直純。俺が斬つたのだ。假名。此の俺が斬つて來てたのだ。
お假名の方。（直純の顏を見つめて居る。）
直純。（鋭くお假名の方を見返して）あいつは左の肩から袈裟がけに斬られて居る。丁度あの丹下が死んだ時と同じ姿であすこに倒れて居る。
お假名の方。（憎惡に滿ちたる眼を擧げて直純を見る。）

（暫き間。）

千々岩。（千々岩、旅の装束にて出づ。）（直純の傍へ寄つて）漸く馬の支度が出來た。右衛門ノ佐どの、拙者はもう參る。

直純。（凝つと視て）伯父御。もう行くか。

乳母。（傍に寄つて）まあ、千々岩さま。お前さまはもうお立ちになるのでござりまするか。

千々岩。（柔しく）乳母。もう復たそちにもいつ逢へるか知れぬ。達者で暮らせよ。

乳母。（泣く。）千々岩さま。お前さまはな。

（突然復た犬の吠ゆる聲激しく聞こゆ。）

直純。（いらいらして振り返る。）

お假名の方。おお。復た獅子丸が。

（侍臣、鐵砲を持つて出づ。）

侍臣。（直純に渡して）は。

直純。（引つたくる樣にしてそれを取る。）

お假名の方。（それを視て愕然として）おお。殿さま。殿さまは。

直純。（凝つと見返す。直ぐに、つと廊に出づ。）

お假名の方。（その手にすがつて燃ゆる如き眼をして見上げる。）との樣。との樣は私の獅子丸をお撃ちなされまするか。

直純。（その顔を見下し居る。）

お假名の方。殿さまは丹下を斬つてもまだ足らずに、獅子丸までも殺さうとなされまするか。假名の手から總てのものを取り上げようとなされまするか。

（犬の聲更に激しく聞こゆ。）

直純。（鋭く）假名。そちは今初めてそれを知つたのか。そちに此鐵砲の手を留める力が無いのを今初めて知つたのか。あの獅子丸の命すら助ける力の無い事をそちは今初めて知つたのか。

お假名の方。（眞つ蒼になつて）殿さま。

直純。（激しく突き退ける。）えい。どけ。邪魔を致すな。

お假名の方。（よろよろとよろめく。辛うじて立ち止まる。）

直純。（彪に向つて狙ひを定める。）

（一瞬。）

（轟然發射す。）

（犬の聲、ばたりとやむ。）

お假名の方。（絶望と憤怒の絶頂に達して、只だわなわなと身を震はして居る。）

直純。（凝つと庭を見て居る。やがて、どたり 鐵砲を投げ出す。）

（長き間。）

千々岩。（極めて冷靜なる態度にてお假名の方の傍に寄つて）お假名の方。お身はまだ御存じ無い。右衞門、佐どの今まるたどのを焚からとして居られるのでござる。

お假名の方。え。何と仰せられまする。

千々岩。（極めて冷靜に繰り返す。）右衞門ノ佐どのはまるたどのを焚かれますのぢや。遂にまるたどのを焚かれる事になりましたのぢや。それが今夜でござる。もうやがて。あの家老達の家族と一緒にまるたどのは命を失はれる。

お假名の方。（茫然と自失し居る。）

（侍臣、腰元達、驚愕す。）

皆。（色を失つて口々に）おお。まるたさまが。まるたさまが。

乳母。（直純にすがつた、はらはらと泣く。）との樣。

直純。（つと突き放す。）

乳母。（聲を擧げて泣く。）との樣。お前さまはな。まあ。お前さまは。

お假名の方。（つと直純の傍へ寄つて）おお。との樣。（直純の手にすがつて凝つとその顔を見上げる。）

直純。（鋭く見返す。）

假名の方。（思はずはらはらと泣く。）

直純。（つと突き放す。）假名。（憤怒に滿ちたる聲にて）そちに言つて聞かせるが、俺がまるたを焚くのは決して他の仔細で無いぞ。いつまでもあれは只一心に俺の事を思つて居る。只だその爲に俺はまるたを焚くのだぞ。

お假名の方。（はね返された樣に）おお。（凝つと直純を覗つめて居る。）

（兩人燃ゆる樣な憎惡の眼を見合つて居る。）

（長き間。）

千々岩。さて。拙者はもう行かう。右衛門ノ佐どの。お身達二人はやはりお身達二人だけの行く可き道を歩いて居られる。これまでは何かと障碍が有つた樣子だが、結句さう言ふものは一時の事だ。いよいよお身達二人だけの道になつた。畢竟お身達二人は一艘の船に乘り合はして遥かな海の旅へ乘り出した二人の船人ぢや。結局いつまでも二人だけの旅を續けて行く。どんなに憎み合つてももがいても、其の二人の船から外へ出るだけは出來ぬのぢや。拙者などは只だふと立ち寄つた見知らぬ港かそれとも遠くに見えた離れ小島の樣なものだ。船はやはりいつか港を出て二人だけの船路を續けて行く。ああ。昨夜から今日へかけては拙者の爲にも怖ろしい一日で有つた。何が怖ろしい惡夢に魘された樣な氣持がする。此の氣持は命の際までも忘れはしない。右衛門ノ佐どの。さらばじや。お假名の方。さらばでござる。

（乳母、從ひて出で行く。）

（千々岩、それぞれ會釋して立つ。）

直純。（凝つと有らぬ方を見て居る。）

お假名の方。（やはり有らぬ方を見て立ち續け居る。）

（長き間。）

（侍臣一人。急いで出で來る。）

侍臣。殿さま。お大事にござりまする。

直純。なに。大事だ。

侍臣。は。野々宮さまと山添さまと御二人の御家老が。

直純。おお。あの二人が何と致した。

侍臣。お二方とも御生害遊ばされました。

（寂として聲無し。）

（緊張したる間。）

直純。（侍臣に）好い。行け。

侍臣。は。

（侍臣、退く。）

（長き間。）

（蛇皮線弾きの法師、廊よりそろそろと出づ。片手に蛇皮線を抱く。）

直純。（つと傍へ寄つて、肩を捕へる。）檢校。

（此時、次の間にて時計の音聞こゆ。）

皆。（極度に緊張して）おお。五つぢや。五つぢや。五つを打つた、

（怖ろしき間。）

（下に火ぱつと燃え上がる。）

皆。おお。火が上つた。火が上つた。まるた様が焚かれるのだ。まるたさまが。まるたさまが。

直純。（下より群衆の喚聲聞こゆ。それは高からざれども宛も海の底の空鳴りの如き怖ろしき一大音響となりて聞こゆ。）

法師。（法師の肩を捕へたるまゝ屹と下の炎を凝つめ居る。）

直純。（蛇皮線をばたりと落とす。ぱつちり眼を開く。）

法師。（振り返つてつと捕へる。）檢校。

法師。（つと其の手を拔けて廊の最も端に出づ。頭巾を脱ぎ、黑の上衣をはらりと捨てる。下に黑天鵞絨に金色の縁を取つたる法服を纏ふ胸に燦爛たる白金の十字をかく。）

皆。（驚愕して）おお。

下の群衆の聲。（ますます高く騒いで今は明かに聞こゆ。）あれるや。あれるや。

法師。（高く手を捧げて）敬て申す如何に御主耶蘇基利斯督御身は一切人間を救ひ助け給はんが爲に降生し給ひ御科も在さずして敵の手に渡され御頭に茨の冠を載せ給ひ御頭を打たれ竹には打擲を與へられ十字架に打付押立られ盗人の中に加へられ酢と苦膽とを味ひ給ひ御脇を鎗にて突され死し給ふこれ比羅多茄逆のやからの業に非ず畢竟我等の科の故なり我等斯かる大惡人なれども御身の尊き御十字架の御力に攘て地獄の苦患より遁し給へ御身と共に十字架に懸り死したる盗人を導き給ひたる如くに我等惡人をも天堂へ導き給へあはれ天主聖父聖神と永く天の御代を治め給ふ御主亞孟。

皆。（涙を垂れて和す。）亞孟。

直純。（悸然と身を震はす。）おお。そち達までが。

皆。（直純の言葉を耳に入れず一心に胸に手を重ねて跪る。）

（炎、盛んに燃え上がる。）

下の群衆の聲。（ますます高く轟き亘る。）あれるや。あれるや。

法師。（十字架を高く捧げて）ろおたあと。どみにゆむ。おむねえす。ぜんてす。

皆。（宛かも法師と一體の如くに手を高く差し上げて）ろをたあと。どみにゆむおむね。えす。ぜんてす。

直純。（凝然と立ち竦んで居る。）

（下の炎、炎炎と燃え上つて赤く障子に映る。）

法師。（高く）きりえ。えれいそん。きりえ。えれいそん。

皆。（和す。）きりえ。えれいそん。きりえ。えれいそん。

法師。（ますます狂熱の語調になる。）きりして。えれいそん。きりえ。えれいそん。

皆。（只だ夢の如くに）きりして。えれいそん。きりえ。えれいそん。

法師。きりして。ありちのす。きりして。えさうちのす。

皆。きりして。あうぢのす。きりして。えさうぢのす。

法師。ぱあてる。でせりす。でいゆす。みぜえれ。のおびす。

皆。ぱあてる。でせりす。でいうす。みぜえれ。のおびす。

お假名の方。（つと直純の傍に寄る。）おお。との樣。（しかと直純の手にすがる。）

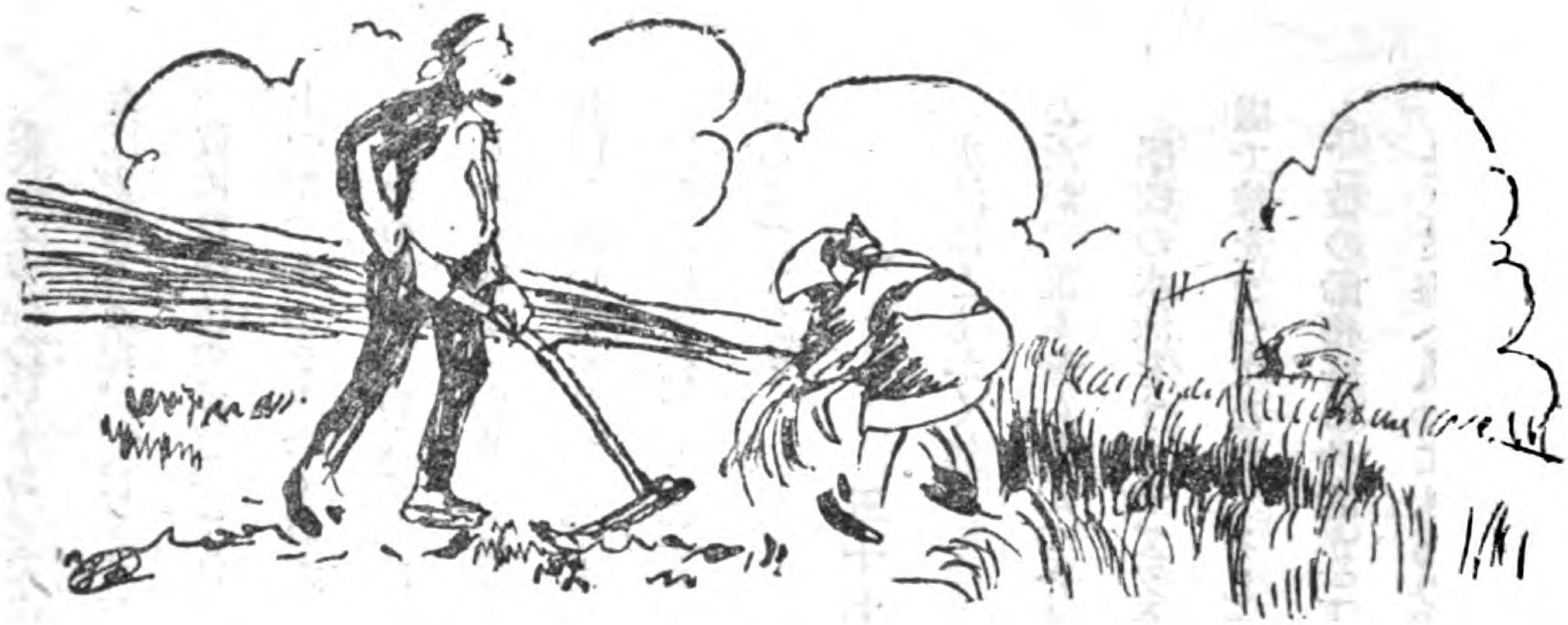
直純。（凝つとお假名の方を瞶つめて居る。）

（兩人、燃ゆる如き眼を見合ひ居る。）

（炎、更に高く燃え上がる。）

下の群衆の聲。（絶頂に達す。）あれるや。あれるや。

——了——



或る男

武者小路實篤

五十六

しかし彼は自分が金を持たないと云ふことを別に不平に思つた覺えはない。買ひ食ひや物を買ふことは彼にはいゝことゝは思へなかつたし、又一人でものを買ひに行つて見ず知らずの人と口きくことはあまり好きでなかつた。彼は兄といつも一緒だつたから買ひものをするのでも、兄が一人できめて、兄が金を出して買ふのだつた。時々兄が相談でもすれば、彼はそれを自分に資格のない權利でも與へられたやうな氣になつて、あいまいな返事をした。

彼は買ひたいと云ふことそのことがよくないことで、よくないからしないので、金がないから買はないのだと思つたことは好なかつた。そして彼は他人は他人である、自分は自分を立派な人間にしなければならない、ものをほしがつたり、小遣ひの少ないのを心細く思つたりしてはいけないと思つた。彼は自分より貧しい多くの人を知り、それを同情してゐた。自分が貧しいと思つてはゐなかつた。

彼は夕方仲のいゝおとなしい友達と海岸を散歩したり、砂丘に腰かけたりするのをよろこんだ。しかし日のたつのをなほよろこんだ。彼は早く自由になりたかつた。周圍の見へない壓迫からのがれたかつた。

彼は自己流の泳ぎ方で江之島を周游し、又江之島、鎌倉の間をおよいだ。彼は稲村が崎をこして暫くいつた處で、舟に上つた。あんまりおくれたのと、つかれたのと、もう卒業の資格が出來たので、あとメタルがもらへないのだが、メタルのために多くの人に迷惑を與へるのもいやだつた。疲れたのが一番の原因ではあつたらうが。

しかし彼が大がきで卒業したと云ふことは或る人々をおどろかした。彼の友はよくあとでそのことを云つて、彼の痩我慢の強いのを笑つた。しかし彼は最後まで辛抱しなかつたことを耻かしく思つた。

彼の兄は餘裕をもつておよぎこした。彼はそれを名譽に思つた。兄のことをほめられ、又内で自慢出來ることは彼のよろこびである。

五十七

水泳はともかく無事にすぎた。彼は一級になつても、卒業しても、今度は誇らないでも氣にならなかつた。氣にしてゐたが、誰も誇らなかつたやうに彼には見へた。少くも誰もそれで彼を非難するものはなかつた。

學校の水泳をすませて又金川に行つた。彼はうれしかつた。其處では彼はラッパの音をきく必要はなかつた。自由が其處で彼をまつてゐた。そして惡意ある目、壓迫する腕力を氣にする必要はなかつた。其處では彼の兄貴の仲間が三人と、彼の齡格好の仲間が三人と、十二三の從妹の仲間が三四人ゐた。

そして海へ入つてももう構廻りはしないでいゝ。

叔父はその時分、家のうしろの山を自分できりひらいて、土呂を運んではそれを家の前のがけにおとしてゐた。彼達

もそれを時々手つだつた。彼は叔父の所でいろ〳〵の本をよんだ。叔父はその時分、本當の半農生活をしてゐた。そして僧侶や、牧師や、漁師がよくあそびに來てゐた。叔父はその時分、精神的な要求をつよくもつてゐた。彼は叔父が菜根譚なぞを愛讀してゐるのをぬすみ見した。

叔父は又論語や、御敎をよんでゐた。彼はそれ等をのぞき見して、わからずなりに感心した。二三年のちの話しかも知れないが叔父が暇にまかせていろ〳〵の御經をうつしてゐた。彼のいつた時は法華經をうつしてゐた、それを見ると彼も眞似がしたくなつた。論語や、中庸や四十二章經なぞをうつした。

彼は十五六の時から性慾と戰ふことをくわだてた。彼はその方の知識はなかつた。そして勝つよりも、負ける時が多かつたが、それはくりかへされてやむことのない、又絕望し切らない戰ひの連續が始まつた。

五十八

彼が彼女を知つたのはその翌年の春であつた。彼は子供の時は女の子と遊ぶのをよろこんだ。兄とあそぶのは、彼にとつては面白くなかつた、我儘がきかないから、まけ嫌ひでそのくせ體力のない彼は男とあそぶことで我儘が出來なかつた。それで女の子とあそぶのがすきだつた。しかし彼は男は愛したが、女を愛したことはその時までなかつた。

彼は十六の春、始めて彼女に逢つた。その時、彼女は十三だつた。大阪の人で姉と一緒に彼の長屋にゐる、彼等が御別宅と云つてゐた、三浦の叔父さんの義理の伯母の處に來た。彼はその前からよく御別宅に行つた。其處には彼が伯母さんとよんでゐた人と彼より七つ上の福さんと云ふ伯母さんの子と彼より四つ下の三浦の叔父さんの娘の從妹がゐた。

其處へ彼女が二つ上の姉と來た。二人とも人づきあいのいゝ娘だつた。寫眞を見せて、彼に大阪や、大阪の近處の話しや、吉野の櫻見に行つた話なぞをした。

彼はすぐ二人と仲よしになつた。二人とも奇麗な娘だつた。妹の方は愛嬌があつて、姉を大事にしてゐた。彼は或時彼の母が、御別宅の伯母に、妹娘は美しい子だと云つてゐるのを耳にはさんだ。それが、彼女の美を彼が見出すヒントになつた。そして彼はまもなく彼女を愛するやうになつた。その愛は段々深まつた。彼は彼女に逢はずにゐることが出來なくなつた。元からおちつかない彼はますますおちつかなくなつた。しかし母は前の母とはちがつて、以前よりは餘程寛大になつてあまり怒らなかつた。

五十九

彼女に逢ふ少し前だつたらう。彼は學校で馬にのる稽古を始めた。そして始めは、馬を木馬のやうにして、尻の方から尻に手をついて飛びのる練習をした。先生が馬の前足の一方をもつて馬がけれないやうにしてゐる。すると皆がかはつて、馬にとびのる。彼にはそれが出來ないので、尻にぶつかつてはねおちる、そして皆に笑はれた。それがいゝ加減すんで、裸馬にのつて、馬が圓をかいて、早足であるく上で體操をする。處がある日、彼は馬からおちて後頭部をうつて、氣がぼんやりした。その後又馬にのつて、そして仲のいゝ友達と家に歸つた處が、彼はすつかり記憶がなくなつて、馬からおちてから自分の家に歸つたまでをまるで忘れてしまつた。どうして歸つたのか思ひ出せなかつた。母はすつかり氣にして、その後、頭はすぐなほつたのだが、何年かおいてそれが又崇る時があると云ふので、骨つぎの名倉に一月以上、大き祖母さんにつれられてかよつた。

そんなことがあるので、彼のなまけるのは、姉の死と一緒になつて母は大目に見たのかも知れない。

彼は元來、怠けもので、小說でもよんでゐる時は別だが、學校の稽古をしてゐる時は、十五分とぢつとしてゐられなかつた。歩いて來ては机に一寸向い、そしては又歩きまわる。彼の兄は机に向つて三十分程たつと頭がよくなると云つ

た。彼は机に向つた時頭が一番いゝので、すぐいやになる。勉强の辛抱は實になかつた。しかしその時は別に他に目的はなかつた。室のなかか、家のなかを歩くか、學校以外の本をよめばよかつた。

處が今は、彼女に逢ふと云ふことが唯一ののぞみになつた。何か口實があれば、彼の足は御別宅に向つた。

その長屋は元、倉だつた。それを下を住宅にかへて人にかしてゐた。御別宅にも金をとつてかしてゐたらしい。母の實家との近い關係にあつたのだから。なほちやんと金をとることが、祖母さん二人にたいしても必要だつた。その家は彼の家の一番おくにあつた。

彼は朝、晝、晩と、御別宅に毎日出かけた。朝はよることは少なかつた。朝飯前に散歩するやうにして出かけて、椽側に出てゐる彼女、(お貞さんと云つた。)に話をしかける。

話の材料は何んであつたか知らないが、ともかく何か話しかける、するとお貞さんは笑ひながら快活に笑へる。姉のお靜さんも、従妹の康ちやんも其處にゐる。

三人に話かけて笑はして、又ふと去つてしまう。それから學校から歸つて、お貞さんのゐる時分を目がけて出かけて、室のなかへ何か聲かけて入つてゆく。

皆、彼に厚意を見せ、少しもいやな顔をしない、彼は其處の大將になつて、皆を笑はせたり、からかつたりする。

「馬鹿」と云ふのは彼の口ぐせであつた。

お貞さんも、お靜さんも、康ちやんも、「馬鹿やい」と云ふ彼の口くせをまねる。

「あんまり馬鹿々々と云はれると自分が馬鹿になつた氣がする」とは彼の従妹の言葉である。

彼は決して媚びない。愛する人に程、我がまゝである。

しかし時々お貞さんのよろこびさうな本を自分の僞のやうな顔して貰ふ。

お貞さん姉妹は、

「通りにゆきますが、何か御用はなくつてと」云はれると。彼は少年世界を買つて來てもらつたりする。

彼は姉のお姉さんとも仲がよかつた。氣らくに話が出來る。しかしお貞さんが居ないと心細かつた。お貞さんが何かで家に居ないと當番で學校から歸つて來なかつたりすると、彼は御別宅にはさうながくはおちつかずに、門へ出てお貞さんの歸るのをまつ、姿が見へないと、心配する。そして母が彼の歸りがおそいと心配して門へ出て待つてゐる氣持が、はつ切りわかるやうに思つた。

あんまりおそいと傷したのではないかと思ふ、何か事件が起つたのではないかと思ふ。そして姿が見へると安心する。

そして門のなかに入つて何氣なく歸るのを待つてゐる。そして何か一こと二こと話す。彼はすつかり安心し、元氣になる。

六十

夏休みが來ても彼はあまりうれしくなかつた。夏休みが來なければいゝと思つた。夏休みにはお貞さん姉妹は大阪に歸るわけだつた。そして彼も金田にゆかなければならなかつた。

夏休みに大阪に歸るともうお貞さんなんか東京へ出て來なくなるやうな氣が何處かにした。夏休みがすんで彼は東京に歸つたが。お貞さん達はまだ歸つてこなかつた。豫定よりも二三日おくれた。彼は心配した。處が二人は又やつて來た、相變らずに快活で、元氣だつた。彼はそれを見て、すつかりよろこんだ。その秋から春にかけて程、彼にとつて樂しかつた時はないであらう。彼はまだ自分の戀を自覺してゐなかつた。少くもお貞さん達の厚意をすなほに感じてよろ

とべた。そして御別宅では皆が、彼のゆくことをよろこんだ。

彼は誰にも氣兼ねなしに出かけた。たゞ兄と母に怠けることが氣がひけたゞけだつた。

彼はゆく度に、お貞さん。お靜さん。康ちやんに嬉しさうに迎へられた。彼は其處で、三人と話をしたり、目かくしをしたり、鬼ごつこをしたり、繩とびをしたり、雙六をしたり、本を朗讀したりした。それは彼を夢中にさせる力があつた。彼女に逢ふと云ふだけで彼はよろこびだつた。その上、彼女は彼に快活によろこんで相手をする。彼女等は彼のことを若樣とよんだ。しかし大概の場合。名をよばずにうまく話をすゝめてゐた。そして彼を大事にした。

正月が近づくに從つて彼のよろこびはましていつた。冬休みは彼のよろこびの絕頂だつた。誰に氣がねがなく。彼は彼女達と話をし、そして彼女達とあそぶことが出來た。炬燵にあたつて話をしたり、羽根をついたり、百人一首をしたりした。彼はお大將であつた、しかも三人は氣らくにつきあつて、おつとめらしい處はなかつた。三人と又歌をうたつた。

正月になると、彼の家で毎晩百人一首をした。その時彼は使ひになつて御別宅に呼びに行つた、するとよろこんで福さんが總大將になつてお靜さん、お貞さん、康ちやんがくる。どうかして福さんや、康ちやんは來られない時があつても、二人はきつと來た。しかもさう云ふ時一番よろこぶのはお貞さんだつた。彼は時のたつのを忘れた。そして華かなお貞さんの笑ひ聲が彼の心をよろこばした。

しかしよろこびのうしろに、段々彼女を失ひたくないと云ふ氣が段々自覺めて來た。彼女は十四になつたのだが、齡より身體が大きく、十六位いには見へた。そして學校も、齡よりも一つ上の級に入れた。下の級に入ればいゝのに。

六十一

彼はだん〳〵彼女の自分にたいする愛を私かに要求しだした、しかし無邪氣な彼女の態度は彼を特別に愛してゐない

ことを露骨に示してゐた。彼女は誰にも愛想がよかつた。しかし誰もを愛する必要をまだ感じてゐなかつた。愛されるのを待つてゐたかも知れない。しかしまだ十四の彼女は無邪氣であつた。

十七になつた彼はすでに無邪氣ではなくなつた。しかし彼は彼女と結婚する氣にはなれなかつた。彼は自分を醜い男だと思ひこまされてゐた。彼は愛したことはあるが、愛されたことはなかつた。彼は愛されることは望まないが、たよられることをのぞんだ。少くも彼女の笑顔を彼にだけむけてほしくなつた。

彼女が病氣の時、彼は本當に心配した。彼の病氣の時は、彼女に心配してもらいたかつた。彼が病氣の時、彼女等の笑ひが、彼の病床にまで聞へる時、彼はその内に彼女のよろこばしい笑ひ聲をきくと腹をたてた。俺の病氣を氣にしない女を、誰が愛してやるものか。

そのくせ少しよくなりだすと、母と喧嘩して庭へとび出し、彼女に逢ひに出かける、そして、「御病氣はどう、もうおよろしいの」とうれしさうに云はれると、彼は不平は何處かへとんで行つて、すぐ感謝しながら、又寢床に歸る。

彼は彼女の夫になる資格が自分にあると思へないことを殘念に思つた。どうかしてその資格がつくりたかつた。そのくせ一方、彼は獨身主義でもあつた。

彼はもう亞細亞の王さんにならうと云ふ考はなくなつたが、政治家になる氣でゐた。彼は宰相になつてもいゝと云ふ氣になつてゐた。しかしそれで彼は滿足は出來ない男だつた。それから小說を書かうなぞと云ふ考ももつてゐた。ともかく彼は誰よりもすぐれた、世界第一の人間にならないでは我慢が出來なかつた。それにはどうも、獨身がいゝやうに思つてゐた。しかし彼女を失なうことはそれ以上つらいことになつて來た。そして彼女と夫婦になると云ふことが、段々理想的なことになつて來た。しかし彼は、自分に妻子を養ふ資格があるとは思へなかつた。

彼はどうしたら金がとれるかと云ふことは彼には見當がつかなかつた。彼は學校を出さへすればどうにかなると思つてゐた。しかしそれは八九年のちの話である。それまで彼女が獨身でゐるとは考へられなかつた。

しかしまだ彼女が學校を卒業する迄には二年はある。その内に決心をきめればいゝ、まだ時があると思つた。彼は勉强したいと思つた、しかしおちつかなかつた。彼は今までになく自分の實力を考へるやうになつたが、望み許り大きくつて、實力のないのにおどろいた。妻子を養へないものが、どうして妻をもつことが出來やう。學生の身で、そして兄の居候で。そして母はこの結婚に反對することはわかり切つてゐることだつた。しかし彼は彼女に逢ふとそんなことは忘れた、何にもかも忘れた。時のたつのが早いのを恐れる許りだつた。このまゝで時がたつてくれなかつたら。

しかし彼女は暇人ではなかつた。女中がゐなくなつた伯母の處では彼女も何かと手つだいしなければならなかつた。飯時分になるといそがしかつた。又庭をはいたり、靴をみがいたりしてゐた。彼はさう云ふ時の彼女を愛してゐた。そして靴をみがいてゐる彼女と立ち話をしに出かけた。又面白半分のやうに掃除を手つだつたりした。

福さんは謠曲をならいに行つた。お貞さんも康ちやんもならいだした。お靜さんはならいにゆかずに、家で繪をかいてゐる方がすきだつた。謠曲にゆくやうになつてから彼女の歸りはおそくなつた。彼はもう歸つた時分だと思ふと、お靜さん切りゐなかつた。彼はがつかりした。しかしお靜さんと話をして彼女の歸るのを待つてゐた。彼はお靜さんにも隨分厚意をもつてゐたがお貞さんがゐなければ氣ぬけになつた。

お貞さんはなんでもまけ嫌ひで熱心だつた。歸りのおくれる時が多かつた。彼は自分を嫌つてわざと歸りをおくらすやうに思つて、腹をたてたことも多かつた。しかし逢ふと、彼はこだわりはすぐなくなつた。

六十二

彼は段々文學が好きになつた。十七位いは精神の目さめる時らしい。彼はお貞さんのことがあつて、なほ眞面目にいろ〳〵考へるやうになつた。彼は今迄より自分の缺點が目に見えて來た。之では駄目だと思つた。勉强しなければと思つた。しかし學校の稽古をする氣にはなれなかつた。しかし自分の根氣のない、おちつかない、お貞さんのこと許り氣にしてゐるのが氣になり出した。本當に偉い人間にならなければ、自分はお貞さんを愛する資格はないと彼は思つた。

彼は今迄よりも多く自分の食ふことを考へたが、その方に自分の資格のないこともはつ切りした。しかし彼はまだどうしていゝかわからなかつた、たゞ自分をよりよき人間にしたいと思つた。彼は机に向つてゐながら、もうお貞さんは歸つて來たかと考へてゐる。御別宅の方へゆく道に格子戸があつて、それが開く音がすると歸つて來たのではないかと思ふ、さう思ふともうおちつかない。

こんなでは仕方がない。お貞さんのことは思ひ切つて勉强しやう、しかしそれは出來ないことだつた。

六十三

彼はその時分から段々兄とはなれだした。兄と一緒に遊んだり、散歩したりすることは彼には彼女からはなれることを意味してゐた。日曜は彼にとつて大事な時だつた。何にも知らない兄は日曜に彼を散歩にさそいだす、彼はそれを味もそつけもなく斷る、斷る理由が面白くないので、彼は氣がとがめるが、それだけ反つて如才なく斷るのがいやになる。

又彼が彼女の處へゆきたい時、兄が彼に玉なげの相手になることを半分命令的にたのむ、彼は又それを斷る。兄の相手を彼はさける。兄も従つて面白くなく思ふ。兄はそれで同じく彼の家にゐた、彼の従弟と一緒に散歩したり玉なげしたりする、彼は好んで孤獨な地位に立つ、そしてその元因の女々しさに怒る。

しかも、かくて得た、貴い日曜日に、彼女は友達の處に行つたり、謠曲をならいに行つたりする。彼女は自分を愛してゐないのだ。そして出不精なお靜さんと淋しく話す。お靜さんが出あるいて、彼女が家に居てくれたら、彼はどんなによろこんだらう。しかしさうは事實が許さなかつた。出づきな彼女はよく出あるいた。そして稲さんのお氣に入りで、彼女はよくお伴して出かける、お靜さんは氣むづかしい處があつて、自分の都合で斷ることが出來たが、彼女は人づきあひがよくつて、誰にも惡意をもたれない性質だつた。

彼は兄の感情を害してつくつた時間が無駄になるので、今度は日曜は川あるいてやらうと思ふ。又時々は兄と一緒に出かける、しかし面白いことはなかつた。

愛することの苦しみは彼をおそつた。又嫉妬や、不安が、彼の心をくらくした、しかし彼女は彼にも無邪氣に接した。そして彼はその時、心からのよろこびを感じないわけにはゆかなかつた。

六十四

正月が來ても彼は以前のやうな無邪氣なよろこびばかりは感じられなかつた。謠曲をならいに行つてゐる友の連がよく來た。それは彼女を目的にしてくることはたしかであつた。そしてすべての人はその人に厚意を見せてゐた。百人一首をしても、彼はその人と心のなかで戰ふことを感じた。それを彼は氣持ちよく思はなかつた。彼は彼女の唯一の人間でありたかつた。他の男と競爭する、それは侮辱のやうな感じがした。その男は彼女に露骨に厚意を見せれば、彼は露骨に冷淡にしたかつた。しかし彼はその男も自分と同じく彼女から愛されてゐないことを知つてゐた。彼女はむしろ彼の方に氣樂にしてゐた。彼はいくらか勝者の位置にゐることを感じてゐた。精神的に、氣持の上で、しかしお貞さんが謠曲に熱心になることは以前よりは不安になつた。

彼はその時分のある時の氣持を次のやうな小品にかいたことがあつた、

彼と伯母と從妹と自分は炬燵にあたつてゐる。さうして陽氣に話してゐる。四人とも遠慮して櫓の上に 手をのせてゐる彼女は自分の隣にゐた。自分の胸には誰も知らない或ものが居た。

自分は何氣なく彼女の左の手の處へ自分の右の手を持つていつた。さうして彼女の左の手に自分の右の手をそつとつけた。自分は彼女が手をひつこめるのを心配した。彼女は感じないものゝやうに話してゐる。自分もわざとしたやうに思はれないやうに平氣で話をつゞけてゐる。話に夢中になる瞬間には自分の手の彼女の手にふれてゐることを忘れてゐる。しかしその他の時にはすべてのあたゝかい柔い彼女の手から言ふべからざる嬉しさが自分の心の中に這入つてくる。

しかしそれと同時に自分の心の或るものは「卑劣なる者よ、女々しきものよ、男らしくあれ」と自分を叱る。

自分は又何氣なく自分の手を彼女の手から遠ざける。この間に自分の口は相變らずに語り、相變らずに笑つてゐる。さうして自分の心は口に走り、手に走つてゐる。心が口に走つてゐる間は比較的平穩だ、心が手に走つてゐる時、自分の心は愛に燃えてゐる。ある時は清き愛に、或る時は子供らしき愛に、或る時は情慾に。

彼女の手から遠ざけられた手は、又彼の手を慕ふ。自分は無邪氣を裝つて今度は大膽に、しかし輕く自分の右の手を彼女の左手の上にのせた。彼女の手は逃げない。さうして彼女は自分の顔を何げなく見る。自分の心は燃へた、自分の手は強く彼女の手を押へつけた。

しかしこの度も自分の口は依然として語り依然として笑ふ。しかし自分の耳は時々おるすになる。しかしその間は一秒の何分の一といふものである。誰も氣がつくわけはない。

自分の心は自分の穢れた心をかくさうと四方に氣をくばつてゐる。自分の心は他人に嘲笑されることを堪へ難いもの

と思つてゐる。清き愛も强い、情慾も强い、良心も强い、しかし「恥を知る事」は更に强い。

自分の心は百人藝をしてゐる。まづ第一に自分を樂しませやうとしてゐる。得られるだけ、快樂を得ようと思つてゐる。又彼女の幸福を傷つけないやうに注意してゐる。自分の恥をかゝないやうに注意してゐる。さうして他人の話を一言一句聞きのがさないやうにするかと思ふと、自分の馬鹿でないことを示さうと苦心してゐる。他人に彼女を戀してゐるやうに思はれない樣に苦心してゐるかと思ふと彼女に愛されたいと苦心してゐる。ごく無邪氣に話をしてゐるかと思ふと。ぼろかくしに笑ふ。到底解剖しつくされない程いろいろの分子が寄つたり離れたり合したりしてゐる。さうして互に黨をつくり互に爭つてゐた。しかし自分は一人である、自分は行爲の君主であり、責任者である。

彼女は强く手をおさへられてゐても平氣でゐる。圖にのつて小指をつまむ、自分の心はおどつた。あつと思ふ。自分の手は彼女の手から離れてゐる。自分は無邪氣にしてゐるのだ、少くも彼女は無邪氣に自分がしたのだと思つてゐるのだらう。恐れる必要はないと思ふ。さうして再び彼女の手の上に自分の手をのせて彼女の手をつねつた。

彼女は「あ痛ッ」と云つて笑つて手をひつこめた。さうして笑つて自分の方を見て、

「おひどい方ね、おつねりになつて」と云つた、

自分はその時ぼろかくしに從妹の手をつねつてやつた。

從妹もおこる眞作をする。

二人が自分をつねりにくる。自分は二人を相手にしてさん〴〵つねつてやつた。彼女の手を何度も强く握つた。二人はむきになる。櫓の上の蒲團が波立つ。伯母は笑つた。彼女も從妹もキイ〳〵立つて愉快さうに笑つた。

自分も笑つた。しかし自分の心にはやましい所があるのでその笑はいかにも自分の耳には賤しく響いた。自分は二人のやうに淸く笑いたいと思つた。しかしどうしても駄目だつた。」

六十五

彼の一生の内に、少くも彼の過去に於て華かなよろこびの日があつたとすれば、それは前と今度の正月であつた。普段も彼は常にあそびに行つたが、正月は一層たのしかつた。

前の年程無邪氣ではなかつたかはりに、彼は自分の戀を意識してゐた。そして彼女達とすごす晩はたのしかつた。彼は又毎日のやうに彼女達をよびに行つた。そして百人一首や、その他のあそびをした。彼女は百人一首に熱心になつて、目に見えて上手になつた。しかし彼は彼女達よりは強かつた、兄は一層強かつたが、彼は彼女達のすきな札を前に出して「とれたらとつて御覧なさい」とからかつた。そしてよくとられた。

お靜さんは「しづ心なく」が自分の名と緣があるせいか好きだつたが、お貞さんや康ちやんは何がすきだつたか、もう覺えてゐない。

ともかく彼は時のたつのを知らずに、又永遠に時のたゝないことをのぞむことの出來る時をもつたわけだ。

しかし彼の戀は淸い許りではなかつた。たゞ相手を誘惑するだけの力がなかつただけである。それには彼の良心も働き愛も働いたが、同時に内氣も、臆病も、妻子を養ふ目あてのないのも手つだつた。しかし彼は自分が立つのを、彼女がのぞんでゐることがわかつたら彼は誰をも敵とするのを恐れなかつたらう。死さへ。しかし彼女はそれをのぞんでゐるとは思へなかつた。彼女は十五の春が來たが、まだ無邪氣だつた。

彼は一度お靜さんに、彼女が出あるくのが好きなのに不平をもつたので、

「あなたは安心だが、お貞さんは危險だ」と云つた。その時、お靜さんは「あの子は安心です。」とはつきり云つた。彼は云はなければいゝことを云つたやうな氣がした。

その春、學習院の今迄知らなかつた、顏は知つてゐたが、百人一首のすきな仲間が、彼の兄の處に百人一首をしに來た。その仲間は兄よりも少しうまい位いだつた。そしてやり方、札のならべ方なぞも進歩してゐた。

その仲間に志賀が入つてゐた。二三年のちに本當の友達になる運命を二人がもつてゐたとはお互に知らなかつたらう。

しかし彼は前から、志賀の存在は認めてゐた。それは運動家として、又おしやれとして知つてゐた。一人他の人とちがう風をしてゐた。棒とびでは學校で一番だつたが、そのとび方に特色があつた。角力や、柔道や、器械體操なぞにも特色を出してゐた。腕力はなかつたが、手どりで頭を働かしてゐるのが見へた。彼とは凡そちがう種類の學生だつたが、彼は不快は感じてはゐなかつた。しかし緣のない人間のやうに思つてゐた。

しかし志賀のことはあとで書かう。彼の一生にむすびついたのは二年あとの話だから。

六十六

自分はこゝで少し話をかへやうと思ふ。彼は戀愛に沒頭してはゐたが、彼が精神的に目さめ出したのはその時期であつた。

彼の級は一體に溫和しかつた。殊に彼は溫和しかつた。學校をすかすことなぞは彼には思ひもよらないことだつた。しかし學校の勉强は益々出來なくなつて、成績は段がついてわるくなつた。元より落第の心配はなかつた。

しかし彼は近い人々からは價値を見出された。彼はよく會のやうなものを起して回覽雜誌のやうなものをやらうとした。しかしそれはながつゞきしなかつた。一度は彼はあまり一々仲間の云ふことに反對するので退會をすゝめられたこ

ともあつた。あとですぐ又仲よしになつたが。彼は雷同を殊に嫌つた、ボート競漕の時に、彼の級の人がのこらず青の加勢をした時、彼は理由もなく紅の加勢をして、十何本の青い旗を、一本の紅い旗でやぶらうとして、皆にいやがられたこともあつた。しかしへんに彼は皆に憎まれなかつた。彼は同級の人達からは厚意をもたれた。

ある時、彼の組の人が他の組の人から「君の級の人には面白い人がゐないね」と云はれた時、その人はすぐ答へた。「武者がゐるよ。」彼はそれをきいた時、わるい氣がしないのでおぼえてゐる。その人はある時、彼の顔を見て云つた。「君は劍難の相がある。」

彼はそれを信じなかつたが同じく忘れることは出來なかつた。

或る時、その人ともう一人の友と三人で歩いてゐた時、その人は云つた。

「試驗の時、だん／＼時間がなくなつてくると、へんないやな氣のする時があるだらう」と眞面目に、不思議さうに云つた。

その時、他の友は、狡猾に彼の方を見て笑つた。彼もつい尻尾を出しかけた。彼はその人を性慾の秘密を知らない無くの人間なことを知つた、そして他の友はへたな處で尻尾を出したと思つた。

彼の頭はほつたらかしておけば何か考へてゐる。ぼんやりすることは一修業である。彼は誰でもさうだと思つてゐた。

子供の時から意識しない時に彼の頭が働いてゐない時はない。彼は頭は呼吸や、心臓と同じやうに、のべつ考へるものゝやうに思つてゐる。熟睡した時でも腦は腦で働いてゐるのだが、氣がつかなつたり、忘れたりするのだと彼は思つてゐる。頭をぼんやりさせることは大なる修業だと思つてゐる、處が彼は或時、友から、頭は何にも考へないでぼんやりしてゐる時があるやうに聞いて彼は不思議に思つた。そんな人もあるのかな、樂でいゝだらうなと思つた。しかしいく

ら聞かされても彼にはそれは信じられない事實である。

彼の兄が或時云つた。

「奥田（兄の友）と篤ちやんとは馬鹿なやうなことを云ふなと思つて、よく聞いて見るとそれがよく考へた結果な點が一致してゐる」

彼は之を聞いた時、兄は矢張り、利口な批評すると思つた。さう云はれて彼は氣がついたが、彼は子供の時から自分の云ふことが人にわかつてもらへると云ふことは珍らしかつた。大概相手にわからずにすまして來た。

彼はそれがくせになつてゐて、日常生活では他人にわからせる迄の根氣が面倒なので、大概はいゝ加減で思ひ切つて、あとは自分だけで考へるのがくせになつて、一人角力をとるのが、別に不思議ではなくなつた。彼は大概のことは氣がついても氣がつかないふりしてすませるくせと、自分の云ふことが相手に通じないでもそのまゝすませるくせは子供の時からもつてゐる。之は一生、彼についてゐる運命だらう。

御別宅の伯母は、

「篤ちやんは何にも氣がつかないやうな顔をして何んでも氣がつく方だ」と云つた。

之はだから油斷が出來ないと云ふ意味だが、彼はその批評はあたつてゐると思つた。

しかし彼の頭にも限りはある、一事を考へてゐる時、他事は忘れる、その次ぎの瞬間にすぐ他事を考へることは出來るが、だから時々随分まぬけな時のあることは事實なのだ。

或時、それはもつとずつとあとの話だが、柏木の木下の處へ行つて歸る時、彼は柏木の電車にのる時、歸りの切符を出して入らうとしたら、切符切りは之は何とかですから駄目ですと云つた。彼はそんなはづはないと思つて、不思議に

思ひながら、二こと三こと反對した。しかし切符切りは承知しなかつた。ふと氣がつくと。彼の出してゐる切符は市街電車の復の切符だつた。彼はあはてゝ蟇口から本當の切符を出した。切符切りは笑つて彼を通した。

ものを置き忘れしたり、切符をおとしたり、辨當箱を忘れたりするのは彼のくせだつた。

「一度學校で。獨逸語の時。三年か四年の時だつたらう。彼はいよ〳〵と云ふ時に本がないのに氣がついた。「誰かがかくしたのだらう」と彼は思つた。誰に聞いても知らないと云ふので、彼は怒り出した時に先生が來た。

彼は「皆が本をかくしたので本がありません」と云つた。先生は皆に、本を出したらいゝだらうと云つたが、「かくした人はないのです」と云つた。

「かくしたにちがいない」

「誰もかくしはしない、君はきつと思ひちがいしてゐるのだよ」

「いやたしかに持つて來た」

「誰もかくさないのだから」

「僕のを見たらいゝだらう」

彼は怒つたやうな顔して、その本を見た。そして家に歸つたら、ちやんと自分の机の上にあつた。翌日學校へ行つて、

「あつたよ」と云つたら。「それ見玉へ」と皆笑つた。

彼は思ひちがいして强情はることはよくあるので、誰もおどろかない。

彼は又無類の悪筆であつた。

「同級で一番字が下手だと謙遜する人間はかう云つた。」

「武者については僕が一番下手だ」

六十七

しかし彼のことを一番ほめて歩いたのは三浦のお祖母さんだつた。その祖母さんに云はすと、彼程の親切な者はなく。彼程利口なものはないのである。「篤ちやんは總理大臣になる資格がある」と皆に吹聽して歩いてゐる。そして從妹達に彼を尊敬さした。

彼は自分の何處を三浦の祖母さんが感心してゐるかわからなかつた。しかしさう云はれゝば悪い氣はしなかつた。三浦の叔父さんも彼をほめる方ではまけなかつた。從兄弟全部よつてうつした寫眞見て矢張り篤ちやんは一人ちがうといつた。

彼は自分の價値は他人には氣がつくはづはないと思つてゐた。しかし彼はつきあふ友からはどうしてか一目おかれてゐた。

彼は善を愛しなかつたら、彼は悪辣な人間になれるだけの才のあることを自分で感じてゐた。しかし彼は一方、慘酷性がなく、内に狹しい時は臆病この上なかつた。彼は善事らしい善事はしなかつた。坂を上るのにくるしんでゐる車を見ると、そして其處に誰も見てゐるものがないと、彼はあと押しをよくしたが、それは善事と云ふにはあまりに小さいことで。禮を云はれるのが、きまりがわるいので彼はすぐ逃げた。しかしその時、彼の心はよろこびに滿ちた。禮を云ふなら自分の方がいひたい位いだと思つた。

しかし彼は善を愛した。

彼は中學の五年から六年になる頃から、筆の力を知りだした。そして日課にして、毎日何かかくことにきめた。そし

て彼の好きな文案があると、彼はぬき書きした。萬朝をとつてゐたので、内村さんと、秋水と枯川のものがぬきがきされてゐたのを彼は二三年前に偶然見つけたことがあつた。

水泳にいつて彼は下の級の亂暴者に愛想をつかした。それが段々高じていつた。行軍で彼はまた露骨な事實を見聞した。その怒りは段々に彼の内にからじた。

行軍で思ひ出すことを一つかいておかう。

學習院の行軍は何處までも軍隊式であつた。一々報告をする時も氣附けして軍隊の言葉をつけなければならなかつた。しかしそんな馬鹿な文句を彼がどうして知つた人間の前で云ふことが出來やう。

彼は斥候に行つて歸つて來た。すると中隊長が眞面目に様子を聞いた。それは兄の級の人だつた。彼は歩きながら云つた。

「ゐないよ」

彼はこのことを忘れてゐたが、同級生があつまつて昔話をした時、その話をして笑つた人があるので彼は思ひ出した。それは何處かの川の岸だつた。

彼は化石したやうな言葉は嫌ひである。意味ありげな、勿體ぶつた言葉は嫌ひである。新らしき村には委員なぞと云ふ言葉はつかいたくないと思つてゐる。「何とかがゝり」と云ふ方がはるかにいゝ。評議委員なぞと云ふ言葉は聞いても胸がわるくなる。

六十八

彼は或日兄と散歩をした時、兄から文科へ行かうか、法科に行かうかと迷つてゐる。どつちがいゝだらうと相談され

たことがあつた。彼は自分の尊敬してゐる三つ上の兄から、一身上の相談、それは氣輕に兄は話したのかも知れないが相談をされたのを名譽に思つた。しかし同時に不思議に思つた。

「文科なんかにゆく奴があるものか、自分なら迷ひはしない、」

兄が文科へゆかうかとかりにも思つてゐることが彼には不思議だつた。彼はその時分は政治家になるつもりでゐたから、彼はその時何と答へたかわすれた。その後兄が外交官になる時も、彼は一寸相談された。その時彼は贊成した。しかしその時は文科にゆくことにきめてゐた。彼は自分の仕事については一切人と相談することを嫌つた。兄が農科にゆくことをすゝめた時に、彼は非常に怒つた。その時分日記をつけてゐたが、その日の處だけ赤インキでその兄のすゝめを耐えられない侮辱ととつた。今となつて見ると農科に行つてゐたらよかつたと云ふ氣も何處かにする。

文學は專門の勉強しないだつて出來るものだから。

有島生馬は彼の四年の時、彼の級までおちて來たが、元來二級上だつた。彼はたのしみにしてゐたら、學習院をやめた。志賀は中學六年の時に、矢張り二年上だつたが、彼の級におちて來た。組がちがつたので滅多に逢はなかつたが、內村さんに行つてゐると云ふ風評なぞがつたはつて彼は厚意をもつて來た。その時分志賀は以前とはかはつて來た。彼の家に來たのは彼の五年の時で、まだ志賀が彼の級にならない前だつたらしい。彼は時の記憶が時々前後する。總平均がよくつて落第した點で志賀はレコード破りだつた。

二三年のちに、志賀は彼の級まで落第してよかつたと云つた。彼もよかつたと思つた。

六十九

中學の六年の春から、高等科の一年の春にかけて彼には二つのことが平行して進んだ。

一つは彼女のことである。他は彼がくわだてた下の級の亂暴者との爭そひである。

彼は前者は「第二の母」と云ふ短篇にかき、後者は「小さき世界」と題した短篇にかいた。二つのことは同時に起つてゐたが、其處には内面的のむすびつきがなかつた。

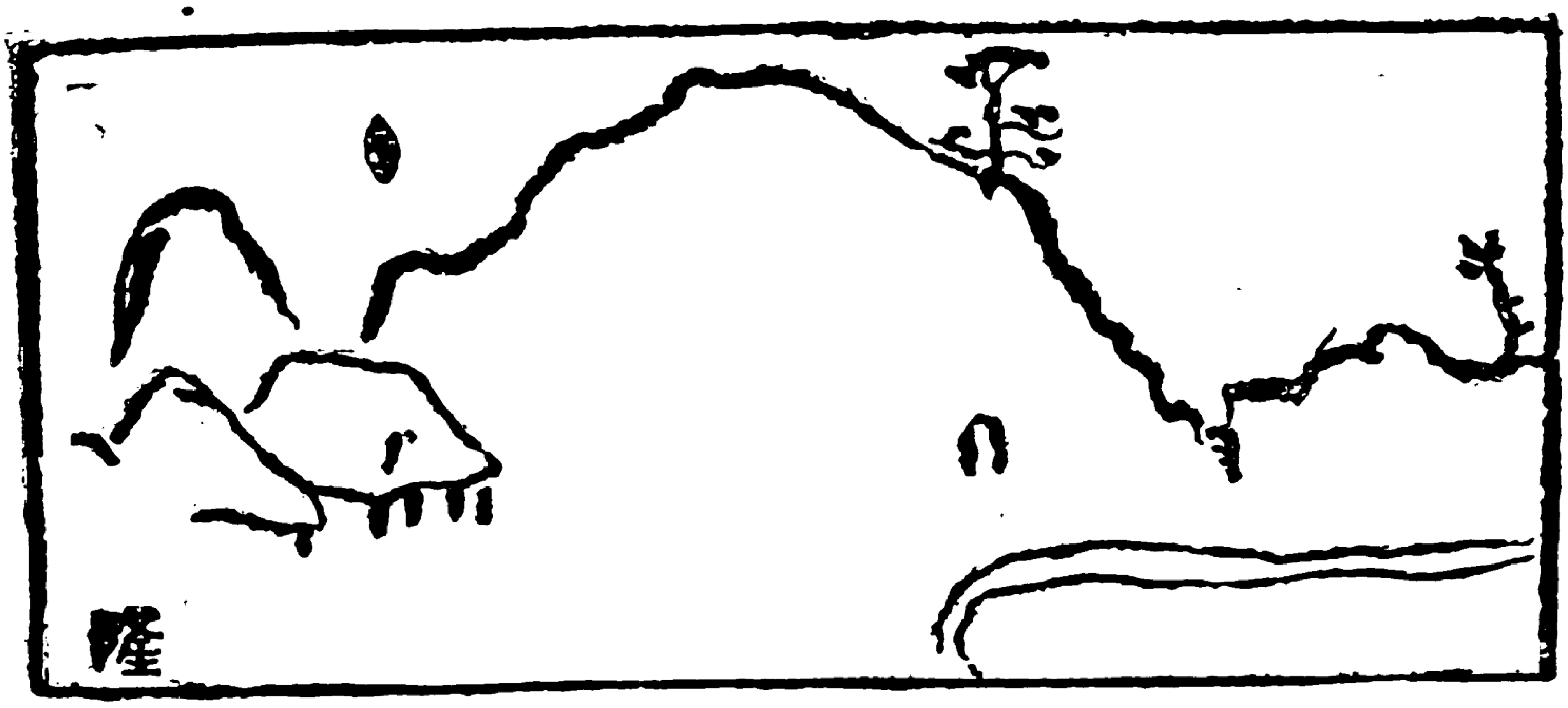
もしあるとすれば、それは彼が自分を彼女の夫になれる資格のあるものに築き上げたいと勇氣を起したことが、彼に何か仕事をさせたく思はしたととればとれる點だが、それもあてにはならない。それはむしろ十八九の成長慾と、女性を求める慾望との兩面のあらはれと見る方が本當であらう。

彼が聖書やトルストイを知つたのもその頃である。

だが自分は彼のことをまるで知らない人が多いと思ふので、話を順序にすゝめてゆきたく思ふ。

しかし時がないし、紙數に限りがあるからそれは次回にゆづることにしやう。

（つゞく）



章美雪女士之墓

佐藤春夫

鄭君が中國交渉署へ用事があるから一緒に行かうと言ふ。鄭君の用事といふのは彼が僕と一緒に僕の案内者として臺灣の打狗から彼の故郷であるこの廈門の鼓浪嶼へ歸つて來たが、僕が再び臺灣へ歸る時に鄭君も一緒に臺灣へ行くには、中國交渉署か日本の領事館かどちらかで再び改めて渡航の許可を得なければならないさうだ。しかも日本の領事館だと早くとも二週間遲ければ一月以上もかかる。中國交渉署だと手數料を三圓とられる代りには二三日で用が足りる。だから中國交渉署へその渡航許可證を請求に行くのだ。——さう言つて、彼は小さな一時間寫眞のやうな寫眞を持つて居る。昨日寫して來たのださうである。

朝十時ごろだからそんなに暑くはない。

鼓浪嶼へ來てからもう一週間になるし、毎日そこらを散歩してゐるのだが、僕にはここの道はどうしてもわからない。何故かといふのに、ここの道は一筋として眞直なのは無いので、東へ行つてゐるつもりでゐると何時の間にかまがりくねつて西の方へ歩いてゐたり、つひ目の前に見えてゐる家へ行かうと思つて歩いて行くうち

に道が妙にまがつてだんだんその家が遠ざかつて行つたりする。迷宮のやうな道である。だから中國交渉署へもどういふ風にどこを歩いて行つたか少しも覺えてはゐない。

鐵の手すりのある石段を二十級ほど登つたら、そこに玄關があつて、そこが中國交渉署だつた。その玄關わきに小さな空地があつて、そこに白鷺が一羽金網のなかに養はれて、二三寸しかない淺い見るから生温かさうな方四尺ぐらゐのセメントの池のなかにしよんぼり立つてゐた。――厦門や鼓浪嶼のあるこの入江は昔から鷺江と言はれてゐるところなのだが、今はそれほど澤山は見かけない。却つて臺灣の方には群をなして飛んでゐるのを見かける。――その鷺を見て居るうちに鄭君の用が直ぐ足りたと見えて、鄭君は受附の方から出て來た。さうして又、二十級ほどの石段を下りる時に、鄭君は、

「序にそこらを散歩しやう。」

と、言つた。

散歩などと言ふ氣候でもなければ、そんな時間でもない――もうそろそろ日盛りになつて來るのに、この男は南國で育つただけに暑いのは平氣らしい。

「涼しいところなら歩かう。」

僕はさう答へた。さうしたら、鄭君は默つて――一たい他國人が默つてゐる時の表情は氣心が知れない心持のするものだが――歩きつづけた。例のやうなわかりにくい道を少し廻つてゐると、いつの間にか道は直ぐ海の上の切崖の上に沿うて樹木の澤山ある、いかにも涼しい坂道に來た。「厦門は地獄、鼓浪嶼は天國」と外國人がよく言ふさうだが、又、支那の沿岸では鼓浪嶼の景色が一番いいと人がよく言ふさうだが、この木蔭の道などは正しくこの評判にそむかないも

のである。木の間がくれに水の向ふに浮んでゐる厦門の市街が烈しい日に照されて、この赤煉瓦造りの多い市街が青い水と對照をして居る。その水の上を小さな舢舨が澤山ゆつたりと浮んで、厦門と鼓浪嶼とこの二つの島の間を行き來してゐる。涼しい風が吹いて來る。この道はあまり用のない道と見えて誰も通る人はない。私達は上衣を脱いで歩いたり佇んで見たりした。前に行く鄭君が上衣を着た。そこで私も上衣を着た。もうこれからさきは木かげの道ではなく日光の直射する道に相違ない。日光の直射するところでは上衣がないと却つて暑いからだ。上衣を着ながら鄭君が言ふ、

「この少しさきに支那人のクリスチヤンの墓地がある。行つて見やうか。」

「行かう。」

その木かげの坂道を一つ大きく曲ると、もう樹はなくなつて丸山の頂であつた。さうして目の前に何百基かの石塔がまばらに立つてゐた。

石の豐富な地方だから、皆、立派な花崗岩であつた。「基督女徒蔡門車氏媬室」と書いたのがある。どんな人かと思つて墓の表を讀んで見ると「壽七旬」といふお婆さんのお墓で、その孫が石を立てたものであつた。「持主復臨」といふやうな文句を刻んだのもある。さうして墓石の上の方には皆金で彩つた十字が刻んである。鄭君は、そんな墓石のなかを、例の氣心の知れない表情を帶びた沈默で見まわして歩いてゐたが、つと、立ちとまつて、道の傍にあつた一基の墓標を指した。

「これはミスタア・ホワンの婚約してゐた娘の墓だ。」

「ミスタア・ホワン？　誰だつたらうな、ミスタア・ホワンと言ふのは？」

「ミスタア・ホワンだ。僕の友達だ。君も知つてゐるではないか。」

鄭君がさう言う。そこで私はポケットから懐中記事冊と萬年筆とを出して鄭君に渡した。ホワンといふのはきつと支那人の姓であらうから、音ではわからないが文字を書いて貰へば解ると思つたからだ。鄭君は僕の懐中記事冊の一頁へ「黄」と書いて見せた。それから「碩良」とすぐその「黄」の下へ書き加へた。

「ああ、わかつた。あの牧師の息子か。――この間一緒に散歩をした……」

「然うだ。あの黄だ。この娘は大へん美しい娘だつた。この邊では少し上流の人たちは皆クリスチャンだが、そのクリスチャン仲間で第一の美しい娘だつた。船遊びをしてゐて水に落ちて死んだのだ。さう、もう四五年前。」

「その娘は年は幾つだつた？」

さう言ひながら私は丁寧に磨き込んで輝いてゐるその墓の表を見た。鄭君も同じやうに墓の表を見ながら、

「たしか十四か五だつたらう。」

「さうして、その時、ミスタア黄はいくつだつた？」

「彼は今年二十二だから、その時は十七か八だつたらう。――彼は大へん悲しんだ。」

私と鄭君とは炎天の下でこの墓を前にして、二人ともあまり上手ではない英語でこんな會話をした。私はたつた一度じか合つた事はないが、優しい美少年であまり口數を利かない黄碩良を思ひ浮べて、彼の甘い平靜に見へる沈黙は、四五年前のこの時の名殘りではなかつたかとそんな風に考へた。さうして十七八の少年が十四になる許嫁を不意に失つて大へん悲しんだ――この鄭君の言つた「彼は大へん悲しんだ」といふ短い言葉が、私には雄辯であつたが――といふ事實が、私に或るお伽噺のやうなあはれを感じさせた。それで私は、今のさつき鄭君から受け取つた私の懐中記事冊の新らしい頁を開けて、墓標の文字と形とを寫した。この墓の上には例に依つて型のとほり金で彩つた十字が刻まれてあつ

たが、その十字架のぐるりには細く組紐を曲げてつくり出したやうなシンメトリカルな線が飾られて、その外がわの上の方には金の星が五つやはりシンメトリカルに嵌められてあつた。その下には大きく、章美雪女士之墓と金を彩つて刻んである。文字で金を彩つたのはこれだけである。その右の肩には「生」と書いて一九〇二年（どうしたのか私の手帳には年だけはあるが月日が書き洩してある。）その左の肩には「生」に對して「卒」と書いてその下に一九一六年七月三日とある。――ちやうど五年前の、今ごろだつたのだ、私は私の手帳に書きながらさう思つた。さうして生年月日の下に、それよりはやや外側にやや大きな字をもつて「女非死乃寢耳」と刻んである。それと對照する場所にはこの死んだのではなくして寢てゐるところの美しい少女の父の名が、この墓標を立てた人として記入されてあつた。

私は右のやうな文字をそれがある通りの位置に寫し終つて、ふとその墓石の根の方を見ると、何もない赤ちやけた土の上に、徑二寸もある大きな眞白な野茨の花が一つ、ぽつかりと咲いてゐるのを見出した。樹立ちはもとより雜草もあまりないこの墓地に、偶々この墓に近くこのやうな野花を見ることが私の詩情を助けた。さうして私は私の空想の世界のなかで章美雪女士が本當に可憐な娘であつたことを認識した。

「この花は、支那では何といふ花だ？」

「さあ？日本には無いか？」

と、鄭君が反問する。

「いや、澤山ある。だがこんな大きなのはない。」

「何といふ花だか知らない。しかしその實はたしか野柿と言つて秋になると食べられる。」鄭君はそんな事を答へた。

私たちはその墓地から立ち去つて、あの木かげの道をたどつてから、再び見覺えのない道を私は鄭君に從いて歩い

た。この道も涼しい樹の多い道で、その兩側には、充分に庭園をとつた別莊のやうな屋敷が幾つか疎らに並んでゐた。さうしてやはりまがりくねつた少し上りになつた坂道であつた。その道の或る部分に突如として巨巖がそびえてゐた——この嶋、鼓浪嶼にはこんな風に立つてゐる巨巖が澤山ある。さうしてそれぞれに皆名があるのだが——その巨巖の麓にそれほど大きくはないが支那の樣式と西歐の樣式とを半々に巧にとり入れた一つのチヤアミングな家屋があつた。

私は立ちとまつてその家を眺めた。瞰青別墅といふ家である——家の前にさういふ額が掲げてあつた。さうして石の門にはその一本一本の柱に次のやうな對句が一句づつ深く刻まれてあつた——

此地有人長寄傲

問天假我幾何年

それは巧な句かどうであるかを私は知らない。ただ、あの章美雪女士之墓からここへ來るまでの間もの思ひをしてゐた私は、その對句をも私の懷中記事冊のなかに書きつけた。

顔

ワルト・ホイットマン
有島武郎譯

一

舗道の上を彷ふ時、或は田舎の小道を馬で乘りまはす時――見よ！　さま〴〵な顔又顔！
友誼的な顔、規帳面な、用心深い、慇懃な、理想家的な顔、
靈的な豫覺的な顔、――いつ見ても好ましい普通な情け深い顔、
歌はれたる音樂の顔、――法律家、司法官に生れついたやうな物々しい顔、後頭部の頂きが廣い、
額のふくれた、獵人や漁人の顔、――生粹（きつすい）の市民らしい無髯で色白の顔、
純潔で、大袈裟で、憧憬的で、眼探（まさぐ）るやうな藝術家の顔、
うるはしい魂を宿した醜い顔、卑められ、憎まれたる美しい顔、

小兒の神聖な顔、多くの子の母の輝かしい顔、戀の顔、渇仰の顔、
夢見る如き顔、動かぬ骸の如き顔、
善惡共に色にあらはれぬ顔、——去勢された顔、刈込み手に共髪を刈込まれた野性の廏、去勢者の革紐と鋏とに遂に打まかされた牡馬。

かく、舗道の上を彷ふ時、或はやむ時なく出入りのある渡船で川を越す時、顔、而して顔、而して又顔、

私はそれらを見る、而してつぶやくことをせず、凡ての顔に滿足してゐる。

二

それらの顔がその終局の姿だと思つたとしたら、私がそれに滿足出來るとあなたは思ふか？
この今の顔は、一人の人間の顔としては餘りに情けない、
或る下劣な寄生虫が「御免」といひながら——かぢりついてゐる、
或る鼻腐れの蛆虫が、その孔にもぐりこむのを拒げられないのをいゝことにして、かぢりついてゐる。

この顔は塵芥を嗅ぎまはる犬の鼻さきだ。
蛇蝎がその口には巣喰つてゐる——私は歯の間から出す激しい呼氣のやうな豺喝を聞く。

その顔は海洋のそれよりもなほぞく／＼と人を寒くする靄だ、
その眠げな所定めぬ氷山は流れ行くまゝに噛み合つて鳴る。

これは苦い草本の顔である——これは催吐劑である——それは名札を附する必要はない、
而して人間の顔といふよりは、藥劑棚、阿片丁幾、ゴム、或は豚脂を思はせる顔である。

この顔は癲癇だ、その言語なき舌はこの世のものとは思はれぬ叫びを發する。
その血管は頸根まで怒脹し、その眼は廻り動いた上句に白眼だけになる。
その歯は噛み合ひ、手の平は内側に曲つた指の爪で刺し通される、
その人は十分の意識を持ちながら泡を吐き身悶えして地面の上に打倒れる。

この顔は害鳥や害虫の爲めに食はれてゐる、

而してこの顔は半ば鞘を拂つた殺人者の匕首(あいくち)だ。

この顔は寺守りに盗つた恐るべき内密の金で存在を續けてゐる。

小休(をやみ)なき埋葬の鐘がそこには鳴つてゐる。

三

かくてこれらが人間の實際だ――大きな圓るい地球の上にゐる統領と凡人とだ！

私と同じ人間達の顔容(かほかたち)よ、お前はお前の皺だらけな死色を呈した多數の行進を以て私を欺かうとするのか、

さあ、お前は欺き遂ふすことが出來ないよ。

私はお前の決して失はれない完全な豐かさを見るから。

私はお前の憔れた卑しげな假裝の一皮下を見るから。

思(1)ふがまゝに顔をかしげたり曲りくねらせろ――魚類や鼠類の前肢を動かし廻はすやうにして嘲

けるなら嚙つて見ろ、
私はお前の口網を取り去るから、屹度取去つて見せるから。

私は白痴院にゐるものゝ中で最も汚らしい涎くりの白痴の顔を見た。
而して私は人々が知らないやうな慰藉をそれに對しても持つことが出來た。
私の同胞を虚ろにし傷けた力について私は知つてゐる。
その同じ力が壞れた住家から塵芥を一掃するために待ち構へてゐるのだ。
而して私は二十かその倍程の時代の先きを見守るだらう、
而してそこに私は、私自身と優劣のない、完全にして損はれない眞の地主とめぐり逢ふだらう。

四

司配者は進出する、而して更らに進出する、
常に暗影を先驅とし——常に行きとゞいた手が後れ勝ちなものを驅り立てつゝ。
司配者のこの顔からは旌旗と軍馬とが現はれ出る——おゝ素晴らしさ！ 何が起るかを私は知る、

私は先驅者の高い帽子を見る——私は疾走者の隊が露拂ひをするのを見る、
私は勝利の鼓聲を聞く。

この顔は救助船である、
この顔は威嚴を持つた有將の顔で、他の人々の些事を心にかけない、
この顔はいつでも食ふによい香ひある果物だ、
健康で眞面目な青年の顔は凡ての善の約束だ。

これらの顔は、眠つてゐても覺めてゐても、私の言葉を立證する、
彼等は神そのものゝ子孫であるのを示してゐる。

私の言葉に私は責任を持つ、私は除外例を作らない——赤人種でも、白人種でも、黒人種でも凡
て神らしいのだ。
各の家には子宮がある——それは數千年の後に現はれ出る。

窓の汚染(しみ)や罅裂(ひわれ)は私を亂しはしない、

丈け高く完全なものがその後ろに立つて私に手言葉を與へる、
私はそれに約束を讀む、而して忍耐して待つ。

これは盛り咲きの百合の花の顔だ。
彼女は花園の垣根に倚るしなやかな腰つきの男に話しかける。
「おいで」彼女は顔赤らめながら呼びおこす「近くにおいで、しなやかな腰つきの男よ、
私が出來るだけ丈を高くしてあなたに倚りかゝるから側に立つて、
私を白色の蜜で滿たしておくれ、私の方に折れかゞんでおくれ、
あなたの硬い髯で私をこすつておくれ、それを私の胸や肩にこすりつけておくれ」と。

五

數多の子供を持つ老いた母の顔！
しつ、靜かに！ 私は存分に滿足する！
日曜日の朝、朝靄は靜かに晩くまで、

それは木柵のへりの並木の上に低くかゝり、
並木の下のササフラスや、野櫻や、猫(2)いばらの上にもかゝる。

私は富んだ貴夫婦が盛裝して音樂夜會に臨むのを見た。
私は唱歌者達が長々と歌ふのを聞いた、
誰れが花のやうな若々しさで白き水泡、紺青の水から跳り出たかを聞いた。

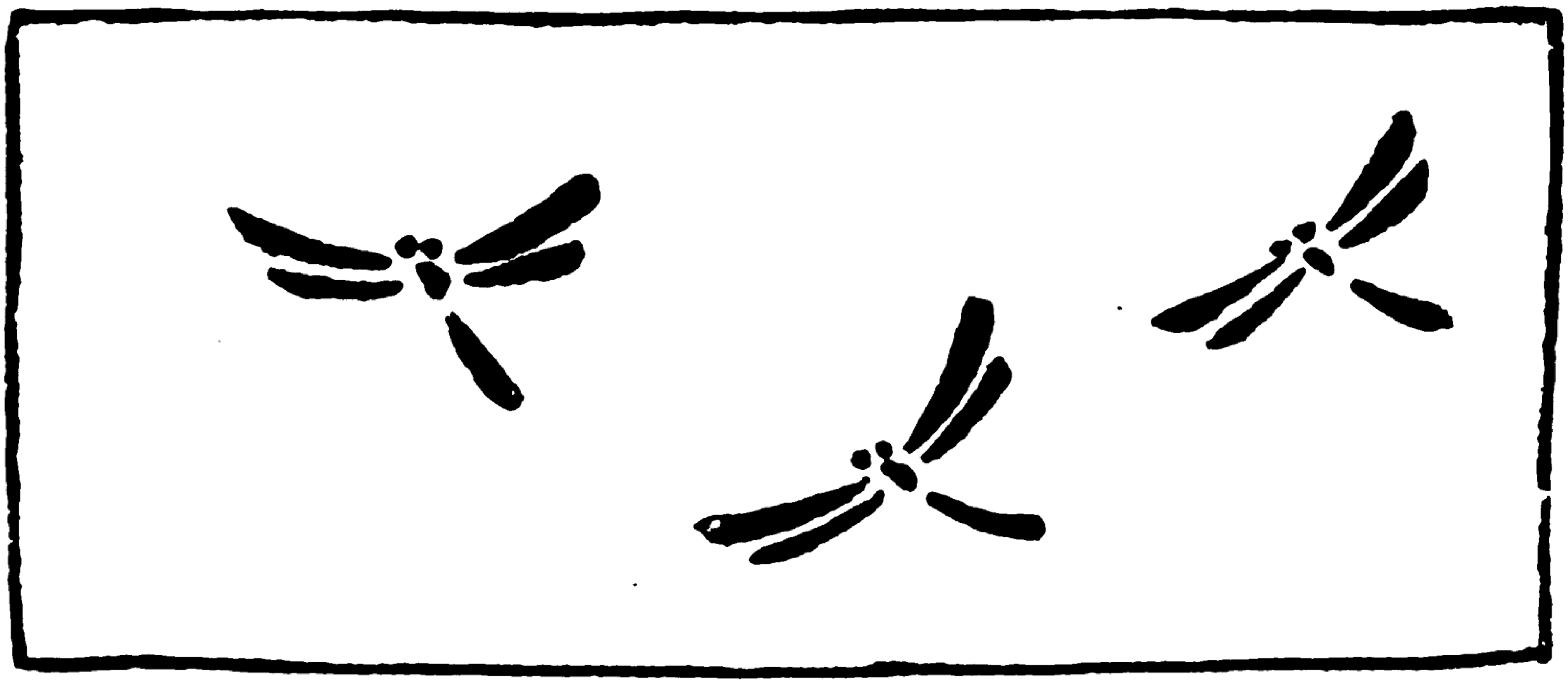
見よ、女を！
彼女はフレンド宗徒風の帽子から顏をのぞかせて——その顏は大空よりも更らに朗かに美しい。
百性家の日蔭になつた廣緣に、彼女は肱かけ椅子に倚る
太陽は丁度年老いたその白髮の上に照る。
彼女のゆたかな上衣はクリーム色のリンネルだ、
その孫息子達は亞麻を作り、その孫娘達はそれを紡絲車にかけて紡む。

歌のやうな大地のとゝのひ、
その完成さは哲學の達し得るところではなく、又達しようとの望みすらない。
中分のない人類の母。

(1)——この譯文について識者の教を持つ。

(2)——未定譯

一九二二、八月十日



朱き机に凭りて

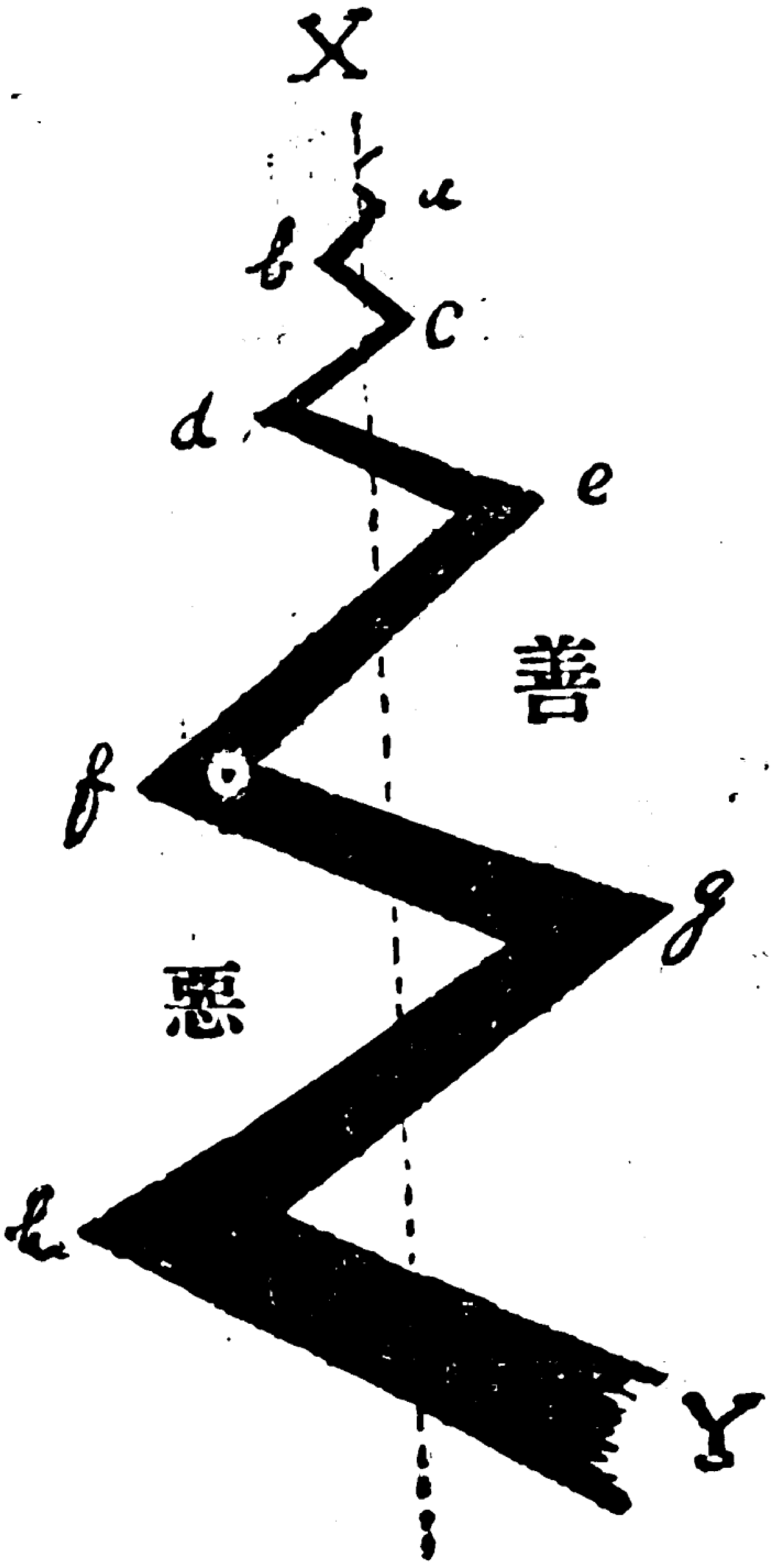
里見弴

◎今の世の人心(ひとごゝろ)はおよそ二元的である。靈肉と云ひ、善惡と呼び、われら藝にたづさはるものゝ、謂ふ所の内容技巧も、すべて絶對の創造たる各箇の靈(たましひ)と世の有りとあらゆる傳統、約束との間を左右する心相の、その兩端に與へられたる名稱である。

◎二元的見地から云へば、人生の行路は、常に必ず電光形(Zigzag)を描く、總ての進歩は直線的ではなくして、右し左しつゝ、次第に前方に、次第に太(ふと)くなつて行く、と云ふことが出來る。人は精進しなければならない、――この實感の強いものならば必ずその左右することとの不決定に煩はされてばかりはゐなくなるだらう。例へば、左圖XYの如き人格的發達を假定して、彼はbdfhと「惡」に足を踏み入れるがbの惡はaの善よりも、dの惡はcの善よりも、進んでゐると云ふ意味だけても、客觀的に云つていゝのである。aの善とhの惡と比べるならば、その生活が嘘でない限り、强固さに於て、逞しさに於て、遙かに立ち優つてゐると云はなければならない。

この図解を真正面から釋つて時間的に、a c e g の善行の時代が、b d f h の悪行の時代と交互に来るものと解するには及ばない。要は、ひよろ／＼したか弱い生活では、善だつて悪だつて、語るに足らないが、善も悪も幅に於て力に於ては強く逞しく、X Y の線から云へば少しでも前方へ突き進んだ生活を意欲しなければ嘘だ、と云ひたいのである。g の善をするためには、必ず f の悪を體驗しなければならないと云ふやうな意味にはならない。と同時に、よしそこにはひつたとしても、どうして俺はかう幾度も同じ罠に陥るのだらう、と氣を腐らせるには及ばない。それよりも、その太さ逞しさを吟味して、生活としての進みを辿り、更に精進一歩の足だまりとした方がましだ、と云ふのである。

これが二元的求道の、早解な心得だと私は信じる。



◎けれども、求道の念益々切なれば人は遂に二元的思想のなまぬるさに、――二元的生活の齷齪さに飽足らなくなる。唯一無二の世界を望む。心理的に云ふならば「理解」では及ばぬ世界へはひらうとする。即ち「信念」の世界である。舊來の宗教に身を投じ、或は自分一箇の、一流の何か信仰をもつ。人の世ではそれよりほか一元の世界にははひり得ないのである。

信仰には理屈がない。だから進んだ「理解」が、そこに明るい光を投げかければ、可なり愚しく眺められることが

ある。然しいかに戀しくとも、いかに「理解」の指先が鋭からうとも、遂にその掌中の樓閣に微動すら與へ得ないのである。と云ふよりも、寧ろ、愚かしければ、愚かしいほど、信仰は力强いのだ。

何故なら信じたり、理解しようとしたり、そんな二股膏藥では、もと〳〵二元的なわけで、眞の「信」ではあり得ない。たゞ佛（ほとけ）の御衣（みころも）の袖におすがり申す、と云つた心持の方が、慥なことは必ず慥かである。佛教哲學のむづかしいことはこねくり返しても、「信」の一點に至つては、お有難屋の爺さん婆さんに遠く及ばない、名僧知識が無いとは云へない。そして、今の世の人心は、どんな意味にも、愚かしいと云ふことを堪え忍ぶことは出來ない。だから、一元的傾向が次第に地球から掃き出されようとしてゐるのだ。

◎そこで、藝の極致が、「理解」であるか「信念」であるか、――これに對して、私は何んの問題もなく、後者だと答へるものである。

だから私は、二元的、理智的な生活を營み、さようの思想をもち、從つてさようの作を發表してゐる作家を、最高の標準の列に加へることはどうしても出來ないのである。まして、内容と技巧の二元にいつまでもひつかかつてゐるやうでは、てんで話にならないと云ふやうな意味を、つい先々月の雜誌「人間」に述べたのであるが、然しその後更に思ひを潜めるに、人が信念の生活にはひり切ると云ふやうなことは、なみひととほりの仕事ではない。みづから省みて、私は恥しく感じるのである。が、兎に角私は、常に二元を說いて一元に進まうと云ふ求道の念だけはもつてゐる。さうしてひとの書いたものを讀む場合でも、內容はいゝが技巧が未しとか、達者に書けてゐるが內容が空虛だとか、そんな尤らしくばかりあつて、藝の眞諦を知らない者だけは浮ばなくなつて來た。一元的に、理屈なしに、まるごとに味ふやうに

なつて來た。然し私自身の作はどうか、——昔の人が、竹を描き菊を寫す時のやうに、内容のナの字も思はず、技巧のギの字にもこだはらずに筆をやつてゐるが、——私はたゞ〳〵恥じ入るのである。

◎私はふと人體の構造を思ふ。殆ど總てのものが左右對稱的（シンメトリカル）である、二元的である。そのなかに、心臓が獨り左の胸にかたよつて、命の泉となつてゐる。——殆ど悉くのものが、二元的であつて、心臓が一元的である。なんとなく、暗示されるところがあるのである。



初秋雑筆

室生犀星

裸の手

露き出しにされたすべすべした指輪の篏められてない裸の手が、行儀よく、きちんと重ねられてゐる。指と指とのおたがひの圓味が辷りこんで糸でくくつたやうになつてゐる。うすい紫の陰とも線ともいへない纖い色が、ゆびの股にしきられてゐる。さきの方へゆくほど、ぎんなんのやうになつて、そのさきに櫻貝が一枚はまはつてゐる。下じきの手は、指さきだけを右の小指の腹の方から出してゐる。

決して生じろい感じではない。うつすりとあかみがあり、お粥の上乾きしたときのやうな白い光をもつて居り、派手にひからない。にぶい色合である。ところが之らの指の股と股とが凝乎としてゐるにかゝはらず、すこしづ

つ動いてゐるやうに見えるのである。あるひは脈を打つてゐるせいかとも思ふが、さうではない。何かしら微塵にうごいてゐて、すうすうと呼吸をしあつてゐるのである。節々に皺みがあり、二すぢか三すぢくらゐの波紋はあるが、目立つほどではない。たゞ、その指が何かの用事のために動かすやうなことがあれば、肉が一杯につまつてゐるため、窮屈になつてあからむくらゐの程度であるから目に立たないのである。それゆえ、指と指とが呼吸を交はし合つてゐても、この波紋に何の影響もない。ちようど死人のからだを白布の上から覗くときに起りやすい動きが、この手の全體の上に、しかも謐然と置かれてゐるにかゝはらず起るのである。

この裸の手のしたに何があるか。それは紫茶色の銘仙地に、渦卷き模様を強い紫で染めあげた着衣が、しつとりと膝をつゝんで、うちがはの盛りやうをあらはしてゐるのである。ふしぎにこの紫茶いろのきものは、生白い年齢をほんのりと匂はせるには適當な色調である。春さきなどの黑土に、ひと鍬起すと夜明けがたなぞには、かういふ紫いろを感じるものである。

だが、その腰から上が見へない。膝から下もみえない。ただ裸の手と、手のしたの着衣とが四五寸くらゐに割られ、人と人との、ぶら下がつた袂と袂とが灰色になつて陰つたところから、うしろの窓からさす初秋のすこし白つぽい、妙に懐かしい光線に浮きあがつて見えるのである。世界のどこにもないやうな深彫りの美しい手である。もちろん、顔なぞわからう筈がない。……電車は、そと濠の青い靜かな波のちらちらするのに沿ふて、ゆつくり走つてゆくのである。

誰もその手には氣がつかない。本人も他の乘客さへも、そこにさういふものがあらうとは思つてゐない。光りが青ばんだ並木のかげを含むごとに、うすい、何ともいへない薄い、あをい影がちらちらと、その手の上をなでてゆくのである。そして又すぐ消えてしまふのだ。誰ひとり話してゐるものも居ない車内で、とくにその手だけが生きてゐるや

うに思はれてならない。

輕井澤印象

いつたいが觸り角のながい蟲がゐて、蚊がすくない。虻が痛い。鷹揚ですウとくるとひと廻りしてちツくり刺すのである。ひる寢の夢はよくこの虻でさされた。靜かで庭に冷氣をひそませてゐる高原の風が、さういふ晝寢からさめたときに皮膚のうへを辷り、それゆえ、薄荷のやうに涼しいのである。

私のゐた旅舍は離れで、ちよろちよろ川が深い雜草の間をながれ、崖の上に、西洋人の丹塗りの別莊が見へた。白い椅子の上に、いつも異人の話してゐるのが、妙に小鳥のやうにぴいぴい聽えた。そこに赤ン坊がゐると見え、よく赤ン坊が泣いた。うちにも赤ン坊がゐるゆえ、ちよいと思ひ出したが暑いので、すぐ忘れやうとした。

通りに避暑客をあてこんだ店の多いうちに、一軒の支那人の骨董店があつた。百唐子（ひやくからこ）の小さい壺を買はうとしたが財布を忘れたので誰にもうらずにをいて吳れと言つたら、支那人は、さういふ素見客にたびたび會つたとみえ、素氣なく小壺をしまつてしまつた。その翌日も散歩しに出かけたが、又金入を忘れて顏をそむけて通つた。三日目にやつと買つたが、やはりお世辭はいはなかつた。十二三の支那少年が床几に腰かけ、美しい雜種兒らしい目をしてゐた。うす青い、すこし日燒けのした手首が目にのこつた。

あめりか人が多いため、その汚ない深箱のやうな古い別莊が小徑から小徑を編みながら、ずつと軒並みに白く或ひは茶褐色につゞいてゐた。稚い林をとり圍ませたり、芝をしきこんだりしてゐる上には、午後三時ごろにはみな樹の下で何か談しながら食事をしてゐた。ケチだからまづいものを食べてゐるのだらうと思ふた。が、みな樂しさうで、白い服

をきて、異人らしい大股のスカアトをXに組んで、れいの笛のやうな聲でわらつてゐた。それが少し淺しいほど、樂しそうにみえた。

ところどころに、大きいタオルを干してあつた。さういふところには、古納屋のやうな浴場があり、日本の盥が一つをいてあつた。それも古びたもので、あめりか人はケチだと思ふた。

どこを向いても、そのあたりは日本人が通つてゐない。西洋人ばかりである。肩身がせまい。乳屋まで日本人を白眼視してゐる。ちよいと寂しい氣がした。いちどは山の綠で、いちどは銀座で會つたことのある或る夫婦の西洋人に、町で散歩しながら三度も會つた。向ふでも知つてゐるやうな氣がしたのか、ふりかへつては行つた。

毎朝、宿屋の前を驢馬に乘つて散歩してゆく日本の少女がゐた。白い服で、かつかつ、寂しいひづめの音を立てゝ行つた。それとすれちがひに赤い服をきた毛唐の婆さんが二人梅干色の皮膚をしながら歩いて行つた。そのシインが童話めいてゐて、ひとりで感心させられた。

宿屋からすこし上手に流れがあり、潺々たるあさ瀨が石を砥ぎながら、足でもひたしたら冷たからうと思へた。そこで踞んで、石を積んでしばらく水に手と足を濡らしてゐた。橋の上を毛唐が行つたり來たりして、山蟬がうしろの松籟をつき破つて啼いてゐた。石の裏になにか小さい魚のかげがしたやうだつたが、實際は砂のやうであり濡れたゴミのやうでもあつた。

マンペイホテルの建物の一部が活動寫眞館になつてゐた。ホテルは、殆ど樹木にとりかこまれ、入口は、すつかり西洋式に、たくさんの椅子が散らばつてゐるうち、眩ゆいばかりの燈影が點られてゐた。私はそこの活動を見にでかけたが、先づ切符賣が西洋人で、なかに見物人が三人しかゐなかつた。それにも拘はらず映寫されてゐたのに驚いた。淺草

で一度見たやうなもので、音樂はピアノだけで、說明はもちろんなかつた。最初まで私を加へて四五人しか居なかつた。入場料の高いのと週の終りであつたせいもあつたが、それでも悠々とし映畫されてゐる勇氣にはおどろいた。うすぐらいなかに西洋人の子供が二人、私の前の椅子にもたれて温和しく見物してゐた。

每朝のやうに駒鳥と閑古鳥とが、かはるがはる啼いて、目がさめると、耳がひとりでそれを愉しんでゐた。賴まれたものを三四枚書くと、まだ十時にならない。六時にあさ飯をたべるのである。そこで敷き放しの床で、おひるまで睡るのが常である。目がさめると、れいの崖の草の明るい色に日があたり、それが透き、顫えるのである。時計は、ちやうどさういふときはXIIを指してゐる。

さういふ眞夏すぎの日光を靜視してゐるほど、寂しいことはない。秋よりも、夏のひるまは、音がなく光が强すぎて、そのなかに何かしら澱りあがつた餘儀ない寂しさが、暑ければ暑いほど、迫つてくるやうな氣がするのである。氣のせいか光もせいせいして、白みがよけいにあり、かげは、青みが餘計にさしてゐるやうである。日のあたつた幹の半面の青さ寂しさを孰々かんじるのである。

秋になると思ひ出す町

そのお留守組町は、秋にさへなれば、ぼんやりと、白い屋根とゝもにわたしの目にうかんでくるのである。林檎やすもゝや杏などの葉がぼろぼろになり、そこから白い日がさし覗くと、道路が鮮のやうに乾いてぽかぽかして、わづかな微風にも埃ばんで、ひとしきり眩しいくらゐ光つて、さて寂んと音すら立てないのである。たゞ杉垣の間から、すくすく、寒竹の、秋萌えの葉が青うさやつくだけである。」

誰も通らない。屋根の上の石の間には、からからな落葉がたまり出してゐる。秋蟬が稀れにじいゝとないて、いばりをして、ついと立つてゆく――わたしは、さういふ町を、用なしで歩いたものである。うしろも前も、白々しい秋の光にたゝみ込まれ、射竦められ、あまり明るいためにますます寂しくなるのだ。

杉垣に赭い色の温かさうな馬が繋がれ、馬丁がひとり黒い服で、かんかんと蹄鐵を打つてゐた。格子さきには、片手をふところにして、すこし白い胸地をえりもとから覗かせ、陸軍騎兵大尉の奥さんが、うつとり疲れたやうな眼つきをして、片足あげた馬と從卒をながめてゐる。午食をしにきた大尉はひと睡りしてゐるのか、家のなかはしんとして、くらい土間の奥さんの顔だけが大きく匂ひ浮んでゐるだけである。

その他、犬のかげすらなかつた。

土倉のうちの女がお湯がへりらしく、石鹸とお白粉の匂ひを、あたりの空氣に泌みさせ、湯づかれでぐつたりかへつてくるのであつた。右の瞼の下に大きな黒子が一つ、それゆゑ美しかつた。丸こい踵をこちらにあらはしてゐる。

「あゝ土倉の女か。」

がらがらと午后の乳屋の車がゆく、土倉の女をちよいと眺めたかと思ふと、がらがら……がたんと、飛び出した小石に躓いて、ひと揺れして、瓶は、一どに囀りのやうに軋み鳴るのである。莫大小襯衣の毛ぶかい匂ひがひと薫り、大尉の奥さんにもあいさつをして行くのだつた。

溝のまはりには、數限りない雪降蟲がけむりのやうにうづまいてゐる。それは決つて二疋づゝ折重つて、杉垣を越えるほど、むれをしてゐる。私は何の用もないのに、さういふ町をうろうろと歩きまわつてゐたのである。うろつけばうろつくほど、わたしは小寂しくなるのである。」

或る洋館の下水

ふしぎなる或る話の一つ

横濱の海岸べりの、日沒に間もないことである。三階の建物の入口の階段に、一人の支那人の紳士が、葉卷を燻べながら立つてゐて誰かを待つてゐるらしい顔つきをしてゐる。どういふ繁華な街路でも、ふしぎに日沒にはちよいと人通りの途絶えることがあるものである。その日沒の刻限もちやうどそれで、點いたばかりの街燈がわかば時の水氣ぐれた空氣をぼかしてゐる。人影がちらほらするばかりである。

支那人の紳士は、やはり葉卷を吸つては濃い煙を吐いてゐる。が突然、その葉卷を階段の上から街路へ棄てた。葉卷は、もんどり打つて停ると、すうと一すぢの煙を立てた。

その時、おなじ海岸の方から亞米利加人らしい一人の若い婦人が、ちやうど階段に近い道路をあるいてゐた。が、ふしぎに、そのとき前の方から急いでやつて來た支那人が、いきなり若い外國婦人に衝き當つた。そして行き過ぎたときに、外國婦人のスカアトが、腹部から剪り取られて、ほとんど肢體が露はになるほど能く發育した肉體の色を日沒の空氣に剝き出された。

階段の上の紳士は、すぐ突き當つた支那人を逐ふたが分らなかつた。ともかくスカアトを縫ふために外國婦人を階段の上にさそふた。婦人は前屈みになつて、顔をあかく染めながら、紳士の室をしばらく借りることにした。

階段のとつゝきのドアからはいると、すぐ右と左とに二階へのくの字なりの階段の入口が見えた。紳士は左の方を案内した。その階段にはさまれた正面には、油臭い古機械やミシン臺のやうなのが一杯に積み重ねられ、奥は廣さうだつたが暗くて見えなかつた。唯そこに、一人のこれも支那人らしい勞働服を着た煤まみれな男が、鋏のやうなものを古い

鐵材に打ち込んでゐて、それが蝙蝠のやうに黝ずんで見えた。あとは、音一つない寂然とした建物であつた。

紳士は、婦人を廣い應接間のやうな室へとほした。窓にむかつて一個のテエブルと椅子だけで、あとには額一つかゝつてゐなかつた。

「まださう暗くはありませんから。」、

紳士は、針と糸とを、さう婦人にむかつて言ながら渡した。婦人は、この、しんかんとした建物それ自身から或る不吉な恐怖の豫感に、ぞつくりと怖毛立つてゐた。

「どうも恐れ入ります。ではちよいと縫はしていたゞきます。」

紳士は、日本風な屛風を搬ぶと、そこに廣げた。

「これをお預り下さい。」流暢な英語で、さういふと鍵を婦人に手渡して出て行つた。

そのとき婦人は、まだ、どことなく立迷ふ夕明りに針をはこびかゝつてゐた。

それきり婦人はもはや階段に姿をみせなかつた。たゞ不思議な桃色した水が、その洋館の下水口からちよろちよろ流れ歇んだころは、もう夜明けに近かつたのである。

赤倉溫泉

輕井澤で電報で呼んだ詩人萩原朔太郎とは、久濶りの旅行だつたので、赤倉溫泉へ行つてみることにした。萩原は、輕井澤で眞珠擬ひの首飾りを小さい妹のために買つたり、妻君へのみやげをしたゝめたりしたので、私は、頭からすつぽりかぶれる西洋女の白い寢衣の、襟もとに藍で草花をあしらつたのを眺めたりした。

田口驛から、妙高山麓の大傾斜をした高原を自働車で走る途中、運轉手は、三度ばかり草むらから湧く清水を、如露に汲んではタンクにおさめた。草むらの清水では、目高がすゐいと素早く走り泳いでゐた。

香嶽樓の入口に、うすべにの葵が咲き、自働車を下り立つた私たちの目を一番さきに刺戟した。

坐敷は十二疊の、高原一帶を見晴らせるところで、紅葉山人の「煙霞療養」にでてくる土地である。煙霞療養といふ題はなかなか新らしい。今だつてちよいと使へる。さういふ話をしてから一浴した。何より浴後冷たい水で洗面したので、さつぱりした。

「萩原、ちよいとベルを押せ。」

「おれはお前の家來ではない。お前押せ。」

ふたりは、こんなことで小競合すると、茶飲みのふたりは、二時間をきに、茶のことで又それが初まつた。

「お前上手だから茶をいれろ。」と萩原。

「そのかはりベルを押せ。」

私たちは、さういふあとで、花札を打ち出した。寢るときに、萩原はかう言ひ出した。

「君はこの座敷で一人寢る氣か。」

「そのかはり明日の晩はこゝで君がねるのだ。かはり番だ。」

「それならいゝ。君ばかりこの部屋で寢るといふことはない。」

二人は、同室でねむれないので、別れ別れに座敷でねた。今から六七年前、私や萩原が無名な時分、よく本郷の根津權現の境內の涼しい樹かげで、それこそ文字通り詩作したものである。窮迫してゐたころで、萩原がたいがい晩にのん

であるく酒のかねを拂つたものである。ふたりは旺んに詩作したものだつたが稿料なぞはかつて取つたことがなかつた。いまではさうではないが、そのころ詩に稿料などを拂つてくれるところなどなかつた。

「あのころと比べると君も變つたな。」

「うん、變化つた。」

ふたりは、ときどき感心したやうな顏付で、さういふ話のあとはきまつて顏をそむけた。與ずをもつて書かないけれど、かつて卅年ちかくも一日として安らかでなかつた私が、やつと人並みに息づけるやうになつたこと〻――さういふ話がでると、私は妙な氣がした。わけてもあたりの靜かな高原の濕つた光景が、つい絡みついて、默つて向ひ合ふことがあつた。

旅館から上手に、びしやもんのお堂が二つあつて、とつつつきの石段下に、大きな古い石苔の生えた手洗鉢があつた。冷たい水が一杯にしたしたと盛りこぼれてゐた。そこの木立のかげに蹈んで、その淸水の音をきいてゐると、心許おのづから涼を趁ふことができた。私は手をひたしたりした。

「石の好きな男だ、石さへ見れば感心してゐる。」

「石は飽かないから好きだ

白い夏帽が二つ、下手から見えてゐるだらうと二人はしやがんで、たばこを飮んだ。

「君が小說をかくから、か〻れないやうにしろと家內がいふた。」

「わるくか〻なければい〻だらう。」

「それならい〻。」

妙高山といふのは、すぐ頭の上にどつしりと梁ぐんで、六方石を三本ばかり、あたまをちよん切つたやうな山だつた。

「あれでもアルプスかな。」

「あれでもアルプスちや。」

萩原と話してゐるとつい國言葉がでる。氣がゆるせるからである。――そこから、共同湯のそばに、柴の瑳で垣をへり取つた内庭で、二人の素朴な娘があけびの莚の節をばちばち木鋏でハネてゐて、母親らしいのがしきりに籠を編んでゐた。娘らは、日焼けしたあどけない顔で二人を見送つてゐた。

共同浴場に、一本の瓦斯燈に、灰ばんだ柳がもつれかゝつて、ひるまは、しんと、寂しいほど明るい日がさしてゐた。

ぞくにいふ一本杉といふ棒立ちした高原の奥のそれが、夕方から下り出した霧で見るまにかくれてしまつた。だんだん、たばこの煙のやうに、それが近くまで迫つて、しまひには、すぐ椽下から四五間さきの、小さいけれど古い池の上に蔽ふてきたのである。晝間は暑い色の緋鯉が、今はうつすりと霧の間から、ちらついて、かすんで、瓶のなかの魚のやうになつて見え、肌がしつとりとしめりを帶びてきたのである。

浴場の玻璃窓にも、ちちいろの霧がながれ込んで、なかの湯氣ともつれ、おのづからな濕めりと溫かみとをべつべつにしてゐた。そのなかで、うしろ向きに白い體がほのかに浮いてみえた。

夜行の寢臺をとるために、十時ころ、こんどは車で高原をかへつた。村落では、夫婦づれの夜廻りが、亭主が拍子木を打ち、妻の方は金棒をひいてあるいてゐた。どの農家も、障子をはめ廂を下ろしてあつた。暗い寂しいあたりと宜く

調和してみえた。

いたるところの村落で、赤ン坊がゐると見え、それが泣いてゐた。

「赤ン坊つて何處にでも居るものだな。君のところは達者かい。」

「うん達者だ。」

二人とも、最う父親になり、その赤ン坊のこゑがちよいちよい氣になるやうだつた。私はうしろを振りかへるごとに、妙高山の眞暗な山姿を星空のなかに仰いだ。

私の車夫がみんなで一と休みしたとき、まだ充分汽車の時間があると言つて、きらりとした金時計の光をどんぶりのなかへおさめた。べつに厭な氣がしなかつた。あたり前のことのやうに思はれた。

「家へかへつても手紙はやはり出さないかな。」

一年に一本の葉書もよこさない荻原は、さう言つて腹立てるなといふ意味のことを言つた。

「いいとも、おれも出さないから。」

汽車に乘つてからも、睡れないので、兩方の青いカーテンから顏を出し合ふた。しまひに起きて出て、持つてきた酒を飲みはじめた。

「前橋で下りるとき起してくれるな。目がさめると睡れないから。」

「よしよし。」

ひと睡りしたあとで、ふいに時計をみると最う高崎に近かつた。給仕が荻原を起してゐる。荻原はあはてて出て行つた。

私は、約束どほり默つて出てゆく荻原の靴音を聞き、そつと寢がへりを打ち、心の美しい友だちとかういふ風に別れるのを却つて寂しく感じた。



病床

─原名 "Charlie In Hishe Sick Bed."─

久米正雄

例の世界風邪が、いよ／＼羅府まで侵入して來たと聞いた時、チヤーリー・チヤツプリンは少しも駭かなかつた。駭かないどころか、その西班牙生れだと云ふ風邪の神が何處の撮影所を見舞はうとも、此のエッサネイ會社の自分のスッデイオだけは、笑つて逃げて行くだらうとまで、冗談半分ながら自負を持つて、或る小さな活動寫眞雜誌記者の一人に話した程だつた。實際世界で第一人者である彼は、他の誰もが罹つても、自分だけは罹らないやうな氣がしてゐたのだつた。

何でもその風邪を導き入れたのは、東部へ連續物の實地撮影に出かけてゐたユニヴアーサル會社の、フランシス・フオードの一行が、紐育の波止場で使つた臨時雇(エキストラ)の群から、お土産に貰つて來たものだと云ふ話だつた。そして其第一の犠牲者として死んだ、或る下つ端の女優は、その風邪を持つてゐた臨時雇ひの青年と、接吻したのが原因だとか何とか云ふ噂だつた。併し眞僞は兎に角、ユニヴアーサルの撮影所に、眞つ先に漫延し出した事だけは、毎日の羅府夕刊が是を統計的にさへ報ずる所だつた。

「なあに、あんた熱病は一種の植民地病だよ。」

そんな惡口を云ふ、有名な俳優があつたりした。郊外にあるユニヴアーサルの廣大な撮影所村を、一種の嫉視を以つて、植民地と目した積りなのだつた。

やがて其植民地でも、あの可憐な涙の女優、ヴァイオレット・マーセローが死んだと云ふ報知が、羅府夕刊に載つた時には、撮影所一帶はさすがに喪の色に包まれた。次いであの元氣なエデイー・ポローが危篤たといふ噂が立つた時分は、外の撮影所でも、從業員の五分の一は風邪に冒されてゐない所はなかつた。それでもエデイー・ポローは彼の精悍な心臓の力で、やうやく生命は食ひ止めたが、併し彼が癒ゑる頃には、男優ではウオレース・リードを初め、ウオルレン・ケリガン、ジョン・バリモア、ケネス・ハーラン、ロン・チヤニイ、エマリイ・ジョンソン、其他、女優ではエルシイ・フアーグソン老孃を筆頭として、タルマッヂ姉妹、アニタ・スチユアート、オリヴ・トーマス、アリス・ジョイス、ヴイヴイアン・マーチン、ジエーン・ノヴアックなどが、枕を並べて其罹病者の表（リスト）の中にゐた。遂にはあの強盗のやうなインス監督までが、高熱で五日寢た。けれども彼は六日目にはもう起きて來て、ふら／＼する足を踏みしめながら、ドロシイ・ダルトンの演伎を叱りつけてゐたと云ふ事だつた。

併しチヤツプリンは、まだ自分だけは大丈夫だと云ふ氣がして、マスクも掛けずに平氣で立働いてゐた。

「チヤーリーがマスクをかける。それこそスクリーン以外の喜劇だ。」

彼の中の何者かゞ、そんなプライドを彼に持たせたのだつた。

或日、彼は自分のスツデイオで、例の「チヤツプリンの道具方」を撮影してゐた。が、何となく朝から氣分が重く、いつものやうに輕快に立廻れなかつた。彼はやうやく氣を取り直して、怠けものゝ彼道具方が、親方に叱られて、大道

具のエヂプトの柱を片付けるべく、仕方なしにそれを背負つたまゝ、たゞくるりと廻つて、親方と顔を合せる可笑味のところを、撮らせ初めた。が、其時柱を背負つて、くるりと廻る拍子に、不意にぐら〳〵と云ふ眩暈を感じた。おや、おかしいなと思つたが、我慢して、其處だけは濟ました。而して何となく頭が重く足腰がだるいので、相手女優のエドナ・パーヴヤンスが、夕飯を一緒に食ひたいと云ふのを斷つて、ひとり家へ歸ると、床の上に横になつた。うつら〳〵微睡んで、ふと眼を醒まして見ると、内臓が底火照りするやうだつた。熱を測つたら、三十八度ばかりあつた。が、それでもまだ彼は、世界風邪に罹つたのだとは思はなかつた。一時の疲勞か何かで、身體が變調を來したのだ。そんな風に思つて强ゐて其夜は寢た。——其頃もう、彼は妻君のミルトレッド・ハリスとは、撮影の都合といふ名儀で、別居してゐたので、たゞ鳥渡かう云ふ體の變調を來した際などは、自分の傍にゐて心配して呉れる、柔しい手が欲しいと思つたが、今更あのつんとした、蒼白く澄んだハリスの事を戀しがるのなんぞ、業腹な氣がしに强ゐて打消した。——彼は一度女が手に入つて了ふと、熱情がだん〳〵薄らぐと云つた性の男だつた。——其中に妻のハリスとも、又相手女優のパーヴヰヤンスとも、又自分の雇つて居る家政婦のカザリンとも、誰ともつかぬやうな女性の幻影を描きながら、浮氣者の猶太人の彼は、小さな犬のやうに寢入つて了つた。……

翌朝、チヤツプリンは起きた時、猶手足が倦るく頭が重いのを感じた。が、元氣でそれを追ひ拂はうと思つて、毛布を刎ねのけて起き上つたが、其時又眼がぐら〳〵するのを覺えた。それでも無理に床から下りて、洗面に立たうとすると、全身にぞつと寒氣がして、ふら〳〵と又その床の上に倒れて了つた。彼は驚いて枕許の呼鈴を押した。

女中が來て、驚いて醫者を呼ぶための電話をかけた。そして爲す處を知らずに、狼狽してゐた。彼女らは一週間二十萬弗を取る主人が、一日でも寢るやうな事が在つては大變だと只徒らに心配するだけだつた。兎に角消えかゝつてゐた

煖爐の火を、充分に暖く燃し直した。それから彼女は枕許に寄つて、

「ほんとに流行感冒でないとようでございますがねえ。」と、慰めるやうに云つた。

「鹿馬！　流行感冒でなんぞあつて堪るものか。」チャップリンはさう怒鳴りつけたかつたが、さう呟くのさへ退儀だつたのでやめた。

彼はフイルムの進行のやうに、直ぐ醫師がやつて來ないのを、もどかしく思つた。撮影所でこんな目に會つたら、叱りつける所だとさへ思つた。――が、其中に、世間の醫師としては可なり早く、醫師がやつて來た。チャップリンの家庭醫師で、平常からそれを誇にしてゐる男で、いつか「銃を肩」の撮影中、チャップリンが鐵砲を落して、小指の端を潰した時などは、例の羅府夕刊の活動記者に、自分から電話をかけて容態を報告した程だつたから、何事を措いてもやつて來たに違ひなかつた。

「やあ、どうしました。」

醫師は入つて來て、明に百萬弗喜劇役者の運命を。自分が握つてゐる得意さで、無遠慮に覗き込んだ。其若くてら〳〵した平べつたい顔が、チャップリンには實生活に於ても、「大寫（クローズアップ）」と云ふものはあるものだなと思はせた。

チャップリンは懶げに、簡單にその容態を述べた。

醫師は微笑を含んで、一と通り診察を行つた。その診察の仕方は、恰も此の世界的な喜劇役者を、自分の手で是だけ弄ぶことが出來るのだぞと、享樂してゐるかのやうに、余計な事までさせてゐる如く思はれた。

「舌を出して！　アーン、……」

日常生活では妙に氣六ケ敷屋のチャップリンは、澁面作つて口を開いた。何だか彼は弄ばれてゐるやうで、不快で堪

らなかつたが、醫師の命令止むを得なかつた。

かうして一と通り診察が濟んだ後、醫師は勿體ぶつた眞面目さで、

「矢つ張り流行性感冒ですな。注意しないと飛んだ事になりますよ。」と宣告を下した。

そんな事があるものか、とチャップリンは思つた。すると醫師はそれを感じたものか、

「熱が三十七八度ありますからね。氷で冷やして、絶對安靜にしてゐなければなりません。肺炎にでもなると、それこそ大變ですからね。一體貴方は心臓が弱いんだから。」

さう云はれると、さすがにチャップリンも悄氣返つた。そして改めて醫師に、縋りつくやうな聲を出した。

「ぢやあ、早く病院へ入つた方がいゝでせうか。」

「さうですな。私もさうお薦したいと思つてた所でした。萬一急に惡くでもなるとお宅では矢つ張り駄目ですからね。」

「さうですか。では一刻も早く、惡くならない中に、入院しませう。」

さうなつて了ふと、チャップリンはすつかり氣弱になつて、顔色も蒼ざめてゐた。

チャップリンの風邪は、幸ひ惡くならずに濟みさうだつた。が、彼はまだセントラル病院の一室に、身を横へてぢつとしてゐなければならなかつた。彼は窓もすつかり閉ぢ込められた一室の、湯氣を立たした空氣の中で、白い壁ばかり眺めてゐた。眺めていろ／＼な事を考へ暮した。

此のたま／＼與へられた靜思の機會は、彼を悲觀的な、一種の感慨へ屢々誘つた。思へば本國英吉利で、六歳の時に初舞臺に立つて、親方の鞭を怖がりながら、駈け廻つた少年時代から、どうも興行が面白く行かないのに業を煮やして

或る時舞臺から觀客席へ飛び下り、例の一流の家鴨のやうな步き方で、觀客席の間を尻を振つて步いたら、却つてそれが偶然の人氣となつて、やうやく喜劇俳優として幾らか認められた時代、それから亞米利加へ渡つて、何年かの旅廻りに身も魂も痩せかゝつた折、キーストンのマック・セネット氏に見出されて、カメラの前に立つて例の步き方をするや、忽ち燎原の火の如く彼の人氣は廣がつて、今ではキネマ俳優中最高の俸給を取り、世界的名聲を馳するやうになつた彼！

「凡てはほんとに運がよかつた。」性來自負心の强い彼も、今この病床の上では、つくづくさう思はない譯には行かなかつた。こんなにうまく、とんとん拍子に來て、何か惡い報ゐでもないものだらうか、惡い報ゐは來ない迄も、かう運がよかつた、後はその反動として、是からは何事も下り坂になつて行くのではなからうか。……そんな氣が祉々と身に應へて來た。

其處へもとは彼と同じ喜劇俳優で、カメラの前にも立つて、彼と雁行する位な名聲を增したが、いつの間にか矢張り弟の名聲に吹き消されて、今では弟チーリーのマネージヤアになつてゐる、兄シドニー・チヤツプリンが、靜に入つて來た。兄は室の隅で、つゝましく何か産婆學が何かの本を讀んでゐる、附添の看護婦に點頭いて會釋した後、弟の傍によつて云つた。

「今日はどうだね。」

「うむ。大分いゝ。」と懶げな、併し救ひを得た氣持で、チヤーリは答へた。「此分で行けばもうあと二三日で、退院する事が出來るさうだ。退院して、早く仕事がしたい。」

彼は思はず焦慮を口へ出した。

「さうか。」と兄はそれが癖の、片目を心持瞑るやうにして、「それはよかつた。併し、そしたら仕事の事なんぞ考へないで、暫らくフロリダへでも行つて、靜養するんだな。お前は少し働き過ぎたよ。世間でも、濫作し過ぎると評判してゐる位だからな。」と、宥めるやうに云つた。

「でもキーストンにゐる時分は、もつと働かせられて、隔月に一本位取りましたからね。」「あの時分はあの時分さ。たが、今は、少し體を大切にして、自重しなければあいけない。何よりもお前たちの身上は、身體なんだからな。――さう云へば今だから話すが、お前が此の寒冒にかゝつて、死ぬかも知れないと云ふ噂の立つた時、怪しからん話だが會社では、すぐお前に代るものと思つて、あのロイドに交渉を開始したさうだよ。お前はもう死ぬものと思はれたんだね。」

「へーえ。」チャーリヘはさすがに眉をひそめた。「會社の重役どもにかゝつちや、やり切れないな。彼奴らは僕が若し死んだら、あの出來かけのフイルムに何とか名をつけて、高く賣出す位直ぐ考へたでせうからなあ。」

「うむ、さうだよ。」と、シドニーも點頭いて、それから猶も釣られたやうに、こんな奮慨をし出した。「それからお前には默つてゐたが、どうも會社では、此頃お前を荷厄介にしてゐるやうだよ。俸給は高いし、映畫の取捨は六ケ敷いし、そして評判は思つた程でないし、少し氣を腐らしてゐたやうだよ。遠慮なく云へば、ロイドを安く傭はうなぞと考へたのも、そこに因が在るらしいんだ。」

「どうせ腰掛けの會社さ。その中に此方から御免を蒙らあ。」

チャップリンは、心中いたく自尊心を傷けられて、吐き出すやうにかう云つた。何だか胸の中が、二三日前のやうに火の如く熱かつた。

「さうだ。他にお前なら、すぐにでも手を出したい會社が隨分澤山あるんだからね。まあ稍々身體を丈夫にして、それか

ら働くさ。」

チャーリーはそれには答へなかつた。二人の間には暫く沈默が在つた。が、暫くすると、その沈默の心持を、兄に讀まれるのが、チャーリに取つては鳥渡厭だつた。で、彼は話頭を轉じた。

「其後何か變つた事はないかね。」

「別に變つたといふ程の事はない、相變らずだね。グリフィスが又バビロン物を擔ぎ出さうとしてゐるさうだ。彼奴の大仕掛にも、いつ迄客が脅かされるかしら。」シドニーは皮肉な微笑を含んだ。「どうでした、スクリーン週報の人氣(ポピュラリ)投票(テイ・コンテスト)は？　もう私が寢てゐる中に、締切は濟んだでせう。」

彼は寢つく迄、自分が喜劇俳優の最高位を、群を拔いて占めてゐたのを、思ひ出して何氣なく訊ねた。

「うむ。あれか。あれは妙な結果になつたよ。」と、シドニーはさすがに少し氣の毒さうな顏をして、今週になつて、ダグの出した「現代の勇士」が大當りでね。締切間際になつてから投票がぐつと增えたとかで、彼奴が一番だつたよ。五萬票を越えてたかなあ。」

チャーリーはさう重い氣持でなく、話題のない所から、ふと浮ぶまゝに輕く訊いたのだつたけれども今はそれを悔ゐなければならなかつた。

「さうですか。人氣つて云ふ奴は面白いもんですね。」髭のないチャップリンは、女のやうに强ゐて微笑した。

「それだけならまだいゝんだがね、」と、兄は折に觸れたものだから、又少しく憤慨を洩らした。「あそこの記者の批評が又例の通りなんだ。ダグラス・フェーアバンクスには敵なし。彼はあらゆる人々より愛せらる。チャーレス・チャプッリンは一褒一貶、常にフアンの半數を征服するに過ぎず、……なんて云つた調子なんだ。」

「あゝ、又例のフラット・フォレスティーの奴でせう。あんな奴の云ふ事、一々取り上げて怒つたつて、仕方がありませんよ。」

「さうだね。全くさうだね。――だがお前もすつかり癒つたら、そんな奴らの定評を叩き毀す、いゝ映畫を一つ取るんだね。」

　チャーリーは再び答へなかつた。が、其時は丁度看護婦が立つて來て、藥を飲む時間だと云ふので、其場の空氣を緩和して呉れた。もう正午近くだつた。

　シドニーは弟が、黄色い藥を不味さうに飲むのを、仕方なしに慰めるやうな微笑で、終ひまで見てゐたが、それが濟むと、機を狙つてゐたやうに、

「どれ、ちやあ鳥渡事務所へ顔を出して來るかな。何か用はないかい。」と、云つて立ち上つた。

　チャーリーも、さうなつては、口を開かずにゐられなかつた。

「さうですか。ちやあ、事務所の方へ來てゐる、私宛の手紙を此方へ廻して下さい。」

「あゝ、よし〳〵。――ちやあ大事にしな。」

「左樣なら。」

　兄の去つた後、チヤツプリンは再び、壁の方を向いて、物思ひに沈んだ。それは一種の、反抗的な熱を帶びてはゐたが、更に又前よりも、ずつと悲觀的な色に染められてゐた。彼は淋しいいらだちを覺えた。

　考へて見れば兄の云つて行つた事は、無意識だらうが、恐く彼の人氣の落ちつゝあるのを、警告して行つたやうなものだつた。では、先刻から漠然と俺が感じた通り、矢つ張り俺は下り坂に向つてゐるのか。それが、今、此の病氣が機

縁となつて、はつきり解り、又此の病氣が第一の表象で、これからはかう云ふ不運ばかりが、續いて起るのではあるまいかと思はれた。さう云へば、一々思ひ當るやうな事ばかりだ。

今迄の全盛の勢ひから、たゞ百萬弗映畫と彼の名を冠しただけで、興行的には成功した前回の作品なども、在來の人氣で押して來はだけで、見た人の間には何處となく不評が醸されてゐた。

「"Sunny-side is not sunny.」などと、或るキネマ雜誌の記者から、駄洒落交りの攻擊なども、當時は笑つて過ごして來たが、矢つ張りさういふ現はれの一種だと思ふと、今更强く胸に應へて來た。さうは云ふもの丶、是から其落ちかゝつた人氣を盛り返すやうな、自信のある作品はどうして出來よう。兄はあゝして體をよくして、捲土重來せよと云つてゐるけれど、自分が休養してゐる間に、羅府のありとあらゆる撮影所は、どんな他の「人氣」を作り出すかも分らない。かうして彼が寢てゐるのをいゝ事にして、ロスユーやコンクリンやロイドなどは、どんなに跋扈してゐるだらう。……

チヤツプリンの胸は、病室の白い壁を見つめながら、暗い影に閉されてゐた。

そこへ使ひの者が、事務所から彼に宛てた手紙の束を持つて來た。受取つて、彼は枕許にそれをばら／＼と解いた。見るとそれは五十通近くあつた。

「まあ、今日も又大變な御手紙ですこと。」

看護婦が、仰山な作り聲で遠くから眺めた。彼は夥しいその數の、多くが見舞狀だと知ると、少しく明るい氣持になつた。そしてその常套な文句や、是を機會に寫眞を呉れなどゝ云ふ文面を、チエツと云つたやうな舌打の氣持で、しかも煩しくない事はなく、順々に見て行つた。が、其時ふとこれらの手紙から、彼が征服し得るのはキネマ界の半分だと云つた、某誌記者の言を思ひ出して、少し快然とせざるを得なかつた。

と、或る二十枚目ほどの所に、一通の型馴れぬ珍らしい封書を、彼は見付け出した。

それは薄藍色の封筒に、變つた切手が貼られてあるので、直ぐ外國から來たのだと知れた。切手の中央には、白く菊の形が染め抜かれて、無骨な日附印がそれに押して在つた。何處から來たのだらうと思つて、差出人を見ると、名前らしい讀み惜い文字の下に、Tokyo, Japan として在つた。

日本のフアンから、さう思つて彼は急いで封を切つた。すると中からは封筒と同じ色の、薄藍色の紙へ、幾度か清書したらしい、習字の手本のやうな字で、しかも其文句は頗る破格に間違ひだらけながら、こんなやうな事が書いてあつた。「親愛なるチヤーリ・チヤツプリン君。

私は君の藝術の熱愛者である。歯痛の時でも、頭痛の時でも君の藝を見ると、私は凡ての苦痛を忘れる。試驗中でも君の映畫が來たと聞くと、見に出かけずには居られない。私は極東の哀れな一中學生であるけれども、君を愛する事は誰にも劣らない。ダグラスやロイドの喜劇も度々見るけれど、嘗つて君のを觀る時のやうな、全身的な感激を持つて見る事はない。人々は君を小手先ばかりの藝だと謗すけれど、私はさうは思はない。君のあの歩き方一つにも、君の全生命は籠つてゐると私は思ふ。折に自愛を祈る。そして若し君に此の貧しき極東の一青年に、寄せて呉れる好意があるならば、一葉の君の署名ある寫眞を送つて下さい。汝の忠實なる、クニタロー・タカハシ。」

それを讀み終つた時、チヤツプリンの心は、急に晴々しくなつた。何だか輝かしい微笑が、自づと頬に上つて來たのを、自分でもはつきり感じた。さうだ、自分にはまだ〳〵、かう云ふ期待を持つてゐて呉れる人が、極東の日本にさへあるのだ。さう思ふと彼は、今迄の暗雲を一掃して、急に心機一轉した。もう直ぐにも何か素晴らしい思ひ付きをして、名映畫を作製してやらうと思つた。それも、何だか雜作なく出來るやうな氣がした。彼は何だか、胸の何處かでムヅ〳〵

するやうな、起き上りたい衝動を感じた。

「看護婦さん。起きて顔を洗つてもいゝでせうかね。」

彼は殆んど上ずつた聲で、かう呼びかけた。

「えゝ、もうお差支はないんでせう。」

看護婦は何とも知らず、微笑して答へた。

チヤツプリンは小供のやうに、併し氣をつけて寢臺から助け下ろされた。而して、高熱の後のふらつく足で、例の家鴨のやうな歩き方を、看護婦に分らぬやうにそつと試みながら、白い大理石の洗面器の方へ嬉しげに歩み寄つた。……

（大正十年八月）



生れた家

谷崎潤一郎

○

私の生れた家は日本橋の蠣殼町にあつた。人形町通りを水天宮の方から來て、左側の繪草紙屋と瀬戸物屋の角を曲つて、一町ほど行つたところの右側にあつたのである。その繪草紙屋と瀬戸物屋は今でも殘つて居る筈だが、殊に繪草紙屋の方は、東京に何軒と云はれる有名な古い店だつた。日清戰爭の時分に、私はよくその店で年方や清親や月耕などの、三枚つゞきの戰爭の繪を買つた。

生れた家は、その頃の商店の構へと云へば大概どれも同じやうに、間口のひろい、總二階の土藏造りの家であつた。さう云ふ構へは、今でも小舟町や馬喰町邊の問屋などに俤を留めてゐるので、私はあの邊の店の作りを見ると、何だか懷しいやうな氣がするのである。尤も、私の家は商ひをして居たのではなく、つひ近くにある米屋町――米穀取引所の氣配を刷る印刷所であつた。その時分には夕刊新聞などがなかつたから、毎日夕方にその日の商況や相場などを記載して、それを相場師仲間へ賣つたのである。云はゞ小さな新聞社のやうなものだつたが、その編輯をやつ

て居たのは、私が覺えてからは私の母の弟にあたる叔父であつた。表には巖谷一六の書いた「谷崎活版所」と云ふ看板が懸つて居て、まん中の格子戸をくゞると、細長い土間が奥の突きあたりまで通つて居り、土間の左側に印刷工場、右側に商店風の上り框があつて、お定まりの帳場格子や火鉢などが置いてあつた。そんな風で印刷職工を始め奉公人なども可なり多勢居たやうに思ふ。

私の家族――祖母や叔父叔母や父や母やは、藏造りの棟の後ろに續いて居る奥座敷に住んで居た。店から奥へ行くのには觀音開きの戸口が一つあるだけで、その戸口の石の段々を下りると、奥座敷との境にうす暗い板の間があつた。板の間を右へ行くとそこに、もう一つ店と並んだ土藏があつて、つまり觀音開きの戸口が二つ續いてゐたのである。私が生れたのはその店でない方の土藏の下座敷であつた。座敷は、表通りへ面した壁にたつた一つ窓があるだけで、陰鬱な牢屋のやうな所だつた。おまけに佛壇などがあつたので、餘計そんな氣がしたのである。私は四つ五つの時分、私の身の丈がその窓の高さより低かつた頃に、どうかして窓の上へ首を出したいものだと思つて、厚い壁の窓の縁へ手をかけて、一生懸命によぢ登らうとしたことを覺えて居る。その後大きくなつて、やつと窓へ首がとゞくやうになつた時分、私はそこから屢々表通りを覗いたのであるが、しかしさうなつてからは別段、何を見たと云ふやうな記憶はない。たゞ二三遍、窓の向うの空に雨がパラパラと降つて居て、その雨の脚が銀の絲のやうにハツキリ見えたのが、思ひ出されるばかりである。

○

店は往來へ向いた方が全體窓になつて居た。それは鐵の格子の嵌まつた大きい窓だつたから、私は私の記憶する限り

のずつと小さい時分から、晩になるとその格子へ掴まつては表を見たものである。私は今でも、自分の最も幼い頃の俤として、格子のところにしやがんでゐる子供の姿を想ひ出す。自分の傍には天保生れのばあやだの店の小僧だのが居て、表を見ながらいろんな話しをしてくれた。往來の向ふ角にはたしか金淸樓と云ふ料理屋があつて、その横町が矢場になつて居たので、冷やかしに來る米屋町邊の若い者などが、格子先に立ち止つては話し込んで行くこともあつた。金淸樓の二階に灯がともつて賑やかなお客の影が障子へ映つてゐる下を新内語りだの假色つかひだのが通つたりして、その往來の夜は可なり情趣があつたのである。

　京橋の方へ嫁いでゐた伯母が、離緣になつて私と同い歲の娘をつれて戻つて來たことがあつた。伯母はその後近所の質屋へ嫁いたが、娘を私の家へ殘して行つたので、時々、夫には內證で、夜おそくお湯の歸りに格子先へ立ち寄つたりした。娘は窓の內から、伯母は窓の外から、鐵の格子を掴んでひそひそと語り合ふのを、私は屢々聞いた。私の母なども出て來て、伯母と一緒に泣いてゐる折もあつた。

「光ちやん、まあちよいと中へ這入つたら、——」

と、母は幼名前で伯母を呼んで、よくそんな風なことを云つた。

「えゝありがと、——今日は寄るまいと思つたんだけれど、大急ぎでお湯へ這入つて、體もろくに洗はないで驅けて來たんだから、又そのうちにゆつくりと伺ひますよ、——」

と云つて、伯母はそはそはしながらも容易に切り上げようとはしないで、二度目の夫の邪慳なことや、吝嗇なことや、口やかましいことなどを、細々と三十分ぐらゐはしやべつて行くのだつた。

十時が打つと、奉公人どもは店の戸をしめて、眠に就くのが掟であつた。奉公人は一人一人板の間へ來て、奥座敷の

襖の前に手を衝いて畏まつて「お休みなさい」と云つてから床へ這入るのである。

「さあ、潤ちやん、お休みなさいましよ。」

と、私もばあやに促されて店を引き上げる。さうして奥座敷の二階へ行つて、ばあやと一つ蒲團の中へ寢るのである。秋の夜長など、蒲團へ這入つてからも暫くの間、ひつそりした往來の地面にからりころりと鳴る下駄の音や、新内の流しなどが耳について、寢らないことがあつた。

ふと眼がさめると、行燈の灯影がぼうつと部屋の中を照らして、ばあやはすやすやと睡つてゐる。家の中もシーンと靜まつて居る。もう夜中なのかな、さう思つてゐる時、遠くの方から新内の流しが聞えて來る。「天ぷら喰ひたい、天ぷら喰ひたい」と云ふ風に聞える三味線の音は、だんだんハツキリして來て、家の前を通り過ぎて、やがて又次第に遠のいて行く。私はその音が全く聞えなくなつてしまふまで、ぢつと一心に耳を澄ます。「天ぷら喰ひたい。天ぷら喰ひたい」と云ふ聲が、消え入るやうに細くかすかに、切れ切れになつて、「天ぷら……天ぷら……たい、……喰ひたい天ぷら……ぷら喰ひ……天……」と云ふやうに、ところどころしか分らなくなり、いつの間にかすつかり分らなくなつてしまつても、私の耳にはまだその餘韻が尾を曳いて居て、何處か非常に遠い所で矢張り聞えてゐるやうに思ふ。さうして私はいつ迄も寢られないで居る。私が子供心に「悲しい」と云ふ氣持ちを味ひ初めたのは、さう云ふ晩であつた。「お父さんやお母さんはいつ迄私を可愛がつてくれるだらう」「私は大きくなると、奉公にやられるのぢやないだらうか」「かうしてすやすやと寢てゐるばあやが、若し死ぬやうな事があつたら、――」その三味線の音を聞きながら、私はいつもそんなことを考へ續けた。

奥座敷は二た間になつてゐたが、まだその奥にもう一棟の土藏と二階建ての離れがあつた。庭に面した座敷の緣を傳はつて行くと、そこに又廣い板の間があつて、左側にある土藏の觀音開きと、右側にある離れ座敷とが向ひ合つて居た。

○

離れは祖父の隱居所であつたのかも知れないが、私が物心ついた頃には、もう住む人が居なかつたし、土藏もそこのはほんたうに物を收つて置く倉だつたから、板の間はシンとして物靜かで、家の他の部分とは空氣が違つて居るやうであつた。そこの屋根には明り取りのガラスが嵌まつて居たので、土藏の前はほんのりと明るく、樟腦のやうな防腐劑の匂が、錠の下りた金網の戶の中から仄かに香つて居た。夜はお化けが出さうで恐かつたけれど、晝間私は、こつそりと獨りでその板の間へ來て、觀音開きの冷めたい石に腰かけながら、亡くなつたお祖父さんの事や、その又お祖父さんの事などを考へた。或る時は人氣のない離れ座敷へ這入つて、違ひ棚に飾つてある祖父の寫眞を視詰めたりした。祖父は晩年に耶蘇を信じたとか云ふ話で、寫眞の側には大きな金色の額緣の中に、マリヤの像が入れてあつた。それは立派な油繪のやうに覺えてゐるが、恐らく西洋の名畫の複製だつたに違ひない。兎にも角にも、天を仰いで合掌して居る神々しい聖女の眸は、頑是ない當時の私にも不思議な威厳と畏れとを感じさせた。私はその像を見に行くのが好きでもあり氣味惡くもあつた。今考へると、マリヤの像は二つあつて、一つは子供のイエスを抱へてゐたやうに思ふ。私にはその子供のある方の繪が一層不思議で、抱いてゐる聖女の、碧い眼をぢつと視てゐると、次第に云ひ知れぬ怯えを感じて、こそこそと座敷を出てしまふのが常であつた。

板の間の突きあたりから、土蔵に沿うて左へ曲る廊下があつた。パノラマの入口にあるやうな、幅の狹い暗い廊下だつた。それは家の裏口の湯殿の方へ續いてゐて、湯殿の前から奥座敷へつながつてゐた。で、その廊下を通ると土藏を一周することが出來るので、私は從兄弟の女子供たちと、そこをぐるぐる廻つては座敷を跳び越へたり、緣側を駈け出したりして、鬼ごつこや隱れん坊をした。祖母や叔父などに、「うるさい」と云つて度び度び叱られたものだつた。

○

店と奥座敷との境の板の間の、二つの觀音開きの間の壁に、電話の機械が取り付けられたのはいつ頃の事だつたらうか。多分東京に電話が輸入されてから、間もない時代だつたであらう。或る時母が私を電話口へ抱き上げてくれて、

「此れへ口を付けて話をして御覽、向うで誰さんが返辭をするよ、」

と云つた。

「もし、もし、あなたはだあれ?」

と、私は云つて見た。

「あなたは潤ちやん?――」

すると、さう云ふ返辭が聞えた。それは米屋町のもう一人の伯父の家の誰かであつたが、馴れないので、私は直ぐには聲の主を判じることが出來なかつた。

その後二十何年を隔てゝ、もう其の頃は祖母だけしか住んで居なかつた蠣殼町の家へ行つた時、私は久し振りでその電話口へ立つて、米屋町の伯父の家を呼び出したことがあつた。

「もし、もし、僕は潤一ですが、」

と、私は云つた。

「あゝ、お前潤一かい？」

さう答へたのは若い女の聲らしかつた。自分の名を呼び捨てにするのは誰だらう、さう思つて問ひ質すと、聲は、

「私だよ、私だよ。」

と、二三度繰り返して云つた。だんだん聞いてゐるうちに、若い聲だと思つたのは電話の加減でさう聞えたので、母の聲であることが分つた。

その時分、父と母とは零落して、箱崎に小ひさな家を借りて居たが、放縦な生活に耽つてゐた私は、もう一年近くも兩親に會はなかつたし、母と電話で話したことなぞは、何年にもなかつたのである。母の聲だと分つた時、私はふと、子供の頃に此の電話口で抱かれたことを想ひ出して、彼女の聲の若く聞えるのまでが、その頃の母らしくて、私の心は急になつかしい二十年の昔に返つた。

「お前、どうしたんだね、ちつとも内へ寄り付かないぢやないか。」

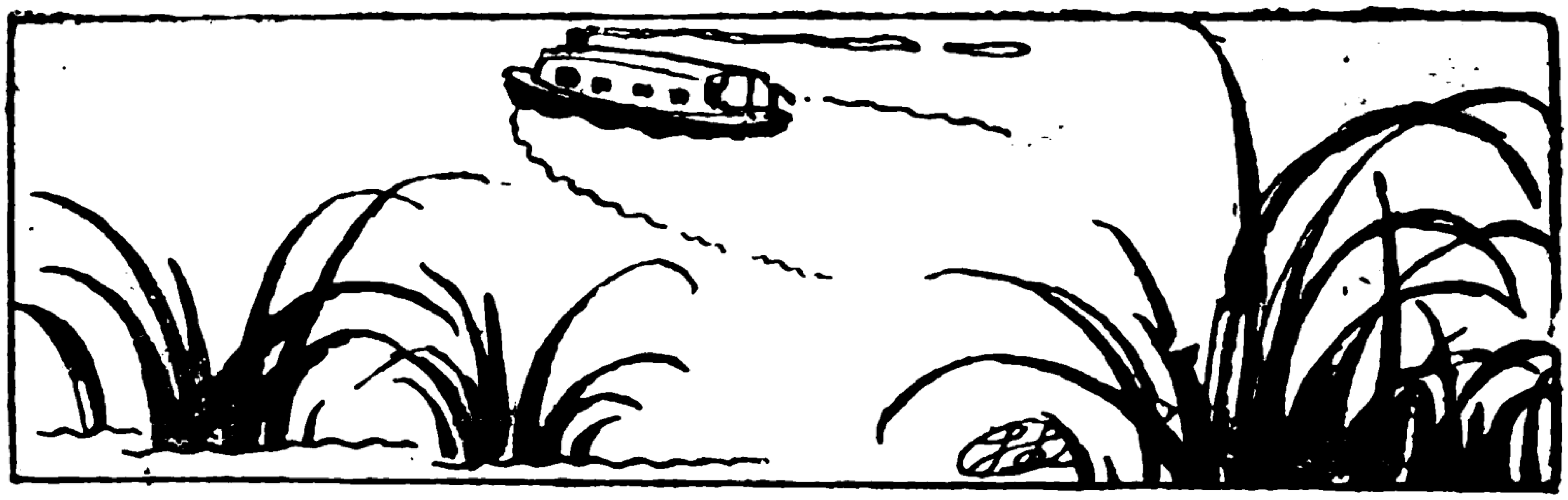
「えゝ、今直ぐに其方へ行きますよ、忙しかつたもんだから、つひ御不沙汰しちまつて、……」

私は、何となく涙ぐんで來る聲音を悟られまいとして、さう云ひながら電話を切つた。

○

「生れた家」の事を書けばまだ此の外にも澤山ある。今は纔かに斷片的に記して見たのだが、いづれ折があつたら、順序を立てて物語風に書き上げたいと思つて居る。それは私自身の爲めでもあるが、昔の東京の下町が、今と比べてどんなに美しい好い町であつたかを、讀者に知らせたくも思ふからである。

（大正十年八月記）



心中

宇野浩二

到頭、九月の或晩のことである、私は、私の女房の義理の妹の婿に當る、魚屋の戸水甚吉と飯田町停車場から乘り出して、信州の上諏訪町へと向つたのである。すると、私は丁度三年前のことを考へるのである。やつぱり同じく秋のことに、私は私の友達と同じ時刻に同じ停車場から、同じ町へと向つて汽車を乘り出したことがあるのである。と私の友達とは二人とも小說を書くことを仕事とするものであつた。その年は九月に這入つてから、急に眞夏にも知らなかつたやうな暑さの日がつゞいた。私は私の友達と、或晩カフエーで落合つて、

「斯う暑くてはとても堪らない、雜誌社との約束の小說など、これでは中々果せさうにない、」と私が言ふと、

「僕もさうだ、」と友達が、「君一緒に何處かへ旅に出ないか？」

そして私たちは旅行案內の附錄の不完全な地圖を探つて、何といふ譯もなく、信州の、その湖のほとりの溫泉町に出かけることになつたのである。もう何と言つて

も秋のことだ、一夜明けると時候がからりと變ることがある、殊に信州は寒い國ださうだ。用意にセルの單衣ぐらゐは持つて行かねばなるまい。私たちはそこ〱にカフエーを出て、その晩の十一時に飯田町を出る汽車に乘込んだのであつた。

私にも、私の友達にもそれは始めて踏むところの、而もこれ迄殆んど物の本でも人の話にも聞いたところのない町であつた。私たちの汽車がまだ甲州を通つてゐる間は、東京の暑さのつづきを感じたが、一夜明けて、汽車が信州への境を越えた頃から、それの止まる驛々で、息拔きにプラットフォームを散歩して見ると、少し肌寒を感じる程の秋冷の氣を覺えた。汽車の中があんまり蒸し蒸しするのでこんなに涼しさを感じるのだらうか、それも幾分はあるかも知れないが、君、涼しさといふよりも、大袈裟に言ふと寒さを感じるではないか、と私たちは話し合つた。そして朝の八時頃、とある驛を出た時に、試みに私たちの隣の席に坐つてゐた乘客の一人に、

「今度は何處ですか?」と聞くと、「上諏訪です、」と答へた。

「君、僕たちの下りるのは上諏訪だつたかね?」下諏訪の方かい?と、私はあはてゝ友達に聞いた。

「あゝ、上諏訪だよ、」と友達は答へた。

私たちが汽車を下りた時、上諏訪の町は丁度起きたばかりの頃であつた。何處の停車場の前でも同じことだが、大きな廣場があつて、今私たちが下りた汽車の客たちが散つてしまつた後は、廣場を隔てた遙か彼方の街道筋に軒を並べた宿屋、畫葉書屋、雜貨屋の類の家々で、番頭や小僧たちが朝の支度を始めるのが見通された、又廣場の片側の隅には、客を求め得なかつた車屋の一組が、小さな小屋掛のやうな家の中に、目白のやうに並んで腰かけてゐた、そして、その外に廣場に於いて、私たちの目を遮ざるものはなかつたとさへ言ひ得るのである。

「君、やつぱり寒いね。」
「あゝ、驚いたね、僕は風をひく時のやうに寒いよ。それに、寂しい町だね。」
「山國らしいね。湖水は何方にあるんだらう?」
その時停車場の前に立つてぼんやりと町を見てゐた私たちの傍に、一人の車屋がやつて來て、
「旦那方は何方へ? お供いたしませうか!」と言つたのである。
元より私たちはその町の何處の宿屋へといふ豫定はなかつたので、唯注文としては、私たちは二人ともそれ〴〵仕事を持つてゐたので、お互ひに邪魔しない爲に、別々の、そんなに惡くない宿屋に連れて行つてくれ給へ、だが、折角のことには、湖水の見える家がいい。——だが、私の案内された宿屋は、とても辛抱が出來ない程、汚くて、がさつで、騷々しかつたので、私はそこで晝飯の時まで寢てから、早速友達の泊つた方の宿屋へ行つて見た。そこは私の宿屋よりはずつと居心地がよささうだつたので、友達は當分の滯在する家をそこに定めると言ふことだつた。私はその宿の番頭と相談して、一里程離れた隣の町の何某といふ宿屋がいゝだらう、といふことで、その晩からそこに移ることになつて、さて友達と二人で一寸上諏訪といふ町を歩いて見ようかと言つて、町に出たのであつた。
東京はやつぱり昨日のやうな暑さだらうか? 同じ日本の中でも、こんなに時候が違ふものだらうか? セルの着物でも少し寒過ぎる位だね、などと言ひながら、私たちは先づ湖水のほとりに出て見た。だが、そこへ行く前に、ポツリ〳〵と雨の滴が落ちて來たので、私たちは二三丁手前から、悉く四面を、山で圍まれた、單調な景色の湖水を一瞥しただけで、あわてゝ宿の方に引返した。どんよりと曇つてゐる空の調子も手傳つてはゐるのだらうが、路傍の柳の枝も、近くの山の木の色も、如何にも明日忽ち色があせて枯れさうな趣きに見えるのである。

私たちが宿に歸り着かないうちに、いつか又雨が止んでしまつたので、今度は先と反對に、町の方へと行つて見た。町も亦うそ寂しい町だつた。ところ〳〵の呉服店に、秋から冬へかけての物の賣出しの旗がたつた一つの町の賑かな景物であつた、そして、もう一つ私が忘れないのは、町の要所要所の角に、墨と赤インキとの肉筆で「大阪名優中村雁治郎大一座」と認めたビラであつた。これは乾度「鴨次郎」とか「雁十郎」とかいふ贋物ではないかと思つて、近寄つて調べて見たが、正に本物の雁次郎に違ひない證據には、入場料一等金五圓と書いてあつた、だが、今し方の雨の爲に、『中』といふ字も『雁』といふ字も、墨が少々洗ひ流されて、慘憺たる恰好をしてゐるのである。

「もう歸らうか。歸つて夕飯でも食つて、君を下諏訪へ送つて行からうか、」と友達が言つて、私たちはそこで、いつ迄行つても單調な辯に盡きさうにない一本町を、いゝ加減のところで引返して來ると、ふと行手の方から樂隊の音が起つて來た。私たちはあの停車場の前の廣場の一二町手前に來かゝつた時、その樂隊の一行と行違つた。太鼓、喇叭、笛、等六人の樂隊が、「黄海の戰」の譜を奏して來る後から、十數臺の人力車がつゞいて來た、車の先頭に乘つてゐる人物は、私も確に雜誌の口繪で見覺えのある中村雁次郎に違ひないのである、果して、振り返ると、車の背中に白い紙の旗に、墨で彼の名前を認めたのが、ひら〳〵と秋風に搖れてゐた。そして中村梅玉も、中村福助も、中村扇雀も、成る程中村雁次郎の大一座が、十數臺の車に乘つてしづ〳〵と車で練るのである。

不思議といへば不思議なことには、今、三年後の同じ秋の日のことに、私が魚屋の甚吉と同じ上諏訪の町で汽車を下りて、私たちは取敢ず或宿屋に行つた道で私は再び町々の辻に中村雁次郎大一座のビラを見出したことである。明らかにその間に三年の月日が經つてゐるのであるから、これは夢の話ではないのである。甚吉が辯護士の神山勘藏といふ男を訪問してゐる間に、私は心がそわ〳〵して落着かないものだから、宿屋の貫鑰の棒の嵌まつた窓にもたれて、往來を

読めると、向ふの裁判所の角にもそのビラが掛つてゐるのである。氣散じにそれを讀んで見ると、この前の時の中幕「河庄」と大きく書いて、赤インキで二重丸を附けてあつた代りの部分には、見ると私たちの仲間の菊池寛といふ男の書いた『藤十郎の戀』といふ外題が、昔ながらに赤インキの二重丸を附けて、筆太々と認められてあつた。三年前には『藤十郎の戀』といふ芝居はまだこの世に存在しなかつたものである。

さて三年前の、始めて上諏訪の町に來た日の晩、私は友達に送つてもらつて、直隣の下諏訪の停車場に着いたのである。停車場の前の廣場は、停車場から洩れる明りの外、何の燈火もないので、荒野のやうに眞暗であつた。そこから一直線につゞいてゐる道の兩角の家は、近づいてその軒燈を見ると、旅館と認めてあつたが、村の商人宿よりも暗くてがらんとしてゐた。その隣にはつゞいて三四棟の生糸だか繭だかの白壁の倉が並んでゐた、それから田舎によくある、壓し潰されたやうな仕舞太家がつゞいてゐた、それ等の家の凡そ一軒おき位に軒燈がついてゐるのだが、それ等は暗いでこぼこの道を、何の照らす役目をしてゐないのである。

だが、私たちの車はその道を突當つて、右に曲つて進んだ時、私たちは少しばかり町らしい明りの中を走ることが出來た、でも、上諏訪の町よりは遙かに寂しかつた。やがて車は稍々急な阪道を上り詰めたところで、兩側は流石に温泉町らしい、可成り大きな建物の宿屋の並んでゐる町に這入つた、その突當りに私の敎へられた宿屋があつたのである。

その晩は友達は私の宿屋で泊つて、翌日上諏訪の彼の宿の方に歸つて行つた。が、一日おき位に、私たちは互ひに訪問し合つて、そして私たちは出來るだけの仕事に骨折つて暮したのであつた。が、一週間後、友達は仕事の都合で、もう少し殘つてゐるといふ私を置いて、先に歸つてしまつたのである。

その時、私ももう豫定して來た仕事は濟んだのであるし、聞けば東京にももう十分秋風が立つて、人々はあわてゝ衣

更へをした位に、いゝ時候になつたといふことであるから、私も友達と一緒にその町を立つてしまつたら、この物語はなかつたのである、のみならず、今の私の生活狀態もまるで違つたものだつたのである。それは何の誇張でもない、現に今私が連れ添うてゐる女房も現れなかつた筈である、だから、言ふ迄もなく、彼女の義理の妹の婿の、魚屋の甚吉なんて、往來ですれ違ふこともなかつたに違ひないのである。

物事をそんな風に考へる時、人は皆マウリス・メエテルリンクの『智慧と運命』の弟子にならなければなるまい。私はふとその一年前の秋のことを考へる。その頃、私は私の一人の母親を、嘘ついて或親類に使にやつておいて、その留守の間に下宿屋を逃げ出したのであつた。私の持物は私自身の身につけた、一枚の手拭浴衣と、猿股と、一本の帶とだけであつた。そして私は身に覺えある職業といふものを何一つ持たなかつた。更に、この世の中を歩くのに最も大切なものであるところの、俗に『一押し、二金……』といふ、その『押し』といふ性質を厘毫持ち合はさなかつた。私は友達の家から家を歩き廻つてゐた、が、不都合なことには、それ等の友達が悉く、私の狀態に陷る一つ手前位の程度の貧乏人であつた。丁度秋になつて、彼等も衣を更へるのである、だが、その更へる衣を私に讓つてくれたら、彼等自身が更ることが出來ない、といふ狀態のものばかりであつた。が、或日、私は決心して、萬年筆と、着てゐる浴衣と、二三冊の本と、その上に友達から貰ひ集めた二三冊の本と、その外にまだ幾つかの品物を集めて、それに友達から少しづゝ援金して、私の質屋に行つたのであつた。たつた一枚の袷の着物がそこに殘つてゐたのである、それは母のお古をもらつて仕立て直したところの、最早や舊式柄の西陣お召であつた。だが、それを出すのに、私の持つて行つた總てを合はして提供しても、まだ一圓なにがし不足であつた。と、丁度店に主人がゐなかつたのが幸ひになつて、私の途方に暮れてゐるのを見兼ねて馴染の番頭が、「この月中に乾度返して下さいね、乾度ですよ。私は何處か君が見どころのある人だと思

つてゐる、だから、こんな事をするんです、だが、主人には内所ですよ」と言つて、そつと現金二圓貸してくれたのであつた。私はそこで夏中の汗に汚れた浴衣と、袷とを着更へて、夕方の町に出たのであるが、そよ〳〵と秋風に撫でられる度に、ぴちやりぴちやりとまるで水でもかけられるやうに、襦袢なしに素で着た袷の、絹の裏が膚を打つのを、始めはいゝ氣になつて、氣持がいゝと樂んでゐたところが、その爲に風をひいて、友達の下宿で翌日一日寢たことがあつた。

さて、實際二進も三進も行かなくなつた結果、私は前述の友達の世話でやうやく職業小說家になり了せたのである。私にとつて、その時、小說家を名乘ることとは、各々の文學の士がその處女作の時代に必ず憧憬するやうな、そのやうな花やかな夢のものではなかつた。私は唯夏は二枚の浴衣が同時に持てるやうに、秋は袷の下に襦袢が着られるやうに、そしてせめて私の一人の母に安穩な老年を送らさせるやうに、つまり町の燒芋屋や、豆腐屋が持つ以上の希望を持つてゐなかつたのである。

ところが、小說は私にそれ以上の狀態と、從つてそれ以上の慾望とを持つて來たのである。世には善業と惡業といふやうなものがあると見える。そして、私の考では、そして私のやうな心の弱いものには、小說の業は屢々惡鬼に利用されるものである。だが、私は今こそこんな怨みがましいことを述べてゐるが、今言ふ私の小說業の最初の年の秋、私が先に歸つて行つた友達の後に殘つて、溫泉町の下諏訪の或宿屋の、私の部屋の前の椽側の籐椅子に身を投げ出した時には、私はこの世で最も幸福な人間の一人に違ひなかつた。

その時、私はつい呑氣な心持になつて、そこに一人で一週間滯在したのである。そしてその一週間の間に、私はつれ〴〵なまゝに三四度招待したその町の二十一歲の藝者に心を取られたのである。その時、私は三十歲であつた。或日、

私は退屈なまゝた、湯に這入つて、湯槽の縁に頭を載せて、出鱈目の小唄などをうたつてゐたのである。そこへ、小説好きだといふ宿の番頭が這入つて來て、次のやうな會話をしたのが元なのであつた。

「お退屈さまでございます。何にもおなぐさみになるものがございませんでして……」

「藝者でも呼んで一つ騒いで見ようかな？」

「結構でございます。え、へ、、、」

「この町には藝者の數はどの位あるんです？」

「さやうでございます。遊廓のを除きまして、一本のものが……さあ、五十人は居りますでせうな。」

「大さう繁昌ですね。」と私。「ぢやあ、本當に今夜は一人呼んで貰ひませうかな。」

「承知いたしました。」と相手は三十歳に足らない年頃らしいのに、五十歳位の人によく見る、顔ぢゆう火傷の痕見たいに見える、つる〳〵光つた顔を手拭で撫でながら、「ですが、とてもあなた方のお氣に召すやうな者は、田舍のことでございますから……え、へ、、、」と言ひながら笑ふ。

「なアに、そんなお世辭には及びませんよ。近頃は御承知の通り、昔と違つて小説家と藝者とは緣がなくなりましたからね。僕なぞ宴會の外に藝者と同じ座敷で會見した經驗がない位ですよ。」

「御冗談ばつかり……。え、へ、、、。いや、もう藝者なぞといふ者は黴が生えて居ますから、旦那様方にはもつと新しいものでないと……。え、へ、、、。ところが、どうもこちらは田舍のことですから、お氣に入るやうなお慰みがございませんでして……。で、藝者はどんなのを……？」

「そんな譯ですから、どんなのでも不服は言ひませんよ。」

「ではあんまり若いのより、」と何と思つたのか、相手は私に、「二十一二、二三といふ方が、如何でございませう？え、へ、、、」と一流の笑ひにまぎらして推薦するのである。が、無論、私もそれに贊成すると、「では、丁度二三日前にお披露目をしましたので、ゆめ子と申しますのが……もつとも前に出てゐまして、一年程休んで居りましたのが、今度又出たのですけれど、お酌から出てゐる女でございますから、どうにか藝者の形をして居りますですから……」

けれども、それは午後の二三時頃だつたので、夜になると、いつとなく私は藝者のことを忘れてしまつて、もつともその間に二三度、本當に來るのかな、と一寸思つたが、夕食後又湯にはひつて、湯から出て、煙草をすひながら誰かの小說本を讀んでゐると、突然「今晩は……」といふ優しい女の聲と共に、すーつと唐紙が開いた、噂の藝者ゆめ子が這入つて來たのである。

さういふ次第で、その時は一週間ほどの間に、私はゆめ子と四五度會つて、そして別れて東京に歸つて來たのであるが、それから二ケ月程後、無論、職業の小說の仕事を持つてだが、再び私は、今度は一人で出かけて行つたのである。私は、先にも言つた通り、藝者ゆめ子に輕く惚れたのである。だが、私のやうな薄弱な心の持主にとつて、輕く惚れるといふことは、風の吹き廻し一つで、忽ち强く惚れる元にもなるのである。

最初の時に、私はふとしたことから、彼女が當歳の子の持主であることを知つた。卽ち、お酌から出てゐた藝者でありながら、一年ばかり休んでゐて、私が始めて會つた二三日前に二度のお披露目をしたといふ、その一年間の休業中に、彼女は子供を生んでゐたのであつた。その後、彼女と私との間に、こんな話が出たことがあつた。

「僕が始めて上諏訪の町に來た時、」と私が言つた。町の辻に中村雁次郎大一座といふビラが張つてあつたので、假の雁次郎だと思つてゐたら、本物の雁次郎の乘込の車の一行に出遭つて驚きましたよ。」

「まあ！　あの時入らしつたんですか？」と滅多に感情的な發言をしないゆめ子が、珍しく感心したやうに言ふには、「私もあの時、丁度上諏訪の町に行つたんですよ。あなたはどの邊で雁次郎の車にお遭ひになりました？……さうですか、私は郵便局の前で遭ひました。丁度やつとあの日に鑑札が下りましたので、もらひに行つた歸りだつたんです。お披露目をしたのは、それから三日目でした。」

「坊やは乳をどうしてゐるんです？」

「此頃はミルクで育てゝ居ります」と彼女は靜で、俯向き勝ちに聞えぬ程の聲で答へるのである。「ずつと、私のお乳をやつて居りましたんですけれど、又斯うして出てゐますんでは、思ふやうになりませんから……。私、始めてお目にかゝりました時分には、お乳が張つて、お乳が張つて、それは困りましたものです。」ついでながら、彼女は話をする時、相手の私に、あなたとか、旦那とか、何々さんとか、一切さういふ代名詞を使つたことがなかつた。ずつと後になつてから、たまに朋輩藝者と一緒にゐる時は、それも極くたまにだつたが、先生と呼んだことがあつたが。

私は、東京に於いてゞも、又彼女の町に行つてゐる時にでも、夜目を醒まして、ふと彼女を少年のやうな心持で懷しく思ふことがあつた。私は思ひ切つて、彼女の子と共に、彼女を私のものにしたいと申込まうかと固く決心するのである。だが、私のやうな性質のものに、夜、この世の森羅萬象が、一切の人間の顏も、人間の事情も、夜の暗の爲に耳目から遮られて、この世が全く自分と自分に都合のいゝ人とだけのやうに思はれる時に空想したことは、夜が明けて日が出ると、朝霧のやうに退散してしまふのが常である。だから、私たちはいつ迄も十八歲の少年と少女のやうに相對してゐたのである。

その時、或日、やはりその町で藝者をしてゐた今の私の女房が現れて、急轉直下に、私たちは忽ち犬のやうに夫婦の

約束を結んで、私は東京に歸り、私の女房はその山の町を引上げて、私の後を追つて來たのである。それは始めて私が私の友達とその町に行つた、翌年の春のことであつた。

そして、足掛三年の年月が經つたのである。私の女房は私と同い年であつた、だから、下諏訪の町では中々えらい姉さん藝者だつたのである。彼女の言ふところに依ると、彼女は東京の傾きかゝつた太物問屋の長女に生れたのであるが、五歳の時實の母親に死に別れて、六歳の時、繼母を迎へたのである、その繼母の生んだ第一の娘が卽ち後に魚屋の甚吉の女房になつた、彼女の義理の妹なのである。彼女はそれから十五歳の時に父を失つて、その翌年養女にやられた先が藝者屋でそこで色々な不幸な目に遭つた後、十九歳の秋下諏訪に藝者に賣られて行つたのである。

私の口から私の女房を賞めるではないが、大體に於いては彼女は、そんな十年の藝者生活に拘らず、氣の弱い、優しい、それで又そんなに長い間女の身一人でこの世の波と戰つたゞけに、五分のあきらめ心と、人の氣持を呑み込む心とを兼ね持つて、姑である私の母には孝行の型をつくし、夫である私には貞良な恰好をして見せた。斯うい ふ型や恰好というものは、例へば行儀見習のやうなものであつて、やがてそれは彼女の第二の心になることを私は信じて疑はないものである。私は大體に於いて、頭で考へる時、私の女房を不足に思はぬのである。

だが、誰が獏を輕蔑することが出來よう? 人も亦夢なしに生きることが出來ない生き物である。私たちは少年時代には大將を夢見る。次には戀を夢見る。各々の志望する仕事を夢見る。やがて美しい妻を夢見る。最後によき子孫を夢見る。これが人に與へられた成規の夢である。今、私はそれ等の夢の切れ目に立つてゐる、私の心は茫漠としてゐるのである。

各々の三十歳を過ぎた夫婦にとつて、子のないといふことは、車に油のないのと同じことである。家庭を吹く風が屢

々厳しくなる。私も私の女房に對して屢々棘々しい態度になる。すると、止せば止かつたのに女氣の物を惜む心から、十年彼女が藝者をしてゐた町から、彼女は私の家に嫁となつて來た時に、持つて來た夥しい荷物の中にあつた、二三枚の男物の着物や下駄に就いて、或ひは彼女の古い手帳の中に、十頁に渡つて記されてある、それは彼女が二十五歳の時に彼女が愛する男と旅に行つた樂しい三日間の日記に就いて、私は初心な少年のやうに腹立しく考へ出すのである。

「お前はこれ迄に一度も子供を生んだことはなかつたのか?」と私は彼女に聞くのである。

「いゝえ、決して……」と彼女はもつての外といふやうに、俯向いたまゝだが、きつとして答へるのである。

「ちや、お前は不生女だな。」と私は投げ付けるやうに言つたのである。

「いゝえ　私はさうは思ひません。」と彼女はいつになくはつきりした言葉で答へるのである。しかし、私たちのやうな商賣をしてゐましたものは、體が冷え込んでゐるので、どうしても三年經たないと元の體にならないと言ふことです。私はまだ一度もそんな……體をわづらつたことはありません。私はさう思ひますけど、もし何なら、私は明日お醫者樣に見てもらひに行つても宜しうございます。」

だが、もうその上、そんな爭ひをつゞけようと私は思はぬものだから、そのまゝ沈默してしまふのである。彼女も急に咽喉がつまつたやうに沈默してしまふのである。と、それから、五分間も、もつともしてから、彼女は急にしく／＼と聲を立てゝ泣き出すのであつた。

「どうしたんだ?」

そして暫くすると、彼女は一すゝり鼻をすゝつて、「あなた、あなたは諏訪のゆめちやんのことを考へていらつしやるんでせう?……」

實際、私はその時心の中で、私が始めて會つて、だん／＼に心を引かれた藝者ゆめ子のことを考へてゐたのである。

「あなたは未だ何と言つてもお若いのですし、隨分色んな女の方とお會ひになることがあるでせうから、いつどんな間違ひが起るか、それは私は覺悟して居ります、私は出來るだけ辛抱をして、決してあなたのなさる事に兎や角と口を出さないつもりで居ります。けれども、どうぞ諏訪に行くことだけは、そしてゆめちやんに會ふことだけは、どうか出來れば勘忍して下さい、」と彼女は事ある毎に言ふのである。が、私は彼女が私の家に來てから、前後二度ばかり、無論私としてはそんなに突然今の女房と夫婦になつたことに就いて、その町にも又ゆめ子にも極りの惡い氣があるので、二度とも友達と一緒に女房に內所で行つたことがあるのである。

ところが、今年の春のことである。この前に私が女房に隱れて第二回目に行つたのは去年の十一月のことだつたから、最早三ケ月餘り山の町を見なかつた。だから、私は心の中で、近いうちに何とか事を構へて、女房の前を誤間化して、そこにゆめ子を見に行かうと思つてゐた。ところが、或日久しぶりで突然彼女から來た手紙が私を驚かした。その手紙が言ふには、この前に私が友達と彼女と、もう一人連の藝者と四人で、一つの自働車に乘つて、夜、下諏訪から上諏訪へ活動寫眞を見に行つたことが、何か怪しい事でもしに行つたやうに地方の新聞に書き立てられた爲に、彼女がゐらぬ濡衣を着せられて困つてゐる、就いては私と彼女との仲は決してそんな怪しいものでないことを、彼女を助けると思つて、私から彼女に手紙で書いて來て下さい、と斯う言ふのである。それは察するところ彼女によい旦那があつて、一しかし前の子供の父親とは斷然別れてゐるといふことであるから、別の男に違ひない、即ちその男の手前に對して、私にそんな手紙を要求したものに違ひないのである。私は言ふが、これは私の自惚でなく、少くとも私たちの間に私の女房が現れる迄は、彼女は私に好意を持つてゐた、が、今彼女には好意と反對のものを持つてゐることを明らかにした

とも見えるのである。私はその事を二日の間、夜となく晝となく、飯を食ふ間にも、友達と話をする間にも、悲んで考へた、だが、私はそれから三日目に、彼女の要求通りの手紙を出したのである。

すると、それと一週間と隔てない時のことに、又も斯ういふ事が起つたのである。それは下諏訪の杉井仙十といふ男から私の女房に當てゝ、貴下はいつ當地を去られたのですか、聞けばもうそちらに行つてから一年にもなるといふことですが、今から三年も前に自分が好意で御用立した、五百圓の金をどうしてくれるのです、自分は貴下に好きな男と世帶を持つ爲に、金を貸したのではござらぬ、とさつとさういふ文面の手紙を寄越したのである。

彼女はその晩、私が寢てしまつた部屋の隣室で、私が氣にかゝりながらもうと〳〵と一眠入りして目を覺ました二時頃までも、電燈を低く下ろして、しく〳〵と泣いてゐた、泣いては何か手紙のやうなものを書いてゐた、そして又筆をおいては鼻をかんでゐた。そこで私がとがめると、「濟みません、濟みません、」と彼女は目を腫らして言ふのである、「どうぞ私に一週間お暇を下さい。私は思ひ切つて下諏訪に行つて參ります。私は確にこの人からお金をもらつたことがあります。この人と私は一ケ月足らず關係がございました、ですけど、その後すつかり別れました。この五百圓のお金にしても、私が全部もらつてゐる譯ではありません、そのお金で私はその人の色々なお茶屋の拂などを、任されたやうなもので、勿論その殘りは私が貰つた筈のものなんです。ですけれど、あなたにこんな話をお聞かせして何とも申譯がございません。……」

「それにしては、たとへ拇印の證文にしても、證文などを入れてゐるのはをかしいぢやないか？」

「いゝえ、ぞれには色々譯がございます。私が看板を借りて、それに藝者を一人抱えたりしましたので、その外に：

「だが、それは何の言ひ譯にもならないね、」と私も少し氣持が穩かでなくなつて來たので、多少穿鑿氣味で追求した。「お前はその男と、たつた一ケ月といふが、それが嘘なのではないか？　今になつて、それが一ケ月であつても、十年であつても、僕はそれに對して何の非難をする譯でもない、又出來る理屈もない。そんな話を色々とする事はお互ひに不愉快な事ではあるが、出た上は僕も辛抱して聞くから、お前も思ひ切つて、話の意味が通じる程度で話したらいゝだらう。……あのお前が持つて來た二三枚の男持の着物や、下駄などもその男用のものぢやないのか、？」

「濟みません、濟みません、」と言つて彼女は暫く泣きくづれたが、やがて又顔を上げて「……その人のです。ですけど、その人と一ケ月しかさういふ關係がなかつたのは、嘘ではありません。その人はその後も色々私に好意を見せに來ましたけれど、一寸した意地がありましたので、私は到頭言ふことを聞かなかつたのです、ですから、お金はもう三四年前に借りたのですけれど、その人とはそれ以前に別れた切りです、始終何とか彼とか言つて、近寄らうとしては來ましたけれど、そしてそのお金を返せと言はなかつたのは、その人にさういふ魂膽があつたからなのです。」

要するに、貰つた金か、借りた金か彼女の辻褄の合はない話の、どの部分が本當か、どれだけが嘘か、私はそれ以上穿鑿することを止めた。私は二度ばかり口の中へ湧いて來た唾を呑み込んだ、すると、咽喉が意外な大きな音で鳴つたのである。そして私は言つた。

「兎に角、その金は此方でこしらへよう。お前が決心して出かけて行つたところで、それはお前の言ふ通り、出さないで濟むことになるのかも知れないが、止せ、止せ、恥をかきに行くことにもなるだらう。少し大金だが、何とか都合したら出來ないこともないだらう。ところで、斯ういふ場合のついでに聞いておくが、もうこんな話は外に起つて來るやうな覺えはないか？……このお前の持つて來た、中々少からぬ道具や着物を、突然車で取りに來るやうなことはな

いか？」

「いゝえ、決して。」と彼女は答へた。

けれども、五百圓の金をこしらへることは、痩せた小説家の私にとつては、それは親が死にかゝつてゐるとか、子が生れかゝつてゐるとか言ふやうな事件なら兎も角、さういふ事件に對しては、仲々大儀なことに違ひなかつた。翌日と、翌々日とで、私は雜誌社を廻つて二百圓餘りこしらへて來て、それを女房に預けたが、それから一週間ほどするうちに、遂に彼女から小遣として二十圓借り、三十圓借りしたら、殆どなくなつてしまつた。そして、いつの間にか一ケ月も三ケ月も四ケ月も經つてしまつたのである。

「どうしたんだらう？」と私は言つた。「あのいつかの金のことを何とも言つて來ないやうだな？」

「えゝ。」と彼女は答へた。「もつともあの翌日、私は念の爲に、私の住所を義妹の家にして、そんな催促をされる覺えはありません、と書いてやつて置きました。だから、もし何とか言つて來れば、戸水の家に來る筈ですが、來たら知らして來るでせう。來ないところを見ると、何とも言つて來ないのでせう。……」

却說、この夏のことであるが、私は偶然赤阪で松葉といふ藝者と知合ひになつた。彼女は四年前まで下諏訪のゆめ子の家から出てゐたもので、從つて私の女房とも十分友達の間柄であつた。殊に私を喜ばしたことには、以前私が諏訪でゆめ子と會つてゐた頃、屢々彼女の口から、自分の一番の親友で、今東京の赤阪にゐる松葉、として聞いてゐたのであつた。私は最早や會へなくなつた諏訪のゆめ子の代りに、それ以來思ひ出しては時々會ひに行くのである。ところが或時、どういふ話のついでにだつたか、ふと松葉の口から、杉井仙十といふ名前が洩れたので、私はさり氣なく、仙十といふ男はどういふ人物か、と聞いて見た。先に私の女房が言つたことに、「さういふ譯ですから、決して外の藝者衆だつ

て私とその人と關係があつたことは、大抵知らない位です、」と言つたのを、私は多少信じてゐたからである。

すると、松葉が言ふには、「あんな厭な人つたらありません。ちやんとした商賣がありながら、――商賣といふのはあの邊のことですから無論製糸家です、ゆめちやんの子のお父さんもやつぱり製糸家です、――それにあの人は、あの慾張りつたら、まあ、言はゞ藝者屋ごろつきですね。……」

「藝者屋ごろつきと言ふのはどんなことをするのです？　藝者からお金でも卷き上げるんですか？」

「いゝえ。――いや、まあそんな事もありますが、あの人のは主に藝者屋荒しです。藝者屋にお金を何とかかとか理屈をつけて貸すんです。どうせ藝者屋のやうな商賣ですから、まあ借りたお金なんて催促されなければ、それ切り忘れてしまひますわね、ところが、あの人のはわざと忘れさして、それで四年も五年も經つてから、無茶な利息を附けて返させるんです。……えゝ、それやしつかりした男の主人のゐる家ぢや駄目ですよ。だから、藝者でだんだん出世して、看板借りになつて、それから抱え妓の一人でも置くといふやうな人ですよ、さういふ人は又奇體に、まあお金が少ないからでもありますけど、又しつかりした旦那でも附いてる人は別ですけど、屹度引掛るんです。……」

「小瀧君（私の女房の藝者だつた時の名）など引掛つた方ですかな？」とそこで私はわざと冗談めかして言つたのである。

「さあ、あの人はね、」と松葉は一寸考へる振をして、「あの人はあんな悧好な方ですから、あの人だけは別ものですよ。だけど、外の人は大抵あの人には屹度一ぱい掛つてますね。中には、ひどいのは旦那になるやうな體裁で、言はゞ色仕掛といふやうなやり方で引掛つた人さへあるんですものね。……」

明らかに話手はそれを無心で話して居たのに違ひなかつた。が、聞手の私はその時、恐らくだんだん顔色が變つたに

遊びない程、ぎくりとしたのである。私はそこで成るべく外に話題を移したのであつた。

松栗は今でも時々ゆめ子と手紙の遣り取りをしてゐるとのことであつた。そして私とゆめ子との噂も、私に會はない前から聞いてゐたとの話であつた。だから、私と彼女と會ふと、都々逸や鴨緑江節の代りに、あれやこれやとゆめ子や、彼女の子や、彼女の町に就いて話し合ふのである。彼女は私とゆめ子と今は文通しない間柄であることも心得てゐた。ところで、彼女と松井仙十の話をした次の時であつた、その時は、私と外に友達が一緒の席だつたので、

「あの『ゆ』の字ね、」と彼女はこんな風にゆあ子のことを隠語で話したのであつた。ね、『ゆ』の字ね、又赤ちやんが出來さうなんですつて……」

「へエー」と私に叫んだ、「お父さんは無論前のお父さんぢやないんでせう？」

「ええ、さうでせう、」と彼女は言つた。「そんなに今でもやつぱり心配になつて？」

「さあ、やつぱり何となく氣になるが、それにしてもゆめ子さん自身が隨分心配して居るでせう。この前のことがある丈けに、又そんな事になつたら、實際困つてゐるでせう。」

「まつたくね。そんな入らない子供がお宅などに出來たらね、」と松栗は思ひ入れあつて言ふのである。それから色々と、ゆめ子が始めてお腹に子を持つた時分の、それを傍に見てゐた當時の松栗が感想を話すのである。子供が出來たことを知つて、ゆめ子が湖水のほとりに幾度も幾度も決心して出かけたこと、生れた子供を彼女の養母はどこかへやつてしまへと主張するし、彼女はどうか育てさしてくれと頼むし、結局彼女が身二つになつてから、三ケ月經たぬうちに再び藝者に出ることになつて、やつと話がおさまつたこと、それ等の當時の色々ないきさつを思ひ出すにつけても、あの喧ましやの、嚴しい養母の鞭の下に立つて、目下彼女がどんなに難儀してゐるだらう、」と私は松栗と感想を共にして思

ひやつたのである。

しかし、今度といふ今度は、女の子なら兎も角、又前のやうに男の子だつたら、あそこのお母さんはどんな事があつても、他所にやつてしまふに違ひない、又ゆめ子にしても、今度は前のやうに、どうぞ自分の子として育てさしてくれ、と何處までも言ひ張ることは出來ないだらう。私は次のやうな話を思ひ出すのである。それは彼女が第一の子をお腹に持つた時、凡そ八ケ月位までお座敷を勤めてゐた、現に私にその話をした人が言ふには、「あの女は前孕みでしたから、隨分目につく方でした。それが八ケ月位まで出てゐたものですから、もう苦しくて長いこと坐つてゐられないんでせう。私はあの女が、宴會の席か何かで、大勢のお客にからかはれて、炬燵の櫓に腰かけながら『木曾の御嶽さん』の三味線を引かされてゐた光景を思ひ出します、そして、誰かゞ變なことを言つてからかつた時に、あの女は到頭小娘のやうに泣き出したことを覺えてゐます。養母とはいふものゝ、實の叔母ださうですが、隨分因業な婆に違ひありません、迚もあんなになる迄、外の人の思惑だけを考へても、お座敷に出しておけるものではありません。……」

私が松葉からゆめ子が孕んだといふことを聞いたのは、先にも言つたやうに夏のことであつた。それが東京まで聞えて來る位だから、その時既に彼女のお腹は五ケ月以上に脹れてゐたに違ひない。この前の時にも、彼女は到頭五ケ月まで隱し隱してゐたので、誰にも知られなかつたといふ話は、私は思ひ出すのである。坐つてゐるのに苦しくなつて、『木曾の御嶽さん』をうたふにしても、今は腰掛ける炬燵もない時である。

私はその晩と、その翌日と、その翌晩と、その又翌々日とを考へ通して、到頭斯ういふ決心をしたのである。——言ふのは、私が今度生れるゆめ子の子を、藁の上から貰ひ受けたいと考へたのである、そしてそれには赤阪の松葉から先づ手紙が彼女に交渉してもらはう。さて、ゆめ子が又子を孕んだといふことは、松葉に聞いたその晩に、私は女房に話

したことであるが、それを貰ひ受けるに就いては、先づ誰よりも彼女に相談しなければならぬのである。それは一番の難關に違ひなかつた、そして私は、今夜こそ今夜こそと思ひながら、又四五日かゝつて、或晩何かの事で私と彼女とが少しばかり爭ひをした時に、それは私にとつては、平和な時には中々言ひ出せない事であつたから、却つてさういふ波風の立つた時に乘じて、私は一言一言句切るやうな話し方で、到頭彼女に相談を持ちかけたのであつた。私は言ふだけのことを言ひ終つたが、彼女が一向それに就いて返事をしないので、くり返しくり返し、なるべく穩かな調子で言つては、耳を傾けて彼女の返事を待つたのである。私と彼女とは隣同志の寢床の上で、お互ひに仰向けに寢てゐたので、お互ひの顏を見ることが出來なかつた、そして又お互ひに見ないようにして居たのでもあつた。

暫く、明りを縮めた二燭の電燈も、更けた夜の十二時の空氣も、そして私も、すべての物が何事かを待ち受けるやうに、沈默して片唾を呑んだ。すると、微かに、虫のやうに忍び泣く聲が、私の隣から起つて來たのである、彼女が泣き始めたのである。

「何にも、泣かなくてもいゝよ、」と私は出來るだけ優しい調子で言つた。「お前に不服があれば、お前はそれを話してくれたらいゝ、僕は唯相談したんだよ。」

けれども、彼女は稍々暫く無言で泣きつゞけてゐた後、やがて口を開いて言ふには、「どうぞそれだけは勘忍して下さい。私は、人の子を養ふことは、私自身養はれた經驗がありますし、又人樣の場合でいろ／＼見て來ましたが、よく養つても惡く養はれても、養ふものも養はれるのも、あれ程都合の惡いものはありません。……でも、私にどうしても子がないと定まりまして、どうしても他所の子を貰はなければならぬといふことになりましたら、それも仕樣のないことですが、それにしても、どうかあの人の子だけは、ゆめちやんの子だけは勘忍して下さい、これだけは私のお願ひですから……。そ

して又、私でなくてもどんな事で、誰か外の女の方とあなたとの子供が、これから長い先のことには、出來るやうなことがあるかも知れません。その時は、私は喜んで、その子を育てさしていたゞきますから……。」そして彼女は又泣きつゞけるのである。

「さうか。お前がそんな反對なら、では、考へ直さう、」と私は言つたのである。

そして、今、秋が來たのである。

或朝、突然、一枚の謄寫版刷りの葉書が私の女房宛てに來たのである、その差出人が上諏訪町の辯護士の神山樹藏といふもので、それはもう私たちがすつかり忘れてゐた、杉井仙十の借金に就いてゞあつた。言ふには、來る何日までに、當事務所に出頭されたし、とあるので、女房は勿論のこと、さういふ事に馴れない私も一通りならず不快な思をした。

女房は又私に言ふには、「濟みません、濟みません。けれども、いつ迄も同じことで、斯うして忘れた時分にこんな事が起つて、あなたにその度毎に氣持の惡い思をおさせするのが、私は見て居られません。お願ひですから、今度こそ私に一週間お暇を下さいまして、どうぞ私を上諏訪までやつて下さいまし。それに、こんな辯護士の名前で、斯うして私に出頭せよといふ文面でもございますから……。」

「いや、やつぱり行かない方がいゝだらう、」と私は言つた、そして私は考へて、「それよりも、證文の寫しを請求して、その上で又何とか拂ふ工夫を立てようぢやないか。」

「有難うございます、」と彼女は泣きながら言つた。「……ですが、この前にも、又家の方にこんな厭な手紙をもらふのは困ると思つたものですから、あの妹の婿の魚屋の戸水の家に私がゐることにして手紙を出しておきましたのに、こん

な事になりまして申し譯ございません。……いえ、あなたはそれをお許し下すつても、どんな事で、斯ういふ手紙が來たところを、母さんがお受取りになりでもして、母さんに知れましたら、私は勝手なことを申しますが、この上面目を潰してしまひます。ですから、どうぞ半日お暇を下さいませ。そしたら、私は義妹の家に行つて來まして、婿の甚吉さんと相談して、あの人に色々の面倒を見てもらふ事にしたいと思ひます。つまり、私はやつぱりあそこの家にゐることにして、病氣で出頭することが出來ないとでもいふやうな事にして、甚吉さんに取計らつてもらふといふ恰好にしたいと思ひます。……どうでせう？」

「それもいゝだらう。」……

一體、魚屋の戸水甚吉は、私の女房が私の家に來てから、盆と暮との挨拶に、これ迄に前後三度私の家に來たことがあつた切りである。そして二度までそれは私の留守の時だつた、だから、私は彼とまだ一度しか會つたことがないのである。彼は來る時はいつも夫婦連れで來た。背の高い、色の黑い、そして本當に目が惡いのか、或ひは他所行きの時のしやれか、茶色の眼鏡をかけてゐた。彼のもう一つの特徴は、その聲だけ聞いても直に彼の職業が分る程、大きな聲の持主であつた。一口に言ふと、私は彼を何も厭がる理由はなかつたが、同座して話などすることは餘り望まなかつた。

「いや、先生方は、我々と違つて机の前に坐つて頭を一ひねりすると、それで十兩とか二十兩とかいふ錢になるんですから、豪勢なものですな。錢がたまる一方でせう。ワツハハハハ、」とそこで彼は私の小さな家中が搖れるやうな聲を張り上げて笑ふのであつた。私はその時十分程彼と會つただけで、用事を構へて、彼を殘して外出したのである、だから、若し途中で彼と遇つても、恐らく私は彼の顏を覺えてゐない、彼と私とはその位の間柄であつた。

だが、私が彼に困つた反對に、彼は初對面の印象に依つて、學者はあゝなくてはならぬ、實に音無しい、そして優し

い人だ、義姉さんは仕合せだ、などとひどく私に感心してゐるとの、私の女房の話であつた。今度、彼女が彼を訪問して、杉井辯護士と金五百圓のいきさつに就いて、彼に相談をかけると、彼は先づ私のそれに對する態度にひどく憤激したとのことである。「流石は見上げたものだ、よく物の分つた人だ、あの人はたゞの學者ぢやない。ようござんす、私もそんなら幾日商賣を休んでも、此度骨を折りませう。」と彼は腕をまくつて言つたさうである。

そして魚屋の甚吉が彼の考として、私の女房に言つたことには、「それは義姉さん、あなたが出かけるのは不可いでせう。それよりも折角旦那がさう言つて下すつてるんなら、斯うしたらどうです、元金の五百圓だけ、あなたも言ひにくいでせうが、兎に角旦那に頼んで出してもらつて、私がそれを持つて、上諏訪のその辯護士の家に行つて上げませう。私が行つて、出來るだけの談判をして來ませう。私のつもりでは五百圓を三百圓位にして來るつもりですけど、まあ、そこのところはあてにしないで、兎に角五百圓捨てるとお思ひなさい。私が行つて、奇麗さつぱり話をつけて來ますから……。もつとも、それより先に、なる程、旦那の仰やる通り、あなたの先方に渡してある證文の寫しを請求するのがいゝでせう。ようござんす、斯うしませう、あなたは今ずつと私の家に來てゐることにして、そして病氣で寢てゐるから行けない、で、代りに私が代理をする、と斯ういふことにしませう、ね、それでいゝでせう。」

女房は歸つて來て、斯う私に報告したのである。「さうか、それはいゝ、そんな風に頼んだらいゝだらう、」と私は答へた。そして、私は心の中でその金の工面に就いて色々と考をめぐらした。實際、それは彼女が私の家に來てから播いた種ではないし、又藝者してゐた彼女に、過去にさういふ事があつたのを、私は咎める何の理由も持たない譯である、そして、私はたゞそれを私たちの不時の災難と見るより外はない、だから、私は頭の中では彼女を何の攻める考なども毛頭持つ筈がないのであつた。が、それにも拘らず、私は變に不機嫌になつた。私が努めて彼女に優しくすればするだ

け、それがやつぱり私の不機嫌の一種の表現とさへ見えたかも知れない、そして又實際さうだつたのである。

それは忽ち私に、彼女が始めて田舍から私の家に嫁入つて來た時に、彼女の荷物の中から現れた男物の着物や、下駄を記憶に呼び起したからか、或ひはさういふ無駄と見えることに、一時に五百圓もの金を工面することの難儀に思ひ及ぼしたからか、要するにそんな女房を持つたことの後悔に攻められたからか、それはその何れでもあり、又何れでもない、と言へるのである。兎に角、その二三月、私は屢々家に居ると、實は何にも考へてはゐないのだが、大變何事かに考へ惱んでゐるやうに見える振をした。又私は屢々溜息を吐いた。それは實際、自然にさうなつたのであつた、だが又、自分がどんなに惱んでゐるか、それを彼女になるべく大袈裟に見せたいといふ考をも可り含んだものであつた。それを見る彼女の辛さは言葉の外に違ひなかつた。彼女はうか〳〵、外の場合のやうにさういふ私を慰める譯に行かなかつた。「あなたどうなすつたんです？」と彼女は恐る恐る私の顏を覗ふやうにして言つて、あわてゝ、「いゝえ、その譯は分つて居ります。が、私には何ともお慰めする言葉がありません、」と聞えぬ程の聲で言つて、それでも私が何とも言はないで、いつ迄も默つてゐると、彼女は遂に泣き出すのである。彼女が泣き出して暫くすると、私に始めて口を開いて、「俺は何とも思つてゐない、心配するな。俺は外のことを考へてゐるのだ、」と私は言ふのが常であつた。

「お前は別に月のものは不順ではないか？」と突然私は聞くのである。

「どうしてそんな事をお尋ねになりますの？」と彼女は驚いて顏を上げて言ふのである、「いえ、決してそんなことはありません。」

「外に別に異狀はないか？」

「いゝえ、決して……。どうしてそんな事をお聞になりますの？」そして彼女は急に氣がついたやうに、「此地(こちら)に參り

ましてから、半年ほどの間は體がよく定りませんでした。が、お蔭で、この頃はずつと順調で、一度も悪いと思つたやうなことはありません。お醫者樣にでも、病院にでも、何處に行つてでも、診ていたゞいて來ても宜しうございます。」

そこで、私は暫く沈默した。彼女と私とが別々に天井に向つて息する音が聞えた位だつた。

「やつぱり、何處かしら、子供をもらはうか?」と私はそれだけの言葉を幾つにも句切つて言つた。

すると、今度は彼女が長い間答へないで、急な息ばかり吐いてゐた。そして隨分長い間私たちは並んで、默つて、天井を見てゐた。と、やがて突然決心したやうに、

「あなた、」と彼女は言つた。「あなた、私、決心しました。どうぞゆめちやんの子を貰つて下さい。……」

「そんなヒステリイ的な言葉を、此際俺は迂濶に採用する譯には行かないよ、」と私はなるべく落着いて言つた。「こんな場合には、なるべく氣を附けて、その場限りの、ヒステリイ的な、無責任なことを言はないようにしよう。」

「いゝえ、私はそんなつもりで言つたのではありません、」と彼女は聲を震はしながら言つた。「これは私が今思ひついたのではありません。いつか、あなたがそんな事を、冗談か何か知りませんが、仰つたことがあります、あの時からずつと私は眞面目に考へ通して來たのです。決してヒステリイ的に言つたのではありません。私は屹度、その貰つた子をあなたの御滿足の行くやうに育てるつもりです。それは私たちにも屹度いゝ事に違ひありませんし、それにゆめちやんもどんなに喜ぶか知れません。……だけど、あなた、そんな事を、私とゆめちやんとではあなたの事から變な風になつてしまひましたし、と言つて、男のあなたから直接にそんな事を突然言ひ出すのも何ですし、どんな風にしたらいゝでせう?……」

「若し本當にさうするのなら、」と私は暫くしてから云つた、「赤阪の松葉君に頼んで、あの人から手紙で紹介してもら

つて、此方の考をよく傳へてもらつたらいゝだらう。しかし、その事は俺も實はまだよく考へて見なかつたが、お前がその氣なら、俺ももう一度よく考へて、なるべくそんな風にしようか？……」

その翌々日、私は女房と二人連れで赤阪に行つて、桜葉に會つたのだつた。そして二人して、ゆめ子の今度生れる子をもらひ受けることの交渉を、彼女にしてもらふことを賴んだのである。

當時、私の心と體とは一緒に大晦日を迎へたやうに忙しかつた。私も、そして私の女房も愈ゝゆめ子の生れる子を貰ふことに決心したものゝ、何となく心が穩かでなかつた、そして、斷られたらどうしようといふ思と、くれることになつたらどうしようといふ思とに攻められた。私の忙しさはそればかりではなかつた。と云ふのは、私は彼女の妹婿の、戸水甚吉の考通りにすることに贊成したので、此方から請求してやつた彼女の證文の寫しが着次第、甚吉に上諏訪まで行つてもらふことになつてゐた、それには彼の旅費と、問題の五百圓といふ金をこしらへなければならなかつた。私には五百圓の金どころか、百圓の金の貯へもないのであつた。

ところが、次の一週間の間に斯ういふことが起つたのである。先づ或日、桜葉から私に手紙が來て、言ふには、諏訪のゆめ子の方に早速この間の件に就いて言つてやりましたところが、唯今返事があつて、それには外に何にも詳しい譯が書いてなくて、唯、折角のお話ではあるが、お斷りすると言つて來ました、いづれお目に掛つた時詳しく申し上げますが、取敢ずお知らせする、と斯う言ふのである。

一方、私の金策は、どうにか成功して、それは久し振りで質屋の稼業もくどりはしたが、大部分は二三軒の本屋を驅け廻つて兎に角五百圓の金は纒めたのであつた。が、例の辯護士の神山勘藏からはその後何の返事もないのである、もう一度問ひ合はしてやりませうか、と魚屋の甚吉から手紙があつた。ちやあ、ほつといたらいゝでせう、と私は女房か

ら彼に返事をさしておいた。それも私の氣の張りをゆるめましたが、更に松葉が傳へたゆめ子からの返事は一層私の氣を落さしたのである。私は、だから、仕事も何も投げ出して、朝から友達を尋ねたり、散歩したりして日を送つた。私は町を散歩しながら、四年前の貧乏だつた日のことを、二枚の浴衣さへも、袷の下の襦袢さへも持たなかつた日のことを、その代り心も亦貧しくて、今の十倍も仕合はせであつた日のことを考へる。その時の私なら辯護士の神山勘藏が一ダース來たつて恐くはなかつた、子供のことを考へるどころか慄報と苦痛とさへなかつたら、即刻命を召上げられることも何の心配ではなかつた。

さて、又一週間ほど後のことに、或日赤阪から突然松葉が車で尋ねて來た。それは諏訪のゆめ子から今日手紙を寄越して、やつぱりどうぞ子供をもらつてくれるように、宜しく頼んでくれと言つて來たことを、急いで知らしに來たのであつた。そして、ゆめ子から來た手紙を見せられたが、その用事の外には、いくら探しても、何にも書いてないのである、詳しいことはお目にかゝつた時、いろ〳〵申し上げますとだけで、いつお目にかゝるのだか、誰に、松葉にか、私たちにか、會ふつもりなのか、手紙は餘り簡單過ぎるのであつた。

「ゆめちやんは口と同じで、筆數も隨分少ない人ね、」と私の女房は恨めしさうに言つた。

「いや、これで要領は分つてゐるよ、」と私は辯解した。「このお目にかゝつてと言ふ文句にしても、實際本人にとつては東京に出て來られるか來られないか分らないし、又松葉さんに會はうか、直に俺たちに會つたものか、そのはつきりした考も付かないだらうし、途方に暮れてゐるんだよ。」

「あなた、深切ね、」と女房は冷かすやうに言つた。

が、何にしても、さういふ風に話が定つて見ると、私も亦大體途方に暮れた次第である。子はいつ生れるのだらう

か、子の母親と父親とはどんな關係になつてゐるのか、さて貰ふに就いて、早速私の母に打ち明けたものだらうか。そして又、察するところ、ゆめ子がその相談に就いて、嚴しい養母の手前、又子を腹に持つてゐる體の都合上、おいそれと出かけて來る譯にも行くまい、そしたら是非とも此方から出かけて行かねばならないといふことになるが、それには私が行つたものだらうか、私の女房を派遣した方がいゝだらうか。──それからそれと心配は蟻の行列よりも連綿と續かねばならぬのである。

が、松葉が歸つてしまふと、私と女房との間には何か恐ろしいことのやうに。ゆめ子の子に就いての話に口を噤んでしまつた。元より晝は彼女にも何彼と家の中の用事があり、又私たちの母親への手前もあり、私にしても大抵外に散歩に出るか、賴まれた仕事をしてゐるかするので、話する折のないのは當り前であるが、夜、私たちが寢床へ這入つてからも、私たちは妙にそれに就いて話を避けるやうにした。

「上諏訪の辯護士から、未だ何とも言つて來ないらしいね。言つて來たら、魚屋から通知してくれることになつてゐるんだらう?」と私が聞いた。

「えゝ。」

「だが、又ぼつ〱あのこしらへた金の中から俺が借り出したので、大分減つたらう?」

「えゝ。」

だが、さういふ極く少しばかりの會話の、長い切れ目の間には、私も、恐らく彼女も、ゆめ子と、彼女の貰ふ約束の子供と、それ等から起つて來る色々の事件との豫想をしてゐたのに違ひなかつた。やつぱり、あゝは言つてゐたが、女房はゆめ子の子を貰ふことを悔いてゐるのに違ひない、そして、さうだとすると、早計にも、そんな相談を持出したこ

とを私も悔いなければならなかつた。ふと、私は彼女に内所で、諏訪に出かけて、どういふ状態だか、彼女に會つて來ようか、と考へたのである。私は女房に内所で、三度目に下諏訪に行つたこの春のことを思ひ出す。その時は、もうゆめ子からあの絶交状めいた手紙をもらつた後のことであつた。だから、私はわざといつも行きつけの宿屋には行かずに、一現の家に行つて、そこで三日の間、ゆめ子は言ふに及ばず、どんな藝者をも呼ばずに、窓から山を見たり、自らを物語中の人に考へたり、凡そ私自身の中にある少年らしい心持のありたけを剔擧して、暮したことであつた。そして默つて三日ゐて、默つて別れて歸つて來たのであつた。だが、今度は久しぶりで、それは殆ど一年ぶりで、ゆめ子に會ふことが出來ることを思ふと、私の心は再び三年前のやうに打つのである。

そして或日、私は魚屋の戸水甚吉を呼んでもらつて、彼に會つたのはそれが二度目であつた。「どうもあの辯護士から返事のないのは氣持が惡い。人の噂に依ると、あの杉非仙十といふ男は、なるべく貸金をぐづ／＼に延ばしておいて、不法な利息を取立てるのが習慣ださうだから、私はこの際思ひ切つて、此方から辯護士のところへ出かけて行つて、片を附けてしまはうと思ふ。就いては、私にはさういふ談判はとても出來ない、お言葉に甘へるやうだが、あなたにお骨折を願ひたい。もつとも、それでは餘り失禮だから、行くだけは私も一緒に行きますから、」と、大體さういふ風に言つたのであつた。

甚吉は、それには及ばない、自分一人で行つて來ると云つたが、結局私も一緒に行くことになつて、出發の日取など約束して、歸つて行つた。彼が彼の女房を連れないで、單身で私のとこへ來たのは、それが始めてゞあつた。彼は錆だらけの、魚の臭のする汚い自轉車に乘つて來た。彼が歸つてから、私の女房が私の袖を引いて、「どうせ戸水さんに任したんですから、わざ／＼あなたが一緒にいらつしやらなくてもいゝぢやありませんか？」と幾度も止める言葉を云つ

た。だが、「それでは餘りあの人に惡いから、なあに、唯禮として一緒に行くだけで、辯護士に會つたり、場合に依つては相手の杉井仙十に會つたり、そんな事は毆られても御免蒙るよ。俺はそして唯宿屋の二階で坐つてゐるつもりだ。」と主張して。彼女は如何にも進まなさうな顏をしてゐたが、到頭私は行くことに定めたのであつた。が、その時も、私たちの間に、ゆめ子の話は、恐いものに觸れるやうに、一言も及ばなかつたのである。

そして、この話の最初に書いたやうに、或晩、私は魚屋の戶水甚吉と飯田町の停車場から、汽車を乘り出したのである。翌日の朝の八時に、汽車が上諏訪の町に着いた時、その日の空の曇り方から、時候の寒さから、私は時が三年前にかへつたやうな氣がして、屢々連の男のかへり見た程であつた。が、彼はその時の私の友達ではなくて、背の高い、着物は羽織がばかに短く見える、大聲の甚吉なのである。「私は義姉さんが此地にいらつしやる時分に一度も伺つたことがありません、家内は二度ばかりお邪魔に上りましたが……。なる程寒いところですね。さうさう、義姉さんは下諏訪の方でしたね？」……その聲が、往來の人を振向かせる程大きいので、私は極りが惡くて、返事さへしなかつた。そして、私たちは二臺の車に乘つて、一先づとある宿屋に這入つたのである。

甚吉が辯護士の家に出かけた留守の間に、私は宿屋の部屋の窓にもたれて、前の田舍町らしい往來の人通りを眺めてゐた時、私は再び三年前の秋の日のことを思ひ出した。すると、そこにさうして坐つて町を眺めてゐる自分が別の自分で、本當の自分は三年前の自分で、今その昔の自分の夢を見てゐるやうな氣さへした。そして向ふの裁判所の町角に、ひらひらと秋風に揺れてゐる『中村雁次郎大一座』のビラを眺めてゐると、泣きたい程、感傷的な氣分になつて來た。

私はそこで頭を振りながら立上つて、何故か、女房には勿論、魚屋の甚吉にも隱してゐるところの、下諏訪に行つてゆめ子に會ふことを、この間に實行しようと思ひ立つたのである。そして、彼には一寸用事があつて出ると言ひ殘し

て、わざと宿から車に乘らずに、そつと停車場に行つて下諏訪へと向つたのであつた。私は最早や多くの顔馴染を持つてゐるその町に着くと、わざと車に幌を下ろさして、或るお茶屋に行つて、わざと腹の空いたことを裝つて、料理の品々を命じてから、極く何でもないやうに、「夢の家のゆめ子をかけてくれない？」と女中に頼んだのであつた、だが、私は俯向いて言つた。と、女中の答に、「あの、ゆめ子さんは一昨日止めましてございます、」と言つた。「あゝ、さう、」と私は出來るだけ何氣なささうに言つて、「ぢや、いゝや、今日は急ぐから、藝者の顏なんか見ないで、御飯だけ食べて歸らう。……君、お給仕してくれますか。」「えゝ、えゝ、私で宜しければ……」そして二人で聲を合はして笑つたのである。

だが、私はそこに一時間とゐなかつた。そして、歸りは汽車を止めて、上諏訪から自働車を呼んでもらつて、宿に歸つて來ると、もう出先から歸つてゐた甚吉は退屈してゐたと見えて、例の窓にもたれて町を見てゐた。

「どんな樣子でした？」と私は彼に自分の行先を聞かれない前に、先づ斯う聞いて見たのである。

「どうも、さつぱり譯が分らないんですよ。」と甚吉は持前の大きな聲で言つた。「案の通り、あの杉井といふ男と、あの辯護士とは友達なんださうです。中々立派な男です、それに人間もいゝ人間らしいです。私が早速用件を話し出しますと、今杉井は少し忙しいことがあつて、そんな事にかまつてゐられないと言ふんです。で、私は例の手だな、と思つたものですから、それにしても、斯うしてわざ〳〵片を附けに來たんだし、それにあなたによつて兎に角杉井さんから任されてゐるんでせう、何とか話を附けようぢやありませんか、とあべこべですね、此方から催促したんですよ。そして兎に角、私は證文はどんな風になつてゐるか、それを見せてもらひたいと言ひますとね、呆れた話ぢやありませんか、あなた、證文が……」とそこで甚吉の大聲は絶頂に達した。私は外の部屋の人たちの思惑を恐れて、「もう少し低い聲で……」と手で抑へるやうに言つた。

「いや、これはこれは、つい癖だもんですから、」と甚吉は首を縮めながら、つゞけるには、「證文を、あなた、杉井といふ男はなくしてしまつたんださうです。それも呆れた話ですが、辯護士でゐて、そんなことを白狀する奴があるもんですか。ワツハハハハハ。」

「ですが、それが又、手ぢやないですかね？」と私は多少不安を覺えたので言つた。

「さあ、私もそれに氣が付かないではなかつたので、十分だまされぬやうに注意して聞いて居たつもりですが、どうも本當らしいんです。その證據に、神山といふその辯護士が私に、俺がこんな事を云ふのは何だか、元々そんな立派な證文ぢやなからうし、それに紛失したのは本當だ、五百圓はもつたいないよ、三百圓でいゝ、俺が引受けて三百圓であべこべに先方から債務が濟んだといふ證文をとつてやるよ、と言つてました。何しろ、昨日は杉井何十といふ男が、是非外へも用事があつて、上諏訪に來ることになつてゐるさうですから、まあ、半分話がついたやうなものです、御安心なさい。……」

背から裏の方に樂隊の囃子が聞えて來たので、それはまぎれもなく、昔ながらの『煙も見えず』の譜を奏してゐた。私は振り返つて窓から眺めると、その晩から始まる『中村雁次郎大一座』の芝居の廣告なのである。恐らく六人の樂隊は、三年前に私が同じこの町で會つた時の顏觸れと同じに違ひないのである。今日は彼等の後から、車に乘つた雁次郎以下の役者の代りに、背中に外題を書き並べた看板を背負つた人間や、旗を持つた人間が、五六人樂隊の囃子とは足並を無視して、とぼ／＼と歩いて來るのである。ふと、ゆめ子も三年前のことを、この樂隊を見てか、或ひは町々の辻ビラを見てか、思ひ出したに違ひない、何故と云つて、一昨日あたり藝者を止めて、鑑札をかへしに彼女はこの町に來たのに違ひない、三年前、同じ雁次郎の一座が來た時、彼女はやつと生み落した子供を育てる方針も立つて、愈よ藝者に

出ることになつて、この町に鑑札を下げてもらひに來たのであつた。越えて三年後の同じ秋の日に、第二の子供を腹に持つて、三年間の鑑札を返しに來た時、如何に口數と同じやうに笑數さへも少ない彼女だとて、感慨が深かつたことであらう、と私は察しるのである。私の感想は更に深からねばならぬのである。

「雁次郎がこんな町に來るんですな、と」その時甚吉はたしなみを忘れて、大きな聲で言つた。「今夜は疲れてもゐますし まだ心配も殘つて居ますから、早く寢ることにして、明日の晩は雁次郎でも見て歸りませうか？」

「見て歸りませう。」と私は答へた。私はそれを見ることなど、甚だ望まなかつたが、東京に居れば商賣の忙しさに、とても芝居など見てゐられない甚吉をねぎらふつもりで、さう答へたのである。

「さうさう」とそこで甚吉は何か思ひ出した調子で、「私は飛んだ濟まないことをしてしまひました。……と言ふのは、その神山といふ男が、今も言ひましたやうに、辯護士などには珍しく心安い人間でしてね、色々話をしてゐるうちに、ついあなたが一緒に來て居られることを、私……」と彼は無邪氣らしく頭を掻きながら「私……言つてしまつたんです もつとも、その男があなたの話をよくするんです。そしてあなたの小説が大變好きで、いつも讀ましてもらつてゐる、今度は妙な事から敵味方のやうな事になつたが、どうぞ是非御別懇に願ひたい、と幾度も幾度も言ふんでせう。で、つい私……その事を言つてしまつたんです。小説で、そのあなたが大變好きだと言ふんです。そして是非會ひたいと思つてゐると言ふんです、で、つい私……言つてしまつたんです。」

「賑だな、外の場合ならいゝが……」と私は思はず當惑の言葉を言つた。

「濟みません、濟みません、」と甚吉は頻りに頭まで下げてあやまるのである、そして言ふには、「だけど、本當にいゝ人間らしいですよ。ひよつとしたら、今夜にもやつて來るかも知れません。もつとも、私も言つてからしまつたと思つた

ものですから、杉井といふ人には乾度あなたが來ていらつしやることを言はないやうに、口止めしておきました、乾度言はないと言つてました。何でも、あなたにお目にかゝつて、是非話したいことがあるとか言つてましたよ。……」

果して、その晩、辯護士の神山勘藏は私たちの宿屋にやつて來たのである。が、甚吉の言葉は嘘ではなかつた。一見して、私は彼が好人物であることを感じた。彼は軀は小柄だが、白い顏、立派な髭、兎のやうな可愛らしい目の、立派な男であつた、頭がすつかりてか〱に禿げてゐるのも、立派さと優しさとの表現に見えるのである。彼は私を先生と呼んだ。色々話して見ると、實際、私の書いたものは、隨分人目を引かないものでも、殆ど悉く讀んでゐるらしかつた私がサイダーばかり飲んでゐる傍で、彼は甚吉を相手に、甚吉を決して魚屋扱ひにしないで、愉快さうに何本かのビールを空けながら、色々な四方山話をするのである。そして、彼の禿げた頭の色と顏の色とが同じ赤さになる迄飲んだ時彼は突然私にこんなことを言つたのである。

「先生、私は先生のヒステリイ研究には全く參つて居ります、實に先生はあの方の事は詳しいですな、全く私は敬服して居ります。あれは實際の御經驗から來たんでせうな。全くあの通りです、あの通りです。」

「どうも恐れ入ります、」と私は少してれた氣味で、半分口の中で言つた。

「いえ、御謙遜には及びませんと勘藏は、」ぐん〲辯護士流の雄辯を發揮して言ふのである。「私は全く敬服して居ります。……が、唯一つ私の不滿足に思ふことがあります、それは先生のお作に出て來るヒステリイ婦人は、みんな割合に消極的にではありますが、貞操家が多いですな、決して姦通をしませんな。あれが私は不服です、あれはヒステリイ婦人の一種です。ヒステリイ婦人は姦通をします、姦通をします。

傍にゐる魚屋の甚吉は、急に話が分らなくなつたので、つまらなさうに默つてビールの杯ばかり傾けてゐた。が、そ

の時何と思つたのか、

「さうですね、」と合槌を打つた。

が、勘蔵はそれには振り向きもしないで、段々呂律の廻らなくなる舌で、同じやうなことばかり繰り返して言つた。

私は實際思はぬ所と思はぬ人に讀者を得た滿足さと共に、少なからぬ當惑の感じの爲に、屡々笑ふことも答へることも出來なくなつて、飮みたくもないサイダーの杯を幾度も唇に持つて行つたり、或ひは屡々窓の外の町を眺めたりした。

田舍の町とは言ひながら、そこらは殆ど町の中心だつたので、割合に澤山の燈火が兩側の家々に點つてゐるのが、美しく眺められた。時々ドン〳〵ドン〳〵といふやうな芝居の囃も聞えた、これは直横町の中村雁次郎の掛つてゐる芝居小屋からに違ひない。

「雁次郎がやつてゐるな！」と甚吉は相變らず、獨酌で頻りにビールをあほりながら言つた、彼は勘藏とは反對に、飮めば飮む程靑くなる質らしかつた。

が、勘藏は勘藏で相變らず喋りつゞけてゐた。「杉井仙十といふ男は、私は友達ですか、實際は嫌ひです、全くあの男は愁の塊のやな男です、私は子供の時分からの友達で、附合つては居ますが、實際は嫌ひな人です。ですが、先生、あの男も可哀さうなところがありますよ、あの男の細君もやつぱりヒステリイなんです。私はあの男に始終先生の小說を讀んで見ろ、讀んで見ろと勸めてるんですが、彼奴は駄目です、彼奴は年が年中不法な金儲けのことばかり考へてゐて、人の言ふことなどは聞かないんです。ですけど、彼奴も可哀さうですよ、實際可哀さうですよ。……先生、僕はあやまります。決して今度の事だづて、僕は先生を困らすつもりでやつたんぢやありません。私はそれよりも、これを御緣に先生にお近附が願ひたかつたんです、私はそのうち東京に行つて、先生にお目にかゝるつもりたつたんです。決して僕は先

生を困らすつもりはないのです。それは今日もこの方に、戸水君に十分お話しておいたつもりです、お聞き下すつたでせう、先生。ねえ、戸水君、話してくれたでせう……」

「まつたく、あなたのお心持はよく分つて居ります。私はその事を先生に今日よく話しました、ねえ、先生、」と甚吉が合槌を打つた。そして「まあ、一杯！」と言つて彼は勘藏の杯にビールを注ぐのであつた。

「ですが、私は先生に是非忠告しなければならないことがあるのです、」と又勘藏は始めた。「私は先生が此地にお見えにならなければ、私の方から、ついで、と言つては失禮ですが、東京に行くついでがあつた時、是非先生をお尋ねして忠告するつもりだつたんです。その事は戸水君にも話しませんでした、是非私から直接にお話ししたいと思つてたんです……。」

「何です、どんな事です？」と私は流石にぎくりとして、問ひ返した。相手が醉つてゐることを忘れて、私は急に眞面目な顔をして向き直つた。瞬間に、私は何か私の女房のことについてか、と思つたのである。

「いや、さう屹驚なさらないでも宜しい、」と勘藏も一層眞面目な顔になつて、目を据えて云つた。「言ひますよ云つてもかまひませんか、かまはないでせう？……では、聞きますが、先生はこれ迄よく小說にお書きになつた、下諏訪のゆめ子といふ藝者ですね、あの女の今度出來る子をもらひ受ける相談をして居られるでせう……？」

私は忽ち自分の顔が赤くなるのを感じた。それは勿論、甚吉にもまだ話してないことなのである。「え？」と私は再び飲みたくもないサイダーの杯を口に當てゝ、なるべく、俯向き加減にして、「そんな話が出てゐるんですが……。何か惡いことがあるのですか！」

「その事です、その事です、」と勘藏は、どうしたのか、彼も亦急に次の言葉が言ひにくさうな樣子で、前にあつたビールの杯を取り上げて、ぐつぐつぐつと二口ほどにそれを飲んでから、「その事ですねが、ね。」と云ひながら何と思つたか急に彼は立上つたのであつた。そしてどうするのかと見てゐると、幾分よろ〳〵した足附きで、彼は私の傍に步い

て來るのである。私は妙に氣味の悪さを感じたが、强ひて辛抱してぢつとしてゐると、彼は口元に手をかざして、私の耳の傍で何か云ひたさうな恰好をした。私は思はず眞面目な顔をして、ぐつと首を彼の口元へ近づけた。彼が私の方に及び腰になつた時、ふーと酒臭い息が私の顔にかゝつたが、私はかまはなかつた。

「先生、」と私の耳元で彼の囁く聲で云つた、「あのゆめ子の今度の子は、杉井仙十の子なんです。」

そして、言ひ終ると、彼は私の傍に腰を抜かしたやうに、ぺちやりと坐つたのである。私は咽喉がつまつたやうな氣がした。そして、一人甚吉は不滿足さうな顔をして、ぐびりぐびりと獨酌でビールを呷つてゐるのだつた。……

ところが、その翌日の午後には又次のやうなことが起つた。辯護士の神山勘藏の家から、杉井が來たから、甚吉に直に來てくれるようにといふ使があつて、彼は機嫌よく出かけて行つたのである。が、二時間ほどすると、彼はひどく不機嫌な顔をして、私の待ちまうけて居た宿屋に歸つて來たのであつた。

「杉井といふ奴は實に厭な奴である、」と彼は部屋に這入つて來るなり、持前の大聲で吐き出すやうに言つた。「なる程、彼奴はさうとははつきり言はないんですが、確に證文を失つたらしいのです。それで神山さんが仲に這入つて、出て來たところが隨分不完全な證文だし、まあ外ならぬ人のことだから、三百圓位にして手を打つてしまつたらどうかと言ふと、顔を震はして怒りましたよ。君がそんなことを言ふのは怪しからん、まあ、利息だけは負けて元金だけでもと言ふのなら兎に角、三百圓といふのは何ぢや、と言つてね、到頭神山さんと喧嘩を始めるといふやうな騒なんです。神山さんも怒つて、そんな無法な貸金の處分を、僕の方で受付けるのをお斷りする。誰が頼むもんか。ぢや、これ迄の手數料を拂つて歸つてくれ。そんなものを拂ふ必要はない、辯護士は君一人ぢやないんだ、外で幾らでも方法を講じるよ。といふやうな言ひ合ひになつて、もう少しで立廻りになりさうな勢なのです。その、私は仲裁に行つたやうなものです。馬鹿ゝゝしい、馬鹿ゝゝしい！」

「で、結局どうなつたんです？」と私が聞くと、

「そんな譯ですから どうにもなりやうがないんですよ、」と甚吉は私にさへも喰つて掛るやうな大聲で言つた。「ぶん

〲怒つて松井といふ男は歸つてしまつたんですよ。もつとも、後で神山さんがなアに、安心し給へ、もう拂はなくてもいゝよ、却つて三百圓得をした譯だよ、と言つてましたがね。いづれ又、神山さんがこゝへ來て、あなたに色々お話すると言つてました。どうしたもんでせう？」

「仕樣がありませんよ。」と私は言つた。「まあ、成行に任しませう。色々お骨折有難うございます。まあ、一服して下さい。」

そして私たちは默つて煙草を吹かしたり、茶を飲んだりしてゐた。その時、又、表の方に「中村雁次郎大一座」の樂隊の囃子が聞えて來たのである。

「雁次郎でも見に行きませうか。」と私は起き上つて、窓の外を見ながら言つた。

「えゝ、雁次郎――是非お供しませう。」と甚吉は忽ちいつもの快活な大聲で應じた。

窓から見ると、町にはもうちらほらと燈火が目立つ時分だつた。そして薄く霧が降つてゐた。霧の中を相も變らず、樂隊は「煙も見えず」の譜を奏しながら、それにつゞいて幟や、廣告の看板やがとぼ〲と張り合ひなささうに歩いて行くのである。「田舍でも東京でも、雁次郎は同じでせうな。」と私の後から窓の外を見てゐた甚吉が言つた。

さて、その晩、私は急ぐ甚吉をなだめて、宿で夕飯を食つてから、横町の雁次郎の芝居に出かけたのである、四時開演の芝居だつたので、私たちが行つた時は大分幕數が進んでゐた、丁度「藤十郎の戀」の第一幕が開いたばかりのところであつた。甚吉は餘程芝居好きと見えて、棧敷の座蒲團の上に坐ると、まるで別の人間かと思へる程、靜かに、熱心に、息を凝らして舞臺の方を眺めてゐた。が、私は東京で既に一度見た狂言のことであるし、近頃の餘りに忙しい色々な出來事に、それを靜かに考へ直すといふ程ではないが、唯何處を見るともないところに目をやつて、ぼんやりしてゐたのである。そのうちに幕がしまつた。と、甚吉は、あそこはどうだつたとか、あれはどういふ譯とか、あの役者はどうかとか、それが持前の大きな聲なので、あたりの人が顏を見るのもかまはず、一頻り私を困らすやうな問答をしてから、さて少しばかり口を噤んで、幕間の見物席の彼方此方をちろ〲と眺めてゐる樣子だつた。

私はその時ふと氣がついて、上諏訪に芝居が掛ると、よく下諏訪の藝者たちが見に來ることを思ひ出して、今夜あたりも何人か來てゐるに違ひない、中には私の顏を見知つてゐる者があるかも知れない、と思ふと、急に自然に首が縮まつて來て、なるべくあたりを見ないやうにしてゐた。その時、突然

「あつ！」と私の隣りの甚吉が、近所の人々を振り向かせるやうな、大きな呼び聲を上げた。

「もう少し小さい聲の方がいゝでせう、」と私は俯向いたまゝで忠告した。

「濟みません、」と甚吉は素直にあやまつて、急に呟くやうな聲で、「あの向ふの棧敷に杉井といふ奴が來てゐるんです！」と言つた。

「何處に？」と私も思はず聲を立てゝ、首を縮めたまゝだが、十分目を光らして、遠慮なくその方を指さしてゐる甚吉の見當を見た。が、今度は私が、稍々聲を立てる程に驚いたのである。といふのに、その指の差す方に、私があんなに愛するところの、ゆめ子がちよこなんと行儀よく坐つてゐたのである。私はちらりと見ると、忽ち目を伏せた。そして十分も二十分もその方を見ることが出來なかつた。

「ほら、俯向いてゐる、藝者らしい女の左手に、」と甚吉が言ふのである、「痩せぎすの、色の黑い、眼鏡をかけた男がゐるでせう、あれですよ、杉井といふ男！」

が、私はその時は唯「あ、さう。え、分りました、」と答へておいたが、決してその方を見てゐなかつたのである。けれども、やがて、ずつと經つてから私は思ひ切つてその方を眺めた。成る程、相變らず俯向き勝ちに坐つてゐる（私の）ゆめ子の傍に、痩せぎすの、色の黑い、眼鏡を掛けた男が、腕組をして端然と坐つてゐるのが見えた、でも、到頭私は、お腹が痛いからと言ひ譯をして、先に歸るやうなことはせずに、最後の幕の半分頃まで、つまり甚吉が歸らうといふ迄、その前に既に杉井もゆめ子も歸つてしまつた迄、辛抱して棧敷の坐蒲團の上に坐つてゐたのである。……

その翌日の朝早くの汽車で、私たちは、神山勘藏にも挨拶せずに、東京へと向つたのである。（八・一八）

編輯を了へて

□改造社は七月と八月とにかけて海外より二社賓の來遊に接した、第一はラッセル氏で第二はヂュイ氏であつた、

□ラッセル氏はブラック孃及パワー孃と同伴で國内至る處で歡迎された、神戸埠頭の勞働者の代表が手に手にトレード・ユニオンの旗を高く翳して出迎へたのは偉觀であつた、聞けば神戸五萬の勞働者は打揃つて出迎へんとせしも、官憲の干渉ありて果さず、而して本社主催の慶應義塾のラ氏講演の如き、さしもに廣き大講堂が定刻前から滿員の盛況であつた。かくの如きことは當時、大正の憲政擁護の時なぞに比較しても、殆んど比較にならぬ粒揃ひの聽講者のみで、そして非常の盛會を極めた、以つてラ氏の人氣の程を推知すべし。

□京都みやこホテルに於ける大學教授連廿七名の會合の如き、東京帝國ホテルに於ける思想家、學者の會見の如きも中々盛んなものであつた、

□八月號卷頭論文題目に「工業主義の内的傾向」とあるは「内在的傾向」の誤りであつた。謹んで訂正しておく。

□十月號にはシドニー・ウエッブ氏から我社に「英國消費組合の運動」の大論文を送られた。氏が斯界の大權威であることは既に讀書子の熟知さるゝ所である。

□本誌の計畫はかくして世界的に基礎を築き、今や思想界の權威としては、英、獨、米の先進國の雜誌に比しても嶄然として頭角を現はすに至つた、その文學にあれ、哲學にあれ、社會思想にあれ、苟くも一方の權威たる人々には大抵は執筆して戴くことになつた。

□賀川豐彥氏が神戸、大阪で勞働者のために大活躍したことは、團體交渉權の獲得を容易ならしめ、かたく〵勞働者の地位を一段と向上せしめた。氏は川崎爭議事件で一時下獄したが、しかし數旬にして釋放された、賀川氏の如き無抵抗主義を奉ずる人を下獄せしめる官憲の氣はどう云ふ氣か。

□何にせよ、秩序整然たる職工の示威行列に對し、出兵し、拔劍した行爲の責任が何れにあるか、ダレ切つた今議會でも相當に喧噪することだろう。

□社員室伏は目下伯林に滯在中だ、露都行きは未だ決定せぬ。横關は病氣未だ全快せず依然湘南にあり、殘りの社員は例年よりモット元氣に働いた。

□夏期中は日曜なしで朝の六時から晩も十時過まで働いた。或るものは、一ケ月中、この暑い盛りに七日も徹宵しての大車輪であつた、もとく〵我々の連中になると自分の天職に異常の趣味を覺えておるので疲勞するやうなことは微塵もない、別莊へ行つても、まだ暑いと仰有る紳士への土産話に。

□朝夕はソロく〵秋風が訪れて來る、我々は疲勞はして居らぬ、ソレでも秋風の聲を聞くときは嬉しい、身も心も一段と締りがついて。

改造定價

冊數	定價	郵稅
壹冊	八十錢	二錢
半ケ年	四圓八十錢	不要
壹ケ年	九圓六十錢	不要

註文の注意

▲御註文は凡て前金に申受く前金切の時は發送を停止す

▲特大號其他定價變更に依る前金拂込不足の時は御拂込を待つて雜誌を發送す

▲日本御請求の向は振替又は郵券にて定價通り御拂込ありたし但し郵券代用一割增の事

▲御拂込は振替によらるゝを最も便利とす

大正十年八月廿日印刷納本
大正十年九月一日發行

編輯兼發行者　[illegible]　平田貫一郎

印刷所　東京市京橋區西紺屋町廿七番地　秀英舍

定價壹圓卅錢

發行所　東京芝區櫻田備前町一　改造社
電話銀座二九五四
振替東京八四〇二

山川均著

レーニンとトロツキー

◇四六判函入美裝◇
◇寫眞版二凸版二◇
◇定價壹圓九拾錢◇
◇送料 金拾四錢◇

東京芝櫻田備前町壹
改造社
振替東京八四〇二番

好評六版

讀賣新聞評「山川さんが、レ・ト兩氏の生涯や、事業や、評論などをしてゐるのを見ると、餅屋が餅を搗てゐるやうに自在である。それを警官が傍にゐて險しい眼で見物してゐるやうにも思はれて、殊に該著の權威的な獨自の興味を覺える。」

THE KAIZO, A MONTHLY REVIEW OF POLITICS, LITERATURE, SOCIAL AFFAIRS ETC.
PRICE : EIGHTY SEN A COPY. TWELVE YEN A YEAR
OFFICE : KAIZOSHA, 1 SAKURADABIZEN-CHO SHIBA, TOKIO

大正八年三月廿一日第三種郵便物認可
大正拾年九月一日發行（毎月一回一日）
大正拾年八月廿日印刷納本 第參卷第拾號
九月增大號 特價 金壹圓參拾錢